たわ-わ【貌】たわむばかりのさま。たわたわ。とをを。〔古語〕萬葉「あしびきの山路もしらずしらがしの枝もたわわに雪のふれれば」新古今「秋萩の下葉たわわにおく露のけさはあけぬといそぎ出でめや」

た-ゐ 田居【名】『ゐは意味なき添詞なりと云ふ』た。田地。ゐなか。〔古語〕

た-ゐ 田井【名】田に引く水を湛へたるところ。一說に、井は借字、實は居と書くべきにて、前條の語に同じと。〔古語〕萬葉「ますらをとおもへるものを太刀はきてかにはのたゐに芹ぞ摘みつる」

たゐ-なか 田居中【名】田居のなか。ゐなか。〔古語〕

だ-ゑん 楕圓・橢圓【名】㊀一方に扁き圓形。こばんなり。長圓形。㊁〔數〕『英Ellipse』平面上の二定點よりの距離の和が、一定の長さに等しき點を連ねたる曲線にて圍まれたる形。

楕圓の離心率【句】〔數〕だゑんりつ(楕圓率)に同じ。

だゑん-き 楕圓規・橢圓規【名】『英Ellipsograph』楕圓形をゑがくに用ふる製圖器械。

だゑん-けい 楕圓形・橢圓形【名】楕圓なるかたち。

だゑん-たい 楕圓體・橢圓體【名】〔數〕『英Ellipsoid』楕圓を其の徑(長又は短)を軸として旋轉して生ずる立體。

だゑん-りつ 楕圓律・橢圓律【名】〔數〕『英Ellipticity』楕圓の半長徑と半短徑との差と半長徑との比。旋轉楕圓體の扁平なる程度を示すに用ふるもの。楕率。**りしんりつ**(離心率)參照。

たを【名】『**たをり**の略』**たうげ**(峠)を云ふ。〔中國の方言〕

たを 髱【名】『**たわ**(撓)㊁の轉』**たぼ**(髱)に同じ。

た-をさ 田長【名】㊀田をつかさどる者の長。田のぬし。㊁〔動〕『次條の略』**ほととぎす**(時鳥)の異稱。

たをさ-どり 田長鳥【名】〔動〕『「死出(デシ)の田長」を見よ』**ほととぎす**(時鳥)の異稱。

たを-たを【貌】**たわたわ**(撓撓)に同じ。〔古語〕源氏「ほそやかに、たをたをとして」

狹衣「さしぬきのすそまでたをたをと、あてになまめかしうきない給へり」濱松「なほいとたをたをと、あくまであてになまめきて」

たを-めかし【形二】撓むべきさまなり。たをめきてあり。〔古語〕枕「あしうあくれば、さうじなども、たをめかしうこぼめくこそしるけれ」

たをめかす 撓めかす【動四他】たをめくやうにす。たわむやうにす。

たを-めく【動四自】たをたをとす。たわむやうになる。〔古語〕

たを-やか【貌】**たわやか**に同じ。〔古語〕枕「萩は、いと色ふかく、枝たをやかに咲きたるが、朝露にぬれてなよなよとひろごり伏したる」

たを-やぐ【動四自】たをやかなるさまになる。〔古語〕源氏「人の心もたをやぎぬべき御さまなるを」同「君もすこしたをやぎ給へるけしきもてつけ給へり」

たを-やけし【形一】たをやかなり。やさし。〔古語〕保憲女集「女郎花たをやけき野邊に花すすきうちなびく」

たをや-め 手弱女【名】『手弱は假借の文字。たをやかなる女の義』**たわやめ**(手弱女)に同じ。〔古語〕紀「手弱女人、太平夜女」夫木「青によし奈良のあすかのたをやめがかざしに折りし八重櫻かな」

た-をり 手撓【名】『**かいたをり**(搔手撓)を見よ』山の頂の低くたわみたるが如きところ。たわ。〔古語〕萬葉「あしびきの山のたをりに立つ雲をよそのみ見つつ」萬葉「高山の峯のたをりに射めたてて しし待つがごと」

た-をる 手折る【動四自】『たは接頭語、手は假借の文字』折り廻る。萬葉「なせの子やとりの岡ちしなかたをれあをねしなくよいくつくまでに」

た-をる 手折る【動四他】『たは接頭語、手は假借の文字』をる(折る)を强めていふ語。〔古語〕萬葉「わがせこが見らむ佐保路(ホサ)ぢ)の青柳をたをりてだにも見ぬよしもがも」古今「いはばしる瀧なくもがなさくら花たをりてもこん見ぬ人のため」

ち

【發音】㊀**ち**は**た**行第二の音。もと**た**行中の**た・て・と**の子音と同一なる顎的破裂音、卽ち舌端を硬口蓋に觸れしめて發する子音tと母音iとの合成せしものなれども、い(i)が口蓋的母韻なるより、その前なる子音tをも口蓋音化せしめ、後世はchi(ヘボン式の羅馬字)の音に變じたり。濁音**ぢ**も、もとdiなりしなるべけれど、後世はjiに變化し、**じ**と差別なきに至れり。但し、九州・四國には**ぢ**と**じ**とを混同せざる地多し。㊁長音は**ちい・ぢい**と書くと**ちー・ぢー**と書くとの兩法あり。本書には前者を用ひたり。㊂拗音の**ちや・ちゆ・ちよ**は子音ch(又はt)を發音する際、舌の前部を𛀁も高くし、母音のiを發する場合の位置に置きて發音する音に、母音a・u・oの合して成るものにして、その長音は**ちや**あ・**ちゆう・ちよ**おなり。濁音の場合、亦これに準じて知るべし。㊃**ち**の下に**か**行・**さ**行・**た**行・**は**行等の音の來る時は、促音に發音すること多し。例へば、一見(イチケン)のイッケン、日誌(ニチシ)のニッシ、勝ちてのカッテ、吉報(キチハウ)のキッパウと發音する類。㊄**ち・ぢ**は、下に**う・ふ**の來る時は、相合して拗長音チュウとなる。例へば、**ちうや**(晝夜)・**ちふ**(助辭の)・**ざつぢう**(雜糅)をチユウヤ・チユウ・ザツヂユウと發音する類。㊄**ちやう・ぢやう**は、すべて拗長音チヨオ・ヂヨオと同じく發音す。

【字源】平假名**ち**と變體平假名**ぢ**とは「知」(漢呉音共にチ)の草體、變體平假名**㐌**は「地」(漢音チ)の草體、**ゟ**・**亙**は遲(漢音チ)の草體、**ゟ**は「千」(和訓チ)の草體より出で、片假名**チ**は「千」の略體、**千・チ**は「知」の略體、また萬葉假名としては、上記「知」・「地」・「遲」・「千」の外、「智」(漢・呉音共にチ)・「致」(漢呉音共にチ)・「馳」(漢音チ)・「笞」(漢呉音共にチ)・「治」(漢音チ)・「値」(漢音チ)・「陳」(漢音チン)・「珍」(漢・呉音共にチン)・「乳」(和訓チ)・「茅」(和訓チ)・「父」(和訓チ)等を用ふ。

ち 血【名】㊀動物の體中にありて、心臟より動脈・靜脈の諸脈管に通じて、全身を循環し、その細胞に營養分を給與し、又これより老廢物を運び去る液汁。高等動物のは紅色を呈す。ちしほ。血液。㊁**ちのみち**(血道)の略。

血が上(アガ)る【句】逆上す。上氣す。・孕常盤「産所のそばでもやもやと、血が上つては大事ぢや」

血で血を洗ふ【句】㊀『唐書の源休傳に「可汗使レ謂レ休曰、汝國已殺二突董等一、吾又殺レ汝、猶二以レ血洗一レ血、汚益甚爾」、雜阿含經の卷四十一に「以レ血洗レ血、捨レ惡愛レ惡」とあり』暴を以て暴を制し、惡を以て惡を止むる譬。㊁互に親屬の惡事をあばきて、世間に知らす。

血に鳴く【句】『禮記の檀弓篇に「高子皐執二親之喪一泣血三年、(註)言、泣無レ聲如二血出一」とあり、また羅鄴の詩に「蜀魂千年尙怨レ誰、聲聲啼レ血深二花枝一、滿山明月東風夜、正是愁人不レ寐時」とあり』血を吐きて鳴く。甚だしく鳴く。(時鳥(ホトトギス)の鳴くにいふ)

血に迷ふ【句】**ちまよふ**(血迷ふ)に同じ。國花諸士鑑「是迄は何卒すかして討って取るべきと思ひしが、最早血に迷ひたる曲者、太刀先にて思ひ知らせんと」

血の餘(アマリ)【句】**すゑこ**(末子)の異稱。狂言(縉紳)「身共が親は子を三人持って…

身共は血の餘に可愛いが、取らせう物が無い程に、せめて中風なりと取らせうとあってくれうてござる」

血の雨を降(フ)らす【句】騒動の結果、刃傷に及ぶ。

「りといふ池。

血の池【句】地獄にありて血を湛へた

血の池へ陥(オ)ちる【句】地獄に墮落す。

血の筋【句】**ちすぢ**(血筋)に同じ。冥途飛脚「なふ、血の筋は悲しい。中のよい他人より」

血の筋は七代【句】父祖よりの遺傳は七代の後にまでも及ぶ。〔諺語〕

血の垂るほど【句】物を買ふに强ひてねぎる形容。〔諺語〕

血の垂るやうな金【句】次條に同じ。

血の出るやうな金【句】非常に辛苦して得たる金。〔諺語〕

血の涙【句】**けつるゐ**(血涙の)直譯。伊勢「男、血のなみだを流せども」

血の道【句】㊀血液の運行するすぢ。脈。㊁血のめぐりの不順より起る婦人の病。ちのやまひ。

血の病(ヤマヒ)【句】前條㊁に同じ。

血の縁(ユカリ)【句】血筋の關係。

血の分(ワケ)【句】血統をひくこと。

血は血だけ【句】血族のものは他人とは趣を異にす。〔諺語〕

血を畝(ウネ)る【句】ちかひをなす。

血を取る【句】療治のために、身體の中より血を出す。刺絡す。

血を蹉(ツ)む【句】『史記の淮陰侯傳に「韓信涉二西河一虜二魏王一、禽二夏說一、新喋二血閼與一、喋は蹀に通ず』合戰に赴く。

血を分く【句】親子・兄弟などの繼柄あり。骨肉の關係あり。「血を分けた兄弟」

ち

乳【名】㊀**ち**(乳)㊁に同じ。杜「ちあえずなりぬるめのと」㊁**ちぶさ**(乳房)に同じ。源氏「御ちはかはらかなるを、心をやりて慰めたまふ」㊂『その形、乳首に似たるよりいふ』旗・幟・幕・帆・羽織・草鞋などの紐に、竿・綱または緒などを貫くために、附けたる、小さき輪。みみ。㊃釣鐘の表面上部に數多羅列せる突起。梵鐘の外面に鑄造したる疣狀の突起。

乳の恩【句】乳を授けて育てし者に對する恩。

乳の親【句】**ちおや**(乳親)に同じ。松風村雨「乳の親には、中納言行平卿の北の方司の前」

乳の間(アヒダ)【句】釣鐘の、乳の突起せる部分。

乳の町(マチ)【句】梵鐘の外面、乳のある部分。

乳を餘す【句】「乳(チ)を餘す」に同じ。

父【名】**ちち**(父)に同じ。〔古語〕記「うまらにきこしもちをせ麻呂がち」

ち

鉤【名】**つりばり**(釣針)に同じ。〔古語〕記「あまたのちをつくのへどもうけずていはく」

ち

路【名】**みち**(路)に同じ。(熟語にのみ用ふ)〔古語〕「疾風(シツ)」「東風(コチ)」

風【名】**かぜ**(風)に同じ。(熟語にのみ用ふ)〔古語〕「疾風(シツ)」「東風(コチ)」

茅【名】〔植〕**ちがや**(白茅)に同じ。

知【名】㊀知ること。知覺。知識。㊁知りあふ人。友(モト)。知己。㊂**ちぐう**(知遇)に同じ。「知を辱うす」㊃**ちじ**(知事)に同じ。

智【名】㊀五常及び三德の一。物事の理をさとり、是非を辨ずる心の力。ちゑ。㊁はかりごと。たくみ。㊂賢きこと。さときこと。㊃賢き人。智慧多き人。智者。「賢を師とし、智を友とす」

智・仁・勇【句】**さんとく**(三德)を見よ。

智の劍(ツルギ)【句】**ちけん**(智劍)に同じ。梁花「不動尊は…金剛索・智の劍を持すれば」

智は萬代の財(タカラ)【句】「富は一生の財、智は萬代の財」を見よ。

「智は非(ヒ)を飾るに足る【句】『說苑に「智足レ飾レ非、辯足レ行レ說、此讒臣也」とあり』奸邪の人は、その知を惡用して、惡を善と言ひはることを得。〔諺語〕

智は圓ならんことを欲し、行は方ならんことを欲す【句】智は圓通活脫諸事に適應せんことを欲し、行は方正嚴格禮義に則らんことを欲す。〔諺語〕

ち

地【名】㊀地球。大地。つち。(天に對して)㊁つち。くが。をか。ち。陸。地面。地面。土地。㊂生れたる鄕。その處。その土地。㊃領地。領土。㊄場所。位置。地位。㊅たちば。境遇。「地を易へて考ふ」㊆地球をつかさどる神。地神。地祇。㊇もとる。したお。基礎。素地。㊈した。下方。(天に對して)

地が傾いて、舞が舞はれぬ【句】爲さんと思ふことの成らぬを、我が心の怠ゆゑとは云はで、境遇にかこつくる譬。堂が歪(ユガ)んで、經が讀まれぬ。〔諺語〕吾吟我集「地が傾きてまはれぬ舞やこれならん岸根にこけて行くかたつむり」

地に拔足(アシ)す【句】「天に跼(セグ)り、地に蹐(スガ)す」を見よ。小町踊「元旦」「音せぬは、地にぬきあしか春の雨」

地に二王無し【句】『「天に二日無し」を見よ』「民に二王無し」に同じ。〔諺語〕

地に落つ・地に墜つ【句】㊀地上におつ。㊁『陶潛の詩に「落レ地爲二兄弟一何必骨肉親」とあり』この世に生れ出づ。㊂『論語の子張篇に「文武之道未レ墜レ於レ地、在レ人」とあり』衰へすたる。頽廢す。「名譽、地に落つ」「威信、地に落つ」

地に塗(マミ)る【句】再び起きあがることもかなはずなる。「一敗地に塗る」

地の三形【句】地面の高低・平の三種の形。

地の四象(シヤウ)【句】地にある水・火・土・石の四つの物象。

地の理【句】**ちり**(地理)㊀に同じ。「理を案ず」「地の利」

地の利【句】**ち**(地利)㊀に同じ。

地の利は人の和に若かず【句】『孟子の公孫丑上篇に「天時不レ如二地利一、地利不レ如二人和一」とあるに本づく』地勢優秀なりとも、人人の和合團結には及ばず。〔諺語〕

地久し【句】「天長く地久し」を見よ。

地を打つ槌は外(ハヅ)るとも【句】「打つ槌は外るとも」に同じ。〔諺語〕

地を易(カ)ふれば、皆然り【句】『孟子の離婁上篇に「曾子子思同レ道、曾子師也、父兄也、子思臣也微也、曾子子思易レ地則皆然」とあり』地位・境遇を代ふれば、何れも皆同一なり。〔諺語〕

地を反(カヘ)す【句】大地を反すごとく驚地を徇(トホ)ふ【句】『史記の留侯世家に「張良徇二韓地一」とあり。徇は略の義』他國の土地を取りてその人民を從はしむ。

地を掃(ハラ)ふ【句】『唐書の祝欽明傳に「帝與二群臣一宴、欽明自言能二八風舞一、帝許レ之、欽明體肥醜、據レ地搖レ頭院レ目、帝大笑、盧藏用歎曰、是擧二五經一掃レ地矣」とあり』一切灰をかくす。すべて見えずなる。頽廢す。「驚實の風、地を掃ふ」

地を席(シキ)す【句】「天を幕とし、地を席とす」を見よ。

ち

市【名】**いち**(市)に同じ。鼠「倭のこのたけちに小高る市のつかさ」

治【名】㊀世の安寧なること。㊁國の治め方。政事。㊂官廳の所在地。㊃病をなほすこと、又病のなほること。治療。治癒。

治にして、亂を忘れず【句】治世にも、武を錬りて、戰亂の時を忘れず。〔諺語〕

治に居て、亂を忘れず【句】『易經の繫辭に「居レ治不レ忘レ亂」とあるに本づく』前條に同じ。〔諺語〕

笞【名】㊀しもと。むち。㊁**ちざい**(笞罪)に同じ。

痴・癡【名】㊀おろかなること。愚。魯鈍。㊁(佛)さんどく(三毒)を見よ。「貪・瞋・癡」三種の癡【句】(佛)禪門にて分てる癡の三分類。卽ち一に計斷當、二に計有無、三に計世路。

徵【名】ごいん(五音)㊀を見よ。

篪【名】支那の古の樂器の一。橫笛の一種。八孔を有す。

千【數】㊀せん(千)に同じ。(熟語にのみ用ふ)㊁數多きこと。(熟語にのみ用ふ)

箇【接尾】つ(箇)に同じ。〔古語〕「はたち」「ももち」

地【接尾】狀勢を示す語に添へて用ふる語。「忽地」「驀地」

ち【接尾】方角・場所を示すに用ふる語。「あち」「をち・こち」「いづち」

治【名】**ち**(治)㊃に同じ。梁花「風のち

どもをせさせたまふ」

ち 地【名】一ち(地)(一)(二)(三)に同じ。二或土地を、他の土地と區別していふ稱。その土地の事物なること。土著。「ちの者」「ちの玉子」「ぢ山」「ぢまはり」「ぢうた」三ちかた(地方)に同じ。四物の成立つ基。したぢ。もちまへ。質。五おりぢ(織地)に同じ。六おいろ(地色)に同じ。源氏「山吹のぢの限り織れる御こうちきなど」七きめ。はだへ。はだ。八碁盤の面の石を以て圍みたる空所。九紙又は布帛などの、紋模様などなきところ。十おがひ(地貝)の略。十一ぢがみ(地紙)の略。十二文章・小說・浄瑠璃等の中の、會話以外の部分、即ち作者が事相の發展、景物の狀態を說く部分。(詞に對して)十三ぢうたひ(地謠)の略。「それならば舞ひませう。地を誂て下され」十四舞節に合はせて奏する三味線囃子。十五『流(ナガ)れの身ならぬその土地の者の意』素人(シロ)なること。しろうと。(男女の關係につきていふ)「地色(ヂイ)」「地女(ヂオンナ)」十六實地。實際。浮世風呂「地と狂言との差別はそこだはな」十七(文)連俳にて、さまで珍しからぬ物事を取來りて、手際よく前句に附くること。十八二錢の隱語。(楊弓・大弓にて、錢を賭物(カケモノ)にする時の語)十九醪(モロミ)の製造にて、既に醱酵(ハッカウ)完了し、泡の消失したる後、液面一體に、蓋或は皮膜の如き物にて被はるるに至れる狀態。

地の板【句】おいた(地板)に同じ。

ぢ 持【名】歌合・圍碁などにまけかちなきこと。あひこ。もちあひ。源氏「待ちたまへや。そこはぢごにこそあらめ」

ぢ 痔【名】肛門に腫を發し、時に血の出づることある病氣。多くは遺傳にして、宿便・心臟病・肺病・直腸等の諸症より起り、三十歳乃至五十歳ごろの安坐する人に多し。痔血(ヂケツ)・切痔(キレヂ)・疣痔(イボヂ)・痔瘻(ヂロウ)・痔核(ヂカク)・脫肛(ダッコウ)などの種類あり。しりのやまひ。痔疾。

ぢ 柱【名】こぢ(琴柱)に同じ。

ぢ 路【接尾】一國の名に添へて、その國内を通過する道路を示すに用ふる語。「近江ぢ」「美濃ぢ」「紀ぢ」「大和ぢ」二日數に添へて、その時日だけを要する道程の意を示すに用ふる語。「三日ぢ」

お 箇【接尾】ち(箇)の轉。「ななそぢ」「やそぢ」「千(チ)ぢ」

ちあき 千秋【名】せんしう(千秋)に同じ。「古語」瑞穗國は豐葦原の千秋の五百秋(イホアキ)の水穗の國は」

おあけ 地明【名】新開地の準備として、その地の雜木・雜草を除去すること。ぢごしらへ。「すること。

おあげ 地上【名】土を盛りて、土地を高くすること。

おあげひ 地通草【名】〔植〕つちあけび(山珊瑚)の異稱。「の語」

おあし 地足【名】地乘(ヂノリ)の足取。「馬術

おあすたあぜ (獨 Diastase)【名】ちやすたあぜを見よ。「みいに同じ。

おあてるみい (羅 Diathermie)【名】ちやてるみいを見よ。

おあな (英 Diana)【名】ちやなを見よ。

おあなき 脚病【名】馬の病の一。咳嗽(ガイソウ)を發し、前肢屈みて進むこと能はざるに至るといふ。「古語」和名「白樂相馬經云、脚病、俗云、知阿奈岐、馬有二此病一、則咳嗽、衣毛焦折、前足重不レ能レ行」

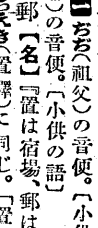
おあはせ 血合【名】血統をためす爲に、器に水を入れ、血と血とを合はせ、そのまざりたる時は、血統上の關係ありとすること。「部分。

おあひ 血合【名】魚肉の、紫黑色を成せる部分。

おあひ 地合【名】織物のおりぢ。ぢしつ。

おあへのまつり 道饗祭【名】みちあへのまつり(道饗祭)に同じ。「古語」

おあぼろ (英 Diabolo)【名】玩具の一。圖の如き木又は金屬製にして、徑二寸程の形のものに、別に二本の棒の各一端に長き絲を結びつけたるものを兩手に持ち、絲の上にヂアボロの胴を載せ、一方の手を度度上ぐれば、ヂアボロは自ら回轉し始むるより、これを上になげ上げ、絲にて受止め、回轉を止ましむることなく續けて遊ぶもの。ちやぼろ。



(ろぼあ)

おあみ 地網【名】おびきあみ(地引網)に同じ。

ちあん 治安【名】國の安らかに治まること、又國を安らかに治むること。社會の安寧秩序を保つこと。「ること。

ちあん 治安防害【句】國家の治安を障げ害すること。

ちあん 安治【名】後一條天皇の御代の年號(紀元一六八一年—一六八三年)。

ちあん (獨 Chan)【名】〔化〕ちやんを見よ。

ちあんけいさつ 治安警察【名】〔法〕治安に對する危害を排除するための警察。通常警察と高等警察とに分つ。保安警察。

ちあんけいさつほふ 治安警察法【名】治安警察に關する法規。大體において、從來の集會條例又は集會及び政社法に代りたるもの。明治三十三年の公布。

ちあんさいばんしよ 治安裁判所【名】くさいばんしよ(區裁判所)の舊稱。「むる策略。

ちあんさく 治安策【名】國を安らかに治

ちあんすゐそさん チアン水素酸【名】〔化〕ちやんすゐそさん(チアン水素酸)を見よ。「言」

おあゆ 【名】東北の風を云ふ。〔北國の方

おあらし 地嵐【名】一地方の山の方より沖へ吹出す風。

ちあれ 血荒【名】胎兒の未だ形を成さずして墮胎し、妊婦の身の汚れたること。

ちい 地異【名】地上に起る異變、即ち地震・噴火・洪水・海嘯の類。地妖。地變。「天變・地異」

ちい 地衣【名】一こけ(苔)に同じ。二〔植〕ちいるを(地衣類)を見よ。「衣服。

ちい 絺衣【名】細き葛布にて仕立てたる單衣。

ちい 乳母【名】めのと。うば。ちらば。〔畿內・九州の方言〕

ちい 尺【助數】清國の、長さの基本單位。我が國の一尺一八二に當る。

おい【名】一ちお(祖父)の音便。〔小供の語〕二おぢ(爺)の音便。〔小供の語〕

ちいう 置郵【名】『置は宿場、郵は宿(シュク)つぎ馬』ちえき(置驛)に同じ。「置郵して傳ふるよりも速かなり」

おいう 知友【名】深く知りあひたる友。親

おいがせ 爺背石龜【名】〔動〕腹足(フクソク)類に屬する軟體動物。體は楕圓形にして扁平、長さ一寸餘。背面には石灰質の板狀の甲八枚あり、腹面は黃色を呈し、肉質の足を具へ、その兩側に十六箇の鰓(エラ)あり。頭部と認むべきもの無し。岩礁に附著し、徐徐に匍匐す。これを剝離すれば、體を捲縮する性あり。ひざがひ。

おいがひげ 爺鬚【名】〔植〕おきなぐさ(翁草)(一)に同じ。「雅」に同じ。

おいがひざ 爺膝【名】〔植〕あまどころ(婆婆)

おいき 地息【名】地面より蒸發する水氣。地氣。土氣。

ちいく 知育【名】〔哲〕『英 Intellectual education』意識を開發して、智能を長ずるために施す教育。即ち物を了解し、事理を判斷推知し、技能を練磨する等の類。(德育・體育に對して)

ちいく (英 Teak)【名】〔植〕馬鞭草(バシュウ)科に屬する落葉喬木。葉は對生又は輪生し、花は數多簇りて、約一尺五寸の圓錐花序をなす。材は帶褐蒼白色にして輕く、堅く、木理緻密にして、永く腐朽することなく、多く船材、又は家屋汽車の車體等に用ひ、又これより搾取せる油は、木材に塗り、又物を磨くに用ひ、葉よりは絹絲を黃色又は橙黃色に染むる料染を製す。

おいくさ 地軍【名】おぢりあひ(地取合)に同じ。

おいさんばあさん 爺樣婆樣【名】〔植〕しゆらん(春蘭)に同じ。

ちいしん・たん 七星蛋【名】支那料理の一。清き粘土三分・食鹽六分・硝石一分を混じ、水にて捏りたるを、壺の中に入れ、内に家鴨(アヒル)の卵を漬け、一週間の後取出して食するもの。俗に鹽蛋(エンタン)と稱す。

ちいしやう 地衣裳【名】舞臺などに用ふるものに非ざる、常の衣裳。若風俗舞臺衣裳も、唐木綿に更紗の置形、地衣裳は加賀絹に中紅(ベニ)の裏を附け」

ちいす 乾酪(英 Cheese)【名】かんらく(乾酪)に同じ。

ちいぜる (英 Tensile 又 Teasel)【名】毛織物の起毛に使用する强き刷毛。

おいた 地板【名】一【建】床脇(トコワキ)棚下又

は附書院(ツケショイン)の下なる化粧板。しきこみいた。ぢいた。地(ヂ)の板。㊁抽出(ヒキダシ)煙草盆等の器具の底板。㊂昔の小銃種子島(ツヽガシマ)の銃床の下部側面なる板。

ちい-たい 地衣帯【名】〔植〕『英Lichen-region』高山植物帯の一。草本帯の上に位し、植物はただ地衣の岩面に附著せるのみにて、盛暑の候にも、此處彼處の岩陰には白雪殘れり。緯度に依る植物の分布狀態と比較すれば、南北兩極帯に匹敵す。

ちい-ちい 【名】㊀けち。吝嗇。〔東京の俚語〕㊁むし(蟲)を云ふ。〔小供の語〕㊂〔動〕しらみ(蟲)を云ふ。〔小供の語〕㊃〔動〕ちっちぜみ(ちっち蟬)を云ふ。〔伊勢國の方言〕

ちいちい-はあはあ 【貌】粉などの如くに、物の散らばり去るさま。

おいちがま ヂイチ窯【名】セメントを燒成するに用ふる窯の一種。竪窯二基を背中合(アハセ)に築きたるが如き形のものにして、窯室は豫熱部と灼熱部とに分たれ、連續して燒成するもの。

ちいちや-こもち 【名】『用捨箱に「ちいちやこもちや桂の葉と云ふは、隱遊する時の童謠にて、あふちやこぶしや桂の葉といふのを歌ひ誤りしなり」とあり』かくれあそび(隱遊)㊀に同じ。

ちいちや-こもちや 桂の葉【句】隱遊(カクレアソビ)する時の童謠。前條參照。

おいーと 【副】ちっとに同じ。

おいーぬ 地犬【名】その土地の犬。その土地に居る犬。地の犬。柳燕「鉄打の中で地犬を吠えてゐる」

ちいはあ 一八・字花【名】支那人の間に盛んに行はるる富籤(クジ)に似たる賭事(カケゴト)。催主より一定せる三十六の熟語を記せる紙片を買主に配付し、且つ豫めその中の一熟語を伏せおくを、買主は、又、催主の伏せおきたる熟語はこれなるべしと思ふものに、規定の金を添へて、催主に送るに、その熟語、催主のと一致すれば、催主より三十倍の報酬を得、もし一致せざる時は、掛金を損失す。もとその三十六熟語以外に、催主の伏せたる熟語を暗示する語辭を附刷して配付したれども、後には單に形式上のものとなりて、無意味の語辭を羅列するに至り、買主もこれに重きを置かざるに至れり。我が國にては禁止す。

ちいふう 芝栄【名】〔地〕支那山東省の開港場。渤海出入の船舶は必ず寄港す。我が居留地あり。舊稱、烟臺。「語」

ちいほ-あき 千五百【數】物の數多きこと。〔古語〕記、葦原の千五百秋の瑞穗の國」

ちいほ-あき 千五百秋【名】かぎりなき年月。ながいほあき。ながあき。ちほあき。〔古語〕記、葦原の千五百秋の瑞穗の國」

ちいみ 血忌【名】次條の略。懸八卦柱曆「是てそもじを殺すかや、ちいみも今はいつはりと、二人は顔を打合せ」

ちいみ-にち 血忌日【名】曆の下段なる凶日の一。婚家・鍼灸・出血・刑戮などに忌む日。正月は丑、二月は未、三月は寅、四月は申、五月は卯、六月は酉、七月は辰、八月は戌、九月は巳、十月は亥、十一月は午、十二月は子の日。ちいみ。血忌(ケツ)。

ちいむ (英Team)【名】團・體組。特に野球團の如き遊技團體。

ちい-ん 遅引【名】ちえん(遅延)に同じ。

ちい-ん 知音【名】㊀『列子の湯問篇に「伯牙善鼓レ琴、鐘子期善聽…子期死、伯牙絶レ絃、以無二知レ音者一、又、揚雄の解難に「師曠之調レ鐘、瑗二知レ音者一在レ後也」とあり。「絃(ゲン)を絶つ」參照』善く心を知りあひてゐる人。なかよし。ちかづき。知己。知人。㊁しりびと。ちかづき。知人。知己。一代女「身のまはりは、仕著(シキセ)の外、それぞれに知音を持つて、その人に貰ふこと」㊂丹波與作「小まんのちいんの與作も」㊃およよく(女色)を云ふ。〔丹波國・丹後國の方言〕

ちい-ん 智印【名】〔佛〕般若の智を印として、實相の理に入ること。盛衰記「胎藏界の不動の前に智印を結び」

ちいん-にようぼう 知音女房【名】野合の女房を云ふ。〔丹波國・丹後國の方言〕

ぢい-や 【名】老年の下男。老僕。〔小供の語〕

ちいりん 吉林【名】〔地〕支那滿洲吉林省の首府。松花江に臨み、舟運の便あり。

ちい-るね 地衣類【名】〔植〕隱花植物、菌類と藻類との共生體。菌類は主體にして、十分に發育し、生殖器を生じ、藻類は決して生殖器を生ぜず、又、體の全部に藻類を含めるものと、特別の部分にこれを含めるものとあり。例へば、岩茸(イハタケ)・松蘿(サルヲガセ)・リトマス苔など、これに屬す。

ぢいろ 地色【名】㊀下地(ヂ)の染めいろ。地染(ヂゾメ)の色。㊁素人の女にして情婦たる者。おわかしゅ(地若衆)。おをんな(地女)參照。通一艷女鑑「なんでも、これから、毎晩のやうに出て、地色を見つけ出し、一か八(ヂ)かにかたづけるがいいぢやあねえか」

ぢいろ-ぐさ 千色草【名】〔植〕たけ(竹)の異稱。〔古語〕「じ。

ぢいろ-ぞめ 地色染【名】ぢぞめ(地染)に同じ。

ちう 鈕【名】㊀印材又は鏡などのつまみ。

ちう ㊁ぼたん。こはぜ。

ちう 宙【名】㊀おほぞら。半空。中空。半天。虚空。ちゅう(中)㊄參照。重雛子「氣が宙を飛ぶやうで」藤原敦「帶を松に引掛けて宙に下つて、これも彼の罠にかかりし野邊の雉子」太平記「この首を宙に投上げては請取り、請取りて、手玉についてぞ悦びける」㊁そらおぼえ。そら。詐言(ソラゴト)。狂言(ソラゴト)記「五百俱のさいのめを、ちうで申す人があらば、賽にとらう」浮世親仁形氣「論語・孟子をちうでやります」

ちう 冑【名】ちすぢ。血統。

ちう 儔【名】たぐひ。なかま。ともがら。

ちう 籌【名】㊀かずとり。かずさし。籌算。籌判。㊁はかりごと。籌略。籌策。籌算。なり。智は諫を拒ぐに足り、言は非を飾るに足り、淫酒に耽り、極刑を設け、民心離反し、周の武王に亡さる。

ちう 宙【貌】よりどころの無きこと。そら。

ちう 【感】風のなきごゑ。

ちう-いん 鑄印【名】『鑄の字の音、正しくはしゅ』金屬にて鑄造したる印形。やき印。

ちう-いん 抽引【名】ひきだすこと。ぬきとること。

ちう-いん 胄胤【名】㊀直系の子孫。㊁すゑ。子孫。後胤。胄裔。

ちう-う 宙宇【名】〔佛〕ちゅうう(中有)の誤。

ちう-かん 晝間【名】ひるま。ひるのうち。

ちう-きん 鑄金【名】『鑄の字の音、正しくはしゅ』ちゅうざ(鑄造)に同じ。

ちう-きん 晝錦【名】『「錦を衣(キ)て晝行く」を見よ』富貴の身となりて、故郷に還ること。

ちうきん-か 鑄金家【名】『鑄の字の音、正しくはしゅ』金屬にて、美術品を製造する人。

ちう-くわ 鑄貨【名】『鑄の字の音、正しくはしゅ』しゅくわ(鑄貨)に同じ。「書策。

ちう-くわく 籌畫【名】はかりごと。計畫。

ちう-くわんせつ 肘關節【名】〔醫〕『羅Articulatio cubiti』上肢の上膊と前膊との間に在る關節。三箇の關節集合して成る。

ちうくわんせつ-どうみゃくまう 肘關節動脈網【名】〔醫〕『羅 Reticularis cubiti』肘關節に於ける、網狀をなせる末梢動脈。

ちうくわ-れう 鑄貨料【名】『鑄の字の音、正しくはしゅ』しゅくわれう(鑄貨料)の訛。

ちう-げ 廚下【名】京都の知恩院に於ける行事の一。正月二日大僧正自ら廚に出で、僧侶・僕等を饗すること。

ぢ-うけ 地請【名】借地の請人。

ちう-げへり 宙返【名】ちうがへり(宙返)の訛。〔江戸の語〕浮世床「字がちうげへりをしたり、ぎばを返つたりする」

ちう-こう 鑄工【名】『鑄の字の音、正しくはしゅ』いものし(鑄物師)に同じ。

ちう-こう 鈕釦【名】こはぜ。ボタン。

ちう-さい 肘材【名】『英Knee』西洋形船舶の構材中、底部と側部を連結せしむるものにて、自然木の曲れるもの、又は幹と枝と分るる處を採り作る、その形肘に類せり。

ちう-ざう 鑄造【名】『鑄の字の音、正しくはじゆ』しゆざう(鑄造)に同じ。

ちうざう-くわ 鑄造貨【名】『鑄の字の音、正しくはしゆ』しゆざうくわ(鑄造貨)に同じ。

ちう-さく 籌策【名】はかりごと。策略。籌略。吉野都女楠「謀を帷幄の內に旋らし、勝事を千里の外に顯はす籌策にて候」

ちう-さん 籌算【名】一かずとり。二はかりかぞふること。つもり。

ちう-さん 晝三【名】『晝間これを招くに、金三分を拂ひしよりいふ』德川時代の、上等の遊女。散茶。

ちう-さん 晝餐【名】**ちうじき**(晝食)に同じ。

ちう-うし 乳牛【名】**ちうし**(乳牛)に同じ。〔古語〕和名「乳牛、乳牛者、牝牛有レ子之名也、和名、知宇之」

ちう-し 鈕子【名】**ちう**(鈕)に同じ。

ちう-し 胄子【名】一家をつぐべき子。あととり。嗣子。二長子。總領。

ちう-じき 晝食【名】ひるめし。午餐。晝餐。晝飯。午食。中食(チユウジキ)。

ちうじきざい 晝食菜【名】晝食の菜。晝食のおかず。領域反魂香「歩まずば、任せて桶にうち入れて生ながらの酒びたし、地獄の鬼の中食ざいと戲れ笑ひ歸らるる」

ちう-じつ 晝日【名】ひる。ひるま。日中。

ちうしーないしんわう 疇子內親王【名】〔人〕後堀河天皇の第一女。室町院と稱す。寛元元年三后に准ぜられ、同四年尼となり、正安二年薨ず。年七十三。

ちう-じん 稠人【名】むれ居る人。ひとごみ。ひとびと。

ちう-しやう 晝餉【名】晝の辨當。ひるがれひ。ひるめし。ひるげ。午餉。「こと。

ちう-しやう 抽賞【名】選びぬきて賞すること。

ちう-しやう 抽象【名】〔哲〕『英Abstraction』抽象は、實物中より形象のみを抽出分離せしむる義』箇箇の事物の中より若干の屬性を抽離する心の作用。例へば、「赤き薔薇花」「赤き旗」「赤きインキ」等より赤といふ屬性を抽離し、實際の忠臣・孝子の事實より忠孝といふ屬性を抽離する類。(具象に對して)

ちう-じやう 紐狀【名】紐のごとくなる形。

ちうしやう-がいねん 抽象概念【名】〔哲〕『英Abstract concept』多くの矛盾を抱擁せざる、內容の貧瘠なる概念。往往一般概念をも包含し、これと區別せずして用ひらるれども、狹義にては、兩者の意義同じからず。卽ち一般概念と異なりて特種の事物、特種の場合との關係を離れて考へたるものなり。例へば、人類は一般概念にして、人性は抽象概念なる類。(具象概念に對して)

ちうしやう-くわんねん 抽象觀念【名】〔哲〕前條に同じ。

ちうじやう-くわやく 紐狀火藥【名】『英Cordite』無煙火藥の一。成分はニトログリセリン・綿火藥・ワセリンにして、飴色・細狀をなす。專ら大砲の裝藥に用ひられ、爆發に際して、有毒の瓦斯を發散す。

ちうしやう-てき 抽象的【貌】『英Abstract』事物より抽象したる性質を帶びたるさま。(具象的に對して)

ちうしやうてき-がいねん 抽象的概念【名】〔哲〕**ちうしやうがいねん**(抽象概念)に同じ。

ちうしやうてき-くわしつ 抽象的過失【名】〔法〕輕過失の一。善良なる家父の注意(又は自己の財產に加ふる注意)を缺きたるもの。(具體的過失に對して)

ちうしやうてき-くわんねん 抽象的觀念【名】〔哲〕**ちうしやうてきがいねん**(抽象的概念)に同じ。

ちうしやうてき-しようけん 抽象的證券【名】〔法〕『獨Abstraktreoltspapier』何等原因の記載なくして、證券上の權利を主張するを得る證券。例へば手形・賃入證券の類。不要因證券。

ちうしやう-び 抽象美【名】〔哲〕『英Abstract beaety』抽象的に類別したる美。(具象美に對して)

ちうしやう-めいし 抽象名詞【名】〔語〕『英Abstract noun』實在せる箇箇特別のものより抽象したる屬性を表示する名詞。例へば、赤・白・善・惡・忠・孝・忍耐・勉强などの類。(具象名詞に對して)

ちう-じゃく 鑄石【名】しんちう(眞鍮)に同じ。

ちうじやく-もん 鑄石門【名】鑄石にて作れる門。神社などにあり。

ちう-しゆつ 抽出【名】ぬきいだすこと。つまみだすこと。

ちうしゆつ-くわへい 抽出貨幣【名】〔商〕『英Garbled coin』改鑄又は鑄減(ヘラ)のために抽出せる貨幣。

ちう-しよ 籀書【名】**ちうぶん**(籀文)に同じ。

ちう-しよく 晝食【名】**ちうじき**(晝食)に同じ。

ぢうす 地薄【名】織物などの地の薄きこと、又その織物。

ちうすゐき 抽水機【名】『英Hydro-extractor』固體と液體とを分離する機械。主に遠心力を應用し、動力を以て回轉す、乾燥・脫水等を目的とする工業に用ふ。

ちうせい 小い【形】**ちひさし**(小さし)の訛。枕「ちうせいをしき、ちうせい高つきなどにてこそよくさふらはめ」

ちう-せき 疇昔【名】一きのふ。昨日。二むかし。以前。

ちうせき 疇夕【名】ゆふべ。昨晚。

ちうせつ 狃鍥【名】なれなれしくして、禮儀なきこと。「り。くじびき。

ちうせん 抽籤【名】闔をひくこと。くじとはしゆ』しゆせん(鑄錢)に同じ。

ちうせん 鑄錢【名】『鑄の字の音、正しくはしゆ』しゆせん(鑄錢)に同じ。

ちうせん 紐線【名】かたうちせん(可撓紐「さま。線)に同じ。

ちう-ぜん 惆然【貌】失望して、恨み悲しむ

ちうせん-おち 抽籤落【名】有價證券の抽籤期を經過せるもの。從って抽籤附よりも相場安し。(抽籤附に對して)

ちうせん-し 鑄錢司【名】『鑄の字の音、正しくはしゆ』しゆせんし(鑄錢司)に同じ。

ちうせん-し 鑄錢師【名】『鑄の字の音、正しくはしゆ』しゆせんし(鑄錢師)に同じ。

ちうせん-じよ 鑄錢所【名】『鑄の字の音、正しくはしゆ』しゆせんじよ(鑄錢所)に同じ。

ちうせん-つき 抽籤附【名】有價證券の抽籤期日未だ到來せざるもの。從って、抽籤落よりも、相場高し。(抽籤落に對して)

ちうせん-はふ 抽籤法【名】事を決定するに抽籤を以てする方法。

ちうせん-めいぼ 抽籤名簿【名】壯丁の徵集順序を定むるに、身體檢査に合格せし者の抽きたる番號の順によりて、徵兵官これを作製し、島嶼・郡役所・市役所又は區役所に備へおく名簿。

ぢうた 地唄【名】一その土地にて唄ひ初めたる唄。二かみがたうた(上方唄)に同じ。〔京都の語〕

ぢうたひ 地謠【名】能(ノ)にて、舞臺の向って右側に、數人、一列又は二列に坐りて、仕手・脇等の謠ふ部分(詞の部分と地の文の一部と)の外の部分を謠ふこと、又その人。その人の中にて、後列の中央に全員を統括する者の坐るを常とし、これを地頭(ジガシラ)と呼ぶ。ぢ。松風村雨東帶鑑「勸進能の地謠に雇はれ」

ぢうたひ-ざ 地謠座【名】能舞臺(ブタイ)にて、地謠の者の坐る場所。向って右側とす。

ぢうたひ-ぶし 地謠武士【名】おのれはさまでの働もなさずに、他人の働を難ずる武士。〔甲斐國の昔の方言〕武者物語「武偏に、分別を用ひず、跡さきの辨なく、敵に向って粗忽にかかるをよしとする…これを識る人は、昔、武田信玄の御住國甲州のはやり言葉の如く、地謠武士とやらんにて有るべし」

ぢうたひをとこ 地謠男【名】おのれはさまでの働もなさずに、他人の働を難ずる男。甲陽軍鑑「たたらひ五郎左衞門は…一度の手柄もなくして、諸傍輩の取沙汰仕りて…五郎左衞門がやうなる侍は、地うたひ男と名付けたり」

ぢうち 地打【名】次條の略。

ぢうち-あしだ 地打足駄【名】その土地より產出したる足駄。ぢうち。

ぢうち-ぢう 【名】**ちゆうちゆう**に同じ。

ぢうち-ばば 地打幅【名】外幕(クロマク)の名所。

第五の幅(ノ)。

ちうちやう 惆悵【名】いたみなげくこと。

ちうちよ 躊躇【名】『莊子の外物篇に「聖人躊躇以興事、每以成功」あるに本づく』ためらふこと。如何がはせんと控ふること。躊躇。

ちうてつ 鑄鐵【名】『鑄の字の音、正しくはしゅ』しゅてつ(鑄鐵)に同じ。

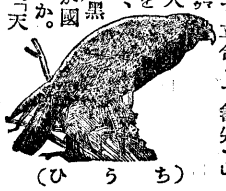
ちうのり 宙乘【名】馬術輕業芝居などにて、身體を宙に吊りて、空中を行くが如く見する藝。

ちうば 乳母【名】うば(乳母)に同じ。

ちうはん 晝飯【名】ちうじき(晝食)に同じ。

ちうはん 籌判【名】かずさし(籌刺)に同じ。盛衰記「大内にて相撲(スマヒ)の召合(メシアハ)あり。…籌判、府生(フジョウ)左右各一人、左貞弘、右諸武、勝負に隨って立合うて籌判す」

ちうひ【名】〔動〕猛禽(タカ)類に屬する鳥。形大にして上部黑褐色を呈し、翼及び尾は灰色、腹部は茶色に近く、黑き條斑を有す。我が國には稀なり。ちうひだか。



(ひうち)

ちうひう 綢繆【名】『「天の未だ陰雨せざるに牖戸を綢繆す」を見よ』からみまとふこと。まとひつくこと。纏綿。「同じ。

ちうひ-だか ちうひ【名】〔動〕ちうひに同じ。

ちう-ひつ 儔匹【名】ひっちう(匹儔)に同じ。

ちうぶ【名】〔植〕つりがねさう(釣鐘草)を云ふ。〔信濃國木曾の方言〕

ちう-ぶん 抽分【名】何分の一かを抜取りて上納することか。溝口謙當時、商人の抽分の料として」

ちう-ぶん 籀文【名】『支那周の史籀の作る所なればいふ』だいてん(大篆)の異稱。

ちうぶん-せん 抽分錢【名】抽分の料として上納する錢。

ちう-ぼう ちう棒【名】ちんぼう。ちんぼこ。男根。陰莖。〔古語〕著聞「ちうぼうは、六寸ばかりにて、若き者よりはしたたかにしたりつるは」

ちう-みつ 稠密【名】しげきこと。たてこみたること。こみあふこと。

ちうみん 晝眠【名】ひるね(晝寢)に同じ。

ちう-も 稠茂【名】はんも(繁茂)に同じ。

ちう-や 晝夜【名】一ひると、よると。よるひる。日夜。二晝と夜との玉代(ダイ)を拂ふこと。椎鷹「お客より藝者衆の方が澤山でござります。…どうで今日は晝夜になりますよ」

晝夜兼行【句】『傘は倍の意』晝夜をかけて、宿らず止まらず、道を行くこと。夜を日に繼ぐこと。

晝夜を舍(ス)てず【句】『論語の子罕篇に「子在二川上一曰、逝者如レ斯夫、不レ舍二晝夜一」、孟子の離婁篇に「原泉混混、不レ舍二晝夜一」とあり』夜と晝との差別なく行ふ。千紅萬紫「ゆくものはかくの如きか隅田川晝夜をすてぬ猪牙(チョキ)と屋根船」

ちう-や-おび 晝夜帶【名】一『白色を晝の帶へ、黑色を夜の帶へていふ』くちなおび(鯨帶)に同じ。二裏と表とに異なる布帛を用ひて仕立てたる女帶。「をなす銀行。

ちう-や-ぎんかう 晝夜銀行【名】晝夜營業

ちう-や-ざふしき 晝夜雜色【名】てうじやくざふしき(朝夕雜色)に同じ。

ちう-や-ひも 晝夜紐【名】表と裏との色の變りたる平打紐。

ちう-や-ふう 晝夜風【名】〔地〕晝と夜とによりて、方位を異にする風。即ち山間に於ける谷風・山風、海岸に於ける海風・陸風の類。

ちう-や-まはり 晝夜廻【名】江戸幕府にて、番衆が、晝夜共に時を定め、相交替して江戸市中を巡回して警戒せしこと、又その者。寛永六年以後の制度にして、書院と小姓組との兩番衆は内郭の地を、大番衆は外郭の地を巡回したり。

ちう-や-まはり-ばん 晝夜廻番【名】晝夜廻に出役せし番衆。

ちうりこ 地賣子【名】その土地にて賣る賣子。雞八卦杜曆「地賣子共のとりさばき」

ちうりっぷ(英Tulip)【名】〔植〕百合(ユリ)科に屬する多年生の鱗莖草本。葉は披針形にして平行脈葉を有し、六月頃、莖高く抽出して、頂上に一花を開く。花瓣六片よりなり鐘形をなす。紅・紫・黃・白その他の雜色あり。觀賞用として栽培せらる。うこんかう。うっこんかう。「じ。

ちうりりやく 籌略【名】ちうさく(籌策)に同

ちうりりよ 儔侶【名】ともも。なかま。儔匹。

ちうるゐ 儔類【名】たぐひ。なかま。儔匹。

おうろんぶらい-の-ていりつ デウロンプティの定律(英Dulongpetit's law)【名】〔理〕固體元素の比熱と原子量との相乘積は何れも相等しといふ法則。

ちえ 千枝【名】數繁く分れ出でたる枝。ちえだ。杜「くすのきは木立(コダチ)の多かる所にもまじらひ立てらず、…ちえに分れて憂する人のためしにいはれたるぞ、たれかは數を知りていひはじめけん」夫木「わがまきしあさをのたねをけふ見ればちえに分れて風ぞ涼しき」

千枝の下草【句】千枝の下蔭に生ふる草。〔古語〕新續古今「うつせみの涙の露や結ぶらん信太(シダ)の森の千枝のした草」

千枝の下露【句】千枝より滴り零つる露。新拾遺「夕立の名殘久しきしづくかな信太(シダ)の杜(モリ)の千枝のしたつゆ」

ちえ【感】殘念・遺憾の感を發する時に生ずるこゑ。

ちえい 智永【名】〔人〕支那陳の僧。名は法極、俗姓は王。王羲之九世の孫。書を善くし、嘗て眞・草の千字文八百餘本を書き、浙東の諸寺に各一本を施しぬ。陳朝にて書名その右に出づるものなしといふ。

ちえう 治要【名】國を治むる道。世を治むる要術。「召して治要を問ふ」

ちえう 地妖【名】ちい(地異)に同じ。「天變・地妖」

ちええ 七【數】『七の字の宋音』ななつ。しち。〔拳(ケン)の語〕

ちえええす-と【感】烈しき感じをあらはす聲。〔書生の間に行はれし語〕

ちええん 鎖・鏈(英Chain)【助數】英國の距離の單位。ヤアドの二十二倍。陸地測量に用ふ。即ち我が國の十一間三寸八分四厘二毛に當る。

ちえき 地役【名】〔法〕一ぞくちえき(屬地地役)に同じ。二ちえきけん(地役權)の略。「置郵。

ちえき 置驛【名】しゅくば。しゅくつぎ。

ちえき 馳驛【名】はやうち(早打)に同じ。

ちえきけん 地役權【名】〔法〕『維 servitus prediorum』物權の一。ある土地の所有者が、その土地の便益のために、他人の所有に屬する土地を使用すること。地役。

ちえきけん-しや 地役權者【名】〔法〕地役權を有する者。「稱。〔古語〕

ちえ-ぐさ 千枝草【名】〔植〕まつ(松)の異稱。〔古語〕

ちえだ 千枝【名】ちえ(千枝)に同じ。玉葉「薄くこく千枝に咲ける藤波の盛りも久し萬代の春」「異稱。

ちえだ-ぐさ 千枝草【名】〔植〕まつ(松)の異稱。〔古語〕

ちえっく(英Cheque の訛)【名】こぎって(小切手)に同じ。

ちえっく-ばあふぉれえたあ(英Cheque porteur)【名】小切手・手形・受取證等の面紙に數字を打抜きて表はす器械。金額等を示す數字の改描を防止する効力あり。數字打抜器。「引。

ちえん 遲延【名】ながびくこと。延引。遲

ちえん-しや 遲延者【名】遲延せる人。

ちえん-りし 遲延利子【名】〔法〕えんたいりそく(延滯利息)に同じ。「同じ。

ちえん-りそく 遲延利息【名】〔法〕前條にちえりい(英Cherry)【名】〔植〕みざくら(實櫻)に同じ。

おえれきたい デエレキ體(英Dielectric substance)【名】〔理〕ぜつえんたい(絕緣體)に同じ。

おおさへ 地押【名】江戸時代に、田畑の上下の等級、石盛(コクモリ)等を、從前通りに存し、單に丈量をなして、前狀の適否を修正せしこと。その方法は檢地に同じく、隱田の告訴ありし時、地所紛亂實檢の要ある時等に施行せり。ぢづめ。

ちおち 血落【名】ちおろし(血下)に同じ。世間娘気質「誰とも定めがたき血落し」

おおち 地落【名】地面に近き地中に生じたる洞穴の上部の地層が、支へられずして、落下すること。

おおとしぞめ 地落染【名】上の地色と下の地色と、同一に染下すこと。

ちおん 知恩【名】(佛)三寶の恩徳を知覺すること。「知恩報徳」

ちおんじ 知恩寺【名】一山城國愛宕(オタギ)郡田中村にある淨土宗の寺。鎮西派四箇本山の一。法然上人の開基。元弘元年海内疫病流行の時、住職空圓坊勅を奉じ、禁延にて、一七日の間百萬遍の念佛を修し、疫病止む。勅して百萬遍の號を賜はり、勅願寺となる。俗稱、百萬遍。二京都上立賣(カミタチウリ)にある淨土宗の寺。比丘尼御所の一。知恩院の末寺にて、入江御所といへり。

ちおんじ 智恩寺【名】丹後國與謝(ヨサ)郡切戸に在る禪宗の寺。創建不詳。延喜四年智恩寺の號を賜ふといふ。天橋立の南方なる巖頭にありて、遙に成相寺と對す。俗稱、切戸文殊(モンジュ)。

ちおんいん 知恩院【名】京都市下京區林町に在る淨土宗鎮西派の總本山。華頂山大谷寺又は吉水院東山と號す。もと天台宗にして、延暦寺の真源堂舍を建立せしといふ。安元中法然上人この地にて寂す。四條天皇勅して、華頂山知恩院の號を賜ひ、勅願道場となす。

ちおんいんもんぜき 知恩院門跡【名】淨土宗の門跡。華頂宮といふ。後陽成天皇の第一子入道眞統親王を祖とす。明治維新後廢絶す。

ちおも 乳母【名】次條に同じ。「古語」紀「乳母、チオモ」

ちおや 乳親【名】うば(乳母)に同じ。

おおらま《英 Diorama》【名】大なる麻布に連續せる光景を描き、適當なる光線を送り、適度の距離を隔てたる暗室内より觀て、實物に接するが如き感想を起さしむるもの。

おおり 地織【名】その土地にて織出すこと、又その織物。

おおりうさん チオ硫酸(英 Thiosulphuric acid)【名】〔化〕チオ硫酸ナトリウムを水に溶かし、稀硫酸を加へて遊離せしめて得る一種の酸。

おおりうさんなとりうむ チオ硫酸ナトリウム(英 Sulphate of soda)【名】〔化〕亞硫酸ナトリウムの液溶に硫黄末を加へて熱すれば得る、無色透明の結晶物。銀鹽・鹽素・沃素等を溶解するの性あるを以て、寫眞の定着、又は鹽素を用ふる漂白劑使用後の鹽素消劑に供す。次亞硫酸なとりうむ。次亞硫酸曹達。はいぽ。灰棒。

ちおろし 血下【名】こおろし(子臨)に同じ。增鏡「御血おろしありて、それ故かくれさせたまへるなど、さざめく人もありけり」

ちか 地價【名】一地面の價。土地實貫の價。二(法)地租條令にいふ地價。即ち土地臺帳に登錄せる土地の價格。この價格は、永く地租起算の基となりて、政府に保存せらるる者なれば、土地の實價と異なり、時時變動すべきに非らず。法定地價。公定地價。ちかすあおきねんき(地價据置年期)參照。

地價修正【句】(法)地類・地目の變換又は開墾等のためにその土地の地價を修正すること。「照。

ちか 地下【名】地のした。**おけ**(地下)參

ちか 治河【名】河川の治水。

ちか 治下【名】その支配のもと。その政治のもと。おげ。「治下に立つ」

ちか 治家【名】せいか(齊家)に同じ。

ちか 近【貌】ちかきさま。後撰「時鳥來居る垣根はちかながら待ちどほにのみ聲の聞えぬ」一代男「鳴子はり、弓取出し、近の山陰に猪の限も無く荒れける。これを捕へて」「目」

ちか 近【接頭】ちかき意。「ちか頃」「ちか

ちか 【名】【動】わかさぎ(若鷺)の異稱。

おか 直【名】ちき(直)三の轉訛。

ちかい 地界【名】土地の境界。

ちかい 地階【名】家屋の最下なる層。

ちかい 知解【名】しること。さとること。

ちかい 智顗【名】〔人〕ちぎ(智顗)を見よ。

ちかい 持戒【名】〔佛〕佛の戒律を受持して違背せざること。太平記「如何なる持戒持律の僧と成らせ給ひて候共」

ちかいそ 【名】〔植〕褐色藻類に屬する海藻。體は葦狀葉狀・根狀の三部より成る。葦狀部は圓筒形にして長さ二寸乃至五寸。葉狀部は扁平にして長さ一尺五寸・幅三寸乃至七寸。形やや若布(ワカメ)に似たれども、中肋著しく厚くして、その横斷面は扁平なる四角形を成す。千島寒流帶に多し。稚きものは食用となる。えぞわかめ。

ちかいはらみつ 持戒波羅蜜【名】〔佛〕六波羅蜜の一。堅固に精進して、戒律をたもつこと。戒波羅蜜。

ちかいへう 地界標【名】土地の境界を明にするために設くる目標。「の異稱。

ちかいも ぢが芋【名】〔植〕がいも(蘿蔓)

ちかう 智巧【名】才智ありて、物事にたくみなること。「智巧を弄す」

ちかう 知行【名】しると、おこなふと。知識と行爲と。

「一論」を見よ。

知行合一【句】ちかうがふいつろん(知行合一論)【名】〔哲〕支那明の王陽明の唱へし說。先知後行を解ける朱子の說に對して、知ると行ふとは同一にして、知は行の主意、又は行の始にして、行は知の成れるもの、又、知りて行はざる者なく、知りて行はざれば未だ知らざるなりと說く。

ちかうご 知港事【名】一必要の場合に設置せられし提督府の職員。要港の事務を總攬するを掌りしもの。明治五年に設置、同九年に提督府と共に廢止す。二要港部の職員。司令官の命を承けて、所屬諸船を統轄し、要港の警衛を掌るもの。

ちかうごやく 知更雀【名】〔動〕こまどり(駒鳥)に同じ。

ちかうてう 知更鳥【名】〔動〕前條に同じ。

ちかう 近【名】〔動〕ちかづくこと。

ちかう 地香【名】織物の地の香色(カウイロ)なること。太平記「地香の直垂(ヒタレ)」

ちかうがふいつろん 知行合一論【名】〔哲〕支那明の王陽明の唱へし說。先知後行を解ける朱子の說に對して、知ると行ふとは同一にして、知は行の主意、又は行の始にして、行は知の成れるもの、又、知りて行はざる者なく、知りて行はざれば未だ知らざるなりと說く。

ちかうご 知港事【名】一必要の場合に設置せられし提督府の職員。要港の事務を總攬するを掌りしもの。明治五年に設置、同九年に提督府と共に廢止す。二要港部の職員。司令官の命を承けて、所屬諸船を統轄し、要港の警衛を掌るもの。

ちかうごやく 知更雀【名】〔動〕こまどり(駒鳥)に同じ。

ちかうてう 知更鳥【名】〔動〕前條に同じ。

ちかうひれう 遲効肥料【名】〔農〕その効力の比較的遲き肥料。主に元肥(モトゴエ)として用ひらる。(速効肥料に對して)

ちかおとり 近劣【名】遠見にはよくて、近寄りて見れば、劣りて見ゆること。(近優(カチマサ)に對して)〔古語〕源氏「ちかおとりしては思はずやあらん」

ちかかたしんわう 周賢親王【名】〔人〕後水尾天皇の第十三皇子。玲瓏宮といふ。薙髪して名を尊澄と改む。天台座主たり。元祿七年薨ず。年四十四。

ちかがつゑ 近餓【名】飲食後、間もなくまた飲食したくなること、又その人。酒飯論「大食上戸のちかがつゑ、昔も今もあらにくや」境界草「盛之「暑き日や嬉しく水にちかがつゑ」

ちかがる 近がる【動四自】近しとおもふ。

ぢがき 地書【名】漆器に金銀粉を蒔かんため、畫漆にて書くこと。

ちかきつかさ 近衛【名】このゑふ(近衛府)に同じ。〔古語〕榮華「后の、ちかきつかさのかみ藤原の仲忠と申したまふこゑ、いと高ういかめし」

ちかきまぼりのつかさ 近衛府【名】ちかきまもりのつかさ(近衛府)に同じ。〔古語〕續世繼「舞人は、ちかきまぼりのつかさ、雲の上人、青色のわきあけに、柳櫻の下襲(シタガサネ)、平やなぐひの水晶の笹、日の光に輝きあへり」

ちかきまもり 近衛【名】このゑ(近衛)に同じ。〔古語〕新千載「ここのへやちかきまもりのまとゐして名のるを聞けば夜は更けにけり」

ちかきまもりのつかさ 近衛府【名】このゑふ(近衛府)に同じ。〔古語〕朝野羣載「左右近衛府(ヒダリミギノコノヱノフ)(キマモリノツカサ)」

ちかく 知覺【名】一しりさとること。二〔哲〕『英 Perception』五官によりて、外界にある事物を認識する作用。感覺に比すれば、一層複雜なる作用にして、種種なる感覺の聯合を要す。故に現在に於ける外界の刺戟を受領すると同時に、過去の經驗を再現して、兩者を聯合せしむ。感官知覺。

ちかく 地核【名】〔地〕『英 Earth nucleus』地球の内部、即ち地殻に包まれたる分部。溶熱なる溶液の狀態にありと想像せらる。地心。

ちかく 地殻【名】〔地〕『英 Earth's crust』地球の外部の、固形なる部分。地球の外皮。これを構成する材料は、即ち岩石なり。ちこく。地皮。

ちかく 地角【名】㊀遠く離れたる土地。「天涯・地角」㊁みさき(岬)に同じ。

ちかく 近【名】近き處。轉遠くの親類より近くの他人」

ちがく 地學【名】**ちりがく**(地理學)に同じ。

ちかく 地格【名】地の格。土地の格式。

ちかく 痔核【名】〔醫〕**いぼぢ**(疣痔)に同じ。

ちかくきくわん 知覺機關【名】〔醫〕『獨 Perceptionsorgan』刺戟を感受すべき知覺神經末端、及びこれを傳達する神經纖維、及びこれを知覺する五官中樞部。「氣」

ちがくけ 血脚氣【名】產褥後に發する脚氣。

ちかくけい 知覺計【名】『獨 Asthesiometer』各種の知覺を計測する器械。

ちかくさいはう 知覺細胞【名】〔醫〕神經細胞の知覺を掌るもの。

ちかくし 乳隱【名】**ちがくれ**(乳隱)に同じ。

ちがくじ 知學事【名】明治元年に設置せし學校職員。學校の事務を總判せしもの。同二年廢止す。

ちかくじかん 知覺時間【名】〔哲〕『獨 Wahrnehmungszeit』外來の刺戟が五官器を通じて感受せられ、求心的に上り、大腦皮質中樞に到著し、その刺戟を知覺するに要する時間。

ちかくしんけい 知覺神經【名】〔醫〕**かんかくしんけい**(感覺神經)に同じ。

ちかくせいしん 知覺精神【名】物事を誤なく辨別し得る、意識の作用。辨識力。

ちかくてき-ちよくかくせつ 知覺的直覺說【名】〔哲〕『英 Perceptional intuitionism』直覺說の一。吾人は、特殊の動作もしくは感情につき、その道德的價値を直覺することを得となすもの。これに特殊なる箇箇の行爲の道德的性質を直覺するを得となすものと、特殊なる行爲相互の關係によりて、その價値を直覺するを得となすものとあり。

ちかくはんだん 知覺判斷【名】〔哲〕『英 Perceptive judgment』範疇(カテゴリー)に包攝せられずして、主觀的に妥當(カテゴリー)なる判斷。實位のみ概念にして、主位は知覺なる、形式最も單純なる判斷にして、「これは木なり」などの如き、その最も簡單なるものなり。

ちがくれ 乳隱【名】『その下に乳が隱るる物の義』食事の時などに、食ひこぼして、著衣の汚るるを防ぐために、頸に掛けて、胸部をおほふ衣なるべし。ちがくし。慶長本節用集「乳隱、チガクレ」

ちかくわそう 地下鑛層【名】『英 Interbedded deposite』他の岩層に覆はれて地下に在る鑛層(地上鑛層に對して)

ちかげ 千蔭【名】〔人〕**たちばなちかげ**(橘千蔭)を見よ。

ちかけい 地下莖【名】〔植〕『英 Subterranean stem』地下に埋存せる莖。地中にあるより、往往根と誤認せらるることあれども、葉と芽とを有し、又葉腋より出づること枝と同じきによりて、識別するを得。根莖・塊莖・球莖・鱗莖等あり。(地上莖に對して)

ちかけえぶる 地下ケエブル【名】〔理〕『英 Underground cable』地下に埋設せるケエブル。

ちかけつじつ 地下結實【名】〔植〕『獨 Geocarpie』植物の實の、地下に於て結ぶもの。南京豆など、これなり。

ちかげりう 千蔭流【名】和樣書道の一流。加藤千蔭の筆致を尊ふるもの。

ちかごと 誓言【名】ちかひを立てていふ詞。ちかひごと。せいごん。せいし。〔古語〕源氏「佛の前にて、ちかごとも立て侍らん」

ちかごとぶみ 誓言文【名】ちかごとを記したる文。せいし。〔古語〕馬内侍集「左大將ちかごとぶみをおこせたまうて」

ちかこ-ないしんわう 親子内親王【名】〔人〕**かずのみや**(和宮)に同じ。

ちかこん 地下根【名】〔植〕『英 Subterranean root』地中に生ずる根の總稱、即ち通常の根。(寄生根などに對して)

おか-ごやし 直肥【名】田畠の作物などの上に、直接に大小便をすること。

ちか-ごろ 近頃【副】㊀近き中に。このごろに。近來。㊁『この頃には、稀なる程の義なるべし』甚だ。すこぶる。七一職人歌合「これは、ちかごろの玉かな。火をも水をも取りつべし。念珠の粒にあたら物かな」出世景清「ちかごろ龐忽千萬」㊂この頃のうちにて最も。椿庵「泣いてもらちやあ近頃氣の毒だ」太功記「諸國修行のひとり旅、ちかごろ申し兼ねたれど、お宿の報謝にあづかりたし」

ちかごろ-かはらのたてひき 近頃河原達引【名】淨瑠璃の一。お俊・傳兵衛のことを作れるもの。お俊の實家に潛み居る所へ、四條河原にて、惡侍官兵衛を殺して、お尋者となり居る傳兵衛忍びて尋ね來り、お俊の母及び猿廻しの兄二人を落しやる堀川の段最も名なり。原作者詳ならず。天明二年豐竹八重太夫江戸へ下りて語りしを、中村重助補綴して、上・中・下三段に作る。

ちがさき 茅崎【名】〔地〕相模國高座(カウザ)郡にある町。藤澤町の西南二里。相模灣に臨み、避寒地及び療養地たるに適す。鐵道東海道線の一驛。雅稱、南湖(ナンコ)。

ちか-さはい 直差配【名】貸家の持主が、差配を兼ねてあること。

ちかし 近し・邇し【形一】㊀距離又は時間のへだたり少なし。彼此の間甚だ隔らず。(遠しに對して) 源氏「ちかきところには、播磨のあかしの浦こそことにはべれ」盛衰記「近くは近來を思ふ」㊁主人の身邊に侍す。竹取「近く使はるる人人」㊂疎遠ならず。親し。(遠しに對して) 萬葉「山川を中にへなりて遠くとも心をちかくおもほせわぎも」㊃似たり。類似せり。㊄今少しにてその程度に達せんとす。「庶幾し」「誤無きに庶幾し」「成るに庶幾し」㊅短視なり。ちかめなり。

ちかし 近い仲にも垣を爲(セ)よ【句】「親しき仲には垣を爲よ」に同じ。〔諺語〕

ちかし 邇きに在りて、遠きに求む【句】「道は邇きに在りて、諸(ソ)を遠きに求む」の略』卑近なる事物を、高遠のものとして求む。〔諺語〕

ちかし 近き守(カミ)【句】近くにありて守護すること。(「遠き守」に對して) 祝詞「皇孫(スメ)の命(ミコト)の近き守の神と貢ぎおきて」

ちかし 近くて見えぬは睫(マツゲ)【句】『韓非子の喩老篇に「智如レ目也、能見二百歩之外一而不レ能三自見二其睫一」とあり』わが身の上の事は知るに難し。〔諺語〕

ちかし 近く遠く【句】人人の交際上、親しきうちにおのづから隔ありて、馴馴しきに過ぎぬをよしとす。竹齋物語「ただ、人は、近く遠く話したるがよかるべし。さても今思ひあたりて候ふ。世の中のはやりうたに、人と契らばうすく契りて末まで遂げよ、もみぢ葉を見よ、薄いが散るか、濃きぞまづ散るもので候ふと有り」

ちかし 親し【形二】**ちかし**(近し)㊃に同じ。親しき仲に垣を結(ユ)へ【句】「親(シタ)しき仲には垣を爲よ」に同じ。〔諺語〕

ちかし 親しき中に禮儀あり【句】前條に同じ。〔諺語〕

ちかじ 知家事【名】**ちけじ**(知家事)を見よ。

ちかし 地貸【名】地面を貸して、地代を收むること、又それを業とする人。

ちかし 治河使【名】河川の治水を府縣に布告することを管掌せし役所。明治元年會計官の下に設置せられ、同二年四月民部官の所屬となり、同七月廢止せられたり。

ちかしつ 地下室【名】地下に設けたる室。

ちがしんじやそくしんじやうぶつ 知我心者卽身成佛【句】〔佛〕『聖不動經』勝軍不動明王四十八使祕密成就儀軌等に出づ』不動明王の四弘誓願(クワングワンゼイ)の一。明王の心を知りて信ずる行者は、速かに佛果に達すること。謚曲(安宅)「知我身者卽身成佛、卽身成佛と明王の繋縛にかけて」

ちか-がしら 地頭【名】㊀小鼓の打方の一。㊁**ぢうたひ**(地謠)を見よ。

ちかすゐ 地下水【名】〔地〕『英 Ground water』地殻に存在する水。雨水等の一部の滲入せるものなり。地水。

ちか-すゑおき-ねんき 地價据置年期【名】〔法〕土地所有者の出願により、三十年以内の期間、政府にて從來の地價を修正せずに据ゑおくことを許すその期間。例へば耕地の區劃・形狀などを變更し、又は地目を變換するに、開墾に等しき勞費を要したるが如き場合に、地價變更せらるるに於ては、土地所有者は意外の損害を招き、或はかかる行爲を爲さざるにも至らば、國家經濟上よみすべきに非ざるが故に、その出願ある時は、これを許して、上述の如くす。ちか(地價)㈡及び「地價修正」參照。

ぢ-がせ 地枷【名】水底にささず、岸などに突挿して、船を繋ぐに用ふる杙。

ちか-せん 地下線【名】『英Underground line』地下ケエブルを用ひて、電線を地下に埋沒せるもの。(架空線に對して)

ちか-せん 地下戰【名】〔兵〕かうだうせん(坑道戰)に同じ。

ちか-そくりやう 地下測量【名】『英Underground surveying』地下即ち坑内に於ける測量。これに羅盤測量・懸維盤測量・經緯儀測量の三法あり。

ぢ-かた 地方【名】㈠國國の在郷。ゐなか。地方(チハウ)。(町方に對して)㈡室町幕府の制度にて、京中の家屋・宅地及び訴訟の事などを管掌せし所。㈢江戸幕府直轄地の民政事務、即ち代官所にて取扱ふ事件。「德川時代の語」㈣りくち(陸地)を云ふ。「航海者の語」㈤舞につれて、三味線を彈きて謡ふ人。

ぢかた-かいかふ 地方開闔【名】㈠室町幕府の職制の一。地方の事務を擔任せしもの。㈡ぢかたとうにん(地方頭人)に同じ。

ちかたか-しんわう 周翰親王【名】〔人〕典仁(スケ)親王の御子。剃髮して眞仁といひ、天台座主となり、文化二年薨ず。年三十八。

ぢかた-がしら 地方頭【名】ぢかたとうにん(地方頭人)に同じ。

ぢかた-さんちやう 地方三帳【名】取箇郷帳(トリカゴウチャウ)・年貢可レ納割附及び年貢米金皆濟日錄の總稱。

ぢかた-とうにん 地方頭人【名】室町幕府の職制の一。京都洛外の第宅・土地・道路・店舖等に關する事務を掌りしもの。その配下に寄人あり。地奉行(ヂブギヤウ)。(禪律方頭人・神宮頭人に對して)

ぢかた-どり 地方取【名】知行所にて扶持を取ること、又その人。

ち-がたな 血刀【名】血の附きたる刀。血刀(ケツタウ)。

ぢか-だのみ 直賴【名】直接に依賴すること。ぢきだのみ。

ぢかた-ぶぎやう 地方奉行【名】江戸幕府の職制の一。慶長・寛永の頃、直轄地を支配せしめしもの。掌る所、後世の郡代に同じ。

ぢか-だん 直談【名】次條の略。「に同じ。

ぢか-だんぱん 直談判【名】ぢきだん(直談)に同じ。

ぢ-がため 地固【名】㈠ぢぎやう(地形)に同じ。㈡物事の基礎を堅くすること。㈢杜杭などを、地上の孔に埋めたる時、その周圍を搗き固むるに用ふる具。銑鐵にて、扁平なる球形に鑄造したる物に、樫木製の柄を取附けたるもの。

ぢかた-よりうど 地方寄人【名】室町幕府の職制の一。地方頭人に屬して、地方の事務を執りしもの。

ちか-ぢか 近近【貌】きはめて近きさま。「近近(キンキン)」

ちが-ちが【名】『次條の語を轉用せるもの』ちんちんもがもがに同じ。

ちが-ちが【貌】ちんばの者の歩むさま。艶狩劍本地「あとからちがちが跛馬」

ちか-ぢかし 近近し【副】親し。なかよし。むつまし。

ちか-つ-あすか 近飛鳥【名】〔地〕あすか(飛鳥)㈡に同じ。

ちかつあすか-の-みや 近飛鳥宮【名】次條に同じ。

ちかつあすか-の-やつり-の-みや 近飛鳥八釣宮【名】(とほつあすかのみや(遠飛鳥宮)を見よ)あすかのやつりのみや(飛鳥八釣宮)に同じ。

ちか-づき 近附【名】㈠交りて知りあへること、又その人。しりあひ。知己。相識。知音。曾我虎が磨「見世女郎に近付は持ち申さず」㈡ちいん(知音)㈣を云ふ。「薩摩國の方言」㈢ちいんにようばう(知音女房)を云ふ。「九州・中國の方言」

ちか-づく 近附く【動四自】㈠ちかよる(近寄る)に同じ。萬葉「玉藻刈るみぬめを過ぎて夏草のぬじまがさきに舟ちかづきぬ」㈡なれしたしむ。狎る。昵近す。

近づく神に罰あたる【句】物事に關係すれば、迷惑を生ず。「諺語」

ちか-づく 近附く【動下二他】㈠ちかよす(近寄す)に同じ。㈡よせ親しむこと。

ぢか-づけ 直附【名】㈠直接に、手を附くること。㈡ぢかに寄せ附くること。「車を玄關にぢかづけにす」㈢引手茶屋の手を經ず、直ちに遊女屋にあがること。

ちか-つて 誓て【副】『神佛に誓を立てても』よしとの義』まちがひなく。必ず。きつと。

ちか-てつだう 地下鐵道【名】『英Underground railway』隧道を掘開して、その中に設けたる軌道を走る鐵道。全く隧道式なるものと、道路を開鑿して軌道を造り、石・煉瓦・鐵などにて、基礎及び上屋(ヤネ)を作りて、路面を原形に復せしめたるものとあり。(路面鐵道に對して)

ちか-どなり 近隣【名】へだたり少なき隣家。きんりん。「古語」拾遺「ちかどなりなる所に、方(カタ)たがへにわたりて」

ち-かなもの 乳金物【名】門の扉の釘隱(クギカクシ)のために打附くる、乳首の如き形の化粧金物。

ぢか-に 直に【副】直接に。ぢきに。ただちに。

ぢ-がね 地金【名】㈠金物に作るべき下地の金。今國姓爺「名劍に打つべき程の地金なくて」㈡鍍金の臺とする金屬。㈢少しもたくまぬ心。ほんね。本心。本性。心中刃は氷の朔日「戀は曲物みな人の、地金をへらす燒釘は、たたき直いて意見して」

地金の錆【句】もとよりの惡癖。

地金を現す【句】次條に同じ。

地金を出す【句】よそほひたること破れて、眞相をあらはす。馬脚をあらはす。「地金を出してしやべる」

ぢ-がね 地鐵【名】『ぢがね(地金)の意なれども、刀劍にては、特に鐵の字を用ふ』刀劍の身の、刃以外の部分。

ちか-の-うら 知訶浦・千賀浦【名】〔地〕肥前國知訶島の海濱。一說に、筑前國に在りて、福岡城の邊ならんと。後拾遺「ちかのうらに波よせかくるここちしてひるまなくてもくらしつるかな」

ちが-の-うら 千賀浦【名】〔地〕しほがま(鹽竈)㈠を見よ。

ちか-の-しま 知訶島・値嘉島・血鹿島・千賀島【名】〔地〕肥前國五島列島の古稱。重之集「名をたのみちかの島べを漕來ればけふも船路に暮れてゐしかな」

ちか-の-やそしま 値賀八十島【名】〔地〕今の肥前國南北松浦郡の海上にある平戸島・五島列島及びその他の島嶼の總稱。

ぢか-ばき 直穿【名】下沓・靴下などを穿かずに、ぢかにはくこと、又その物。

ちかひ 誓【名】㈠神又は佛に對して、或事を反くまじと約束すること。ぐわん。ぐわんがけ。源氏「ふかきちかひをやぶりて」㈡將來にかけて、或事を履行すべしと約すること。やくそく。誓約。盟約。「盟」㈢〔佛〕せいぐわん(誓願)㈡に同じ。

誓の網【句】「弘誓(グゼ)の網」に同じ。天の網島「すぐに成佛得脱の誓の網島心中と、目ごとに、涙をかけにけり」

誓の色【句】衆生を濟度せんとする佛の誓願を色にたとへていふ。

誓の海【句】「弘誓(グゼ)の海」に同じ。新千載「世にこゆるちかひの海のみをつくし立つるしるしはいつもくちせじ」

誓の海山(ウミヤマ)【句】衆生を濟度せんとする佛の誓願の廣大無邊なるを海山に譬へていふ。「へていふ。

誓の春【句】佛の誓願の驗ありたるを春に譬へていふ。

誓の花【句】神佛のちかひを花にたとへていふ。

誓の船【句】「弘誓(グゼ)の船」に同じ。玉葉「世にこゆるちかひの船を賴むかな苦しき海に身は沈めども」

誓の文(フミ)【句】ちかひぶみ(誓文)に同じ。

誓を立つ【句】誓ひをなす。神佛にちかふ。

ちか-び 近火【名】㈠近き處にある炭火、又は燈火。㈡近きところの火事。

近火で手をあぶる【句】目の前の小利を追ふ譬。〔諺語〕

ちがひ 違【名】㊀ちがふこと。たがふこと。不同。差異。㊁行きちがふこと。㊂摺違(スレチガヒ)に懐中物などを抜き取る陶児。

ちかび 直火【名】物を隔てずに、炭火にて炙ること。

ちがひかひあはせ 地貝【名】かひあはせ(貝合)を見よ。

ちがひあふぎ 違扇【名】紋所の一。閉ぢたる扇を二本交叉せるもの。

ちがひいてふ 違銀杏【名】紋所の一。二つの銀杏の葉が、上下に互違になれるもの。

ちがひいね 違稲【名】紋所の一。二束の稲を交叉せるもの。

ちがひうちは 違團扇【名】紋所の一。二本の團扇を、柄の處にて交叉せるもの。

ちがひおもだか 違澤瀉【名】紋所の一。二つの澤瀉の葉の相交叉せるもの。

ちがひかぎ 違鍵【名】紋所の一。二つ鍵を左右より交叉せるもの。

ちがひかしは 違柏【名】紋所の一。二つの柏の葉の相交叉せるもの。

ちがひかひ 違櫂【名】紋所の一。二本の櫂を交叉せるもの。

ちがひきね 違杵【名】紋所の一。二箇の杵を打違にしたるもの。

ちがひくぎぬき 違釘貫【名】紋所の一。二箇の釘貫を二箇交叉せるもの。

ちがひくぎぬき 違釘抜【名】紋所の一。釘抜を二箇左右より交叉せるもの。

ちかひごと 誓言【名】ちかひていふことば。せいごん。ちかごと。誓詞。

ちがひそで 違袖【名】両袖をうちちがへて結ぶこと。盛衰記「讃岐阿闍梨覺尊といふ者長絹の衣に違袖して」

ちがひだいこん 違大根【名】紋所の一。二本の大根を交叉せるもの。

ちがひたか 交鷹【名】紋所の一。鷹の羽を左右より矢筈(ハズ)に交叉せるもの。

ちかひだて 誓立【名】誓を立つること。誓言をなすこと。せんもんだて。

ちがひだな 違棚【名】四十八棚の一。二つの幅狭き棚板ありて、左右に段ちがひに取附け、その上下の板の間には、束(ツカ)を立てたるもの。ちがへだな。ふでがへし(筆返)おぶくろ(地袋)参照。

三重(サンヂウ)の違棚【句】さんぢゆうちがひだな(三重違棚)に同じ。

ちがひづけ 違附【名】〔文〕連句の脇句に、前句と同時の事を反對に附くること。例へば、閑かなる事に、忙しき態を附くる類。

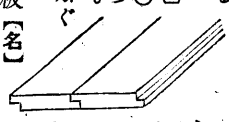
ちがひつづみどう 違鼓胴【名】紋所の一。二箇の鼓胴を左右より交叉せるもの。

ちがひづの 違角【名】紋所の一。二箇の角を交叉せるもの。

ちがひどう 違籐【名】せんだんどう(千段籐)に同じ。

ちがひのし 違熨斗【名】紋所の一。二條の熨斗の互に交叉したるもの。

ちがひはぎ 違矧【名】〔建〕板の矧方の一。板の側(ソバ)を、その厚さの半分程づつ削り去りて接合するもの。即ち合決(アヒザ)にして矧ぐこと。



(ぎはひがち)

ちがひはごいた 違羽子板【名】紋所の一。二箇の羽子板の交叉せるもの。

ちがひはばうき 違羽帚【名】紋所の一。二つの羽帚の交叉せるもの。

ちがひひらぎ 違柊【名】紋所の一。二枝の柊の葉の相交叉せるもの。

ちかひぶみ 誓文【名】ちかひを書きたる文。せんもん。

ちがひめ 違目【名】㊀ちがひたるところ。異なる部分。㊁筋ちがひに組みたるところ。翠花「犬ふせぎは、みな金の漆のやうに塗りて、ちがひめごとに螺鈿の花がたをすゑて」

ちがひめうが 違若荷【名】紋所の一。二つの若荷の交叉せるもの。

ちがひや 違矢【名】紋所の一。二つの矢羽根の交叉せるもの。

ちがひやはず 違矢筈【名】紋所の一。二つの矢筈の交叉せるもの。

ちがひゆみ 違弓【名】紋所の一。二箇の弓を左右より交叉せるもの。

ちがひりんだう 違龍膽【名】紋所の一。二箇のりんだうを交叉せるもの。

ちがひねづつ 違井筒【名】紋所の一。隅立井筒を二箇組合はせたるもの。

(うだんりひがち)

ちかふ 誓ふ【動四自】㊀神又は佛に對して、或事を反くまじと約束す。拾遺「何せん心に命をかけてちかひけん生かばやと思ふをりもありけり」㊁將來にかけて、或事を履行すべしと約束す。〔盟ふ〕㊂神佛が國家鎮護・衆生濟度等の誓願をなす。

ちがふ 違ふ【動四自】㊀合はず。一致せず。相違す。ことなる。別なり。たがふ。㊁いり交はる。くひちがふ。入りちがふ。はづる。たがふ。字治「僧正、小門よりかへるおとしければ、ちがひて、大門へいでて」㊂そむく。從はず。たがふ。

ちがふ 違ふ【動下二他】㊀ちがはしむ。たがはしむ。㊁夢ちがへをなす。〔古語〕鯖蛉「さもこそはちがふる夢はかたからめ逢はでほどふる身さへ憂きかな」㊂入りまじらす。互に行きあはぬやうにす。續古今「鶺鴒のちがふる橋の間遠にて隔つる中に霜やおくらん」

ちかふ-らくは 誓ふらくは【副】「誓ふといふ語、四段活用なれば、「願はくは」などの例にて、「誓はくは」といふべきを、「恐らくは」「言ひけらく」などの「らく」と混じたるもの』ちかふには。〔古語〕撰集抄「ちかふらくは、身はたとひ那落の底に沈むとも」

ちがへ 違【名】㊀ちがふこと。㊁鹿の、獵人に遭ひたる時、前足をやりちがへ突立ちて、獵人の方を向き見ること。かくすれば、いかによく狙ひても射はづすといふ。袋草子「吉備大臣夢違誦文歌。あらちをのかる矢のさきに立つ鹿もちがへをすればちがふとぞ聞く」

ちがへし-のかみ 道反神【名】八衢彦(ヤチマタ)八衢姫の二神をいふ。さへのかみ。

ちがへし-のたま 道反玉【名】十種(トクサ)の神寶(カンダカラ)の一。「同じ。

ちがへ-だな 違棚【名】ちがひだな(違棚)に同じ。

ちがへ-ものみぐるま 違物見車【名】あじろぐるま(網代車)に同じ。

ちがへ-やりど 違遣戸【名】二つの溝には めて、入りちがはせて開閉する遣戸。新六「今宵さへことしげしとてあふことをちがへやりどの立てるからかみ」

ぢ-がほ 地顔【名】化粧をなさぬ顔。生地のままの顔。世間娘氣質「ぢがほなど見て、あんな女を欲しやと思ふも」天智天皇「涙に少しおもはれし地顔はいとど美しや」

ちかぼし 近星【名】太陰に近く出づる星。「ちかぼしが出る」

ちかぼとり 近傍【名】ちかま(近間)に同じ。

ちかぼれ 近惚【名】次條を見よ。

近惚の早厭(ハヤ)【句】愛することも早き代りに、厭くことも早きこと。〔諺語〕

ちかま 近間【名】近きところ。ちかぼとり。ちかまはり。近所。近邊。

ちかまさり 近優【名】遠くはなれ居て見るより、近寄りて見ればまさること。(近劣に對して)〔古語〕源氏「形よりはじめて、多くちかまさりしたりとおぼさるれば」

ちかまさる 近優る【動四自】近まさりす。〔古語〕桑門「九の君に、この花は近まさりぬべくとて奉れたまふ」

ちまかつ 近松【名】〔人〕

ちかまつもんざゑもん (近松門左衛門)の略。

ちかまつ-き 近松忌【名】近松門左衛門のために修する忌。十一月二十二日。巢林子忌。

ちかまつ-とうなん 近松東南【名】〔人〕淨瑠璃作者。通稱は伊助、老後、綾子播磨と改む。大阪の人。明和・安永の頃豊竹・江兩座のために淨瑠璃を作り、又近松の淨瑠璃を端唄(ハウタ)に改作せしもの多し。近松播磨。

ちかまつ-とくざう 近松德三【名】〔人〕淨瑠璃作者。通稱は大枡屋勝助。俳名は雅亮。司馬芝叟、又、芝屋德叟と號す。大阪の人。

近松半二に就きて、狂言作者となる。文化七年歿す。年五十七。

ちかまつ-はんじ 近松半二【名】〔人〕浄瑠璃作者。穂積以貫の子。竹田出雲に就き、竹本座の立作者となる。本朝二十四孝・妹背山婦女庭訓等、その作凡六十種あり。天明三年歿す。年九十九。

ちかまつ-はりま 近松播磨【名】〔人〕ちかまつ-さうなん(近松東南)に同じ。

ちかまつ-もの 近松物【名】近松門左衛門の作りたる浄瑠璃。

ちかまつ-もんざゑもん 近松門左衛門【名】〔人〕浄瑠璃作者。本姓は杉森、名は信盛、通稱は平馬、巣林子・平安堂又、不移山人と號す。長門國萩の人。或は越前國の人ともいふ。初めは京都に在りて、都萬太夫座の狂言作者となり、次いで井上播磨掾(カミノジョウ)のために浄瑠璃を作り、後、竹本義太夫のために、多くの新作をなし、元祿中大阪の竹本座に入る。著す戯曲百數十種に上り、傑作多し。享保九年歿す。年七十二。

(んもゑざんもつまかち)

ちかまつ-ゆきしげ 近松行重【名】〔人〕赤穂四十七士の一人。通稱は勘六。國難起るに及び、森清介、又、田口三介と變名し、元祿十六年死を賜はる。年三十四。「じ。」

ちかまはり 近廻【名】ちかま(近間)に同ほど見に對して)

ちかみ 近見【名】近寄りて見ること。(と

ちがみ 地髪【名】生れながらのままの頭髪。(いれ髪に對して)一代女「かもじも幾つか落ちて、ちがみは十筋右衛門と、うらめしさうに」夕霧阿波鳴渡「かもじ入れずの地髪ふさふさ」

ちがみ 地紙【名】■扇に貼るため、その形に切りたる紙。■金銀などの箔を貼附くべき下地の紙。雁皮製鳥ノ子紙を最良とし、古來近江國の産最も著はる。はくやがみ。■その土地に産する紙。■ちがみがた(地紙形)の略。■紋所の一。地紙形を用ひて作れるもの。かさね地紙・三蓋地紙など數種あり。

ちがみうり 地紙賣【名】昔、江戸にて、夏の頃、扇の地紙を賣りあるきし人。江戸生艶氣樺燒「何ぞ浮氣(カザ)な商賣をして見よふと、いろいろ考へたが、色男のする商賣は地紙賣だらうと、まだ夏も來ぬに、地紙賣と出かけ」後は言物語・今無くなりしもの、「ちがみうり」柳樽「地紙賣目につくまでは指をなめ」

ちがみ-がた 地紙形【名】扇の地紙の形をなせるもの。ちがみ。扇形。

ちがみかまぼこ 地紙薄鉾【名】薄鉾を扇子形に截りかさねたるもの。

ちか-みち 近路【名】■道程の更に近きみち。ぬけみち。直路。捷徑。(とは路・まはり路に對して)■速成の手段。てぢか。浮世風呂「凡夫においては、金銀を信心し奉るが第一に近道さ」

近路は遠路(トホ)【句】「急がば廻(マハ)れ」に同じ。〔諺語〕

ちがみなり 地雷【名】地に鳴響く雷。又地下を掘下げて築造したる室。

ちか-むろ 地下室【名】麹を製するため、地

ちかん 痴漢・癡漢【名】ばかもの。あはう。のろま。まぬけ。

ちがん 智眼【名】敏捷なる眼力。畑眼・新可笑記「非を理に作りなせばとて、素行の智眼にあらはれざることあるべきか」

ちか-め 近眼【名】きんがん(近眼)に同じ。

ちか-もの 近物【名】〔商〕きおかもの(期近物)の略。

ちがや 茅萱・白茅・茅針【名】〔植〕禾本(カホ)科に屬する多年生の草。山野・路傍に叢生して、高さ三四尺に達し、春、葉中に花を包むさま、薄の穂に似、これを茅花(ツバ)といひ、夏長き穂を出し、白き絮(ワタ)を著く。穂よりは火口(ホクチ)を作り、又蓙と葉とは屋根を葺くに用ふ。しらはぐさ。ち。

ちか-やか 近やか【貌】近きさま。〔古語〕源氏「ちかやかに臥したまへば」

ちかよし-しんわう 周慶親王【名】〔人〕靈元天皇の第五皇子。六の宮と稱す。後、薙髪して、名を堯延と改む。三たび天台座主となる。享保三年薨ず。年四十三。

ちか-よす 近寄す【動下二他】近寄らしむ。傍に來らしむ。

ちか-より 近寄【名】ちかよること。

ちかより-しゆう 近寄衆【名】きんじゆ(近習)に同じ。

ちか-よる 近寄る【動四自】距離又は時間のへだたりが近くなる。傍に寄る。近くに到る。ちかづく。接近す。せまる。

ちから 力【名】■動物の筋肉に備はりて、自ら動き、又は他の物を動かし得る作用。■〔理〕『英Force』靜止せる物體を運動せしめ、運動する物體を靜止せしめ、又は方向・速力を變ずべき原因となるもの。即ち壓力・重力・引力・斥力など。りきがく(力學)參照。■公用に役する工夫。〔古語〕紀「功夫、ヒトチカラ」■ほねをり。勞力。「力を盡す」■はたらき。能力。實力。力量。■たよりて、助けとするもの。たのみ。たそく。たより。藤原敦「役には立たずと、力にもやと」■しるし。ききめ。効能。効力。源氏「多く立てつる願のちからなるべし」■靴の後部、踵の上に當る所の表裏の革・ヅックなどの間に插みて、その部を硬直ならしむる心(シン)。

力あり【句】しっかりとしてあり。こたへあり。檀城反魂香「辛いぞういぞといふ中にも、男をそばへ引きつけては、憂きを凌ぐも力がある」

力入る【句】骨折る。心勞す。**ちからいり**(力入)參照。源氏「あひたたんほどの心づかひは、なほ力いるべかめり」

力及ばず【句】次條に同じ。

力無し【句】止むを得ず。せんかたなし。心中宵庚申「門開かねば力なし」

力に爲(ナ)る【句】助とするに足る。たのみになる。

力の合成【句】〔理〕『英Composition of forces』數力の合力を求むること。力の組合(クミアハセ)。**力の中斜法**參照。

力の組合(クミアハセ)【句】〔理〕前條に同じ。

力の中斜法【句】〔理〕『英Parallelogram of force』平行四邊形によりて、合力を求むる法。例へば、今、一點Aに、AB・ACなる二力作用する時、その合力を求むるには、Bを過り、ACに平行なる直線BDを引き、又Cを過り、ABに平行なる直線CDを引き、その交點をDとすれば、平行四邊形ABCDを得、AとDとを結べば、ADはその對角線にして、二力AB・ACの合力の大きさ及び方向を表はす。

力の釣合(アヒ)【句】〔理〕『英Equilibrium of forces』二つ又は二つ以上の力が、物體に作用するも、その物體が運動を起さざる時、これらの力の相互の間の狀態。この場合のこれらの合力は零となる。二つの力の釣合ふためには、その力の大きさ相等しくて、その方向全く正反對なるを要し、三つの力の釣合ふためには、一力と殘りの二力の合力とが、その大きさ相等しく、その方向全く反對なるを要し、又、一般に數力の釣合ふためには、その中の任意の一力と殘餘の力の合力とが、大きさ相等しくして、方向の正反對なるを要す。

力の能率【句】〔理〕『英Moment of force』力が物體を或一點のまはりに廻轉せしむる效果をあらはす量、即ち物體に作用する力と或一點よりこの力の作用線に至る距離との相乘積。

力の分解【句】〔理〕『英Resolution of force』一の力を數多の力に分けて考ふること。その方法は中斜法の原理に據る。

力の平行四邊形【句】〔理〕「力の中斜法」に同じ。

力山を抜き、氣は世を蓋(オ)ふ【句】『史記の項羽記に「於是王乃悲歌忼慨、自爲レ詩曰、力抜山氣蓋レ世、時不レ利兮騅不レ逝、騅不レ逝兮可レ奈何、虞兮虞兮奈二若何一」とあるに本づく』力ありて、壯大なる氣象あり。

力を協(カナ)す【句】共同して、事をなす。たすけあひて、事をなす。

力を入る【句】■言葉・筋肉などを、しかと力あるやうにす。力を籠(コ)む。力瘤を入れる。■ひいきす。ひきたつ。せわ

をやく。後援す。肩を入る。力瘤を入る。力を賣る【句】勞働して生活す。力を落す【句】氣力を失ふ。がっかりとす。失望す。落膽す。**ちからおとし**(力落)參照。正統記「平氏、力を落し、主上を勸め申して、西海に沒落す」力を假(か)す【句】たすく。助勢す。力を籠(こ)む【句】「力を入る」(一)に同じ。力を立つ【句】力を入れること。他の力【句】〔佛〕**たりき**(他力)に同じ。謠曲「土車」「諸人のあはれみ、他の力洩さじものを、彌陀ぼとけの御陰も普く」**ちから** 稅【名】『民の力によりて得る物の義』租・庸・調などの總稱。ぜい。〔古語〕**ちから** 力【助數】弓を作る時、削り落したる木・竹の屑の量を、一握づつ數ふる時にいふ語。その量多ければ、弓の力弱くなるをもって、その量に從ひて、「力弱くなる」「二力弱くなる」などいふ。〔弓工の語〕**ぢ-から** 地唐【名】『**ちからうす**(地唐臼)の略』**からうす**(唐臼)に同じ。**ちから-あし** 力足【名】(一)力を入れたる足。假名手本忠臣藏「家來繩けと馬煙、追立て打立て力足、踏立ててこそ駈り行く」(二)しこ(四股)に同じ。力足を踏む【句】「しこを踏む」に同じ。**ちから-あはせ** 力合【名】**ちからくらべ**(力競)に同じ。〔古語〕「山家」「ながき月のちからあはせに勝ちにけるわがかたをかを强くたのみて」**ちから-いくさ** 力軍【名】力づくにて鬪ふこと。腕力の爭鬪。**ちから-いし** 力石【名】腕力を試みんとて擧(あ)げなどする石。本朝二十四孝「その石は、明神樣の力石とて、その石に腰を掛くれば、そのえらい石を擧げねばならぬ」**ちから-いた** 力板【名】〔建〕襖(マス)の四方に張附けたる板。**ちから-いと** 力絲【名】生絲(キイト)の總(ソ)に施すもの。經の亂れを防ぐ爲に、木綿雙子晒絲四十二番平の絲を用ふ。**ちから-いり** 力入【名】『「力入る」を見よ』力を入るること。盡力。

ぢがらうす 地唐臼【名】**からうす**(唐臼)を云ふ。〔江戸近在の方言〕**ちから-えだ** 力枝【名】樹木の主なる枝。**ちから-おこし** 力起【名】勵まして、元氣を出さしむること。ちからぞへ。ひいき。**ちから-おとし** 力落【名】『「力を落す」を見よ』氣力を失ふこと。がっかりとすること。失望。落膽。雌蜂雄蜂「仲成終に病死とや、後家娘の力落、さこそさこそ」**ちから-おとり** 力劣【名】力の劣れること。(力優(マサ)るに對して)**ちから-おび** 力帶【名】身體に力を入るるために、强く締むる帶。身仕度のために、固くしむる帶。稚狩獵本地「雨戸の楓、懸鎰を「じ。」して廻らす力帶」**ちから-がね** 力金【名】**しめがね**(締金)に同じ。**ちから-がは** 力革【名】(一)かこがしらを、鞍のみづをに繋ぐ革。しめがは。〔逆輪〕(二)**みづを**(鐙靼)に同じ。**ちから-がみ** 力紙【名】(一)**けしやうがみ**(化粧紙)に同じ。靈蹟記「相撲取(スマヒ)たのみや掛くる力紙」(二)佛寺の山門に接置してある仁王に、力の强くならんことを祈願して、噛みて投附くる紙。**ちから-ぎ** 力木【名】すべて他の物體を强むるための木。他の物に添へて、その物を支へ强むるための木。**ちから-ぎ** 【名】〔植〕**なぎ**(竹柏)の異稱。**ちから-ぐさ** 力草【名】(一)鷹の他の鳥を捕へて、地に落つるや片足に草を摑みて、力を入れ、鳥の飛立つを防ぐその草。(二)〔植〕**かぜくさ**(風草)に同じ。(三)〔植〕**すまふとりぐさ**(相撲取草)を見よ』**すみれ**(菫)(一)に同じ。(四)〔植〕**をひじば**に同じ。(五)〔植〕**ちからしば**(力芝)に同じ。**ちから-ぐさ** 力種【名】たよりの材料とするもの。天の網島「早う早う、と女が勇むをちからぐさ」中將姫古跡の松「姫君は二人が肩をちからぐさ、縄りてやうやう立上り」**ちから-ぐさり** 力鎖【名】勾配の急なる屋根等に登る爲に、棟より垂れ下げたる鎖。**ちから-ぐら** 稅倉【名】貢米を藏め置く倉。〔古語〕「起」近江軍、知二財等來一以悉焚二稅倉(チカラ)一」

ちから-くらべ 力競【名】(一)力の强さをくらぶること。ちからあはせ。すまふ。(二)技能の優劣を競ふこと。**ちから-ぐるま** 力車【名】重き物を載せて挽く車。〔古語〕「萬葉「戀草をちからぐるまになくるま積みて戀ふらくわが心から」**ちから-け** 力毛【名】强壯なる胸・腕・脛などに生ずる毛。**ちから-ご** 力碁【名】法もわきまへず、ただ强きばかりの碁。右大將鎌倉實記「定石知らぬ力碁に、先手も後手も打亂れ、渡りかねてぞこすみけり」**ちから-こぶ** 力瘤【名】力を籠めて、臂を曲ぐるとき、二頭膊筋の收縮によりて、筋肉の膨大するもの。曾我五人兄弟「大地を奈落へ踏抜けと、膝は古木の力瘤」一代男「すこし力瘤ある者、半弓に鳥のしたの矢の根をつがひ」力瘤を入れる【句】「力を入る」に同じ。**ちから-こぶし** 力拳【名】力を入れて握り締めたるこぶし。**ちから-ごゑ** 力聲【名】力を籠むる時に發する聲。えいごゑ。浦島年代記「採んづ採まれつ打つ浪音に力聲」〔古語〕**ちから-しね** 稅稻【名】年貢に差出だす稻。**ちから-しば** 力芝・狼尾草【名】〔植〕禾本科に屬する多年生の草。路傍に叢生し、根甚だ固く、葉長くして、麥の如く、秋、數莖を出して、穗をなす。紫黑色にして、粗毛多し。きつねのつばな。ちからぐさ。**ちから-じまん** 力自慢【名】自分の力多きを誇ること。**ちから-しろ** 稅代【名】夫役(ブヤク)の代りに奉る物。庸布。〔古語〕「起」一戸庸(シチカラ)布一丈二尺、庸(シチカラ)米五斗」**ちから-ずまう** 力相撲【名】技術によらず、力を主とする、相撲のとりかた。**ちから-ぜめ** 力攻【名】謀を用ひずに、腕力または武力を以て、直接に攻むること。御伽名代紙衣「異見の力攻を止めて、金の道さへおさへれば」

ちから-ぞへ 力添【名】力を添ふること。助力。加勢。**ちから-ぞん** 力損【名】力を出だして、その効のあらはれぬこと。力の出し損。**ちから-だて** 力達【名】腕力を示して誇ること。うでだて。風流軍配團「若輩な力だての名を殘しぬ」**ちから-だのみ** 力賴【名】力と賴むこと、又そのたのみどころ。傾城酒呑童子「今御目にかかれば、心に力賴もある」**ちから-だめし** 力試【名】力量をためすこと。**ちから-だるき** 力極【名】〔建〕實際の支持力を有する極。材には松・檜などを用ふ。(地極(ヂキメ)・飛擔極(ダルキ)等のごとき、殆ど裝飾に過ぎぬ極と區別していふ)**ちから-ちから** 力力し【形二】力を入れたるさまなり。〔古語〕「落窪」老いたまへるほどよりは、つまはじきを、いとちからちからしうしたまひて」**ちから-づく** 力盡【名】力のあらんかぎりを盡して、勝負を爭ふこと。うでづく。**ちから-づく** 力附く【動四自】(一)力增す。(二)元氣出づ。氣力を生ず。いきほひづく。(病後などにいふ)**ちから-づく** 力附く【動下二他】元氣の出づるやうに勵まし、又は慰む。**ちから-つぐのひ** 力償【名】『力を以て衣食の費を償ふ義』**ちんしごと**(賃仕事)に同じ。〔古語〕靈異記「傭賃。知加良豆玖乃比奈」**ちから-づよ** 力强【名】力の强きこと、又その人。强力。世間子息形氣「在鄕のちからづよに出あひ」**ちから-て** 力手【名】力强き腕。腕力のある手。〔古語〕「山家」「山くづすそのちからではかたくとも心たくみを添へこそはせめ」**ちから-ないかへる** 力無い蛙【名】催馬樂(サイバラ)の呂の曲の一。催馬樂「力ないかへる骨ないみみず」**ちから-なじみ** 力馴染【名】力と賴むなじみ。心强くたよりとするなじみ。傾城酒呑童子「力馴染の彼の人の、顏見る事のかなはずば」**ちから-に** 力煮【名】**てんぷ**(田麩)に同じ。

ちからぬけ 力抜【名】㊀力衰ふること。㊁活氣の無くなること。氣ぬけ。氣おち。拍子ぬけ。落膽。

ちからぬの 稅布。庸布【名】稅代(チカラ)としてたてまつる布。〔古語〕起庸布、チカラヌノ」

ちからね 力根【名】『力の根本の義』ちから(力)㊀を強めていふ語。山家山くづすその力ねは難くとも心だくみを添へこそはせめ」「の長官。

ちから-の-かみ 主稅頭【名】主稅寮(ツカサ)

ちから-の-つかさ 主稅寮【名】ちからのう(主稅寮)に同じ。〔古語〕

ちから-ばた 力機【名】動力を利用して、自働的に織布をなす織機。機械ばた。

ちから-びと 力人【名】㊀力の強き人。力士。〔古語〕叅照「よろづのつはものして、ちからびと集りてゐるに」㊁こんでい(健兒)に同じ。

ちから-ぶち 力緣【名】建具などに取附けて、その物を支へ强むるための緣。

ちから-まかせ 力任【名】力のあるに任せて行ふこと。ある限の力を出して爲すこと。

ちから-まけ 力負【名】相撲(スマヒ)などにて、力を入れすぎたるために、却りて度を失ひて負くること。

ちから-まさり 力優【名】力のまされること。(力劣に對して)

ちから-みづ 力水【名】けしやうみづ(化粧水)

ちから-もち 力持【名】石その他重き物を擡げて、おのれの力を示すこと、又その技藝をなす人。吉野忠信「腕押・捧ねぢ・力持」

ちから-わざ 力業【名】㊀力の强きを頼みてなすわざ。〔力技〕曾我虎が磨朝日奈の力技見物したしとのたまへば」㊁體力を用ひてなす仕事。勞働。力作。「その人。

ちかり 地借【名】地所を借入ること、又

ちか-わかれ 近別【名】近き處にわかれてあること。近き土地に旅立つ時のわかれ。

ちき 扛秤【名】ちきり(扛秤)に同じ。

ちき 穉氣・稚氣【名】をさなげなるさま。小供らしきさま。「穉氣、寧ろ愛すべし」

ちき 知己【名】㊀『說苑の說叢篇に「知己者不レ怨レ人」(荀子の榮辱篇なる「自知者不レ怨レ人」と同意)とあり』自己の長所・短所を知りわきまふること。㊁『戰國策の趙國の條に「士爲二知レ己者一死、女爲二說レ己者一容」、史記の晏嬰傳に「信二於知レ己者一こととあり』おのれの心、又は學問・才能を知れる人。知音。㊂ちかづき。しるべ。知人。知音。

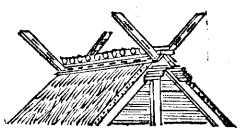
ちき 地氣【名】㊀雨後などに、土中より昇る水蒸氣。ちいき。土氣。㊁大地の精氣。㊂〔理〕『英 Earth 又 Ground』電線が、大地若しくはこれと接觸せる物體と接觸し、その絕緣物の抵抗力を低下せる障碍。地電流。

ちき 智顗【名】〔人〕支那、梁の高僧。俗姓は陳、幼字は王道または光道。慧恩禪師に就きて、法華の深旨を學習し、次いで天台山に隱棲し、山上に苦行すること九年。後、隋の煬帝の時、荊州の玉泉寺に在りて、法華玄義・法華文句・摩訶止觀を講じ、天台の宗義を完成せり。開皇十七年寂す。年六十。智者大師。天台大師。

ちぎ 千木【名】㊀神宮などの棟の兩端に交叉せる木。上古の建築の遺風にして、もと破風(ハフ)の上端の交叉せる部分なりしに、後世は破風と關係なき別物となり、單に棟上の飾物となれり。ひぎ。枕詞「高天(タカ)の原に、千木高知りて」

ちぎばかり(千木秤)の略。〔扛秤〕

ちぎ 乳木【名】ごま(護摩)を見よ。



(ちぎ㊀)

ちぎ 地儀【名】大地に於ける山川・沼澤の形象。

ちぎ 地祇【名】㊀くにつかみ(國つ神)に同じ。(天神に對して)㊁〔佛〕『無量壽經私記に「吉禮者云事二邦國之鬼神及天神地祇一こととあり』』人間にある鬼神。例へば堅牢地神など。(天神に對して)

ちぎ 遲疑【名】ためらふこと。躊躇。狐疑。

ちぎ 直【名】㊀すぐ。卽時。㊁そのば。卽座。㊂ちか。直接。盛衰記「兵衞佐殿、今度の軍の先陣勤めよと直に仰せたびければ」㊃〔商〕ちきとりひき(直取引)の略。㊄あるじ(主人)に同じ。〔京都・大阪の商家の語〕

ちぎ 直【副】ただちに。すぐに。ぢきに。

ちぎう 地球【名】〔地〕吾人の住む大地。太陽系中、第三の遊星。赤道に於ける直徑七九二七哩。月と呼ぶ一箇の衞星を有し、地軸によりて、西より東に向ひて二十三時五十六分四秒にて一自轉をなしながら、楕圓形の軌道に沿ひて、三百六十五日六時九分九秒にて、太陽の周圍を一周す。太陽との距離は三八〇六〇〇〇里。もとは非常なる高熱體なりしも、漸次冷却して、外部は地殼をなし、中心には今も尙灼熱せる部分を殘せり。世界。輿地。渾圓球。

ちぎう 地久【名】㊀「天長地久」を見よ。㊁〔音〕ちきうらく(地久樂)の略。叅照「歌の辭を聞いて、花の本にすすみ出で、地久の破を仕りたりけり」增鏡「萬歲樂・地久など」

ぢきう 持久【名】久しく持ちこらふること。そのままの狀態にて續くこと。ながもち。

ちきう-ぎ 地球儀【名】『英 Terrestrial globe』紙型などにて球狀に造り、その表面に、地球の全圖を畫きたる地球の小模型。

ちきう-くわいせうくわう 地球圓照光【名】〔天〕『英 Earth-shine』新月の際に、日光の、地球面より反射して、太陰の暗黑面の海あかるく見ゆる原因となるもの。地球の照返(テリカヘ)し。

ちきう-ごま 地球獨樂【名】地球儀の如き形をなせる獨樂。

ちきう-じき 地球磁氣【名】〔理〕ちじき(地磁氣)に同じ。

ちきう-じしやく 地球磁石【名】〔理〕『英 Terrestrial magnetism』地球上における種種の磁氣作用を說明する便宜上、地球を一箇の大いなる磁石と見做していふ稱。その北極は地球の南極近傍に、南極は地球の北極近傍に在り。ちじき(地磁氣)參照。

ちきう-じりよく 地球磁力【名】〔理〕ちじりよく(地磁力)に同じ。

ちきう-せいがく 地球星學【名】〔地〕『英 Astronomical geography』地球を一箇の天體として、その位置・形狀・性質・運動等を研究する科學。

ちきう-せつ 地久節【名】『「天長地久」を見よ』皇后陛下の御誕生日。明治七年以來この節を立つ。大祭日ならざるも、全國女學校は祝意を表して休業す。今上皇后の分は六月二十五日。(天長節に對して)

ちきう-せん 持久戰【名】短兵急に勝敗を決せずして、互に敵の力の衰ふるか又は救援などを待つために對陣すること。

ちきう-づ 地球圖【名】地球の平面圖。

ちきう-らく 地久樂【名】〔音〕雅樂の高麗樂の一。新樂・中曲にして雙調、大曲に準ずる時は狛(コマ)調子に吹く。舞者六人または四人、面帽子常裝束にて舞ふ。地久。圓地樂。

ちきかう 直講【名】令外(リヤウゲ)の官にて、大學寮の被官。博士の下に屬して、博士・助敎を助けて、經書を講ず。神龜五年設置の初には三人なりしが、後に二人に減ぜり。直博士。

ちきぐわん 直願【名】然るべき手續を經ずして、ぢかに天皇・皇后その他高貴の方に願ひ出づること。直訴(ヂキ)。

ちきげ 直下【名】ちよくか(直下)に同じ。運歩色葉集「直下、ヂキゲ」

ちきげんざん 直見參【名】身分の高き人にぢきに見參すること。

ちきこさく 直小作【名】質入したる田畠を、地主が直接に小作すること。

ちきさい 直裁【名】他に委任せずして、親しく裁決すること。ぢきよくさい。「狀。

ちきさつ 直札【名】直披(ヂキ)の書札。親展

おきさま 直様【副】すぐさま(直様)に同じ。浮世風呂「あの手やひの氣に入らうとすれば、おきさま勞痰だ」

おきさん 直參【名】一直接に君主に仕ふる人。直臣。(陪臣に對して)二古、清華の名族より出でたる僧の勅會の最勝講に列するもの。三江戸幕府に直屬の萬石以下の士、即ち旗本・御家人など。

おきし 筑子【名】こきりこ(小切子)に同じ。

おきし 直紙【名】みのがみ(美濃紙)の舊稱。

おきじ 地雉子【名】その地に棲みつき居る雉子。地鳥の雉子。

おきしにんしんけんしやうじやうぶつ 直指見性成佛【句】〔佛〕おきしにんしんけんしやうじやうぶつ(直指人心見性成佛)を見よ。盛衰記「達磨西來の直指見性成佛の祕術、皆自身の寶藏を開くにあり」「市場。

おきしおやう 直市場【名】直取引を爲す

おきしにんしん 直指人心【句】〔佛〕おきしにんしんけんしやうじやうぶつ(直指人心見性成佛)を見よ。

おきしにんしんけんしやうじやうぶつ 直指人心の正宗(シャウ)【句】〔佛〕ぜんしゆう(禪宗)の雅稱。太平記「只西天祖達磨大師、二度我が國に西來して、直指人心の正宗を示さるるかとぞ思はれける」

おきしにんしんけんしやうじやうぶつ 直指人心見性成佛【句】〔佛〕『けうげべつでん(敎外別傳)及びたんでん(單傳)を見よ』諸宗諸道の敎理を究め、又は諸種の戒行を修めんよりは、直ちにその人自身の本心を透見大悟して、佛果を成ぜよ。正統記「異朝の僧もあまた來朝し、この國よりも渡りて傳へしかば、諸家の禪多く流布(ル)せり。五家七宗とはいへども、以前の顯密權(ン)實等の不同には相似べからず。いづれも、直指人心見性成佛の門をば出でざるなり」「こと。直轄。

おきしはい 直支配【名】直接に支配すること。

おきしん 直心【名】〔佛〕そのままの心。心の當體。卽心。野守鏡「直心、卽ち淨土なりと云ふ文(モ)につきて」

おきしんかげーりう 直心影流【名】劍道の一派。元祿の頃、山田光德の創めしもの。

おきしんじやうど 直心淨土【名】〔佛〕心そのままが淨土なること。已心(ヲノ)の淨土。卽身成佛。

おきしんーりう 直信流【名】柔道の一流。寺田正重の創めしもの。起倒流とその祖を同じうす。

おきしよ 直書【名】一おきひつ(直筆)に同じ。二直筆の文書。

おきじよ 直敍・直叙【名】定まれる初任の官を經ずして、直ちにその官位に敍すること。

おきせつ 直說【名】一その人の、口ぐから說きたること。ぢきわ。二まことのうはさ。眞實にありし事のうはさ。

おきせん 地氣線【名】『英 Earth wire』空中電氣を大地に放電せしむるために、各電柱に沿ひて、縱に取附くる線條。

おきそ 直訴【名】一定の手續を經ざる、直接の上訴。越訴(ヲツソ)。直願(ヂキグワン)。

おきそう 直奏【名】他人の手を經ずして、直接に奏聞すること。篇曲(皇帝)「必ず委を顯はさんと、直奏かたく申しあげ」

おきそばこ 直訴箱【名】そじやうばこ(訴狀箱)に同じ。

おきたう 直稻【名】公廨(クガ)の用などに供するため、輕貨に交易すべき價値の稻。

おきだう 直道【名】〔佛〕一迂曲せずして、直ちに涅槃(ネハ)に到達する道。直路(ヂキロ)。平家「法華は、三世諸佛の出世の本懷、衆生成佛の直道なり」大鏡短「衆生成佛の直道を塞がん」二『他の力によらず、直接に佛道に入るを得るものの義』人類。篇曲(巴)「況んや生ある直道の弔ひ」

おきだう 直堂【名】〔佛〕禪宗にて、輪番に僧堂をまもる當直の役。

おきだか 直高【名】『英 Vertical height』傾斜せる部分の垂直の高さ。(法高(ダカ)に對して)

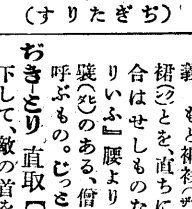
おきたつ 直達【名】他人の手を經ずして、直接に傳達すること。

おきだのみ 直賴【名】地人の手を經ず、直接に賴むこと。ぢきぢきに依賴すること。

おきたふ 直答【名】取次を經ずに、貴人の直接に答へたまふこと。ぢきたふ。

おきだん 直談【名】取次を經ずに、直接に談じあふこと。ぢかだんばん。

おきだりす 實芰答里斯(獨 Digitalis)【名】〔植〕玄參(ゲンジン)科に屬する二年生の草。原產地は歐洲。莖は直立して高く延び、葉は互生し、花は紫色に黃色又は白色を帶び、觀賞に適す。葉はヂギタリス葉と稱して、心臟病に特効あり。じきたりす。


(すりたぎぢ)

おきたりすえふ 實芰答利斯葉(羅 Folia digitalis)【名】前條を見よ。

おきーおき 直直【名】ぢき(直)(一)を强めていふ語。曾我虎が磨「誠あやまる心ならば、人傳に千萬言はんより、直直の一言にて小腹も癒る」

おきーちやう 直丁【名】一古、諸司にて、仕丁の中より選びて、宿直及び雜役に使用したる賤吏。つかへぼろ。とりぶ。二明治維新後に於ける太政官の舍人(トネ)局の職員。等外の吏にして、官內の雜役に使用せられ、又、交代して宿直したるもの。明治三年設置、翌年式部寮の被管となり、同八年式部寮の宮內省に移管せらるるに及び、使部と改稱せらる。三宮內省に置かれたる內舍人寮の職員。等外の吏にして、宮中の雜役に使用せられ、又、交代して宿直したるもの。明治三年に設置、同十年に廢止せられたり。

おきーづけ 直附【名】おかづけ(直附)に同じ。

おきーてい 直弟【名】すぐ下の弟。すぐのおとうと。

おきーでし 直弟子【名】ぢきぢきの弟子。直接の門人。(又弟子に對して)

おきーてつ 直綴【名】おきつ(直綴)の誤。

おきーてん 直傳【名】藝術などの祕訣を、他人の手を經ず、直接にその師たる人より受傳ふること。くでん。

おきーとつ 直綴・直裰【名】『直綴の字面は、衲不衲錄に「無二線導一者、則謂二之道袍一、又曰二直綴一」とあり。無二線導一とは、絲の筋を繩ひて、飾となさざる義。もと褊衫(ヘンサン)と、裙(クン)とを、直ちに綴り合はせしものなるよりいふ』腰より下に、襞(ヒダ)のある、僧の衣服。普通に「ころも」と呼ぶもの。じっとく(十德)(一)參照。

(つとぎぢ)

おきーとり 直取【名】軍の將が、自ら手を下して、敵の首を討取ること。

おきーとり 直取【名】人手を煩さず手づから取ること。常山紀談「宗茂は、胄附の首二つ、直取の功名にて、鞍の四方手(デシヲ)に著け」

おきーとりひき 直取引【名】〔商〕『英 Onset』一中間に他人を入れず、賣主と買主とが直接に取引行爲をなすこと。雙方の賣行行爲の、同時に起るもの。例へば物品を購ふときに、現金拂をなす類。ぢき。(信用取引に對して)二〔商〕取引所に於ける取引の一。賣買契約の後、直ちに現物の引渡・代金支拂をなす取引。ぢき。げん。げんば。(定期取引・延取引に對して)

おきなふ 直納【名】直接に納付すること。運步色薬葉「直納、デキナフ」

おきに 直に【副】一ただちに。すぐに。すぐさま。ぢき。二ぢかに。直接に。

おきにん 直任【名】順序を經ずして、ただちにその官職に任ぜらるること。太平記「圓成阿闍梨、次第を經ず、直任の僧都になされ」

おーぎぬ 地絹【名】書畫などを描きたる下地の絹。下地の絹。傾城酒吞童子「不思議や綸像ゆるぎ出で…地絹を離れ、形を現じ」

おきはかせ 直博士【名】おきかう(直講)に同じ。

ちぎばかり 千木秤・扛秤【名】一貫目以上の粗雜なる目方を量るに用ふる、大なる桿秤(カンバン)。ちぎ。ちぎり。

ちぎ-ばこ 千木筒【名】『もと神社の千木の餘材にて造れるよりいふとぞ』東京芝大神宮の祭禮にて、昔より賣りたる玩具。三箇の楕圓なる櫃、大きさの順に重なり、外面には丹と綠青とを用ひて、藤の花を描き、何れも蓋ありて、中に各大豆の煮りたるもの二三粒を入れ、藁にて縛り、提げ持たるるやうにせるもの。婦女子これを箪笥に祕して、衣服の增加を祈る。もと雛の具にて、京阪より輸入したるに始るとも、又酢を容るる器にて、生薑は酢に添へて食する故、生薑市にて賣り、藤は本願寺の門主毎年名物飯酢を藤花に添へて、禁裏に獻上せるに本づくともいふ。おだいびつ。ちぎびつ。**しゃがいち**(生姜市)參照。

ちぎ-はちまん-の-はた 地黄八幡旗【名】黄地に八幡と書したる指物の小旗。きはちまん。

ちぎばなし 直話【名】直接の話。入代目桃太郎唐土にては關羽孔明が三國誌の直話し」

ちぎはん 直判【名】昔時、將軍などが自ら捺して、取次人の署名を缺きし御判物。

ちぎひ 直披【名】手紙の封筒の脇附の語の一。他見を欲せずといふ意。敬語を冠らせて、御直披ともいふ。親展。

ちぎびつ 千木櫃【名】**ちぎばこ**(千木箱)に同じ。

ちぎひつ 直筆【名】自分にて書きたること、又その文書。自筆。「こと。かかへ。

ちぎふ 地給【名】召抱へて扶持を與ふる**ちぎまい** 直米【名】**ち**(地子)㊀に同じ。

ちぎまつ 直末【名】次條の略。

ちぎまつじ 直末寺【名】總本山に對して、直接の關係ある末寺。以下、孫末寺、曾孫(ヒコ)末寺等などの名あり。

ちぎん 地錦【名】〔植〕つた(蔦)の異稱。

ちぎん-さう 【名】〔植〕ふうろさう(風露草)に同じ。

ちぎやう 知行【名】㊀事を知り行ふこと。をさむること。支配。㊁武士が領したる土地。采地。封土。食邑。領地。十訓抄「あづまの方に、知行の所ありけり」㊂德川時代、萬石以下の武士の領地。

ちぎやう 智行【名】〔佛〕智慧と修行と。智慧と德行と。

ちぎやう 持經【名】〔佛〕不斷に持誦(ヂジュ)する經文。源氏「御后詞のかねてもとほほえまれて、持經のやうにひろげて見ゐ給へり」太平記「年來誦みたまひける持經の紐を解き、要文(エウモン)處處打上げ」著聞「その昔の持經の僧未だ生きて」

ちぎやう 持香【名】鷹の頭の一部。

ちぎやう 地形【名】家を建てんとする時、その地を平らかに固むること。ぢがため。

ちぎやう 地行【名】〔佛〕地上に行動すること。未だ飛行(ヒギヤウ)の通力を得ぬこと。

ちぎやうげん 地狂言【名】地(ヂ)の囃子を入れたる、能の間狂言。幾笥「地狂言は、子供時なり。髭のはへたる口から罷り出でたる者は、大いうつけの沙汰して、見る人汗をかきけるに」

ちぎやう-かご 地形籠【名】昔時、河川工事に、水深の甚だ大なる箇所に、その水底に並べ積みて、地形とせしもの。即ち蛇籠(ジャカゴ)の類にて、その上に通常の蛇籠を設く。

ちぎやう-こく 知行國【名】㊀古、公卿諸臣が年給によりて賜はり、その子孫又は家臣を國守として、自ら國務を知行せし國。㊁武臣の領せし國。領國。

ちぎやう-じゃ 持經者【名】不斷に佛經を持誦(ヂジュ)する人。佛經を讀誦するは、功德の一なりとせらる。持者。大鏡「持經者・眞言師」字治「叡實といふぢぎやうじゃなん、わらはやみは、よくおこなひ落したまふ」

ちぎやう-しょ 知行所【名】わが知行とする土地。封土。采邑。

ちぎやうだい 乳兄弟【名】他人の間がらにて、同じ人の乳にて育てられたる子の、互に呼ぶ語。非筒業平河內通「誠に母が御乳を上げ、申さば乳兄弟」

ちぎやう-だか 知行高【名】知行の石高。

ちぎやう-づけ 知行附【名】知行所の地名、又はその石高などを書きたる文書。丹波與作「先祖の由緒、ところどころの勳功、知行附の一卷あり」

ちぎやう-とり 知行取【名】德川時代に、旗本御家人のうち、祿を知行にて貰ひをりしもの。(扶持取に對して)

ちぎやう-とり 地形取【名】城を築くに、土居(ドヰ)を設けず、自然の地形に依りてすること。

ちぎやう-ぬすびと 知行盜人【名】空しく知行を受けて、功を立てざる者を批難していふ稱。ろくぬすびと。

ちぎやう-やく 知行役【名】知行取がその知行に應じて、夫役・金穀を出すこと。所領役。

ちぎやう-わり 知行割【名】㊀知行所を各人に割宛つること。㊁江戸幕府時代に、領地の更替・移封等を掌りたるもの。

ちぎゆしゅつ 直輸出【名】『輸の字の音、正しくはしゅ』在留外國商人の手を經ずして、直接に外國へ貨物を輸出すること。

ちぎゆにふ 直輸入【名】『輸の字の音、正しくはしゅ』在留外國商人の手を經ずして、直接に外國より貨物を輸入すること。

ちぎよ 池魚【名】池にすむ魚。

池魚の殃(ワザハヒ)【句】『呂氏春秋の必己篇に「城門失レ火、殃及二池魚一」とあり。即ち城門の火事を消さんとて、池水を汲みほしたりといふ意』㊀類燒の厄に遇ふこと。㊁そばづゑをくふこと。まきぞへにあふこと。

ちぎよ 池魚籠鳥【句】㊀池の魚と籠の鳥と。㊁束縛を受けて、一定の範圍內に蟄息する身の上の譬。

ちぎよう 持兇器【名】兇器を携帶せること。

ちぎよう-がうたう 持兇器强盜【名】〔法〕加重强盜の一。兇器を持つて、强盜をなすこと、又その强盜。

ちぎよう-せったう 持兇器竊盜【名】〔法〕竊盜の加重罪。兇器を持つて竊盜をなすこと、又その人。

ちぎよくずね 血玉髓【名】〔鑛〕『英 Heliotrope』玉髓の一種。濃綠色、草綠色を呈し、不透明又は弱半透明にして、酸化鐵を含むが故に、赤色の斑點を含む。裝飾用に供す。

ちぎ-らん 直覽【名】親しく見ることの敬語。

ちぎり 巾【名】**ちぎりかうぶり**(幗)の略。〔古語〕紀垂二赤巾(ワリチ)於前一

ちぎり 扛秤【名】**ちぎばかり**(千木秤)に同じ。

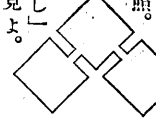
ちぎり 【名】らんご(亂碁)に同じ。

ちぎり 契【名】㊀ちぎること。約束。契約。㊁宿世の緣。前世の因業(インゴウ)。運命。源氏「さきの世にも、御ちぎりや深かりけん」㊂ゆかり。緣。因緣。㊃男女の通ずること。男女の交。懷風「この島つづきに隱遊女ありて、契を當坐切にさもしき事なるに」日本振袖初「夫婦契をなし始め、この草原を生み給ひ」

ちぎり 契を籠(こ)む【句】深く言ひかはす。固く契る。

ちぎり 契を結ぶ【句】互に契る。心の契【句】㊀心と心とにて契を結ぶこと。㊁異性を念じて、心の中にて姦淫すること。眞實伊勢物語「一人一人枕に近寄る心地して、今日より暮方まで身を悶へて、心の契に、一日の間に腎虛して」

ちぎり 千切・臍【名】㊀機を織るとき、經絲を卷く木。中挾れ、兩端廣し。



(四)

ちぎり 千卷(ちまき)【名】參照。

ちぎりじめ(臍締)の略。

ちぎり 馬術にて、馬を步ませる形の一。俗曲「萬歲踊」「りふぢ・ちぎりを乘廻し」

ちぎり 紋所の一。下の圖を見よ。

ちぎり 乳切【名】**ちぎりぎ**(乳切木)㊀の略。

ちぎり 振斷【名】りうど(輪鼓)㊂に同じ。

ぢぎり 地切【名】その物事のあるにより生ずる、多少の缺損。

ちきり-かうぶり 幗【名】古代の女の用ひし一種のかぶり物。ちきり。ちきりかんむり。巾幗。〔古語〕和名「幗、知岐利加宇不利、今老嫗戴レ之、覆二番上一者也、婦人喪冠也」

ちきり-かんむり 幗【名】前條に同じ。

ちぎり-ぎ 乳切木【名】一『長さ乳のあたりに及ぶよりいふ』防禦などに用ふる、太く長き杖。ぼうちぎり。平家「いさかひ果ててのちぎりぎかなとぞ笑はれける」丹波與作「棒・ちぎりきにて亂けつけ」二能(ノウ)の狂言の一。客に嫁はれ、且つ踏まれし太郎冠者、その女房と乳切木を持ちて仇打に出かけしに、留守とありて、夫婦諧ひつつかへる。

ちぎり-く 契來【動變自】契を繰けきたる。增鏡「契りこし心の末はしらねどもこの一言やかはらざるらん」稱。

ちぎり-ぐさ 契草【名】〔植〕きく(菊)の異

ちぎり-くらべ 契比【名】契りたるほどを比らぶること。

ちぎり-じめ 縢締・衽【名】形、中括れて、兩端廣く、石・板などの水平の合はせ目・割(ワリ)目などに塡め込みて、鎹(カスガイ)の如く締め合はするに用ふる物。りふど。ちぎり。

ちぎり-そむ 契初む【動下二他】初めて契る。初めて契りを結ぶ。新勅撰「おもへともつらくもあるかな七夕のなどか一夜を契りそめけん」

ちぎり-だい 地切臺【名】烟草の葉を刻むに用ひし器械。坐して、梃子の把柄を上下して刻み得る仕掛のものなりしが、今は廢る。ちんこきり。

ちぎり-とめ 衽留【名】〔建〕木材接合の留に、刻合はせたる木を、衽にて堅めたること。

ちぎり-はぎ 契萹【名】器物の蓋合せ方の一。責篦(ハギ)などをなせる板の接合部の木口に、矢筈形の孔を穿ち、堅木の材を同じ形に削りて、膠にて、その孔に打込みになすもの。篦目の裂けんとするを防ぐためになす。やはずはぎ。地。

ちぎりやう 直領【名】主君に直屬せる領

ちぎる 契【動四他】行く末までもかはらじと、互に言ひ固む。約束す。ちかふ。伊勢「こよひあはんとちぎりたりけるに」

ちぎる 捩斷る【動四他】一手先にてこまかく切取る。むしる。鯖鯵「みるのひきほしの、短くちぎりたるをゆひあつめて」二無理に引切る。もぎとる。

ちぎる 捩斷る【動下二自】ちぎりたるやうになる。

ちぎれても【句】質の良きものは破れても、その本質を失はず。〔諺語〕

ちぎる 【接尾】殘るところなくする意。「譽めちぎる」田舍芝居「せっかく褒きちぎってある處が、藻みのごみになるはよ」

ちぎれ-ぐも 斷雲【名】ちぎれてはなれたる雲。ちぎれちぎれになりたる雲。

ちぎれ-ちぎれ 捩斷捩斷【貌】幾つもの部分にちぎれたるさま。「同じ。

ちきろ 直路【名】〔佛〕ちきだう(直道)(一)に同じ。

ちきろ 直廬【名】ちよくろ(直廬)に同じ。

ちきわ 直話【名】本人どうし相向ひて話すこと。直接の談話。

ちきゐ 直位【名】天武天皇の朝に改定せられたる冠位の一。正位の次、勤位の上に位し、四階に分れ、各階に大(オホ)・廣(ヒロ)の別ありき。「直位四階」

ちく 筑【名】一支那の樂器の一。竹を割きて編み、叩きて鳴すもの。二〔地〕筑前と筑後との兩國。「豐筑」

ちく 畜【名】家にかふ鳥獸。きう。家畜。

ちく 地區【名】一地球の表面一體。二地面の上の或區域。地境。

ちく 馳驅【名】一『說文に「走レ馬謂二之馳一、策レ馬謂二之驅一」とあり』馬を走らすこと。二はせまはること。奔走。驅馳。「馳驅の勞を吝まず」

ちく 知久【名】ちくの(知久篦)の略。

知久の一鎌(カマ)【句】知久篦を、鎌にて一刈りに刈取りたるもの。(生えて二年經たるは、一刈りに刈得れども、三年經たるは一刈りに刈取る能はずといふ)

ちく 【名】ちくらっぱしの略。「下野國・常陸國及び上野國館林の方言」「ちくを言ふ」

ちく 【貌】ちくりに同じ。醒睡笑「かの駒、ちくと手を突き」

ちく 竺【接頭】『天竺の人なるより、又天竺の人を師とするよりいふ』支那にて、僧の名に添へて、姓のごとくに用ひし語。例へば竺葉摩騰(マトウラン)・竺雲無蘭(ムラン)・竺道生の類。然るに、晉の道安、釋姓を唱へてより、一般にこれを用ふることとなれり。

ちく 【名】ちくばの略。

ちく 治具【名】『史記の魏其武安侯傳に「將軍昨日幸許二過二魏其一、魏其夫妻治具、自レ旦至レ今、未二敢嘗一食」とあり』天下を治する具。禮樂刑政をいふ。「愚癡。

ちく 痴愚・癡愚【名】ばか。のろま。魯鈍。

ちぐ 智愚【名】一かしこきと、おろかなると。二知者と愚者と。愚智。

ちぐ 値遇【名】ちぐう(値遇)に同じ。(多く佛教上の事にいふ)

ちく 竺【名】〔地〕『竺の字の音、正しくはちゆく』てんぢく(天竺)の略。

ちく 舳【名】へさき。みよし。船首。

ちく 軸【名】一車の心木(キシ)。轂(キシ)を貫く棒。二物を卷く時の中心にする圓き木。心木(キシ)。三掛物及び卷物の心木(シン)の兩端に出づる部分。唐木・角(ツノ)・象牙・金銀・陶磁器等にて製し、經と長さと寸法同一なるを普通とす。四かけ物。かけじふく。五『卷物の軸に近き處に記す意』俳句・川柳などの卷の末に記す評者の句。六筆の竹。篳篥。七草木の莖。八ほぞ(蕊)に同じ。九羽の莖。十〔理〕『英Axis』くわいてんぢく(廻轉軸)に同じ。十一『數』『英Axis』幾何學にて、一つの平面圖形を或直線の周圍に廻轉して、立體圖形を得る時の、その直線。例へば圓錐・圓壔などの軸の類。十二『數』『英Axis』幾何學にて、二つの圖形ありて、對應點を結ぶ直線が、何れも定直線によりて二等分せらるる場合の、その定直線。たいしょう(對稱)參照。十三『數』『英Axis』解析幾何學にて、點の位置を定むるための基準とすべき二直線又は三直線。座標軸。十四〔理〕『英Axis』磁石の兩極、レンズの兩面の曲率中心、又は望遠鏡の對物・接眼兩レンズの光心等を連結する直線。十五『鐵』『英Axis』けっしょうぐく(結晶軸)に同じ。十六〔建〕木造建築にて、土臺より軒桁上端までの間の骨組。十七〔建〕扉又は回轉障子を回轉せしむるため、その一方の框(カマチ)の上下に附したる突起。

ちく 軸【助數】掛物又は卷物を數ふるに用ふる語。

ちくあう 竹甍【名】たけとうぐひすと。竹に甍を配したること。竺「竹庵」を見よ。

ちくあん 竹庵【名】〔人〕やぶおちくあん(藪井きたる火桶」

ちくい 竹椅【名】竹を用ひて作りたる椅子。和漢三才圖會「方椅・圓椅・折疊椅竹椅等」

ちくい 小い【形】さひさし(小し)に同じ。續膝栗毛「わしの背(セ)がちくいかはりに、足駄はいてかつぎませず」

ちくいち 逐一【副】順を逐ひて一つ一つ。いちいち。逐次。

ちくいん 竹陰【名】竹の下陰。

ちくいん 竹印【名】竹を材として、それに刻したる印。

ちぐう 知遇【名】見ぬきて、厚遇すること。ちぐ。

ちぐう 値遇【名】稀にであふこと。ちぐ。値遇を運ぶ【句】知緣にするために、日日、足を運ぶ。謠曲「檜垣」「ここは、所も白河の水さへ深きその罪を、浮びやすると捨人(ステビト)に、値遇を運ぶ足引の山下庵に著きにけり」

ちくうけ 軸承【名】一〔建〕唐戸の框(カマチ)の軸を承くる部分。二『英Journal bearing』器械の回轉軸を支へ、軸及び車輪と共に回轉する物。

ちくえふ 竹葉【名】一たけのは。二『張協の七命に「荊南烏程、豫兆之竹葉」、又、古詩に「竹葉清好、何妨二飲三數杯一」とあり。さけ(酒)參照』

ちくえふし 竹葉紙【名】うすやうし(薄樣紙)に同じ。

ちくえふ-せき 竹葉石【名】〔鑛〕肥後國より產する蛇紋石。裝飾に用ふ。

ちくえん 竹緣【名】たけえん(竹緣)に同じ。

ちくおん-き 蓄音器【名】『英Phonograph又Graphone』音聲を他の形に變じて蓄へおき、必要に應じて、幾回も元音のままに發生する樣に作りたる器。西曆一八七七年米國人エヂソン(T. A. Edison)の發明に係

り、漏斗狀の管に向ひて音聲を發すれば、管底に附著せる薄き金屬又は雲母の板は振顫し、板に固著したる針の振動によりて、回轉しつつ横に進行する臘管に波狀の傷痕を刻す。かくて臘管をもとの位置に複し、回轉して、針をして前に印したる傷痕を進ましむれば、波線に從ひて、薄板は振動し、吹込みたると同じき音聲を發す。後幾多の改良を經て、臘管を平圓盤に改め、これより發聲せしむる器械も漸次改良せらる。

ちくおん-しゃしん 蓄音寫眞【名】『英 Photographophone』音波の變化を以て、光波の變化を生ぜしめ、これを活動寫眞用のフイルムに撮影し、電話機をかりて、原音を發せしむるもの。

ちくおん-でんわき 蓄音電話器【名】『英 Telephonograph』電話器と蠟管蓄音器とを連結せしめたるもの。電話に向ひて話したる音聲を、他方に於いて、蓄音器の蠟管中に蓄へ、隨時にこれを復活せしむる裝置。

ちくが 竹芽【名】**たけのこ**(筍)に同じ。

ちくかう 築港【名】船舶の碇泊に便ならしむるため、必要なる工事を施して、港を築造すること。

ちくかう 逐項【名】いちいちのかど。每項。逐條。逐件。

ちくがう 逐號【名】雜誌などの次第に號數を重ぬること。

ちくかく 逐客【名】客分として抱へられたる者を追拂ふこと。

ちくかく-らん ちくかく蘭【名】〔植〕**ちくいらん**(ちけい蘭)に同じ。「に同じ。

おくかざり 軸飾【名】**げだいかざり**(外題飾)

ちくかん 竹間【名】竹の茂みのあひだ。

ちくかん 竹簡【名】■『孔安國の尚書序に「更以二竹簡一寫之、增二多伏生二十五篇一」とあり』竹のふだ。支那にては、紙の發明ありし漢時代より前には、これに文字を記したり。竹册。**さっせい**(殺青)**たうひつ**(刀筆)へん(編)**さくかん**(錯簡)**だっかん**(脫簡)。**ちくはく**(竹帛)參照。■『**ちくはく**(竹帛)を見よ』記錄。歷史。

ちくかん 竹竿【名】■生えてゐる竹の幹。さんかん(三竿)參照。■竹のさを。たけざを。

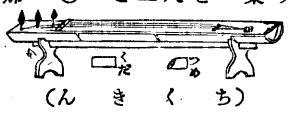
おくかん 軸艦【名】〔兵〕横陣を形づくれる艦隊が、方向を變換する時、廻轉の樞軸となる軍艦。「に同じ。

ちくき 竹几・竹姬【名】**ちくふじん**(竹婦人)

ちくき 竹器【名】竹細工の器物。

ちくき 蓄氣【名】**ちっき**(貯氣)に同じ。

おくぎ 軸木【名】■木(多くは杉の木)にて作りたる掛物の軸。■マッチの土臺として、その一端に藥器を附けたる細き木。



ちくきん 竹琴【名】■二絃を張りたる竹の小琴。その形、八雲琴に似たり。■太き竹を二つに割りて、桐の板を張り、これに三絃をかけたるもの。

ちくぎょ 竹魚【名】**さより**(鰾)の漢名。

ちくけい 竹溪【名】〔地〕支那湖北省鄖陽府竹溪縣に在る名勝。竹溪の六逸(イツ)【句】『唐書の李白傳に「客二任城一、與二孔巢父・韓準・裴政・張叔明・白陶沔一、居二徂徠山一、日沈飲、號二竹溪六逸一」とあり』支那唐の世に、竹溪に遊びたる六人の賢者、卽ち李白・孔巢父・韓準・裴政・張叔明・白陶沔(ベン)。

ちくけい-らん ちくけい蘭【名】〔植〕**ちけいらん**(ちけい蘭)に同じ。

おくけつ 衄血【名】**はなぢ**(鼻血)に同じ。

ちくけん 逐件【名】**ちくかう**(竹項)に同じ。

ちくけん 竹筧【名】たけのかけひ。

ちくけん-ぜい 畜犬稅【名】府縣にて、犬の飼養主に課する稅金。

ちくご 筑後【名】〔地〕西海道十二國の一。久留米(クルメ)市及び浮羽(ウキハ)・八女(ヤメ)・三井(ミヰ)三瀦(ミヅマ)・山門(ヤマト)三池(ミイケ)の六郡に分かれ、全國、福岡縣の管轄に屬す。

ちくご-こう 竹工【名】竹細工をする人。

ちくご-がは 筑後川【名】〔地〕筑前・筑後・豐後・肥前四國を流るる川。水源二あり。長さ三十五里餘。九州第一の大川。別稱、千隈(チクマ)川、千歲(セト)川、又、筑紫二郎。筑後川の戰【句】正平年間菊池武光征西將軍懷良(カネナガ)親王を奉じ、筑後川を隔てて少貳賴尙(ヒサ)と戰ひて大いにこれを破りし役。

ちくご-がらす 筑後烏【名】〔動〕**かささぎ**(鵲)に同じ。

ちくご-はなむしろ 筑後花筵【名】筑後國三瀦(ミヅマ)・八女(ヤメ)・山門(ヤマト)三郡地方より產する花筵。輸出向として、近時名聲あり。

ちくご-ぶし 筑後節【名】**ぎだいふぶし**(義太夫節)に同じ。

ちくご-こん 竹根【名】竹の根。竹根の引目(ヒキメ)【句】**たけのねひきめ**(竹根引目)に同じ。

ちくご-やく 逐語譯【名】原文の一語一語につきて精密に飜譯すること。

ちくさ 千草【名】**ちくさいろ**(千草色)の略。「ちくさの股引」「ちくさの足袋」

ちくさ 鴨跖草【名】〔植〕**つゆくさ**(鴨跖草)を見よ。

ちくさ 【名】〔植〕**くさよし**(草葭)に同じ。

ちくさ 千草【名】種種の秋草。新拾遺「夕暮の野べ吹きすぐる秋風にちくさをつたふ花の上の露」

ちぐさ 千種【名】さまざま。くさぐさ。いろいろ。「古語」古今「秋の野にみだれて咲ける花のいろのちくさにものをおもふころかな」

ちくさ 千種【名】姓氏の一。村上源氏より出づ、久我(コガ)の分家にて、正二位權大納言有能を祖とす。明治維新後に、子爵を授けらる。

ちくさ 地草【名】〔植〕萱の一種。莖の高さ三尺餘、葉は細長き平行脈、花は小穗をなし、五六月黃褐色の穗を抽出す。花穗は拂子の如し。ほっすかや。

ちぐさ 乳草【名】〔植〕■**がいも**(蘿蔔)に同じ。■**のあざみ**(野薊)に同じ。

ちくさあん 千種庵【名】〔人〕狂歌師。■(初世)。通稱は山口要助、霜解道和留(シモトケミチヨル)霜翁等の號あり。江戸淺草に住みて、書肆を業とす。文化八年歿す。■(二世)。通稱は勝田雄輔、松巖又は芙蓉花と號す。江戸淺草の庄屋たり。又一中節を善くし、都一閑齋といひ、のち宇治紫文と改め、宇治の家元となる。安政五年歿す。

ちくさ-ありこと 千種有功【名】〔人〕歌人。有修の子。千千廼舍(チヂノヤ)と號す。左近衞權中將に進む。一條良忠に就きて、歌道を修め、後、香川景樹等と交はり、歌風大いに堂上風を脫す。嘉永七年歿す。年五十八。和漢草(サウカン)ふる飾等の著あり。

ちくさい 竹齋・知苦齋【名】**やぶいしゃ**(藪醫者)の異稱。「たむること。

ちくさい 蓄財【名】財を蓄ふること。金をためること。

ちくさい-か 蓄財家【名】つとめて蓄財する人。蓄財に巧なる人。

ちくさい-ものがたり 竹齋物語【名】〔書〕山城國の藪醫者竹齋といふ者の諸國行脚中の事の由に假作して書きたる物語。文體は擬古文にて、諧謔を主とす。十二卷。烏丸光廣の著。

ちくさいろ 千草色【名】うすきもえぎ色。ちくさ。(おもに木綿地の織物にいふ)

ちくざさ 竹槍【名】たけやり。

ちくざさ 竹槍・幡旗(バタ)【句】たけやりとむしろばたと、卽ち百姓一揆。

ちくさっ 竹窓・竹窗【名】■竹の格子などを作り附けたる窓。竹の窻。■その前に竹の生ひたる窓。

ちくざつ 蓄藏【名】たくはへをさむること。

ちくざつ 築造【名】きづきつくること。けんちく。

ちくざつ-こうげふ 築造工業【名】土木・建築に關する工事又は作業の總稱。

ちくざつ-ざいれう 築造材料【名】築造工業に要する材料。例へば、セメント・煉瓦・木材・石材等の類。

ちくざつ-し 築造司【名】軍務官の管下に置かれたる四司の一。知司事・正權判司事等の職員ありて、城堡・築造等の事を管理せしもの。明治元年に設置、同二年に廢止せられたり。

ちくざつ-たい 築造隊【名】明治三年に大阪にて編制し、兵學寮に附屬せしめたる軍隊。今の工兵の類。同五年これを解散せり。

ちくさうら 千草裏【名】ちくさ色なる、著物の裏地。

ちぐさ-かがり 千草縢【名】絲紐などのかがり方の一。**ちぐさむすび**(千草結)參照。

ちぐさき 醒睡笑「鼓の胴をつかんといふ。それは、難波かがりか、ちぐさかがりかと問ふに」

おく-さき 軸先【名】掛物の、向って右の方の端(軸元軸脇に對して)「に同じ。

ちく-さく 竹冊·竹策【名】**ちくかん**(竹簡)

ちく-さく 竹柵【名】竹のやらい。竹のしがらみ。たけやらひ。

ちく-さく 逐索【名】〔數〕和算にて、或條件に適合する圖形の數値を求め、その方法を反覆して、他の類似の圖形に屬する數値を求むる方法。

おくさく-とっき 軸索突起【名】〔醫〕『獨 Achsencylin (ieforisatz』神經細胞の突起の一。その形一條の長突起をなし、細胞より神經末梢に向って興奮を傳達す。

ちく-さし 乳臭し【形ク】**ちなまぐさし**(血腥し)□に同じ。浮世親仁形氣「いづれもは、ちくさい事にあはれぬによって」

ちくさ-じやう 千草城【名】伊勢國三重(ミヘ)郡千種村字城山にありし城。吉野朝の頃、千種隆通(忠顯の孫)の築きしもの。今は址のみ殘れり。

ちくさ-ただあき 千種忠顯【名】〔人〕みなもとただあき、源忠顯)を見よ。

ちくさ-の-うら 千草浦【名】〔地〕上總國にある海濱。夫木「咲きにほふちくさの浦の潮風に秋はいろいろ浪ぞ寄せくる」

ちぐさ-の-ふいり 茅草斑入【名】〔植〕しまがや(縞茅)の異稱。

ちぐさ-むすび 千草結【名】㊀紐の結び方の一。**ちぐさかがり**(千草縢)參照。㊁**えんむすび**(緣結)を云ふ。〔京都·大阪邊の語〕俚言集覽「緣結(エニ)のこと、上方(カミ)にて、千草結といふ」「ていふ稱。

ちく-さん 畜産【名】牛·馬を財産とみなすこと。つきやま。

ちく-ざん 築山【名】土を盛りて、山を作る

ちくさんがく 畜産學【名】家畜に關する一切の事を講究して、その改良·蕃殖を圖り、吾人人類の利用に便せんがための合理の方法を發見せんとする學。

ちくさん-しけんぢやう 畜産試驗場【名】農商務大臣管理の下に、畜産に關する試驗·調査·分析·鑑定及び傳習·種畜·種禽種卵の配布·貸附の事務を掌る所。職員に場長(技師中より任ぜらる)·技師·技手等を置く。

ちくさんしけんぢやう-ちやう 畜産試驗場長【名】畜産試驗場の長官。技師を以てこれに充て、農商務大臣の指揮·監督を承け、場務を掌理す。

ちくさ-もめん 千草木綿【名】崩黃色の無地に染めたる木綿。崩黃木綿。

ちくし 筑紫【名】〔地〕**つくし**(筑紫)の誤。

ちくし 竹枝【名】㊀竹の枝。㊁土地の風俗·人情を詠じたる詩。多くは、七言句の連作にて、支那唐の詩人劉禹錫より始まる。

ちく-し 竹紙【名】㊀竹の幹の中の薄き膜。㊁鳥子紙の薄きもの。又、雁皮紙の異稱。㊂『唐紙は竹を楮に加へて製するよりいふ』**たうし**(唐紙)の異稱。

ちく-じ 逐次【副】次第を逐ひて。順順に。

ちく-じ 竹秋【名】『**ばくしう**(麥秋)を見よ』陰曆三月の異稱。たけのあき。(竹春に對して)「見よ。

おく-しき 軸式【名】〔天〕「天體の軸式」を見よ。

ちく-じつ 逐日【副】日をおひて。日のたつにつれて。一日一日と。日ましに。

ちく-しん 逐臣【名】君主より逐ひしりぞけられたる臣。遠ざけられたる家來。

ちく-しん 逐進【名】競ひすすむ。爭進。

ちく-しや 畜舍【名】家畜を飼養しておく建物。

ちく-しやう 畜生【名】『人に畜(カ)はれて生きてゐるものの義』㊀**じやうね**(獸類)の總稱。よつあし。**りくちく**(六畜)參照。㊁人を罵りていふ語。㊂〔佛〕『梵 Tiryagyoni. 傍生と譯す』傍生と稱するは、傍行する生類といふ意にて、畜養せらるる生物。畜生(ケダモノ)。

畜生殘害(ザンガイ)【句】畜生が互に嚙合ひ、噉(クラ)ひ合ふこと。徒然「大方生ける物を殺し、痛め鬪はして遊び樂しまん人は、畜生殘害の類ひ也」

畜生の逆恨(サカウラミ)【句】恨むべからざるものを恨むこと。〔諺語〕

ちく-じやう 築城【名】㊀城をきづくこと、又その城。㊁〔兵〕地形を利用して、堅固なる陣地を構ふること、又その陣地。永久築城·半永久築城·臨時築城(野戰築城)の三種あり。

ちくしやう-かい 畜生界【名】〔佛〕**ちくしやうだう**(畜生道)□に同じ。

ちくしやう-とく 畜生國【名】憎惡する異國を卑しみ罵りていふ稱。

ちくしやう-しゆ 畜生趣【名】〔佛〕**ちくしやうだう**(畜生道)□に同じ。

ちくしやう-そだて 畜生育【名】生兒に產湯(ウブユ)もつかはせず、胎髮も剃らせず、すべて無造作に育つること。斯くの如くに育つる時は、その子無病なりといふ。

ちくしやう-だう 畜生道【名】㊀〔佛〕『梵 Tiryagyonika(底栗事)の譯語』六道中、三惡道の一。畜生の因業を有せる人の死後、生前の惡業(アクゴウ)より、畜生に生れかはり、苛責(カシャク)を受くる境界。畜生界。畜生趣。畜趣。血塗(チヌラ)。謠曲(大原御幸)「畜生道の有樣を見聞も、同じ人道の」㊁骨肉の間がらに於ける色情。

ちくしやう-づか 畜生塚【名】豐臣秀次の妻妾·子女三十四人を斬に處し、その死骸を一坑に埋めたる塚。京都木屋町瑞泉寺內に在り。秀次惡逆塚。

ちくしやう-づら 畜生面【名】人としての義理を知らぬ者の顏つきを卑しめ罵りていふ語。堀河波の尊「ようもいうた畜生面、生けておくも腹立ちや」

ちくしやう-なみ 畜生並【名】畜生と同等なること。畜生のたぐひ。

ちくしやう-ばら 畜生腹【名】男女の二子(コヅ)又は三子(コ)を產むこと。ちくしやうばらみ。

「同じ。

ちく-やう 築城部【名】陸軍所屬官廳の一。防禦營造物の建築·檢査及び防禦營造物に關する砲兵事業の調査、並びに工兵事業を掌り、軍用鐵道及びその敷地等を管理するもの。本部及び支部より成る。本部は東京に置き、支部はこれを二等に分ち、必要の場合に設置するものとす。本部には本部長·部員·技師を、支部には支部長及び部員を置く。「を見よ。

ちくじやうぶ-しぶ 築城部支部【名】前條

ちくじやうぶしぶ-ちやう 築城部支部長【名】築城部支部の長官。

ちくじやうぶ-ほんぶ 築城部本部【名】**ちくじやうぶ**(築城部)を見よ。

ちくじやうぶほんぶ-ちやう 築城部本部長【名】築城本部の長官。

ちくしやう-をんな 畜生女【名】人としての義理を知らぬ女。天の網島「人の皮著た畜生女」

ちく-しゆ 畜趣【名】〔佛〕**ちくしやうしゆ**(畜生趣)の略。

ちく-しゆん 竹春【名】陰曆八月の異稱。たけのはる。竹小春。(竹秋に對して)

ちく-じよう 逐乘【名】〔數〕**かいじよう**(階乘)に同じ。

ちくしよ-きねん 竹書紀年【名】〔書〕支那の古代史。二卷。著者不詳。

おく-すり 軸摺【名】**おくうけ**(軸承)に同じ。

ちくすゐ-じつ 竹醉日【名】陰曆五月十三日。支那にては、この日竹を移せば、よく繁茂すと言傳ふ。竹迷節。

ちく-せい 竹聲【名】管を吹きて發する音色。笛のねの類。「春」に同じ。

ちく-せうしゆん 竹小春【名】**ちくしゆん**(竹春)に同じ。

ちく-せき 竹石【名】〔人〕**ながまちちくせき**(長町竹石)を見よ。

ちく-せき 竹席【名】薄くへぎたる竹にて編みたる席。たかむしろ。竹簟。

ちく-せき 蓄積【名】たくはへつむこと、又その物。積蓄。積儲。貯積。

ちく-せき 逐斥【名】おひしりぞくること。

おひはらふこと。序逐。

ちくせき 蓄籍【名】家畜の系統を表はせる記錄。

ちくせつ 竹節【名】たけのふし。

ちくせつ 築設【名】きづき設くること。

ちくせつにんじん 竹節人參・土參【名】〔植〕ときばにんじん(七葉樹葉人參)に同じ。

ちくせふ 蓄妾【名】めかけを養ひおくこと。

ちくせん 蓄錢【名】錢をたくはふること、又その錢。

ちくせん 竹氈【名】竹の皮を細く割き、綱代に編みて、敷物としたるもの。

ちくせん 竺僊【名】〔人〕高僧。竺僊派の祖。支那元の人。來來禪子・梵僊等の號あり。元德元年來朝して歸化し、南禪建長・眞如の諸寺を董す。正平三年寂す。年五十七。

ちくぜん 筑前【名】〔地〕西海道十二國の一。福岡市及び糟屋(カスヤ)・宗像(ムナカタ)・遠賀(オンガ)・鞍手(クラテ)・嘉穗(カホ)・朝倉・筑紫(ツクシ)・糸島・早良(サハラ)の九郡よりなる。全國、福岡縣の管轄に屬す。

ちくぜんにぶ 筑前二分【名】明治維新の際、筑前藩にて、江戸幕府の二分金に摸して鑄造發行せる金貨。

ちくせんは 竺遷派【名】〔佛〕禪宗二十四流の一。竺遷を祖とす。

ちくぜんびは 筑前琵琶【名】琵琶の一種。胴の幅狹く、棹は比較的長くして、三味線を持つ如く持ちて彈ず。もと筑前の琵琶法師の彈奏せしもの。明治維新の頃、その裔橘智定薩摩琵琶を研究して、斟酌新定せり。曲調纖弱にして、女性的なれども、その巧纖なるは薩摩琵琶・平家琵琶に優る。

ちくそ 血屎【名】せきり(赤痢)に同じ。〔古語〕和名「癘、釋名云、痢赤白曰レ癘赤痢、知久會、白痢、奈女言二滯而難一レ出也」

ちくそ 竹素【名】ちくはく(竹帛)に同じ。

ちくそう 竹叢【名】たかむら。たかやぶ。

ちくだい 竹臺【名】たけのうてな(竹臺)に同じ。

ちくたいしよう 軸對稱【名】〔數〕『英Axial symmetry 又 Symmetry with respect to an axis』せんたいしよう(線對稱)に同じ。

ちくたう 竹刀【名】しない(竹刀)に同じ。

ちくたく【感】『英Click-tack』時計のセコンドの音。「こと。げけつ。

ちくだり 血下【名】血の、肛門よりくだること。

ちくだり 地下【名】みなみかぜ(南風)を云ふ。〔北國の方言〕

ちくち 乳口【名】乳の出る口。

ちくち 忸怩【稱】はぢらふさま。

ちくち 地口【名】『ぢ(地)はぢうた(地唄)・ぢぞめ(地染)などの地にて、土地の口合(クチアヒ)の義、土地とは江戸をさしていへるなりといふ』一の原語に同音又は似通ひたる音の語を寄せて、他意を表する一種の洒落。例へば「蕎麥がいい」といひて「側が好い」の意をあらはし、又「鳥巻いた竹の窓」といひて「つらまへて酒のませう」の語路を思はしむるの類。ごろ(語路)參照。「じ。

ちくちあんどう 地口行燈【名】次條に同じ。

ちくちあんどん 地口行燈【名】地口を書きたる行燈。多くは、方形の枠(ワク)に白布又は紙を張り、浮世繪風の戲畫に地口を書添へたるもの。上に花傘を附くるもあり。江戸及びその近國にて、稻荷祭などに、その社の附近に連れ燈したり。寶曆・明和の頃、盛んに流行し、今も東京その他に行はる。

ちくちく【名】『次條(二)を轉用したるもの』針にて縫ふこと。針仕事。〔小供の語〕

ちくちく【貌】(一)小さき物にて刺すさま。針にて縫ふさま。しくしく。(二)少しづつ絕えず痛むさま。(三)荒だてずに耳うるさく非難するさま。(四)少しづつするさま。

ちくちせん 地口錢【名】戰國時代に、大和國にて、筒井氏の課せし臨時の租稅。

ちくちつ 竹帙【名】細き竹にて編みたる帙。

ちくちづけ 地口附【名】前句附の類。上に發句の上の二句を書き、下に、その下句とも見なすべき適當の續を書きて、點者に送り、その巧みなる者には、點者より、褒美として、品物などを與ふ。題は、點者より出だすにあらず、自ら考ふ。享保年間流行す。

ちくちやう 竹杖外道【名】〔人〕古の印度の外道の行者。釋迦十大弟子の一人なる目連尊者を、その携へたる杖にて擊殺せり。執杖梵志(シツヂヤウボンシ)。盛衰記「神通第一の目連、竹杖外道に亡され」

ちくづり 軸釣【名】〔建〕扉の框(カマチ)に軸を設けて釣込みたる裝置。回轉窓障子等の設計にいふ。

ちくづりがなもの 軸釣金物【名】軸釣に要する金具。前條參照。

ちくづりからど 軸釣唐戸【名】〔建〕軸釣にせる唐戸。「たる堤。

ちくてい 築堤【名】堤を築くこと、又築きたる堤。

ちくてい 竹亭【名】庭に竹を植ゑたる亭。

ちくていこ 築堤湖【名】〔地〕『英Walled-lake』えんそくこ(堰塞湖)に同じ

ちくでう 逐條【名】『條(デウ)ごとにの意』條を逐ひて。次第に。逐項。逐件。

ちくでうかいしやく 逐條解釋【名】〔法〕法律の解釋方法の一。各條の意義を順次に解釋するもの。

ちくでうしんぎ 逐條審議【名】會議にて、原案などを、逐條に精細に議すること。

ちくてん 竹簟【名】ちくせき(竹席)に同じ。

ちくてん 逐電【名】『楊子に「九方歅之相レ馬也、雖二未一レ逕レ風逐レ電絕レ塵擊レ影而迅足之勢已見矣」とあり』速力の非常に急なること。跡を晦まして逃亡すること。出奔。絕狩劍本地「御太刀を盜み、逐電したるや」

ちくでん 蓄電【名】〔理〕『英Charge』蓄電器又は蓄電池などに電氣を蓄ふること。充電。

ちくでんき 蓄電器【名】〔理〕『英Condenser』海き不導體(硝子等の)板の兩面に錫箔を塗り、電位差を高めずして、多量の電氣を蓄ふるに便せる裝置。ライデン瓶もその一種なり。

ちくでんち 蓄電池【名】〔理〕『理Accumulator』分極電流の作用を利用して構造したる電池。通常、格子形の鉛版の孔に、二酸化鉛を塡充したるもの數十枚を一つおきに結びて二組とし、その孔に酸化鉛を塡充して、稀硫酸液中に浸し、その二組の鉛版をダイナモの兩極に繋ぎて、強き電流を通ずるときは、分極の現象を生じて、陽極は二酸化鉛となり、陰極は海綿狀の純鉛となりて、蓄電せらる。然るに、兩極を導線にて連結するときは、前と反對に電流おこりて、電池と同一に使用せられ、兩極は硫酸鉛にて蔽はるるに至りて止む、即ち放電せらるる。斯くの如くにして、必要に應じて、何回にても使用することを得。二次電池。副電池。

ちくでんびん 蓄電瓶【名】〔理〕らいでんびん(ライデン瓶)に同じ。

ちくと 竹戸【稱】(一)針などにて刺すさま。(二)針などにて刺されたるがごとくに痛むさま。(三)少しなるさま。ちと。

ちくど 竺土【名】〔地〕てんぢく(天竺)に同じ。「じ。

ちくど 竹笯【名】ちくふじん(竹婦人)に同じ。

ちくとう 竹頭【名】竹の根の切端。

ちくとう 竹頭・木屑(ボクセツ)【句】竹の根の切はしと鋸屑と。

ちくどこ 竹銅鼓・竹銅皷【名】支那の樂器の一。

ちくとう 竹筒草【名】〔植〕ほしくさ(穀精草)を云ふ。〔江戸の方言〕

ちくどん 筑登子【名】古、琉球にて、里之子(サトノコ)に次ぐ、最も低き官。

ちくどんべい 【名】ちくはかり(ちくと許)を云ふ。〔上野國等の方言〕

ちくねん 蓄念【名】胸に蓄へたる念願。今まで心に溜め來れる願。盛衰記「願くは禪家臨行して、供養の蓄念を果し給へ」

ちくの 知久篦【名】信濃國伊那郡知久平(チクダイラ)より産する矢竹。「同じ。

ちくのもの 軸物【名】まきもの(卷物)に同じ。

ちくば 竹馬【名】たけうま(竹馬)に同じ。

竹馬の年(トシ)【句】竹馬に乘りて嬉戲する年頃。幼年。

竹馬の友【句】『共に竹馬に乘りて遊びし友の義』幼少の時の友。をさなともだち。騎竹の交。

竹馬の昔【句】幼少なりし時。

竹馬の好(ヨシ)【句】『晉書』の殷浩傳に「殷浩既廢、桓溫謂二諸人一曰、少時與レ之共騎二竹馬一ことあり』幼時の交遊。

竹馬の童(ワラハ)【句】竹馬に乘りて遊ぶほどの幼年の童。浦島年代記「おおそれは竹馬の童も知ったること」

ちくはい 竹牌【名】敵の射る矢を防止する竹の束。

ちくはく 竹帛【名】『古、支那にては、竹簡・布帛などに書を記ししよりいふ。竹簡を用ひしこと最も古く、帛を用ふるに至りしは秦代以後にして、漢代に紙の發明あるに及び、共に漸く廢絕せり』しよもつ。書册。青史。竹素。「芳名を竹帛に垂る」

竹帛の功【句】書籍の上に書遺さるるほどの大功。

竹帛の名【句】歷史に傳はれる名聲。

ちぐはぐ【名】物の入りまじりて揃はぬこと。かたちんば。ちんば。齟齬。

ちくはく-あん 竹柏園【名】〔人〕なぎその(竹柏園)を見よ。

ちくはつ 蓄髮【名】髮をはやすこと。(僧侶の還俗したる時にいふ)

ちくばりき 軸馬力【名】『英 Shaft horse-power』舶用機關の、螺旋軸の扭(ネヂ)を測定して算出したる正味馬力數。舶用機關の正味馬力は、動力計にて測定するが故に、この方法を取る。

ちくひ 竹皮【名】虎・豹などの毛皮。

ちくひ 逐靡【名】あちこちとなびくこと。まにまになびくこと。

ちくび 乳首【名】ちちくび(乳首)に同じ。

ちくび 蜜鼻【名】〔醫〕小兒の疳病の一症狀。鼻の下の兩邊赤く爛れてかゆきもの。〔漢方醫の語〕

おくひ 軸臂【名】車軸の兩端に車輪を挾入するところ。

ちくふ 竹布【名】竹の纖維にて織りたる布。竹を幾年間も溝の中に浸しおきて、よき頃に取出し、割りて揉みて製すといふ。薩摩國に產す。

ちくふう 竹風【名】竹に戰ぐかぜ。

ちくぶーしま 竹生島・筑夫島【名】〔地〕近江國琵琶湖の北部にある島。東淺井郡竹生(ブ)村に屬し、周回十九町餘、高さ水面上三百尺。景行天皇の御代に湧出せるものとの傳說あり。名寄「目に立てて誰れか見ざらん竹生しま波にうつらふあけの玉垣」

ちくぶしまーしまつなぎ 竹生島島繫【名】近江國にて、三月三日、琵琶湖の竹生島と繼子(ママ)島との間に注連繩(シメナハ)を張りて繫ぎ、心經會(シンギヤウヱ)を行ふこと。しまつなぎまつり。

ちくぶしまーじんじゃ 竹生島神社【名】つくぶすまじんじゃ(都久夫須麻神社)を見よ。

ちくぶしまーまつで 竹生島詣【名】■近江國竹生島の寶嚴寺に參詣すること。■能(ノウ)の狂言の一。暇をも乞はず何處へか赴きたる下人の、主人に行先を問はれて、竹生島詣せし由を僞り答へ、その地の雜香の狀をも作り構へて物語り、遂に言葉詰りて、叱責せらるることを作りしもの。

ちくぶしまーまつり 竹生島祭【名】近江國竹生島の寶嚴寺なる辯才天の例祭。六月十四日及び十五日。

ちくふじん 竹夫人【名】『たうば(湯婆)を見よ』夏日臥す時、涼を取るために、抱きて寢る竹籠。太さ二圍、長さ三四尺乃至五六尺あり。だきかご。竹几。竹筠。

ちくへい 竹篦【名】〔佛〕禪家にて、目藥を點眼するに用ふる具。しっぺい。

ちくべい 竹米【名】竹に結ぶ果。形、小麥に似たり。たけのみ。じねんご。

ちくへう 竹豹・筑豹【名】昔時、尻鞘などに用ふる豹の毛皮の斑紋の大形なるもの。上品とす。

ちくへう 竹票【名】支那の一地方(蘇州)にて行はれし錢切手。竹を以て製し、長さ三寸餘、幅五分。表に烙印を以て發行品名及び價格等を記せり。「ぎれ。

ちくへん 竹片【名】竹のきれはし。たけ

ちくほう-こじ 竹豐故事【名】〔書〕『竹本と豐竹とに關する書なればいふ』操(アヤツリ)芝居及び淨瑠璃の沿革・太夫故人の噂・名人の評、三味線の由來・操人形の來歷等を詳かに記したるもの。三卷。一樂の著。

ちくほうたん 筑豐炭【名】次條の炭田より掘出す石炭。

ちくほうたんでん 筑豐炭田【名】筑前國の遠賀(オンガ)・鞍手(クラテ)・嘉穗(カホ)の三郡及び豐前國田川(タガハ)の四郡に亙れる大炭田。

ちくぼく 逐北【名】にげだすこと。出奔。

ちくぼく 竹木【名】竹と木と。若鳳「谷」山林竹木までを切絕やし」

ちくほふらん 竺法蘭【名】〔人〕ほふらん(法蘭)を見よ。太平記「果して摩騰・竺法蘭・佛舍利並びに四十二章經を渡す」

おくぼん 軸盆【名】卷物を載するための盆。蒔繪などしたるもあり。長一尺二寸、幅四寸六分位を普通とす。

ちくま 筑摩【名】〔地〕つくま(筑摩)の誤。

筑摩の鍋被(ナベカヅキ)【句】「筑摩(ツクマ)の鍋被に同じ。謠曲「女の髮も…大きくいって、なんの事はねえ、筑摩の鍋かぶりといふものだ」

おーぐま 地隈【名】繪畫にて、紙又は絹の地を隈取ること。

ちくまーがは 千曲川・筑摩川【名】〔地〕信濃國にある川。源を佐久郡金峰山より發し、後、犀川と合して信濃川となる。風雅「ちくまがは卷ゆく水はすみにけり消えていく日のみねのしら雪」

ちくまーがは 千隈川【名】〔地〕ちくがは(筑後川)に同じ。

ちくまーはくか 筑摩薄荷【名】〔植〕屑形(シン)科に屬する多年生の草。高さ二三尺。葉は對生、卵狀心臟形にして、淺鋸齒を具ふ。六七月頃花を著く。花は淡紫色にして、紫斑あり。我が國、各地の山野に自生す。

おくまへ 軸前【名】床(トコ)の掛物の前。

ちくみーのーはま 千酌濱【名】〔地〕出雲國にある濱。夫木「出雲なるちくみのはまのかざなぎに漕ぎ出で行けばおきの島見ゆ」

ちくめいじつ 竹迷日【名】ちくすねじつ(竹醉日)に同じ。

ちくめいーせつ 竹迷節【名】前條に同じ。

おくーめん 軸面【名】〔鏡〕『英 Axial planes』

たくめん(卓面)に同じ。

おーぐも 地蜘蛛・地蟢・蠷蟢【名】〔動〕蜘蛛の一種。石の下、立樹の根部等に筒狀の巢を營む。巢は蜘絲と土砂とより成り、地上二三寸に抽出せり。あなぐも。

おくもと 軸本【名】■掛物の、向ひて左の方の端。〔軸元〕(軸先・軸脇に對して)■つのもと(角本)に同じ。

おくもの 軸物【名】かけもの(掛物)に同じ。

ちくや 逐夜【名】每晚。每夜。

おくや 軸屋【名】軸物の賣買又は製作を業とする人、又その家。

ちくやう 畜養【名】かひやしなふこと。

ちくやく 逐約【名】〔數〕和算にて、三箇以上の整數ある時、その中の二つづつに就きて、順次に互約を行ふこと。

ちくよ 竹輿【名】じゅんよ(笋輿)に同じ。

ちくよびたい 地區豫備隊【名】〔兵〕要塞を攻むるに當り、正面を數區に分ち、その各區に置きたる司令官が決戰の場合に使用するために、後方に配備したる豫備隊。

ちくら 竹籃【名】■ちくらさま(竹籃樣)の略。憲多小女郎波枕「ちくら手くらの一夜檢校、終に日なれぬ出立ばえ」■ちくらもの(竹籃者)の略。

ちくらーおきど 千座置戶【名】「千座の置戶」に同じ。〔古語〕起「千座置戶、チクラオキド」

ちくらーがおき 竹籃沖【名】〔地〕古、對馬國と朝鮮との間にありし潮流の速き沖。狂言目近大名「唐(タウ)と日本の堺にちくらがおきといふ所が有る。そこの田をみねどしの田と申す」

ちくらく【名】ちくらっぱしに同じ。〔美濃國・下野國・常陸國の方言〕。根蘖枝毛。ちくらく言ふな」

ちくらーさま ちくら樣【名】物事の何れとも附かぬ狀態。ちくらもの。ちくらやう。和訓栞「物事のどちらへもつかぬに、ちくら樣ともちくら者ともいふは、對馬の海中にちくらが沖といふ處あり…、心權度なきこと、落なきをちくらが沖に漂ふとは云へるなるべし…。一說に、罪を贖ふに千座置戶の事、神代紀に見えたり。よって、罪過ありて、贖物(アガモノ)にて事を濟すより、ちくらも

のと云ふともいへり。或はてくらとも云ふ。ちとてと通ず」

ちくら-っぱし【名】てたらめを言ふこと。ちくく。ちくらく。ちくらっぽう。〔上野國館林の方言〕

ちくら-っぽう【名】前條に同じ。〔下野國の方言〕

ちくらん【名】〔植〕まつばらん(松葉蘭)に同じ。

ちくらん-さう【名】〔植〕竹蘭草 ㊁前條に同じ。 ㊁はなめうが(花藘荷)を云ふ。〔薩摩國の方言〕

ちくらん-たう【名】〔植〕はまだいこん(濱大根)に同じ。〔方言〕

ちくらん-もの【名】ちくら者 ㊁ちくらざま(ちくら樣)を見よ。

ちくら-やう【名】竹籬樣 ㊁ちくらざま(ちくら樣)に同じ。

ちくり【名】竹籬 ㊁竹のまがき。たけがき。

ちくり【名】竹裏。竹裡 ㊁竹やぶの中。竹間。

ちくり【貌】ちくりと に同じ。

おくり-つ【名】軸率 ㊁『英Parameter ratio』結晶體の晶面の結晶軸を切る割合。晶面の位置方向を決定するもの。

ちくり-と【貌】ちくと に同じ。 犬子集「月はちくりと萩にうつろふ」

ちくり-ん【名】竹林 ㊁竹のはやし。たかばやし。たかむら。

ちくりん【句】しちけん(七賢) ㊁を見よ。

ちくりん-じ【名】竹林寺 ㊁大和國磯城(シキ)郡上之鄕村大字笠村に在る寺。驚峰山と號す。藤原不比等(フヒト)の創建。古來の名刹なりしが、今は荒廢して、一小堂を存するのみ。 ㊁攝津國西成(ナリ)郡九條村尻無川の西岸にある淨土宗の寺。本尊は阿彌陀佛。敎譽上人の開基。

ちくりん-しゃうじゃ【名】竹林精舍 『梵Venuvanaの譯語』古代印度の五精舍の一。迦蘭陀(Karanda)長者が所有の竹林を釋迦に奉りて建てしもの。位置は摩揭陀(マカ)國王舍城と上茅城との間。印度僧園の始にして、後世これに擬したる同名の寺院、支那及び我が國に多し。一名、迦蘭陀竹園(カランダチク)(ヂヱン)。平家「佛の法を說きたまひし竹林精舍給孤獨園も、この頃は、虎狼野干のすみかとなりて」

ちくりん-てう【名】竹林鳥【動】おほるり(大瑠璃)に同じ。

ちくりん-は【名】竹林派 弓術の流義の一。日置流の一派。永祿の頃、石堂竹林如成の創始せるもの。

ちくりん-ゐん【名】竹林院 大和國吉野(ヨシ)郡吉野町にある天台宗の寺。吉野衆徒の遺院たり。

おぐる【動自】『おぐち(地口)をしひて動詞としたるもの』下手なる洒落を言ふ。地口。〔俚語〕

ちぐるま【名】地車 物を運ぶ大きなる車。低くして四つの輪あり。

ちくるゐ【名】畜類 ちくしやう(畜生)に同じ。

ちくれき【名】竹瀝 竹のあぶら。たかあぶら。

ちくれつ【名】〔兵〕軸列 海軍にて、正面變換の際、廻頭の樞軸となる艦列。

ちくれん【名】竹簾 竹のすだれ。

ちくろ【名】竹露 『ちくえふ(竹葉) ㊁を見よ』さけ(酒)の異稱。

ちくろ【名】蟋蟀(コホロギ)の鳴く聲。 ちくろと參照。

ちくろ【名】舳艫 船首と船尾と。へさき、とも。艫舳。一說に舳は船尾、艫は船首なりといふ。

舳艫相銜む【句】『蘇軾の赤壁賦に「舳艫相銜旌旗蔽空」とあり』多くの船が、前後半ばぐらゐづつ重なりあひて續く。「銜尾(カン)相隨ふ」參照。

舳艫千里【句】『漢書の武帝紀に「舳艫千里薄二蒐陽一」とあり』多くの船の前後相連るさま。

おーぐろ【名】地黑 太平記「地縮(ヂヂミ)の直垂(ヒタヽレ)」

ちくろう【名】竹籠 ㊁竹を用ひて作りたる食籠(ジキロ)。 淨瑠璃「竹籠、竹食籠」

ちくろく【名】逐鹿 『「中原に鹿を逐ふ」を見よ』帝位を爭ふこと。 ㊁政權又は地位を獲んとして競爭すること。 ㊂議員選擧の際、候補者となりて競爭すること。

ちくろと【名】【動】『ちくろは蟋蟀の鳴聲にて、「ちくろと鳴く」とありしを「ちくろと」にて、名詞として誤り用ひしものなるべし』こほろぎ(蟋蟀)の異稱。ちろろむし。〔古語〕夫木「さらぬだに草の枕は露けきに爭ひて鳴く夜はのちくろと」

ちくわ【名】智化 智力のよくはたらくこと。太平記「深慮智化の老臣、近侍の人人にも仰せあはさるることとて」

ちくわ【名】智火 【佛】智は煩惱(ナウ)の薪を燒くを以て、火に譬へたること。

ちくわ【名】治化 人民ををさめみちびくこと。「淸明の治化に浴す」

ちくわ【名】竹輪 かまぼこの類。種種の魚肉をよく擂(ス)りて、太き竹串に圓く長く塗りつけ、徑五六分の竹を周圍に卷きつけて疱を付け、ゆでて後、串を拔きたるもの。ちくわかまぼこ。

竹輪の蒲鉾(カマ)【句】前條に同じ。 樓隱比事「煉味噌に竹輪の蒲鉾」

ちくわ【名】地火 曆の中段の凶日の一。陰陽家にては、この日、地に火氣ありとて、草木を植ゑ、礎を据うる等、すべて土を動かすことを忌む。

ちくわい【名】馳廻 「廻ること。かけめぐること。はせめぐること。

ちくわい【名】地外 一定の地域のそと。

ちくわい-はふけん【名】治外法權 『英Extraterritoriality又はExtoriorialityの譯』【法】他國に在るとき、その所在國の法律に從はず、本國の法律に支配せらるべき特權。又、一國が他國の領域内に於て、自國の法律を施行し得る特權。 ないちざっきよ(内地雜居)參照。 ㊁規定の範圍外。

ちくわう【名】智光 【佛】ちゑくわう(智慧光)に同じ。

ちくわう【名】智光 【人】學僧。俗姓は鋤田。河內國の人。大和國元興寺に住す。始め、禮光と共に智藏に師事し、三論宗を受け、禮光の寂後、念佛門に歸す。

智光の淨土曼陀羅【句】日本三曼陀羅の一。元興寺の僧智光、夢中に感得したる淨土の相を曼陀羅に作り、極樂寺を創して、これを安置せしもの。彌陀三尊を中心として、寶地寶樓寶樹等を現はし、極樂の莊嚴を示せり。

智光の曼陀羅【句】前條に同じ。 十訓「顯光、さきにかくれにけり。智光、その生所を見んと願ひて、夢中に極樂に參りて、顯光が先立ちて生れたる有樣を見けり。さて、その樣を繪に書きたるを、智光が曼陀羅とて、世に傳へたり」

ちくわう-し【名】地皇氏 【名】支那三皇の一。太古の草創の世、火德を以て王たり。

ちくわ-かまぼこ【名】竹輪蒲鉾 ちくわ(竹輪)に同じ。

ちくわき【名】軸脇 【名】掛物の、軸の中ほどの部。(軸先、軸元に對して)

ちぐわつ【名】智月 【名】【佛】智の光明なるを月に譬へていふこと。「同じ。

ちくわ-にち【名】地火日 【名】ちくわ(地火)になること。おそきこと。

ちくわん【名】遲緩 【名】のろきこと。ゆるやか。 ㊁㊂に同じ。

ちくわん【名】置換 【名】【化・數】おきかへ(置換)

ちくわん-さよう【名】置換作用 【名】【化】おきかへ(置換) ㊂に同じ。

ちくわん-じ【名】知官事 【名】明治元年に設置せられたる神祇官・會計官・軍務官・外國官・刑法官及び同二年に設置せられたる民部官の長官。親王・諸王公卿・諸侯の中より選任せられ、各その官事を總判せし勅任官。同二年廢止せらる。

ちくわん-せうきよはふ【名】【數】だいにふせうきよはふ(代入消去法)に同じ。

ちくわん-ろん【名】【數】置換論 置換の群の性質を論ずるもの。方程式の研究上、重要なりとす。

ちくわ-ろ【名】地火爐 【名】ちろ(地爐)に同じ。桑苧地火爐のもとに居並みて、おものの事、いそぐめり」

ちくゐ【名】竹葦 【名】 ㊀たけと、よしと。 ㊁物の多數集り滿ちたるさまにいふ語。

竹葦稻麻【句】『維摩經の法供養品に「三千大千世界如來滿中、譬如二竹葦稻麻叢林一」とあり』前條 ㊂に同じ。

ちくゐん【名】竹院 【名】庭に竹を植ゑたる書院。

ちくぶん 竹園・竹苑【名】㊀竹の植ゑてあるところ。たけぞの。たけばやし。㊁『地道志に「梁孝王東苑方三百里、即兎園也、多植ル竹、中有二修竹園一」とあり』皇族。たけのその。くれたけのその。たけのそのふ。㊂〔佛〕ちくりんしやうじや・竹林精舎に同じ。竹園の連枝【句】皇子と親王とをいふ。前條㊀參照。

ちげ 地下【名】㊀昇殿をゆるされぬ官人。昇殿は、官位に依らず、人に依りてゆるされしかば、公卿といへども、勅許の後、はじめて昇殿するを得ることなりしが、後世は家格として、一定するに至れり。しもびと。堂下(ダウ)。(堂上に對して)「甚」殿上人、地下なるも、陣に立ちそひ」大鏡「地下の上達部(カンダチメ)」「地下公卿」㊁禁中に奉仕する人より、その以外の人をいふ稱。地下の舞【句】地下の人の舞。(「殿上の舞」に對して)增鏡「そのほど、舞人ひざまづく。地下の舞は、日馴れたる事なれど」

ちげ 治下【名】㊀支配の下。配下。ちか。㊁管轄内の村里。**ちげもくろく**地下目錄)參照。日本振袖初「毎年の人身御供、何處に印立つべきぞと、ちげ中手分て窺ふところ」

ちけい 地景【名】土地の情景。土地のおもむき。土地の樣子。

ちけい 地形【名】土地の高低・傾斜等の形。地勢。

ちけい 地頸【名】〔地〕ちけふ(地峽)に同じ。

ちけい 智慧【名】ちゑ(智慧)に同じ。

ちけい 智計【名】ちぼう(智謀)に同じ。

ちけい 致敬【名】敬意をつくすこと。敬禮を致すこと。

ちけい 致景【名】『致は趣』けいち(景致)に同じ。

ちけい 笞刑【名】五刑の一。罪人の臀を笞にて打つ刑。支那・朝鮮及び我が國の古に行はれ、大寶律にては、五等に分かち、十より五十に至る。笞罪。

ちけい 雉經【名】『國語晉語に「申生雉二經於新城之廟一」註に「雉經、頭捨而懸也」とあり』縄にて咽喉をしめて死すること。

ちけい 持敬【名】敬を持すること。平素敬虔なること。居敬。

ちけいがく 地形學【名】『英 Topography 獨 Morphologie』地球表面の相貌たる海陸・山河等の起伏等に對して、一定の秩序を立てて、その形態を明かにし、その原因を究め、更に地形が將來如何に變遷推移すべきかを推考する學。陸界地理學。

ちけいせん 地形線【名】〔地〕さうかうせん(等高線)に同じ。

ちけいそくりやう 地形測量【名】『英 Topographicalsurvey』地表の起伏せる狀態を測定し、其の高低・位置等を量ること。

ちけいづ 地形圖【名】〔地〕『英 Topographical map』地形測量の結果を表はしたる圖。普通に等高線又はぼかしを用ひて表はす。

ちけいていさつ 地形偵察【名】地形の如何目的に「何を探ること。

ちけいはんだん 地形判斷【名】或目的に地形の適合するや否やを判斷すること。

ちけいらん ちけい蘭【名】〔植〕蘭科に屬する多年生の草。某部に塊莖ありて、これより葉を生ず。葉は廣披針形にして、淡綠色を呈す。秋季、花莖を抽きて、花を著く。花は黃褐色、十餘箇相集りて、總狀花序に排列す。我が國、各地の山間に自生す。ちくけいらん。ちくかくらん。

ちげう 知曉【名】しりさとること。通曉。

ちげがた 地下方【名】地下の人たち。

ちげき 絺綌【名】『詩經の國風葛覃篇に「爲絺爲綌、又、論語に「當暑袗絺綌、必表而出之」とあり』くずぬの(葛布)に同じ。

ちげざむらひ 地下侍【名】身分いやしき侍。

ちけじ 知家事【名】㊀昔、親王及び攝關家の政所の職名。令の次位にあるもの。㊁鎌倉時代の政所(コドロ)の四員の一。案主に次ぎて、文案に官職・姓名を連署せしもの。初、菅野・清原兩氏の世職たりしが、建治年中以後は、職を失ひしものの如し。

ちけつ 地血【名】〔植〕㊀あかね(茜草)に同じ。㊁むらさき(紫草)に同じ。「液。

ちけつ 痔血【名】痔疾のために出づる血

ちげにん 地下人【名】㊀ちげ(地下)に同じ。庭訓往來「地下文書事、或紛失、或失墜錯亂之由」㊁官に仕へぬ者。官位なきもの。土著の民。

ちけふ 地峽【名】〔地〕『峽の字の音、正しくはかふ』陸地と陸地との間を繋ぐ、狹き地。半島の頸部に多し。地頸。(海峽に對して)

ちげふう 地下風【名】舊套を脫して調高く、清新にして自由なる歌の姿。(堂上(ダウ)風に對して)

ちけぶり 血烟・血煙【名】次條に同じ。

ちけむり 血烟・血煙【名】人を斬りたるとき、血の迸ること。「烟」に同じ。

ちげむり 地烟・地煙【名】つちけむり(土煙)に同じ。

ちけん 地檢【名】けんち(檢地)に同じ。

ちけん 地券【名】㊀土地所有の證として、官府より下付せし文書。㊁明治二十二年以前、政府より人民に、土地所有の證として、坪數・地價等を記入して下付せしもの。沽券。地券狀。㊂えいたいしやくちけん(永代借地券)の略。

ちけん 知見・智見【名】知慧と見識と。國姓爺合戰「智見の目には上十五、下十五夜と見つれども」「長官。

ちけん 知縣【名】支那にて、各省の縣の智の劍(ケン)。保元「尊意智劍を振りしかば、刑罰將門に加ふ」「じ。

ちけん 智劍【名】〔佛〕智慧のよく物事を決斷する能力を劍に譬へていふ語。ちゑ。

ちげん 智眼【名】〔佛〕ちがん(智眼)に同じ。

ちげん 知言【名】よく事物に通曉せる言。

ちけんじ 知縣事【名】明治元年に設置せられたる縣の長官。一等より三等までの階級ありて、一等は勅任官、他は判任官たりしが、同二年縣知事と改稱せられたり。ごんちけんじ(權知縣事)參照。「に同じ。

ちけんじやう 地券狀【名】ちけん(地券)㊁に同じ。

ちけんはらみつ 知見波羅密【名】〔佛〕ちゑはらみつ(智慧波羅密)に同じ。

ちげもくろく 地下目錄【名】『地下は借字、正しくは治下』その地の民の戶數と人口とを記したる文書。地下文書。庭訓往來「地下目錄・取帳(トリチヤウ)以下文書」

ちげもんじよ 地下文書【名】前條に同じ。庭訓往來「地下文書事、或紛失、或失墜錯亂之由」

ちご 地壺【名】〔地〕きよくわ(亙鍋)に同じ。

ちご 地戶【名】ごこ(土戶)に同じ。

ちご 知客【名】〔佛〕禪寺にて、來客の應接の事をつかさどる役。

ちご 稚兒・兒【名】『乳兒の意』㊀乳を呑む子。みどりご。赤子。㊁わらべ。わらはべ。小供。㊂寺院にて、僧に召使はるる少年。おちご。稚兒若衆。㊃寺にて、祭禮・法樂・繞堂(ネウダウ)などの時に、天童に扮する童男・童女。天冠を戴き、水干・直垂などを著け、指貫を穿き、手に華盤を執りて、花を散らしながら、上堂の大衆の間に加はりて歩む。おちご。「稚兒、二山王【句】山王の神よりも、稚兒の方が、勢あり。〔諺語〕鹽山(天江出)「神だにも、一稚兒、二山王と立てたまふは、神を避ぐるよしぞかし」柳亭筆記「一稚兒、二山王とは、比叡山にて、稚兒を尊むより言ひそめし諺なり」「もの。

ちご 兒隼【名】小鷹の一種。鳥を取らぬ。

ちご 【名】ちご(祖父)を云ふ。〔奥州の方言〕

ちご 持碁【名】碁を打ち果てて、勝負なきこと。あひこの碁。

ちごいしや 稚兒醫者【名】せうにいしや(小兒醫者)に同じ。丹波與生「稚兒醫者は、御輿つき」

ちこう 地口【名】次條を見よ。

ちこう 地口天海を呑む【句】『出所、詳かならず』下下の者ども威を振ひ、上に立つ者、却つて衰ふ。太平記「地口天海を呑むといふ變なれば、いかにも、下剋上の謂にて、師直、まづ勝つべし」

ちこう 池溝【名】㊀いけと、みぞと。㊁〔地〕『英 Geologic mont』地殼に平行せる斷層を生じ、その中間に挾まれて生ずる陷落せる帶狀の低地。例へば亞細亞土耳古なるヨルダン(Jordan)の谷、我が國の瀨戸内海と大阪灣と琵琶湖とを連ぬる一線の類。渠狀斷層。地溝帶。「同じ。

ちこうたい 地溝帶【名】〔地〕前條㊁に

ちこうつくしみ 稚児愛・兒愛【名】ちごを慈(クッ)しむこと。をさなごをかはゆがること。〔古語〕源氏、ちこうつくしみ給ふ御心にて」

ちこうれう 池溝料【名】池溝を修造する費用に充つるもの。

ちごえ 地肥【名】燒土・壁土(ツチ)などを、肥(コエ)として、田畑に施すもの。

ちごえんねん 兒延年【名】ちごの演ずる延年の舞。えんねん(延年)㊀參照。

ちごおひ 乳兒生・兒生【名】乳兒の生ひたつこと。ちごそだち。をさなだち。〔古語〕榮花「上の御ちごおひ、ただ斯うぞおはしましし」

ちごがしら 稚兒頭【名】稚兒の頭の如く彫みたる柱頭。主に袖柱の上端等に用ふ。

ちごかっしき 稚兒喝食【名】男の髪の結ひ方の一。髪を髻(モヒ)にて結ひ、後に下げ、肩にとどく樣にせるもの。貴公家の子息などゆひたり。

ちごかはう 稚兒貿はう【名】元祿頃に、貧婦の里子を預らんとて、口入人に相談し、口入人はその女を連れて、町町を、「稚兒買はう、稚兒買はう」と呼ばはりあるきしもの。

ちごかひ 稚兒買【名】前條に同じ。

ちごがふち 稚兒淵【名】〔地〕相模國江の島にある淵。古、相承院の稚兒白菊の投身せしより名づく。

ちごがほ 稚兒顏・兒顏【名】をさながほ。童顏。狹衣「ちごがほの、よにしらず美しうものしたまひしを」

ちごかんちく 稚兒寒竹【名】〔植〕寒竹の一變種。矮小にして優雅なるもの。盆栽として愛翫せらる。

ちごぎあみ 地漕網【名】漁具の一。地引網に類似し、散在せる魚族を一處に集めて捕獲するもの。使用には五十餘人の漁夫を要す。

ちごぎみ 稚兒君・兒君【名】貴人の赤兒の敬稱。榮花「ちご君も、同じものに入れ奉り、かきそへて、御懷に抱きたるやうにし」

ちごぎやうだう 稚兒行道【名】稚兒㊃の練りゆくこと。

ちこく 治國【名】國を治むること。民をを治むること。をさなごをかはゆがること。

ちこく 治國の三常【句】國を治むるにつきての三つの事がら、卽ち君は賢を擧げ、官は賢を任じ、士は賢を敬ふこと。

ちこく 治國の四術【句】國を治むるにつきての四つの術、卽ち忠愛・無私・用賢・簡能。

ちこく 治國、平天下【句】『大學の四綱領』を見よ』世の中を治め安んずること。

ちこく 遲刻【名】刻限よりおくるること。

ちこく 持國・治國【名】〔佛〕おこくてんわう(持國天王)に同じ。平家「多聞・持國、二人の童子に現ず」太平記「譬へば多聞・持國・增長・廣目の四天、須彌(シュ)の四方に住んで、同時に放つ矢を」

ちごく 地獄【名】㊀〔佛〕『梵Naraka(那落迦)又Nirāya(泥犁)の譯語。不樂・可厭の義、譯して地獄(地下なる牢獄の意)といふ』十界の一。六道輪廻(エ)の最下層にありて、罪障最も深き者の往生して、苦報を受くといふ所。鬪擊これを主宰し、鬼類これに屬して、罪人を呵責すといふ。普通には八大地獄及び八寒地獄を指していへど、なほその各に附屬する小地獄ありて、すべて百三十六を數ふとも記さる。ならく。冥府。地獄界。地獄道。ろくだう(六道)・三種の地獄」參照。水鷄、次に人生れ、餓鬼畜生出でて、はてに地獄は出でてくるなり」㊁〔基〕罪深くして、永遠に刑罰・苛責を受くといふ幽府と、漸次罪を淨めて、終に天上に上る階梯となるといふ煉獄との總稱。㊂苛責を受くる所。難義の場所。獄屋の如き所。㊃噴火山などの、火氣地中に鬱積し、斷えず烟の出づる所。㊄私かに婬を賣(ヒサ)ぐ女。私窩子。密淫賣婦。

ちごく 地獄から飛脚に來(ク)る【句】人の痩せてある譬。〔諺語〕

ちごく 地獄から火を取りに來(ク)る【句】前條に同じ。〔諺語〕

ちごく 地獄から抹香の相場を聞きに來(ク)る【句】前條に同じ。〔諺語〕

ちごく 地獄・極樂の道も錢(ゼ)【句】何處にきても、錢を要せざる地なし。〔諺語〕

ちごく 地獄極樂はこの世に在り【句】惡を働けば心なやみ、善を爲せば心樂し。〔諺語〕

ちごく 地獄で佛【句】次條に同じ。〔諺語〕

ちごく 地獄で佛に逢ふ【句】困難を救はれたる時の嬉しさの譬。地獄の地藏。地獄で佛。〔諺語〕

ちごく 地獄にも鬼ばかりは無い【句】世路辛き浮世にも、仁恕の者あり。〔諺語〕

ちごく 地獄の上の一足飛(クワンビ)【句】危きことをなすさまの譬。〔諺語〕異途贅牘「詮議にくるは今の事、地獄の上の一足とび、飛んでたもやと」

ちごく 地獄の馬【句】㊀地獄にありといふ、人面を具へたる馬。㊁人面獸心の意にて、他人を嘲りていふ隱語。

ちごく 地獄の馬で面(ツラ)ばかり【句】地獄の馬は、面だけが人間なるより、人面獸心をいふ。〔諺語〕

ちごく 地獄の馬は胴から成る【句】地獄の馬は、胴以下が獸身なり。〔諺語〕

ちごく 地獄の釜【句】地獄にて、罪人を煮るに用ふといふ釜。正月と盆との十六日にかぎり、鬼どもその釜の蓋をあけて、罪人をゆるすといふ。

ちごく 地獄の釜焦(カマ)【句】地獄の釜の底の火に焦げるところに行くべきほどの極惡なる人。

ちごく 地獄の釜の蓋(フタ)も開(ア)く【句】地獄の釜の蓋さへも開くといふ日。正月十六日と盂蘭盆の十六日。此の日は如何なる人も休息すべしといふこと。〔諺語〕今宮心中「盆・正月の十六日を待ち樂しみし我れ我れが、あはれ地獄の釜の蓋、開くを待つべき罪人と、呵責の責はよもやその」

ちごく 地獄の業風(ゴフフウ)【句】〔佛〕ごふふう(業風)を見よ。平家「かの地獄の業風なりとも、これには過ぎじと見えし」

ちごく 地獄の業力(ゴフリキ)【句】〔佛〕地獄に墮つる原因となる惡業(ゴフ)の力。

ちごく 地獄の沙汰も金次第【句】いかなる苦境に陷りても、金だにあれば、思ふがままになる。成るも成らぬも金次第。阿彌陀も金ほど光る。〔諺語〕「談事。

ちごく 地獄の相談【句】暗きところでの相談。

ちごく 地獄の下積(シタヅミ)【句】「大名は地獄の下積」を見よ。

ちごく 地獄の責(セメ)【句】㊀死人が地獄にて責め苦しめらるること。㊁むごく責め苦しめらるること。樵歌「既に危き地獄の責」同じ。〔諺語〕

ちごく 地獄の地藏【句】「地獄で佛に逢ふ」に同じ。

ちごく 地獄は壁一重(ヒトヘ)【句】人の罪を犯し易きことの譬。〔諺語〕

ちごく 地獄へ投金(ナゲガネ)【句】無益に金錢を費すこと。〔諺語〕

ちごく 地獄も極樂も目の前にある【句】地獄も極樂も、現在の世の中の姿なれば、常に汝の眼前にあり。「じ。〔諺語〕

ちごく 地獄も住家(スミカ)【句】「住めば都」に同じ。

ちごく 三種の地獄【句】〔佛〕根本地獄・近邊地獄・孤獨地獄の稱。根本地獄は等活・黑繩・衆合・號叫・大號叫・炎熱・極熱・無間の八大地獄より成り、近邊地獄は焰熾增・屍糞增・鋒刃增・烈河增より成れり。此の四地獄は一大地獄の四方に何れにも屬す故に、一大地獄に十六增の近邊地獄、八大地獄に百二十八增の近邊地獄あり。これに根本地獄の八と合算し、總數百三十六地獄をなす。「を見よ。

ちごく 見て地獄【句】「聞いて極樂、見て地獄」

ちごくあみ 地獄網【名】坪網の一種。枡立網を改良せしもの。淺海の魚區に定置して、入り來る魚を捕ふるに用ふ。北條五代記「地獄網といふ大網を作り、網の兩端に二人して持つほどの石を二つ括り附け、これを千貫石と名づく。二筋網を附け、長さ三尺ほど・幅二三寸の木をぶりと名づけ、大網のところどころに、千も二千も附くる。」早舟一艘に水手六人づつ、七艘に取乘り、大海へ出て、網を掛け、兩方へ三艘づつ引分けて、大網を引き、一艘はことり舟と名づけ、網もとに在りて、左右の網のさし引する。この網の內にある大魚・小魚、一つも、外へ洩るることなし」

ちごく-おとし 地獄落【名】鼠落の一種。餌にて鼠ををびき寄せ、その食はんとする途端に、押の板落ち、打たれて死ぬるやうに仕掛したるもの。ごくらくおとし。門出入鳥「側なる大石押取って、背骨に摚と押かけ、さあ鼠どのちゆうともいへと、地獄落に押付くれば」丹波與作「これぞこの世の地獄おとし、かかる鼠のごとくなり」

ちごく-おぼえ 地獄覚【名】ちごくみみ(地獄耳)に同じ。

ちごく-かい 地獄界【名】〔佛〕『十界の一なるよりいふ』ちごく(地獄)㊀に同じ。

ちごく-かい 地獄貝【名】地獄㊄を買ひて遊興すること、又その人。

ちごく-く 地獄苦【名】〔佛〕五苦の一。地獄にて受くる苦患(クヮン)。

ちごく-ぐさ 地獄草【名】〔植〕どくだみ(戯菜)を云ふ。〔伊勢國の方言〕

ちごく-くさび 地獄楔【名】楔の一種。枘先(ホゾサキ)に楔目(ホゾメ)を入れ、これに楔を半ば差込み、枘が他の木の穴に嵌め打込まるるに隨って枘の先、扇形に廣まり、抜け出づることなし。ちごくほぞ。わりくさびほぞ。またぎほぞ。

ちごく-しゆ 持國主・治國主【名】〔佛〕ちこくてんわう(持國天王)に同じ。

ちごく-しゆ 地獄趣【名】〔佛〕ちごく(地獄)㊀に同じ。

ちご-くすし 乳兒醫師【名】せうにいしや(小兒醫者)に同じ。きのふはけふの物語「あるちごくすしの處へ、御乳(オチ)の人、子を連れて行き」若風俗「表向は兒藥師と見せかけ、一家中軍學の指南して渡世す」

ちごく-そば 地獄蕎麥【名】〔植〕どくだみ(戯菜)を云ふ。〔奥羽の方言〕

ちごく-たいふ 地獄太夫【名】〔人〕和泉國堺北の庄高須町珠名(タマナ)長者の抱(カカヘ)の妓。容姿艶麗、常に地獄變相の繡衣(イシヤウ)を著る。僧一休と禪の問答をなせり。歿後八木郷久米寺に火葬す。今の女郎塚これなりといふ。

ちごく-だう 地獄道【名】〔佛〕『六道の一なるよりいふ』ちごく(地獄)㊀に同じ。

ちごく-ぢやや 地獄茶屋【名】地獄㊄を抱へて、賣淫せしむる茶屋。あいまいぢやや。

ちごく-てん 持國天・治國天【名】〔佛〕次條の略。

ちごく-てんわう 持國天王【名】〔佛〕『梵Dhritarāṣṭra(提頭賴吒)の譯語』四天王の一。東方を守護すといふ。提頭賴吒天(ダイツタテン)

ちごく-の-かまのふた 地獄釜蓋【名】〔植〕きらんさう(金瘡小草)に同じ。

ちごく-はざま 地獄狹間【名】昔時、城壁の塀と石垣と相接する所に設けたる方形の狹間。「むま腹。

ちごく-ばら 地獄腹【名】女子のみを産む腹。

ちごく-へん 地獄變【名】〔佛〕次條の略。著聞「地獄變の屏風」

ちごく-へんさう 地獄變相【名】〔佛〕八大地獄の、機に應じて、種種に變現する光景。古來これを描ける繪甚多く、地獄繪と呼ぶ。

地獄變相の屏風【句】地獄繪の屏風。古、朝廷にては、十二月晦日御佛名の時にこれを立つる例なりき。又、現今傳はるものにては、近江國來迎寺所藏の、惠信僧都筆の物、最も著る。

ちごく-みみ 地獄耳【名】聞きたることを忘れぬ耳。ちごくおぼえ。

ちごく-むし 地獄蟲【名】〔動〕㊀あぶびさり(後びさり)の㊁異稱。㊁ありぢごく(蟻地獄)に同じ。

ちごく-めぐり 地獄廻【名】地獄を經めぐること。丹波與作「ちごくめぐりを思ひだす」

ちごく-ゑ 地獄繪【名】ちごくへんさう(地獄變相)を見よ。

地獄繪の屏風【句】「地獄變相の屏風」に同じ。杜「御佛名のあした、地獄繪の御びやうぶ取出して、宮に御覽ぜさせたまふ」

ちごく-をんせん 地獄溫泉【名】肥後國阿蘇(ア)郡阿蘇山中にある溫泉。泉質は酸性泉に屬す。

ちご-ごけ 地苔【名】〔植〕ちい(地衣)に同じ。

ちご-こしやう 稚兒小姓【名】ちご(稚兒)㊂に同じ。

ちご-ざくら 稚兒櫻【名】〔植〕『花の紅色を含みて美しく愛らしきをいふか』山櫻の一種。花は白く小さくして、まばらに開き、瓣は内方へ反(ソ)る。

ちござさ 稚兒笹・間道竹【名】〔植〕禾本科に屬する多年生草。莖は高さ一二尺。葉は細長披針形にして、初夏花を著く。花は小球狀にして、多數集りて疎なる總狀花序を成す。我が國、各地のやや水濕ある處に自生す。しまざさ。やなぎざさ。わうごんちく。ちごだけ。

ちご-すがた 稚兒姿【名】㊀をさなき時の姿。㊁古昔、童子の、髮の端を喝食(カツヂキ)の如く切揃へずして、自然のままにし、平元結にて結びて垂れ下げたるもの。

ちご-そだち 稚兒育【名】ちごおひ(稚兒生)に同じ。

ちご-だけ 稚兒竹【名】〔植〕ちござさ(稚兒笹)に同じ。

ちごだひ 稚兒鯛【名】〔動〕ちだひ(黃參)

ちご-つ 地骨【名】〔鑛〕いし(石)㊀の異稱。

ちご-つ 恥骨【名】〔醫〕『獨Schambein』無名骨の一部。腑白の前下部をなし、一體二枝を有し、小骨盤の下方に於て接合す。ちつきゅう(恥骨弓)參照。

ちごつ-きん 恥骨筋【名】〔醫〕恥骨地平枝に起りて、大腿骨櫛内脣の上部に連なれる筋。大腿を内轉するの作用をなす。

ちごつ-きゅう 恥骨弓【名】〔醫〕『獨Arcus pubis』恥骨の二枝の接合部に於て作る隅角。男子にありては鋭角、女子にありては鈍角なり。

ちご-つぴ 地骨皮【名】枸杞の根の皮を、藥用とする時の稱。

ちごとんぼ 稚兒蜻蛉【名】〔動〕あかとんぼ(赤蜻蛉)を云ふ。〔越後國の方言〕

ちご-の-まひ 稚兒舞【名】〔植〕おきなぐさ(翁草)㊀に同じ。

ちごばしら 稚兒柱【名】四脚(アシ)鳥居などの小柱。そでばしら。

ちごばな 稚兒花【名】〔植〕㊀おきなぐさ(翁草)㊀に同じ。㊁こごめばな(小米花)に同じ。

ちごばみ 乳兒食【名】乳呑子が、乳首を咬みて傷くること。〔古語〕蜻蛉「いたうわづらひ給ふ時は…ちごばみにはみたまふおそろしとて、いだきたまはず」

ちご-はやぶさ 稚兒隼【名】〔動〕鷹の一種。隼に酷似して更に小さく、體長一尺二三寸。上面は石磐樣灰色、下尾筒及び中央尾羽に黑色條斑なく、老鳥は腹の羽毛の焦茶色なるを特徴とす。北海道に多く產す。訓練して、鷹狩に用ふることを得。

ちごびな 稚兒雛【名】雛の一種。稚兒の形を雛に作りしもの。文政の頃流行せり。

ぢ-こぶ 地瘤【名】㊀土地高く、丘狀をなすもの。㊁山の下をいふ。俚言集覽「山の下を、ちこぶといふ」奴僕譚「地瘤なしぼっちうされん伏猪ども」

ちごまげ 稚兒髷【名】ちごわ(稚兒輪)に同じ。

ちごみこ 稚兒御子【名】貴人の子の極めて幼きもの。增鏡「兒御子の御衣の袂二腳、階隱(ハシヂ)の間に舁立つ」

ちごみや 稚兒宮【名】極めて幼き皇子又は皇女。蜻蛉「ちごみやのいみじうあわてさせたまふ程の美しきにも、東宮のいといみじうおよすげさせたまふ程を」

ちごむね 稚兒棟【名】〔建〕隅棟にて、瓦を軒より少し上に置き、更に短き隅棟を軒まで設けたるもの。

ぢ-こんがう 持金剛【名】〔佛〕しふこんがう(執金剛)に同じ。

ちごめず 稚兒鵐【名】〔植〕ががいも(蘿蔔)に同じ。

ちごめず 稚兒鵐【名】〔動〕燕雀(エンジヤク)類に屬する鳥。背は濃茶褐色にして、黑色の横條多く、虎文(トラ)を成す。頭上より後頸に亙りて、灰色を呈す。頰部は黑けれども、白眉を有せず。翼も尾も赤黑色。下面は全部白色なり。支那の沿海地方に多く、我が國にも少しく產す。とらもず。

ちごゆり 稚兒百合【名】〔植〕百合(ユリ)科に屬する多年生草本。山林などに自生し、莖の高さ五六寸。葉は楕圓形にて尖り、平行脈を有す。四五月頃、莖頂に白色六瓣の花を開く。觀賞用に適す。

ちごわ 稚児輪【名】女の髪の結ひ方の一。十歳位の女児、又は寺の稚児のゆふもの。ちごまげ。ちごわげ。

（わごち）

ちごわかしゆ 稚児若衆【名】ちご(稚児)[二]に同じ。

ちごわげ 稚児髷【名】ちごわ(稚児輪)に同じ。

ちごわらは 稚児童【名】ちご(稚児)[二]に同じ。〔盛衰記〕伊豫守ちごわらはの時、當寺居住の好ありて」

ちごゑ 千聲【名】[一]あまたの聲。〔古語拾遺〕「わぎもこが手玉もゆらにうつ衣ちごゑになりぬ夜の長ければ」[二]千代を祝ふ聲。「の音聲。

ちごゑ 地聲【名】性來のこゑ。もちまへ

ちさ 遲差【名】〔英Sis〕クロノメトルの指示する時刻が、英國グリニッチ天文臺の平時より進める時の、その時差。（速差に對して）

ちさ 智者【名】ちしや(智者)の約。〔古語拾遺〕「かしこきちさなりければ」

ちさ 萵苣【名】〔植〕菊科に屬する一年生又は二年生の草。高さ三尺ばかり、葉は、長楕圓形にして軟く、多くの皺あり、煮又は生にて食ふ。こまな。ちさ。「同じ。

ちさ 齊墩果【名】〔植〕えごの木(齊墩果)に同じ。

ちさ 松楊【名】〔植〕紫草(むらさき)科に屬する落葉喬木。高さ三丈に達す。樹皮帶紫黑色を呈す。葉は互生楕圓形又は倒卵形にして、鋸齒を有し、柿の葉に似たり。夏季梢上に白色の小花圓錐花序に開き、球形の小果を結ぶ。かきのきたまし。かはぢさのき。ちさのき。〔萬葉〕「ちさの花咲けるさかりにはしきよしそのつまのふと」

ちさい 致齋【名】神事にたづさはる人が豫め齋戒すること。支那の古制にては、三日間とす。まいみ。（散齋に對して）

ちさい 答罪【名】ちけい(笞刑)に同じ。

ちさい 治罪【名】〔書〕「齊書に「付」獄治」罪」とあり」犯罪の處分。

ちさい 持齋【名】〔佛〕[一]時(じ)[九]の食事を守りて、その時刻以後には食せぬこと。[二]佛の齋法を受持して違背せざること。〔增鏡〕「いつも、御ぢさいにておはします」

（うざ）

ちさい-はふ 治罪法【名】〔法〕[一]犯罪處分に關する手續又は裁判所の構成等を規定したる法律。現今は陸軍に陸軍治罪法、海軍に海軍治罪法あるのみ。[二]明治十三年太政官布告第三十七號の稱。刑事訴訟法及び裁判所構成法の發布實施と同時に廢せられたり。

ちさう 地相【名】土地のありさまにより、吉凶を相すること、又その土地の有樣。

ちざう 知藏【名】〔佛〕ざうす(藏主)に同じ。

ちざう 地藏【名】〔佛〕〔梵Kṣitigarbha〕乞叉底蘗婆の譯語。地藏十輪經に「安忍不動如二大地一、靜慮深密、猶如二祕藏一とあり」仏利天にて、釋迦佛の付託を受け、二佛中間(かんげ)無佛世界に於て、六道の衆生を化導する菩薩。地藏菩薩。ろくざう(六地藏)。じふおうぶく(折伏)參照。

地藏と閻魔は一佛二體【句】〔佛〕地藏も閻魔も共に阿彌陀佛の分身にして、阿彌陀佛の慈悲は地藏、分怒は閻魔の相を示現せるのみ。〔諺語〕

地藏の頭(かう)に蠅【句】すべりやすきたとへ。〔諺語〕

地藏の顏も三度【句】次條の略。〔諺語〕

地藏の顏も三度撫づれば、腹を立つ【句】柔和にて、辱を忍べる地藏の如きものにてすら、數度の不都合を仕向くれば怒る。〔諺語〕

ちざう-えんぎ 地藏緣起【名】地藏菩薩の功德又は地藏を祀る寺院の緣起等を文章に述べ、若しくは繪に描けるもの。古來これを描ける名畫の中、巨勢光康の作に係る地藏緣起二卷(東京博物館藏)、巨勢有康の作に係る八田(かた)地藏緣起三卷(京都法林寺藏)、巨勢有家の作に係る地藏緣起一卷(東京博物館藏)、土佐隆兼の作に係る同二卷(矢田寺藏)、土佐光信の作に係る地藏堂緣紙(前田侯爵家藏)等、最も著る。

ちざう-がうし 地藏格子【名】格子の一種。卽ち細き木を縱橫に手ちがひ組に組合はせ、その面を表裏ともに同平面にあるやうに作れるもの。地藏堂などに往往あり。

ちざう-がしら 地藏頭【名】地藏の像の頭の如き圓き形、又その形の頭。

地藏頭の高飯(かうはん)【句】地藏の圓き頭の形に高く盛りたる飯。

地藏頭の飯(かん)を食はばやつさいふ句七夏やせの孕女は口わろし」【句】前條に同じ。〔油糟〕

ちざう-がたけ 地藏嶽【名】〔地〕甲斐國南巨摩(こま)郡と北巨摩郡との堺にある山。高さ八〇五〇尺餘。

ちざう-がほ 地藏顏【名】[一]圓く肥えて、にこやかなる顏。柔和なる相貌。[二]よろこばしげなる顏。轉じ借りる時の地藏顏、返す時の閻魔がほ」

ちざう-こう 地藏講【名】地藏菩薩を供養する法會。今世、地藏の半金色の像造りて開眼供養しつ、その後地藏講を始て行ふ」醒睡笑「地藏講の式目といふ外題を見」

ちざうじふおう-きやう 地藏十王經【名】〔書〕ぶっせつちざうぼさつほっこんいんえんじふおうきやう(佛說地藏菩薩發心因緣十王經)の略。「の簒稱。

ちざう-そん 地藏尊【名】〔佛〕ちざう(地藏)

ちざう-だう 地藏堂【名】〔地〕越後國西蒲原(かんばら)郡にある町。信濃川の支流西川の分岐點に當る。新潟港へ水運の便あり。

ちざう-にん 地相人【名】地相の吉凶を見る人、又地相に長じたる人。

ちざう-の-はな 地藏鼻【名】〔地〕出雲國三保崎の別稱。

ちざう-の-まめ 地藏豆【名】〔植〕むらさきけまん(紫蕓)に同じ。

ちざうだう 地藏菩薩【名】〔佛〕ちざう(地藏)「(地藏)に同じ。

ちざう-ぼさつ 地藏菩薩【名】〔佛〕ちざう(地藏)

ちざうぼさつ-ほんぐわん-きやう 地藏菩薩本願經【名】〔書〕地藏菩薩の本願を說き、その功德を示せる經。一卷。支那唐の實叉難陀(じっしゃなんだ)の漢譯。

ちざうほんぐわん-きやう 地藏本願經【名】〔書〕前條の略。

ちざうまつり 地藏祭【名】七月二十四日に、各所の地藏堂又は路傍の石地藏などに燈明供物をささげて祭ること。

ちざうまゆ 地藏眉【名】根太く末細く、長やかに彎曲せる眉。「を見よ。

ちざうゐん 地藏院【名】みぶでら(壬生寺)

ちざうゑ 地藏會【名】地藏菩薩を供養する法會。〔盛衰記〕「六波羅密寺地藏會」

帝釋(たいしゃく)の地藏會【句】佛が忉利天にて、地藏菩薩本願經を說きし故事に本づき、帝釋地藏を念じて修する法會。宇治「明日は帝釋の地藏會したまふには」

ちさ-がたな 小刀【名】ちひさがたな(小刀)に同じ。

ちさか-のうら 千阪浦【名】近江國にある浦。〔千載〕君が代のかずにはしかじ限なき千阪の浦のまさごなりとも」

ちざかひ 地境【名】土地のさかひめ。

ちざけ 血酒【名】義を結ぶ時に、互に血を盃に滴らし入れてすすり合ふこと。〔今國姓爺〕はて起請誓紙も若輩らし、血酒のじんずねを飲むまいか」

ちざけ 地酒【名】その土地にて醸造せらるる酒。くにざけ。ねなかざけ。(くだり酒に對して)

ちさし 小さし【形一】ちひさし(小し)の略。〔古語〕六帖「ゆきやらぬ心やなにぞ秋の野の道はちさともあらじと思へば」[二]多くの道のり。千里(ちさと)。〔古語〕玉葉「月清み千里の外に雲つきて都の方に衣うつなり」

ちさと-ぎれ 千里切【名】名物切(めいぶつぎれ)の一。千里織の斷片の、今に殘れるもの。

ちさと-おり 千里織【名】織物の一種。古、大江千里が、異朝より人を招きて織らしめしものといふ。

ちさと-の-はま 千里濱【名】〔地〕紀伊國日高郡にある濱。太平記「元弘元年七月三

日、大地震ありて、紀伊國千里濱の遠干潟俄に陸となること二十餘町」

ちさのき 齊墩樹【名】〔植〕ちさ(齊墩果)に同じ。千代女「こちの裏のちさの樹に、雀が三匹とまって」 「同じ。

ちさのき 松楊【名】〔植〕ちさ(松楊)に同じ。

ちさのきくわ 齊墩果科【名】〔植〕えごのきくわ(齊墩果科)に同じ。

ちさのり 萵苣海苔【名】〔植〕あをさ(石蓴)に同じ。

ちさば 萵苣【名】〔植〕ちさ(萵苣)に同じ。

ちざむらひ 地侍【名】土著の武士。土豪。浦島年代記「地侍の身の上、過分の價心に任せず」

ちさん 治産【名】一産業を治むること。二生計の道をさむること。三〔法〕自己の財産を管理し、又は處分すること。

ちさん 地産【名】土地よりの産出。

ちさん 遲參【名】遲刻して參ること。(早參に對して)

ちさん 遲蠶【名】蠶兒の就眠に際して、他に後れて眠るもの、主に取扱の不注意、又病毒に侵されたる場合等より起る。

ちさん 地蠶【名】〔動〕よこうむし(夜盜蟲)の異稱。

ちさん 持參【名】一物を持ちて參ること。もちきたること。義村「藥くひ隣の亭主案持參」二嫁又は婿などの緣づく時、實家より財産を持ちゆくこと、又その財産。淸の門埜「大阪に五間間口の店(たな)も所持仕る。貸藏も持參仕る」三次條の略。

ちさんきん 持參金【名】嫁又は婿などの緣づくとき、その實家より持參する金。しきぎん。ちさん。柳樽「花嫁の疱瘡よりは持參金」

ちさんぜんげんりつ 地産漸減率【名】〔經〕はうしうぜんげんはふ(報酬漸減法)を見よ。

ちさんつき 持參附【名】嫁婿などの、持參金つきにて緣づくこと、又その嫁又は婿。

ちさんにん 持參人【名】持參したる人。

ちさんにんしょうけん 持參人證券【名】發行の形式が持參人拂となれる證券。

ちさんにんばらひ 持參人拂【名】〔法〕『英 Payable to bearer』證券を持參したる人に、債務の辨償を爲すべきこと。無記名債權・指名所持人拂債權などの場合の如き、これなり。所持人拂。

ちさんにんばらひてがた 持參人拂手形【名】〔商〕發行の形式が持參人拂なる手形。

ちざんは 智山脈【名】〔佛〕しんぎは(新義派)を見よ。

ちさわらは 小童【名】ちひさわらは(小童)に同じ。〔古語〕建武年中行事「内辨、宣陽殿の兀子につきて、ちさわらはを召す」

ちし 稚子【名】みつご。をさなご。幼兒。

ちし 癡子・痴子【名】一ばかなる子。二おろかもの。痴人。

ちし 地誌【名】地理上の事實を記したる書。地理書。

ちし 地嘴【名】〔地〕みさき(岬)に同じ。

ちし 地史【名】地殼生成の初より今日に至るまでの順序・變遷・經歷を研究する學。

ちし 智士【名】智能ある士。智謀ある人。智者。さいし。

ちし 智齒【名】智慧分別の附く頃に生ずるよりいふ。成人に達する後、上下の顎骨の最も奥に生ずる臼齒。おやしらずば。ちゑば。遲齒。

ちし 遲齒【名】前條に同じ。

ちし 致仕【名】一仕をやむること。職を辭して退くこと。官を去りて隱居すること。ちじ。致祿。二〔禮記の曲禮に「大夫七十而致レ仕」とあるに本づく〕七十歲の異稱。懸車。懸車の年。懸車の齡。

ちし 致死【名】死にいたらしむること。死ぬるやうになすこと。「歐打致死」

ちし 稚兒【名】をさなご。ちご。幼兒。

ちし 知事【名】一事をつかさどること、又その職。二中古の官制にて、本官に接してかりに職を掌りし者。「知太政官事」三〔佛〕しゆじ(主事)四に同じ。四造幣局の長官。勅任官にて、明治二年二月設置、同年七月に局と共に廢せられたり。五府・縣の長官(即ち府知事・縣知事)。勅任を普通とし、例外として奏任とするを得。ごんちじ(權知事)參照。

ちし 致仕【名】ちじ(致仕)に同じ。〔古語〕後撰「行幸のまたの日なんちじの表たてまつりける」

ちし 地子【名】『土地の利子の義』一中古諸國の公田を貸して耕作せしめ、秋に至りて、若干の稻を納めしめしもの。二市街地に課する稅。〔足利時代の語〕

ちしう 知州【名】支那淸朝の地方官の一。各州に各一名ありて、知府と同じ事務を執る。

ちじかた 知事方【名】禪寺に於ける東序の諸役、即ち都寺(すす)・監寺(すす)・副寺(すす)・維那(すす)・典座(すす)・直歲(すす)等の總稱。宗派によりて多少の異同あり。(頭首(しゅ)方に對して)

ちしき 知識・智識【名】一知慧と見識と。二知りてある内容、又知られてある事物。三『禮記の曲禮に「我れその心を知り、その貌を識れる人の義』とも。朋友。四〔佛〕ぢしき(五識)を見よ。五〔哲〕『英 Knowledge』意識の認識的方面、すなはち感知し理解する作用。(感情・意志に對して)六ぜんぢしき(善知識)の略。「名僧知識」七ちしきぶつ(知識物)の略。知識を勸むる〔句〕〔佛〕善友を勸めて、三寶に喜捨せしむ。

ちしき 地磁氣【名】〔理〕『英 Earth magnetism 又 Terrestrial magnetism』地球が磁針に作用する性質。磁石が南北の方向を取る理は、地球磁石の一極が磁針の一極を引きて、他極を尽くるがためにて、地磁氣の原因は、地球の自轉のために、宇宙間に存在せるエテルに電氣を起し、この電氣は地球に磁氣を誘導するにありとす。地球磁氣。

ちしききょく 地磁氣極【名】〔理〕『地磁氣の極』に同じ。

ちしきし 知識使【名】智識物の使。智識物を佛寺に奉加するために遣す使。

ちしきしじせん 地磁氣子午線【名】〔理〕『地磁氣の子午線』に同じ。

ちしきせきだう 地磁氣赤道【名】〔理〕『地磁氣の赤道』に同じ。

ちしきてつがく 知識哲學【名】〔哲〕ちしきろん(智識論)に同じ。

ちしきのおほかみ 道敷大神【名】いさなみのみこと(伊弉册尊)に同じ。

ちしきぶつ 知識物【名】佛寺に奉加する土地・財物。奉加物。募緣。勸化。勸進。奉加。

ちしぎん 地子銀【名】ちしせん(地子錢)に同じ。

ちしきよく 知識慾【名】『英 Intellectual thirst』知識を求めんと欲する慾望。

ちしきろん 知識論【名】〔哲〕『英 Gnosiology』知識の起原・作用及び効驗性等を論究する科學。その實質的方面を論究する論理學と認識論と形式的方面を論究する論理學とに分る。知識哲學。知識學。

ちじくわんばう 知事官房【名】府・縣廳の一局。官吏の進退・身分・文書の往復・記錄・編纂・官印・府縣印の管守及び賞罰に關する事務一切を掌る。

ちしご 知死期【名】㊀陰陽家にて、人の死期をその生年月より推して前知すること、又その法にて定められたる時、即ち月の上旬の一・二・九・十は子午卯酉、三・四・五は丑未辰戌、六・七・八は寅申巳亥といふごときもの。女重寶記「知死期にはづれて生るる子は命短し」心中「又は氷の朔旦「あれ寺町の鐘の聲、一二九十は七七の七つの知死期」㊁じご(死期)に同じ。若風俗「經帷子(キャウカタビラ)を縫はせ、早桶を誂へ、今骨の知死期を待つ時」

ちしご-とき 知死期時【名】前條㊁に同じ。八犬傳「わづかに動く唇の色さへ變る知死期時」

ちしじ 知司事【名】㊀明治元年閏四月に設けられたる七官の各司、同二年四月に置かれたる民部官の各司の長官。奏任官とす。兩者ともに、同年七月廢止となれり。

ちじしだい 知事次第【名】〔佛〕僧院の副監。僧衆の風紀を監督し、寺務を處理す。

ちしせん 地子錢【名】地子として上納せし金錢。地子銀。

ちしたう 地子稻【名】地子として上納せし稻。地子米。

ちしちやう 地子帳【名】古、諸國にて、地子に關して、豫め田の上・中・下、また損益等の事を詳細に記載せるもの。三通を作りて、主稅・主計の兩寮並びに官廳に各一通を送れり。「地層の狀態。

ちしつ 地質【名】㊀土地の性。地味。㊁

ちしつ 遲日【名】『日足遲くして容易に暮れぬ意』春の日。

ちしつ 痔疾【名】痔のやまひ。ぢ。「じ」

ちしつ 地質【名】生地(きぢ)の性質。地合(あひ)

ちしつ 地蝨【名】〔動〕わらじむし(草鞋蟲)に同じ。

ちしつ-がく 地質學【名】『英 Geology』地殼の成立・組織及び地層の狀態等を研究する學問。「精しき人。

ちしつ-がくしや 地質學者【名】地質學に

ちしつ-けいとう 地質系統【名】〔理〕『英 Geological formation』全地層をその生成の順序によりて分類すること。化石などの種類によりて、始原界・古生界・中生界・新生界に四大別し、更に界を系に、又系を統に分ち、それぞれ地質時代に相當せしむ。

ちしつ-じだい 地質時代【名】〔地〕『英 Geological age』地殼生成の初より、現今に至るまでの謂はゆる始原代・古生代・中生代・新生代に四大別し、更に代を紀に、また紀を世に分ち、それぞれ地質系統に相當せしむ。地質年代。

ちしつ-づ 地質圖【名】〔地〕『英 Geological map』地表の地層と火成岩との種類狀態を知らしむるための地圖。

ちしつ-てうさ 地質調査【名】『英 Geological survey』一地方を成せる岩石の種類、その土地を造る構造狀態、地中の鑛石等の存在・分量等を探求すること。

ちしつ-てうさじよ 地質調査所【名】農商務省鑛山局に屬して、地質の調査に關する事務を掌る所。

ちしつてうさじよ-ちやう 地質調査所長【名】地質調査所の長官。農商務技師を以てこれに任ず。

ちしつ-ねんだい 地質年代【名】〔地〕ちしつじだい(地質時代)に同じ。

ちしてん 地子田【名】古、人民に賓與して營種せしめ、地子を納めしめし田。

ちしばり 地縛【名】〔植〕㊀菊科に屬せる多年生の草。荒園などに自生し、葉は竝形(かた)又は披針狀にして、羽狀をなすもあり。春三四寸の花莖の上に、黃色にして蒲公英(たんぽぽ)に似たる花を咲く。根は細くして、地中に蔓延す。つるにがな。〔剪刀服〕㊁めひしば(馬唐)に同じ。

ちしぶ 地澁・地澁【名】田・溝澗水などに鐵銹の如く光りて浮ぶもの。きら。そぶ。たそぶ。たしぶ。地漿。

ちしほ 血汐【名】流れ出づる血。ちしる。

(ぢ)りばし(一)

ちしほ 千入【名】あまたたび染むること。しほ(入)參照。〔古語〕後拾遺「色ふかき袖の涙にならふらしちしほやちしほ染むるもみぢば」

ちしま 千島【名】〔地〕北海道本島と露領カムチヤッカ半島の間に横はれる列島。國後(クナシリ)・擇捉(エトロフ)・得撫(ウルップ)・幌莚(ホロモシリ)の四大島及びその間に列なる二十餘島より成り、永住民あるは、四大島の外は、色丹(シコタン)・占守(シユムシユ)の二島に過ぎず。相合して北海道十一國の一を成し、國後・擇捉・振別(ウツベ)・紗那(シヤナ)・蘂取(トシベ)・得撫(ウルップ)・新知(シンシル)・占守・色丹の九郡あり。全國、北海道廳の管轄に屬す。古利留(クリル)。「のアイヌ。

ちしま-あいぬ 千島アイヌ【名】千島土著の一種族。

ちしま-あまな 千島山慈姑【名】〔植〕百合(ユリ)科に屬する多年生の草。寒地又は高山に自生す。高さ四五寸。莖は狹長にして、一二箇所に短小なる葉を生ず。七月頃、莖頂に淡紅色の六瓣の花を開く。「同じ。

ちしまい 地子米【名】ぢしたう(地子稻)に

ちしまい-いちげさう 千島一華草【名】〔植〕毛茛(キンポウゲ)科に屬する宿根草。莖は高さ六七寸、葉は卵狀斜方形、鋸齒を具へ、裏面は紫色を呈す。花は藍色の花瓣を有し、萼は五六枚の萼片より成り、各片卵形にして白色。千島に產す。

ちしま-いちご 千島苺・千島覆盆子【名】〔地〕薔薇(バラ)科に屬する多年生の草。葉は高さ六七寸、軟毛に被はる。葉は互生、單羽狀複葉。花は頂生、紅色を呈す。果實は淡紅色の聚合果實にして食用となる。千島その他の寒地に產す。

ちしま-かいりう 千島海流【名】〔地〕『英 Kurilian current』おやしほ(親潮)に同じ。

ちしま-がや 千島萱【名】〔植〕禾本科に屬する草。莖は强剛にして、高さ二尺乃至三尺。葉は互生、細長なり。八月頃、花を著く。花は小形、穗狀花序に排列す。千島その他の寒地に自生す。

ちしま-ぎきやう 千島桔梗【名】〔植〕桔梗(キキヤウ)科に屬する多年生の草。莖は高さ約三寸。葉は互生、廣楕圓形にして鋸齒を有す。八月頃花を著く。花冠は鐘形にして五深

裂、濃藍紫色を呈す。各地の高山に自生す。

ちしま-きんれいくわ 千島地衣菜【名】〔植〕敗醬(オミナヘシ)科に屬する草。莖は高さ三四寸。葉は叢生、倒卵形・鈍鋸齒を有し、羽狀に分裂するもあり。葉叢の間より花莖を擡きて、その頂端に數箇の花を開く。北海道に產す。たかねをみなへし。

ちしま-くわざんみやく 千島火山脈【名】〔地〕我が國火山脈の一。千島列島を貫ぬる一連の火山脈にして、其の北端は堪察加(カムチヤツカ)半島の東岸に達して、西南端は北海道本島に走る雌阿寒(カムイ)火山に連なる。山脈中、國後島羅臼山、その他活火山多し。

ちしま-ささ 千島笹【名】〔植〕禾本(イネ)科に屬する植物。隰篠(ササ)の類。莖は灌木狀を成し、高さ七八尺。葉は披針形にして銳尖なり。枝の腋部より花枝を抽き、花を著く。花は多數集りて總狀花序に排列す。千島及び中部以北の山地に自生す。

ちしま-しほがま 千島鹽竈【名】〔植〕玄參(ゴマノハグサ)科に屬する一年生または二年生の草。莖は直立し、高さ一尺餘、枝は上昇す。下部の葉は有柄にして、披針形または長楕圓狀披針形、上部の葉は無柄にして、線形または線狀長楕圓形を成す。夏季、莖頂の葉腋に花を著く。花は黃色にして、相集りて短き總狀花序に排列す。果實は頴なり。千島及び樺太に自生す。

ちしま-せきしやう 千島石菖【名】〔植〕百合(ユリ)科に屬する多年生の草。高さ二三寸乃至七八寸。葉は鬚根より叢生し、また莖にも一二葉を著く。線形、劍狀にして平行脈を有し、二縱列に排列す。七月頃、莖頂に花を著く。花は帶紅白色にして、六瓣を有し、總狀花序に排列す。我が國、中部の高山及び北地に自生す。

ちしま-つのまた 千島角叉【名】〔植〕紅色藻門に屬する海藻。體は紅色にして、長さ四五寸、扁平にして細く、叉狀に分岐し、更に叉狀の小枝を分つ。北海道殊に千島の海中に產す。

ちしま-にんじん 千島人參【名】〔植〕しらねにんじん(白根人參)に同じ。

ちしま-ひなげし 千島雛罌粟【名】〔植〕罌

粟(ゾク)科に屬する多年生の草。高さ六七寸乃至一尺五六寸。葉は皆根生、倒卵形または長楕圓形にして、羽狀に深裂乃至全裂す。七八月頃、葉間より花莖を抽きて花を著く。花は橙黃色又は赤色にして美しく、果實は倒卵形の頴なり。千島北海道及び本土中部以北の高山に自生す。

ちしまふろ 千島風露【名】〔植〕牻牛兒(ゼラニウム)科に屬する多年生の草。莖は地に横臥し、直立すること少なく、長さ七八寸乃至四五尺に達す。葉は對生、掌狀に深裂し、上部の葉は無柄、下部の葉は長き葉柄を具ふ。夏季、花形やや梅の花に似たる五瓣の花を著く。色は紫又は白。我が國、千島北海道本島及び高き山地に自生す。

ちしまふのり 千島布海苔【名】〔植〕布海苔の一種。北海道の東岸及び千島地方に產するもの。

ちしまやなぎ 千島柳【名】〔植〕楊柳(ヤナギ)科に屬する落葉灌木。幹は高さ一尺內外。葉は楕圓形、全緣にして、長き葉柄を具ふ。夏季花を著く。花は小形、淡黃色を呈す。北海道その他北部の寒地に自生す。

ちしまらくえふしよう 千島落葉松【名】〔植〕しこたんまつ(色丹松)の異稱。

ちしまるちやう 地子丸帳【名】地子田の丸帳。

ちしまをごりこ 千島蛸子【名】〔植〕脣形(クチビル)科に屬する一年生の草。莖は一尺乃至三尺にして筒膨大せり。葉は質薄く、卵形にして、鋸齒あり、長き葉柄を具へて對生す。花は淡紫色又は紅色又は帶白色の脣形花にして、夏日開く。我が國北地の山野に自生す。

ちしん 知新【名】新しき事物を知ること。「溫故知新」參照。

ちしん 智臣【名】智謀のすぐれたる臣。太平記「蜀の智臣、これを聞きて、彼が賢なる所を知りければ」

ちしん 智身【名】〔佛〕一磯三世間十身の一。圓明なる智慧を以て、佛身となすもの。二佛具の十身の一。本有の性德たる四智。卽ち大圓鏡智・平等性智・妙觀察智及び成所作智。

ちしん 地心【名】一地球の中心。二〔地〕ちきん(地核)に同じ。

ちしん 池心【名】池の底。池のまんなか。

ちしん 智眞【名】〔人〕いっぺん(一遍)を見よ。

ちしん 地神【名】くにつかみ(國津神)に同じ。正統記「天照大神、吾勝(アガ)の尊は、天上に留まりたまへど、地神の第一に數へ奉る。その始天下の主たるべしとて生れたまひし故にや」

地神五代【句】神武天皇の前にわが國を統御したまひたる五柱の神、卽ち天照大神・正哉吾勝勝速日天忍穗耳(マサカアカツカチハヤヒアメノオシホミミ)尊・天津彦彦火瓊瓊杵(アマツヒコヒコホノニニギ)尊・彦火火出見(ヒコホホデミ)尊・彦波瀲武鸕鷀草葺合(ヒコナギサタケウガヤフキアヘズ)尊。(「天神七代」に對して)正統記「これより上つ方を、地神五代とは申すなり。二代は天上に留まりたまふ。三代は西州の宮にて、多くの年を送りましまします」

ちしん 知人【名】しりあひ。ちかづき。

ちしん 痴人・癡人【名】たはけびと。うつけもの。ばかもの。痴者。痴漢。癡物。

痴人の前に夢を說かず【句】『黃山谷題跋』に「觀二淵明貴レ子詩一想二見其人豈弟慈祥一、俗人便謂二淵明子皆不肖一、可レ謂二癡人前不レ得レ說レ夢也一」とあり』夢は、あはせ次第にて、種種に判ぜらるるものなれば、痴人の面前にては、夢の話をせぬがよし。〔諺語〕

痴人、夢を說く【句】說く所のとりとめなく、辻褄の合はぬ譬。〔諺語〕

ぢしん 地震【名】一〔地〕地面のふるひ動くこと。原因は、種種あれども、多くは火山の爆發、又は地殼內に陷落・裂罅等の急に生ずるに因りて起る。二多數の官吏又は職員などが、一時に轉任又は免職などせらるること。〔俚語〕

地震が搖(イ)る【句】物の動搖する譬。

地震・雷(カミナリ)・火事・爺(オヤヂ)【句】怖しきものは、地震と、雷と、火事と、父親となり。〔諺語〕

地震の影(ゲ)【句】〔地〕地震の波動の、山嶽高臺などのために遮られたる時、その地震を感ぜざる地方。

地震の神【句】一地震を司ると信ぜられたる神。地震神。二『その社の東の山中に要石(カナメイシ)とて、長へに動くこと無き石ありと言傳へたるより名づく』常陸國鹿島(カシマ)神宮の祭神。

地震の震動【句】〔地〕ぢしんどう(地震動)に同じ。

寺の地震【句】『堂(本堂など)が震ふ意に言ひかけたる語』どうぶるひ(胴震)の隱語。

ぢしん 地神【名】〔佛〕げんらうぢしん(堅牢地神)の略。

ぢしんがく 地震學【名】『英 Seismology』地震を研究し、併せて、その豫防法及び地震器械の應用等を講ずる學問。

ぢしんかとう 地震加藤【名】ぞうほものがたり(增補桃山譚)を見よ。

ぢしんがみ 地震神【名】「地震の神」(一)に同じ。

ぢしんき 地震器【名】ぢしんけい(地震計)に同じ。

ぢしんぎやうよみ 地神經讀【名】昔、盲人の、僧形(ソウギヤウ)にて琵琶を彈じ、地神經を讀誦したる者。

ぢしんぐち 地震口【名】〔建〕『地震の時、逃出づる用に供するために設けしものなるべし』雨戶の內に設けたる、小さきくぐり戶。掛金を外せば、ばねにて、自然に開くやうにせるもの多し。

ぢしんけい 地震計【名】『英 Seismometer 又 Seismograph』地震の振幅・方向・震動時間などを知るに用ふる器械。その最も古きは伊國人カシアトレエスの創意に係り、一圓板と水銀とを以て作らる。爾來幾多の新案工夫せられ、現今にては、地震の際にも全く地震動の影響を蒙らざる物ありて、その上に煤烟を塗りおき、地震の震動狀態を自記するやうに仕組む。驗震器。地震器。

かんしんき(感震器)參照。

ぢしんこく 地震國【名】地震の多き國。例へば我が國・伊太利などの如き類。

ぢしんこだい 地神五代【句】ぢしん(地神)の條下を見よ。

ちしんしさ 地心視差【名】〔天〕『英 Geocentric』同一天體を、觀測地點より視し方向と地球の中心より視し方向との差。その方向を示す二直線の成す角を以て表はす。

ちしんちへい 地心地平【名】〔地〕次條の略。(地上地平に對して)

ちしんちへいせん 地心地平線【名】〔地〕『英 Rational horizon』地上の任意の場所に於ける地平面と平行して、地球の中心を通過する平面。(地上地平線に對して)

ぢしんどう 地震動【名】〔地〕『英 Quaken-egg』地震を最初に感ずる初期の微動より漸く進みて、强盛なる主要部を經て、終に微弱となり、靜止する終期に至る一定の順序を趁へる地動。

ぢしんまつり 地震祭【名】地震の災厄を免れんことを祈る祭。增補語林「地震祭」

ちしんめち 地心位置【名】〔天〕『英 Geocentric place』地球の中心點より天體の方向を表はすもの。現視位置。視位置。(日心位置に對して)

ちしんゐど 地心緯度【名】〔地〕『英 Geocentric latitude』地心より天體を見たりと假定して設くる緯度。

ちしや 智者・知者【名】一事理をよく辨へたる人。二〔佛〕知識の深き僧。ちさ。名僧。遺和上大御文章「たとひ一文不知の尼入道なりと云ふも、後世を知るを智者とす」

智者の一失【句】「智者も千慮に一失あり」に同じ。〔諺語〕

智者の四不闕(シフ)【句】智者(二)の相爭はざる四つの事、卽ち命と闕はず、法と闕はず、勢と闕はず、理と闕はずといふこと。

智者の邊(ホト)の童(ワラハ)【句】次條を見よ。小町踏(戀文)「鶯は智者のほとりのわらはかな」

智者の邊(ホト)の童(ワラハ)は習はぬ經を讀む【句】『智者は名僧をいふ』「門前の小僧、習はぬ經を讀む」に同じ。〔諺語〕狂言「箕被」「智者の邊の童は習はぬ經を讀むといふが、そなたのことぢや」

智者の眼は胸にあり【句】智者は外観に惑はず、心にて物を察す。〔百合若大臣野守鏡〕「智者の眼は胸に在り、愚人の眼は面に在り」

智者は秋の鹿、鳴いて山に入る【句】智者は世に容れられざる時に身を退き、山中に隠るるをいふ。〔諺語〕〔盛衰記〕「智者は秋の鹿、鳴きて入レ山、愚人は夏の蟲、飛んで火に焼く」

智者は窓門を破る【句】〔佛〕智者は空理に滞らず、よく世間の俗事に順應す。〔諺語〕〔盛衰記〕「辯士は國の寶、智者は朝の明鏡なり」

智者は未萌を見る【句】『史記』の司馬相如傳に「明者遠見二於未萌一、而智者避二危於無形一、禍因多藏二于隱微一、而發二于人之所忽一」とあり』智者は先見の明あるをいふ。

智者は惑はず【句】『論語』の子罕篇に「子曰、智者不レ惑、仁者不レ憂、勇者不レ懼」とあり』智者は理を以て判ずるゆゑに、事に當りて當惑せず。〔諺語〕

智者は水を樂しむ【句】『論語』の雍也篇に「智者樂レ水、仁者樂レ山」とあり』水の一處に固定することなく流轉すること、智者の事に應酬する圓轉滑脱行く處可ならざるなきに似たるよりいふ。

智者も千慮に一失あり【句】『史記』の淮陰侯傳に「廣武君曰、臣聞、智者千慮必有二一失一、愚者千慮必有二一得一」とあり』智慧すぐれたる人も、時に思ひちがひあり。賢者も千慮に一失。(愚者も千慮に一得あり)に對して)〔諺語〕

ちしや 癡者・痴痴【名】ちじん(癡人)に同じ

ちしや 高苣【名】〔植〕ちさ(萵苣)に同じ

ちしや 松楊【名】〔植〕ちさ(松楊)の訛。

ちしや 齊墩果【名】〔植〕ちさ(齊墩果)の訛。

おしや 治者【名】權力關係に於て、權力を有する者。上にありて、下を支配する者。主權者。(被治者に對して)

ちしや 【名】〔植〕くろたぶ(黑樽)を云ふ。〔信濃國の方言〕

おしや 持者【名】一〔佛〕經典又は陀羅尼等を不斷に持誦(ぢしゅ)する人。持經者。著聞「多年、法華のおしやなり」二山伏に類する一種の行者。一說に、市子(いちこ)の類ならんと。七「職人歌合」「おしや。あら、おんかなかな、二ところ三島(みしま)へ。血の氣。「富める將、智將【名】智慧ある大將。策略にださるる情。男女相愛する情。愛著の迷。「痴情に迷ふ」

ちしや 智性【名】ちせい(智性)に同じ。

ちしや 癡情・痴情【名】男女の、愛にほ

ちしや 地上【名】地のうへ。土の上。

ちしや 池上【名】一池水の表面。二池のほとり。

ちじやう 地上鑛床【名】『英Superficial deposit又Exposed deposit』地上に曝露せる鑛床。(地下鑛床に對して)

ちじやう-くわうしやう 地上鑛床【名】『英Superficial beddol又Sedimentary deposit』地表に曝露して、これを覆へる岩層なき鑛層。多くの鑛層はこれに屬す。(地下鑛層に對して)

ちじやう-けい 地上莖【名】〔植〕『英Aerial-stem』地上に抽出でたる莖、即ち普通の莖。(地下莖に對して)

ちじやう-けん 地上權【名】〔法〕『英Superficies』物權の一。他人の土地に於て、工作物又は竹木を所有するため、その土地を完全に使用するもの。

ちじやうけん-しや 地上權者【名】〔法〕地上權を有する者。

ちじやう-しこせん 地上子午線【名】〔地〕『英Terrestrial meridian』測地學上に於て、地球上の一地點と地軸とを包含する平面と地表面との交はる交線。しこせん(子午線)參照。

ちじやう-ちへいせん 地上地平線【名】次條の略。(地心地平に對して)

ちしや 【名】〔植〕くろたぶ(黑樽)を云ふ。〔信濃國の方言〕

おしや 持者【名】一〔佛〕經典又は陀羅尼等を不斷に持誦(ぢしゅ)する人。持經者。著聞「多年、法華のおしやなり」二山伏に類する一種の行者。一說に、市子(いちこ)の類ならんと。七「職人歌合」「おしや。あら、おんかなかな、二ところ三島(みしま)へ。血の氣。

ちしやう 血性【名】血のたち。血のもち

ちしやう 智將【名】智慧ある大將。策略に

ちしやう 智性【名】ちせい(智性)に同じ。

ちしやう 癡情・痴情【名】男女の、愛にほださるる情。男女相愛する情。愛著の迷。「痴情に迷ふ」

ちしやう 地上【名】地のうへ。土の上。

ちしやう 池上【名】一池水の表面。二池のほとり。

ちじやう-くわうしやう 地上鑛床【名】『英Superficial deposit又Exposed deposit』地上に曝露せる鑛床。(地下鑛床に對して)

ちじやう-くわうそう 地上鑛層【名】『英Superficial beddol又Sedimentary deposit』地表に曝露して、これを覆へる岩層なき鑛層。多くの鑛層はこれに屬す。(地下鑛層に對して)

ちじやう-けい 地上莖【名】〔植〕『英Aerial-stem』地上に抽出でたる莖、即ち普通の莖。(地下莖に對して)

ちじやう-けん 地上權【名】〔法〕『英Superficies』物權の一。他人の土地に於て、工作物又は竹木を所有するため、その土地を完全に使用するもの。

ちじやうけん-しや 地上權者【名】〔法〕地上權を有する者。

ちじやう-しこせん 地上子午線【名】〔地〕『英Terrestrial meridian』測地學上に於て、地球上の一地點と地軸とを包含する平面と地表面との交はる交線。しこせん(子午線)參照。

ちじやう-ちへいせん 地上地平線【名】次條の略。(地心地平線に對して)

『英Sensible horizon』ちへいせん(地平線)に同じ。(地心地平線に對して)

ちじやうばうゑんきやう 地上望遠鏡【名】『英Terrestrial telescope』物體の直立せる像を生ぜしむる望遠鏡。地上の物體を見るに使用す。

ちじやう-わくせい 地狀惑星【名】〔天〕『英Terrestrial planets』太陽よりの距離も甚しき懸隔なく、且つ大きさ、密度その他の性質の相類似せる水星、金星、地球及び火星の總稱。(大惑星に對して)

ちしや-がたな 小刀【名】ちひさがたな(小刀)の訛。「に同じ。

ちじやく 稺弱・稚弱【名】えうじやく(幼弱)に同じ。

おしやく 地借【名】ちかり(地借)に同じ。

おしやく-にん 地借人【名】しやくちにん(借地人)に同じ。

ちじやくゑん 智積院【名】京都阿彌陀峯の西麓にある新義眞言宗智山派の本山。五百佛山根本寺と號す。紀伊國根來(ねごろ)寺頼瑜の法統を繼ぐ。根來寺は天正年間豐臣秀吉に滅せられしが、智積院玄宥德川氏より祥雲寺を賜はりて、此處に再興す。本尊は不動明王。略稱、智山。「同じ。

ちしやご 小螺【名】〔動〕きしやご(細螺)に同じ。

ちしやだいし 智者大師【名】〔人〕ちぎ(智顗)の尊稱。正統記「智者大師」「じ。

ちしやな 高苣【名】〔植〕ちさ(萵苣)に同じ。

ちしやのき 松楊【名】〔植〕ちさ(松楊)に同じ。「撒果」に同じ。

ちしやのき 齊墩果【名】〔植〕えごのき(齊墩果)に同じ。

ちしやのくび 蠐首【名】一蠐(ちう)の首。蠐頭。二支那、朝鮮等の古碑の上部に蠐(ちう)の首の形を裝飾として刻みたるもの。蠐頭。

ちしやのこと 置酒【名】酒宴をひらくこと。「會。

ちしやのこと 置酒高會(かうくわい)【句】盛大なる酒宴のかもり。

ちしやのち 地種【名】地所の種別、即ち官有地、民有地などの類。「者。

ちしやのひと 地主【名】一土地の持主。ぢぬし。二その土地の主となりて護る神。三ぢしゅごんげん(地主權現)の略。太功記「こぞの初春、洛東の地主のお庭の花ざかり」太平記「二の宮は、…東方淨瑠璃世界の如來、吾が國秋津洲の地主なり」

おしゆ 持誦【名】〔佛〕經典又は陀羅尼を受持讀誦すること。おきやう(持經)おしや(持者)參照。

ちしゆ-ごんげん 地主權現【名】京都市下京區松原通廣道東清水(きよみづ)一丁目に鎭坐せる神社。祭神は大己貴(おほなむち)命・素盞嗚(すさのを)命・稻田姫命・脚摩乳(あしなづち)命・手摩乳(てなづち)命、相殿に少童(わたつみ)命・天兒屋根(あめのこやね)命を祀る。神佛混淆の行はれし時代に、京都の清水寺の鎭守神なりしもの。昔は有名なりしも、今は小さき社の清水寺の一隅に存するのみ。おしゆ。謠曲(三村)「地主權現の花ざかり。それ花の名所多しといへども、大悲の光色添ふ故か、この寺の地主の櫻に若くはなし」「じ。

おしゆ-じんじや 地主神社【名】前條に同じ。

ちじゆつ 治術【名】一療治の方法。醫術。治法。二政治の方法。治法。治道。「て。

ちしゆつ 智術【名】はかりごと。くはだて。

ちしゆ-まく 蜘蛛膜【名】〔醫〕ちちゆまく(蜘蛛膜)の誤讀。

ちしゆ-まつり 地主祭【名】京都の地主權現の祭禮。毎年五月八日(もとは陰曆四月九日)に行はる。俳諧新選(瓜流)「押しあうて事やどりや地主祭」

ちしゆるゐ 蜘蛛類【名】〔動〕ちちゆるゐ(蜘蛛類)の誤讀。

ちしよ 治所【名】政務を取扱ふ所。

おしよ 地所【名】土地。地面。

ちしよう 智證【名】〔人〕ゑんちん(圓珍)を見よ。正統記「慈覺智證兩僧は又入唐して」

おしよう 治承【名】高倉天皇の御代の年號(紀元一八三七年—一八四〇年)。

ちしよう-き 智證忌【名】十月二十九日僧智證のために修する忌。

ちしよう-こくし 智勝國師【名】〔人〕せうき(紹喜)に同じ。

ちしようせんじ 知乘船事【名】遣唐使に附屬したる職。四等官の外なり。

ちしよう-だいし 智證大師【名】〔人〕ゑんちん(圓珍)に同じ。

ちん(闖珍)に同じ。

ちじよく 恥辱【名】はぢ。はづかしめ。

ぢじり 地尻【名】一區域の地面の奧の端。

ちじりよく 地磁力【名】〔理〕『英 Terrestrial magnetic force』地磁氣の作用。地球磁力。

地磁力の三要素【句】〔理〕『英 Threee lements of terrestrial magnetic force』地球上の或地點における地磁力の强さを定むるに必要なる三つの量、即ち伏角・方位角・水平磁力。

ちしる 乳汁【名】ちちしる(乳汁)に同じ。〔古語〕

ちしる 血汁【名】ちしほ(血汐)に同じ。

ぢしろ 地代【名】ぢだい(地代)に同じ。

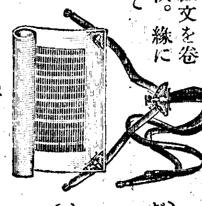
ぢしろ 地白【名】衣服の地の白きもの。しろぢ。ぢしろぢ。〔古語〕 太平記「地白の直垂(ヒタタレ)」

ぢしろがた 地白形【名】地を白く殘して置きたるかた。 心中乃は氷の朔日「桔梗花色地白がた」

ぢしろぞめ 地白染【名】地白に染むること、又その染方の物。ぢしろぢ。

ぢしろぢ 地白地【名】ぢじろ(地白)に同じ。

ぢす 帙子・帙簀【名】卷物に仕立てたる經文を卷きつつむ竹製の帙。緣に錦を附け、錦襴にて裏打す。〔古語〕 源氏「御經よりはじめ、玉の軸、羅の表紙、ぢすのかざりも」



(ぢす)

ぢす 治す【動佐變自】㊀諸侯が居城の地とす。領分中の都とす。㊁病氣なほる。癒ゆ。治癒す。本復す。

ぢす 治す【動佐變他】㊀病氣をなほす。いやす。癒治す。㊁きむ。さだむ。治定す。

ぢす 持す【動佐變自】㊀もつ。たもつ。とる。㊁固く守る。

自ら持す【句】みもちをよくす。自重す。

ぢすがり 地螺蠃【名】〔動〕すがる(螺蠃)を云ふ。〔信濃國の方言〕

ちすぢ 血筋【名】㊀血の運行する筋。ちのみち。ちみち。ちみやく。みやく。ちつづき。血管。血脈。㊁先祖より代代相續すること。血脈。血統。㊂やから。みうち。血緣。

ぢすてんぱあ(英Distemper)【名】犬・猫の傳染病。下腹部又は股間に濃疱を生じ、眼より濃又は粘液を漏らし、結膜潮紅腫起し、嘔吐を催し、鼻腔よりは膿樣液を出し、屢噴嚏す。感冒に因りて起ること多く、幼犬は最も罹り易し。

ぢすとま(英Distoma)【名】〔動〕扁蟲類に屬する蠕形動物。體は樹葉狀又は舌狀をなし、口と腹面とに吸盤を有して、脊椎動物(殊に溫血のもの)の腸・肝臟・肺臟等に吸著・寄生す。肝臟ヂストマ・肺臟ヂストマ等十數種あり。

ぢすべり 地辷【名】〔地〕『英 Landslips』だんそう(斷層)に同じ。

ぢすべりぢしん 地辷地震【名】〔地〕たんそうぢしん(斷層地震)に同じ。(陷落地震・火山地震に對して)

ぢすり 地擦【名】㊀地にすれ合ふこと。 傾城反魂香「この膝のふし、松のふし、前へ地摺の下枝に」 ㊁〔動〕矮雞(チャボ)の最小なるもの。嘴・脚共に黃色なり。

ぢずり 地摺【名】白き地にはなだ色の小紋などすりたるもの。すりゑ(摺繪)參照。〔古語〕 枕「ぢずりの裳のはなかへりたる」

ぢずりあみ 地磨網【名】引網の一種。その構造、地引網に類し、鰮(イワシ)・黑鯛・鱧(ハモ)等を漁するに用ふ。

ぢずりばかま 地摺袴【名】地摺にせる織物にて仕立てたる袴。すりばかま(摺袴)參照。 枕「ぢずり袴の中より、氷かと驚くばかりなるうちめなど」

ちすゐ 池水【名】いけの水。

ちすゐ 地水【名】〔地〕ちかすゐ(地下水)の略。

ちすゐ 治水【名】水流を疏通して河川等の氾濫を防ぐこと。

ちすゐ 智水【名】〔佛〕㊀智慧の明徹せるを清澄なる水に譬へていふ語。「五瓶の智水」「五佛の智水」 太平記「智水、流淸く」

㊁『如來の智慧を水に譬へ、これを行者に注入する義』灌頂に用ふる水。 盛衰記「二宗の法燈、忽ちに消え、兩寺の智水速かに乾きぬるこそ悲しけれ」

ちすゐ 癡水・痴水【名】〔佛〕愚痴の煩惱(ボンナウ)を濁れる水にたとへていふこと。

ちすゐ 笞捶【名】むちうつこと。ちた。

ちすゐ 置錐【名】りつすゐ(立錐)に同じ。

ぢすゐ 地水【名】〔佛〕四大のうちの、地大と水大と。善根の人は、死に臨みて、四大のうちにて、この二つがまづ去るを以て、動轉燥熱緩漫にして、冷靜なるが故に、從つて苦惱少なく、惡業(アクゴフ)の人は、風火まづ去るが故に、動轉燥熱甚しく、苦惱多しといふ。 榮花「臨終の折は、風火先づ去る。かるが故に、どうねちして苦多かり。善根の人は、地水まづ去る。かるが故に、緩漫して苦なし、とこそは有るなれ」

地水火風【句】〔佛〕しだい(四大)を見よ。 謠曲(安達原)「ただ是れ地水火風の假にしばらくもまつはりて」 天の網島「おお、それよ、それよ。このからだは、地水火風、死ぬれば空(クウ)に歸る」

地水火風空【句】〔佛〕ごだい(五大)を見よ。 謠曲(卒都婆小町)「それ、卒都婆は、金剛薩埵、かりに出化して、三摩耶形を行ひたまふ。行ひなせる形はいかに。地・水・火・風・空」

地水火風空の五指【句】〔佛〕小指より拇指に至る五指を、順次に地・水・火・風・空の五大に配すること。〔眞言宗の語〕

地水火風空識【句】〔佛〕ろくだい(六大)を見よ。

ちすゐこうがく 治水工學【名】『英 Hydraulic engineering』河川・江海・水道等すべて水に關する土木工學。水理工學。

ちすゐこうじ 治水工事【名】治水のために施行する工事。

ちせい 地勢【名】土地の形勢。土地のありさま。地形。

ちせい 地精【名】〔植〕にんじん(人參)の異稱。

ちせい 治世【名】㊀治まれる世。泰平無事の世。(亂世に對して) ㊁世を治むること。㊂天子の御位にあらせられて、治めたまふ間。在位の期間。ぢせい。御宇。 正統記「官にその人ある時は、君は垂拱してまします。されば本朝にも、異朝にも、これを治世の本とす」

ちせい 治政【名】世を治むる政。政治。

ちせい 治生【名】生活の道を立つること。

ちせい 智性【名】智識に關する性。

ちせい 知性【名】〔哲〕『英 Intellect』㊀廣義にては、一切の知的作用、即ち感覺・知覺・感性・悟性・理性等。㊁狹義にては、悟性・理性等の作用を含む高等なる知的作用。

ちぜい 地稅【名】ちそ(地租)に同じ。

ぢせい 治世【名】ちせい(治世)㊂に同じ。

ちせいかく 地勢角【名】〔兵〕かうていかく(高低角)に同じ。

ちせう 池沼【名】いけとぬま。沼池。

ちせう 癡笑・痴笑【名】ばかわらひ。

ちせき 地積【名】地所の面積。ぢつぼ。

ちせき 地籍【名】ちせきだいちやう(地籍臺帳)の略。

ぢせき 治績【名】治國・治民の功績。政治の功績。

ちせきそくりやう 地積測量【名】地積を算出することを目的とする測量。地籍臺帳調製等のために行ふ。

ちせきだいちやう 地籍臺帳【名】課稅の基礎とするために、地所の廣袤・價格・所有者名等を記入したる地圖又は帳簿。

ちせけん 知世間【名】〔佛〕せけんげ(世間解)に同じ。

ぢせつ 持說【名】平生より心に抱ける意見。

ぢせつしやうぐん 持節將軍【名】次條に同じ。

ぢせつせいいしやうぐん 持節征夷將軍【名】『出征の將軍に必ず節刀を授くること、我が國の制度なれば、特に持節の稱を附するを要せざれども、節刀の制定まりてより、程經ざる間はこの稱を用ひたり』節刀を賜はりて、東夷を征討せし將軍。

ぢせつせいとうしやうぐん 持節征東將軍【名】『前條を見よ』節刀を賜はりて、東夷を征討せし將軍。

おせつ-せいとうたいし 持節征東大使 【名】前條に同じ。

おーせった 地雪踏 【名】『地卽ち此の地にて作りたる雪踏の意』昔、江戸にて作れる一種の雪踏。苦竹(ガタ)の籤(カキ)にて表を作り、牛皮にて裏を作りしもの。穢多雪駄。

おせつ-たいし 持節大使 【名】持節將軍と職掌を同じくし、その稱を異にするもの。

おせつ-たいしやうぐん 持節大將軍 【名】節刀を賜はりて出征したる大將軍。

おせつ-ちんてきしやうぐん 持節鎭狄將軍 【名】おせつせいいしやうぐん(持節征夷將軍)に同じ。

おーぜに 地錢 【名】古、畿內地方にて、私鑄せし錢。

おーせん 地錢 【名】〔植〕ぜにごけ(地錢)の異稱。

おーせん 地氈 【名】地にしく毛織物。

おーせん 地線 【名】ちきせん(地氣線)に同じ。

おーせん 治鮮 【名】朝鮮を治むること。

おーせん 智山 【名】〔佛〕智の高きを山にたとへていふ語。

おせん 智泉 【名】〔人〕畫僧。弘法大師の甥。神護寺及び東寺に住す。弘仁年間の人。

おーぜん 痴禪 【名】禪に參しながら、知見の啓くることなきもの。

おーそ 地租 【名】土地より生ずる收益に課する租稅。地稅。

おそ 紫蘇 【名】〔植〕しそ(紫蘇)の轉訛。

おーそう 地層 【名】〔地〕『英 Strata』地殼を構成する岩石の大部分は水成岩にして、その幾多の岩盤を成して相重疊せる狀態。すいせいがん(水成岩)參照。

おそう 馳走 【名】一はしりまはること。奔走すること。〔古語〕曾我「これによつてちそうす、所得幾何の利ぞや」二『その用意のために、奔走周旋する意』ふるまひ。饗應。

馳走政略 【句】わが要求を甘諾せさする手段として、酒色を以て、相手の歡心を買ふこと。

おそう 持僧 【名】ごそう(護持僧)に同じ。新後撰「御おそうに加はりて」

おそう-せん 持雙山 【名】〔佛〕『梵 Yugaṃdhara』七金山(シチキン)の一。須彌山(シュミセン)の周圍に在り。

おそう-ぜめ 馳走攻 【名】饗應の頻りに相續くこと。

おそう-にん 馳走人 【名】馳走の事を受け持ちてする人。天神記「ものかはの宰相定國、藤原の菅根朝臣を馳走人につけおき」

おそう-ぶり 馳走振 【名】一馳走のやう す。馳走のもやう。今宮心中「この永き日の馳走ぶり、亭主由兵衞さぞくたびれ」二馳走のために爲すものごと。

おそうやく 馳走役 【名】馳走の事を受持つ役。馳走の掛(カカリ)。

おそかいせいきよく 地租改正局 【名】明治五年大藏省租稅寮に設置せられ、地租稅に改正に關する事務を掌りし局。明治八年廢止せられたり。

おそかいせいじむきよく 地租改正事務局 【名】明治八年設置せられ、地租改正に關する一切の事務を管掌せし官廳。初め內務大藏兩省の所管なりしが、後に獨立の一局となり、同十四年廢止せられたり。

おそく 遲速 【名】おそきと、はやきと。

おそく 知足 【名】一『足ることを知れ』を見よ』分を知りて滿足すること。「知足の人」二〔佛〕おそくてん(知足天)に同じ。

おぞく 持續 【名】現狀を維持すること。もちつづくること。たもつこと。

おそく-くわん 持息觀 【名】〔佛〕すそくくわん(數息觀)に同じ。

おそく-てん 知足天 【名】〔佛〕とそつてん(都率天)に同じ。

おそく-ねん 持息念 【名】〔佛〕前條に同じ。

おぞく-はん 持續犯 【名】〔法〕けいぞくはん(繼續犯)に同じ。

おそく-ねん 知足院 【名】山城國愛宕(オタギ)郡船岡邊に在りしと傳ふる寺。西宮記「北野行幸、乘輿到二知足院南一」

おそ-でうれい 地租條例 【名】我が國に於ける地租課稅の原則を規定せるもの。明治十年三月制定、後數回の改正を經たり。

おそばへ 血そばへ 【名】血を見て、却りて、いよいよ興ずること。(勇士の形容にいふ)〔古語〕義經記「辨慶は、血の出づれば、いとど血そばへして、人をも人と思はず」

おそ-ふかぜい 地租附加稅 【名】地方稅の一。我が國にて、地租に附加して、その納稅者に課するもの。「詔」

おそ-まき 紫蘇卷 【名】しそまき(紫蘇卷)の一。

おーぞめ 血染 【名】一血にて染めたること、又その物。二血に染まりたること、又その物。

おーぞめ 地染 【名】その地にて染めたること、又そのもの。

おーそら 地空 【名】大地の廣きことを空の廣きに譬へていふ語。釋迦如來誕生會「或は怒り、或は嘲ち、恨み悲しみ、地空を叩き、罵もをしまず泣きければ」

おそ-わり 地租割 【名】〔法〕地方稅の一。地租の附加稅として徵收する府縣稅。

おた 知多 【名】〔地〕尾張國九郡の一。知多半島の全部を占め、外に二島屬す。郡役所を半田(ハンダ)町に置く。

おたい 遲滯 【名】とどこほること。延滯。

おたい 遲怠 【名】おこたりおくること。

おたい 癡態・痴態 【名】ばかげたるさま。おろかなる行ひ。「痴態を演ず」

おたい 治體 【名】をさめかた。治蹟。

おだい 地臺 【名】土を盛上げて高くせるところ。

おたい 地體 【副】もとより。いったいぜんたい。根本より。本來。(聿八卦柱曆)おたいの顏がにくていに慳貪に見える故、詞もあいそがなさうな」持統天皇歌軍法「地體坊主の夜歩きが入らぬこと」

おたい 地代 【名】一土地を借りたるために拂ふ料。ちしろ。借地料。二(法)民法上、地上權者が土地所有者に支拂ふ報償。三〔經〕『英 Rent』土地所有者が、借地人より、その土地固有の生產力に對して得る報酬。その額は、高低と地味とによりて異なり。四土地の代價。地價。「よ。

おだい 地大 【名】〔佛〕しだい(四大)を見よ。

おだい-ぎん 地代銀 【名】地代として上納する錢。

ちだいじやうぐわんじ 知太政官事 【名】『太政官の政事を知る義』奈良朝時代に、左右大臣の上位に班し、太政大臣に準じて、太政官の政務に參與せられし皇族。文武天皇の時、刑部(オサカベ)親王始めてこれに任ぜられたり。

ちだいふ-ぶし 治太夫節 【名】延寶の頃、山本土佐掾(ジョウ)の門人松本治太夫の語り初めたる淨瑠璃。その節廻(フシマワ)は文彌節と共に、一中節の中に殘れりといふ。

ちたいーりし 遲滯利子 【名】えんたいりし(延滯利子)に同じ。

ちたいーりそく 遲滯利息 【名】ちえんりそく(遲延利息)に同じ。

ちたう 薙刀 【名】なぎなた(薙刀)に同じ。

ちたう 池塘 【名】いけのつつみ。

ちだう 治道 【名】國ををさむる方法。政治のみち。治術。「路。

ちだう 馳道 【名】天子の御とほり道。盤之爲書、廣大焉、有二入道一焉、有二地道一焉」とあり』天道に對する大地の道。二地中を穿ちて造れる路。トンネル。隧道。

ちたーがけ 知多懸 【名】次條の略。

ちたがけ-あぶみ 知多懸鐙 【名】昔時、尾張國知多郡大野村にて作りたる鐵地象眼の鐙。ちたがけ。

ちたきやま 千瀧山 【名】〔地〕丹波國桑田郡にある山。名寄「年をへてたえじとぞ思ふたぐふればちたきのやまにひける白絲」

ちたけ 【名】膃肭のかさぶたならん。〔古語〕和訓栞「ちたけ、擊後風土記に、痂癬をよめり。血菌の義なるべし」

ちたけ-さし 【名】〔植〕虎耳草(ユキノシタ)科に屬する多年生の草。莖は強剛にして、高さ二尺餘に達す。葉は互生、三回三出複葉もしくは三回羽狀複葉。莖・葉共に硬き毛茸(ジョウ)を有す。夏季、淡紫色、稀に白色の小花を開く。

ちだじやうぐわんじ 知太政官事 【名】ちだいじやうぐわんじ(知太政官事)に同じ。

ちだだ 地蹈鞴 【名】ちだんだ(地蹈鞴)の略。

ちだだかひ 地戰 【名】自分の住める地に

てする戦争。

おたたら 地蹈鞴【名】たたら(蹈鞴)に同じ。

ちたつ 答撻【名】むちうつこと。たたくこと。鞭撻。

ちだつ 褫奪【名】はぎとること。(主に官位・勲章又は職権などにいふ)

ちだつじやう 褫奪状【名】官位・勲章・職権などを褫奪する旨を記載して、本人に傳達する書状。

おたて 地立【名】地主が、貸地より借手を立退かしむること。 狭衣「萬一滞ると、地立だが、承知かね」 「同じ。

ちたにうむ (英 Titanium)【名】〔化〕ちたんに同じ。

ちたはんたう 知多半島【名】〔地〕尾張國にありて、南方、伊勢海に半出せる半島。南端を師崎と稱し、半島全部を以て、知多郡を建つ。

ちたび 千度千度祓【句】いっせんどばらひ(一千度祓)に同じ。

千度八千度【句】いくどもいくども。あまたたび。 玉簾「君がよはながらの山の岩根松千度八千度花のさくまで」

ちたひ 黄蓼【名】〔動〕鯛の一種。ほぼ眞鯛に類すれども、背口部に青色の小斑點を有す。吻より背鰭に至る勾配、眞鯛より急なり。身長一尺五寸、雄は眼の上邊隆起せるも、雌は普通なり。

ちだま 血珠【名】血の如き色の珊瑚珠。

おだま 地玉【名】一おたまご(地玉子)の略。二春の低き女。〔俚語〕

おたまご 地玉子・地卵【名】一その地にて産みたる鶏卵。 二地に塗る漆。

おだみ 地溜【名】金・銀粉を塗るために、

おだみふで 地溜筆【名】地溜に用ふる筆。

ちたん (獨 Titan)【名】〔化〕灰色の金屬様光澤を帯ぶる、稀有なる元素。西暦一七九一年、グレゴル(Gregor)、チタン鐵鑛中より發見す。ちたにうむ。

おたん 呢喃【名】ちなん(呢喃)に同じ。

おだんぐり 【名】橡の樹の實。とちのみ。〔信濃國の方言〕 「訛。

おだんだ 地蹈鞴【名】おたたら(地蹈鞴)の地蹈鞴を蹈む【句】腹だたしさに、身をもがきつつ、せはしく足ぶみす。

ちたんてつくわう チタン鐵鑛【名】〔鑛〕『英 Ilmenite』酸化チタンと酸化鐵とより成る鑛物。六方晶系に屬する小結晶をなし、火成岩中に介在し、又は砂粒に混じて産出す。不透明なる鐵黒色にて、半金屬光澤を有し、僅かに磁性を有し、容易に鹽酸に溶解せず。

おたんぼう 【名】一〔植〕くぬぎ(櫟)を云ふ。〔上野國の方言〕 二下野國日光邊にて、小供の玩ぶ一種の貝獨樂。

ちたーもめん 知多木綿【名】尾張國知多半島より産する白木綿。古來有名なり。

おだんぼう 【名】ちまみれ(血塗)に同じ。 「ろ。〔古語〕

ちだらけ 血だらけ【名】

ちだり 血垂【名】簷の上の煙を出すところ。(ヤ)の血垂【句】あめ(天)の傳下を見よ。〔古語〕 祝詞「天の血塗、飛ぶ鳥の禍無く」

ちたる 千足る【動四自】ちぢに足る。ことごとくととのひ足る。〔古語〕

ぢだるき 地垂木・地垂木【名】〔建〕二軒(ノキ)の下方にある椽。下より見て、體裁よきやうにとの化粧のために附く。おもだるき。

ちたわん 知多灣【名】〔地〕尾張國知多半島と三河國碧海・幡豆(ハヅ)二郡との間にある海灣。半田港その他多し。

ちち 父【名】一兩親のうちの男性の者。實父の外、繼父・養父をも指していふ、即ち法律上の一等親尊屬たる男子。をとこおや。あて。かぞ。てて。と。 二〔基〕『英 Father』三位一體の完全なる人格を具へたる唯一の神。

父が方(カタ)【句】ちちかた(父方)に同じ。〔古語〕 續紀「父我可多(カチカタ)」

父、父たらずと雖も、子は以て子たらざるべからず【句】『君、君たらず、臣は以て臣たらざるべからず』を見よ』父はたとへ、父たる道を盡さずとも、子は飽くまで、子たる道を盡さざるべからず。〔諺語〕

「君君臣臣、父父子子」とあるに本づく』父が父たる道を盡くせば、子もまた子たる道を盡くす。

父の讎は倶に天を戴かず【句】『禮記』に『父之讎不二與共戴一天』とあるに本づく』父の讎は必ず討ち取るべきものにして、共に同じ世に生存すべきものに非ず。

父の大叔父(オヲヂ)【句】父の從祖祖父。

父の大叔母(オヲヂバ)【句】父の從祖祖母。

父の恩は山より高し【句】父の恩の高大なるを山に譬へていふ。〔諺語〕

父の罪を改むるは、孝の一つ【句】父の惡行を諫言して改めしむるは、孝道の一つ。〔諺語〕

父の命(オホセ)【句】ちち(父)の尊稱。 萬葉「ちちのみの父のみことは」

父の道を改めず【句】「三年、父の道を改めず」を見よ。

父は子のために隱し、子は父のために隱す【句】『論語の子路篇に「父爲レ子隱、子爲レ父隱、直在二其中一矣」とあるに本づく』父は子の惡しき所爲を人に隱し、子は父の惡しき所爲を人に隱すは人情なり。〔諺語〕

生れぬ前(サキ)の父【句】前の世の父。俚言集覽「世俗に一休禪師の歌といふ、やみの夜に鳴かぬ烏の聲聞けば生れぬさきの父ぞ戀しき」

生(ウ)の父【句】じっぷ(實父)に同じ。

この父ありて、斯(カ)にこの子あり【句】『孔叢子の居衛篇に「有二此父一斯有二此子一、道之常也」とあるに本づく』子の賢なるは、父の賢なるに因る。「この母に非ざれば、この子を生まず」參照。〔諺語〕

ちち 乳【名】一哺乳動物の分娩後にその乳房より分泌し、その子を育つるために飲ましむる白き汁。ちち。ちしる。ちちしる。にゆうじふ。 二ちぶさ(乳房)に同じ。 三はは(母)を云ふ。〔後志國小樽の方言〕

乳呉れる親は有っても、水呉れる親は無い【句】水の恩の洪大なるをいふ。〔諺語〕

乳を餘す【句】赤子、飲みたる乳を吐く。

乳を離す【句】赤子生長の後、母乳より遠ざからしむ。乳離(チバナ)をせしむ。

ちち 致知【名】『知をきはむる義』一知識をきはめ、物理を明かにすること。〔朱子の説〕 二本然の眞知を安全ならしむること。〔王陽明の説〕

致知格物【句】『大學に「致レ知在レ格レ物」とあるに本づく』「格物致知」に同じ。

ちち 遅遅【貌】急がぬさま。ゆっくり。のろのろ。「春日遅遅たり」「遅遅として捗取らず」 太平記「事遅遅せしめば、神輿・神木・神座の本意、共に入洛あるべし」

ちち 千千【名】『おは實はち(箇)の意』あまた。いろいろ。かずかず。種種。〔古語〕古今「ちぢの色にうつろふらんと知らなくに心し秋のもみぢならねば」

千千の色色【句】各種の色。種種雜多の色 夫木「八十島に千千の色色咲く花は萬代の春君のみぞ見ん」

おち 持地【名】〔佛〕おちぼさつ(持地菩薩)に同じ。

おち 爺【名】老爺。老人。おきな。おい。

おち 祖父【名】父母の父。祖父。おほぢ。おいい。(祖母(ソボ)に對して)

祖父辛勞、子は樂(ラク)、孫乞食(コジキ)【句】祖父は苦心して富を作り、子はその御蔭にて、安樂に過し、孫に至りては、安供家を亡すに至る。〔諺語〕 新永代藏「祖父辛勞、子は樂、孫乞食と、昔よりの讐の如くに」

おち 【感】一物の火に焦げつく音。 二蟬などの啼く聲。

おぢ 爺【名】ちぢ(爺)に同じ。〔俚語〕

おぢい 祖父【名】ちぢ(祖父)に同じ。〔俚語〕

ちちうし 乳牛【名】乳を搾り取るために飼ふ牝牛。ちうし。

ちちうーはふ 蜘蛸法【名】船舶の航行中、錨に依らずして、一所に滞留せしむる運用術。即ち舵と舵(カヂ)とを巧に用ひて、前進の度と後退の度を均しからしむるもの。

ちちうへ 父上【名】ちち(父)を尊びていふ語。(母上に對して)

ちちうま 父馬【名】をうま(牡馬)に同じ。〔古語〕 名義抄「牡馬、チチウマ」

ちちおとど 父大臣【名】父にて、大臣なる人。父なる大臣。〔古語〕 源氏「父おとど。母北の方は」

ちちおや 父親【名】ちち(父)㊀に同じ。(母親に對して)

ちちかう 【名】〔植〕おきなぐさ(翁草)㊁に同じ。

ちちがかた 父が方【句】ちち(父)の條下を見よ。

ちちかた 父方【名】父の血筋の親族。ちちがかた。(母方に對して)

ちちがた 千路潟【名】〔地〕能登國羽咋(ハクヒ)潟の別稱。邑知(オチ)潟

ちちがは 【名】〔地〕丹波國にある川なるべけれど、所在詳かならず。 夢花「にごりなく見えわたるかなちぢがはのはじめてすめる豐のあかりに」 藻鹽草「末遠きちぢの川瀬に寄る玉はわがすべらのぎ御代の數かも」

ちちかぶり 鰷【名】〔動〕だぼはぜ(たぼ鯊)に同じ。〔古語〕 和名「鰷、チチカブリ」

ちぢかまる 縮かまる【動四自】『縮み屈(カガ)まるの義』ちぢむ(縮む)に同じ。

ちぢかむ 縮かむ【動四自】『縮み屈(カガ)むの義』ちぢむ(縮む)に同じ。 「じ。

ちちかやり 鰷【名】〔動〕ちちかぶり(鰷)に同

ちちぎみ 父君【名】父を尊びていふ語。

ちぢく 馳逐【名】おひかくること。おひまはること。

ちぢく 地軸【名】㊀大地を支持し、その施轉をつかさどると想像せらるる軸。坤軸。「天柱碎け、地軸折る」 ㊁〔地〕『英 Earth's axis』ちぢく(榲軸)㊀に同じ。 地軸の傾斜【句】〔地〕「黄道の傾斜」に同じ。

ちぢく 縮く【動下二自】ちぢむ(縮む)に同じ。 大鏡「髮ちぢけたるに」

ちぢく 乳草【名】〔植〕『莖を切れば、白汁出づるよりいふ』 ㊁のげし(野芥子)に同じ。 ㊂にしきさう(錦草)に同じ。 ㊃けしあざみ(芥子薊)に同じ。

ちぢくさし 乳臭し【形ク】未だ乳の臭あり。幼稚なり。をさなし。ちくさし。

ちぢくせん 持軸山【名】〔佛〕『梵 Isādhara の譯語』七金山(シチキン)の一。

ちぢくび 乳頭【名】㊀乳の先の、小球狀をなせる部分。婦人のは、細孔ありて、乳汁を分泌す。ちくび。 ㊁『英 nipple』ゴムにて造り、瓶(ビン)の口に嵌めて、幼兒がその瓶の中の牛乳、重湯(オモユ)などを飲むに便ならしむる物。

ちちくひあふ 乳くひあふ【動四自】ちちくりあふ(乳繰合ふ)に同じ。〔古語〕十訓「とこ定めんは、父母のはからひに從ふべし。我れとちくひあへる中は、いかにも悔しき事こそ多かりなめ」

ちちくふ 乳くふ【動四自】ちちくる(乳繰る)に同じ。〔古語〕 「こと。

ちちくりあひ 乳繰合【名】ちちくりあふにちちくる。

ちちくりあふ 乳繰合ふ【動四自】男女互

ちちくる 乳繰る【動四自】男女ひそかに狎戲る。密通す。私通す。

ちちくれる 縮くれる【動下一自】ちちく(縮く)の訛。

ちちこ 【名】㊀〔動〕ぎぎ(杜父魚)を云ふ。〔近江國の方言〕 ㊁〔植〕おきなぐさ(翁草)㊀を云ふ。〔下野國の方言〕

ちちご 父御【名】他人の父を尊びていふ語。ててご。尊父。尊大人。 「の方言」

ちちこう 【名】ぎぎ(杜父魚)を云ふ。〔伊勢國〕

ちちこぎく ちちこ菊【名】〔植〕いはぎく(岩菊)㊀に同じ。

ちちこぐさ ちちこ草【名】〔植〕おきなぐさ(翁草)㊀に同じ。 「同じ。

ちちごぜん 父御前【名】ちちうへ(父上)に

ちちこまる 縮こまる【動四自】ちぢかまる(縮かまる)に同じ。

ちちごり 父字【名】〔語〕反切の時、初に呼出す聲の文字。母位の音と配合して、新しく生ずる音の一部となる。(母字に對して)

ちちじま 父島【名】〔地〕小笠原諸島の中の主島。周回凡そ十五里。小笠原島廳の所在地。別稱、北島。本島。

ちちしる 乳汁【名】ちち(乳)㊀に同じ。

ちちすひ 乳吸【名】小兒に牛乳を飲まするに用ふる器。哺乳罎。 「の一。

ぢぢせん 持地山【名】〔佛〕七金山(シチキン)

ちちぢやひと 父ぢや人【名】『父である人の訛』父なる人。ちち。(母ぢや人に對して) 「じ。

ちちぢやもの 父ぢや者【名】前條に同

ちちつけ 乳附【名】ちつけ(乳附)に同じ。

ぢぢっけ ちぢっ毛【名】顋の毛を云ふ。〔小供の語〕

ちちなしご 父無子【名】㊀父に死なれ、母の手のみにて育てたる子。ててなしご。 ㊁密通して生れたる兒。公なる父のなき兒。私生兒。

ちちのき 乳樹【名】〔植〕『幹より乳汁のごときものを分泌するよりいふ。ちちのみ(乳實)參照』いてふ(銀杏)を云ふ。〔相模國の方言〕

ちちのこ 乳粉【名】蒸晒(カシ)の米の粉にて製し、煮立てて、砂糖を加へ、乳汁の代りに、赤子に飲ましむるもの。

ちちのし 乳師【名】古、供御の牛の乳を搾りしもの。ちちのちやうじやう。

ちちのちやうじやう 乳長上【名】前條に同じ。

ちちのはぐさ 紫參【名】〔植〕はるとらのを(紫參)に同じ。 和名「紫參、チチノハグサ」

ちぢのまつばら 千千松原【名】〔地〕近江國犬上郡にある松原。 新後拾「君が代は契も久し百年を十かへりふべき千千の松原」

ちちのみ 乳實【名】〔植〕 ㊁ちちのき(乳樹)を見よ』 ぎんなん(銀杏)に同じ。〔古語〕

ちちのみの 乳の實の【枕】音の相通へるより、ちち(父)にかけていふ。 萬葉「ちちのみの父のみことはははそはの母のみこと」

ちちのみや 千千廼屋【名】〔人〕千種有功(コトシ)の別號。

ちちのやしふ 千千廼屋集【名】〔書〕千種有功(コトシ)の歌集。二卷。

ちちはくる 癡膠【名】肌に、粒の如く生ずる瘡。ちちほむ。〔古語〕

ちちはは 父母【名】父と母と。ふたおや。ふぼ。 萬葉「ちちはは見ればたふとし」

ぢぢばば 祖父祖母【名】祖父と祖母と。ぢぢとばばと。

祖父祖母の話【句】桃太郎、猿蟹合戰、舌切雀の如き、昔の御伽話。一休ばなし序文「ぢぢばばの話より知らぬ我なれば、かしこまりたりとは申せども、山へ洗濯、川へ柴刈と申しければ、ふるめかしの話や」 「と。翁媼。

ぢぢばば 爺婆【名】年老いたる男と女

ちちぶ 鮒【名】〔動〕いさご(鮒)の異稱。字鏡「鮒、知知夫」

ちちぶ 秩父【名】 ㊀〔地〕武藏國西方の山地。荒川の水源地。地勢高峻にして、其の奥は甲信上の三國に接す。秩父郷。 ㊁ちちぶぎぬ(秩父絹)の略。

ちちぶあをいし 秩父青石【名】〔鑛〕武藏國秩父地方より出で、綠色にして剝げやすき結晶質片狀の岩石。綠泥片岩、角閃片岩及びその他一二の種類を含み、建築材又は庭石などに用ふ。硼砂と共に燒くときは、綠色の玻璃となる。

ちちぶいも 【名】〔植〕じゃがたらいも(馬鈴薯)に同じ。

ちちぶがう 秩父鄕【名】〔地〕ちちぶ(秩父)㊀に同じ。

ちちぶかうもり 秩父蝙蝠【名】〔動〕蝙蝠の一種。形小なるもの。

ちちぶぎぬ 秩父絹【名】武藏國秩父郡より織出だす生絹。質少し粗く、常にはないろに染めて、衣服の裏地とす。ちちぶ。

ちちぶさんじふさんしよ 秩父三十三所【名】『實は三十四所なれども、西國三十三所に倣ひて斯く通稱す』武藏國秩父郡にありて、觀音を祀れる三十三箇所の寺院。卽ち高篠(シノカ)村村谷の四萬部寺、同村山田の眞福寺、同村の常泉寺、同村の荒木十一面堂、横瀬村横瀬の語歌寺、同村の卜雲

寺、同村の法長寺、同村の西善寺、同村の明智寺、同村の大慈寺、大宮町坂氷の常樂寺、同村の野坂寺、同村の慈眼寺、同村の今宮坊、同村の藏福寺、同村の西光寺、同村の少林寺、同村の神門(ドカド)寺、同村の龍石寺、尾田蒔(マキ)村寺尾の岩の上觀音堂、同村の觀音寺、同村の榮福寺、同村の音樂寺、大宮字白山の法泉寺、久那村久那の久昌寺、影森(カゲモリ)村下影森の圓融寺、影森村上影森の大淵寺、同村の橋立寺、中川村上田野の長泉院、白川(シラカワ)村白久の法雲寺、三田川村上飯田の觀音院、長岩(ナガイワ)村般若の法性寺、下吉田村下吉田の菊水寺、日野澤村下日野澤の水澤寺一名、秩父三十三所觀音。

ちちぶ-さんじふさんしょ-くわんおん 秩父三十三所觀音【名】前條に同じ。

ちちぶ-じま 秩父縞【名】武藏國秩父郡より織出だす絣。縞の銘仙。

ちちぶ-しろかねさう 秩父白金草【名】〔植〕しろかねさう(白金草)に同じ。

ちちぶ-めいせん 秩父銘仙【名】銘仙の一種。武藏國秩父郡より産するもの。

ちちぶ-やま 秩父山【名】武藏國秩父郡附近の山。秩父あたりの山。最明寺殿百人一首「武藏も近き秩父山」

ちぢぼさつ 持地菩薩【名】〔佛〕地藏の分身に九つの菩薩ある中の第七のもの。地藏の慈悲が衆生を攝容すること、さながら大地が一切の物を保持する如くなるより、その慈悲の德を象徴せるものにて、佛の、母のために說法せんとて、忉利天(トウリ)に上るとき、此の菩薩の爲に、三道の寶階を作りきといふ。持地。榮花「御陵のありさま、かの持地菩薩の樣へたりけん金銀(コガネ)水精の三つの階に劣らず見えたり」

ちぢ-ほむ 癡肴【名】**ちぢばく**(癡肴)に同じ。和名(古語)和名、癡肴、知知保無、一云、知知波久留。皮外小起也」

ちぢまーやか【副】ちんまりと。ひきしまりて小さく。ちまやか。「同じ。

ちぢまる 縮まる【動四自】**ちぢむ**(縮む)に同じ。

ちぢみ 縮【名】一ちぢむこと、又ちぢみたる物。二木綿織物の一。縮緬の織法によりて織り、絳絲(イトヘ)に强撚のものを用ひ、織布後糊拔・織出・幅出等の工程を施す。三**ちぢみもめん**(縮木綿)の略。

ちぢみ 蜆【名】〔動〕しじみ(蜆)の訛。

ちぢみ-あがる 縮上る【動四自】**ちぢむ**(縮む)を强めていふ語。すくみあがる。

ちぢみ-え 縮え【名】えの字の稱。醒睡笑「笛のえは、ちぢみえか、末のゑか、いづれがよいといふに、されば定家のかなづかひも源氏などにも、ちぢみえを書きたるは」「じ。

ちぢみ-おり 縮織【名】**ちぢみ**(縮)二に同

ちぢみ-かたびら 縮帷子【名】縮の織方にしたる帷子。

ちぢみかど 父御門【名】父の天皇。源氏「父みかどの御方ざまに」

ちぢみ-がみ 縮髪【名】**ちぢれげ**(縮毛)に同じ。平家女護島「縮み髪も油とろとろ」

ちぢみ-ぐそく 縮具足【名】一寸四方ほどに切りたる鐵板を綴りて仕立てたる鎖帷子。納來のものなりといふ。ちぢみもの。

ちぢみこ 父御子【名】父にておはす皇子(ミコ)。父君なる皇子。源氏「父みこはいとおろかにて」

ちぢみ-こみ 縮込【名】ちぢこむこと。

ちぢみ-こむ 縮込む【動四自】一ちぢみて中に入る。ちぢみたるまま出でず。二**ちぢむ**(縮む)三を强めていふ語。

ちぢみ-こんぶ 縮昆布【名】〔植〕昆布の一種。形小にして、品質劣等なるを以て、採取の價値なし。質薄くして、絲捲縮す。北海道後志・天鹽・北見などの海に產す。あらめこんぶ。

ちぢみざさ 萩【名】〔植〕禾本(クワホン)科に屬する多年生の草。莖は地上に平臥し、各節より根を生じ、中途より直立して、高さ一二尺に達す。葉は互生、披針形にて、やや皺縮を有す。秋季、花を著く。花は長き芒(ノギ)を具へ、圓錐花序に排列して、一寸餘の穗を成す。我が國各地の陰地に自生す。

ちぢみ-しそ 縮紫蘇【名】〔植〕**ちりめんじそ**(縮緬紫蘇)に同じ。「に同じ。

ちぢみ-せんりよう 縮線綾【名】しじら(縦)縞布【名】縮織の布。

ちぢみ-ぬの 縮布【名】縮織の布。

ちぢみ-もく 縮杢【名】木理(モク)の波狀をなしたるもの。

ちぢみ-もけ 縮毛【名】〔植〕ふくらしばに同じ。

ちぢみ-もの 縮物【名】**ちぢみぞそく**(縮具足)に同じ。

ちぢみ-もめん 縮木綿【名】『ちぢみ(縮)二を見よ』もめんちぢみ。ちぢみ。

ちぢむ 縮む【動四自】一短く小さくなる。短く狹くなる。ちぢかむ。ちぢまる。しじまる。しじかむ。しじかまる。ちぢる。しじまる。しじむ。二皺(シワ)寄る。ひっこむ。すくむ。三恐れ退く。

ちぢむ 縮む【動下二他】ちぢましむ。

ちぢむ 【動下二他】**こごむ**(留む)に同じ。〔古語〕

ちぢむ 【名】次條の語幹。入笑人「六部の笈…ちぢむだらうな」

ちぢむさし 【形ク】『ちぢは老爺の義』穢らし。甚しくむさし。不潔なり。

ちぢんこ 【名】〔動〕ぎぎ(杜父魚)を云ふ。〔尾張國の方言〕

ちぢん-さい 地鎭祭【名】建築の時、地均(ヂナラ)し濟み、根切に著手する前に、惡鬼を遠ざくる意にて、地上に壇を設けて行ふ祭事。ぢまつり。土公祭。**ちびき**(地曳)三參照。

ちぢんぷいぷい-ごよのおたから ちぢんぷいぷい御代御寶【句】『ちぢんぷいぷいは呪ひの眞似にて、ごよの御寶と祝辭をいふなり。一說に、智仁武勇は御世の寶といふ義ともいふ』小供の遊ぢて身を痛めなどせし時、すかしなぐさむる詞。

ちぢ-めき 【名】長楕圓形の鳥かご。(多くは、鶫に飼ふ雀を入れて持ち運ぶ) ひきどき雀をになふかごのちぢめき」

ちぢ-もも 【名】〔植〕**なつぐみ**(夏茱萸)を云ふ。〔播磨國の方言〕

ちぢ-もり 乳守【名】遊女の一種。昔時、攝津住吉神社の祭禮に田植の早乙女を勤むるもの。〔和泉國堺の方言〕二代男「堺のやさ男逢うたこそ一景、朝夕の新町よりは」と、ちぢ守りに誘はれ」

ちぢやう 菩杖【名】一しもとつゑ。捶楚。二大寶令にて、笞刑と杖刑。「じ。

ちぢやう 智杖【名】**しやくぢやう**(錫杖)に同じ。

ちぢやう 治定【名】一をさまりさだまること。おちつくこと。治定(イヂヤウ)。二きまりてあること。ひっちやう。狂言七騎落「某は、君を御代に出し申すぞ、治定なりと」諸國物語「暗君の主人、まけらるるは治定と思ひ」

ちぢゆ 蜘蛛【名】〔動〕くも(蜘蛛)に同じ。

ちぢゆ 地中【名】とちのなか。ぢめんのうち。土中。

ちぢゆう 池中【名】いけのなか。

ちぢゆう 池中の物に非ず【句】『鯉魚、龍に化すといふ支那の諺によりていふ』凡庸にして終るべき人物にあらず。

ちぢゆう 豕蟲【名】〔動〕**はちゆう**(爬蟲)に同じ。**ちゆうち**(蟲豕)參照。「に同じ。

ちぢゆう 知蠋蜘蠋【名】**ちうちよ**(蹇躇)

ぢぢゆう 地中【名】寺院の境内にある附屬の寺。後世、誤りて、寺中(ジチウ)と記す。地內。

ちぢゆう-かい 地中海【名】〔地〕『英Mediterranean sea』一大陸又は大島の間にある海。二歐羅巴洲の南岸と亞弗利加洲の北岸との間に挾まれる海。

ちぢゆう-せん 地中戰【名】〔兵〕**ちかせん**(地下戰)に同じ。

ちぢゆ-まく 蜘蛛膜【名】〔醫〕『羅Arachnoidea』腦脊髓膜の一部。硬腦膜と脈絡膜との間に在り。

ちぢゆ-るゐ 蜘蛛類【名】〔動〕節足動物の一類。頭と胸とは合して一體となり、觸角なく、顎に觸鬚あり、四對の脚を有し、腹部の末端に、紡絲器もしくは毒刺あるもあり。蜘蛛(クモ)・蠍(サソリ)・壁蟲(ヤモリ)等、これに屬す。

ぢぢよう 持重【名】輕輕しくせぬこと。自重。

ちぢよ-ちぢよ 【感】蟇蟲の鳴く聲。ぢみの蟲、いとあはれなり。……八月ばかりになれば、ちぢよちぢよとはかなげに鳴く」

ちぢら 縮緬【名】繭の表面にある皺。

ちぢら-おり 千千良織【名】經絲(イト)に太き絲と細き絲とを配し、その張力の相違に

て、表面に凸凹を生ぜしめたる織物。

ちぢら-がしら 縮頭【名】縮毛(ケゲ)の頭。

ちぢら-げ 縮毛【名】**ちぢれ毛**(縮毛)に同じ。

ちぢらす 縮らす【動四他】ちぢるやうにす。ちぢらかす。

ちぢら-たう 縮糖【名】昔時、痰を治する効ありといはれし、一種の乾菓子。

ちぢり【名】■**まつぶくり**(松毬)を云ふ。〔關西の方言〕■**ちぢりぼし**(ちぢり星)に同じ。

ちぢりう【貌】小さき玉などの輕く相觸れて鳴る音の形容。〔古語〕古事談「玉冠に下がりたる玉ども、ちちりうちちりうと鳴る程に、如レ法令レ練給ひけり」「に同じ。

ちぢり-ぼし ちぢり星【名】〔天〕**せい**(井)つ(千歳松)■に同じ。

ちぢり-まつ ちぢり松【名】〔植〕**せんさいま**「同じ。

ちぢる 縮る【動下二自】**ちぢむ**(縮む)■に

ちぢれ 縮【名】ちぢること、又そのもの。

ちぢれ-がみ 縮髪【名】次條に同じ。

ちぢれ-げ 縮毛【名】ちぢるる辮ある髪。ちぢみがみ。ちぢれがみ。卷髪。

ちぢれっ-け 縮毛【名】**ちぢれ**(縮毛)の訛。

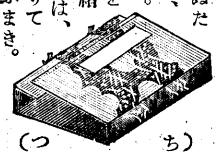
ちぢれ-とち 縮橡【名】橡(チ)の老樹の根部の材。縮れたる紋理あるもの。

ちちろ【名】〔動〕次條に同じ。

ちちろ-むし ちちろ蟲【名】〔動〕**こほろぎ**(蟋蟀)の異稱。〔古語〕〔秘藏抄〕「ちちろむし夜吹く風や寒からん更くればいとどよわる聲かな。ちちろ蟲とは、きりぎりすを云ふなり」

ちちわく 千千分【貌】事むづかしきさま。めんだう。とやかう。〔古語〕拾遺「ちちわくに人はいふとも織りて著んわれはたものにしろきあさぎぬ」

ちつ 帙【名】書籍を損ぜぬために、その大きさに隨ひ、折疊みて被覆して包む物。古は、細き竹にて簀(ス)を編み、裏に絹・錦を張り、緒を附けしといふ。今多くは、厚き紙に布帛などを貼りて造り、緒を附けて結ぶ。ふまき。



(つ ち)

ちす。書帙。

帙を繙く【句】書册を披きて讀む。ひもとく。

ちつ 秩【名】祿高。「秩を增す」

ちつ 膣【名】〔醫〕『醫 Vagina』『膣の字は肉の生ずる義なるを、肉のうつろなる義に轉用せるもの』婦人生殖器の一部。陰門より子宮に至る管狀の部分。

ちつ 秩【助數】『禮記の王制篇に「九十有レ秩」とあり』十年間の稱。六十一歳より七十歳までを七秩といひ、八十歳までを八秩といふ類。

ちつ 地圖【名】地球の全部、若しくは一部分の地形を、種種の符號を用ひて、平面に見たるさまに寫したる圖。

ちづ 智頭【名】〔地〕因幡國八頭(ヤ)郡にある町。山間の小驛。茶を產す。

ちつ-いり 帙入【名】帙に入れある書册。

ちつ-えん 膣炎【名】〔醫〕膣に起る炎症。異物細菌の刺戟によりて、膣の粘膜爛燗して、炎症性となり、膣脹・灼熱感等を初とし、帶下の增加、乃至膣漏を生ずるもの。

ちづ-か 千束【名】■束ねたる物の千の數。千たば。〔新勅撰〕秋をへて君がよはひのありかずにかりたの稻も千束積むなり」■『にしきぎ(錦木)を見よ』多くの艷書。一代男「いろいろ道ならぬ事をかきくどきて、ちづか送りけるに、返(シカ)もなくて」

ちづか 千束【名】〔地〕豐前國築上(ツキアゲ)郡にある村。小笠原氏の舊藩地。

ちづ-がく 地圖學【名】『英 Cartography』地圖を描く方法を正確ならしむる學問。

ちつ-かたる 膣加答兒【名】〔醫〕**ちつえん**(膣炎)に同じ。

ちつ-かひ 地使【名】巷にて掏ること、又その掏摸(スリ)。

ちっき《英 Ticket の訛》【名】■汽車・汽船等の切符。■汽車にて託送する手荷物・一時預けの荷物等の引換券。「同じ。

ちっき 地搗・地突【名】**ぢがため**(地固)に

ちっ-きん 剔金【名】堆漆(ツイシツ)の一種。下學集「剔金、チツキン」

ちっ-きん 昵近【名】■なれしたしむこと。■次條の略。

ちっきん-しゆう 昵近衆・直近衆【名】■**そばしゅう**(側衆)■に同じ。■足利時代に、將軍の上洛又は關東の使の上京せる時接伴する役。德川時代にも置かれしが、文久に至りて廢せられたり。

ちっ-きょ 蟄居【名】■蟄伏し居ること。閉居。■退きて家に籠り居ること。閉門より重く、犯人をその家の一室に籠(コ)置きて、他出を許さぬもの。期限なきものを、永蟄居(イエヂツ)といふ。おしこめ。

ちっく【名】**こすめちっく**に同じ。今宮心中「二郎兵衛雪駄をちっくと直し」

ちっくり【貌】前條に同じ。丹波與作「鬢がちっくりちぢんだ」

ちっ-くわい 蟄懷【名】心のふさぎ悶ふること、又その心。不平。太平記「平家九代の繁昌、一時に滅亡して、源氏多年の蟄懷一朝に開く」同「解官(ゲカン)停任(テイニン)せられし人人、死罪流刑に逢ひしその子孫、此處彼處より召出され、一時に蟄懷を開けり」

ちっ-つけ 乳附【名】生兒にとりあへず乳を遣むること、又その女。ちちつけ。〔古語〕梁塵「御ちつけにしもあらず、やがて御めのとの中に入れさせたまひつ」

ちっ-づけ 乳附【名】旗に乳(チ)■を附けたるもの。

ちづけ-の 乳附幅【名】外幕(クマ)の第五の年限。任期。任限。

ちつ-げん 秩限【名】その官職に就きをる

ちっこ 小【名】**ちび**に同じ。

ちっ-こう 膣口【名】膣の外陰部に接する

ちっ-こう 朱紅【名】**つちこう**(堆紅)の類。下學集「朱紅、チツコウ」

ちっこ-と【副】**ちくに**同じ。醒睡笑「壁の下、道の傍に、ちっこと佇み」

ちっこ-べそ 小兵衛【名】**ちび**に同じ。〔語〕

ちっこん 昵懇【名】したしきこと。心やすきこと。懇意。

ちっ-し 窒死【名】窒息して死ぬること。

ちっ-じ 秩次【名】**ちつじょ**(秩序)■に同じ。

ちづ-し 地圖師【名】地圖を製する人。

ちつじょ 秩序【名】■ついで。次第。順序。秩次。■(兵)軍隊に於ける次序。無形的秩序と有形的秩序とに分つ。前者は、所謂軍紀にして、軍人上下の班秩、指揮・服從の次序をいひ、後者は、戰鬪上の次序にして、命ぜられたる各部隊間距離の間隔、各官の位置の保持、及び命令下達の順序等をいふ。

ちっす 蟄す【動佐變自】■蟲・土を穿ちて、その中に冬を凌ぐ。すごもる。本朝三國誌「龍は泥水に蟄して、一陽の至るを待つ」■世をのがれ隱る。

ちっ-すな 直歳【名】**しっすい**(直歳)に同じ。

ちっ-せき 蟄石【名】**かがみいし**(鏡石)■に同じ。

ちつ-ぜん 秩然【貌】秩序のよくととのひたるさま。秩序井然。秩秩。

ちっ-そ 窒素【名】〔化〕『英 Nitrogen』氣體元素の一。空氣中の一成分となりて、約その五分の四を成す。直接に他元素との化合力鈍く、無色無臭・無味にして、他物の燃燒を助けず。動物はこの中にて窒息す。

ちっ-そく 窒息【名】■氣息のつまること。■〔醫〕呼吸に障碍起りて、酸素缺乏の狀態に陷ること。

ちっ-そく 窒塞【名】ふさがること。閉塞。

ちっそ-くわがふぶつ 窒素化合物【名】窒素と他の元素と化合せるもの。その種類甚だ多し。

ちっそ-こうげふ 窒素工業【名】空氣中の窒素を固定せしむることを行ふ工業。

ちっそ-でんとう 窒素電燈【名】電燈の一種。タングステンの纖條を具ふる電球の內に、化學的作用性の乏しき窒素瓦斯を充したるもの。その纖條は螺旋になして、斷線を防げり。

ちっそ-どうくわ-さよう 窒素同化作用【名】〔植〕『英 Nitrogen assimilation』根瘤(リウ)バクテリヤなどのごとき或種の植物が、大氣中に遊離せる窒素を吸收して、窒素化合物を造成する作用。**どうくわ**(同化)■參照。

ちっそ-ひれう 窒素肥料【名】窒素分に富み、窒素を供給する目的にて施用する肥料。

ちつちぜみ ちつつち蟬【名】〔動〕有吻(ハウ)類に屬する昆蟲。體小にして、長さ七分ばかり、黑色を呈し、黃綠色の斑紋あり。腹部の下面に白粉を生ず。翅は無色透明なり。夏秋の候、松林などの間に鳴く。我が國には多く產せず。なんきんぜみ。

ちつ-ちつ 秩秩【貌】一ちつぜん(秩然)に同じ。二清く明かなるさま。三流れて止まざるさま。四つつしむさま。五秩序の能く整へる貌。

ちつ-ちつ 蟄蟄【貌】やはらぎあつまるさま。

ちっちやい【形】ちひさし(小さし)の訛。

ちっちやこもち【名】ちいちやこもちに同じ。ちっちやこもちや桂の葉【句】「ちいちやこもちや桂の葉」に同じ。風流徒然草「かくれん坊にまじらぬ者は、ちっちやこもちや桂の葉とは、子供のいふことなり」

ちっ-ちゆう 蟄蟲【名】蟄伏してある蟲。

ちっ-ちよく 黜陟【名】ちゆっちよく(黜陟)を見よ。

ちつ-つき 血續【名】血すぢのつづきたること、又その間柄の者。緣者。「と。隣地。

おつつき 地續【名】土地の連續してあること。

ちっと 些こ【副】ちと(些と)の訛。ちっこ-や-そっこ【句】すこしぐらゐ。〔俚語〕「そんな事も、ちっとやそっとは有ったらう」

おっと【副】動かず移らぬさま。「よ。

ちっとう 黜等【名】ちゆっとう(黜等)を見よ。

ちづとうえいはふ 地圖投影法【名】〔地〕『Map projection』投影法を應用して、白紙上に地球の經緯度を表現する方法。正射投影法・平射投影法・圓錐投影法・圓柱投影法等の種類あり。「こしく。

ちっと-ばかり 些許【副】すこしばかり。すこし。

ちっと-ぺい【副】ちくとばかり(ちくと許)に同じ。〔東京近在の方言〕柳塘「ちっとぺい芋はあるがと村伸人」「じ。

ちっとも 些こも【副】ちとも(些とも)に同

ちつ-ばく 繫縛【名】つなぎしばること。

ちっぷ《英 Hip》【名】こころづけ。纏頭(テン)。

ちっぷく 蟄伏【名】一蟲類の、冬の間地中にこもりゐること。二こもりゐること。潛蟄。

ちっ-ぺい【名】ちっこべゑ(小兵衞)に同じ。〔俚語〕源平布引滝「このちっぺいめ、合點がゆかぬつらがまへ」

ちっぺい【形二】ちひさし(小さし)に同じ。(小供を罵る時などにいふ) 聖徳太子繪傳記「脊骨にどうと乘りかかり…ちっぺいめ、息骨が立てらるるか、動いて見よ」

おつぼ 地坪【名】地面の坪數。土地の面積。地積。(建坪(タテツボ)に對して)

ちっぽけ【貌】ちひっぽけ(小っぽけ)の略。丹波與作「十ばかりの、剃りさげの、ちっぽけな馬かた」

ちつぼね 乳局【名】乳母となりてかしづき育つるつぼね。

ちっぽり【貌】ちよっぽりに同じ。

ちづまり 血詰【名】血の凝結によりてつまること。盛衰記「岡部彌次郎が首切りたりける刀を拭はずして鞘にさしたれば、血詰して拔けざりけり」

ちつまん 秩滿【名】古、國司などの官職の任期の滿つること。著聞「秩滿の後、都へ歸り給ひて」

ちつまん-ちやう 秩滿帳【名】古、秩滿の者を記して、每年正月一日、式部省より太政官に進めし帳簿。

おつめ 地詰【名】ちおさ(地押)に同じ。

ちつ-りよう 蟄龍【名】一蟄伏せる龍。地に潛める龍。二風雲の機を得ずして、凡人の間に在る英雄などの譬。

ちつれつ-はふ 秩列法【名】〔數〕じゆんれつ(順列)に同じ。

ちつ-ろく 秩祿【名】一官等の次第により て賜はる祿高。食祿。扶持。知行。俸祿。二家祿及び賞典祿の稱。

ちつろく-こうさい 秩祿公債【名】廢藩置縣の際、秩祿を奉還したる士族以下の薄祿者に、その代償として交付するため、明治七・八・九の三箇年間に發行したる公債。

ちつろくこうさい-しようしよ 秩祿公債證書【名】秩祿公債の證書。

ちてい 池亭【名】池のほとりの小さき家。

ちてい 地底【名】大地のそこ。

ちてい 地堤【名】〔地〕中央は高く、兩側の順次に低落せるところの地層。

ちてい 馳騁【名】馬を馳すること。

ちてい 治定【名】をさめさだむること。さまりさだまること。治定(ヂヤウ)。

ちてう 治朝【名】支那周代の朝廷の一部。三朝の一。天子の常に事を治むる所。(外朝・內朝に對して)

ちてき 知的【貌】『英 Intellectual』智識あるさま。智識に關するさま。

おつてき 地出來【名】その土地より產出したること、又その物。

ちてき-じいう 知的自由【名】〔哲〕『英 Intellectual freedom』吾人の行動が、無合理的に支配せられずして、合理的の思慮に支配せらるること。

ちてき-ちえき 地的地役【名】〔法〕ぢくちえき(屬地地役)に同じ。

ちてき-ちよくくわん 知的直觀【名】〔哲〕『英 Intelle tual intuition』思惟又は悟性によりて、直接に、卽ち推理などを經ずして、眞理を看取すること。超感性的直觀。直觀的悟性。

ちてき-はんだん 知的判斷【名】『英 Intellectual judgement』眞僞並びに齊合不齊合に就きて下だす判斷。(道德的判斷に對して)

ちてつ 雉蝶【名】城の牆(キ)と城の上の物見の垣と。

ちてん 治天【名】『治天下の義』天下を統治したまふこと。盛衰記「鳥羽院第三の御子雅仁親王とぞ申しし。治天僅かに三年」じ。

ちてん 知殿【名】〔佛〕てんす(殿主)に同じ。

おつてん 地天【名】〔佛〕じふにてん(十二天)を見よ。

ちてんりう 地電流【名】〔理〕ちき(地氣)に同じ。

ちと 雉兎【名】一雉子(シ)と兎と。盛衰記「雉兎の栖と成り替はり」雉兎の者【句】『孟子の梁惠王篇に「鎒耨者往焉、雉兎者往焉」とあり。雉兎を捕ふる人の意』かりうど。獵師。天智天皇、往來の老若男女、鎒耨の者、雉兎の者」

ちと 些こ【副】一わづか。少。すこし。いささか。ちっと。辨內侍日記「ことぢ立てられて、ちとかきならして」二暫時。しばし。しばらく。字治三日といふ晝つかた、ちとまどろませたまふともなきに」

ちと 智度【名】〔佛〕はんにやはらみつ(般若波羅蜜)に同じ。

ちと 蠟頭【名】一蠟(ロウ)の頭。二蠟の頭の形に作りたるもの。

ちとう 千燈【名】神佛に捧ぐる千箇の燈明。必ずしも千箇と限らず。千は大數の概稱なり。萬燈の類。せんとう(千燈會)參照。

ちとう 池頭【名】いけのほとり。

ちとう 地動【名】一地球の運動。地球の自轉と公轉。二『漢書の元帝紀に「郡國被二地動一災甚者無レ出二租稅一」とあり』ぢしん(地震)に同じ。三〔理〕吾人の感知し得る地震なき時に於ても、常に地盤が微小なる振動をなすこと。

ちとう 地頭【名】一鎌倉幕府の職制の一。各莊園に置きて兵糧米の徵收、京都鎌倉の大番、盜賊奸徒の追捕等を掌り、事ある時は、總領地頭の下に屬して、軍役を勤めしもの。地頭職。二一鄕一村の領主。地頭に法無し【句】地頭の專橫なるをいふ。〔諺語〕泣く子と地頭には勝たれぬ【句】已むを得ず、そのいふがままに從ふことの譬。〔諺語〕

ぢとう 地動【名】〔佛〕大地の震動。ろくしゆしんさう(六種震動)參照。

ぢとうかたんだんせん 地頭方段錢【名】室町時代に地頭が、その用金として課したる段錢。

ぢとうさた 地頭沙汰【名】昔時、地頭が訴訟を裁斷せしこと。「に同じ。

ぢとう-しよく 地頭職【名】ぢとう(地頭)ぢとう-しらず 地頭不知【名】大いなる鮑(アハビ)。俚言集覽「地頭しらず。大アハビの事なり」勸學院物語」

ちどう-せつ 地動説【名】『英 Heliocentric theory 又 The copernican system』晝夜四時の別は、地動㊀によりて起るといふ説。(天動説に對して)

おどう-だい 地頭代【名】次條の略。

おどう-だいくわん 地頭代官【名】地頭の代官。地頭代。

おどう-てんわう 持統天皇【名】(人)第四十一代の天皇。御名は菟野(ウノ)又は鸕野讃良(サヽラ)。高天原廣野姫(タカアマハラヒロノヒメ)天皇ともいふ。天智天皇第二の皇女。母は遠智娘(オチノイラツメ)。在位十年(紀元一三四七年—一三五六年)。大寶二年崩ず。壽五十八。

おどうばやし 地頭林【名】德川時代に、下總國多古藩にて、人民に私苗を下付して仕立てしめたる林。とのやま。

おどう-やく 地頭役【名】昔時、地頭に課せし臨時の稅。

ちとく 地德【名】地の功德。

ちとく 知得【名】㊀しりうること。のみこむこと。㊁知りあふこと。

ちとく 智德【名】㊀智と德と。㊁智慧。德行の兼ね備はれること、又その人。㊂〔佛〕はんにやとく(般若德)に同じ。

ちとく-がふいつ-ろん 知德合一論【名】〔哲〕道德的命令の必然なるを知る所に道德の眞義存すとなす倫理說、卽ち道德を行はんとせば、まづ道德の何たるかを明知せざるべからず、然らざれば、盲目的動作に過ぎずして、眞の德行とは稱すべからずとなすものにして、ソクラテス(Socrates)の創唱に係る。

ちとせ 千歲【名】〔地〕膽振國八郡の一。札幌支廳の所管。舊名は志古都(シコツ)。

ちとせ 千歲・千年【名】㊀年數を、千度經たること。千の年。せんざい。㊁數多の年。限もなく多き年。萬葉「足引の山のこぬれのほとりてかざしつらくはちとせほぐとぞ」千歲の聲【句】ちとせを悦ぶ聲。千秋樂・萬歲樂など唱ふる聲。後撰「琴のねも竹もちとせの聲するは人のおもひに通ふなりけり」千歲の坂【句】千年の齡を越ゆることを坂に譬へていふ。

ちとせ-あめ 千歲飴【名】せんねんあめ(千年飴)に同じ。

ちとせ-かなめ 千歲要【名】鯨鬚を用ひて作りたる扇の要。元文年間、京都の扇折、小西八兵衞の創製したるものにして、廣く世に行はる。

ちとせ-がは 千歲川・千年川【名】〔地〕㊀ちくごがは(筑後川)の別稱。夫木「君がためかぎりもあらじちとせがはるせきの浪のいくめぐりとも」㊁山城國大井川の上流、千歲山の麓の邊の別稱。兼好法師、千とせ川みさに下す筏士のとまりやいづこ嵯峨の山もと」

ちとせ-がひ 千歲貝【名】〔動〕腹足(フクク)類に屬する貝。その介殼は堅牢にして、楕圓形を呈し。長さ八九寸、淡黃にして褐色の線あり。長崎・沖繩・臺灣などに產す。たうかむり。龍神貝。

(ひがせとち)

ちとせ-どり 千歲鳥【名】〔動〕(一)『鶴は千年、龜は萬年』を見よ』つる(鶴)㊀の異稱。

ちとせ-やま 千歲山・千年山【名】〔地〕㊀丹波國桑田郡にある山。愛宕山の西麓なる別峰。拾遺「ことしよりちとせのやまは擧たえず君が御代をぞ祈るべらなる」㊁羽前國南村山郡の北に在る山。形、倒扇に似て、全山、松樹を以て蔽はる。

ちとせ-らん 千歲蘭・虎尾蘭【名】〔植〕百合(ユリ)科に屬する多年生草本。原產は熱帶亞弗利加及び臺灣。葉は纖長にして、扁平、肉質にして虎斑あり。九月頃、白色の花を開く。觀賞用として栽培せらる。

ちとつ 馳突【名】馬を馳せて突擊すること。敏捷ならざること。のろきこと。

ちとつ-べこ【副】ちっとばかり(些許)に同じ。〔東北の方言〕膝栗毛「わしははあ、ちとべこ無くならした物がござるから」同じ。

ちとま-り 血留【名】かぶらまき(蕪菁卷)に同じ。

ちどん 癡鈍・痴鈍【名】氣轉のきかぬこと。おろか。まぬけ。

ちどん 遲鈍【名】性質鈍くして、動作遲きこと。

ちとめ 【名】〔植〕ががいも(蘿蔔)に同じ。

ちどめ 血止【名】㊀傷口の出血を止むること、又その藥。㊁〔植〕ちどめぐさ(血止草)の略。同じ。

ちどめ-いし 血止石【名】血止に用ふる土狀の酸化鐵。石見國佐渡國より出づ。むみやうい(無名異)參照。

ちどめ-ぐさ 血止草・石胡荽【名】〔植〕繖形(サン)科に屬する多年生の草。山野・路傍等に自生し、細き莖地上を這ひて、節節より根を下す。葉は長き葉柄を有して、淺く掌狀に分裂し、春夏の交、五瓣の小白花を徹形花序に著け、扁平なる果實を簇生す。いはきぐさ。うづらぐさ。〔一說〕に同じ。

ちどめ-ぐすり 血止藥【名】けつさい(血止劑)に同じ。

ちとも 些も【副】すこしも。毫も。ちっとも。ちよっとも。しばらくも。

ちどり 千鳥【名】㊀數多の鳥。ももちどり。〔古語〕萬葉「わが門の榎(エ)の實もりはむ百千鳥ちどりはくれど君ぞ來まさぬ」㊁涉水(セキ)類に屬する鳥。冬季、多く河海の邊にむらがれり。鴴鴴に似て小さく、頭、嘴は蒼黑に、頰白く、背青黑く、胸と翅とは黑し。足には、前に三趾あるのみにて、後趾を缺くが故に、走る時は足を踏み違へにすといふ。種類多し。海燕。磯菜鳥。〔衝〕㊂織物の模樣の一。「波にちどり」㊃ちどりあし(千鳥足)の略。㊄踊にて、各人、三三五五廻轉して巡り逢ふこと。㊅すべて三角のかどかどに點をうちたる如き配置、又互違或はあやにとりたる形。古今百馬鹿「あれさ、手を千鳥にして…右の手を左の袖へ入れて、左の手をこっちへ」㊆ちどりがかり(千鳥絡)の略。㊇名香の一。ぢんの一種。

ちどり 地鳥【名】㊀その地に產する鷄。㊁本邦產の鷄。(舶來のと區別していふ)

ちどり 地取【名】㊀家屋を築く前に、地割をすること。㊁園碁にて、地(ヂ)㊅を廣く得ること。うちどり。㊂角力の稽古をすること。稽古相撲。

ちどり-あし 千鳥足【名】㊀馬の足並の千鳥の羽音の如くにきこゆること。太平記「千鳥足を踏ませて、小路を歩ませたり」㊁『千鳥の歩むさまに似たるよりいふ』酒に醉ひなどしたる人の路を行くに、千鳥の渉るが如く、よろめきて歩むこと。瑞聞。天の網島「番太が足どり千鳥足」

ちどり-あひ 地取合【名】狹き土地の範圍內にての爭闘。ぢいくさ。「石」に同じ。

ちどり-いし 千鳥石【名】かもがはいし(鴨川石)の一。

ちどり-いしめ 千鳥石目【名】彫刻の石目の一。

ちどり-うち 千鳥打【名】綱にて千鳥を取ること 俚言集覽「武藏六鄕(ガウ)の下流、羽根田(ハネダ)村の洲崎にて、網をもて取るを千鳥打といふ」

ちどり-かがり 千鳥絡【名】『ちどりあし(千鳥足)㊁・ちどり(千鳥)㊅を見よ』絲を互ちがひに斜にまじへて、かがりゆくこと。

ちどり-がけ 千鳥掛【名】㊀ちどりかがりの如く、絲をかくること。雪女五枚羽子板「くれなゐの調(シラ)を千鳥がけにかけさせ、合はせ打ったるはさっても打った小鼓」㊁斜に打違ふる狀態。

ちどり-がひ 千鳥貝【名】〔動〕蟶蝪(バカン)類に屬する貝。磯の石・蛇の殼などに附著して棲息し、殼の一片なること、よめがさらの如く、形、千鳥または雀の如くにて、厚く小さく、淡白色にして、茶色の線あり。

ちどり-ぐさ 千鳥草【名】〔植〕いかりさう(碇草)に同じ。

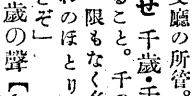
ちどり-さう 千鳥草【名】〔植〕㊀蘭科に屬する多年生の草。莖の高さ一二尺。果實は蒴果(サククワ)なり。夏日、淡紅色の美しき花を開く。觀賞用として栽培す。㊁ひえんさう(飛燕草)に同じ。

ちどり-だな 千鳥棚【名】遠棚(ヂガヒ)の一種。

ちどり-ぬひ 千鳥縫【名】山道の形に縫ふこと、又そのもの。

ちどり-の-き 千鳥樹【名】〔植〕㊀いたどかへで(いたどかへで)に同じ。㊁やまもみぢ(山紫)に同じ。

ちどり-はふ 千鳥破風【名】〔建〕㊀ちどり


(ひぬりどち)

(千鳥)㊀を見よ』屋根面に取附けたる、三角形をなせる破風。中に木連格子(キツカウジ)を嵌込む。あふりはふ。

ちどり-むすび 千鳥結【名】女の帯の結び方の一。

ちどり-やき 千鳥焼【名】蛤の田楽。

ちどり-らん 千鳥蘭【名】〔植〕いはちどり(岩千鳥)に同じ。

ちどろん 智度論【名】〔書〕だいちどろん(大智度論)の略。

ちな 千名【名】多くの浮名。さまざまの評判。いほな(五百名)参照。〔古語〕萬葉「吾が名はも千名のいほなに立ちぬとも君が名たたば惜しみこそなけ」

ぢ-ない 地内【名】㊀一區域をなせる土地の構内。境内。㊁〔佛〕ちちゆう(地中)に同じ。

ち-なう 智嚢【名】㊀深く蓄へたる智慧。「智嚢を絞る」㊁その仲間の中にて、智慧に富み、計畫に長じたる人。ちゑぶくろ。

ち-ながし 血流【名】刀の刃に刻める、細長き溝。刀のひ。血溝。血槽。

ぢ-なし 地無【名】少しも隙間なき總模様の布帛。普普物語「六七十年已前、女中、地なしといふ小袖、持たざるはなし。總身を金箔にて、一面に松皮菱のやうに箔置きたる小袖なり。婚禮又は年始など、男の慰斗目(ガシラ)著る時は、女は地なしなり」後日男草子「紅梅の下著に紫鹿子、中著を正風にして、上は地なしの菊ぞろへの小袖」

ぢ-なし 地梨【名】〔植〕くさぼけ(檵子)に同じ。

ぢなし-がのこ 地無鹿子【名】地無の鹿子。鹿子の總模様。五人女「下に黄無垢(キムク)、中に紫の地なし鹿子、上は鼠繻子に百羽雀のきりつけ」

ぢなし-こそで 地無小袖【名】地の見えぬまでに金泊を置きたる小袖。ぢなし。

ぢ-なまぐさし 血腥し・羶し【形ク】㊀鮮血のにほひあり。ちくさし。㊁戰亂のために死傷者多し。

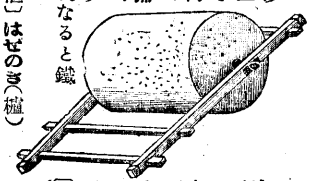
ちなみ 因【名】ちなむこと。ゆかり。えにし。ゆゑよし。蟬丸「誠に師弟のちなみとて、此度の忠節淺からず」

ちなみ-に 因に【副】ついでに。ちなみて。

ちなむ 因む【動四自】その物事に關係あるを機會として、或事をなす。

ぢ-なん 泥喃【感】㊀燕などの囀る聲。ぢだん。㊁男女の私語する聲。さざめごとの聲。ぢだん。

ぢ-ならし 地平【名】㊀地面を、高低なきやうに平かにすること。㊁道普請に、砂石などを敷きたる上をならすために挽きころがす、大なる筒狀の石。ろおらあ。㊂農具の一。形、備中鍬に似て齒短く、耕地をこなしならすに用ふるもの。木製なるも鐵製なるもあり。


(ぢならし(二))

ちならす 慮【名】〔植〕はぜのき(櫨)に同じ。〔古語〕字鏡「櫨、地奈良須」

ぢ-なり 地形【名】ちけい(地形)に同じ。

ぢ-なり 地鳴【名】地震・噴火・地すべりなどの時、地下の鳴りひびくこと。ぢひびき。

ちぬ 茅渟【名】㊀〔地〕和泉國の南部地方の汎稱。〔血沼〕㊁〔動〕ちぬだひ(茅渟鯛)の略。

ぢ-ぬき 地貫【名】〔建〕貫の一。根太と平行に柱に取附けたるもの。床板の端を承く。

ち-ぬし 乳主【名】乳母の子。〔古語〕祭禮「かのおとどの、御ちぬしの娘」「ゆ。

ぢ-ぬし 地主【名】その土地の持主。ぢし

地主の神【句】土地を守護する神。とこぬしのかみ。

ぢぬし-しよく 地主職【名】王朝時代の、莊園の領主の稱。

ちぬだひ 茅渟鯛【名】〔動〕『茅渟海に產するもの、味最も美なるよりいふ』くろだひ(黒鯛)に同じ。

ちぬの-いけ 茅渟池【名】〔地〕和泉國泉南(イヅミナン)郡北中通村及び佐野村の間にある池。垂仁天皇の皇子五十瓊敷入彦(イニシキイリヒコ)命の作りたまへるもの。

ちぬの-うみ 茅渟海【名】〔地〕和泉國と淡路國との間に位する海。萬葉「妹がため貝をひろふとちぬのうみにぬれにし袖はほせどかわかぬ」

ちぬの-うら 茅渟浦【名】〔地〕次條に同じ。

ちぬの-はま 茅渟濱【名】〔地〕おほはま(大濱)㊁に同じ。

ちぬの-みや 茅渟宮【名】允恭天皇の八年に作りて、衣通(ソトホリ)姫を居らしめたまひ、後、元明天皇の離宮となりし宮。和泉國泉南(イヅミナン)郡上郷村大字中村にその跡ありといへど、今詳かならず。

ぢぬり 地塗【名】蒔繪の塗込の一、繪漆にて薄く下塗すること。

ぢぬり-ふで 地塗筆【名】蒔繪漆塗等にて、下地に塗りつぶしに用ふる筆。

ち-ぬる 血塗る・穢る・衄る【動四自】『孟子の梁惠王上篇に「將二以釁一レ鐘」とあり』支那にて、牲(イケニヘ)を殺して、その血を祭器に塗り、又は敵を殺して、その血を鼓に塗りて、軍神を祭る。

ちぬわ 千沼回【名】〔地〕和泉國泉南・泉北郡の邊の海灣。萬葉「千沼回より雨ぞ降りくる四八津のあま綱手綱ほせりぬればたへんかも」

ぢ-ねずみ 地鼠・鼬鼯【名】〔動〕食蟲類に屬する獸。むぐらもちに似て、體小さく、尾長く、口吻細く尖り、常に土中をむぐりあるきて、蚯蚓(キミズ)などを餌とす。ひみず。

(みずねぢ)

ち-ねつ 地熱【名】〔地〕『英 Terrestrial heat』地球の內部に存する地球固有の熱。ちかく(地核)參照。

ぢ-ねん 持念【名】〔佛〕正法(シヤウハフ)を受持・憶念すること。

ぢ-ねんぶつ 地念佛【名】〔佛〕眞宗の葬禮に、出棺して葬所に到る途上、棺前にて、行く行く唱ふる念佛。「よ。

ち-の-いけ 血の池【句】ち(血)の條下を見

ちのいけ-じごく 血池地獄【名】㊀〔佛〕ぐれんじごく(紅蓮地獄)に同じ。遊君三世相「百由旬の血の池を、鐵のかいげにて汲干せとせめらるる」㊁豐後國速見(ハヤミ)郡御起(コヲ)町大字龜川に在る熱泉。赤き泥土の中より地熱發散して、恰も煮沸するが如く、俗に赤湯と稱す。

ちのう 智能・知能【名】はたらき。知識才能。

ちのう-けん 智能權【名】〔法〕『英 Right of talent』財產權の一。智識・能力などを保護して、他人をして使さざらしむる權利。著作意匠などに關するもの、これなり。

ち-の-おや 乳の親【句】ち(乳)の條下を見よ。

ぢ-の-かしら 地頭【名】太鼓の打手の一。

ち-の-き 【名】槐(クワイ)の實なりといふ。〔古語〕字鏡「槐實、知乃木」

ちのけ 【名】てぬぐひ(手拭)を云ふ。〔薩摩國鹿兒島の方言〕

ぢ-の-こ 地粉【名】このこ(磁粉)に同じ。

ち-の-つるぎ 智の劍【句】つるぎ(劍)の條下を見よ。

ち-の-なみだ 血の涙【句】ち(血)の條下を見よ。

ち-の-ね 茅根【名】ちがやの根。

ち-の-ひと 乳人【名】めのと(乳母)に同じ。

ち-の-ぼせ 血逆【名】のぼせ(逆上)に同じ。

ぢ-の-ま 乳の間【句】ち(乳)の條下を見よ。

ぢ-の-み 地蚕【名】〔動〕彈尾(ダンビ)類に屬する昆蟲。體長四厘、帶綠青色にして、やや球形をなし、尾端に紫色の棘あり。又四節より成る觸角を戴き、よく跳躍す。春期蔬菜類の發芽を食害す。まるとびむし。

ちのみ-ご 乳飲兒・乳呑子【名】乳を飲むほどの小供。あかご。ちご。

ち-の-みち 血道【名】㊀血液の運行する道。脈。㊁婦人病の一。血の運行の不順より起るとするもの。ちのやまひ。重雙玉母は持病の血の道に、おさゐが事のその日より、癪の病に胸痛み」

ちのみち-もち 血道持【名】血の道を持病に持つこと、又その人。心中刃は氷の朔日、いたはしや母樣、常が血の道持ち」

ち-の-め 乳目【名】乳首にありて、乳の出づる孔、即ち輸乳管またはその開口點。

ち-の-やまひ 血病【名】ちのみち(血道)に

同じ。

ぢ-の-やまひ 痔病【名】ぢ(痔)に同じ。和名抄智乃夜萬比、後病也」

ち-のり 血糊【名】ぬらぬらとする血。ねばりけある血。のり。

ち-のり 千筴入【名】一つの靫(ゆぎ)に、千本の矢をさし入れたるもの。**いほのり**(五百筴入)参照。〔古語〕鈔「千箭之靫(ノヤナノリ)千箭此云二知能梨一」日本振袖始「千箭の籙、櫨の弓を弓筈高に振り立て」

ぢ-のり 地乗【名】馬術にて、足なみを揃へてゆるやかに乗ること。ぢみち。

ち-の-わ 茅輪【名】『そみんしやうらい(蘇民將來)を見よ』茅にて造りし大なる輪。人これを潜れば、疫病を避くとて、夏越(ナゴシ)の祓に用ひ、これを潜るを胎内くぐりといふ。古はこれを腰に著けたりといふ。すがぬき。

ちば 千葉【名】■(地)四十三縣の一。下總國の千葉・東葛飾(ヒガシカツシカ)・印旛(インバ)・香取(カトリ)・海上(カウナ)の六郡、及び上總・安房の二國を管轄す。縣廳を下總國千葉市に置く。■(地)下總國九郡の一。郡役所を千葉市に置く。■(地)下總國にある市。東京市の東十里餘。東京灣に臨む。縣廳・郡役所の所在地。千葉城址あり。鐵道總武線の一驛。■ばんどうはちへいし(坂東八平氏)を見よ。

ぢ-ば 地場・地塲【名】〔商〕取引所の仲買人の總稱。

ぢ-ば 地盤【名】ぢばん(地盤)■の略。

ぢば【名】いんばふ(婬賣婦)を云ふ。〔駿河國靜岡の方言〕

ち-はう 地方【名】■一方面の土地。■首府以外の地。ゐなか。ぢかた。

ち-はう 治邦【名】■邦をさむること。治國。■をさまれる邦。(亂邦に對して)

ち-はう 癡呆【名】あほう(阿房)(二)に同じ。

ちはう-えうねん-がくかう 地方幼年學校【名】りくぐんちほうえうねんがくかう(陸軍地方幼年學校)の略稱。

ちはう-かいぬんしんばんじよ 地方海員審判所【名】海員審判所の一。海事局に置きて、その管轄區域内に起れる海員懲戒事件の第一審の審判を行ふ所。職員として所長・審判官・理事官・書記を置く。

ちはうかいぬんしんばんじよ-ちやう 地方海員審判所長【名】〔法〕地方海員審判所の長官。奏任官。海事局長又は海事官の兼任。

ちはう-かうとうくわん 地方高等官【名】〔法〕高等官にて地方官たる者。

ちはう-かんごく 地方監獄【名】舊監獄の一。拘留・禁錮・禁獄に處せられしもの及び徒刑に處せられたる婦女を拘禁する所。

ちはう-ぎくわい 地方議會【名】地方自治團體の議決機關、即ち府縣會・郡會・市町村會等。

ちはう-きくわん 地方機關【名】地方行政を取扱ふ機關、即ち地方行政官・地方自治體等。地方行政機關。(中央機關に對して)

ちはう-ぎやうせい 地方行政【名】〔法〕『獨 Kommunalverwaltung』■行政區劃の各地方に行ふ行政。地方官治行政と地方自治行政とに分つ。各その條を見よ。(中央行政に對して)■ちはうじちぎやうせい(地方自治行政)に同じ。

ちはう-ぎやうせい-きくわん 地方行政機關【名】ちはうきくわん(地方機關)に同じ。(中央行政機關に對して)

ちはう-ぎやうせい-くわん 地方行政官【名】ちはうくわん(地方官)に同じ。(中央行政官に對して)

ちはう-ぎやうせいくわん-しよ 地方行政官署【名】〔法〕ちはうくわんしよ(地方官署)に同じ。(中央行政官署に對して)

ちはう-ぎやうせい-くわんちやう 地方行政官廳【名】ちはうくわんちやう(地方官廳)に同じ。(中央行政官廳に對して)

ちはう-ぎやうせい-くわんぶ 地方行政官府【名】ちはうくわんちやう(地方官廳)に同じ。(中央行政官府に對して)

ちはう-ぎやうせい-ちやう 地方行政廳【名】ちはうじちたい(地方自治體)に同じ。

ちはう-ぎやうせいくわんちやう (地方行政官廳)に同じ。(中央行政廳に對して)

ちはう-けいさつ 地方警察【名】『獨 Ortspolizei』■地方官廳の權限に屬する警察。(一國の警察)に對して)■その利益が一地方の區域に限られたる警察。

ちはう-けいさつ-けん 地方警察權【名】地方警察に就きて命令を發し、處分を行ふ權限。

ちはう-げんき 地方原器【名】明治四十二年七月以前、各地方に於て度量衡器檢定の標準に供するため、その副原器に依りて製作し、地方長官の保管せし度量衡器。

ちはう-ご 地方語【名】くにことば(國語)(二)に同じ。

ちはう-こうきやうだんたい 地方公共團體【名】地方團體にして、自治行政を行ふ公法人。自治團體。地方自治團體。「し。

ちはう-こうさい 地方公債【名】次條に同じ。

ちはう-さい 地方債【名】地方自治體の公債。即ち府縣債・郡債・市債・町村債・水利組合債など。一定の事由ある時に限りて起すべきものにして、内務・大藏兩大臣の認可を得るを要し、償還期限は三十年以内とす。地方公債。(國債に對して)

ちはう-さいけん 地方債券【名】〔法〕次條に同じ。

ちはう-さい-しやうけん 地方債證券【名】地方債のために發行する證券。地方債券。

ちはう-さい-しやうしよ 地方債證書【名】前條に同じ。

ちはう-ざいせい 地方財政【名】〔法〕地方團體の財政。

ちはう-ざいせい-がく 地方財政學【名】〔經〕地方財政を攻究する學問。

ちはう-さいばんしよ 地方裁判所【名】通常裁判所の一。區裁判所の直接上級なる合議制度の裁判所。第一審に於て區裁判所控訴院又は大審院の權限に屬するものを除き、一切の民事・刑事を裁判す。第二審として、區裁判所の判決に對する控訴、區裁判所の決定命令に對する控告、及び破産事件に關する一般の裁判權を有す。其の他非訟事件に關する裁判所の決定命令に對する抗告を審理裁判する權能を有す。三人の

判事より成り、宣言は其の合議を以す。

ちほうさいばんしょ-けんじきょく 地方裁判所檢事局【名】地方裁判所に置く檢事局。

ちほうさいばんしょ-ちゃう 地方裁判所 地方裁判所の長官。其の裁判所内の事務を指揮し、其の行政事務を監督するも、裁判事務は關渉するを得ず。

ちほう-じ 地方時【名】『英 Local time』地球上の或場所に於て、太陽のその地に南中する、即ち子午線に對せし時刻を、正午と定めて計算する時間。その地の平均太陽時。(標準時に對して)

ちほう-しがく 地方視學【名】明治三十年北海道廳・府・縣に設置せられ、地方長官の指揮を受け、小學教育に關する學事の視察を掌らしめたる判任官。明治三十二年廢止せられたり。

ちほう-じち 地方自治【名】〔法〕じちせい(自治制)に同じ。

ちほうじち-きくわん 地方自治機關【名】〔法〕じちきくわん(自治機關)に同じ。

ちほう-じちぎゃうせい 地方自治行政【名】〔法〕地方行政のうち、地方官廳の掌るもの。單に自治行政ともいふ。

ちほう-じちせい 地方自治制【名】〔法〕じちせい(自治制)に同じ。

ちほう-じちたい 地方自治體【名】〔法〕次ちほうじちだんたい 地方自治團體【名】〔法〕ちほうこうきょうだんたい(地方公共團體)に同じ。

ちほうじちだんたい-けいさい 地方自治團體經濟【名】〔經〕公經濟の一。地方自治團體の經濟。

ちほう-しんりんくわい 地方森林會【名】農商務大臣監督の下に、保安林の編入・解除の議案、土地の使用・收用・補償金及び擔保の裁決をなす合議制の地方官廳。地方長官これが會長となり、府縣の高等官・大林區署・鑛山監督署の高等官、名譽職府縣參事會員及びそれらの事業に經驗あるものの中より、農商務大臣の任命したる議員を以て組織す。

ちほう-じゃうきふぎゃうせいちゃう 地方上級行政廳【名】上級の地方行政廳。

ちほう-しゃうげふ 地方商業【名】一地方にのみ行はるる商業。

ちほう-しょく 地方色【名】■『英 Local colour』地方特有の人情・風俗・風景等の趣味、又その色彩・氣分。

ちほう-ぜい 地方稅【名】府縣にて、行政費などに充つるため、府縣會の決議を經て、その地方限りに取立つる稅。(國稅に對して)

ちほう-せいど 地方制度【名】〔法〕地方行政の組織・權限等に關する制度。官治制度・自治制度の別ありて、並び行はる。(中央制度に對して)

ちほう-そくこうじょ 地方測候所【名】道・府・縣に設け、氣象の觀測に從事する所。所長(奏任)・技師(奏任)・技手・書記(以上判任待遇)の職員を置き、文部大臣監督の下に地方長官これを管理す。ちゆうあうきしゃうだい(中央氣象臺)參照。

ちほう-だんたい 地方團體【名】■地方に於ける團體。(中央團體に對して)■〔法〕こうきょうだんたい(公共團體)に同じ。■〔法〕じちだんたい(自治團體)に同じ。

ちほう-ちゃう 地方廳【名】〔法〕ちほうくわんちゃう(地方官廳)に同じ。

ちほう-ちゃうくわん 地方長官【名】最高の地方行政官、即ち臺灣總督・朝鮮總督・北海道長官及び府・縣知事など。

ちほう-ちょうへいいねん 地方徵兵醫員【名】地方長官これを任命し、徵兵の身體の下檢査をなし、又徵兵醫官の指揮の下に、檢査の事項を記錄せし地方徵兵官員。明治十二年設置、同十六年廢止せらる。

ちほう-ちょうへいくわんねん 地方徵兵官員【名】前條に同じ。

ちほう-ていしん 地方遞信【名】地方の郵便・電信。

ちほうていしん-くわん 地方遞信官【名】地方遞信の事務に從事する官、即ち地方遞信の事務を取扱ふ官。郵便局・電信局等の職員。

ちほうていしん-くわんしょ 地方遞信官署【名】遞信大臣管理の下に、郵便・小包郵便・郵便爲替・郵便貯金・電信及び電話に關する事務、電氣事業及び船舶海員の監督に關する事務を取扱ふ官署。遞信局・郵便局・電信局及び電話局に分つ。

ちほうてき-ぶんげふ 地方的分業【名】〔經〕ばしょてきぶんげふ(場所的分業)に同じ。

ちほう-はふゐん 地方法院【名】臺灣總督府法院及び關東都督府法院の一。その管轄區内に於ける民事・刑事の第一審をなす單獨裁判所。

ちほうはふゐん-ちゃう 地方法院長【名】■たいわんそうとくふちほうはふゐんちゃう(臺灣總督府地方法院長)を見よ。■そうせんそうとくふちほうはふゐんちゃう(朝鮮總督府地方法院長)を見よ。

ちほう-ばん 地方版【名】■新聞社が各地方の讀者の便を計り、特に紙面の一部に、その地方の事をのみ記せるもの。■地方へ送付する爲に、稍〻切を早くして印刷したるもの。

ちほう-ひ 地方費【名】地方自治團體の經費。

ちほう-びゃう 地方病【名】『英 Endemic disease』永年絕えず又は每歲乃至每期に反復して、一地方に於て發生する疾病。

ちほう-ふう 地方風【名】〔地〕『英 Local wind』地勢・溫度等の關係より、特にその地方にのみ起る風。伊太利のシロッコ(Sirocco)、西班牙のソラノ(Solano)・共に亞非利加の沙漠より吹來る暖風)、又我が國にて嵐と稱する風の如き、これなり。

ちほう-ぶんげふ 地方分業【名】〔經〕ちほうてきぶんげふ(地方的分業)に同じ。

ちほう-ぶんけん 地方分權【名】『英 Decentralization』■政治上の權力が中央にのみ集注せずして、地方に分れたる狀態。(中央集權に對して)■〔法〕地方機關が單に中央機關の器械たるに止らず、或一定の範圍内に於て、自由の活動をなし得ること。(中央集權に對して)

ちば-しろさく 千葉周作【名】〔人〕劍客。北辰一刀流の祖。名は成政。陸前國の人。江戸に住みて、水戸藩の劍術師範となる。安政二年歿す。年六十三。

ちば-しんじゃ 千葉神社【名】下總國千葉市に鎭坐せる縣社。祭神は天御中主(アメノミナカヌシ)尊。他に經津主(フツヌシ)神と日本武尊とを配祀す。

ちば-じゃう 千葉城【名】■今の下總國千葉市猪鼻臺(イノハナ)にありし城。千葉氏の據りしところ。創設年代詳かならず。猪鼻城。■くまもとじゃう(熊本城)を見よ。

ちば-しら 乳柱【名】乳飲兒を乳離(チバナレ)せしむる前に、飯を少しづつ與ふること。

ちばしり 地走【名】祭禮のねりものなどに出づる底の無き屋臺。駕籠の如く舁き、中には囃子方入りて、歩みながら太鼓を打ち、三味線を彈きなどす。鏡山錦袖筆「蹈屋臺が五本に、地走は三本出來る」

ちばしり-まなこ 血走眼【名】血走りたるまなこ。ちまなこ。

ちばしる 血走る【動四自】■血ほとばしる。■腹立ちなどして、眼球充血す。

ちばだ 地肌・地膚【名】■生地(キヂ)の肌。生れつきのはだへ。■刀劍の身の表面。はだ。

ちばち 地蜂【名】〔動〕じがばち(似我蜂)に同じ。

ちはつ 雍髮【名】ていはつ(薙髮)に同じ。

ちはつ 遲發【名】火兵の發火裝置に故障ありて、引金を引きても發火せず、程經て發火すること。

ちはつ 持鉢【名】〔佛〕たくはつ(托鉢)に同じ。

ちばつねたね 千葉常胤【名】〔人〕武將。平常重の長子。下總國千葉郡に住し、關東の名族たり。治承四年源賴朝の兵を擧ぐるや、一族擧りてこれに屬し、覇業を輔けて功あり。常に賴朝の機密に參し、眷遇最も厚し。建仁元年卒す。年八十四。

ちばでら 千葉寺【名】下總國千葉市にある新義眞言宗豐山派の寺。坂東三十三箇所觀音靈所の一。和銅二年行基菩薩の開基にして、千葉常胤再興す。本尊は十一面觀世音。

ちばな 茅花【名】つばな(茅花)に同じ。萬葉「わけがためあが手もすまに春のぬに抜

けるちばなぞめして肥えませ」

ちばなし 乳離【名】兒を母體より遠ざけて、乳離せさすること。斷乳。

ちばなる 乳離る【動下二自】今まで母乳を飲み來りたる兒、三四歳に至り、他の食物のみを取ることとなりて、乳を飲まぬやうになる。我賀五人兒並「また乳ばなれぬ春兒の白鹿」

ちばなれ 乳離【名】ちばなること。斷乳。松風村雨東帶鑑「乳離しての昨日今日」

ちばの 千葉野【名】〔地〕下總國千葉郡の平野。萬葉「ちばのぬのこのてがしはのほほまれどあやに悲しみおきてたかきぬ」

ちばの 千葉の【枕】ちばは數多の葉の意にて、葛は葉のきはめて繁きものなるより、山城國の地名かづぬ(葛野)にかけていふならんといふ。記「ちばのかづぬを見れば百千(チモ)足る家庭(ハナ)も見ゆ國のほめ」し。

ちばのき 【名】〔植〕はないかだ(花筏)に同じ。

ちばひまつ 地這松【名】〔植〕はひまつ(這松)に同じ。

ちはふ 治法【名】ちじつ(治術)に同じ。

ちはふ 幸ふ【動四自】『さちはふ(幸ふ)の略』神、幸を與ふ。さきはふ。〔古語〕萬葉「男(ヲ)の神もゆるしたまひ女(メ)の神もちはひたまひて時となく」

ちはま 地濱【名】園碁にて、相手の石を圍み取りて、その地を自分の有とすること。

ちばみつただ 千葉光忠【名】〔人〕赤穗四十七士の一人。淺野長矩の臣。通稱は三郎兵衛、後、姓名を變じて、原三介といふ。元祿十六年二月四日死を賜はる。年五十一。遺君三首相「血文・血判の科(トガ)ぞとて百由旬の血の池を鐵のかいげにて汲干(クミホ)せと責らるる」

ちばみのき 【名】〔植〕はないかだ(花筏)に同じ。

ちばむ 血ばむ【動四自】『ばむは接尾語』血まさに出でんとす。血にじむ。

ちばん 池畔【名】池のほとり。池邊。池上。

ちばん 血判【名】けっぱん(血判)に同じ。

ちばん 地盤【名】㊀地の大地。地殼。表面。㊁工作物その他を據置く基礎となる土地。㊂物を載する臺。したぐみ。㊃喩ふ「かねの地盤に、しろがねの伏せごに、蕪物くゆらして」㊄事を爲すに當りての根據地。例へば代議士などの選擧區の一部の類。

ちばんじ 知藩事【名】明治維新の際、諸侯の版籍奉還を許すと同時に、各藩に置き、舊藩主をこれに任ぜし地方長官。政治・司法・敎化の外、藩兵を管する事を掌りしもの。明治二年六月設置、同年七月藩知事と改稱せられたり。

ちばもち 【名】〔植〕あしび(馬酔木)を云ふ。〔北越の方言〕

ちはや 禪・千早【名】『禪は和字』㊀たすき(襷)の類なるべけれども、詳かならず。〔古語〕名義抄「襷・禪、チハヤ、タスキ」㊁巫女(カンナギ)の服。小忌衣(ヲミノコロモ)の類。白布にて、身二幅、袖一幅に作り、山藍にて、水草・蟲・鳥などの模樣を摺り、袖を縫はず、紙捻にて括るもの。㊂芝居にて用ふる衣裳の一。殿中羽織の如きもの。

ちはやじやう 千早城・千劍破城【名】河內國南河內郡東條村金剛山の半腹にありし城。元弘の頃、楠正成これに據りて、關東の大軍を支へし處。

ちはやたうげ 千早嶺【名】〔地〕河內國金剛山の西南腹、卽ち千早城のありし處。

ちはやびと 千早人【枕】ちはやびとは、いち早き人、卽ち勇士の義にて、物部(モノノベ)は八十氏(ヤソウヂ)あるより、山城國の地名うぢ(宇治)にかけていふ。記「ちはやびとうぢのわたりの早き瀬に」

ちはやぶる 千早振ふ【枕】㊀ちはやぶるはいち早ぶる、卽ち勇猛なる意(一說には千磐(チハ)破るの意なりと)の意にて、その勢力の緣より、かみ(神)・ひと(人)にかけていふ。萬葉「たまかづらみならぬ木にはちはやぶる神ぞつくとふならぬ木ごとに」同「ちはやぶる人をやはせとまつろはぬ國ををさむとみこながらまけたまへば」㊁前條と同義にて、轉じてかね(金)にかけていふ。萬葉「ちはやぶるかねのみさきをすぐれどもわれは忘れずしがのすめがみ」㊂うぢ(宇治)にかけていふ。古今「ちはやぶるうぢのはし姫なれをしぞあはれとは思ふ年の經ぬれば」

ちはら 血原・茅原【名】〔地〕大和國宇陀(ウダ)郡にある地。今、何何なるかを詳にせず。神武天皇の御代、賊兄猾(エウカシ)、自ら殲(ホロ)を踏みて死にしかば、血流れて草を染めたるより、この名ありと傳ふ。宇陀(ウダ)のちはらともいふ。

ちはら 茅原【名】茅の生ひたる野原。ちぶ。〔古語〕新六「春雨のふるののちばらけふ見ればつばな摘むべくなりぞしぬらし」

ちはらでら 茅原寺【名】大和國南葛城(カヅラキ)郡拔上(ヌキガミ)村大字茅原にある寺。舒明天皇の御代、役(エン)小角(ノヅヌ)の開基。

ちはらみつ 智波羅蜜【名】〔佛〕はんにやはらみつ(般若波羅蜜)に同じ。

ちばりう 千葉流【名】生花東山流の一派。統紫の人千葉菜を祖とす。「ること。

ちばれ 地膸【名】一面に膸れあがりてあること。

ちばわらひ 千葉笑【名】昔、下總國千葉郡千葉寺にて、每年十二月晦日の夜に、諸人集り、顏を隱し、頭を包み、聲を變へて、その所の奉行頭人・庄屋・年寄などの依怙贔屓・善惡などを書き、又行跡惡しき人、不忠不孝の輩に對して、大いに笑ひ、褒貶せしこと。人人この笑に逢はじとて、常に愼み、自然によき敎訓となりきといふ。

ちひ 治否【名】國主・御守のをさまると然らざると。

ちひ 地皮【名】ちかく(地殼)に同じ。正統記「地味又失せて、林藤といふ物あり、(或は地皮ともいふ)」

ちび 【名】矮小なる人。ちっこ。ちっこべそ。ちっべそ。ちやっちやのひまご。ちびすけ。ちびっちよ。こびっちよ。〔俚言〕

ちびき 千引【名】㊀重き物を、千人ほどの多人數にて引くこと、又それほどの重さの物。〔古語〕萬葉「わが戀はちびきの石を七ばかり頸にかけむも神のもろふし」夫木「宮木ひくちびきの綱もよわるらしそま山遠き山の岩根に」秋夜長物語「ちびきの繩を腰に附けたるごとく」㊁謠曲の一。陸奥國の壺の碑を知行せる某、千引の石として、人の命を取る大石あるを、他國へ運ばんとて、領内の民に下知せしも、人數たらず、一人の貧女もその役を課せられ嘆きけるに、石の精人に化し、女をして、輕く一人にて運ばしめ、富貴を得たりといふ筋。

ちびき 血引【名】〔動〕硬骨(コウコツ)類に屬する魚。我が國曖地の近海に產し、全身赤色、形、鰡(ボラ)に似て、大なるは二三尺に至り、鱗甚だ小さく、脊鰭の棘は比較的大なれども弱く、又口は甚しく伸長するを得。

ちびき 地曳【名】㊀海底に張りたる地曳網を、次第に陸へ引寄すること。〔地引〕㊁工匠の、地鎭祭の濟みたる後、吉日を選びて、建築地に、建物の形に繩を張り、竹を立て、中央に祭壇、四方には盛土(モリツチ)をなし、これに幣を立てなどして行ふ儀式。地鎭祭には、工匠は祭主とならざれども、この時には、工匠の長、祝詞を申す。地曳祭。

ちびきあみ 地引網・地曳綱【名】引網の一種。地引に用ふる大なる網。中央なる嚢網(フクロアミ)と、兩端なる袖網とより成り、一邊を海上に浮べ、一邊を水底に沈めおき、魚の中に入るを待ちて、多人數にて、陸地に引寄せたる上、內なる魚を捕ふ。たてあみ。ちあみ。ちびき。

ちびきあみぶね 地曳網船・地引網船【名】地曳網を使用するために用ふる漁船。ちびきぶね。

ちびきいは 千引岩【名】千人ならでは引動かし難きほどの岩。ちびきの石。いほびきいは(五百引岩)參照。〔古語〕記「ちびきいはをたなす葛にささげて」「ること。

ちびきはじめ 地曳始【名】地曳㊁を始むること。

ちびきぶね 地曳船・地引船【名】ちびきあみぶね(地曳網船)に同じ。「に同じ。

ちびきまつり 地曳祭【名】ちびき(地曳)㊁の一。郡役所を上田町に置く。

ちひさがた 小縣【名】〔地〕信濃國十八郡

ちひさがたな 小刀【名】武家の刀の脇差よりやや長く、裝束など著くる時に佩用せしもの。中古の鞘巻(サヤマキ)の類。ひもがたな。ちさがたな。めてざし。

ちひさきこけ 小苔【名】石などに生ずる小さき苔。和名「石衣、一名石髪」

ちひさきたこ 小蛸魚【名】〔動〕するめいか（鯣烏賊）の異稱。和名「小鮹魚、知比佐岐太古、一名須流米」

ちひさくら 蘭【名】〔植〕ね（蘭）に同じ。〔古語〕字鏡「蘭、知比佐久良」

ちひさご 小子【名】せいひく。こびと。一寸法師。侏儒。矮人。〔古語〕

ちひさこごねり 小小舎人【名】小さきこどねり。〔古語〕神樂「大宮のちひさこどねり」

ちひさこほりのみやつこ 少領【名】せうりやう（少領）に同じ。（大領（オホコホリノミヤツコ）に對して）

ちひさし 小さし【形ク】大きからず。ちさし。いとけなし。をさなし。

小さき物【句】『物は袋布（ノヌ）の義なりともいふ』たふさぎ（褌）に同じ。〔古語〕和名「袴而無レ跨、謂二之褌一、須萬之毛能、一云、知比佐岐毛能」

ちひさてのあま 小手尼【名】〔人〕百濟國より歸化したる尼。姓氏詳かならず。醫術を善くし、殊に產科の妙手たり。その手、纖小にして、赤子の如くなりしより、この名を得たり。天平勝寶、神護景雲頃の人。こてのあま。

ちひさひと 小人【名】ちひさき人。幼き者。こども。〔古語〕名義抄「娓、チヒサビト」

ちひさやか 小さやか【貌】ちひさきさま。源氏「十五六のほどにて、いとちひさやかに」

ちひさわらは 小童【名】ちひさき小供。

ちひさんじゆ（内豎）に同じ。〔古語〕和名「内豎三百人。俗云、知比佐和良波」

ちひすけ ちび助【名】ちびに同じ。〔俚語〕

ちびたひ 地頭【名】髮白粉などを附けぬ、生れつきのままなる額。

ちびちび 小小【名】極めて吝嗇なる人。〔俚語〕

ちびちび【貌】少しづつ。わづかづつ。〔俚語〕

ちびちやい 小ちやい【形】ちひさし（小さし）の訛。〔小供語の〕

ちびっちよ【名】ちびに同じ。〔俚語〕

ちびっと【貌】すこし。いささか。〔關西の俚語〕

ちびっぽけ 小っぽけ【名】物の小さきを嘲りていふ語。ちっぽけ。〔東京の俚語〕

ちひと 乳人【名】めのと。乳母。

ちびと 千人【名】あまたの人。多くの人。〔古語〕源氏「ちびとにもかへつべき御さまにて」

ぢびき 地響【名】重き物の落ちなどして、地面に立つ響。地震などにて、地鳴のすること。ぢなり。本朝三國誌「地ひびき打つてどうと落つ」續膝栗毛「指先は輕くて、踵に地響のするは、うしろに貫目のある奴」

ちびふで 禿筆【名】毛の先のすりきれたる筆。ばうずふで。

ちひん 知賓【名】〔佛〕禪宗にて、賓客を接待する役。典客。知客。

ぢびやう 持病【名】常に病み艱む病。慢性の病氣。舊痾。宿痾。文武五人男「例の持病が起りしな」

ちびり【貌】すこしく。いささか。〔俚語〕

ちびりちびり【貌】ちびちびに同じ。〔俚語〕

ちびる 禿る【動四自】ちぶ（禿ぶ）に同じ。〔古語〕鯖竝うすいろなるうすものの袋をひきかくれば、腰などちびりて」

ちびれ 脂鰭【名】魚の脊鰭の後部、即ち尾部に接して生じたる小鰭。鮭、鱒の類の魚は、必ずこれを具ふ。

ちひろ 千尋【名】長さ又は深さの甚だ多きこと。〔古語〕萬葉「みなはなすもろき命も榜繩のちひろにもがと願ひくらしつ」千尋の神【句】千尋の海底にある神。わたつみの神。海神。

ちひろぐさ 千尋草【名】〔植〕たけ（竹）の異稱。〔古語〕

ちひろのうみ 千尋海【名】〔地〕紀伊國の前面に位する海。夫木「長き日のあまのたく繩うちはへて千尋の海に霞たなびく」〔語〕

ちふ 乳癰・疕【名】婦人の乳に生ずる腫物。にゆよう。〔古語〕和名「疕、知布」

ちふ 地府【名】大地・地上。太平記「車馬門前に群集して、地府に布レ雲とあり」

ちふ 知府【名】支那各省の府の行政を掌ること、又その府の長官。

ちふ 地膚【名】〔植〕はははきぎ（地膚）に同じ。「ささなみのなみくら山に雲ゐれば雨ぞふるちふ歸りこわがせ」

ちふ 茅生【名】ちはら（茅原）に同じ。〔古語〕萬葉「あさぢはらちぶに足ふみ心ぐみわがもふ子らが家のあたり見つ」

ちぶ 禿ふ【動上二自】漸次にきれて、短くなる。すれきる。つぶ。

ぢぶ 治部【名】治部省の官名を有せる人。

ぢぶ 地蔵【名】屋根板を地上にて重ねつなぎたる上、屋上に揚げて葺くこと。

ちぶきやう 智部卿【名】天平寶字年中、淳仁天皇の時、宮内省を智部省と稱せられたる間のその長官の稱。

ぢぶきやう 地奉行【名】おかたらう（地方頭人）に同じ。江戸幕府の職制の一。保保奉行の一。主として、その地の道路家屋などの事をつかさどりしもの。

ぢぶきやう 治部卿【名】治部省の長官。

ちぶく 地幅【名】土地の幅員。「地幅狹少」

ちぶく 地腹【名】地面の下。土中。

ちぶく【名】『地福か』陰陽家にて、よろづの栽植・播種によしといふ日。

ぢぶく 地幅・地覆【名】〔建〕門又は勾欄の下に取附けたる横木。土地の性質。土質。源氏冷泉帝「子の五人や十人、地ぶくさへよければ年年にも出來ること」

ぢぶくいし 地覆石【名】家の出入口の下に、地覆の如くに置きたる石。

ちぶくら 乳脹【名】三味線の、絲座（ザ）の下の、左右へ圓く脹れたる處。ちぶくろ。

ちぶくろ 乳脹【名】前條の訛。

ちぶくろ 乳袋【名】ちぶさ（乳房）に同じ。

ぢぶくろ 地袋【名】床の間の脇の違棚（チガヒダナ）の下、地板（ヂイタ）の上に設くる袋戸棚。違棚と共に、我が國に於ける家屋の主要なる座敷の室内裝飾として、必ず設けらる。

ぢぶくろいた 地袋板【名】床の間の地板（ヂイタ）。

ちぶさ 乳房【名】高等動物の胸又は腹の左右に並びて、高く突きいでたるもの。その先端の小さき球形をなせる部分を乳首といふ。男の乳は小に、女のは大にして、兒を生めば、乳汁を分泌す。人間は二つ、獸には數多あり。ちち。ちぶくろ。にゆうばう。拾遺「人なしむねのちぶさをほむらにてやくすみぞめの衣きよきみ」

ちぶさ 乳房の恩【句】乳を飲ませて育てくれたる恩、即ち母・乳母などの恩。謠曲（高野物狂）「かくとも申さで別るること、乳房の恩の父母に、二度別るる心地して」

ちぶさ 乳房の旋毛（ツムジ）【句】ぎじやう（宜乘）の異稱。

ちぶさ 乳房の母【句】眞實の母。うみの母。謠曲「如何なる賢女貞女でも、乳房の母には似もつかぬ」

ちぶさ 乳房の報（ムクヒ）【句】母に對する恩がへし。

ちぶじ 知府事【名】明治元年に設置せられたる府の長官。人民の繁育に意を用ひ、生產を增加せしめ、敎化を布き、租稅を徵し、賞刑を知行し、府兵を監することを掌りし勅任官。同二年府知事と改稱せらる。

ちぶしやう 智部省【名】くないせう（宮内省）に同じ。（淳仁天皇の時一時改められし名稱）

ぢぶしやう 治部省【名】古の八省の一。姓氏及び五位以上の者の繼嗣・婚姻等また祥瑞・喪葬及び外國使官の朝聘等の事をつかさどりし所。職員として、卿（長官）一人、大輔・少輔（以上次官）各一人、大丞二人、少丞二人、大錄一人、少錄三人、史生（ヤウジ）十人及び省掌・使部（ツカヒベ）四人、少解部（ゲベ）六人、直丁（ヤマヒ）若干づつを置けり。をさむるつかさ。

ちぶす 窒扶斯（獨 Typhus）【名】〔醫〕腸窒扶斯と發疹窒扶斯との總稱。ちやうちぶす（腸窒扶斯）の略。

ちぶすきん 窒扶斯菌【名】『獨 Typhusbacillus』窒扶斯病の原因となる黴菌。桿狀に

して、長徑は橫徑に三倍し、時には、連綴して絲狀をなし、血液中にては、活潑に運動す。數多の鞭もあり、或色素にて染むれば、蜘蛛の如き形狀をなす。水又はチブス患者の大便及び諸藏器中に存在す。エベルト(Eberth)ガフキイ(Gaffky)の發見に係る。

ちぶせう 治部少輔【名】『せう(少輔)を見よ』治部省の次官のうち、治部大輔の下に位するもの。

ちぶせういふ 治部少輔【名】前條誤讀。

ちぶたいふ 治部大輔【名】治部省の次官のうち、治部少輔の上に位するもの。

ちぶつ 地物【名】〔兵〕地上に現存し、身を掩ふに足るべき物、即ち植物、交通路、建築物など。

ちぶつ 癡物【名】ちじん(癡人)に同じ。

ちぶつ 持佛【名】『內持佛の略。持は念持の義』常に吾の居室に安置し、若しくは身に添へて、信仰禮拜する佛像。內佛。源氏「ちぶつの御かざりばかりを、わざとせさせたまひて」

ちぶつだう 持佛堂【名】持佛を安置せる堂。ぶつま。念誦堂。狹衣「入道の宮は、御ちぶつだうの妻戸おしあけさせたまひて」

ちぶつだう 持佛堂ニ始(ハジ)メテハ置所(オキドコロ)無シ【句】大切にすべき筈のものにて、しかも厄介なるものをいふ。〔諺語〕

ちぶつだな 持佛棚【名】持佛を安置する棚。

ちふてりい 實布的利・實扶的里《獨 Diphtherie》【名】〔醫〕ちふてりや(實布的里亞)に同じ。

ちふてりい-きん 實布的利菌【名】〔植〕ちふてりやきん(實扶的里菌)に同じ。

ちふてりや 實布的里亞《羅 Diphteria》【名】九種傳染病の一。多くは一歲より七歲頃までの小供に起る急激なる病。原因はヂフテリヤ菌と化膿菌との混合に在り。頭痛と四十度以上の熱とを發し、扁桃腺と咽喉粘膜とに、白色の義膜を生じ、呼吸・嚥下の困難に陷る。ばひふう。のどけ。

ちふてりや-きん 實扶的里亞菌【名】〔植〕バクテリヤの一。空氣に乘じて、呼吸器より傳染し、實扶的里の原因をなすもの。體は短き圓柱形にして、長さは結核菌と等しく、幅はそれに倍し、纖毛を具へず、運動性なく、芽胞の發生も無し。小供の咽喉などに寄生して、實扶的里亞病を發す。西曆一八八四年獨逸人レフレル(Loffler)の發見に係る。

ちぶと 地太【名】布帛の織地の太きもの。(地ぼそに對して)

ちぶね 千船【名】あまたのふね。多くの船。**ももぶね**(百船)參照。〔古語〕萬葉「濱きよく浦なつかしみ神代よりちぶねのとまるおほわだのはま」

ちぶね 地船【名】その土地の船。

ちぶみ 地蹈【名】力を入れて、地を蹈むこと。しこをふむこと。

ちぶみ 血文【名】血にて認めたる文。起請などに用ふるための血書。島原蛙合戰「長うは書くまい、つい一口、早う早う知らせの血文」

ちぶん 智分【名】ちゑ(智慧)に同じ。正統記「才學あり、心もさかしかりけれど、已が非を知り、未萌の禍を防ぐまでの智分や闕けたりけん」

ちぶん 地文【名】㊀『新論に「日月者、天之文也、山川者、地之文也、言語者、人之文也、天文失、則有二謫蝕之變一、地文失、則有二崩竭之災一、人文失、則有二傷身之患一」とあり。山川・丘陵・池澤をいふ』大地の模樣。ちもん。㊁次條の略。

ちぶん-がく 地文學【名】『英 Physical geography』地球と天體との關係、地球を包む空氣界・水界及び地球上に起る諸現象等につきて研究する學問。自然地理學。

ちぶらくしょん (英 Diffraction)【名】〔理〕

ちぶらくしょん-がうし ヂフラクション格子(英 Diffraction grating)【名】〔理〕くわいせつがうし(廻折格子)に同じ。

ちぶり 知夫【名】〔地〕隱岐國四郡の一。島前(ダウゼン)の二島(知夫里島・西の島)を占む。隱岐島司の管轄に屬す。

ちぶり-しま 知夫里島【名】〔地〕隱岐國島前(ダウゼン)二島の一。周回六里半。

ちぶり-の-かみ 道觸神【名】旅路を守りたまふ神。たむけのかみ。さへのかみ。〔古語〕土佐「わたつみのちぶりのかみにたむけするぬさのおひ風やまず吹かなん」

ちぶり-やうざん 智豐兩山【名】〔佛〕新義眞言宗智山派の本山なる京都の智積院(チシヤク)と、新義眞言宗豐山派の本山なる大和國の豐山神樂院卽ち長谷寺(デラ)と。

ちぶるひ 血振【名】㊀產後に、ちのみちにて、身のふるふもの。血暈。㊁人を刀にて殺しし後、その血を振ひ落すこと、又、猛獸などの身ぶるひして、身體に附きたる血をふるひ落すこと。

ちぶるひ 乳振【名】乳汁の分泌止まり、發熱して身のわななき振ふこと。

ちへ 千重【數】數多かさなりたること。〔古語〕萬葉「なぐさ山ことにありけりわが戀のちへのひとへも慰めなくに」

ちへ 千重頻頻(シク)【句】最も頻繁に。極めてしげく。萬葉「ひと日には千重しくしくに吾が戀ふるいもがあたりにしぐれふれ見む」

ちへ (千重)【句】千重に百重【句】ちへ(千重)に同じ。萬葉「心には千重百重(モヂニモヂ)思へれど人目を多みいもにあはぬかも」

ちへい 治平【名】世の治まること。世のおだやかなること。太平。清平世。

ちへい 治兵【名】勢揃ひして出陣すること。(凱陣に對して)

ちへい 地平【名】㊀大地の平面。(水平に對して)㊁〔地〕ちへいめん(地平面)の略。

ちへい 馳騁【名】ちてい(馳騁)の誤讀。

ちへい-けいぎ 地平經儀【名】天體の高度を測定する器械。水平面と直角に廻轉し得る裝置をなす。

ちへい-けいゐぎ 地平經緯儀【名】けいゐぎ(經緯儀)に同じ。

ちへい-ざせう 地平坐標【名】〔天〕『英 Horizon system of coordinates』天球面の坐標の第二種。高度(又は天頂距離)及び方位角、これなり。

ちへい-しさ 地平視差【名】〔天〕『英 Horizontal parallax』視差の一。地上の或場所に於て、地平上に見ゆる天體を地心にて見るべき方向と地平との成す角。

ちへい-しよくじんせん 地平蝕甚線【名】〔天〕『英 Curve of maximum in the horizon』日蝕の際、地球の表面に於て、地平線の上に蝕甚を見る點を連結せる曲線。

ちへい-せん 地平線【名】〔地〕『英 Horizon』地平面と天球と相會する線、即ち天球の大圓の、地球の一部を含むもの。地上地平線・地心地平線・現地視平線などの別あり。視地平。

地平線の深さ【句】〔天〕『英 Dip of horizon』觀測者より現視地平線へ引ける直線と地平面との成す角、即ち觀測者の目を通過する地平面と觀測者の目より地球表面に引きたる切線との成す角。觀測者の位置の高低によりて異なる。地平線俯角。地平俯角。

ちへいせん-ふかく 地平線俯角【名】〔天〕前條に同じ。

ちへい-てつだう 地平鐵道【名】平地に敷きたる鐵道(高架鐵道に對して)

ちへい-ふかく 地平俯角【名】〔天〕「地平線の深さ」に同じ。

ちへい-めん 地平面【名】〔地〕『英 Horizontal plane』地平線內に含まれたる地面。嚴格にいへば、一地點の鉛直線に垂直なる平面。眼點の高さの加はるに從ひて、ますます擴大す。視圈。(水平面に對して)

ちへう 地表【名】地球の表面。地上。

ちへう-くわ 地表火【名】森林火災の一。地表の灌木・雜草・落葉などの燃燒するもの。(樹冠火に對して)

ちべっと 西藏【名】〔地〕『國人、自らその國を Hu-bot(高燥なる我が土地の義)といふものの轉じたるなるべく、支那の古書に吐蕃と記せるも、本づく所相同じかるべしといふ』中央亞細亞の一地方。支那に屬す。喜馬剌亞(ヒマラヤ)山脈と昆崙山脈との間、カシミイル(Kashmir)と西支那との間に介在せる高原。面積四六三二〇〇方哩。人口約六五〇〇〇〇。

ちべっと-ご 西藏語【名】〔語〕孤立語の一。

亜細亜南方言語族に屬す。梵字より出でたる特殊の文字を有す。

ちべっと-じん 西藏人【名】西藏固有の人種。皮膚は帶黃褐色にて鼻低く、顴骨秀づ。男子の佛敎徒は髮を延し、回敎徒は髮を切りて、布にて頭を包む。女子は髮を數條に編みて垂れ下ぐ。袖の狹き日本服に似たる服を著け、家は塗家にて、食は麥粉なり。

ちへど 血反吐【名】毒を服しなどして、口より吐出す、血のかたまり。

ちへ-なみ 千重波【名】數多く幾重にも幾重にも重なれる波。〔古語〕萬葉「朝なぎに千重波よせ夕なぎにいほへ波よる」

ちへなみ-しき 千重波頻【貌】千重波の寄する如く繁く頻りなるさま。〔古語〕萬葉「百重波・千重波敷にことあげする吾」

ちへに 地紅・地臙脂【名】地のべに色なる織物。俗曲(はなみ)「紺に、うこんに、淺黃に、鹿子(カノコ)・地紅や地紫」一代女「白き肌、帷子(ビラ)、地紅に御所車の縫ある振袖」

ちへへん 池邊【名】いけのほとり。池畔。

ちへへん 地變【名】一ちい(地異)に同じ。二〔地〕『英 Geological changes』火山・地震等に因る地殼の變動。長年月に亙り、海底山に變じ、高山海に沒することあり。

ちへべん 智辯【名】一才智ある辯舌。二才智と辯才と。「能力。

ちへべん 智辨【名】智ありて物を辨別する。

ちへへん-りょく 地變力【名】〔地〕ちへん(地變)二の作用。

ちへり 乳緣【名】ちとへりと。蚊帳の釣手を附くる所と、上下に著けたるへりと。眞實伊勢物語「たつじまの夜著・蒲團、茜のちへりを附けたる蚊帳も」

ちへほ 地步【名】たちば。立脚地。地盤。

地步を占む【句】自家のたちばを定む。

ちほ 【名】すり(掏摸)を云ふ。〔大阪の方言〕

ちほあき 千百秋【名】かぎりなき年月。ちいほあき。千秋萬歲。〔古語〕紀寧樂歌「ちにあきの國をさめたるあとをのみよろづよ今も忘れやはする」〔訛〕

ちほいち 樗蒲【名】ちょほいち(樗蒲一)の ちぼつ 智謀【名】智慧あるはかりごと。たくみなるはかりごと。

ちぼく 雉目【名】『はちぼく(八木)のはを省きたるものか』くろごめ(黑米)の異稱。

おぼそ 地細【名】布帛の織地の、細くして、緻密なるもの。(地ぶとに對して)

ちぼ-ちぼ 【名・副】ちひさきこと。僅かなること。

おぼふ-きんなら-わう 持法緊那羅【名】〔佛〕次條の略。

おぼふきんなら-わう 持法緊那羅王【名】〔佛〕法華經に說く四種の緊那羅王の一。持法緊那羅。論語(春日龍神)「また持法緊那羅王…恒沙の眷屬引き連れ」

おほん 地本【名】『その土地にて出版したる本の意』上方よりの下りの繪本に對して、江戸にて發行せる青本草雙紙の類。御存商賣物「何うぞして、青本その外の地本にけちを付けんと謀る」

ちぼ-ぽ 【動下二自】小聲にて鳴く。〔德川時代の奴言葉〕奴僕嘲「蘭にちぼゆる鶯の聲」

ちまあぜ (獨 Zymase)【名】醱母菌中に存する一種の無機酵素。酒精醪酵を起し得るもの。

おまい 地米【名】その土地にて出來る米。

ちまう 蜘蛛【名】くもの巢。

ちまき 茅卷・粽・角黍・糭【名】一『古は茅を以て卷きたるよりいふ』糯を水に浸し、又は糠粉をこねて、菰(モコ)又は笹などに卷きたる菓子。端午の節に食するを、例としたり。こもまき。角黍。拾遺「五月五日、小さきかざりちまきを、山すげの籠(コ)にいれて」二〔建〕ちまきがた(茅卷形)の略。

(一) きまち

ちまき-うま 茅卷馬・粽馬【名】茅又は菰(モコ)などにて、馬の形に作れる物。小供の玩具として、古、端午の節句の飾物に用ひ、後世は七夕(ハタ)の手向とす。散木「をさなきちごの、茅卷馬を持ちたるを見て、承源法師 ちまき馬はくびからきはぞ似たりけるきうりの牛は引きぢからなし」

ちまき-がた 茅卷形・粽形【名】〔建〕柱の上下の端の部分が、やや急に曲線狀をなして細くなり居ること。禪宗風の寺院の建築に行はる。ちまき。

ちまき-ぐさ 粽草【名】〔植〕まこも(菰)を云ふ。〔陸前國仙臺の方言〕

ちまき-ざさ 茅卷笹【名】〔植〕『この葉にて、茅卷を包みたるよりいふ』くまざさ(熊笹)の異稱。

ちまき-ばしら 【名】茅卷形の柱なるべし。〔古語〕伊勢貞丈隨筆「嗚呼無名抄にいはく『又、業平の中將の家は、柱ども、つねにも似ず、ちまきばしらといふものにて、後に、例の柱のやうに削りなしてなん侍りし』。案ずるに、例の柱とは四角柱をいふなるべし。この詞を以て思ふに、ちまき柱といふは、丸柱の事なり。…ちまきは、茅の葉にて包みたる餅なり。その餅の形、細長くまろし。故に丸柱をちまきばしらといふなるべし」

おまさ 地正【名】東京製のまさめがみ。團扇(ウチワ)の裏紙などに用ふ。

ちまた 巷・岐【名】『路(チ)又(マタ)の義』一路の分岐せるところ。岐路。萬葉「ことだまの八十(ヤソ)のちまたにゆふけとふらまさにいへいもにあはむよし」二通行する路、街路。〔街衢〕三ところ。場所。「修羅のちまた」

ちまた 岐の神【句】一衢(チマタ)を護る神。道守(チモリ)の神。道祖神。二さるだひこのかみ(猿田彦神)に同じ。

ちまち 【名】東京製のまさめがみ。團扇(ウチワ)の裏紙などに用ふ。

ちまち-だ 千町田【名】『千町もある田の義』ひろき田。

ちま-ちま 【貌】ちまやかに同じ。

ちまつり 血祭【名】戰爭の門出に、いけにへの血を、軍神にささげて祭り、必勝を祈ること。「同じ。

おまつり 地祭【名】ちんさい(地鎭祭)に同じ。

ちまつり-ばうず 血祭坊主【名】とうぼう(同朋)に同じ。

ちまなこ 血眼【名】のぼせて血走りたる血眼になって【句】逆上するばかりにせき立ち、又は一所懸命に奔走しまはる形容。天神記「時平も今は血眼になって、これ悴、汝も我れも殘る矢は一本づつ…この一本が今日の勝負」

おまはり 地廻【名】一近鄕より送り來ること。(多くは米穀・酒類などにいふ)二自ら商品を運び、諸地方を經めぐりて、商業をなすこと、又その商人。三遊廓などにて、その近所に住みて、常にその附近を徘徊する無賴漢。

おまはり-ぶね 地廻船【名】近海の沿岸を往復する船。沿岸航海船。

おまはり-べいこくどひや 地廻米穀問屋【名】江戸時代に、江戸に輸入せらるる地廻米(即ち關東八洲より產出するもの)を取扱ひし米問屋。

おまはり-まい 地廻米【名】近鄕より送り來る米。前條參照。

ちまぶれ 血塗【名】次條に同じ。曾我物語「山「血まぶれの面は、猿より赤恥かいて」

ちまみれ 血塗【名】血に染むること。ちみどろ。ちまぶれ。ちだらけ。蟻。

ちまん 遲慢【名】てぬるきこと。おそきこと。のろきこと。

おまん 持滿【名】『「滿(マン)を持す」を見よ』一弓を十分にひきしぼること。二發動の機は熟しながら、なほ控へてゐること。

ちまんだら 智曼荼羅【名】〔佛〕こんがうかいまんだら(金剛界曼荼羅)に同じ。

おまん-てん 持鬘天【名】〔佛〕胎藏界曼荼羅、外金剛院(ガイコンガウヰン)に居りて、華鬘(ケマン)を持つ天衆。

ちまめ 血豆【名】手足の指のさきなどの、戶などの間に挾まりて、壓迫せられたる時に生ずる、痣の如きもの。

ちまやか【貌】小さくまとまりたるさま。ちんまり。ちまちま。

ちまよひ　血迷【名】ちまよふこと。

ちまよふ　血迷ふ【動四自】烈しき怒又は怖などのために、心狂ふ。とりのぼす。『出世景清』「それは定めて血迷うて何がな見つらん」

ちまる【動四自】留まる。滞在す。「古の東國の方言」蓋筑紫のさきにちまりぬて、あれはいははむもろもろはさけくと申すかへりくまでに」

ちみ　地味【名】地質の肥瘠。正統記地味に耽りしより、顔色かじけ衰へき。地味又失せて、林藤といふ物あり」

ちみ　魑魅・螭魅【名】山中の怪物。すだま。ばけもの。「魑魅・魍魎」

ぢみ　地味【名】一はなやかならぬこと。すみたること。二質樸なること。樸素。

ぢみ【名】すこやかなることを云ふ。健全。「奥州の方言」「實。

ちみち　血道【名】血の通ふ道。ちすぢ。血道を上げる【句】一痴情などのために逆上す。二煩悶す。惑溺す。ふける。

ぢみち　地道【名】一普通の速力にて歩むこと。そろそろと進み行くこと。二ぢのり(地乗)に同じ。正路を渡り行くこと。「地道を踏む」四ぢだう(地道)に同じ。

ちみつ　緻密【名】こまかにてくはしきこと。つまびらか。精細。

ちみどろ　血塗【名】ちまみれ(血塗)に同じ。沙石集「唇も、みなくひきりて、ちみどろになりて狂ひ死にけり」

ちみどろ-ちんがい　血塗ちんがい【名】前條を強めていふ語。牛玉心中「日・鼻血みどろちんがいに……出あへ出あへと呼はって、闇に紛れて逃失せけり」

ちみん　治民【名】人民を治むること。

ぢみん　持名【名】〔佛〕阿彌陀佛の名を受持すること。

ぢみやう　持明【名】〔佛〕『明は眞言、即ち陀羅尼の義』眞言を受持すること。

ぢみやういん　持明院【名】一〔佛〕ごだいゐん(五大院)を見よ。二『初め、邸内に持明院と稱せし持佛堂ありしより、後、家號となる』今の京都市上京區安樂小路町に大藏卿藤原通基の設けし寺。その父鎮守府將軍基頼の邸内に營みし持佛堂に基きて增建せしもの。通基父の志を繼ぎ、天治年中、更に堂宇を建立して、九品の阿彌陀の像を安置し、供養を行ひ、鳥羽天皇の臨御あり。其の後、持明院を以て家號とし、寺號を安樂行院(一に安樂光院)と改む。其の子基家の女陳子、後高倉院の妃となりて、堀河天皇を生む。此の由緣により、後高倉院持明院に在しまし、後堀河天皇讓位の後、持明院を仙洞とし、御來持明院仙洞となる。

ぢみやうゐん　持明院【名】一姓氏の一。本姓は藤原。中御門の分流。舊羽林家なり。右大臣後家の二子基頼を始祖となす。基頼出羽・常陸・北陸の賊を討伐し、功により鎮守府將軍に任ぜらる。其の邸内に佛堂を建立し、持明院と稱す。後其の家を持明院と稱す。其の子基家書道に長ず。明治維新後、子爵に列せらる。二佛法の一派。藤原基頼を流祖とするもの。

ぢみやうゐん-かなづかひ　持明院假名遣【名】〔書〕僧行阿の說に基きて假名遣を說きたる書。一卷。藤原基輔の著。能書假名遣。

ぢみやうゐん-とう　持明院統【名】後深草天皇の皇統。後深草・伏見の兩上皇は、山城國伏見の持明院に閑居したまひしに因みしなり。(大覺寺統に對して)

ぢみやうゐん-の-みや　持明院宮【名】〔人〕もりさだしんわう(守貞親王)に同じ。

ぢみやうゐんりう　持明院流【名】和樣書道の一派。持明院基泰を祖とす。基泰は、世尊寺行高の門弟にして、世尊寺家絕ゆるに及びて、後奈良天皇の勅命により、その書を以て、公事の書役を勤むるに至れるなり。

ちみやく　血脈【名】ちすぢ(血筋)(二)に同じ。

ちみやく　地脈【名】一平生の脈搏。源氏浴泉圖をさないから自らが地脈はそちが覺えてぞ能う分別して脈取りや」二地層の連なりたる筋道。地脈を絕つ【句】『史記の蒙恬傳に「良久徐曰、恬罪固當レ死矣、起二臨洮一屬之遼東一城亙餘里、此其中不レ能レ無二絕二地脈一哉」とあり』地の脈絡を切る。

ちみやく　地脈を縮む【句】『神仙傳に「費長房遇二壺公一、有二神術一能縮二地脈一、千里聚在二目前一、放レ之復如レ舊」とあり』仙術にて、遠方の地も近くなること。

ぢむかて　地百足【名】〔植〕石南(シャクナゲ)科に屬する常綠灌木。草本狀にして、鱗片狀の葉莖上に密生し、地上を匍匐す。花は淡紅色にして、夏季、莖頂に開く。各地の山野に自生す。

ぢむぐり　地潛【名】〔動〕蛇類に屬する爬蟲。普通のへび。長さ二尺に達し、濃褐色にして、腹部に黑斑あり、毒牙無し。東邦各地に產す。

ぢむし　地蟲・蟄蟲蟲【名】〔動〕黃金蟲(コガネ)科に屬する昆蟲の幼蟲。土中に棲み、形いもむしに似て、長さ一寸ばかり、白色にして、首赤く、尾黑く、背に皺あり。草根・嫩苗を害す。

ぢむね　地棟【名】〔建〕土藏の棟下にて、合掌梁を支持する太き横木。

ぢむらさき　地紫【名】綾物の地を紫色にぜるもの。一代男「後の朝(アシタ)の名殘をそめそめと書綴けたる著物(モノ)、十六形の地紫、あれは花崎樣の記念(シルシ)」

ちん　賃【名】一錢を出して、人又は物を使ふこと。二使用したるに報ゆる錢。賃錢。五人女「著物(モノ)・羽織・風呂錢・身だしなみの事どもを、其方から賃を御書きなされ候はば、いやながら協へてもやるべし」三昔、諸國に公田の餘地を人民に貸下げ、春その料を取り、秋若干の稻を上納せしめたるもの。租と呼べり。四小供に與ふる菓子・金錢の類。(幾內の語)

ちん　賃【句】報酬の金(カネ)を拂ふべく約束す。眞實伊勢物語「見る程の男に賃をかけて頼めども、雲はいふまでもなし、燈火消したるくらがりにても、慈悲と思うて合點する人もなくて」

ちん　鴆【名】一支那にて、その羽を酒に浸して、人を毒殺するに用ふといふ鳥。支那南方の山中に棲み、形梟に似て、色紫黑、嘴赤黑く、頸の長さ七八寸、好みて、蛇を食ひ、全身毒氣劇しといふ。又雄を運目、雌を陰諧といひ、雄鳴けば晴れ、雌鳴けば雨降ると稱せらる。「一拂鳥」二ちんじゅ(鴆酒)の略。「酖」

ちん　亭【名】『漢字の宋音』園中又は丘陵などに立つる小さき家。あづまや。

ちん　珍【名】一めづらしきこと、又その物。「珍中の珍なるもの」二異樣にして可笑しきこと、又その物。

ちん　狆【名】〔動〕『小犬(イヌヒ)の訛なるべしといふ。又、狆の字は、支那にては、苗人の名を示すものなるを、中の字の宋音により用ひたりともいふ』犬の一品種。毛長くして、多くは白毛に黑斑あり。面貌は、頭蓋甚だ幅廣く、兩眼うるみできはめて圓く、鼻梁短く、上下顎は共に合して、上方に向ふを常とす。室内に飼はる。體軀の小さきものほど貴ばれ、極めて小さきは「まくらちん」と呼ばる。もと支那より舶來せるものなるべしといふ。〔佛蘭狗〕

（ん　ち）

ちん　狆が麎(クソ)をしたやう【句】一種の醜く滑稽なる面貌の譬。ちんくしゃ。〔諺語〕

ちん　狆猫・婆婆(ババ)【句】自己に都合よき者には媚(ヘツラ)ひ、然らざる者に對しては、少しの愛想をも示さぬ者を列べ擧げていふ語。〔諺語〕

ちん　狆の顔に揚(ア)げをしたやう【句】短き顏の形容。〔諺語〕

ちん　鎭【名】一しづめ。まもり。二一地方のしづめとなりて、軍を置く所。三中古の僧官。多くは尼寺に置き、寺務を統轄す。大中少の等級ありたり。四現代支那の軍制にて、陸軍一師團の稱。

ちん　朕【名】一はなじる(鼻汁)を云ふ。(幼兒の語)二【代】一支那の古代に、第一人稱の代名詞。われ。二『史記の始皇本紀に「天子自稱曰レ朕」とあり』てんし(天子)の自稱。

（支那秦の始皇帝より始まる）

ちん【貌】 ㊀落ちつきて動かぬさま。方づきととのへるさま。〔俚語〕 ㊁鉦などの鳴る音の形容。 ㊂鼻をかむ音の形容。

ちんこも、かんこも【句】 人にもの問はれて、又は責問されて、何とも言はざるにいふ。

ちん沈【名】ちんかう（沈香）の略。 源氏「ちんのけそくの枕にそへて」

沈の箱【句】 沈香を入るるための箱。二重にして、梨子地・蒔繪・堆朱（ツイシュ）・青貝・沈金彫等さまざまのものあり。上の重には沈を入れ、下の重には、沈を挽切る鋸・なた・鉈などを入置く。

沈の灰【句】 沈香の木を焼きたる灰。

沈のほた【句】 沈香のしらた。沈香の木の質あしきもの。

ちん陣【名】 ㊀ならぶこと。隊列。 ㊁軍勢を列ぬること、又これを列ねて形づくりたる隊伍。いくさぞなへ。そなへ。「長蛇の陣」 ㊂兵士の屯する所。軍陣。營所。屯營。陣營。陣屋。兵營。 ㊃百、衛士（エジ）の禁裡に出仕して詰め居りし所。ちんや。 杖「左衛門のぢんなどに、殿上人あまた立ちなどして」 源氏「右近の陣の御かは水のほとり」 ㊄次條の略。

陣の座【句】 古、禁中にて、節會・神事・叙任等の公事を行ふとき、その事を執る上卿の著座せしところ。左近・右近の兩陣あり。前者のは日華門内、後者のは月華門内。後世、後者のみを用ひたり。仗の座。仗座。

陣の定（ヂヤウ）【句】 陣の座にての評定。仗議。 珊瑚「あづまにも聞えて、例の陣のさだめなどやうに、これかれ、あまた、武士どもよりあひよりあひ、評定しけり」

陣の城【句】 柵を結ひ、塀を穿ちなどして、城のごとくに構へたる陣屋。

陣を取る【句】 ㊀陣を張り構ふ。陣を布く。ぢんどる。 ㊁その場所を占む。ゐずまふ。ぢんどる。

ぢん塵【助數】 一の十億分の一。即ち小數點下第九位の單位。沙の十分の一、埃の十倍。

ちんあ 沈痾【名】 しゅくあ（宿痾）に同じ。

ちんあい 珍愛【名】 めづらしがりて愛すること。

ぢんあい 塵埃【名】 ちりほこり。

ぢんあし 陣足【名】 陣の延長。戰線。

ちんあつ 鎮壓【名】 ㊀おししづむること。力を以ておさふること。 ㊁〔農〕耕地を鋤・鍬の類にて耕し、次ぎに土塊を分碎して均らすとき、地面を押ししづむること。

ちんあつき 鎮壓器【名】 ㊀物を壓しつくる具。おもし。 ㊁〔農〕碎土器を用ひたる後の地面を壓しつくる器械。

ちんあつけいさつ 鎮壓警察【名】〔法〕 きんあつけいさつ（禁壓警察）に同じ。

ぢんあらそひ 陣爭【名】 陣取るべき場所の奪ひ合ひをなすこと。

ちんい 珍異【名】 ちんゐ（珍奇）に同じ。

ちんうつ 沈鬱【名】 氣分のふさぐこと。氣のしづむこと。

ぢんえい 陣營【名】 ㊀ぢん（陣）㊁に同じ。 ㊁せんぢん（戰陣）に同じ。

ちんえふ 椿葉【名】 大椿（タイチン）の葉。椿葉、再改の笑（ヱ）を披（ヒ）く【句】次條に同じ。 平家「縮素、堯舜無爲の化をうたひ、椿葉再改のゑみを披かん」

椿葉の影、再び改まる【句】 『莊子の逍遙遊篇に「上古有二大椿者一以二八千歲一爲レ春、八千歲爲レ秋」とあり、即ち椿の一歲は人間の一萬六千歲に當り、その葉の再び改まるは、以て時の悠久を知るべし』永くその位に居る。 珊瑚「神殿の内に、椿葉のかげ二たび改まると、いとあざやかにけだかき聲にて」

ちんえふき 椿葉記【名】〔書〕 崇光院の觀應二年より後花園天皇の永享五年までの事實を記せるもの。一卷。道欽法親王の撰。

ちんえふてん 椿葉點【名】〔美〕 南畫の葉の描方の一。多くは、濃筆を以て描き、春・秋の景に從ひ、青綠には、紅黃を葉の中に施すを常とす。

（んてふえんち）

ぢんえん 塵緣【名】 世の中に在る間の關係。俗緣。黃塵。

ぢんおし 陣押【名】 古の戰にて、軍隊を進めゆくこと。進軍。

ちんおん-き 鎮音器【名】 『英 Silencer 又 Muffler』發動機等の爆發音響を少なからしむるため、排氣管に裝置する器。形狀・構造は種種あれど、爆發瓦斯を膨脹櫃に導き、無數の小孔又は曲路を通過せしめて、その勢をそぐにあり。

ちんか 賃價【名】 ちんたいかかく（賃貸價格）の略。

ちんか 沈下【名】 しづむこと、又しづむること。沈降。

ちんか 沈荷【名】〔商〕 うたに（打荷）に同じ。

ぢんか 陣下【名】 陣屋のもと。陣。「じ。

ぢんかい 塵界【名】 ぢんくわん（塵寰）に同じ。

ぢんかい 塵海【名】 前條の語を海に譬へていふ語。

ぢんかい 塵芥【名】 ㊀ちりあくた。ぢんあい。 ㊁輕きことの譬。 太平記「戰場に臨んで命を棄つる事、塵芥よりも尙輕くす」

ちんかいかう 鎮海港【名】〔地〕 ちんがいわん（鎮海灣）を見よ。

ちんがいやく 鎮咳藥【名】〔醫〕 『獨 Hustentitte』咳嗽を鎮むる藥物の總稱。

ちんかいわん 鎮海灣【名】〔地〕 朝鮮慶尙南道と巨濟島との間にある闊大なる海灣。水深くして、朝鮮海峽の要路に當り、沿岸に鎮海港あり。馬山浦の南二里、軍港として知らる。

ちんかう 珍肴【名】 珍しきさかな。珍羞。

ちんかう 鎮江【名】〔地〕 ㊀朝鮮錦江の下流。 ㊁支那江蘇省にある條約港。楊子江の下流と大運河との會合點に當りて、交通上・商業上重要の地たり。

ちんかう 沈降【名】 しづみくだること。底によどむこと。沈下。沈澱。

ぢんかう 沈香【名】〔植〕 ㊀瑞香（ヅイカウ）科に屬する常綠喬木。原産地は東印度。樹の高さ數丈に達し、葉は披針形又は倒披針形。花は白色にして、纖形花序に排列す。材は古來有名なる藥香料なり。かをりぎ。ぢん。きゃら。 ㊁五香の一。香木にて、その質によりて伽羅（キャラ）・眞南伽（カナン）・佐羅（サラ）・羅國（ラコク）・寸門陀羅（スマンダラ）の六種に別つ。沈水香。

沈香も焚かず、屁も放（ひ）らず【句】 益にもならず、害にもならず、又は可もなく、不可もなく、又は善き事もなさず、悪しき事もなさぬ譬。〔諺語〕

ぢんがう 塵囂【名】 俗世のやかましくうるさきこと。世の營みのせはしきこと。

ぢんかう-いろ 沈香色【名】 きゃらちゃ（伽羅茶）に同じ。

ちんかうせい-たんさんかるしうむ 沈降性炭酸加爾叟謨【名】〔化〕 次條に同じ。

ちんかうせい-たんさんせきくわい 沈降性炭酸石灰【名】〔化〕 『英 Precipitated carbonate of lime』沈降せしめて得たる炭酸石灰。純白なる大理石を細末にし、これを約一五%の鹽酸中に投加して製す。其の性炭酸を發生し、酸類を中和する作用を有するにより、製酸藥又は下痢・腺病に應用せられ、外用としては撒布藥となる。

ぢんかうぼく 沈香木【名】〔植〕 あかう（赤榕）に同じ。

ぢんかうめ 沈香日【名】 昔の量目の一。二百十匁を一斤とし、藥種などを量るに用ひしもの。

ちんかう-ゆわう 沈降硫黃【名】〔化〕 『英 Precipitated sulphur』硫黃の一。多硫化カルシウムを鹽酸にて分解沈降せしめて製せる帶黃白色無晶形の粉末。軟膏に配合して外用に供す。

ちんかう-りんさんかるしうむ 沈降燐酸加爾叟謨【名】〔化〕 次條に同じ。

ちんかう-りんさんせきくわい 沈降燐酸石灰【名】〔化〕 『英 Precipitated calium phosphate』燐酸石灰の一。白色の輕き結晶性粉末にして、容易に水に溶解せず。第二燐酸かるしうむ。中性燐酸かるしうむ。

ちんかく 珍客【名】 めづらしき客人。稀に來れる客人。ちんきゃく。

ぢんがさ 陣笠【名】 ㊀雜兵の陣中にて、兜の用とせし笠。薄き鐵にて造る。或は木製・紙製に漆を

（一さがんぢ）

塗り、將士の用とするもあり。又、江戸時代に、出火その他非常の時などにも用ひたり。㊁**ちんがされん**(陣笠連)の略。㊂紋所の一。陣笠㊀を象(カタド)りたるもの。㊃魚の病の一。鰓蓋(エラブタ)の部腫れあがりて、笠の形をなすもの。

ちんがさ-がひ 陣笠貝・蠣【名】〔動〕よめのかさ(嫁笠)に同じ。

ちんがさ-れん 陣笠連【名】㊀雑兵の連中。㊁主義も主張もなく、人の下風に立ちて驅ぎまはるわいわい連。雑輩。

ちん-がし 賃貸【名】錢を受けて物を貸すこと。損料貸。(賃借に對して)

ちん-がしら 陣頭【名】一陣のかしら。一軍の指揮者。

ちん-かせぎ 賃稼【名】賃銀を取りて、勞役に從事するもの。

ちん-がたな 陣刀【名】ぢんたう(陣刀)に同じ。

ちん-がね 陣鐘【名】昔、陣中にて、軍勢の退却を指示するに用ひし半鐘。

ちん-がひ 陣貝・陣螺【名】昔、陣中にて軍勢の進出を指示するに吹き用ひし法螺貝。

ちん-がへ 陣替【名】陣を他所へ移すこと。陣地をかふること。

ちん-かん【貌】鐵などを打鍛へ、又は磬と響銅とを交互に打つ時の音の形容。

ちん-かも【名】**ちんちんかもかも**の略。〔俚語〕

ちんから【名】琉球の土器物にて、奈良風呂の類。

ちん-がら 珍柄【名】織物などのがらの、珍しきもの。

ちんがら-こ【名】**ちんちんもがもが**に同じ。

ちんがら-ちんがら【名】**ちんちんもがもが**に同じ。

ちんがら-もんがら【名】**ちんちんもがもが**に同じ。

ちん-がらり【名】爐の類ならんも、詳かならず。五人女「南のかたに明窓(アカリ)ありて、内を覗けば、しづの屋にありしちんからりとやいへる物一つに、青き松葉を燒(タキ)捨て」

ちん-がらり【貌】内に何物も無きさま。がらり。〔元祿時代の語〕天の網島「又引出しても、ちんがらり。有りたけこたけ引出しても、つぎきれ一尺あらばこそ」

ちん-がり 賃借【名】錢を出して物を借ること。ちんしゃく。損料借。(賃貸に對して)

ちん-がり【名】**ちんちんもがもが**に同じ。狂言(兎物左衛門)「あれあれ、したたか腰を打たれたかして、ちんがり、ちんがり、さても、さても、をかしい事や」

ちん-がをか 陣岡【名】〔地〕陸中國紫波(シハ)郡古館村に在る地。源頼朝奥州征伐の陣地と稱せらる。

ちん-き 珍稀【名】めづらしきこと。無類。

ちん-き 珍奇【名】めづらしきこと。類まれなること。「と。

ちん-き 珍貴【名】めづらしくたふときこと。

ちん-き 珍器【名】珍しき器物。珍具。

ちん-き 珍卉【名】めづらしき草。

ちん-き 沈賣【名】重き物を入れて、水に沈むる木匱。水又は土砂の浸入を防ぐためなどに用ふ。

ちん-き 沈毅【名】沈著にして剛毅なること。おちつきてしっかりしたること。

ちん-き 丁幾《英 Tincture》【名】〔化〕酒精溶液の總稱。例へば、ヨヂウムの酒精溶液を樟腦丁幾又はカンフル丁幾といふ類。

ちん-き 陣吉【名】**おんぢ**(陣吉)の略。〔下總國・上野國の方言〕「藥劑。

ちんきざい 丁幾劑【名】丁幾に製したるもの。

おん-きち 陣吉【名】腰に帶ぶる、布製の長き財布。武田信玄のつけたる名なりといふ。〔甲斐國・上野國・上總國の方言〕

ちん-きん 賃金【名】㊀勞務に服するものの報酬として受くる金錢。給料。賃銀。勞銀。㊁賃借人が賃貸人に支拂ふ報酬。賃銀。「同じ。

ちん-きん 沈金【名】**ちんきんぬり**(沈金塗)にて、自然の生命を苦しむるは殘忍なるわざなり。〔諺語〕「こと。

ちん-きん 珍禽【名】めづらしき鳥。

ちんきん-きぎょ 珍禽奇獸、國に育てず【句】『書經の旅獒篇に出づ』禽獸のいかに珍奇なるものなりとも、檻に籠め、鎖に繋ぎなどして、

ちんぎん 沈吟【名】うめくこと。なげく

ちん-ぎん 賃銀【名】**ちんきん**賃金)に同じ。

ちんぎん-ききん 賃銀基金【名】〔經〕『英 Wages fund』一國の資本中、特に賃銀に充てらるべきもの、即ち勞働の報酬に專用せらるべき資本。給料基金。給料元本。次條參照。

ちんぎんききん-せつ 賃銀基金說【名】〔經〕『英 Wages fund theory』各國に一定の賃銀基金あり、勞働者の總數にて、この額を除すれば、賃金の平均額を得る筈なるにより、賃銀を高くせんとするには、基金を增加するか勞働者を減少するかせざるべからずといふ說。英人アダム・スミス(A. Smith)の唱道に係り、マルサス(T. Malthus)・リカルド(D. Ricardo)等を經て、ミル(J. Mill)に至りて大成す。給料基金說。

ちんぎん-じかんばらひほふ 賃銀時間拂法【名】〔經〕『英 Time wages』勤務時間を標準として、賃銀を仕拂ふ方法。その缺點は勞務者をして、怠惰ならしむる弊あれども、精巧を要する勞作には適法とす。

ちんぎん-ぜい 賃銀稅【名】㊀勤勞により得たる一切の收入に對して課する所得稅。勞銀稅。給料稅。俸給稅。特別所得稅。㊁狹義にては、勞働者の收得する賃銀に對して課する稅。

ちんぎん-せいど 賃銀制度【名】賃銀の支拂、その他に關する制度。

ちんぎんつきかかへやしき 賃銀附抱屋敷【名】江戸時代に、抱屋敷の、園の間數(スウ)又は家作の坪數に應じて、役人足賃銀を取立てられしもの。役人足賃銀附抱屋敷。

ちんぎん-てっそく 賃銀鐵則【名】〔經〕『英 The Iron Law of Wages』英國の經濟學者リカルド(D. Ricardo)の主唱せし學說。即ち勞働者の賃銀は、辛うじて其の生活資を支ふに過ぎざる性質にて、勞働者は現今の經濟組織の下には、永久其の賃銀を增加する望なしといふ說。社會主義者ラッセル(Lassale)が一八六三年ライプチヒ(Leipzig)勞働組合に與へし公開書に、此の法則にして眞なりとせば、現に普魯西國民の八割乃至九割六分は、終生困窮の域を脫する能はずと論ぜしより、世上賃銀鐵則として喧傳するに至れり。

ちんきん-ぬり 沈金塗【名】畫模樣を毛刻(リボ)にして、金粉を蝕込みたる漆ぬり。その赤地なるを沈朱といひ、黑地なるを沈黑といふ。多く琉球より出だす。ちんきんぼり。ちんきんまきゑ。ちんきん。雅金。

ちんきん-ぼり 沈金彫【名】前條に同じ。

ちんきん-まきゑ 沈金蒔繪【名】前條に同じ。

おん-きやう 塵境【名】**ちんくわん**(塵寰)に同じ。「じ。

ちん-きやく 珍客【名】**ちんかく**(珍客)に同じ。「じ。

ちん-ぎよ 珍魚【名】珍しき魚。

ちん-きよう 陳供【名】そなへさぐること。並べたてまつること。

ちんぎよ-らくがん 沈魚落雁【名】『莊子の齊物論篇に「毛嬙麗姬、人之所美也、魚見之深入」とあり』婦人の容貌の極めてうるはしき譬。羞花閉月。

ちん-く 珍句【名】㊀めづらしき句。㊁珍妙なる句。異樣にしてをかしき句。

ちん-く 沈酣【名】**ちんめん**(沈湎)に同じ。〔陸奥國の方言〕

ちん-ぐ 珍具【名】めづらしき什器。珍什。珍器。「じ。

おん-く 塵垢【名】〔佛〕**ぼんなう**(煩惱)に同じ。

おん-く 塵窟【名】**ちんくわん**(塵寰)に同じ。

おん-ぐ 陣具【名】陣中にて用ふる諸般の道具。軍用の器具。

ちん-くわ 鎭火【名】火事の消えて鎭まること。又火事を消し鎭むること。

ちん-くわ 珍花【名】めづらしき花。〔本朝三國誌〕「遠山遠來の木草珍花」

ちん-くわ 珍果【名】めづらしき果實。

ちん-くわ 珍菓【名】めづらしき菓子。

ちん-くわ 珍貨【名】めづらしき品物。

ちん-くわい 珍怪【名】めづらしく不思議なること。珍奇。「同じ。

おん-くわい 塵灰【名】**くわいぢん**(灰塵)に同じ。

おん-くわい 塵穢【名】塵埃にけがるこ

と。塵汚。

おん-ぐわい 塵外【名】浮世の外。俗界をかけはなれたる所。世外。象外。物外。

ちんくわい-せき 鎮懐石【名】『事蹟は古事記に見え、鎮懐の名は、萬葉集巻五に「用二玆両石一、插二著御袖之中一、以爲二鎮懐一」とあるに本づく』筑前國怡土(イト)郡深江村見饗野(カヒ)に祀られたりといふ二箇の石。神功皇后の三韓を征したまへる時、應神天皇を孕みたまへりしが、凱旋の時まで生れ給はぬやうにしづめんとて、帯に挟みて行かせられたる由、言傳ふる物にて、二箇とも、人の盗み去り、今は社殿のみありて、石は存せず。一名、兒饗(カヒ)石。

ちんくわう-じ 珍皇寺【名】おたぎでら(愛宕寺)に同じ。

ちん-くわけい 陳和卿【名】〔人〕支那宋の佛工。平安朝の末に渡来し、東大寺の大佛の首の治承の兵火に焼け落ちしを再造して、源頼朝に賞せらる。渡宋を實朝に勧む。後その終る所を知らず。

ちんくわ-さい 鎮火祭【名】毎年六月・十二月晦日、宮中にて、火災豫防の爲に、火神を齊ひ鎮むる祭祀。ひしづめまつり。

ちんくわ-さい 鎮花祭【名】古、毎年三月神祇官にて行はれし大神(オホ)・狭井(サヰ)の二神の祭。春花の飛びかふ頃は、疫神分散して、人を惱すとて、これを鎮むる目的にて行はるといふ。はなしづめのまつり。太平記「三月…七日…同日、鎮花祭有り」

ちんくわ-ばうがい-さい 鎮火防害罪【名】〔法〕火災の際、鎮火用具を隠匿・破壊し、又はその他の方法により、鎮火の防害をなしたるが成立する犯罪。一年以上十年以下の懲役に處せらる。

ちん-ぐわん 珍玩【名】珍重してもてあそぶこと、又その物。珍愛。

ちん-くわん 塵寰【名】塵の世。この世。うきよ。塵界。塵境。塵區。塵世。塵中。

ちん-くわん 陣官【名】近衛府に於ける將監(ジヤウ)以下の衛士(エジ)。官人。

ちん-けい 陣形【名】〔兵〕軍艦の隊形。縦陣・横陣・梯陣の三種に大別す。各條參照。

ちんけい-さい 鎮痙劑【名】〔醫〕『獨Krampfmittel』痙攣(ケイ)を鎮むるための藥劑。痙攣の種類・動機多端なるが故に、それに作用すべき藥物も又種類多く、ブロオム劑・阿片・モルヒネ・縮草根などは、その一二の例なり。鎮痙藥。

ちんけい-やく 鎮痙藥【名】〔醫〕前條に同じ。

ちんけう 聽叫【名】〔佛〕『漢字の宋音』禪寺の召使の童子。聽呼(コ)とも稱す。焼香侍者。

ちん-けん 椿萱【名】椿堂と萱堂と、即ち父と母と。父母。兩親。「言。

ちん-げん 陳言【名】陳腐なることば。套

ちん-げん 陣玄【名】■『韓愈の毛穎傳に「與二絳人陳玄・弘農陶泓及會稽楮先生一友善」とあり』すみ(墨)の異稱。■すずり(硯)の異稱。下學集「陳玄(ゲン)硯異名也」

ちん-げんぴん 陳元贇【名】〔人〕支那明の詩人。字は義都。既白山人と號す。寛永五年亂を避けて、我が國に歸化し、尾張侯に客事す。よく邦語を解するを以て、唐音を川ひずして、諸名士と交はる。詩・書を善くし、又始めて拳法を傳ふ。寛文十一年名古屋に歿す。年八十五。

ちんこ 【名】■〔植〕糯稲(カウ)の一品種。收量多からざれども、品質好良なり。越後地方に多く栽培せらる。■ちんぼ。ちんぼこ。陰莖。〔小供の語〕■〔動〕ぎず(黄顙魚)を云ふ。〔伊勢國の方言〕■〔植〕おきなぐさ(翁草)■を云ふ。〔陸前國仙臺の方言〕

ちん-ご 鎮護【名】しづめまもること。亂を鎮め、國を護ること。

ちんごこくかだうぢやう 鎮護國家の道場【句】〔佛〕天子の本命星(ホンミヤウジヤウ)を祀り、息災・延命を祈禱する道場。文徳天皇の本願により、延暦寺に總持院を建ててこれに充てらる。天子本命の道場。盛衰記「總持院と申すは、文徳天皇の御願、眞言上乘の祕法は、この伽藍に修せらる。如來遺身の御舍利多寶塔に納め、鎮護國家の道場、名稱實にたのもしや」

ちんごこくほふ 鎮護國家法【句】〔佛〕『鎮(シヅ)に佛教により、國家を守護する法の義』仁王經・金光明・守護國略經等にて、七難を消滅し、國家を鎮護するの法を説けるもの。即ち佛教的國家主義を説ける法。

ちん-ご 陳吳【名】「陳勝・吳廣」の略。

ちん-ご 塵籠【名】紙屑を入るるもの。かみくづいれ。一代女「手元に塵籠もあるに、栢(カヤ)のから、蔦宿盆(ボンコ)捨て」

ちん-ご 塵壺【名】だこ(唾壺)に同じ。和漢三才圖會「唾壺、俗云二塵壺一」

ちん-ご 陣後【名】■陣屋のうしろ。■軍隊のうしろ。

ちん-ご 陣伍【名】陣だて。隊列。

ぢん-こう 塵垢【名】■ちりとあかと。■浮世のものごと。塵事。

ちん-こきり 賃粉切【名】■賃錢を取りて、烟草を刻むこと、又その職業の人。■ちきりだい(地切臺)に同じ。

ちん-こく 陳穀【名】ふるき米。ひねまい。

ちん-こく 鎮國【名】國家の鎮護。「見よ。

ちん-こく 沈黒【名】ちんきんぬり(沈金塗)を

ちんこく-げうきしやうぐん 鎮國驍騎將軍【名】中衛府少將を云ふ。(淳仁天皇の時の一時の改稱)

ちんこく-じ 鎮國寺【名】筑前國宗像(ムナカタ)郡田島村字吉田にある眞言宗の寺。弘仁年中僧皇鑒の開基にかかる。

ちんこく-だうぢやう 鎮國道場【名】〔佛〕

ちんごこくかだうぢやう (鎮護國家道場)の略。

ちんこく-ゑ 鎮國衛【名】ちゆうゑふ(中衛府)を云ふ。(淳仁天皇の時の一時の改稱)

ちんごこくかだうぢやう 鎮護國家道場【名】〔佛〕「鎮護國家の道場」に同じ。

ちんこ-しばゐ ちんこ芝居【名】みやこばゐ(宮芝居)を云ふ。〔大阪の語〕

ちん-こつ 砧骨【名】〔醫〕『獨Amboss』ちやうこつ(聽骨)を見よ。

ちんこっ-きり 賃粉切【名】ちんこきり(賃粉切)の禁呪【名】瘢・打身などのまじなひに、繰返して唱ふる語。〔關西の小供の語〕

ちんこ-の-まじなひ ちんこの禁呪【名】

ちん-こふ 塵劫【名】〔佛〕『楞嚴經に「縦經二塵劫一終不レ能レ得」とあり』おんてんごふ(塵點劫)に同じ。

ちんこふ-き 塵劫記【名】〔書〕和算書として傳ふるものの最古書。大數・小數・附命位法・量衡名目より八算・見一を圖解し、開平・開立に終る。三卷。吉田光由の著。

ちん-こん 鎮魂【名】魂をおちつけ鎮むること。たましづめ。正統此儀速日(ハヤヒ)の尊…十種の瑞寶を傳へ持たりけるを、天皇に獻る。天皇、鎮魂の瑞寶なりしかば、その祭を始められにき」

ちんこん-しき 鎮魂の式【句】次條に同じ。

ちんこん-さい 鎮魂祭【名】■〔魂鎮(ツヅメ)の祭に同じ。■神葬に死者の魂をしづめまつる意にて行ふ儀式。「屋。

ぢんこ-や 陣小屋【名】軍勢の屯する假小

ちんころ 狆ころ【名】■〔動〕ちん(狆)に同じ。〔俚語〕■小犬。犬ころ。〔俚語〕次條の略。

ちんころ ちんころを座敷に上げたやう【句】まごまごするさま。

ちんころ-がけ 狆ころ掛【名】縮緬・羽二重などの中に綿を入れて紐狀にくけし根掛。

ぢんこ-をけ 塵桶【名】臺所の流の側に置く小さき桶。底に日の粗き模様を附し、又は穴を穿ちて、水を切るに便にす。

ちん-ざ 鎮坐【名】神靈の鎮まりますこと。

ちん-さい 鎮祭【名】土地を鎮め固むるための祭。

ちん-さい 沈菜【名】朝鮮料理の一。我が國の香の物に似たり。

ちん-さい 陳蔡【名】〔地〕支那の陳(今の河南省陳州府)の地と、蔡(今の河南省汝寧府)の地。

陳蔡の厄(ヤク)【句】『孟子の盡心下篇に「君子之厄二於陳蔡之間一無二上下之交一也」とあり』■孔子が陳蔡の地にて、厄難に逢ひし故事。■有徳の士も、時に合はざれば、災厄に遇ふこと。

ちん-さい 珍財【名】めづらしき財寶。珍寶。

ちん-さう 珍草【名】めづらしき草。珍卉。

ちん-ざう 珍藏【名】珍重して祕藏しおくこと。

こと、又その物。

ちんざう 頂相【名】〔佛〕『漢字の宋音』祖師の半身の肖像。

ちんざうじ 珍藏寺【名】羽前國東置賜(ヒガシオキタマ)郡漆山(ウルシヤマ)村大字漆山にある曹洞宗の寺。鶴布山と號し、本尊は釋迦如來。

ちんざうひん 珍藏品【名】珍藏する品。珍藏物。

ちんざうぶつ 珍藏物【名】前條に同じ。

ちんさうべい 陳倉米【名】ちんりんべい(陳廩米)に同じ。

ちんさうまい 陳倉米【名】前條に同じ。

ちんさつ 鴆殺【名】鴆毒を飲ませて殺すこと。ちん(鴆)〔一〕參照。

おんーさん 陣參【名】陣所に參ること。

ちんーし 沈子【名】しづみ。おもり。

ちんーし 沈思【名】一思ひしづむこと。二深く考ふること。思案。尋思。

ちんーし 鎭子・鎭紙【名】古、室内の敷物又は帷帳などの風に吹きまくられざるやうに、おもしとせし物。金屬又は石を紙に包み、枕のやうに扁く製せしものといふ。文鎭。雅製抄「柱のきはのちんしなどをとりて」

ちんーじ 珍事・椿事【名】一めづらしき事柄。非常の事件。二おほごと。變事。

おんーじ 塵滓【名】塵と滓(かす)と。

ちんーじ 塵事【名】浮世の事柄。俗事。

ちんーじう 珍饈【名】めづらしきさかな。めづらしき食物。珍肴。珍味。「こと。

ちんーしう 賃傭【名】賃銀を拂ひて傭(やと)ふこと。

ちんしうりんざい・ぜんじーごろく 鎭州臨濟慧照禪師語錄【名】〔書〕りんざいろく(臨濟錄)を見よ。

ちんーしごと 賃仕事【名】賃錢を取りて爲す仕事。てましごと。日傭しごと。傭工。雙生隅田川「あるかなきかのかせ所帶、妻は手づまの賃仕事」

ちんーしつ 疾疾【名】『孟子の盡心上篇に「人之有二德慧術知一者、恆存二于疾疾一」とあり』疾病。熱病。「具。

ちんーじふ 珍什【名】めづらしき器具。珍

ちんーじま 賃縞【名】賃錢をとりて、縞物を織ること、又その縞物。二代男「天滿から出る賃縞織りても、世はわたるべきに」

ちんーしん 沈深【名】ちんちん(深沈)に同じ。

ちんーじん 陳人【名】『莊子の寓言篇に「人而無二人道一、是謂二陳人一」とあり』心の腐れたる無用の人。

ちんーじん 陳人【接尾】『陳(ふる)き人、即ち老朽して役に立たぬ人の義』雅號に添へて用ふる謙稱。

おんーしん 塵心【名】塵事に關する念慮。名利を思ふ心。俗塵に汚れたる心。俗念。塵念。俗心。俗情。

ちんしんは 鎭信派【名】茶の湯の石州流の一派。松浦鎭信を祖とす。

ちんーしや 陳謝【名】一一わけを言ひてあやまること。わびごと。「百方陳謝す」

ちんーしや 枕藉・枕籍【名】枕にし、又藉(し)くこと、又その物。相重なり臥す。「舟中に枕藉す」「相枕藉して死す」

おんーじや 塵沙【名】〔佛〕無限の大數を塵や砂に譬へていふ。塵數(ジュ)。

塵沙の惑障【句】〔佛〕ちんじやわく(塵沙惑)に同じ。猶鬱合鬘無始曠劫の塵沙の惑障を斷じ」

ちんーしやう 鎭將【名】一地方を鎭むる將軍。二明治元年七月設けられ、駿河國以東十三箇國の政務を總裁せし官職。その事務を取扱ひし役所を鎭將府といひ、議定・參與・辨事・判事・史官・筆生の職員、これに屬せしが、その年十月廢せらる。

ちんーしやう 珍賞【名】めづらしがりて賞玩すること。

ちんーしやう 珍祥【名】めづらしき瑞相。奇瑞。珍瑞。

ちんーしやう 沈床【名】防堤等の基礎工事として、水中に沈むるもの。數箇所束ねたる粗朶を縱橫に積重ね、上に石塊を載せて沈下せしむ。粗朶土。

ちんーじやう 陳情【名】心事をこまかにのぶること。情實を言立つること。

ちんーじやう 陳狀【名】一狀況を陳述すること。二論人(即ち被告)より辯疏する狀。(訴狀に對して)そちんじやう(訴陳狀)參照。「申。「鎌倉時代・室町時代の語」

ちんーじやう 陳上【名】申上ぐること。具

ちんーじやう 枕上【名】まくらがみ。まくらべ。枕頭。枕邊。「の大將。

おんーしやう 陣將【名】一陣の大將。一手

ちんじやうじょ 陳情書【名】陳情の文書。

ちんしやうふ 鎭將府【名】ちんしやう(鎭將)〔二〕を見よ。

ちんしやうやしやほふ 鎭將夜叉法【名】〔佛〕傳敎大師入唐の時、順曉阿闍梨より傳へ、桓武天皇に授け奉りきといふ、國家を鎭護する金剛夜叉の祕法。

ちんーしやく 賃借【名】一ちんがり(賃借)に同じ。二〔法〕賃貸借により、報酬を仕拂ひて、他人の物の使用と收益とを爲すこと。(賃貸に對して)

ちんしやくーけん 賃借權【名】〔法〕賃貸借に因りて得たる債權、即ち賃借人が賃貸人に對して、その所有物の使用と收益とを要求する權利。

ちんしやくーしや 賃借者【名】〔法〕ちんしやくにん(賃借人)に同じ。

ちんしやくーち 賃借地【名】〔法〕賃借したる土地。

ちんしやくーにん 賃借人【名】〔法〕賃借する人。賃借者。

ちんしやくーぶつ 賃借物【名】〔法〕賃借したる物品、即ち賃貸物を賃借人より見ていふ稱。

おんじやわく 塵沙惑【名】〔佛〕さんわく(三惑)を見よ。

おんじやぁん 沈麝圓【名】昔、氣を收むるために用ひし藥。神仙沈麝圓。太平聖惠方「麝氣を收むる藥には、盆山人降氣湯・神仙沈麝圓を合せに參り候ふべし」見よ。

ちんーしゆ 沈朱【名】ちんきんぬり(沈金塗)を見よ。

ちんーしゆ 珍珠【名】めづらしき珠玉。

ちんーしゆ 鴆酒【名】鴆毒を交へたる酒。毒酒。ちん(鴆)〔二〕參照。

ちんーしゆ 陳酒【名】ひねざけ。古酒。舊醅。

ちんーじゆ 鎭守【名】一兵を置きて、その地を鎭め守ること。〔鎭戍〕正統記「三韓の國、年ごとに御調(ミツギ)を備へ、この國よりもかの國に鎭守のつかさを置かれしかば」二その土地を護る神。うぶすなかみ。うぢがみ。〔鎭主〕增鏡「三十三間の御堂の千體の千手、一時のほのほにたぐひたまへば、不動堂北斗堂も殘らず、寶藏鎭守ばかりぞ、辛うじて打消しにける」三〔佛〕寺院の內に置く鬼廟。

ちんじゆ 鎭守の神【句】土地・第宅を鎭護守衞する神。一國のもの、王城のもの、神社佛閣のも、私人の第宅のも、氏のもあり。

ちんじゆ 鎭守の沼【句】蛇が棲む處にも恐ろしきもの居る。〔諺語〕

ちんじゆ 鎭守の森【句】鎭守の社ある邊の森。

ちんじゆ 鎭守の社(やしろ)【句】ちんじゆ(鎭守)二に同じ。

ちんじゆ 鎭主【名】ちんじゆ(鎭守)二に同じ。

ちんじゆ 鎭戍【名】ちんじゆ(鎭守)二に同じ。

ちんーじゆ 椿壽【名】『だいちん(大椿)を見よ。ちんちん(香椿)參照』長壽。長命。

ちんーじゆ 陳壽【名】〔人〕支那西晉の學者。字は承祚。孝廉に擧げられて、著作郎に敍す。三國誌の著あり。元康七年歿す。

おんーしゆ 塵數【名】〔佛〕無量の大數を、塵に譬へていふ稱。塵沙。〔古語〕「塵數の菩薩は增進の益(ヤク)にあづかりき」

ちんじゆーしやうぐん 鎭守將軍【名】ちんじゆふしやうぐん(鎭守府將軍)に同じ。

ちんじゆだう 鎭守堂【名】ぢだう(土地堂)に同じ。

ちんーじゆつ 陳述【名】一申し述ぶること。言上。二〔法〕訴訟の當事者が、其の係爭事件に就きて、事實上又は法律上主張し、且つ抗辯すること。

ちんじゆつーしや 陳述者【名】陳述する人。

ちんじゆつーしよ 陳述書【名】陳述したるとほりを記したる文書。

ちんじゆふ 鎭守府【名】一古、陸奥・出羽の蝦夷に備ふるために、陸奥國に置かれたる鎭臺。將軍・副將軍・軍監・軍曹の四等の官を設け、初は陸奥國多賀城に在りしが、坂上田村麿の時陸中國膽澤(イサハ)城をもつて之に充て、後又、平泉に移せり。二各軍港に

置かれ、鎮守府司令長官の統理の下に出師の準備、防禦の計畫、海軍區の警備、幷に所轄諸部の事務を監督する所。鎮守府司令長官、幷にその幕僚として、參謀長・參謀副官・人事長・機關長・軍醫長・主計長・法務長を置く。ていとくふ(提督府)參照。

ちんじゆふ-ぐんばつくわいぎ 鎮守府軍法會議【名】常設せらるる海軍軍法會議の一。鎮守府司令長官の部下に屬する佐官以下の軍人、その他鎮守府の用に供する船舶の乘員にして、罪を犯したる者、又は艦隊軍法會議より、審判の委託を受けたる者を裁判するもの。

ちんじゆふ-じくわん 鎮守府次官【名】鎮守府の奏職員の一。造船所長を兼任せしめ、鎮守府長官を輔佐し、長官事故ある時は代理せしもの。明治十七年設置、同十九年廢止せられたり。

ちんじゆふ-しやうぐん 鎮守府將軍【名】古の鎮守府の長官。三位以上の人、これに任ぜられたる場合には、鎮守府大將軍と呼べり。鎮守將軍。しやうぐん(將軍)㊁參照。

ちんじゆふ-しれいちやうくわん 鎮守府司令長官【名】海軍の鎮守府の總事務を管理し、海軍大臣の命を受けて、軍政を掌る上長官。海軍大將又は中將を以て親補せられ、天皇に直隷す。

ちんじゆふ-たいしやうぐん 鎮守府大將軍【名】ちんじゆふしやうぐん(鎮守府將軍)を見よ。

ちんじゆふ-ちやうくわん 鎮守府長官【名】ちんじゆふしれいちやうくわん(鎮守府司令長官)の舊稱。

ちんじゆ-みやうじん 鎮守明神【名】土地の鎮守として祀れる明神。

ちん-しよ 鎮所【名】古、土地を鎮め、守護するために、兵を駐屯せしめたる所。

ちん-しよ 砧杵【名】砧(きぬた)と、それを打つ槌と、又砧を打つ槌、又その槌音。

ちん-しよ 珍書【名】ちんぽん(珍本)に同じ。

ちん-しよ 陳書【名】(書)支那唐の姚思廉(エンシ)勅を奉じて撰したる陳の歷史。二卷。のち曾鞏(ソウキヨウ)詔を奉じ、校訂して本紀六卷・列傳三十卷となす。

ちん-じよ 陳敍・陳叙【名】順序を立てて陳述すること。のべたつること。

ぢん-しよ 陣所【名】ぢん(陣)㊁に同じ。日本武尊吾妻鏡「敵の陣所と聞き及ぶ沖津も近くなるままに」

ちん-しよう 陳勝【名】(人)支那秦末の人。吳廣と共に兵を擧げて、秦に叛き、自立して、陳王となり、のち莊賈に殺さる。

陳勝・吳廣【句】㊀(人)陳勝と吳廣と。陳吳。㊁『陳勝と吳廣との二人は、共に楚人にして、兵を擧げて、秦に叛せし者のさきがけをなししよりいふ』或事のさきがけをなす人。陳吳。「ひそかに陳勝・吳廣たらんことを期す」

ぢん-しろ 陣城【名】昔の軍陣にて、山地に陣所を構へ、又は假に築造物を利用して、陣地としたること。

ちん-す 鎮子【名】ちん(鎮子)に同じ。

ちんす 賃す【動變他】賃金を出して人を雇ひ、又は物を借る。

ちんす 鴆す・酖す【動變他】鴆毒にて、人を殺す。毒殺す。毒害す。

ちんず 陳ず【動佐變他】言語にて述べたつ。申し述ぶ。陳辯す。(徊城酒呑童子)「少しも陳ぜば、拷問させうずるは」

ぢんす 陣す【動佐變自】軍隊を或地點に止めて、戰の構をなす。ぢんどる。

ちん-すゐ 沈水【名】『ちんすゐかう(沈水香)の略』ちんかう(沈香)㊁に同じ。(桑花)「いろいろの花の袂を深く淺くにほはしかをり、檀栴沈水にしみかへり」

ちん-すゐ 沈醉【名】ちんめん(沈湎)に同じ。(曾我扇八景)「大名・小名沈醉に、足もよろよろ歸らるる」

ちん-ずゐ 沈水【名】ちんすゐ(沈水)に同じ。

ちん-ずゐ 珍瑞【名】きずゐ(奇瑞)に同じ。

ちんすゐ-えふ 沈水葉【名】(植)『英 Sub-mergel leave』水中に沈在する葉、例へば、「えびも」「くろも」「せきしやうも」等の葉、これに屬す。

ちんすゐ-かう 沈香【名】ちんかう(沈香)㊁に同じ。

ちんすゐ-しよくぶつ 沈水植物【名】(植)『英 Submergel plants』全部水中に沈存する植物。例へば、狸藻・金魚藻・柳藻などの類。

ちんすゐ-てい 沈水堤【名】堤防の一。水深を高め、舟行に便せん爲に河身の種種なる方向に設くるもの。

ぢん-せい 鎭靖【名】匪徒などを鎭むること。しづめやすんずること。

ちん-せい 鎭星【名】とせい(土星)に同じ。

ちん-せい 沈靜【名】㊀おちつくこと。しづまること。鎭定。㊁氣配のあがらざること。「ふこと。

ちん-せい 陳請【名】情實を述べて請ひ願ふ植物。例へば、狸藻・金魚藻・柳藻などの類。

ぢん-せい 鎭西【名】(地)『もと支那にて、今の新疆省の縣名』我が國にては、鎭西府の設置以來、九州の稱となれり』㊁(地)きうしう(九州)の古稱。㊂(佛)ちんぜいは(鎭西派)の略。

鎭西の九黨(クタウ)【句】武家時代の九州地方の九諸侯、卽ち少貳・大友・惟任(コレ)・秋月・菊池・島津・原田・松浦。

鎭西の十六祖【句】(佛)淨土宗鎭西派にて馬鳴・龍樹・天親・菩提流支・曇鸞・道綽・善導・法然・聖光・記主・良忠・定慧・道勝・了實・了譽・西譽の十六祖。「じ。

ぢん-せい 塵世【名】おくわん(塵寰)に同

ぢん-せい 陣勢【名】陣を張りたる樣子。陣の備へ方。陣の威勢。「と。

ちんせい-ぐ 鎭星供【名】土星を祭ること。

ちんぜいきうこく-ぶぎやう 鎭西九國奉行【名】ちんぜいぶぎやう(鎭西奉行)に同じ。

ちんぜい-けいごばん 鎭西警固番【名】鎌倉時代の職制の一。文永・弘安以來の設置にして、九州諸國の諸將士をして、博多その外、九州の要衝なる地を守護して、外寇に備へしめしもの。

ちんせい-ざい 鎭靜劑【名】(醫)『羅 Seda-tivum』神經作用を鎭靜するに用ふる藥劑。鴉片などの類。鎭痛劑・鎭劑痙もその一種なり。麻醉藥。鎭靜藥。

ちんぜい-しやうぐん 鎭西將軍【名】古昔設けられたる鎭西府の長官。

ちんぜい-しやうにん 鎭西上人【名】(人)しやうくう(性空)の敬稱。

ちんぜい-しゆご 鎭西守護【名】ちんぜいぶぎやう(鎭西奉行)に同じ。

ちんぜい-たんだい 鎭西探題【名】ちんぜいぶぎやう(鎭西奉行)に同じ。

ちんぜい-の-みや 鎭西宮【名】(人)かねながしんわう(懷眞親王)に同じ。

ちんぜいは 鎭西派【名】(佛)淨土宗の一派。法然上人の弟子聖光上人(筑後國善導寺の開山)より始まれるもの。鎭西流。次條參照。

鎭西派の六流【句】(佛)鎌倉光明寺の眞忠の弟子六人、分かれて六派となれるもの、卽ち、一に白旗派、二に名越派、三に藤田派、四に一條派、五に三條派、六に小幡派。

ちんぜいはちらう 鎭西八郎【名】(人)『爲義の八男にして、筑紫に流されしより いふ』みなもとのためとも(源爲朝)に同じ。

ちんぜいはちらう-ためともくわいでん 鎭西八郎爲朝外傳【名】(書)ちんぜいゆみはりづき(椿說弓張月)に同じ。

ちんぜい-ひきつけしゆう 鎭西引付衆【名】次條を見よ。

ちんぜい-ひやうぢやうしゆう 鎭西評定衆【名】鎌倉幕府の職制の一。鎭西引付衆と共に九州探題の政務を輔佐せし重職。

ちんぜいふ 鎭西府【名】㊀聖武天皇の天平十五年に始めて置かれたる九州地方の鎭臺。將軍・副將軍・判官・主典の四官を設けたり。天平十五年は、藤原廣嗣の叛後、太宰府の廢せられて、九州の地の一且太政官の治下に屬せし翌年にして、同十七年鎭西府廢せられて、太宰府の舊に復せり。㊁だざいふ(太宰府)の別稱。

ちんぜい-ぶぎやう 鎭西奉行【名】鎌倉幕府の職制の一。九州探題の設けらるる以前に、九州の政務を掌りしもの。源範賴・土肥實平の九國を鎭せしに始まり、天野遠景に至りて、奉行の名あり。後、少貳・大友の二氏その職を世襲せしが、九州探題を置かるるに及びて、その權これに歸し、職名も亦廢せられたり。鎭西九國奉行。鎭西守護。

ちんぜいふ-しやうぐん 鎮西府將軍【名】鎮西府の長官。

ちんせい-やく 鎮靜藥【名】〔醫〕ちんせいざい(鎮靜劑)に同じ。

ちんぜい-ゆみはりづき 椿說弓張月【名】〔書〕爲朝の事蹟によりて作りたる繪入讀本(ホン)。前編・後編・續編・拾遺・殘編合はせて三十册。插畫は葛飾(カツシカ)北齋の筆。瀧澤馬琴の作。

ちんせい-らん 沈性卵【名】魚卵の、水より重くして、水底に沈降するもの。例へば、鮭鱒などの卵の類。

ちんぜい-りう 鎮西流【名】〔佛〕ちんぜいは(鎮西派)に同じ。

ちん-せき 枕席【名】枕と敷物と、卽ち寢道具。轉じて、寢室。

ちん-せき 枕席、隱かならず【句】臥病の人、病狀よからず。

ちん-せき 枕席に侍す【句】婦人が、男子に、同衾すること。

ちん-せき 枕席を薦(スス)む【句】前條に同じ。

ちん-せき 枕席を拂ふ【句】『戰國策に「今以二臣之凶惡一而得三爲二王拂一枕席一」とあり』同衾して臥す。

ちん-せき 陳跡・陳迹【名】ふるきあと。

ちん-せき 珍惜【名】めでをしむこと。大切にすること。

ちん-せき 枕藉・枕籍【名】ちんしや(枕藉)の誤讀。

ちん-せき 沈積【名】㊀水中に沈みつもること。㊁〔地〕『英 Deposition』水中にある物質が、水底に沈澱・堆積すること、又大氣が火山の噴出物又は砂礫などを吹送りて堆積せしむること。沈積作用。

ちんせきさよう 沈積作用【名】〔地〕前條㊁に同じ。

ちんせきじ 枕石寺【名】常陸國久慈(クジ)郡幸久(サク)村宇上河合に在る眞宗大谷派の寺。建久の頃、道田房の開基。

ちん-せつ 珍說【名】めづらしきはなし。珍談。

ちん-せつ 沈設【名】水中に設置すること。「海底電線の沈設」

ぢん-せつ 塵刹【名】〔佛〕ぢんぢんせつど(塵塵刹土)に同じ。

ちんせつ-すゐらい 沈設水雷【名】ふせつすゐらい(布設水雷)に同じ。

ちん-せん 賃錢【名】ちんきん(賃金)㊁に同じ。

ちん-せん 珍饌【名】めづらしき料理。結構なる食物。珍羞。

ちん-せん 沈潛【名】㊀水の底にものの澱むこと。㊁心のおちつきてあること。

ちん-ぜん 珍膳【名】めづらしき膳部。珍しき料理。珍饌。

ちん-ぜん 闐然【貌】突然、頭をさし出すさま。によっき。「沈。

ちん-ぜん 沈然【貌】しづかなるさま。沈

ぢん-せん 陣扇【名】ぐんばいうちは(軍配團扇)に同じ。

ぢん-ぜん 陣前【名】㊀陣屋のまへ。㊁軍隊のまへ。

んせんきって 賃錢切手【名】いうびんぎって(郵便切手)の舊稱。〔明治初年の語〕

ちん-そ 賃宇【名】手間賃を得て、麻をうむこと、又その宇。丹波與隼「わたくし仕事に、ちんそ績み」

ちん-そ 賃租【名】ちんそでん(賃租田)を見よ。

ちん-そ 陳訴【名】事情を陳(ノ)べて訴ふること。

ちん-そう 陳奏【名】事情を陳(ノ)べて奏上すること。

ぢん-そう 陣僧【名】陣中に伴ふ僧。足利時代に最も行はれたり。

ぢん-ぞく 塵俗【名】この世の、うるさきこと。世俗。世累。「塵俗を脫落す」

ちんそ-でん 賃租田【名】『賃は、恭季まづその地子を徵するをいひ、租は、秋季に至りて收むるをいふ』王朝時代に、公私の田を論ぜず一年の收穫を計り、値段を定めて、毎一箇年を限りて、賃貸し、稼穡せしめし田、卽ち一年限の賃貸をなしし田。今の小作に相當す。賃貸田。

ぢん-ぞなへ 陣備【名】さんだて(陣立)に同じ。

ちんだ 《葡 Vinho-tinto の略】【名】『tinto は赤色の義』昔、葡萄牙(ポルトガル)より舶來したる葡萄酒。天神記「ちんだ・淡盛・覆盆酒」今國姓爺、辮當に持たせしちんだの酒甕」

ちん-たい 沈滯【名】㊀とどまること。こだはること。㊁久しく下級・下位にありて、昇任せざること。㊂貨物の久しく賣れぬこと。㊃〔法〕債務を履行すべき期日となりても、怠りて果さざること。

ちん-たい 賃貸【名】〔法〕自己の物を、賃貸借により、報酬を受けて、他人にその使用又は收益を許すこと。(賃借に對して)

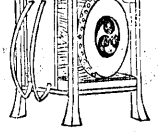
ちん-だい 鎭臺【名】㊀地方を鎭守する軍隊、又その兵營。㊁ちんだいふ(鎭臺府)を見よ。㊂しだん(師團)の舊稱。(最初東京・東北(仙臺)・大阪・西海(熊本)の四箇所を設け、明治六年に至り、增設して東京・仙臺・名古屋・大阪・廣島・熊本の六箇所とし、その長官を、始は鎭臺司令長官(少將)と呼び、十二年九月に至りて、鎭臺司令官と改稱し、二十一年五月に至りて、鎭臺を師團と改稱し、同時に長官を師團長と改めたり)㊃ちんだいへい(鎭臺兵)の略。

ぢん-だい 陣代【名】小祿の大名の陣屋を留守せし重き役人。陣代官。軍代。ぢんや(陣屋)參照。

ちんたい-かかく 賃貸價格【名】〔法〕賃貸物を賃貸して得る價格。賃價。

ぢん-だいくわん 陣代官【名】ぢんだい(陣代)に同じ。

ぢん-だいこ 陣太鼓【名】昔、陣中にて、軍勢の駈引を指示する合圖に打ちし太鼓。戰鼓。



(こいだんぢ)

ちんたい-しや 賃貸者【名】〔法〕ちんたいにん(賃貸人)に同じ。

ちん-たいしやく 賃貸借【名】〔法〕『英 Lease』當事者の一方が相手方に或物の使用及び收益をなさしむる事を約し、他の一方が之に對する報酬を支拂ふことを約すること。契約の期間は、二十年に限定せらる。

ちんたいしやく-けいやく 賃貸借契約【名】〔法〕前條に同じ。

ちんだい-しれいくわん 鎭臺司令官【名】ちんだい(鎭臺)㊂を見よ。

ちんだいしれいちやうくわん 鎭臺司令長官【名】ちんだい(鎭臺)㊂を見よ。

ちんたい-ち 賃貸地【名】〔法〕賃貸せる土地。かしち。

ちだいぢうれい 鎭臺條例【名】明治五年發布せられし東京鎭臺條例・大阪鎭臺條例・東北鎭臺條例、同六年廢止せるものと、同年及び同十二年これらを統一して、陸軍鎭臺に關し、その區劃軍紀等に關し規定せる條例。同二十一年現行の師團司令部條例の設置と同時に廢止せられたり。

ちんたい-にん 賃貸人【名】〔法〕賃借人より報酬を受けて、或物の收益使用を許したる人。かしぬし。賃貸者。

ちんだい-はんじ 鎭臺判事【名】ちんだいふ(鎭臺府)を見よ。

ちんだい-びやうゐん 鎭臺病院【名】鎭臺㊂に附屬せし病院。

ちんだいふ 鎭臺府【名】明治元年五月より七月までの間、江戸に設けられ、大總督の所管の下に、社寺・市政・民政の三裁判所を置きて、東國の政務を總管せし官廳。長官を鎭臺といひ、その下に鎭臺補ありて、補佐し、又その下に鎭臺判事ありて、事務の糺判を掌りたり。

ちんたい-ぶつ 賃貸物【名】〔法〕賃貸したる物品、卽ち賃借物を賃貸人より見ていふ語。

ちんだい-へい 鎭臺兵【名】鎭臺の兵士。今の近衞以外の各師團の兵。

ちんだい-ほ 鎭臺補【名】ちんだいふ(鎭臺府)を見よ。

ぢん-たいまつ 陣松明【名】陣中にて用ふる松明。

ちんだい-むし 鎭臺蟲【名】〔動〕なんきんむし(南京蟲)に同じ。

ちん-たう 陳套【名】きうたう(舊套)に同じ。

ちん-たう 珍島【名】〔地〕朝鮮半島の西南端にある島嶼。文祿年間朝鮮役の時、加藤嘉明、敵將李舜臣の爲に大敗せし處。

ちん-だう 椿堂【名】『だいちん(大椿)を見よ。ちやちん(香椿)參照』ちち(父)の異稱。(壹堂に對して)ちんけん(椿萱)參照。

ぢん-たう 陣刀【名】戰陣に使用する刀。ぢんがたな。

ぢん-だうふく 陣道服【名】昔、陣中にて、

鎧の上に著用せし道服。

ちんたお 青島【名】〔地〕『漢字の支那音。西人は Hingtau 又は Chingtao と書く』せいたう(青島)に同じ。

ちんたく 鎮宅【名】次條を見よ。

ちんたくふ 鎮宅符【名】火防(ひぜ)の呪法。

ちんたくふ 鎮宅符【名】火防(ひぜ)のために家に張る呪符。

ちんたち 陣立・陣起【名】次條に同じ。

ちんだて 陣立【名】一戰爭の準備として、軍隊を配置すること。ぢんぞなへ。そなへだて。そなへ。排陣。陣列。布營。二竹三本を寄合はせて、三脚柱を作り、下部を擴げて、中央の交叉點より釜などを吊下ぐるやうにするもの。

ちんたひ 茅渟鯛【名】〔動〕『ちぬだひ(茅渟鯛)の訛』くろだひ(黒鯛)に同じ。「こと。

ちんたふ 陳答【名】事情を陳(の)べ答ふること。

ちんだん 珍談【名】めづらしき話。

ちんだんこ 【名】〔動〕こあぢ(小鯵)を云ふ。〔相摸國の方言〕

ちんち 沈澱【名】水底に沈めおちつかし

ちんち 陣地【名】一軍隊を配備したる地。陣どる場所。ぢんば。二〔兵〕攻者又は守者がその目的を達するために占領する地域。

ちんぢ 沈地【名】沈香の木を木地としたるもの。「言」

ちんぢ 【名】ちぢ(祖父)を云ふ。〔土佐國の方言〕

ちんちく 【名】一次條の話より轉用せるもの』身の丈の低き人。ちんちくりん。ちよびすけ。〔俚語〕二〔植〕はちく(淡竹)に同じ。「ささ。

ちんちく 【貌】『ちっくりを見よ』身の丈の低たる春縫のところを摘みて、帶にはさむこと。ぢんぢんばしより。あづまからげ。おしよぼからげ。おちよぼからげ。

ちんちく 【名】一次條に同じ。〔俚語〕二〔兵〕攻者又は守者がその目的を達するために占領する地域。

ちんちく 【貌】『ちんぜん(沈然)を見よ』おもおもしくしづかなるさま。(更けゆく夜、盛んに茂れる木などの形容に用ふ)「夜色、沈沈たり」

ちんちく 陳陳相因る【句】『史記の平準書に「漢興七十餘年之間、國家無事…太倉之粟、陳陳相因、充溢露積於外、至腐敗不可レ食」とあり』ひね米の相重なれるより、轉じて、事の陳腐なるに譬へていふ。

ちんちく 陳陳【貌】『いちぢん(一陣)を見よ』風のふきしきるさま。

ちんちく 陳陳【貌】一湯の沸く音の形容。二鈴(リン)などの鳴る音の形容。

ちんちく 陳陳【名】多くの陣。每陣。

ちんちく 陳陳【名】『ちんぜん(沈然)を見よ』おもおもしくしづかなるさま。(更けゆく夜、盛んに茂れる木などの形容に用ふ)「夜色、沈沈たり」

ちんちく 【名】一ちんちんかもかもの略。〔俚語〕二ねたむこと。やきもち。嫉妬。(男女の間にいふ)〔俚語〕三ちんぼ。ちんちこ。陰莖。〔小供の語〕四犬をして、體を起立し、前脚二本を上げて、人を招く狀をなさしむるもの。

ちんちく 【貌】一湯の沸く音の形容。二鈴(リン)などの鳴る音の形容。

ちんちく 陳陳【名】多くの陣。每陣。

ちんちく 陳陳【貌】『いちぢん(一陣)を見よ』風のふきしきるさま。

ちんちく 【名】男女の仲の睦じきこと。ちんかも。〔俚語〕

ちんちく 【名】男女の仲の睦じきこと。ちんかも。〔俚語〕

ちんちく 【名】一ちんちんかもかもの略。〔俚語〕二ねたむこと。やきもち。嫉妬。(男女の間にいふ)〔俚語〕三ちんぼ。ちんちこ。陰莖。〔小供の語〕四犬をして、體を起立し、前脚二本を上げて、人を招く狀をなさしむるもの。

ちんちく 【名】前條に同じ。

ちんちく 【名】前條に同じ。

ちんちく 【名】〔佛〕『せつど(刹土)を見よ』無量無數の世界。十方微塵世界。塵刹。太平記「或時は本地の神に歸りて、塵塵刹土の利生をなしたまふ」

ちんちく 【名】はやし(囃子)を云ふ。〔小供の語〕

ちんちく 【名】ちんちん端折【名】ちんちばしより(ぢんぢ端折)に同じ。

ちんちく 【名】ちんちばしより(ぢんぢ端折)に同じ。

ちんちく 【名】ちちばば(祖父祖母)の訛。〔小供の語〕

ちんちく 【名】ちんちん節【名】小唄の節の一。歌の中にちんちんといふ囃詞(はやし)あるもの。松の葉「ちんちんぶし…沖のちんちん千鳥がはね打ちちがへの戀衣」

ちんちく 【名】小供の遊戲の一。片足を後方に擧げ、他の片足にて、飛びあるくこと。ちんがらこ。ちんがらく。つんがらもんがら。ちんちんもんがら。ちんちんもがら。ちがちが。〔俚語〕

ちんちく 【名】前條に同じ。

ちんちく 【名】〔佛〕わくごうでう(和光同塵)に同じ。太平記「塵塵和光の靈庇嗣、天心浸レ秋曹源地」

ちんちく 沈丁【名】〔植〕次條の略。

ちんちく 沈丁花・瑞香【名】〔植〕瑞香(ずいかう)科に屬する灌木。高さ五六尺ばかりに至る。枝幹しげりて三叉をなし、葉は互生して、冬も凋まず。春、丁子の如き香氣ある白色もしくは紫赤色の花むらがり開く。觀賞用として栽培せられ、樹皮の纖維は、製紙の材料となる。こせうのき。きちやげじ。

ちんちく 瑞香科【名】〔植〕ずいかう(瑞香科)に同じ。

ちんちく 沈丁草・瑞香草【名】〔植〕瑞香(ずいかう)科に屬する一年生の草本。葉は小さく、線形なり。花は細小、集まりて、疎なる總狀花序をなす。果實は乾燥果。亞細亞の東部及び波斯(ペルシ)に產す。

ちんちく 沈丁子【名】〔植〕ちんちやうげ(沈丁花)に同じ。

ちんちく 沈著【名】『著は橫著瞞著などの著と同じく接尾語』落ちつきてあること。輕率ならざること。沈重。

ちんちく 塵埃【名】一塵埃のなか。二汚れたる物事のなか。三ちんくわん(塵寰)に同じ。

ちんちく 陣中【名】一陣屋のうち。二戰爭の間。いくさば。戰場。

ちんちく 陣中の候【句】昔、行軍に先だちて、陣中の整理如何を檢せしめしこと。(遠候、中候に對して)

ちんちく 淨頭【名】〔佛〕禪家にて、厠を司る役。せいちん(西淨)とうちん(東淨)參照。

ちんちく 塵除【名】てんじやう(天井)に同じ。しやうぢん(承塵)參照。

ちんちく 珍重【名】一『學山錄に「俗間書牘有二珍重語一、此有レ所レ本、唐文粹載裴度寄二李翺一書末云、開猶希二尺牘一、珍重珍重、力書無レ餘、また璨朝聘曰、珍重祝二人保養自重如二珍寶一也」とあり』めづらしがること。珍しとて大切にすること。二めでたしとて悦び祝ふ語。重雛子「お留守何事なく、珍重に存じまする」三〔文〕ながてん(長點)を見よ。四身を大事にすること。自愛自重すること。

ちんちく 珍重胡旋(こせん)ふ【句】櫨門にへつらふ。櫨勢ある人にへつらふ。

ちんちく 珍重がる【動四他】めづらしく思ふ。だいじがる。一代女「これを珍重がりて、好く人あり」

ちんちく 沈澄池【名】水道の設備中、淨水工事に屬する一種の貯水地。水源の水を、この池の上部より導き、一日間も澄ませ、また水面に近き口より濾池に送る。沈澱池。

ちんちく 【名】平なる小石を投げて、水の上を走らすること。水を縫ふが如くに小石を投飛ばすこと。てふま。〔俚語〕

ちんちく 【名】〔動〕『次の語の意より轉じていふ』まつむし(松蟲)一の異稱。

ちんちく 【名】〔動〕『まつむし(松蟲)一の異稱。

ちんちく 【名】三味線の調子。かはりちんつ(變ちんつ)參照。

ちんちく 【名】〔醫〕產氣づきたる時、妊婦の腹の痛むこと。むしかぶり。こうぢんつう(後陣痛)參照。

ちんちく 【名】〔醫〕『獨 Bohnerzstillende Mittel』鎭靜劑の一。患部に疼痛を感ずる際、一時神經を鈍らしめて、その感受性を輕減する用に供するもの。鎭痛藥。

ちんちく 【名】〔醫〕前條に同じ。

ちんちく 賃搗【名】賃錢を取りて、米餅などを搗くこと。

ちんちく 【名】戰亂暴動などのしづまりさだまること。又これ等をしづめさだむること。平定。

ちんちく 塵泥【名】一ちりと、どろと。塵土。二ちんど(塵土)一に同じ。

ちん-てう 珍鳥【名】めづらしき鳥。若鳳「只今までのほととぎすがまゐると申し上ぐれば、御機嫌限なし。近所に有合ふ人も、これ珍鳥と申す」

ちん-てう 鴆鳥【名】〔動〕ちん(鴆)㊀に同じ。大鏡「鴆鳥海に隠れて、鯨を害す」

ちん-でき 沈溺【名】㊀しづみおぼるること。㊁『司馬相如の難蜀父老』と題する文に「拯二民於沈溺一とあり」溺るるごときくるしみ。㊂ふけること。惑溺。耽溺。

ちんてき-しやうぐん 鎮狄将軍【名】古、蝦夷征討のために派遣せられたる軍隊の大将。しやうぐん(将軍)㊀参照。

ちん-てん 枕簟【名】枕と、たかむしろと。

ちん-てん 沈澱【名】㊀水に沈みよどむこと。をどみ。㊁〔化〕『英 Precipitate』液中の微細なる粒物液底に沈下すること、又は二つ以上の溶液を混ずる時、化學作用の結果、不溶解性の物質の沈下すること。

ちん-でん 塵點【名】〔佛〕ちんでんごふ(塵點劫)の略。譬喩(巻楽)「過去、塵點の如くにて、黄泉中有の旅の空」

ちんてん-あいならせう 塵添埃嚢抄【名】〔書〕世俗の言辞の出所及び俗間の古事を考へ記せるもの。二十巻。著者不詳。

ちんてん-がん 沈澱岩【名】〔鑛〕『英 Sedimentary rocks』すゐせいがん(水成岩)に同じ。

ちんてん-くわうぶつ 沈澱鑛物【名】〔鑛〕『英 Hydatogene minerals』天然水の溶液の中に含まれし物質の沈澱して成りたる鑛物。例へば、明礬・石膏・岩鹽等の類。

ちんてんくわんがいはふ 沈澱灌漑法【名】『英 Warping or Silting irrigation』下水などを耕地に注ぎ入れ、その中に含有する固形物を沈澱せしめて、肥料となす法。

ちんでん-ごふ 塵點劫【名】〔佛〕どひやくちんでんごふ(五百塵點劫)・さんぜんちんでんごふ(三千塵點劫)を見よ。

ちんでんざい 沈澱劑【名】『Precipitant』液中に含有する物を沈澱物に變ずる目的にて加ふる藥劑。

ちんでんち 沈澱池【名】ちんちようち(沈澄池)に同じ。

ちんでん-ばこ 沈澱函【名】『英 Precipitation box』青化法にて用ふる函。函中に亜鉛屑を裝入し、金銀鑛石より青化液を以て滲出せる含金銀溶液を盛り、金銀を亜鉛屑にて採取するに用ふ。亜鉛函。

ちんでん-はふ 沈澱法【名】㊀『英 Sedimentation』上水又は下水中に含有する微物浮遊固形物を沈澱せしめ、水を清淨ならしむる方法。㊁『英 Lixiviation process』冶金術にて、鑛石又は中間冶金産物を、種種の方法を以て處理し、目的の金屬を可溶性となし、或特種の液體を以て、該當金屬の溶液を造り、更に沈澱劑を用ひて、目的金屬又はその化合物を沈澱せしめて抽收する方法。

ちんでん-ぶつ 沈澱物【名】沈澱したる物。よどみもの。おり。

ちん-てんま 賃傳馬【名】江戸時代に、一定の賃錢を出して雇ふ傳馬。

ちん-と【副】㊀ちやんとに同じ。〔大阪の語〕「膝栗毛」ほんに、ちんときらしておきました」㊁いささか。すこし。ちっと。〔陸奥國の方言〕

ちん-と 塵土【名】㊀ちりと、つちと。塵泥。泥土。

ちん-とう 枕頭【名】ちんべん(枕邊)に同じ。

ちん-とう 陣頭【名】㊀陣ぞなへの前。㊁軍陣のさき。「馬を陣頭に進む」㊂古の禁中にて、衛士の詰所の前。㊃陣の座にて、人人列座の席上。「の方言」

ちん-どう 【名】たつべ(竹瓮)を云ふ。〔河内國〕

ちんとう-しやうぐん 鎮東將軍【名】㊀奈良朝時代に、東鄙の蝦夷征討の事に任ぜし將軍。副將軍を併せ置かれしが、養老以後は征夷使又は征東使等の名稱を用ふるに至れり。㊁ちんじゆふしやうぐん(鎮守府將軍)の唐名。

ちん-どく 鴆毒・沈毒【名】鴆といふ鳥の毒、又それに似たるはげしき毒。ちん。ちん(鴆)㊀参照。

ちんとくせん 沈徳潜【名】〔人〕しんとくせん(沈徳潜)の誤讀。

ちん-とやく 鎮吐藥【名】嘔吐を止めしづむる藥。例へば、鹽酸コカイン・薄荷腦等の類。

ちん-とり 賃取【名】働きて賃を取ること。

ちん-とり 陣取【名】㊀陣どること、又陣どりたるさま。㊁周圍に篠(ささ)垣をめぐらしたるのみなる陣營。㊂小供の遊戯の一。總勢二組に分れ、各陣地を定めおきて奪ひあふもの。

ちん-どる 陣取る【動四自】㊀陣を取る。陣を張る。陣を布く。㊁その場所を占む。「二階に陣どる」

ちんな 陣那(梵 Dinnāga)【名】〔人〕『大域龍と譯す』南印度の高僧。世親菩薩の弟子。因明正理門論の著者。新因明の開祖たり。

ちん-ない 陣内【名】陣營の中。

ちんなん-ぽ 鎮南浦【名】〔地〕朝鮮平安南道にある開港場。大同江の河口より上流二里餘の北岸。平壌の南十五里。水深くして、巨船を泊するに足り、商業盛んなり。

ちん-にふ 闖入【名】まつしぐらに押入ること。あばれ入込むこと。

ちん-ねん 塵念【名】ちんしん(塵心)に同じ。

ちんねりや【名】〔植〕しねりやの俗稱。

ちん-のざ 陣の座【句】ちん(陣)の條下を見よ。

ちん-のさだめ 陣の定【句】ちん(陣)の條下を見よ。

ちんの-しろ 陣の城【句】ちん(陣)の條下を見よ。

ちんば 跛【名】㊀片足蹇へて、歩むに見苦しきこと、又その人。びっこ。〔趁跛〕㊁對(ツイ)にてあるべき物の形狀・大小・長短の揃はぬこと。かたびっこ。かたちんば。〔俚語〕

ちんば 跛が道に後れたやう【句】成効の目的なきを譬へていふ。〔諺語〕

ちんば 跛も旅心(コヽロ)【句】「蹇(カン)起つことを忘れず」に同じ。〔諺語〕

ちんば 跛も引樣(ヒキヤウ)【句】物事は道方による。

ちんば 跛を曳く【句】跛㊀の歩み方をなす。びっこをひく。〔狂言記・梟〕「ちんばひきながらまちんを買ひに來る」

ちんば 陣場【名】陣を取る場所。陣を設けたる場所。

ちんばう 賃房【名】賃貸するへや。かし。

ちんばう 珍寶【名】めづらしき寶。世に稀なる寶。

ちんばう 珍報【名】㊀めづらしき報知。㊁他人よりの返書の敬稱。

ちんばう 陣防【名】陣の防禦。

ちんばう 陣亡【名】せんし(戰死)に同じ。

ちんばおり 陣羽織【名】昔、陣中にて、鎧具足の上に著用せし服。裂・羽織に似て、袖なく、多くは、絹・羅紗などにて仕立て、刺繍を施せるもあり。ぐそくばおり。押羽織。單甲。

(りおばんぢ)

ちんばこ 沈箱・沈麝【名】沈香などの香木を納むる小函。「ること。

ちん-はた 賃機【名】賃金を取りて機を織

ちんばなれ 陣離【名】陣を離れ去ること。

ちんばに《英 Tympani》【名】西洋樂器の一。太鼓の一種。半球狀の銅製の胴を有し、上面を平らに張りたるもの。專ら管絃樂に用ひらる。

(にばんち)

ちんば-ふ 陣法【名】陣だて、又は陣取の方法。軍法。

ちんばふはかせ 陣法博士【名】陣法に通曉せる人。兵學者。軍學者。

ちんばん 鎮藩【名】藩屏となりて、一地方をさむる者。大名。諸侯。

ちんばんじい《英 Chimpanzee》【名】〔動〕くろしやうじやう(黒猩猩)に同じ。

ちんばら ちん腹【名】『ちんぶりを見よ』いちづに腹だつこと。むかっぱら。〔俚語〕

ちんばらひ 陣拂【名】陣を引拂ふこと。軍勢を引きあぐること。文武五人男「寄鯨波どっとあげさせて、はや陣拂と聞えける」

ちんび 珍美【名】めづらしく美しきこと。

ちんぴ 陳皮【名】『陳(ふる)く久しきを貴ぶ』

によりて名づく』もとは柑子(カウジ)今は蜜柑の皮の乾したるを薬用に供する時の名稱。橘皮。

ちんぴ 珍祕 【名】めづらしがりて祕藏すること。

ちんぴき 賃引 【名】賃錢を取りて、絲を紡ぐむに使用する柄杓。

ちんぴしゃく 陣柄杓 【名】陣中にて水を

ちんぴねり 賃捻 【名】賃金を得て捻り造ること。 匿土產 渡世に江戸髷(マゲ)の賃びねりして」

「物。

ちんぴん 珍品 【名】めづらしき品物。珍

おんびらき 陳開 【名】陣を引拂ふこと。

ちんぶ 鎭撫 【名】とり鎭むること。あらだてずになつくること。

ちんぶ 陳腐 【名】ふるくさきこと。陳套。

ちんぷ 陳布 【名】しくこと。ならぶること。ふりまくこと。

おんぷ 陣夫 【名】軍用の夫役。「夫。

ちんぷ 賃夫 【名】賃錢を出だして雇ふ人

ちんぷく 鎭伏 【名】しづめふすること。亂民などをしづむること。

ちんぶし 鎭撫使 【名】一 亂民などを鎭むるために特に差遣さるる使節。二 聖武天皇の時、國郡司の治績を巡察して、その可否を奏聞し、非違・凶徒の搜捕・檢斷をなさしむるために、諸道に設けし職。

ちんぶつ 珍物 【名】めづらしき物。珍品。 國姓爺合戰「珍物奇觀のささげもの」

ちんぶん 珍聞・椿聞 【名】めづらしき風聞。

ちんぶん 珍糞 【名】**ちんぶんかん**(珍糞漢)の略。

おんぷん 塵氛 【名】ちりほこり。

ちんぷんかん 珍糞漢 【名】一 用語の堅くるしくして、わかりにくきこと。ちんぷんかんぷん。 娘歌加留多「耳に口よせ、小聲になり、利劍即是彌陀號、一稱正念在皆成、此文を三遍唱へ討ち給へ、…いや三遍は偖置き、一遍も覺えられず、小むづかしいちんぷんかん、どうぞ短い覺え易い文句はないか」二 物事のわけの分らぬこと、又その人。沒分曉漢。〔俚語〕

ちんぷんかんぷん 【名】 前條に同じ。〔俚語〕

ちんぷり 【名】 『ちんぱら(ちん腹)及びぷりぷりを見よ』不快を感ずる時、怒り默すること。〔駿河國・伊豆國の方言〕

ちんぷりを掻く 【句】 ちんぷりをなす。〔駿河國・伊豆國の方言〕

ちんぷりかき ちんぷり掻 【名】 ちんぷりをなし易き人。〔駿河國・伊豆國の方言〕

ちんぷれ 陣觸 【名】一 出陣の命令。二 陣中にて出す布令(ヲフレ)。

ちんぺい 【名】 そでなし(袖無)一 を云ふ。〔京都・大阪の語〕

ちんぺい 陳平 【名】〔人〕支那前漢の功臣。陽武の人。謀略に秀づ。曲逆侯に封ぜられ、文帝の二年に歿す。

ちんぺい 陣兵 【名】古、諸國より徵發して、陸奥・出羽兩國の守備に差遣せし兵。

ちんぺう 塵表 【名】一 塵俗の外。二 〔佛〕ぶつだう(佛道)の異稱。

ちんべん 陳辯 【名】事情を陳(ノ)べて辯解すること。「百方陳辯すれども、聽かれず」

ちんぺん 陳編 【名】古き書籍。古書。

ちんべん 枕邊 【名】まくらべ。まくらもと。枕頭。枕上。

ちんぽ 賃舖 【名】かしだな。貸見世。

ちんぽ 中棒 【名】男の陰部。ちんこ。ちんぼこ。ちんぼう。ちうぼう。男根。陰莖。〔小供の話〕 浦島年代記「總身は朱塗、ちんぼまで、唐辛ともいっつべし」

ちんぼう 中棒 【名】前條に同じ。〔小供の話〕

ちんぼく 珍木 【名】珍しき樹。

ちんぼこ 陰莖 【名】**ちんぽ**(中棒)に同じ。

ちんぼつ 沈沒 【名】水中にむぐり入ること。

おんぼつ 陣沒・陣歿 【名】**せんし**(戰死)に「同じ。

ちんぼん 珍本 【名】容易には手に入りがたき書籍。珍書。

ちんまい 陳米 【名】貯へふるしたる米。ひねまい。ぼんぼちまい。古米。

おんまう 塵網 【名】一 塵事の吾人を束縛するを網に譬へていふ語。二 〔佛〕六塵の吾人を束縛するを網に譬へていふ語。

おんまく 陣幕 【名】陣中に張り用ふる幕。

ちんまく-きうごらう 陣幕久五郎 【名】〔人〕横綱力士。出雲國の人。秀の山の弟子。慶應二年西大關に上り、東の不知火と並んで、横綱を張る。烏津家に抱へられたり。

おんまはり 陣廻 【名】味方の陣所を見廻ること、又その役の者。

ちんまり 【貌】 『ちぢまる(縮まる)の意』引締りて小さきさま。つづまやか。こぢんまり。つんまり。ちんまり。〔俚語〕

ちんみ 珍味 【名】めづらしき味の食物。うまきもの。珍饌。珍膳。

おんみの 陣蓑 【名】陣中にて使用する蓑。

おんみらい 塵未來 【名】塵劫(ヂン)の未來。永劫。盡未來。 心中宵庚申 塵未來まで女夫女夫」

ちんみり 【貌】 **ちんまり**に同じ。

おんむ 塵務 【名】**ぞくむ**(俗務)に同じ。

ちんむるゐ 珍無類 【名】非常にめづらしきこと。

ちんめう 珍妙 【名】一 めづらしくすぐれたること。二 異樣にして可笑しきこと。

ちんめう 【名】 〔植〕**まくはうり**(甜瓜)を云ふ。〔佐渡國の方言〕

ちんめん 沈湎 【名】酒に耽ること。ゑひ沈むこと。ゑひ潰るること。沈醺。沈醉。

ちんもく 沈默 【名】一 沈著にして寡默なること。二 だまりてあること。

ちんもち 賃餠 【名】年の暮などに、賃錢を取りて、餠を搗くこと、又その餠。

ちんもん 陣門 【名】陣屋の出入口。軍營の入口。軍門。轅門。

ちんもり 沈盛 【名】『そのさま沈香に似たるよりいふ』鮫の干物を削りて、土器に盛りて出だす料理。

ちんや 陣屋 【名】一 **ちん**(陣)二 に同じ。二 **ちん**(陣)三 に同じ。又そこに詰め居る衙士(ヤクニン)。 枕 北の門より、女房の車ども、陣屋の居ねば入りなんやと思ひて」三 城を築く格式に至らざる小諸侯(概ね一萬石以上五萬石以下)又は郡代・代官などの廳所。四 瀉瑠璃「一谷嫩軍記」中の熊谷陣屋の段の略稱。

ちんやく 沈約 【名】〔人〕**しんやく**(沈約)

おんやもち 陣屋持 【名】城を築く格式に至らざる小諸侯の俗稱。**ちんや**(陣屋)三 參照。

ちんゆう 沈勇 【名】沈著にして勇氣あること。

ちんよう 賃傭 【名】賃金を取りて、他に傭はるること。ちんとり。

おんよく 塵慾 【名】〔佛〕六塵の慾。

おんらう 塵勞 【名】一 塵事の煩勞。世のうるさき交。二 〔佛〕**ぼんなう**(煩惱)に同じ。「塵勞を出離す」

ちんらく 沈落 【名】次條に同じ。 右大將鎌倉實記「主君九郎判官殿御沈落を助くる惠、追付愁眉を申開き、御連枝御和睦相整はば、國郡を以ても、此恩を謝せらるべし」

ちんりん 沈淪 【名】一 沈みて浮ばぬこと。沈落。二 おちぶれはつること。身の立たぬこと。淪落。 傾城反魂香「雲谷不破が不屆故、元信我等兩人、永永沈淪致せし所」

ちんりん-ぺい 陳臺米 【名】久しく倉中にありて、ふけたるひねごめ。ぼんぼちまい。陳倉米。

おんりよ 塵慮 【名】**ちんねん**(塵念)に同じ。

おんりよ 陣旅 【名】**ぐんりよ**(軍旅)に同じ。

ちんれい 椿嶺 【名】『椿はだいちん(大椿)の義』**はこやのやま**(蓬姑射山)に同じ。

ちんれつ 陳列 【名】ならべたつること。ならべ置くこと。

おんれつ 陣列 【名】陣の排列。ぢんだて。

ちんれつ-がかり 陳列係 【名】物品の陳列に關する事務を擔當する者。

ちんれつ-しつ 陳列室 【名】物品の陳列をなすための室。

ちんれつ-じょ 陳列所 【名】物品の陳列をなすための場所。陳列場。

ちんれつ-だな 陳列棚 【名】人の目に附きやすきやう、物品を陳列し置く棚。

ちんれつ-ぢやう 陳列場 【名】**ちんれつじょ**(陳列所)に同じ。

ちんれつ-ば 陳列場 【名】前條に同じ。

ちんれつ-ひん 陳列品 【名】陳列してある物品。

ちんれつ-まど 陳列窓・陳列窗 【名】『英

Show window』商店などにて、商品を陳列して、往來の人の目を引くために、街路に面して設けたる硝子窓。

ちん-わきざし 陣脇差 【名】陣中にて帶ぶる脇差。

ちん-わた 賃綿 【名】賃錢を取りて、綿を繰ること。

ちん-わん 枕腕 【名】書法の一。左手の甲に右手を乘せて文字を書くこと。(懸腕・提腕に對して)

ちん-ゐけい 沈惟敬 【名】〔人〕しんゐけい(沈惟敬)を見よ。

ちんゐさい 鎭帷扉 【名】官門の扉又は簾ノ帳の裾などのあふりを防ぐためのおもし。

ちん-ゑ 鎭衛 【名】しづめまもること。鎭護。太平記「萬乘の聖主を鎭衛し給ふ瑞光なり、暫くも猶豫あるべからずとて」

おん-ゑ 塵穢 【名】おんを(塵汚)に同じ。

ちん-ゑい 鎭衛 【名】ちんゑ(鎭衛)に同じ。

おん-を 塵汚 【名】ちんくわい(塵穢)に同じ。

ちん-をく 賃屋 【名】賃貸借の家屋。かしや。かしいへ。借家。

ちーめ 血眼 【名】のぼせのために充血する「眼病。

ちーめい 致命 【名】命を差出だすこと。命を擲つこと。「士」

ちーめい 知名 【名】名だかきこと。「知名の士」

ちーめい 知命 【名】一『易經の繫辭に「澤無レ水困、君子以致レ命遂レ志」とあるに本づく』天命を知ること。二『論語の爲政篇に「五十而知二天命一」とあり』次條に同じ。

知命の年 【句】『潘岳の閑居賦に「自二弱冠一涉二乎知命之年一、八徙二官而一進二階一」とあり』年齡五十をいふ。

ちーめい 地名 【名】土地の名稱。所の名。

ちーめい 遲明 【名】あけがた。黎明。

ちーめいーかう 地名考 【名】〔書〕我が國の地名を列擧して考證したるもの。十一卷。內山眞龍(マヲク)の著。

ちめいじおん-てんようれい 地名字音轉用例 【名】〔書〕我が國の地名に、字音を假用したる、その用法を述べたるもの。一卷。本居宣長著。

ちーめい-しやう 致命傷 【名】死ぬる原因となりたる傷。

ちーめう 知妙 【名】〔植〕次條の略。 運少色葉集「知妙 チメウ」

ちめう-うり 知妙瓜 【名】〔植〕瓜の一種。

ちめう-した 知妙舌 【句】驚きたり。「下總國の方言」

ちめーぐさ 血目草 【名】〔植〕『血眼に效あるよりいふとぞ』をみなへし(女郎花)に同じ。「古語」 和名、敗醬、知女久佐」

ちーめだま 血目玉 【名】ちまなこ(血眼)に同じ。

ちーめん 恥面 【名】はぢづら。はぢ。

ぢーめん 地面 【名】一地の表面。二一區域に限れる田地又は宅地。地所。

ぢめんしよん (英 Dimension) 【名】〔理〕或量の數値を基本單位より算出すべき一般式。長さを l、質量を m、時間を t にて示すが普通にて、例へば、速度(v)は、距離(長さ)と時間との比なるを以て、その「デメンション」は $(v)=\frac{l}{t}=lt^{-1}$ 又加速度(a)は速度と時間との比なるを以て、そのデメンションは、$(a)=\frac{v}{t}=lt^{-2}$ なる類。

ぢめん-つき 地面附 【名】建物の外に、地面までも添はりてあること。地所附。

ぢめん-とりあげ 地面取上 【名】江戸時代に年限を定めて、土地を政府にて沒收せしこと。御定書百ヶ條「、質置主年貢諸役勤候分質取候者、地面取上」

ぢめん-もち 地面持 【名】地所を所持せること、又その人。

ちーも 乳母 【名】ちおも(乳母)の略。「古語」萬葉「くやしくも老いにけるかなわがせこがもとむるちもにゆかましものを」「ど。

ちーも 知母 【名】〔植〕はなすげ(知母)に同じ。

ちーもく 地目 【名】〔法〕土地をその性質につきて區別したる種目。例へば、田畑・山林・原野などの類にして、第一類地・第二類地の二種に概括す。**ちもく(地類)**二參照。

ぢーもく 除目 【名】『除は官に拜する意。目は目錄、卽ち官に除し、目錄に記する意。ちもく(除目)參照』古、大臣以外の諸臣の任官式。日を定めて、淸涼殿の御座前にて行ひ、攝政の時には、その直廬(ヂキ)に於て行ふを例とす。左大臣一ノ上として、執筆となり、事故ある時は、右大臣これに代はる。大納言・參議・外記・藏人これに與る。 拾遺「ちもくのあしたに、命婦左近がもとにつかはしける」 公事根源「此除目につけて可レ知事どもは、十年の學にもきはめがたく、百丈の紙にも書きのべがたし。されば先達に不レ習しては、輒くつとむべき事ならんや」

縣召(アガタ)の除目 【句】古の地方官の任官式。正月十一日より十三日までに行はれたり。春の除目。 「ど。

秋の除目 【句】「司召(メシ)の除目」に同じ。

一分召(イチブ)の除目 【句】國司の史生(シジヤウ)等を任ぜし除目。毎年大抵二月に行はれたり。 「ひし除目。

兼官の除目 【句】兼任のために特に行ふ。

大嘗會國司の除目 【句】大嘗會(ダイジヤウエ)に際し、その官人を特に任ぜし除目。

司召(メシ)の除目 【句】昔の在京官吏(但し大臣以外)の任官式。始は毎年春行はれしが、後には概して秋行はるるに至りしより、「秋の除目」ともいへり。京官の除目。內官の除目。

追儺(ツヰナ)の除目 【句】一次條に同じ。二臨時の除目の一。十二月晦日、追儺の儀の時行はれ、春秋の除目の時、故障ありし者の任官を行ひしもの。平家「安元元年十二月二十九日追儺の除目に、加賀にぞなされける」

追儺召(ツヰナヘ)の除目 【句】小除目の一。十二月晦日の追儺の儀の際に行ひしもの。 「同じ。

內官の除目 【句】「司召(メシ)の除目」に對して、女官(ニヨウクワン)の除目。

女官の除目 【句】女官のために特に行ひし除目。毎年、多くは正月に行はれたり。

春の除目 【句】「縣召(アガタ)の除目」に同じ。

坊間の除目 【句】春宮(トウグウ)坊の官人を任ぜし除目。

臨時の除目 【句】期を定めず、臨時に行ひし除目。こじもく。

だいおもく(大地目)參照。

祭(マツリ)の除目 【句】毎年、三月乃至四月に、賀茂の祭のために、官人を任ぜし除目。

ちもしい (英 Timothy) 【名】〔植〕禾本(クワ)科に屬する多年生或は二年生草本。葉は細長にして、花は圓柱狀に密集し、穗狀花序をなす。近時西洋より輸入せる牧草なり。おほあはがへり。 「持ちたる女。

ちーもち 乳持 【名】乳汁のよく出づる乳を

ちーもち 地持 【名】〔動〕形、蛇に似、地中に棲みて、土をもちあぐといふもの。

ぢーもつ 持物 【名】佛が必ず定まりて持ち居る物。例へば不動が劍と索とを持ち、如意輪觀音が如意寶珠を持てる類。

ちーもと 千本 【名】一幾本もかずかぎりなくあること。せんぼん。 夫木「同じくはちもとを引かん姫小松君が齡はかずにまかせて」 二〔植〕わけぎ(分葱)に同じ。

ぢーもの 地物 【名】その土地より產する物。

ぢーもの 地者 【名】普通の女。良家の女。ぢをんな。(遊女などに對して) 浮世風呂「地者好みのぼろかひといふ者が、性わるでいかねえものさ」

ちーもん 地文 【名】ちぶん(地文)に同じ。

ぢーもん 地紋 【名】一製作品の地の模樣。二布帛の地に織出したる文樣。織文(シヨク)。三昔、官服の制にて、織文に等品を定めて、高下を辨別せり。(染文に對して)

ちもん-がく 地文學 【名】ちぶんがく(地文學)に同じ。

ちもん-しや 地紋紗 【名】地を透かして紋柄を詰めて織出せる紗。

ちもん-ぬり 地紋塗 【名】諸種の色漆を用ひて、種種なる紋樣を塗出すこと、又その塗方の物。

ぢーもめん 地木綿 【名】我が國各地にて產する木綿布の、まだ晒さざるもの。きもめん。

ちーもらひ 乳貰 【名】兒を育つるために、他人の乳を貰ふこと。 柳樽「乳もらひに今來なさいと御用いひ」

ちもらん 知母蘭 【名】〔植〕百合(ユリ)科に屬する常綠灌木。觀賞用として近年舶載す。高さ四五尺より一丈に及ぶ。樹皮は粗にして、葉は剛く厚く、全緣の長披針形をなし、尖端劍狀をなす。花は夏季圓錐花序をなし

て開く。せんじゆらん。きんほうらん。

ちーもり 道守【名】一道路を守るもの。二道路を巡りて、非行を警めしこと、又その人。今の巡査の如きもの。〔古語〕和名抄「道邏・知毛利」

道守の神【句】道路の守護神。手向の神。ちまたの神。

ちもり 乳守【名】〔地〕和泉國堺にありし遊女町。二代男「堺のやさ男、逢うたこそ一景、朝夕の新町よりはと、乳守に誘はれ」本朝三國誌「妓も情の名にし負ふ、里はちもりに幾萬人。ひぞり大盡粋な客」守貞漫稿「津守今俗乳守と云、何れか是なる。住吉の社務は津守姓也、又地名に津守浦と云もありしかと覺ゆ。然らば津守を是とす歟」

ち-もり 地守【名】他人の所有地を守る人。地所の番人。

ちゃ 茶【名】『漢字の朱音』一〔植〕山茶(サンチャ)科に屬する常綠灌木。昔、支那より移しうゑたるもの。高さ四五尺に達す。初夏に至りて新葉生じ、これを製して飲料とす。葉は形長楕圓にして鋸齒を有し、厚くして光澤あり。その味甘苦にして、芳しき香あり。秋の末に白色五瓣の花開き、尋いで實を結ぶ。我が國の外、支那、印度、爪哇(ジャワ)及び南米ブラジル等にて廣く栽培せらる。草人木(サクジン)。二春夏の交、茶の樹の嫩葉を摘み、蒸して焙(イ)り、飲料用としたるもの。製法により、綠茶、紅茶、磚(レンガ)茶、碾茶(ヒキチャ)等の種類あり。三葉茶を煎じたる飲料。四ちゃのゆ(茶湯)の略。五ちゃいろ(茶色)の略。六いろ茶屋に居るあそびめ。〔德川時代の語〕七ちゃかすこと。茶にすること。いい加減なことをいふこと。〔俚語〕精藤葉毛「人の心を知らずに、ちゃばっかり云はずと、醫者どのを呼んでくんなせえ」御存商賣物「錦繪は青本にほれたといふでもなけれど、爲にもなりさう故、相應に茶をいうて置きける故、繪そら事といひそめしなり」

茶に浮かさる【句】茶を飲みたるため、心氣亢奮して眠られず。

茶にす【句】ちゃかす。ひやかす。馬鹿にす。俗曲「糊來ぶし」心つくして送りし文(ブミ)も、主(ヌシ)は茶にして枕がみ」

茶と百姓とは搾るほど出る【句】茶はしぼる度に汁出で、百姓は責むる度に年貢を出す。〔諺語〕

茶に醉うたふり【句】そしらぬやうすをなすこと。〔諺語〕

「る陸羽の像。

茶の神【句】支那にて、茶を賣る者の祭

茶の下(シタ)【句】掛けたる茶釜の下。匿土産「火うち箱さがして、茶の下へたきつけ」

茶の錢(ゼニ)【句】ちやだい(茶代)に同じ。

茶の初穗(ハツホ)【句】茶を入れ、又は點(タ)てたる時の最初のもの。

茶を入れる【句】煎茶に湯を注ぎ、又は煮出して飲むやうにす。

茶を立つ【名】一抹茶を、湯にてほだつ。點茶。

二佛事をなす。

茶を濁す【句】その場をうまく胡魔化してすごす。目の前をまぎらかす。(主に接頭語のおを添へて用ふ)

茶を挽く【句】一『昔、碾茶(ヒキチャ)は多く雨の日又は徒然なる折などに自らひきたるよりいふ』つれづれなるさま。二妓女などが客なくしてひまなり。

菓子の茶【句】「飯後の茶」に同じ。

試(ココロミ)無き茶【句】つつみつめ(裏攻)に同じ。

飯後(ハンゴ)の茶【句】「飯後の茶會(チャカイ)」に同じ。

おや【助動】で有る。だ。「わけのない話ぢやが」「母ちや人」

おやあ【接】『次條の語より轉用せるもの』それならば。それでは。ではさらば。〔俚語〕「ちやあ、明日にしたまへ」

おやあ【助】ては の訛。〔俚語〕「そんな事しては、わるいおやあねいか」

おやあ-ちやあ【名】ちち(父)を云ふ。〔陸奥國の方言〕

ちや-あづき 茶小豆【名】〔植〕小豆の一品種。子粒大にして、褐色を帶ぶるもの。

ちやあばすーし チヤアバス紙(英 Charpas paper)【名】パステル畫の用紙。これを用ひて描く時は、繪具の剝落を防ぐことを得。その法、畫面を沸騰せる湯氣に數分間かざし、湯氣に濡れたる畫面が光澤を發するに至りて止むれば、繪具を定著せしむるを得。

ちやあふう【名】元も子もなくすこと。むなしくなすこと。ふい。八代目桃太郎「二色ながらちやあふうにして仕舞ふとは、飛んだ親父殿だ」

ちやい【名】擲ち棄つること。ばい。〔小供の語〕

ちやいにいすばあみりおん(英 Chinese vermilion)【名】水彩畫の繪具の一。强度の赤色を有す。

ちやいにいすほわいと(英 Chinese white)【名】油繪及び水彩畫の繪具の一。亞鉛の酸化物より製す。色白く、水彩畫に用ふれば、變色することなし。

ちやいん 鎖(英 Chain の訛)【名】そくりやうくさり(測量用鎖)の俗稱。「同じ。

ちやいり 茶煎【名】ちやはうじ(茶焙)(一)に同じ。

ちやいれ 茶入【名】茶を入れ置く小さき器。抹茶のは多くは漆器又は陶器にして、濃茶、薄茶によりて、その製同じからず。又、葉茶を入置くものは、錫又は鐵葉(ブリキ)にて造る。ちやつぼ。

ちやいれぶくろ 茶入袋【名】茶入を入れおく袋。紐にて括るやうに出來、地は多く金襴、緞子、安樂庵、廣東錦類を用ふ。

ちやいれぶくろーし 茶入袋師【名】茶入袋を仕立つる人。

ちやいろ 茶色【名】黑に赤黃の色を帶びたるもの。ちや。

ちやう 長【名】一をさ。かしら。首領。二年長者。(幼に對して)四上長者。めうへ。五なかきこと、又その物。(短に對して)六すぐれたること。長所。(短を補ふ。)七明治四年工部省に置かれたる奏任技術官。都檢の下、師の上に位す。上長・長・次長の三等あり。のち大・中・少に改變せられ、同九年廢止せられたり。八〔地〕ちやうしう(長州)に同じ。〔防長〕

長を爭ひ、短を競(キソ)ふ【句】『宋文鑑』に「異姓相楽爭レ長競レ短、漸漬日聞、以至二骨肉分離一」とあり』自他の長所・短所を爭ふ。

長を挾(サシ)む【句】他人に向ひて、自己の長所をほこる。

長を斷(絕)ち、短を補ふ【句】『禮記の王制篇に「四海之內斷レ長補レ短、方三千里、爲レ田八十萬億、一萬億畝」とあり』

長を絕ち、短を續ぐ【句】『戰國策の秦國の條に「秦地絕レ長續レ短、方數千里」とあり』前條に同じ。

長を採り、短を補ふ【句】「長を以て短を補ふ」に同じ。〔諺語〕

長を以て、短を擊つ【句】『史記の淮陰侯傳に「善用レ兵者、不二以短擊一レ長、而以レ長擊レ短」とあり』我が長所を利用して、敵の短所を突く。

長を以て、短を補ふ【句】『說苑に「以二人之長一補二其短一以二人之厚一補二其薄一」とあり』人の長所を採りて、自己の短所を補ふ。

ちやう 町【名】一行政區劃上の市に次ぐ地方自治團體。二市街の小區分。まち。「丁」、廓(クルワ)の方はどうおしだえ」

町には事無かれ【句】「近所に事無かれ」に同じ。〔諺語〕

ちやう 張【名】〔天〕二十八宿の一。南方にあるもの。ちりこ。

ちやう 帳【名】一とばり。幕。二帳簿。帳面。簿册。傾城酒呑童子「拇者承り、帳に記し」帳を附く【句】帳附(チャウツケ)をなす。大悲千錄本「手代を置いて、帳を附けさせるが」

ちやう 疔【名】皮膚の脂腺孔又は汗腺孔等より一種の黴菌の浸入するによりて生ずる腫物。初は赤き小點脹れあがりて、多少の痛みを感じ、後には膿を生じて膨大す。面部に生ずるものは、面疔(メンチョウ)と呼ばれ、又病毒腦に傳播し、腦膜炎を起すことあり。昔は危險視せられたれども、今は切開等の手術により治癒せしむ。ねぶと。癤瘡。よう(癰)參照。

ちやう 腸・腸【名】〔動〕消化器の一部。胃と肛門との間にありて、食物の消化及び吸

牧を司る膜管。高等動物のは、大腸・小腸等の區別あり。

ちやう 廳【名】㊀くわんちやう(官廳)に同じ。健武年中行事「まづ官の廳へ行幸なりて、帛の御裝束たてまつりて」㊁検非違使(ケビヰシ)の官廳。使廳(シチヤウ)。「古語」㊂ねんのちやう(院廳)の略。「廳藏人(クロウド)」。㊃臺灣の行政區劃の一。

ちやう 廳の下文(クダシブミ)【句】「検非違使廳(ケビヰシチヤウ)の下文」の略。正徳記「院宣・廳の御下文を重くせられしによりて、在位の君、又位に備はりたまへるばかりなり」

ちやう 廳の藏人(クロウド)【句】ごろん後院)を見よ。

ちやう 廳の御坊(ゴバウ)【句】京都御室(オムロ)の御門跡に召使はれし者。貞丈雜記「廳御坊といふこと、舊記に見ゆ。伊勢國因幡入道並に常眞返答にいふ。廳御坊とは、御室御門跡に召使はれし人にて、惣在廳(ザイチヤウ)と申す坊官にて候ふを、略して廳御坊と申し候ふことあり」

ちやう 廳の屋(ヤ)【句】㊀神社にて、神官の神事を議し、又事務を執る所。「古語」㊁検非違使(ケビヰシ)廳の事務を取扱ひし所。

ちやう 丁【名】㊀ちやうす(丁數)の略。㊁ちやう(町)㊀に同じ。

ちやう 丁の數(カズ)【句】ちやうす(丁數)㊀に同じ。「半の數に對して丁の日」

ちやう 丁の日【句】ちやうび(丁日)に同じ。「半の日」に對して)

ちやう 茶宇【名】『印度のチャウル(刹宇兒 Chaul)に產せしものなるよりいふ。ちよろけん(著羅絹)參照』琥珀の一種。地薄くして、輕目なる織物。質滑かに光澤あり、上等なる袴地として、德川時代殊に賞用せられたり、もと葡萄牙人の印度より舶載し來りしものなれども、今は我が國にても製出す。茶宇紋茶宇の別あり。茶宇縞。

ちやう 丁・打【貌】㊀堅き物の打ちあふ音の形容。ちやうちやう(丁丁)參照。㊁傑元「兜の鉢をちやうと打ち」㊂物事のたるみなきさま。「ちやうと脫ぐ」「ちやうと引締む」

ちやう 丁【助數】㊀書籍の紙數を數ふる單位。㊁豆腐の數を數ふる單位。

ちやう 挺・丁【助數】㊀墨・蠟燭・鋤・鍬・櫓・櫂・銃など、細長き物を數ふる單位。㊁駕籠・人力など、を數ふる單位。

ちやう 張【助數】弓・琴・幕・とばり・蚊屋などを數ふる單位。盛衰記「弓は一人して二張三張、矢は四腰・五腰も用意せよ」

ちやう 町【助數】㊀地積の單位。反(タン)の十倍。町歩(チヤウブ)。㊁地面の距離の單位。間(ケン)の六十倍。里の三十六分の一。道離。

ちやう 丁【助數】大弓・楊弓にて、錢を賭くる時、錢百文の隱語。「江戸時代の語」

ちやう 頂【助數】袈裟を數ふる單位。

ちやう 丈【名】たけ。ながさ。

ちやう 杖【名】ちやうざい(杖罪)を見よ。

ちやう 孃・娘【名】『孃の字、隋書の韋世康傳に「與二子弟一書曰、孃奉秋已高、溫清宜レ奏」とあるがごとく、實は母の義なるを、娘の字と通用せらるるに至れり』身分ある人のむすめ。

ちやう 定【名】㊀それと定めたること。必定。その通りなること。「古語」著聞「案のごとく車を寄せければ、女、例のちやうにしけるに」㊁『じやうとも書けるを見れば、常の字にや』まこと。眞實。俗曲「うたた寢」「それは、ちやうなら、うき世にかかる露のあだ物、しばしもえ」㊂さぐり(探)㊂に同じ。㊃(佛)ぜんちやう(禪定)に同じ。定に入る【句】(佛)㊀禪定に入る。入定す。太平記「大師、勅を承りて、まづ一七日の間、定に入り、明かに三千界のうちを御覽ずるに、…大師、定より出でて、この由を奏聞ありければ」㊁僧死ぬ。寂(ジヤク)す。

定の弓【句】(佛)密敎にて、弓を禪定の表示としていふ語。これに對し、矢を智慧の表示として「慧(エ)の矢」といひ、兩者相俟ちて、無明(ムミヤウ)を對治すと說く。愛染明王の持する弓矢、これなり。(「慧(エ)の矢」に對して)著聞「四天王に誓ひて、矢をはなさしむ。定の弓、慧の矢に和順して、遠く走りて、逆臣が胸に當りて」謠曲「鞍馬」「されば、愛染明王は定の弓、慧の矢にて、惡魔を從へたまふなり」

ちやう 定より出づ【句】(佛)禪定の境より出づ。禪定を止めてもとに復す。太平記「大師、定より出でて、この由を奏聞ありければ」

ちやう 諚【名】『諚の字は、國字』上のいひつけ。おほせ。命令。平家「御諚で候へば、仕ってこそ見候はめ」

ちやう 錠【名】㊀じやう(鎖)に同じ。㊁ちやうざい(錠劑)の略。

ちやう 丈【助數】㊀長さの單位。尺の十倍。㊁『ちやうりやう(丈量)を見よ』地積の單位。反(タン)の五分の一、即ち七十二歩。「(鎌倉時代・室町時代の語)」「(杖)に同じ。

ちやう 仗【名】㊀つはもの。武器。㊁つわもの(名目抄「仗議、チヤウノギ。於レ陣有レ之」

仗の議【句】仗の座の評議。ちやうぎ。

仗の座【句】「陣の座」に同じ。

ちやう 杖【助數】田積の單位。歩(ブ)の六十倍。「鎌倉時代・室町時代の語」

ちやう 丈【接尾】㊀長老の名に添ふる尊稱。じよう(尉)㊁參照。㊁藝人の名に添ふる敬稱。

ちやう 錠【助數】錠劑を數ふる單位。

ちやう 【名】多きこと。ゆたかなること。たくさん。さは。著聞「錠あづかるもちやうの大事や」

ちやうあ 丈阿【名】(人)江戸の戯作者。觀水堂と號す。草雙紙に戯名を署すること、この人に始まる。明和年中の人。

ちやうえん 錠亞鉛【名】(化)くわいあえん(塊亞鉛)に同じ。一同じ。

ちやう 帳幄【名】ちやうばく(帳幕)に同じ。

ちやうあごん 長阿含【名】(書)次條の略。

ちやうあごんきやう 長阿含經【名】(書)しやごんきやう(四阿含經)を見よ。

ちやうあひ 帳合【名】㊀商家にて、金錢の出入・貸借などを、帳面と引合はせて、取調べ勘定すること。㊁帳面に記入すること。㊂計算すること。

ちやうあひあきなひ 帳合商【名】ちやうあひまいさうば(帳合米相場)に同じ。

ちやうあひまい 帳合米【名】次條に同じ。

ちやうあひまいさうば 帳合相場【名】百石以下の寶買を許さざる空米相場。ちやうあひあきなひ。(虎市相場に對して)

ちやうあひまいげんぎんさうば 帳合米現銀相場【名】金二朱を米二十石宛の數銀として取引をなし、帳合相場の値段に準じて行ひし空米相場。江戸時代に、大阪堂島に行はれたり。

ちやうあひまいさうば 帳合米相場【名】『延(ノ)寶買の禁を逃るるため、正米相場のごとく帳簿に記し置きしよりいふ。享保の初頃より文久の頃まで、大阪堂島(ドウジマ)等にて行はれたる空米相場。

ちやうあん 長安【名】(地)㊀今の陝西(センセイ)省西安府の古稱。周・秦・漢・晉・西魏・後周・隋・唐等の代の首府。㊁王朝時代に、京都の朱雀大路より西方の半部、即ち右京(ウキヤウ)又は西京の雅稱。(洛陽に對して)

ちやうあん 長案【名】官符宣旨の寫、又官符の案文。

ちやうい 諚意【名】御諚の旨。仰の次第。

ちやうい 町有【名】地方自治團體たる町の所有。

ちやういう 長祐【名】(人)陶工。樂燒の祖。支那の歸化人宗慶の子。通稱は長次郎。父の遺法により、陶器を製す。茶家の宗匠なる千利休の意匠を用ひて、茶器を製し、信長及び秀吉に賞せらる。天正頃の人。

ちやういつ 漲溢【名】みなぎりあふるること。

ちやういつはひ 帳祝【名】昔正月四日、商人の家にて、その年用ふる帳簿を綴りて、これを祝ふこと。ちやうとぢ。

ちやういふ 長揖【名】支那の禮にて、手を拱きて敬禮すること。「同じ。

ちやういん 長音【名】ちやうおん(長音)に同じ。

ちやういん 定印【名】(佛)禪定に入る時に結ぶ印契(インケイ)。盛衰記「錫をはづして、戸を開きたり。威儀亂さず、定印違はず」

ちやういりねだん 帳入値段【名】(商)『取引所にて、取引の成立せる時、これを取引所帳に記入するには、實際の寶買値段を以てせずして、みなこの帳入値段にて寶買せしものとして記入するによりていふ』取引所が、帳簿計算の便宜上假に定むる値

段。定期取引に於いて、前日の後場(ゴバ)の始より當日の前場(ゼン)の終までに成立せる各限月取引の賣買總代價を、各その限月取引の賣買出來高にて除したるもの、又は當日前場の賣買總代價をその總出來高にて除せるものを、各當日の各限月取引の帳入値段とするを、普通とし、これと實際の賣買値段との差額は、賣買當事者の間に於て、直ちに決算授受せらる。一定直段。

ちやうち 町打【名】古、間數を定めおきて、的を建て、銃を打つことを習ひしこと。

ちやうーうんどう 腸運動・腸運動【名】〔動〕ぜんどう(蠕動)を見よ。

ちやうえい 長英【名】〔人〕たかのちやうえい(高野長英)を見よ。

おやうえい 貞永【名】四條天皇の御代の年號(紀元一八九二年—一八九三年)。

おやうえい-しきもく 貞永式目【名】貞永元年鎌倉幕府の制定せる式目。概ね頼朝以來の慣例・法規を整理し、時代の要求をも斟酌せしものにして、五十一箇條より成る。一名、御成敗式目。

ちやうーえう 長幼【名】年のたけたると、いとけなきと。大人と小兒と。長幼、序あり【句】『孟子の滕文公上篇に「教以二人倫一、父子有レ親、君臣有レ義、夫婦有レ別、長幼有レ序、朋友有レ信」とあり』五倫の一。長者の幼者に對する、幼者の長者に對するに次第あること。〔諺語〕

ちやうえき 腸液・腸液【名】〔醫〕『英Intestinal juice』腸の粘膜に分布せる多數の腺より分泌する消化液。

ちやうーえき 長役【名】長く續きたる戰役。

ちやうーえき 長驛【名】長距離にある宿驛。

おやうえき 定役【名】〔法〕懲役囚に科する勞役。舊刑法にては、懲役囚の外、徒刑囚・禁錮囚にも科したり。ていえき。苦役。

おやうえき-けい 定役刑【名】〔法〕自由刑の一。定役に服すること。次條參照。

おやうえき-しう 定役囚【名】〔法〕定役に服すべき囚人。卽ち現行刑法の懲役囚、舊刑法の徒刑囚・懲役囚・重禁錮囚の類。

おやうーえん 錠鉛【名】くわいえん(塊鉛)に同じ。

おやうおう 貞應【名】後堀河天皇の御代の年號(紀元一八八二年—一八八三年)。

ちやうーおくり 町送【名】德川時代に、他よりさまよひ來て、始ど行倒れんとする程の貧困者に、町内の自身番などにて世話したる上、順次に隣の町内へ送りやりしこと。

ちやうーおん 長音【名】〔一〕末を長く引きのばしたる音。(短音に對して)〔二〕〔語〕音の末尾を長くひびかする音。しよーち(承知)、こーせー(校正)などのしよ・こー・せーの如きこれなり。長呼音。

ちやうーおんかい 長音階【名】〔音〕『英Diatonic scale』全音階の一。主調音より上方に數へて、第三音及び第四音の間と、第七音及び第八音の間とに、半音を有するもの。全音階的長音階。(短音階に對して)

ちやうおんぶ 長音符【名】〔一〕〔語〕長音をあらはすために、かあ・しい・くう・てえ・そお等のあ・い・う・え・おを用ひずして、か!し!・く!・て!・そ!等の如く用ふるーの符號。長呼音符。引音符。〔二〕〔音〕樂譜中に用ふる長音を示す記號。

ちやうーか 町家【名】〔一〕市街にある家。まちや。〔二〕町人の家。商人の家。まちや。〔德川時代の語〕

ちやうーか 長歌【名】〔一〕歌の一體。句數多くして、長きもの。(短歌に對して)〔二〕ながうた(長歌)に同じ。(短歌に對して)

ちやうーか 長夏【名】〔一〕夏の日の長きころ。〔二〕陰曆六月の異稱。

ちやうーか 帳下【名】〔一〕とばりの張りてある所。とばりのもと。〔二〕『史記の絳侯周勃世家に「軍中夜驚、內相攻擊擾亂、至於太尉帳下」とあり』ばくか(幕下)に同じ。

ちやうーが 長河【名】長き流の川。平家「形骸を古岸の苔にさらし、姓名を長河の波に流す」

ちやうーか 釀家【名】ちやうざうか(釀造家)に同じ。

ちやうが 頂芽【名】〔植〕『英Terminal bud』植物の枝の頂端に發する芽。(腋芽に對して)

おやうかい 定界【名】〔佛〕『定心勝れたる境界なるよりいふ』じやうかい(上界)に同じ。(散界に對して)

ちやうかう 長庚【名】『詩經の小雅篇に「東有二啓明一、西有二長庚一」とあるに本づく』宵の明星(ミヤウジヤウ)に同じ。

ちやうかう 聽講【名】講義をきくこと。

ちやうかう 丁香【名】〔植〕桃金孃(テンニン)科に屬する喬木。熱帶地方に產す。高さ一丈ばかり、樹の肌は肉桂に似、葉はやや細く、柳の葉に似て、實は香料・藥料とす。

ちやうかう 張行【名】ちやうぎやう(張行)を見よ。

ちやうーかう 長江【名】〔一〕長く廣き川。〔二〕〔地〕やうすかう(揚子江)に同じ。

ちやうーがう 長行【名】〔佛〕佛經典の中にて、偈頌(ゲジユ)の如く字句を限定せず、直ちに法相を敍說して、文句に制限を置かざるもの。

ちやうかう-けん 聽講券【名】講義を聽くことを許可する證として、月謝又は會費納付濟の學生・生徒又は會員に交付する證。

ちやうかう-せい 聽講生【名】大學もしくは專門學校にて、その學生にはあらずして、ただ講義を聽きに出席することを得る者。〔「長講堂」に同じ。〕

ちやうかう-だう 長講堂【名】ちやうかうだう

ちやうーかうなう 長行囊【名】郵便行囊の一。他の行囊に納むる能はざる長形の小包郵便物を納むる用に供するもの。甲・乙の大小二種あり。

ちやうかう-ゆ 丁香油【名】丁香の花の蕾に水蒸氣を通じ、蒸溜して得たる揮發油。新に蒸溜せるは殆ど無色なれども、光線又は空氣に觸れて、速かに黃色乃至赤黃色に變ず。多く齒磨粉又は含嗽水に佳香を附し、顯微鏡の標本を透明にする等に用ひ、又芳香料、稀には醫藥に供す。

ちやうーかう 長歌行【名】〔文〕俳諧の一。表八句(七句目は月)裏十六句(九句目は月、十三句目は花)名殘の表十六句(十五句目は月)名殘の裏八句(七句目は花)の四十八句を一聯とするもの。

ちやうーかく 長角【名】〔一〕ながきつの。〔二〕〔植〕『英 silique』莢(サヤ)の一種。形狹長にして、數多の種子を有し、元來單胞より成れども、その中間に隔膜の生ずるによりて二胞となれるもの。熟するに及べば、兩邊の胞膜、下方より上方へ離開して脫落し、ただ中間の隔膜と種子とを殘す。菜種菜(ナタネ)・芥菜(カラシ)・蕪菁(カブ)などに見るものの如き、これなり。

ちやうーかく 聽覺【名】〔動〕『獨 Gehörsempfindungen』音波の耳を刺戟する時、聽神經これを大腦に傳へて知覺すること。聽感。

ちやうーかく 頂角【名】〔數〕『英Vertical angle』多角形の底邊又は多面體の底面に對する角の稱。

おやうかく 定覺【名】〔人〕佛像彫刻家。康慶の二男。運慶の弟。東大寺の釋迦・四天・北方天及び大佛の脇侍の觀音等を作る。當時の名手として、法橋に敍せらる。特に觀音の製作に長じたりといふ。

おやうーかく 定角【名】鏃の一種。

おやうーがく 定額【名】でいがく(定額)に同じ。元亨釋書、京畿定額諸寺、有二定數一。自レ今禁レ私二營寺院一」

おやうーがく 定額の女孃(ニヨウ)【句】後宮職員令にて定められたる定數の女孃。徒然「定額の女孃といふ事、延喜式に見えたり」

おやうーがく 定學【名】〔佛〕三學の一。禪定の習學。增上心學。

ちやうかう-き 聽覺器【名】〔動〕『獨 Gehörorgan』五官の一。聽覺を掌る器官、卽ち耳。聽器。聽官。

ちやうがく-じ 長岳寺【名】大和國山邊(ヤマベ)郡朝和(アサワ)村大字柳本にある眞言宗の寺。本尊は虛空藏菩薩。

おやうがく-じ 定額寺【名】『おやうがく(定額)を見よ』官より數を定めて公許せられたる寺。多くは皇親もしくは朝臣等の建立に係るものにして、寺院の建立徒に多く、田園喜捨等の弊害少なからざりしを防がんがために、この制を立てしなり。ちやくきやくじ。本朝文粹「前中書王請下以二施無畏寺一爲中定額寺上狀」

おやうがく-そう 定額僧【名】古、勅願寺に

て、員数を一定せられし供僧(ぐそう)。ちやくきやくそう。

ちやう-がす 腸瓦斯・腸瓦斯【名】〔醫〕『獨Darmgase』飲食物及び口腔液と共に嚥下せられたる空氣並びに細菌醱酵素によりて、腐敗分解の結果生じたる瓦斯と、腹内の化學的變化によりて生ぜる瓦斯と混合せるもの。ちやうこきふ(腸呼吸)參照。

ちやう-がせつしやとくだいちおえ 聽我說者得大智慧【句】〔佛〕不動明王四弘誓の一。〔謠曲〕奏の上「聽我說者得大知慧、知我身者卽身成佛」

ちやうか-せんかく 長歌撰格【名】〔書〕古歌の例を擧げて、長歌の詠法を論じたるもの。二卷。橘守部の著。

ちやう-かたる 腸加答兒・腸加答兒【名】〔醫〕『獨Darmentzündung』腸管の粘膜もしくは筋質にまで炎症を起せしもの。急性と慢性とあり。急性のものは、飲食の不良、強き下痢、冒寒、中毒より起り、腹痛みて、しばしば下痢す。慢性のは、急性のより轉ずるか、急性と同原因より來るかにて、腹脹れて痛み、下痢と便祕と交代す。久しきにわたりて、治し難きもの多し。

ちやう-かん 聽感【名】〔醫〕ちやうかく(聽覺)に同じ。

ちやう-かん 張翰【名】〔人〕支那晉代の學者。字は季鷹。性縱任にして、善く文を章す。年五十七にして歿す。

ちやうかんじぎれ 長閑寺裂【名】名物切(ぎれ)の一。錦地にて、七星に龍の丸の模樣あるもの。

ちやう-がんしゆ 腸癌腫・腸癌腫【名】〔醫〕『獨Darmkrebs』腸管に發する癌腫。直腸に發する場合最も多く、結腸これに次ぎ、回腸・十二指腸・空腸にありては甚だ稀なり。初は輕度の消化障碍を起し、鼓腸便祕等を現はし、漸次貧血・惡液質・羸痩を呈し、進んで慢性腸狹窄症を起し、遂に閉塞症狀を發するに至る。

ちやうかんまく 腸間膜・腸間膜【名】〔生〕腸を圍みて、これを支持する、透明なる薄膜。腹膜に連る。

ちやうき 聽器【名】〔官〕に同じ。

ちやう-き 長期【名】期限のながきこと。(短期に對して)

ちやう-き 長旗【名】長き旗。

ちやう-き 長跪【名】〔佛〕印度の禮法の一。兩膝を地に附け、足首を上げて立つこと。これは中禮にて、最も重き禮は、互跪(ごき)とて、左右の膝を交へて、その先を地に附くとぞ。

ちやう-ぎ 長技【名】得意なる技術。長ずる技術。

ちやう-ぎ 町義【名】町内の義理づきあひ。浮世親仁形氣(うきよおやぢかたぎ)「悴十助に、向後、町義をつとめさする」

ちやう-ぎ 張儀【名】〔人〕支那周末の政治家。魏の人。蘇秦と共に遊說を以て名あり。初め鬼谷子に就き、共に縱橫の學を修む。魏の相となり、連衡の說を唱へて、以て蘇秦の合從の說に對し、親王(ワウ)の五年に歿す。そしん(蘇秦)參照。

ちやう-き 杖期【名】三十日の忌、百五十日の服。

ちやう-き 仗旗【名】大寶令の制にて、朝賀・御卽位等の折に、大極殿(後世は紫宸殿)の庭上に建てし旗。烏象幢(ウザウ)・日象幢・月像幢以下二百餘旒あり。

ちやう-き 定規【名】ていき(定規)に同じ。

ちやう-ぎ 定器【名】一常に使用する器物。二飯などを盛りて、佛前に供ふる器。(導ら佛具にいふ)大儀「供米三十石、ぢやうきごとにおかれて、絕ゆることなし」三合子(がふし)に類する食器。

ちやう-ぎ 定規・定木【名】一物を測り、又は線を引くときに用ふる具。その樋(とひ)あるを樋定規といひ、形により、三角定規・雲形定規・丁字定規等の種類あり。界尺。二てぼん。標準。模範。

ちやう-ぎ 仗議【名】「仗の議」に同じ。十調奏聞に及ぶ間仗議ありたし」

ちやう-きう 長久【名】ながくひさしきこと。永久。永遠。

ちやうきう 長久【名】後朱雀天皇の御代の年號(紀元一七〇〇年—一七〇三年)。

ちやう-きう 長球【名】〔數〕『英Prolate spheroid』その長徑を軸として、楕圓を一回轉せしめて得る立體。

ちやうきう-くわん 長久館【名】阿波國德島市にありし舊德島藩の學校。明治二年に現今の師範學校所在地に開黌す。

ちやうきう-らく 長久樂【名】〔音〕そしまり(蘇志摩利)に同じ。

ちやう-きうれひ 張九齡【名】〔人〕支那唐朝の政治家。また學者。字は子壽。韶州曲江の人。進士に擧げられて校書郎となる。玄宗のとき、相となり、臣節ありしが、斥けられ、開元二十八年歿す。年六十八。

ちやうきかしつけ 長期貸附【名】〔商〕貸附の一。返濟期間の長期に亙るもの。(短期貸附に對して)

ちやうきこうさい 長期公債【名】償還期限の長き公債の總稱。これに無期公債有期公債・濟崩(ザイク)公債・據置公債等の細別あり。(短期公債に對して)

ちやうきしんよう 長期信用【名】〔經〕信用の一。その期間の長期に亙るもの。(短期信用に對して)

ちやうきそく 町規則【名】地方自治體なる町が、町村制により、町村條例以外に、町の營造物に關して設くる規則。

ちやう-きち 長吉【名】ぜに(錢)一を云ふ。〔大阪・神戸の語〕

ちやうきち-ぶね 長吉船【名】『長吉といふ人の造り出だせるよりいふ』ちよきぶね(猪牙船)に同じ。

ちやうきてがた 長期手形【名】〔商〕『英Bill of long date』日附後又は一覽後、三箇月或は六箇月の如き長期間を置きて仕拂はるべき手形。(短期手形に對して)

ちやう-きん 長禁【名】終身禁獄すること。

ちやう-ぎん 長吟【名】聲を長く引き、又は續けて吟ずること。

ちやう-ぎん 丁銀・挺銀【名】慶長の頃、始めて造りたる銀貨。棒又は板に造り、用あるときは切りて通用するやうにせり。一丁の量目四十二匁。表に「銀座常是」の極印あり。銀丁。

ちやうきやう 長享【名】後土御門天皇の御代の年號(紀元二一四七年—二一四八年)。

ちやう-ぎやう 張行【名】勝手氣ままにふるまふこと。思ひ切りて行ふこと。〔古語拾遺〕「さまざまの非法非禮、張行の餘り、神社佛寺の御領權門勢家の庄園をたふし」〔平家〕「國務を行ふ間、非法非禮を張行し、神社佛寺權門勢家の庄領を沒倒して」

ちやうきやう 貞享【名】靈元天皇の御代の年號(紀元二三四四年—二三四八年)。

ちやうきやう-かうれき 貞享甲子曆【名】ちやうきやうけんち 貞享檢地【名】貞享年中に行はれたる檢地。

ちやうきやう-しき 貞享式【名】〔書〕蕉風の連句の法式を說けるもの。一卷。各務(かがみ)支考の編。

ちやうきやうれき 貞享曆【名】「に同じ。

ちやうきやうれき 貞享曆【名】靈元天皇の貞享元年より宣明曆に代へて用ひし一種の曆。保井春海が元明の曆を參酌して作りしもの。貞享四年まで七十年間行はれ、翌年安倍泰邦等のこれに少しく訂正を加へたる寶曆曆行はるるに至れり。

ちやうきやうゆうじ 長弓寺【名】大和國生駒(イコマ)郡北倭(マトヤマト)村大字上村にある眞言宗の寺。聖武天皇の創建。往昔は、七堂伽藍備はりて、壯麗を極めたり。

ちやう-きよ 聽許【名】ききとどくること。「聽容。

ちやう-きよ 長裾【名】ながきすそ。袍の長き裾。

ちやう-きよう 杖笻【名】ぎんぢやう(吟杖)に同じ。

ちやう-きよく 張旭【名】〔人〕支那唐朝の書家。字は伯高、蘇州の人。最も草書を善くし、草聖と稱せらる。筆法を顏眞卿と李白とに傳へたり。飲中八仙の一。

ちやう-きより 長距離【名】距離の長きこと。(短距離に對して)

ちやうきより-でんわ 長距離電話【名】『英Long (distance telephone』遠隔せる二つの電話架設地間に遞話し得る電話、又その電

話に依る通話。普通長距離電話と特別長距離電話との二種あり。

ちやうきよりでんわ-つうわ 長距離電話 通話【名】 長距離電話によりて通話すること。

ちやうきれ 帳切【名】 ちやうぐわいもの(帳外者)に同じ。

ちやうぎ-わん 定器椀【名】 飯を盛るに用ふる椀。ぢやうぎ。

ちやうく 長軀【名】 身のたけのたかきこと。長身。(短軀に對して)

ちやうく 長驅【名】 馬に乘りて遠くかけゆくこと。とほのり。とほがけ。

ちやうく 長句【名】 二字數の多き句。(短句に對して) 二(文)しちごんぜっく(七言絕句)に同じ。(短句に對して) 一じ。

ちやうく 長吁【名】 ちやうたん(長嘆)に同じ。

ちやうく 杖屨【名】 杖と、はきものと。

ちやうぐち 錠口【名】 おちやうぐち(御錠口)を見よ。染崎六名稱「ずっと錠口へ顏をつんだすと、奥中の女中から吸付煙草の雨のふるやうだ」

ちやうくつ 定窟【名】 禪定を修する岩窟。

ちやうぐひ 町杭・町杙【名】 河川測量の際、河川の一岸に沿ひ、川形に從ひて、一町ごとに打つ杭。

ちやうぐみあひ 町組合【名】 數箇の町が或共通の事務を處理するために、監督官廳に申請して設置する組合。

ちやうぐわい 町會【名】 ちやうそんくわい(町村會)を見よ。

ちやうぐわい 帳外【名】 一とばりの外。(帳內に對して) 二帳面に記してあらぬもの。(帳內に對して) 三逃亡などにて、人名別帳より削られたる人名。四江戸幕府の頃、訴訟にて、差紙指定の期日に、官府に事故起りたるを、後日に延引すること、又或は訴訟人に一旦歸鄉を命ずること。

ちやうぐわい 場外・塲外【名】 その場所のそと。(場內に對して)

ちやうくわい-ぎゐん 町會議員【名】 ちやうそんくわいぎゐん(町村會議員)を見よ。

ちやうぐわい-もの 帳外者【名】 國籍をはなれ、定職なく、他鄉にさまよへる者。浮浪人。〔江戸時代の語〕

ちやうくわう 張皇【名】 『書經の康誥篇に「張皇六師無レ壞二我高祖寡命一」とあり』いきほひを張りて盛んにすること。

ちやうくわう 頂光【名】 (佛)佛菩薩の頂上の圓光。「諸佛の頂光」

ちやうぐわう 長官【名】 伊勢大神宮の禰宜(ネギ)の長。

ちやうぐわう-じ 長光寺【名】 むさごでら(武佐寺)に同じ。

ちやうぐわう-ぜつ 長廣舌【名】 くわうちやうぜつ(廣長舌)二に同じ。

ちやうくわん 長官【名】 ある官署の長たる人。官吏のをさ。官長。

ちやうくわん 廳官【名】 一院廳の主典代に次ぐ職。 二ざいちやうくわんにん(在廳官人)の略。

ちやうくわん 聽官【名】 〔動〕ちやうかくき(聽覺器)に同じ。

ちやうくわん 腸管・腸管【名】 〔動〕『英 Intestinal canal』ちやう(腸)に同じ。

ちやうくわん 長寬【名】 二條天皇の御代の年號(紀元一八二三年—一八二四年)。

おちやうぐわん 貞觀【名】 清和天皇の御代の年號(紀元一五一九年—一五三六年)。

おちやうくわんえいはう 貞觀永寶【名】 銅貨の一。清和天皇の貞觀十二年に鑄造す。圓形にして、中央に方孔あり。貞觀永寶錢。

おちやうぐわんえいはうせん 貞觀永寶錢【名】 前條に同じ。

おちやうぐわんぎしき 貞觀儀式【名】 〔書〕貞觀年間の朝儀を記せるもの。弘仁の內裡式に較ぶれば條目多く、且つ恒例のみならず、卽位・立后・立太子、又遣唐使に節刀を賜ふ類の臨時の儀式をも載せたり。もと單に「儀式」とのみ呼びしが、荷田(カダ)在滿(アリミツ)その貞觀式なることを考證して、貞觀の二字を加へたり。十卷。 「條を見よ。

おちやうぐわん-きやく 貞觀格【名】 〔書〕次〔書〕三代格式の一。弘仁格式の後を承けて、弘仁十一年より貞觀十年までの格と式とを、藤原氏宗等に勅して集めしめたるもの。分ては貞觀格と貞觀式とにして、前者は十二卷、後者は二十卷。初、藤原良相等に勅し、舊格に因りて、新符を集めしめられしかど、成功遲かりしより、更にこの撰ありしなり。えんぎきやくしき(延喜格式)參照。

ちやうくわん-くわんばう 長官官房【名】 一北海道廳の一部局。掌る所、府縣廳に於ける知事官房と同樣なり。 二朝鮮各道の一部局。

おちやうぐわん-しき 貞觀式【名】 〔書〕ちやうぐわんきやくしき(貞觀格式)を見よ。

おちやうぐわん-せいえう 貞觀政要【名】 〔書〕ていくわんせいえう(貞觀政要)を見よ。

おちやうぐわん-せん 貞觀錢【名】 ちやうぐわんえいはうせん(貞觀永寶錢)の略。

おちやうぐわん-でん 貞觀殿【名】 平安京舊內裏の殿宇の一。常寧殿の後方にありて、南面す。

ちやうけ 茶請【名】 茶を飮む時、味を添ふるために喰ふ菓子。茶菓子。茶の子。點心。おほあに。伯兄。

ちやうけ-い 長兄【名】 第一の兄。おほえ。

ちやうけ-い 長計【名】 永遠のはかりごと。長策。(短計に對して)

ちやうけ-い 長策【名】 臺の高き燈。(短檠に對して)

ちやうけ-い 長頸【名】 頸すぢ長きこと。長頸鳥喙(カイ)【句】『吳越春秋に「越王爲レ人長頸鳥喙、鷹視狼步、可三以共患難一而不レ可二共處一レ樂」とあり』長頸にして、口の尖れること。觀相上、殘忍貪慾の相なりといふ。

ちやうけ-い 長徑【名】 〔數〕ちやうぢく(長軸)に同じ。(短徑に對して)

ちやうけ-げい 長鯨【名】 長大なる鯨。

おちやうけい 定刑【名】 刑を定むること。

おちやうけい 杖刑【名】 五刑の一。笞刑より重く、徒刑より輕く、杖にて、罪人の臀を打ちしもの。大寶令制定以前よりこの刑ありしが、制定後は六十より百までの五等に別てり。

ちやうけい 貞慶【名】 〔人〕法相宗の高僧。山城國笠置寺の住職、少納言信西の孫貞憲の子。世に三昧法得神護の人、修學碩才名德の人と稱せらる。深く戒律を修め、後鳥羽天皇その德を崇び、寶物を賜ふ。一に解脫(ゲダ)上人といふ。建保元年寂す。年五十九。唯識同學抄六十二卷の著あり。

おちやうけい 定慶【名】 〔人〕奈良興福寺の佛師。傳記の據るべきものなきも、遺れる彫刻品の最も古きは、春日神社の舞樂納曾利面にて、佛師定慶壽永三年二月日の刻あり。

ちやうけい-きん 長頸筋【名】 〔醫〕頸筋の一。深層に在り。頭蓋の廻旋頸椎の前屈等の作用を補助す。

ちやうけい-し 長慶子【名】 〔音〕雅樂の曲の一。舞樂終りて退出する際に、曲のみを奏するもの。支那唐の長慶中作られしものといふ。ちやうげんし。

ちやうけい-しふ 長慶集【名】 〔書〕はくしもんじふ(白氏文集)を見よ。

ちやうけい-てんわう 長慶天皇【名】 〔人〕第九十八代の天皇。御名は寬成(ナリ)。後村上天皇第一の皇子。御母、詳かならず。在位五年(紀元二〇二九年—二〇三三年)。明德五年崩ず。壽五十二。御卽位の證、確かならずとて、御歷代に列し奉らざりし歷史家もあり。

ちやうけ-げ 長橋【名】 長き橋。ながばし。

ちやうけ-し 帳消【名】 一金錢勘定の皆濟となりたるとき、帳面に記入せる金高の上に、棒を引きなどして消すこと。ぼうびき。 二義務・報酬などの全く濟みたること。 三差引きて殘なきこと。

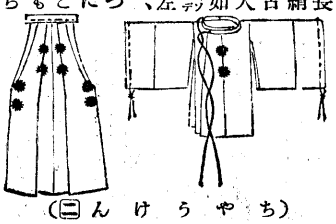
ちやうけし-はふ 帳消法【名】 〔商〕信用取引の一種。相互に賣買・貸借の關係ある者、その取引の都度、代金を授受することをなさず、各自の帳簿に記入し置き、或時期に、雙方の帳簿を對照決濟して、差引殘高のみを現金にて授受すること。

ちやうげつ 暢月【名】 『十月は極陰の月にして、十一月より一陽來復し、陽氣暢(ノ)ぶとの意にて名づく。禮記の月令篇に「飭レ死事、命二有司一曰、土事毋レ作、愼毋レ發レ蓋、毋下發二室屋一及起中大衆上、以固二而閉一、地氣沮泄、是謂二發二天地之房一、諸蟄則死、民必疾疫、又隨以喪、命之曰二暢月一、呂氏春秋に「仲冬之月、日在レ斗、…命之曰二暢月一」とあり』陰曆十一月の異稱。

ちやう-けっかく 腸結核・腹結核【名】〔醫〕『獨 Darmtuberculose』腸に起る結核。原因は結核性牛乳の飲用、肺その他の結核症の續發等。腸のみに來るものと他の結核と共に來るものとの二種あり。前者は下腹膨滿緊張・腹痛・嘔吐・下痢、後者は原結核症候及び血液を混する粘液便排便時の疝痛等あり。結核性腸潰瘍。

ちやうけふ 長鋏【名】ながきつるぎ。長劍。

ちやう-けん 長絹【名】『水張にせる絹なれば、實は張絹と書くべきなりといふ』■古、水干狩衣・直垂などを仕立つるに用ひし、一種の絹。太平記「長絹の袈裟」會我「長絹の衣」■長絹にて仕立てたる古の衣服。その製、大かた直垂の如くなれども、袖括リなく、胸の紐、左は長く、右は短く、菊綴は、二つづつ、後に三所、前に四所にて、水干のごとく總を附け、紐も菊綴も色は定まらず、袴も直垂のに同じく長袴にて、その菊綴は、左右の合引に二つづつ、前の縫後には長絹といふ絹無くなりて、紗・生絹などにて仕立てたり。色は多く白色なりき。



(二) んけうやち

ちやうけん 町間・町見【名】遠近・高低の町間・尺を測量すること。距離の測量。

ちやう-けん 長劍・長劍【名】■長きつるぎ。(短劍に對して)■時計の針の長き方。「長針」(短劍に對して)

ちやうけん 張騫【名】〔人〕支那前漢の武將。字は子文、河内の人。武帝の時使して、月氏に行き、諸方を巡視して、地形・軍狀を察し、歸りて帝に奏す。のち邊疆の軍事に力を盡して、博望侯に封ぜられ、元狩元年また西域に使す。〔話。〕

ちやう-げん 長言【名】ながきことば。長言。「讒言・長語」■ながく話すこと。

ちやうけんばう ちやうけん葛【名】〔植〕すずかけさう(篠懸草)に同じ。

ちやうけん-し 長慶子【名】〔音〕ちやうけいし(長慶子)を見よ。

ちやうげんばう ちやうけん坊【名】〔動〕まぐそだか(馬糞鷹)に同じ。

ちやうげんばう 定源坊【名】〔植〕ひのきだけ(檜茸)を云ふ。〔相模國箱根塔ノ澤の方言〕

ちやうげん-らく 長元樂【名】〔音〕雅樂の一。盤渉調の新樂。源濟政の作。

ちやう-こ 長袴【名】長きはかま。ながばかま。(短袴に對して)

ちやう-こ 長古【名】句數の多き古詩。(短歌に對して)

ちやう-ご 長語【名】■ながきことば。長言。「讒言・長語」■ながく話すこと。

ちやう-こ 杖鼓・杖皷【名】『りやうちやうこ(兩杖鼓)の略』かっこ(羯鼓)一に同じ。

ちやう-こう 長功【名】『長日の工功の義』大寶令の制にて、昔、官にて使役する工匠などの、日の長き季節なる四・五・六・七月に於ける功程。(中功・短功に對して)

ちやう-こう 長虹【名】■長きにじ。■長橋のかかれるさまの譬。距離の測量。

ちやう-ごう 長講【名】〔佛〕■末を限らずして、長き歳月の間、一定の經文を講讀すること。■ちやうごうゑ(長講會)の略。■比叡山西塔なる釋迦堂の堂守。太平記「山門西塔の院、釋迦堂の長講、所用ありて、下りける道に」

ちやうこうざしき-ほう 長後坐式砲【名】現今一般に使用せらるる、砲身後坐式野戰速射砲に就きての特稱。即ち砲身と砲架との間に裝置せる通常水壓唧筒と發條との併用より成る。

ちやうこうこう-しゆ 長公主【名】『蔡邕の獨斷に「帝之姉妹長公主、儀比二諸侯王一」とあり。こうしゆ(公主)參照』帝王の姉妹。

ちやうこう-だう 長講堂【名】■『長講を行ふ堂の義。主として、法華經の長講を行ふが故にいふ』ほっけさんまいだう(法華三昧堂)に同じ。■後白河法皇の、七條殿に建立せられ、六條殿に移徙せられし後、そこにも建立せられし御持佛堂。文治四年の火災に燒失し。源賴朝の造進後、寺領の御寄附等あり、法皇崩御に先だちて、その寵姬丹後局の出なる皇女宣陽門院に寺領と共に讓與あらせられしより、崩後、その御影(イヘ)を安置して、御月忌を修することとなり、宣陽門院の薨後、その佛事をも修し、歷朝尊重ありしが、しばしば火災に遭ひて移轉し、今は下寺町(シタテラマチ)通五條下る東側に在り。もと律宗なりしも、近世淨土宗に屬し、西山派の僧これを守れり。一名、後白河院法華堂・御影堂。

長講堂の八講【句】後白河法皇の崩御後、その御月忌に修せられし八講。

ちやうこうだう-りやう 長講堂領【名】長講堂(一)の領地中、皇室にて管領せられしもの。梅松論に據れば、百八十餘箇所にも及びしものの如く、初め宣陽門院より鷹司院に讓られ、後、後嵯峨天皇の旨に依り、改めて後深草天皇に讓りたまへり。增鏡「長講堂領また播磨の國、尾張の熱田の社などをぞ御處分(ショブン)ありける」

ちやうこう-こうみん 町公民【名】公民權を有する町民。

ちやうごう-ゑ 長講會【名】〔佛〕■長講を行ふ法會。大同二年二月一日傳敎が七人の碩德を選びて、法華經のこの法會を制せしに始る。■ろくぐわつゑ(六月會)に同じ。

ちやうこ-おん 長呼音【名】〔語〕ちやうおん(長音)(一)に同じ。

ちやうこ-おんぷ 長呼音符【名】〔語〕ちやうおんぷ(長音符)(一)に同じ。

ちやう-こきふ 腸呼吸・腹呼吸【名】〔醫〕『獨 Darmathmung』腸管の營む呼吸作用。嚥下せし飲食物もしくは空氣中の酸素の、胃に入り、腸に入りたるものは、この作用によりて血液中に入り、反對に、炭酸瓦斯は腸管内に排出す。腸瓦斯中に多量の炭酸瓦斯を含み、酸素の痕跡存せざるは、これが爲なり。

ちやうこく-じ 長谷寺【名】はせでら(長谷「寺」)に同じ。

ちやうこく-だい 定石代【名】江戸時代に、穀物問屋より差出したる相場書に本づきて、代官所にて算定し、勘定所廻米方の吟味を經て確定したる、その年の石代。

ちやう-ごじふ 丁五十【名】■丁度五十に滿つること。■明治維新前の錢の勘定に、五十文の金額に全く五十文を用ひしもの。

ちやうごやく(丁百)參照。

ちやう-こつ 腸骨・腸骨【名】〔醫〕『獨 Darmbein』薦骨の兩側髖骨の後上部にある大骨。

ちやう-こつ 聽骨【名】〔醫〕『獨 Gehörknöchelchen』鼓室内にある三個の小骨。その最も外方にありて鼓膜に接せるを槌骨、中部にあるを砧(キヌタ)骨、最も内方にあるを鐙骨又は馬鐙骨といひ、三者互に關節又は靱帶によりて連接し、鼓膜の振動を内耳に傳達する用をなす。小耳骨。小聽骨。

ちやう-こつ 長骨【名】〔醫〕『獨 Langeo Knochen』骨の形態上の區別の一。兩端を有する長大なるもの。四肢の如く强大なる運動を要する部位に占在す。管狀骨。(短骨・扁平骨に對して)

ちやうこ-ふ 長呼符【名】〔語〕ちやうおんぷ(長音符)(一)に同じ。

ぢやう-ごふ 定業【名】〔佛〕生死(シヤウジ)の苦果を受くるに定まりたる業因(ゴフイン)。前世より定まれる因果。天命。決定業(ケツジヤウゴフ)。さんごごふ(三時業)參照。落雷「ぢやうごふの命にても延べたまへ」

ちやう-こん 定業の病【句】ごふびやう(業病)に同じ。

ちやう-こん 長恨【名】ながく忘れがたきうらみ。

ちやう-こん 悵恨【名】うらみかこつこと。

ぢやう-こん 定根【名】〔佛〕五根の一。禪定(ゼンジヤウ)のよく一切の功德を生ずること。

ちやうごん-か 長恨歌【名】〔文〕■支那唐の白樂天の作れる詩。唐の玄宗皇帝が楊貴妃を失ひたるなげきの情をのべたるもの。

㊀山田流の琴曲の一。支那長恨歌の大意を作れるもの。

おやうじや 定小屋【名】一定の場所に常設せられる芝居見世物などの小屋。(假小屋に對して)「星」に同じ。

おやうさ 長沙【名】〔天〕**ちやうさせい**(長沙星)

おやうさ 長差【名】〔天〕諸遊星相互の位置の關係により、各遊星の運動に及ぼす變化。「〔古語〕」

ちやうさ 長者【名】**ちやうじや**(長者)の約。

ちやうさ 長坐【名】人を訪ひて、その家に長く居ること。ながゐ。

おやうざ 定者・定座【名】**おやうじや**(定者)の約。〔古語〕藝わらはべの、…あやしうをどりてありく者どもの、さうぞきたてつれば、いみじくおやうざといふ法師などのやうにねりさまよふこそをかしけれ」榮花「定者、左右より、いみじくをかしげにて來りたるに」

おやうざ 定座【名】〔文〕連俳にて、花は何句目に、月は何句目にとやうに、それぞれの景物を用ふる場合の定まれる處。但し必ず守るべきものとは限らず。俳諧歳時記「青藍云、月花は、一卷の飾にして、定まりたる座あるにはあらず。附合(アヒ)の辭義に讓りてはこぼれぬゆゑ、折端前の高句をもて定座とす。例にその故を知る時は、月花の座を必ずとせず、一卷の變化は自在ならん。但し月は折端へこぼせる例あれど、これは月のさはりありて止む事を得ざればなり。花は、こぼせる例絶えて無し」

おやうざ 仗座【名】「陣の座」に同じ。盛衰記「大内にて相撲の召合あり。…諸卿仗座に參著せられけり」

おやうざい 町債【名】地方債の一。町にて起すもの。

ちやうさい 長齋【名】〔佛〕齋食(ザイ)を長く續くること。「長齋持戒」

ちやうさい 張載【名】〔人〕支那宋代の哲學者、字は子厚、橫渠先生と稱す。廸(セ)の子。熙寧十年歿す。年五十八。「ばき。

ちやうさい 聽裁【名】廳の裁斷。役所のさ

おやうさい 定齋【名】定齋といふ者、支那明の沈惟敬(シンイケイ)の藥方によりて製したりと傳ふる藥。おやうさいぐすり。

おやうさい 定齋【名】〔佛〕さんまい(定齋)に同じ。

おやうさい 杖罪【名】五罪の一。杖刑に相當せる罪。杖罰。

おやうさい 定齋【名】〔佛〕さんまい(定齋)に同じ。

おやうさい 長齋月【名】〔佛〕さんまい(三長齋月)を見よ。

おやうさい 長齋持戒【名】長日齋食にて持戒すること。

おやうさいぐすり 定齋藥【名】おやうさい(定齋)に同じ。

おやうさいぐわつ 長齋月【名】〔佛〕さんまい(三長齋月)を見よ。

おやうさいぢかい 長齋持戒【名】長日齋食にて持戒すること。

ちやうさいぼう ちやうさい坊【名】てうさいぼう(蝶齋坊)に同じ。

おやうさいはう 孃細胞・娘細胞【名】〔生〕『獨 Tochterzelle』一箇の細胞が分裂して二箇となれる場合、その各を稱す。(母細胞に對して)「に對して)

おやうさう 長槍【名】ながきやり。(短槍に對して)

ちやうさう 長爪【名】ながきつめ。「じ。

ちやうさう 長嫂【名】きやうさう(丘嫂)に同じ。

ちやうさう 疔瘡【名】ちやう(疔)に同じ。

ちやうさう 頂相【名】〔佛〕三十二相の一。頂上に肉髻あること。一切の人天(ニンデン)これを看下する能はずとて、無見頂相とも呼ぶ。ちやうさう(頂相)參照。

おやうさう 定相【名】〔佛〕㊀常住不變の相。宇宙間の事物は、涅槃(ネハン)の外として定相あるものなしと說かる。太平記「世間に、定相なきことをば、夢幻(ムゲン)と申し候はずや」鹽山(泰山府君)「そもそもこれは、五道の冥官(ミヤウクワン)、泰山府君なり。われ人間の定相を守り、明闇二つを守護するところに、上古にも聞かざりし花の命を延べんため、我を祭る」㊁入定(ニフヂヤウ)の相。

おやうさう 丈草【名】〔人〕**ないとうおやうさう**(内藤丈草)を見よ。

おやうざう 釀造【名】醱酵作用に由りて、酒・醬油などをかもし造ること。「釀造高」

おやうざうか 釀造家【名】酒・醬油などを釀造する家。醸家。

ちやうさつ 丈册【名】**けんちやう**(檢地帳)

ちやうさん 聽參【名】國司の廳に參向すること。盛衰記「兩國の間に四の大河あり。聽參の時、洪水のために人多く損じければ」

ちやうざん 長山【名】橫に長く延びつづきたる山。連山。

ちやうざん 長鑱【名】田地を掘起すに用ふる、刃の長き具。鍬などの類。

おやうざん 丈山【名】〔人〕**いしかはおやうざん**(石川丈山)を見よ。

おやうざんき 丈山忌【名】京都東山詩仙堂にて、五月二十三日、石川丈山のために修する忌。

ちやうざんしう 長三洲【名】〔人〕書家。薩長州藩士。梅外の第三子。初め廣瀬淡窓に學び、のち旭莊の大阪塾に塾長たり。夙に勤王の志厚く、廣く尊攘の志士と交はる。新封建論を草して、大いに廢藩を鼓吹す。木戸孝允も知遇を受け、その奏議多くは三

ちやうさん 長相思【名】長き年月互に思慕したること。

おやうざう-しけんじよ 釀造試驗所【名】大藏大臣管理の下に、酒類釀造の試驗及び講習に關する事務を掌る役所。所長(奏任)・事務官・技師(以上奏任)・書記・技手(以上判任)の職員を置く。

おやうざうしけんじよ 釀造試驗所【名】釀造試驗所の長官。前條參照。

おやうさう-ほつくしふ 丈草發句集【名】〔書〕內藤丈草の發句集。一卷。

ちやうさく 長策【名】㊀ながき策(ムチ)。㊁ちやうけい(長計)に同じ。

ちやうさくかく 聽錯覺【名】〔哲〕『英 Acoustic illusion 又 Auditory illusion』聽感に生起する錯覺。錯聽。

おやうざしやみ 定者沙彌【名】〔佛〕おやうさ(定者)に同じ。

ちやうさせい 長沙星【名】〔天〕二十八宿の一なる軫宿(シンシュク)中の一星。人の命數をつかさどるといふ。長沙。

ちやうざせん 長者宣【名】ちやうじやせんの約。「に同じ。(長者宣)

ちやうさん 聽參【名】國司の廳に參向すること。盛衰記「兩國の間に四の大河あり。聽參の時、洪水のために人多く損じければ」

ちやうざん 長山【名】橫に長く延びつづきたる山。連山。

ちやうざん 長鑱【名】田地を掘起すに用ふる、刃の長き具。鍬などの類。

おやうざん 丈山【名】〔人〕**いしかはおやうざん**(石川丈山)を見よ。

おやうざんき 丈山忌【名】京都東山詩仙堂にて、五月二十三日、石川丈山のために修する忌。

ちやうざんしう 長三洲【名】〔人〕書家。薩長州藩士。梅外の第三子。初め廣瀬淡窓に學び、のち旭莊の大阪塾に塾長たり。夙に勤王の志厚く、廣く尊攘の志士と交はる。新封建論を草して、大いに廢藩を鼓吹す。木戸孝允も知遇を受け、その奏議多くは三

洲の手に成れりといふ。晩年東宮侍書に拜し、明治二十八年卒す。年六十三。

ちやうさんりし 張三李四【名】『傳燈錄に「欲レ會二佛法一、但問二取張三李四一、欲レ會二世法一、則參二取古佛叢林一、洞庵筆記に「全唐詩、何承裕戲爲二舉子對句一曰、曉來犬吠張三吠、日暮猱啼呂四妻、觀レ此則古者以二呂四一對二張三一、後世則呂四一轉爲二李四一、不二復知一有二呂四之稱一矣」とあり。支那には張・李などの姓多きよりいふ。わが國ならば、七兵衛の三番息子・八兵衛の四番息子などいはんが如し』身分もなく、名も知れぬ人人。某某。

ちやうさんりよし 張三呂四【名】前條を見よ。

ちやうさんろし 張三呂四【名】前條に同じ。

ちやうさやようさや 【感】山車(ダシ)などを引く時のかけ聲。泰の門松「福の神のお迎、ちやうさやようさや」

ちやうさ-ようさ 【感】囃す掛聲。狂言「斗蘇(祭)「さあさあ、囃させられ。引きますぞ、囃すぞ、囃すぞ、ちやうさようさ。えいとも、えいとも、えいともなあ」

おやうさ-ざらひ 定淺【名】常に期を定めて行ふ河渠の淺渫(セツセン)。

ちやうし 張弛【名】はると、たるむと。のびちぢみ。

ちやうし 長子【名】㊀第一の子息。總領の息子。長男。家督。㊁『詩經の大雅大明篇に「于周于京、纘女維莘、長子維行」、毛傳に「長子、長女也」とあり』長女。

ちやうし 長史【名】丞相の屬官。

ちやうし 長指【名】手の五指の中の第三。なかゆび。「よ。

ちやうし 長紙【名】**ながかみ**(長紙)を見よ。

ちやうし 長至【名】支那にて、冬至の稱。

ちやうじ 長時【名】ながき時間。長時間。(短時に對して)

ちやうじ 長耳【名】㊀ながき耳。㊁世の出來事を、他人に先だちて聞出すこと、又その人。飛耳。

ちやうじ 丁子【名】㊀〔植〕桃金孃(テウ)科に屬する常綠喬木。熱帶に產し、幹は肉桂に似、葉は柳の如く、花は初め白くして、後

に絳色を呈し、香氣極めて高く、後萎みたるまま落ちず、色赤く固まりて、つひに變じて實となる。その實の形小さき鋏に似て、香料又は藥用に供せらる。[丁香]

(ちやうじ(一))

ちやうじあぶら(丁子油)の略。 **三ちやうじびき**(丁字引)の略。 **四ちやうじいろ**(丁字色)の略。源氏「ちやうじに深く染めたる薄ものの…」 **五ちやうじかう**(丁字香)の略。參考色の番は、色を盡して、麝香・ぢん丁子」 **六ちやうじがしら**(丁字頭)の略。紋所の一。 **七**(一七)丁子・重(カサ)丁子・三(ミツ)丁子・五(イツ)丁子・八(ヤツ)丁子・鎧甲丁子など、種種あり。

丁子・丁子・吉丁子 【句】燈心を掻立てて、燈火の丁子頭(チヤウジ)を、油の中に掻落す時に唱ふる語。(この語を唱へてこれをする時は、貨財を得といひならはせり)

ちやうじ 停止 【名】 一時禁ずること。さしとめ。ていし。 二なりものちやうじ(鳴物停止)の略。

おやうしし 場師・塲師 【名】『孟子の告子上篇に「今有二場師一、舍二其梧檟一」とあり』うゑきや。庭作。

おやうしし 娘子 【名】 一むすめ。處女。 二をんな。女子。婦人。

おやうじ 定時 【名】ていじ(定時)に同じ。

おやうじあぶら 丁字油 【名】丁字の花の蕾より製せる香油。ちやうじゆ。ちやうじ。

おやうじいろ 丁子色 【名】丁子の實の如き染色。黒ばみたる香色(カウ)。ちやうじ。

おやうしし 長袖 【名】 一長きそで。ながそで。 二ちやうしうしや(長袖者)の略。

長袖の人 【句】ちやうしうしや(長袖者)に同じ。

長袖善く舞ひ、多錢善く買ふ 【句】『韓非子の五蠹篇に「長袖善舞、多錢善買、此言二資之易一レ爲レ工也、故治强易レ爲レ謀、弱亂難レ爲レ計」とあり』その資料あるものは、功を成し易き譬。

おやうしし 長秋 【名】 一ちやうしうきゆう(長秋宮)の略。 二『古今原始に「漢高祖置二大長秋・中長秋・諸官官屬一焉、長秋之名所二由起一也」とあり。ちやうしうきゆう(長秋宮)參照』古、支那にて、皇后宮の事を掌りし官職。

おやうしし 長洲 【名】洲崎の長く突出せるもの。

おやうしし 長州 【名】〔地〕ながと(長門)に同じ。

おやうしし 場師 【名】『藤原俊成は皇后宮大夫なりしよりいふ。ちやうしうかん(長秋監)參照』藤原俊成の歌の集。二卷。六家集の一。

おやうしし 澤瀉 【名】紋所の一。長州毛利家の定紋たりし澤瀉。ながとおもだか。

おやうしし 長秋監 【名】ちゆうぐうのだいぶ(中宮大夫)の唐名。

おやうしし 長秋宮 【名】『後漢書の馬皇后紀に「會有司奏立二長秋宮一」とありて、註に「秋陽之始、長欲二其久一也」とあり。ちやうしうきゆう(長秋)宮 二及びちやうしんきゆう(長信宮)參照』皇后宮または中宮の御別稱。あきのみや。秋宮(シウキウ)。長秋。

おやうしし 長州人 【名】長門國の人。

おやうしし 長袖者 【名】長き袖の衣服を著たる者、即ち堂上方又は僧侶。ながそで。長袖(チヤウシウ)。「者の仲間。

おやうしし 長袖者流 【名】長袖者の仲間。

おやうしし 長州征伐 【名】江戸幕府の、長州藩を征伐せしこと。前後二回ありて、初のは元治元年十一月にて、開戰に及ばずして和議を結び、第二回は慶應二年にして、幕府の軍利なく、且つ大阪城に滯在中の將軍家茂薨ぜしかば、兵を罷めたり。 を見よ。

おやうしし 長州鍔 【名】ながねん(中井)俗曲「新曲神樂獅子」に「一に俵踏んまへて、二上(ニアガリ)彈(ヒ)くは、二丁目の丁子車に廻されて、三枚肩で押させたり」

おやうしし 町收入役 【名】町吏員の一。町の收入及び支出を取扱ひ、その他會計事務を掌るもの。町長の推薦により町會にて選任す。

おやうしし 丁子車 【名】昔の酒の銘。

おやうしし 丁子草・水甘草 【名】〔植〕爽竹桃(ケウチク)科に屬する多年生の草。莖は直立し、高さ二尺内外。葉は互生、披針形にして、柳の葉に似たり。五月頃、莖梢に枝を分ち、花を著く。花冠は濃青色、筒狀を成し、先端深く五裂す。果實は、莢蒾にして、中に圓柱形、赭黒色の種子を藏む。觀賞用として栽培せらる。

おやうしし 丁子櫻 【名】〔植〕 一瑞香(ジンチ)科に屬する落葉灌木。高さ三四尺に達し、細き枝を生じ、葉は對生、花は二箇乃至七箇づつ短き花軸の上に集り生ず。觀賞用として栽培せらる。さつまふぢ。しげんじ。ふぢもどき。[荒花] 二めじろざくら(めじろ櫻)の異稱。

おやうしし 丁子酒 【名】丁字の實を用ひて造りたる酒。

おやうしし 長時日 【名】ながき時日。(短時日に對して)「長時日を要す」

おやうしし 長時修 【名】〔佛〕念佛行者の四つの修法の一。一生涯の間、三寶を恭敬(クヤウ)・禮拜(ライ)すること。善導の往生禮讃の說に本づく。 野守鏡「長時修・無間修」

おやうしし 丁子透 【名】扇の親骨を丁子の實の形、即ち:・:・:・:のごとくに透(カ)して彫ること、又その親骨。

おやうしし 長雌蕊 【名】〔植〕自花受精を避けんがための自然の方便として、一種の植物中、花により て、雌蕊に長短の別ある時の、長き方のもの。(短雌蕊・中間雌蕊に對して)

おやうしし 長雌蕊花 【名】〔植〕一種の植物中、長雌蕊を有する方の花。前條參照。(短雌蕊花・中間雌蕊花に對して)

おやうしし 長字錢 【名】寛永銅錢の一。明和五年肥前國長崎にて鑄造したるもの。背孔の上部に「長」の字ありて、銅質粗惡、製作も精巧ならず。

おやうしし 丁子染 【名】丁子色に染むること、又その染方。 源氏「ちやうじぞめの、こがるるまでしめる、白き綾のなつかしきを著たまへる」

おやうしし 丁子薹 【名】〔植〕柳葉菜(カヤ)科に屬する草。田沼等の水邊に自生し、莖は高さ二三尺。葉は互生、長卵形、全緣。夏秋の候、葉腋に黄色の花を著け、莖・葉共に秋季に紅色を帶ぶ。果實は蒴にして長さ一寸餘。たこばう。

ちやうじ-ちや 丁子茶【名】丁字の煎汁のごとき色、即ち紅色を帯べる茶色。

ちやう-じつ 長日【名】㊀夏の日などの如く、長き日。永日。(短日に對して)㊁日限を定めず、いつまでも行ふこと。長時日。(短日に對して)桑花七壇の御修法、長日の御修法、おほやけ方・宮方と行はせたまふ」

ぢやう-じつ 丈室【名】はうぢやう(方丈)に同じ。

ぢやう-じつ 場室【名】〔佛〕灌頂を行ふ壇「場」

ぢやう-じつ 定日【名】ていじつ(定日)に同じ。平治但し定日は、同道の人のはからひにて候ふべし」

ちやう-じつげつ 長日月【名】ながき月日の間。(短日月に對して)

ちやうじ-つつじ 丁子躑躅【名】〔植〕石南(シャクナゲ)科に屬する灌木。葉は矮小、葉も小形にして、葉柄を缺く。夏季、枝梢に、白色または淡紅色の花を著く。我が國、各地の高山に自生す。こめつつじ。

ちやうじ-てふてふ 丁子蝶蝶【名】紋所の一。丁子にて、子持蝶蝶の形を現はせるもの。ちやうじにこもちてふ。

ちやう-じどう 張之洞【名】〔人〕支那清朝の名臣。直隷の人。初め進士を以て翰林院に入り、光緒八年山西巡撫に任じ、次いで兩廣總督となり、同十五年湖廣總督に累進して軍機大臣を拜す。經國のすあり。日清戰後より北清事變に及び、其の內治外交に貢獻せるところ多し。宣統二年歿す。年七十三。遺著多し。

ちやうじ-な 丁子菜【名】〔植〕さはぎきやう(澤桔梗)㊀に同じ。

ちやうじ-なすび 丁子茄子【名】〔植〕つるなすび(蔓茄子)に同じ。

ちやうじ-に 長時に【副】絶ゆる時なく。始終。太平記「天子の傍には、大史官とて、八人の臣下、長時に侍候して、君の御振舞を、善惡に就き、注し留め」

ちやうじ-に-こもちてふ 丁子子持蝶【名】

ちやうじ-にてふてふ(丁字蝶蝶)に同じ。

ちやうじ-しばう 張子房【名】〔人〕ちやうりやう(張良)に同じ。

ちやうじ-ひごたい 丁子平江帶【名】〔植〕きくあざみ(菊薊)に同じ。

ちやうじ-ぶろ 丁子風呂【名】小さき風爐の、上に釜をかけ、丁子を入れて煎ずれば、室內のよく薫るやうにせるもの。昔、貴人の家には、大抵備へてありきといふ。「宇。

ちやう-じま 茶宇縞・桝條【名】縞織の茶

ちやう-しん 長身【名】身のたけのたかきこと。長軀。「長身白晳」

ちやう-しん 長針【名】ちやうけん(長劍)㊁に同じ。「じ。

ちやう-しん 頂針【名】「頂門の一針」に同

ちやう-しん 聽診【名】〔醫〕『獨 Auskultation』體內に起る音を聞きて診斷する法。聽診器を用ひて行ふを普通とす。(打診に對して)「の訛。

ちやう-しん 【名】〔植〕ちやうしゅん(長春)㊁

ちやう-じん 長人【名】身の丈高き人。

ちやう-しん 定心【名】〔佛〕禪行を修して、心の散亂を去ること。一心不亂。增上心。

ちやう-しん 仗身・丈身【名】古、五位以上の人の家に附せられたる護衛の侍者。傔仗の類なるべしといふ。

ぢやう-じん 丈人【名】㊀『易經の師卦に「師貞、丈人吉、无咎」とあり』年老いたる者。長老。「杖人」㊁妻の父。嶽父。舅(キウ)。(丈母に對して)

ちやう-しんがう 聽信號【名】〔兵〕音響による信號。即ち喇叭・器物の打擊・號砲・電話通信等の類。

ぢやう-じん-かう 丈人行【名】『史記の匈奴傳に「自謂我兒子、安敢望漢天子、漢天子我丈人行也」とあり』輩行が妻の父の列に在ること。

ちやうしん-き 聽診器【名】〔醫〕『獨 Gehörrohr』聽診に用ふる器。大別して、管狀聽診器・ゴム管附雙耳聽診器・金屬管附聽診器・共鳴聽診器の四種とす。檢診器。

ちやうしんきゆう 長信宮【名】『ちやうしんきゅう(長秋宮)を見よ』

たいくわうたいこうぐう (太皇太后宮)の別稱。

ちやう-しんけい 聽神經【名】『羅 Nervus acusticus』腦神經の第八對。延髓の上側部より出でて、內耳の膜蘘・膜質三半規管・蝸牛殼等に分布し、聽覺をつかさどる神經。

ちやう-しんざい-はいきん 長深在背筋【名】〔醫〕『獨 Lange tiefe Rückenmuskel』背部深在層筋の一。薦骨脊柱筋・棘筋・橫棘筋の三筋より成る。その作用は、脊柱を伸展外屈するにあり。

ちやう-しや 長者【名】㊀年上の人。年長者。長老。長上。㊁人倫上の關係又は地位・德などの高き人。めうへ。貴人。德人。

ちやう-じや 長者【名】㊀前條に同じ。富貴の人。有福者。富豪。字音「ちやうじや」のすぐれたる人。盛衰記「日本國には、男子七人あるとは、長者と申すことなれば」㊂福德の家にしづく女のありけるに」㊃「氏の長者」に同じ。「源氏の長者」㊄宗家。總領。平家「池田の宿に著きたまひぬ。彼の宿の長者ゆやが女侍從」㊅〔佛〕『梵 Grha-pati(疑助賀鉢底)の譯語』姓貴・位高・大富・威猛・智深・年高・行淨・禮備・上歎・下歸の十德を具足する豪族。「須達(シユダチ)長者」㊆京都東寺の長官。古は勅補せらるる例にて、初は一人なりしが、後世、漸く增して、四人一時に並ぶに至り、一の長者、二の長者など呼べり。

長者三代【句】『三代目には衰ふとの意』『長者、末代纏かず』に同じ。『諺語』

長者、富に飽かず【句】富める者は、なほその上にも富まんことを欲す。『諺語』

長者に二代無し【句】「長者、末代纏かずに同じ。『諺語』 盧士廉「長者に二代なし、女郎買に三代なしと、京の利發者が名言なり」

長者に貧を語るな【句】貴人の前にて、貧窮の物語をすれば、求むる所ありて言ふが如く思はるるが故に、これを避けよ。『諺語』

長者のために、杖を折る【句】『孟子の梁惠王上篇に「爲二長者一折レ枝、語二人曰、我不レ能、是不レ爲也、非レ不レ能也」とあり』容易なる事の譬。

長者の脛に味噌を塗る【名】『大黑の尻に味噌』に同じ。

長者の千燈より、貧女の一燈【句】次條に同じ。『諺語』

長者の萬燈、貧女の一燈【句】『阿闍世王受決經に「貧女一燈、長者萬燈」とあるに本づく』次條に同じ。『諺語』

長者の萬燈よりも、貧者の一燈【句】形式よりも、その志を貴ぶことの譬。長者の萬燈、貧女の一燈。『諺語』

長者の門に非人(ヒニン)絕えず【句】長者の門には、常に緊(ツバ)を乞ふ非人・乞食あつまる。『諺語』

長者、末代纏かず【句】長者の家は永く纏かぬものなり。長者に二代無し。『諺語』「じ。

ちやう-じや 長蛇【名】ちやうだ(長蛇)に同

ちやうじや 長者【名】〔地〕上總國夷隅(イス)郡にある町。大多喜町の東四里。夷隅川の川口。鐵道房總線の一驛。舊名、旭(ヂヨク)。

ちやうじ-や 丁字屋【名】昔、江戸日本橋區大傳馬町二丁目にありし絲屋。

ぢやう-しや 杖者【名】杖つく人。としより。老人。

ぢやう-しや 定者【名】〔佛〕大法會の行道(ギヤウダウ)の時に、香爐を執りて前行する小僧。ちやうざ。定者沙彌。善財童子。伊呂波字類抄「定者、ヂヤウシヤ、諸御願供養時用レ之」

ちやう-しや 廳掌【名】藩廳にて、侯人を通じ、書疏を達し、使部を檢することを掌りし判任の職員。明治三年設置、同四年廳と共に廢止せられたり。

ちやう-しや 長殤【名】『儀禮の喪服篇に「周人以二殷人之棺槨一葬二長殤一」とあり』十六歲より十九歲までの男女の、嫁娶に先だちて死ぬること、又その人。(中殤・下殤に對して)

ちやう-じやう 長城【名】㊀長く連なれる城。「萬里の長城」㊁ばんりのちやうじやう(萬里長城)に同じ。㊂最も有力なる防禦。㊃『萬里の長城に比していふ。唐書の李世勣傳、宋史等に見ゆ』一國の重鎮となるべき人物。

ちやう-じやう 頂上【名】㊀山のいただき。絶頂。最上。㊁この上なきこと。とびきり。絶頂。最上。

ちやう-じやう 長上【名】㊀としうへ。年長。長者。㊁めうへ。尊上。㊂次條の略。㊃『上は、上日の義』毎日出勤すること。(番上に對して)〔古語〕

ちやう-じやうくわん 長上官【名】㊀官の等級の上なるもの。うはやく。㊁王朝時代の諸官の四部官、及び被官の侍從・侍醫・諸博士・助敎・諸師等の稱。

ちやう-じやう-こう 長上工【名】古、官の工人の上役を勤めしもの。

ちやう-じやう-かがみ 長者鑑【名】富豪の姓名を列記したる印刷物。

ちやう-じやう-がはら 長者瓦【名】常陸國珊珂川の邊の、長者屋敷の跡なりと言傳ふる地より掘出す瓦。

ちやう-じやう-がはら 長者原【名】〔地〕㊀伊豆國田方・賀茂の兩郡に亙れる原。南北一里餘。㊁出雲國意宇(オウ)・大原・能美(ノミ)の三郡に亙れる原。㊂越後國西蒲原(カンバラ)郡の西方彌彦(ヤヒコ)山の最北嶺にある原。高さ一四五五尺。

ちやう-じや-がひ 長者貝【名】〔動〕おきなえびす(翁戎)に同じ。

ちやう-じや-き 長者記【名】長者の傳を列記したるもの。新永代藏「やがての長者記に乘り給へ」

ちやう-じや-ぎぬん 長者議員【名】たがくなふせいぎぬん(多額納稅議員)の俗稱。

ちやう-しやく 丈尺【名】㊀たけ。ながさ。㊁長さ一丈ある尺。著聞「丈尺にてうち見れば、鉾例よりも一丈餘り遠く立ちたりけり」「錫」に同じ。

ちやう-しやく 錠錫【名】くわいしやく(塊)に同じ。

ちやう-じやく-わし 【名】〔植〕やぶかうじ(藪柑子)に同じ。

ちやう-しや-せい 長沙星【名】〔天〕二十八宿の一。軫宿(シンシュク)の中にありて、人の命數を主(ツカサド)るといふ星。ちやうさ。

ちやう-じや-せん 長者宣【名】藤原氏の氏の長者の氏寺たる興福寺、氏社たる春日神社、氏の學問所たる勸學院へ宛てて下す文書。

ちやう-じや-の-き 【名】〔植〕めぐすりのき(目藥木)を云ふ。〔下野國日光の方言〕

ちやう-じや-の-はかま 長者袴【名】〔植〕かんあふひ(寒葵)に同じ。

ちやう-し-やはうけい 長斜方形【名】相對する線の長さのみが同じき斜方形。(正斜方形に對して)

ちやう-じや-ばしら 長者柱【名】だいこくばしら(大黑柱)㊁に同じ。

ちやう-じや-むし 長者蟲【名】〔動〕おきなえびす(翁戎)に同じ。

ちやう-じや-やしき 長者屋敷【名】長者の住み居たる屋敷。

ちやう-し-ゆ 長主【名】『宋史の公主傳に「長主壽考如レ此…長主待二遇諸子一、宜レ法二仁宗用レ心之均一」とあり』こうしゅ(公主)に同じ。

ちやう-し-ゆ 長酒【名】長き時の間、酒を飲みつづけること。

ちやう-し-ゆ 長鬚【名】ながきあごひげ。「同じ。

ちやう-し-ゆ 脹腫【名】しゅちやう(腫脹)に

ちやう-し-ゆ 聽衆【名】㊀〔佛〕說法を聽聞(モンチョウ)する人人。**ちやうしゅう**(聽衆)參照。盛衰記「諸僧淚におぼれ、聽衆袖をぞしぼりける」㊁法華八講などの時、一座に列なる僧衆の中にて、講師・問者以外の者。㊂ひらざ(平座)に同じ。

ちやう-し-ゆ 聽取【名】ききとること。

ちやう-じゅ 長壽【名】いのちながきこと。ながいき。長命。長生。避齡。

ちやう-じゅ 長綬【名】ながき紐緒(ヒモオ)。(短綬に對して)「子油」に同じ。

ちやう-じあぶら 丁子油【名】ちやうじゆ(丁子)に同じ。

ちやう-じゅ 釀酒【名】㊀酒を釀造すること。造酒。㊁釀造したる酒。釀。

ちやう-しゆう 聽衆【名】演說などを聽く人。**ちやうしゅ**(聽衆)參照。

ちやう-しゆう 町衆【名】ちやうにんしゅう(町人衆)に同じ。〔京都の語〕一代女「町衆は、ふしやうの袴・肩衣を著て、數珠は手に持ちながら、掛目安(カケメヤス)の談合」

ちやう-じゅう 聽從【名】ていじゅう(聽從)に同じ。

ちやう-し-ゆ-くわい 長鬚會【名】長き鬚を蓄へたる人人の相集りて催す會。

ちやう-し-ゆん 長春【名】㊀常に春なること。㊁〔植〕かうしんばら(庚申薔薇)に同じ。

ちやう-し-ゆん 長春【名】〔地〕支那吉林省の西端にある都會。我が國の南滿洲鐵道と東支鐵道との境界點にして、滿洲の商業の中心地たり。府城を寬城子と呼ぶ。

ちやう-し-ゆん-ぎく 長春菊【名】〔植〕ふくじゅさう(福壽草)に同じ。

ちやう-し-ゆん-くわ 長春花【名】〔植〕きんせんくわ(金盞花)に同じ。

ちやう-し-ゆん-な 長春菜【名】〔植〕たうちさ(唐萵苣)に同じ。

ちやう-じゅ-らく 長壽樂【名】〔音〕しゅんあうてん(春鶯囀)に同じ。

ちやう-しよ 長所・長處【名】他に比較して最も勝れて居るところ。得手の處。得意の點。所長。(短所に對して)

長所が短所【句】失敗は、多くはその長所をたのむによること。〔諺語〕

ちやう-しよ 町所【名】町の會所。〔江戸時代の語〕薩摩歌「町所へ斷って、源五樣を今の間に牢に入れうといふことか」

ちやう-じよ 暢舒【名】のばすこと。のびやかなること。

ちやう-しよう 聽訟【名】ていしょう(聽訟)に同じ。

ちやう-しよう 長松【名】たけ高き松の樹。

ちやう-しよう 長承【名】崇德天皇の御代の年號(紀元一七九二年—一七九四年)。

ちやう-しよう-くわ 聽訟課【名】縣廳に設けられし一課。縣內の訴訟を審聽して、長官に具申し、縣內を監視して、罪人を處置し、また捕亡に關する事を掌りしもの。明治四年設置、同八年廢止せられたり。

ちやう-しよう-し 聽訟司【名】民部省の一司。知司事・判司事の職員ありて、府・藩・縣に於て、土地・人民に關する裁判しがたき訴訟を聽斷せし所。明治二年設置、同七年民部官と共に廢止せられたり。

ちやう-じよやく 町助役【名】ちやうそんじよやく(町村助役)を見よ。

ちやう-じらう 長次郎【名】〔人〕陶工。樂燒の祖。父は朝鮮人にして、足利義稙(ヨシタネ)の時に歸化し、飴屋と稱せしが、その死後、妻、尼となりて、陶器を作り、世に尼燒と稱せらる。長次郎、母の技を傳へ、千利休の意匠を用ひて、天正年間京都聚樂第の土を用ひて茶器を作り、豐臣秀吉これに「樂」の字の印を與へて捺さしむ。由って長次郎の製したる陶器を、樂燒と稱するに至れり。

ちやう-じり 帳尻【名】㊀帳簿の末。㊁帳簿の精算の結果。「帳尻を胡麻化す」「に同じ。

ちやう-じる 町汁【名】とをかじる(十日汁)に同じ。

ちやう-じ-ゑん 丁子園【名】丁子に他の藥物を調合して製したる煉香(ネリコウ)。

ちやう-す 茶臼【名】㊀抹茶とすべき葉茶を碾(ヒ)くに用ふる石臼。㊁男が下に、女が上になりて交接する時の姿勢。〔俚語〕

ちやうず 長ず【動佐變自】㊀おひたつ。生長す。㊁勝れて居る。他にまさる。㊂年長なり。としうへなり。

ちやうず 打ず【動佐變他】うちたたく。打擲す。〔古語〕「其この翁まろ、うちちやうじて」

ちやう-すう 丁數【名】㊀二・四・六・八・十の如く、二にて割りきるる數。偶數。(半數に對して)㊁書籍の枚數。

ちやうす-がま 茶臼釜【名】肩にきっと角張(カド)りて、突立ちたる形の、茶の湯用の釜。

ちやうす-ぎり 茶臼斬【名】茶臼の如く、胴中を横に平らに斬ること。

おちやうすけ 定助【名】㊀おちやうすけがう(定助鄕)の略。㊁すけ(助)㊂を見よ。

ちやうすーげい 茶臼藝【名】いしうすげい(石臼藝)に同じ。

ちやうすーだけがう 定助郷【名】すけがう(助郷)を見よ。

ちやうすーだけ 茶臼嶽【名】下野國那須(スカ)郡の北方にある山。那須火山群の高峰。高さ六三一〇尺。一に茶臼山といふ。

ちやうすーなり 茶臼形【名】一茶臼の如き低き形。二尻を落付けて坐したる形。

ちやうすーやま 茶臼山【名】一大阪天王寺の西南にある丘陵。方域二町ばかり、古墳の荒廢せるものにて、西南に隍(カウ)あり。天文十五年細川晴元ここに據りしことあり、大阪冬の役には、家康の陣地となり、夏の役には、眞田幸村ここに陣せり。舊稱、荒陵(クワウリヤウ)。二河内國北河内郡甲可(カフカ)村大字南野の東にある山。山腹に龍王寺ありて、俗に茶臼山觀音と呼ぶ。三河内國中河内郡國分にある丘陵。古墳の址なり。四大和國高市(タケチ)郡越智岡(ヲチノヲカ)村薩摩にある丘陵。古墳の址なり。五近江國滋賀(カ)郡和邇(ワニ)村にある丘陵。古墳の址なり。六尾張國春日井(カスガヰ)郡にある山。天正年中、小牧の役に、羽柴秀吉の陣せしところ。七三河國南設樂(シタラ)郡東郷(トウガウ)村大字平井にある山。長篠(ナガシノ)の戰に、織田信長の陣せしところ。八信濃國更科(サラシナ)郡信里(サト)村にある山。川中島の合戰に、武田信玄の屯營を設けしところ。篠井(シノヰ)驛より西北一里。

ちやうせい 長生【名】ながいき。長壽。高長生・久視(キウシ)【句】前條に同じ。

ちやうせいのくすり 長生の藥【句】ながいきをする藥。長生藥。仙藥。

ちやうせい-ふし 長生・不死【句】「不老・不死」に同じ。

ちやうせいふしのくすり 長生不死の藥【句】「不老不死の藥」に同じ。正統記「始皇、仙方を好みて、長生不死の藥を日本に求む」

ちやうせい 長生【名】〔地〕上總國五郡の一。明治二十九年もとの長柄(ナガラ)・埴生(ハニフ)二郡を合して建つ。郡役所を茂原(モバラ)町に置く。

ちやうせい 長星【名】〔天〕ちやうびせい(長星)に同じ。

ちやうせい 長逝【名】『長く逝(ユ)きてもどらぬ意』死ぬること。逝去。

ちやうせい 長征【名】長い月日の征伐。

ちやうせい 長嘶【名】馬の續けざまにいななくこと。いばふこと。

ちやうせい 町政【名】町の自治行政。

ちやうせい 町制【名】ちやうそんせい(町村制)を見よ。

ちやうせい 頂生【名】〔植〕莖または枝の頂端に著生すること。

ちやうぜい 町稅【名】ちやうそんぜい(町村稅)を見よ。

ちやうせい 醸成【名】一酒などを醸して出來あがること。二叛亂などの次第次第に發生すること。

ちやうせいせん 長生錢【名】〔佛〕しだらきん(祠堂金)に同じ。

ちやうせいち 長生地【名】殺生禁斷の土地。

ちやうせいでん 長生殿【名】支那唐代の宮殿の一。〔朗詠〕長生殿裏春秋富、不老門前日月遲」〔源氏夫人〕長生殿の內に秋更けず」

ちやうせいばう ちやうせい坊【名】てうさいばう(嘲齋坊)に同じ。〔浮世風呂〕「おめへには貰られねへ、人をちやうせい坊にするやうだ、まかりやせん」と。

ちやうせう 長嘯【名】ながくうそぶくこと。

ちやうせうし 長嘯子【名】〔人〕きのしたちやうせうし(木下長嘯子)を見よ。

ちやうせうしや 長嘯社【名】德川時代に、服部蘇門の率ゐし詩社。

ちやうせき 聽石【名】〔動〕じせき(耳石)に同じ。

ちやうせき 長石【名】〔鑛〕石灰曹達又は加里と礬土との硅酸鹽類なる石。單斜晶系又は三斜晶系に屬す。造岩鑛物中最も普通なるものにて、大なるは七八寸あり、色は多く白く、肉紅・淡綠・淡灰なるもあり。分解して、耕作に必要なる耕土となし、又陶・磁器製造に用ふ。化學成分及び晶系の差異により、正長石と斜長石とに分つ。

ちやうせき 町石【名】ちやうそくせき(町率都婆)に同じ。

ちやうせき 定石【名】碁を打つにつきての古來一定の型(カタ)。右大將鎌倉實記「定石知らぬ力碁に、先手も後手も打亂れ」

ちやうせき 定跡【名】棊經をさすにつきての古來一定の型(カタ)。

ちやうせき 定席【名】一定まりる席。きめたる坐席。二よせ(寄席)に同じ。「じ。

ちやうせき 定籍【名】ていせき(定籍)に同じ。

ちやうせき 丈尺【名】ながさ。たけ。尺度。

ちやうせきはんがん 長石斑岩【名】(鑛)火成岩の一種。緻密なる石基中に正長石の斑晶ありて、斑狀構造を示すもの。種種の色を帶び、乳白色又は肉色の斑晶が石基の色と異なりて、色彩美なることあり。

ちやうせつ 聽說【名】說數を聽聞(チヤウモン)すること。神樂「吉利吉利(キリキリ)千歲樂(センザイ)、白衆(ビヤクシユ)等、聽說・晨朝淸淨偈や」

ちやうぜつ 長舌【名】一ながき舌。二大いにしやべること。多辯。長廣舌。長舌三寸【句】事後にひそかに舌を出して笑ふこと。冷笑。

ちやうせつ 定說【名】ていせつ(定說)に同じ。「と。

ちやうせん 長戰【名】長きあひだ戰ふこと。

ちやうせん 長尖【名】鷹の翼の一部。兩翼の尖端にある最長の羽根。

ちやうせん 丁錢・長錢【名】錢錢(ヒヂセン)を通用するに、百枚を以て、百文に計算せしこと。丁百。調百。丁百錢。調百錢。調錢。(短錢に對して)

ちやうせん 聽宣【名】一檢非違使(ケビヰシ)廳の長官たる別當の發せし公文書。元來、檢非違使廳より發せし正式の命令又は公文書は、別當以下署名し、檢非違使廳の下文(クダシブミ)又は略して、廳の下文と呼びしに對し、これは正式の手續を踏まず、執事直ちに別當の意を承けて下すのみのものなりしが、檢非違使廳の權力の增加と共に、勅宣に准ぜられ、これに違背する者は、違勅の罪を以て處罰せらるるに至れり。別當宣。二「院廳(インチヤウ)の下文(クダシブミ)」に同じ。三中世以降、國司がその管下に下知せし時の文書。後世、檢非違使廳起りて、聽宣の稱これに移るに及び、混同を避けて、國宣と稱することとなりたれども、本文にはなほ聽宣と書したり。

ちやうせん 腸線・腸線【名】〔醫〕『英 Cat-gut』猫又は羊の腸より製出したる結締性の線條。外科的手術のために切斷したる血管の結紮又は組織の縫合に使用す。

ちやうせん 腸腺・腸腺【名】〔醫〕『英 Intestinal gland』腸の內部に散在して、絨毛の基底に開口し、腸液分泌の作用をなす腺。大・小兩腸に存する管狀腺と十二指腸の上部にのみ存する葡萄狀腺との二種あり。

ちやうぜん 長蠕【名】ながきあごひげ。

ちやうぜん 悵然【貌】失望して恨み歎くさま。惆悵たるさま。

ちやうせん 【名】一ちやうせん(地黃煎)の訛。〔京都の語〕二〔動〕『地黃煎に似たる臭氣あるよりいふ』みづすまし(鼓蟲)を云ふ。〔西國の方言〕

ちやうせんおん 長全音【名】〔音〕『英 Major tone』和聲的長音階の主音と第二度との間、第四度と第五度との間、又第六度と第七度との間の音程。

ちやうせんき 張線器【名】『英 Wire』電柱に線條を架渉し、或はこれを接續するに當り、線を引締むるに用ふる器。

(きんせうやち)

ちやうせんしん 長箭津【名】〔地〕朝鮮江原道の南方にある東海岸の良港。我が國の漁船の出入多し。

ちやうせんどう 長箭洞【名】〔地〕前條に同じ。

ちやうそ 張訴【名】はりそ(張訴)を見よ。

ちやうそ 聽訴【名】訴訟を聽聞し、これを裁決すること。聽訟。

ちやうそうくわい 町總會【名】ちやうそんそうくわい(町村總會)を見よ。

ちやうそうし 長送使【名】古、遠流に處せられて、配所に下さるる人を護送せし使。

ちやうそかべ 長曾我部【名】姓氏の一。秦(ハタ)川勝の裔。世世土佐の豪族たり。南北朝の頃、新左衛門信能、吉原の地頭職となる。のち衰へしが、國親に至りて再興し、漸く武威を國中に振ふ。その玄孫元親、讃岐・伊豫を略取し、盛親に至りて亡べり。

ちやうそかべ-もとちか 長曾我部元親【名】〔人〕武將。信濃守國親入道覺世の長子。初字は彌三郎。宮内少輔と稱す。驍勇にして遠謀あり。連年兵を出だして、四國を併せしが、天正十三年豐臣秀吉に征討せられて、遂に降り、征韓の役に軍功あり。慶長四年歿す。年六十一。

ちやうそかべ-もりちか 長曾我部盛親【名】〔人〕武將。元親の第七子。幼名は千熊丸、宮内大輔と稱す。諸兄を凌ぎて家を嗣ぎ、關ヶ原の役、石田三成に黨し、大阪の役、豐臣氏に屬し、軍敗れて捕へられ、京師三條河原に斬らる。年四十一。

ちやうそく 長足【名】一長き足。二はやい。

ちやうそく-りう 長束流【名】昔、韃人の傳へたりといふ、一派の馬術。

ちやうそ-そば 町率都婆【名】高野山の大塔より政所(マンドコロ)まで百八十町の間、一町ごとに立てて、胎藏界百八十尊の種子(シュ)を書きたる率都婆。町石。

ちやうそ-そん 長孫【名】そうりやうまご(總領孫)に同じ。

ちやうそん 町村【名】〔法〕最下級の地方團體。町と村とは、實質よりいへば同一にして、ただ名稱を異にするのみ。主に商業地を町といひ、農業地を村といふ。

ちやうそん-がくかう-くみあひ 町村學校組合【名】小學校設置の事を目的として、組織したる町村組合。

ちやうそん-きそく 町村規則【名】町村制にて、町村の組織・選舉及び職務・權限を規定せる規則。分ちていへば、町規則と村規則となり。各その條參照。

ちやうそん-ぎやうせい 町村行政【名】町村が町村制によりて自治する行政。分ちていへば、町行政と村行政となり。

ちやうそん-くみあひ 町村組合【名】數箇の町村が共に或事務を處理するために結合する組合。分ちていへば、町組合と村組合とにて、何れも協議の上、任意的に設置して、監督官廳の許可を得るものと、强制によりて設置するものとの二種あり。

ちやうそん-くわい 町村會【名】〔法〕町村の議決機關。分ちていへば、町會と村會とにて、町會は町會議員を以て組織し、村會は村會議員を以て組織し、町村行政一切の重要なる事件その他法令によりて委任せられたる事件を議決し、その執行を監視す。ちやうそんそうくわい(町村總會)參照。

ちやうそん-くわい-ぎゐん 町村會議員【名】町村會を組織する議員。名譽職にして、その數は、人口の多寡によりて、八人以上三十人以下。その町村の公民(所屬府縣郡の官吏及び公吏・神官・僧侶・宗教教師・教員等、又その罷免後一箇月を經ざる者等を除く)中の選舉權を有する者が、その被選舉權を有する者に就き、二級選舉によりて公選す。分ちていへば、町會議員と村會議員となり。

ちやうそん-さい 町村債【名】町村にて、其の負債を償還する爲に、町村制の規定に基きて起す公債。分ちていへば、町債と村債となり。

ちやうそん-しうにふやく 町村收入役【名】町村にて、町村の收入を受領し、其の費用を支辨し、其の他會計一般の事務を掌るもの。分ちていへば、町收入役と村收入役となり。

ちやうそん-じよやく 町村助役【名】町村吏員の一。町村長の事務を補佐し、町村長故障ある時は、その代理をなすもの。分ちていへば、町助役と村助役とにて、任期は共に四年。

ちやうそんせい 町村制【名】町村の自治のために設けられたる法律。即ち町村の區域その住民及びその權利義務・自治の機關たる町村會の組織權限・町村の行政・町村所有財産の管理・町村組合その他町村行政の監督などを規定す。分ちていへば、町制と村制となり。

ちやうそんぜい 町村稅【名】地方稅の一。町村がその財産より生ずる收入及び使用料その他諸種の收入を支出に充用したる上、なほ經費不足なる時、國稅・府縣稅の附加稅及び直接・間接の特別稅として、その管内の住民に賦課する稅。分ちていへば、町稅と村稅となり。

ちやうそん-そうくわい 町村總會【名】町村會の設なき小町村が、規定に從ひて、これに代へて設くる、選舉權を有する管内住民の總會。分ちていへば、町總會と村總會となり。

ちやうそん-ちやう 町村長【名】〔法〕町村を統轄し、その行政事務を代表する公吏。單獨制の行政機關にして、町村會にて、その町村の公民中、年齡滿三十歲以上にて、町村會議員の選舉權を有する男子中より選舉し、府縣知事の認可によりて就職す。任期は四年にして、通例は名譽職なれども、有給の者もあり。分ちていへば、町長と村長となり。

ちやうそん-どうれい 町村條例【名】町村住民の權利義務又は町村の事務に關し、町村自らその自治權によりて制定し、郡參事會及び内務大臣又は内務・大藏兩大臣の許可を得て、その區域内に施行する法則。一定の公告式によりて、住民一般に告示するものにて、實質上、法規の性質を有す。分ちていへば、町條例と村條例となり。

ちやうそん-のうくわい 町村農會【名】町村の區域をその區域とし、その區域内にて耕地・牧場又は原野を所有する者(國及び公共團體を除く)及び農業を營む者の三分の二以上を以て組織する農會。分ちていへば、町農會と村農會となり。

ちやうそんひ 町村費【名】町村が負擔支出する經費。分ちていへば、町費と村費となり。

ちやうそん-やくば 町村役場【名】町長又は村長が、その行政事務を處理する役所。分ちていへば、町役場と村役場となり。

ちやうそん-ゐゐん 町村委員【名】町村が、その自治に屬する行政事務の一部を分掌するために、町村會の議決によりて設置する名譽職の委員。町村會が、町村會議員又は町村公民中の選舉權有る者より選舉す。分ちていへば、町委員と村委員となり。

ちやうだ 長蛇【名】一長大なる蛇。ちやうじや。二縱に一列をなして進む隊形又は進行中の列事などの譬。三「長蛇の陣」を見よ。

長蛇の備(ソナ)【句】常山(ジヤウザン)の蛇勢に講へたる陣。長蛇の陣。

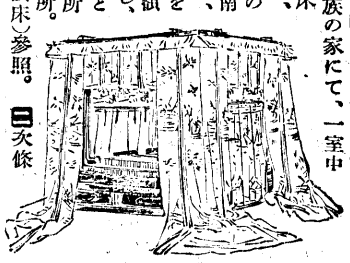
長蛇の陣【句】前條に同じ。

長蛇の列【句】長蛇の如く長くつづきたる列。隊形又は列車などの形容にいふ。

ちやうだい 町代【名】德川時代に、名主の次位にありし町役人。一代女「町代、金杓子吸物椀を持ちながら、…とつぶやくを聞きて」

ちやうだい 頂戴【名】一『頂(イタダ)きて載く義』頭上にささぐること。正統記「豐鋤入姫の命、…天照大神を頂戴して、丹波の吉佐の宮に移りたまひける頃」二『貰ひたる物を兩手に捧げて、頭を下ぐれば、その物を頭上に載きたるがごとくになるより』物を貰ふことの敬語。いただくこと。三物を與へられんことを請ふ時にいふ語。〔俚語〕四俳諧の運座などにて、他人の句を佳しと思ふ時にいふ語。五支那にて、人より賜はりたる物品を自分の頂上に推載き、禮をすること。

ちやうだい 帳臺・丁臺・帳代【名】一王朝時代の貴族の家にて、一室中に、更に床を設けて、繧繝(ウンゲン)の疊二疊を南北に敷き、上に帳幕を垂れ、帽額(モカ)を亙し、南方を枕として、寢所に充てし所。はまゆか(濱床)參照。二次條の略。



(ちやうだい 一)

帳臺の試(コヽロ)【句】五節(ゴセチ)の舞の下稽古。五節の帳臺の試。ごせち(五節)參照。〔古語〕

帳臺の夜【句】帳臺の試(コヽロ)を行ふ夜。

ちやうだい 帳内【名】中古、防衛・騙使の用として、親王に、その品階に從て賜ひし者。

ちやう-だい 脹大【名】はれふくるること。
ちやう-だい 張大【名】擴張して宏大にすること。擴張。張皇。
ちやう-だい 長大【名】一たけ高く大いなること。(短小に對して) 二『禮記の月令篇に「命二大尉一、贊二桀俊一、遂二賢良一、舉二長大一」とあり』すぐれたる人。 三大人となること。盛衰記「平家を責むべき手習とぞ宛ひける。長大の後、兼遠にいひけるは」
ちやう-だいそく 長大息【名】おほいき。ためいき。長息。大息。
ちやう-だい-もの 頂戴物【名】頂戴したる物。いただきもの。
ちやう-たう 長刀【名】一通常のより長き刀。(短刀に對して) 二なぎなた(薙刀)に同じ。
ちやう-たう 廳堂【名】一廣き座敷。おほびろま。おもてざしき。 二諸役を取扱ふところ。役所。
ちやう-だう ぢやうだう-ろん 定道論【名】〔哲〕いしひつぜんろん(意志必然論)に同じ。
ちやう-たつ 暢達【名】一のびそだつこと。 二ちぢまらずに、よくとほること。のびのびと到達すること。「筆路暢達」
ちやう-たん 長短【名】一ながきと、みじかきと。 二長所と短所と。よしあし。得失。 三餘れると足らざると。
長短の說【名】『史記の田儋傳論に「齟通者善爲二長短說一、論二戰國之權變一爲二八十一首一とあり』物事を長くも短くも思ふがままに說くこと。
ちやう-たん 長歎・長嘆【名】長く歎息すること。ためいきつくこと。長大息。
ちやう-だん 長談【名】長ばなし。
ちやう-だん 長彈【名】『英Elongated projectile』長形の彈丸。現時は一般にこれを使用す。
ちやうたん-く 長短句【名】一長き句と、みじかき句と。 二古詩又は樂府(ガフ)などの句の、或は長く或は短く、字數の定まらぬこと。
ちやう-だんす 帳簞笥【名】帳面・金銀などを入れ置く小形の箪笥。
ちやう-たらう 長太郎【名】一假に柱の如く使用して、重きを支ふるもの。「土木業者の語」「ここを、長太郎に預けて」 二圖乘にて、豆人形の如くに作りたる、兒戲の具。「信濃國の方言」 三〔植〕鐵砲百合の變種。葉に白色の深き覆輪あり。
ちやう-だえんけい 長楕圓形【名】一楕圓形の、普通のものより長く狹きもの。 二〔植〕『英Oblong』葉などの形の、楕圓形よりも更に長く、縱は橫の二三倍にして、兩緣の殆ど平行せるもの。
ちやうぢ 長治【名】堀河天皇の御代の年號(紀元一七六四年—一七六五年)。「同じ。
ぢやうぢ 定智【名】〔佛〕ちやう(定慧)に同じ。
ぢやうぢ 貞治【名】後光嚴院の御代の年號(紀元二〇二二年—二〇二七年)。
ちやう-ちく 長軸【名】〔數〕『英Major axis』楕圓の二つの焦點を通過する、楕圓内の線。長徑。(短軸に對して)
ちやう-ちくせき 長竹石・張竹石【名】〔人〕ながまちちくせき(長町竹石)に同じ。
ぢやう-ちし 定地子【名】常に定め置く地子。本地子。(加地子に對して)
ちやう-ちぶす 腸窒扶斯【名】〔醫〕『羅Typhus abdominalis』チブス菌を嚥下せるによりて發する急性熱性傳染病。十五歲より二十五歲頃までの人に多く、微菌は、患者の血液膽汁、その他、全身の臟器即ち腸腸間膜腺脾肝實臟等に存在し、その糞尿と共に體外に排泄せられ、本病傳染の媒介となる。症候は初め全身の倦怠を覺え、頭痛惡寒・發熱・衄血・便祕を來し、遂に精神朦朧として、うはことを發するに至る。九種傳染病の一。昔は傷寒といへり。
ちやう-ちん 提燈・提灯【名】『提灯の宋音。ていとう(提燈)を見よ』一細き割竹を骨とし、筒形又は球形等に紙を貼りて折疊みうるやうにし、用ふる時、蠟燭を點じて、夜行するに携ふる具。弓張提灯・小田原提灯・高張提灯・箱提灯・岐阜提灯・酸漿(ホホヅキ)提灯・ぶら提灯・合籠燈(カゴ)提灯等、種類多し。てうちん。 二鼻汁の氣泡をなして、鼻孔より膨れ出づるもの。(俚語) 三他人に雷同すること、又そのもの。
ちやう-ちん 提灯で餅を搗く【句】もの事の思ふ通りにならぬこと。(諺語)
ちやう-ちん 提灯に釣鐘(カヅキ)【句】二つの物の、權衡を失ひて、比較にならぬこと。(俚語) 吾妻我集「君ふかくほほづきなりの提灯に身をつりがねの片おもひかな」
ちやう-ちん 提灯ほごの火が降(フ)る【句】困窮なるさまにいふ語。
ちやう-ちん 提灯を點(ツ)ける【句】他人に追從して相場をなす。【取引所の語】
ちやう-ちん 提灯を持つ【句】人の爲に過當に褒め、又は誇大に言ひふらす。(諺語)
ちやう-ちん 人の提灯で明(アカ)りを取る【句】「人の褌(フンドシ)で相撲(スマフ)を取る」に同じ。
ちやう-ちん 長枕・大衾【名】長き枕大なる夜具は、友人と同臥するに便なり。これにより、親密になるを、長枕大衾の交といふ。
ぢやう-ちん 定賃【名】常に定め置く賃錢。規定の賃錢。
ちやうちん-あみ 提灯網【名】常陸國霞ケ浦にて、冬季、藻の底にをる鮒を捕ふるに用る具。
ちやうちん-うり 提灯賣【名】提灯を賣ること、又それを業とする人。
ちやうちん-きやうそう 提灯競爭【名】競走遊戲の一。出發點近くに、競走者の數だけ提灯を散らしおき、競走者はその提灯を取りて、手早く蠟燭に火をつけ、消さぬやうに走りて勝を爭ふこと。
ちやうちん-ぎやうれつ 提灯行列【名】祝意を表するため、多くの人が、夜間手に竹の先に吊(ツ)したる酸漿(ホホヅキ)提灯などを持ち、列を組みてねり行くこと。(かんてら行列・たいまつ行列に對して)
ちやうちん-こ 提灯簞【名】『提灯に點火せるがごとき觀あるによりていふ』蠶兒の、空頭病に罹り、その體軀の二三環節膨脹し、やや赤色を帶びて透明となれるもの。
ちやうちん-し 提灯師【名】提灯を作ることを業とする人。
ちやうちん-すぢ 提灯筋【名】『提灯を點(ツ)ける」を見よ』附和雷同する手合(ヒトヅラ)。
ちやうちん-ばな 提灯花【名】〔植〕ほたるぶくろ(螢袋)に同じ。
ちやうちん-ぶぎやう 提灯奉行【名】江戸幕府の職制の一。徒目附(カチメツケ)・奥火之番・掃除頭などと共に、目附の管下に在りしもの。
ちやうちん-まつり 提灯祭【名】一軒提灯をともすのみにて、山車(ダシ)などを出さず、質素に行ふ祭禮。 二つしまつり(津島祭)の俗稱。
ちやうちん-むし 提灯蟲【名】〔動〕浮塵子(カウ)の一種。支那產にて、頭上の突起より光を放つ性あり。びはせみ。
ちやうちん-もち 提灯持【名】一夜行又は葬式の際、提灯を持ちて前行する役、又その役に當る人。 二おさきに使はれ、又は頼まれもせぬに、他人のために、その長所などを、世間に吹聽すること。(俚語)
ちやうちん-もち 提灯持、足元(アシモト)暗し【句】「燈臺下暗し」に同じ。(諺語)
ちやうちん-もち 提灯持、後(シリ)に立たず【句】「後悔先に立たず、提灯持後に立たず」を見よ。
ちやうちん-もち 提灯持、川へ陷(ハマ)る【句】指導の地位にある者の、自ら過つに譬ふ。(諺語)
ちやうちん-や 提灯屋【名】一提灯を作り又は賣る人、又その家。 二『提灯屋が提灯に文字を記す時に、これを行ふこと常なるよりいふ』なすりがき(擦書)に同じ。(俚語)
ちやう-ちやう 廳長【名】一官公署にて、廳の呼稱あるものの長。 二臺灣總督府地方官の一。廳を其の管轄區域とし、臺灣總督の指揮監督を承け、法律命令を執行し、管内の行政事務を管する奏任官。
ちやう-ちやう 町長【名】ちやうそんちやう(町村長)を見よ。
ちやう-ちやう 丁丁打打【貌】『貌詞のちやう(丁)[二]を見よ』つづけざまに堅き物を打つ響。
ちやう-ちやう 悵悵【貌】うらみかこつさま。失望して悲しむさま。
ちやうちやうはつし 丁丁發矢【貌】『はつし(發矢)を見よ』刀又は竹刀にて、はげしく(ゥ)ける」を見よ』附和雷同する手合(ヒトヅラ)。

く戰ふ音。「ちやうちやうはっしと切結ぶ」

ちやうちやく 打擲【名】人をうちたたくこと。うちやうちやく。毆打。

ちやうちゆう 帳中【名】たれぎぬのなか。とばりの中。帳内。

ちやうぢゆうみん 町住民【名】町内に居住する人民。町民。

ちやうぢよ 長女【名】そうりやうむすめ(總領娘)に同じ。

ちやうつう 廳頭【名】近衞府に置かれた職員。府廳の事務を行ひ、舍人(とねり)を取締りしもの。將監以下、殊に將曹等をこれに任ぜり。名目抄「廳頭、チヤウトウ。トノ字ット云フヤウニアルベシ」

ちやうづがけ 頂頭懸・頂頭掛【名】〓侍烏帽子の懸緒(かけを)。てうづがけ。てうどがけ。〓『前記の頂頭懸を掛くるによりていふ』えぼしかけ(烏帽子掛)に同じ。

(一)頂頭懸

ちやうづかひ 定使【名】常に他人に頼まれ、又は役所などの雜用に使はるる小使。

ちやうづけ 帳附【名】帳面に記すこと。又その役に當る人。

ちやうづけ 丁附【名】書籍の紙數を記すこと。さしづ。

ちやうづまる 長頭丸【名】〔人〕まつながていいさく(松永貞德)の號。

ちやうづまるずゐひつ 長頭丸隨筆【名】〔書〕和歌・連歌に關する隨筆。一卷。松永貞德の著。

ちやうづめ 腸詰・腸詰【名】『英 Sausage』西洋料理の一。鷄・豚・牛(ぎう)又は七面鳥などの腸の中に、その肉又は肝臟などの刻みたるもの、又その血液などを詰め、香味又は葡萄酒を加へて、蒸燒にしたるもの。豚を用ふる場合最も多く、蒸燒の外、日乾にすることあり。

ちやうづめ 定詰【名】役所に詰切りて居ること、又その人。長直。

ちやうづら 帳面【名】「面」の略。

ちやうてい 長程【名】長きたびぢ。長途。

ちやうてい 長弟【名】弟の内にて、最も年長なるもの。

ちやうてい 長汀【名】ながきみぎは。

ちやうてい 長汀曲浦【句】長き汀と曲れる浦と。(遠くつづきたる海濱の形容にいふ) 太平記「長汀曲浦の旅の路」

ちやうてい 長堤【名】長きつつみ。

ちやうてい 長亭【名】長き驛路。

ちやうてい 長亭・短驛【句】道中の驛路の、或は長く或は短くさまざまなること。

ちやうてい 長亭・短堠(たんこう)【句】前條に同じ。

ちやうてう 定朝【名】〔人〕佛工。京都七條佛師の祖。清水寺の別當康尙の子。治安年中京都法成寺の佛像を刻みて、後一條天皇の叡感に入り、法橋に敍せらる。佛工を僧官に敍すること、ここに始まる。後、法眼に昇敍せられ、清水寺の別當となる。

ちやうでうれい 町條例【名】ちやうそでうれい(町村條例)を見よ。「じ。

ちやうてき 長笛【名】わうてき(横笛)に同じ。

ちやうてつ 鋌鐵【名】『英 Ingot iron』くわいてつ(塊鐵)に同じ。「對して」

ちやうてふ 長帖【名】長き敷物。(短帖に對して)

ちやうてん 頂點【名】〓〔數〕『英 Vertex又は Apex』角をなす二直線の相會する點。又、多面角をなす數面の相會する點。圓錐又は角錐の尖頭。〓いただき。最上點。

ちやうてん 帳殿【名】大嘗祭の時、皇后臨御の建物と、又供物(くもつ)を置く所と。

ちやうでんらく 長殿樂【名】〔音〕しやうふうらく(秋風樂)に同じ。

ちやうと 長途【名】長き旅路。なが道中。

ちやうと 打ど・丁ど【貌】〓物と物と打合ふ音のさま。平家「障子を丁と引きたてて」〓きりりと。ちやんと。きちんと。〓目かどをたてて見つむるさま。はっと。はたと。

ちやうど 丁度【名】端數(はすう)の無きこと。

ちやうど 丁度【副】〓恰もよく。ほどよく。〓あだかも。さながら。宛然。

ちやうど 丈度【名】たけ。ながさ。

ちやうど 定度【名】一定の度合。「よ。

ちやうとう 廳頭【名】ちやうつう(廳頭)を見よ。

ちやうとう 丁銅【名】日本固有の製煉法にて作りたる精製型銅。

ちやうとう 杖頭【名】奈良朝時代の太刀の一種。今の仕込杖の如きもの。「同じ。

ちやうどう 鎚銅【名】くわいどう(塊銅)に同じ。

ちやうとうせん 杖頭錢【名】『支那皆の阮籍飮酒を嗜み、常に百錢を杖にかけて行きたりといへる故事より出でたる語』酒代百文。「條に同じ。

ちやうとうひやくせん 杖頭百錢【名】前ちやうとうがけ(頂頭懸)〓に同じ。

ちやうとく 長德【名】一條天皇の御代の年號(紀元一六五五年—一六五八年)。

ちやうとくじ 長德寺【名】『長德寺は駿河國府中の片山にありし寺にて、一日一步と定めて、席を貸したるより始まるといふ』金一步の異稱。(德川時代の遊廓の語) 置土產『女郎へ、長德寺二百、宿の總(かか)に、金子十兩』

ちやうとくゐん 長得院【名】〔人〕あしかがよしかず(足利義量)の諡。

ちやうところ 町所【名】町名・番地。「俚語」博多小女郎波枕『好い年をして、京の町の作法知らぬか、町所へも斷りなく、人の留守に踏込み、疊まで裏拂ひ」

ちやうとぢ 帳綴【名】〓帳面をとづること、又その人。〓昔正月四日に、商家にて、その年に用ふる帳面を綴り祝ふこと。左衞帳とぢや春風わたる門の竹」

ちやうとぢどり 丁度取【名】球突にて、ゲエムの終りに殘れる點數を、丁度その數だけ過不足なく取ること。

ちやうとん 長噸【名】〔商〕『英 Long ton』重量の單位なる噸の、英國の制に依れるもの、即ち二千二百四十ポンド(我が二百七十一貫弱)を一噸とするもの。石炭・コオクス等の運賃の計算には、通常これを用ふ。

ちやうない 帳內【名】〓とばりの中。帳中。(帳外に對して) 〓帳面の記入範圍。(帳外に對して) 〓ちやうだい(帳內)を見よ。

ちやうない 町內【名】その町の內。ひとつ町內廣く【句】肩身を廣く。心中宵庚申

「けふといふけふ、町內ひろう戻ったはいの」

ちやうない 場內・場內【名】その場所のうち。(場外に對して)

ちやうなふ 聽納【名】きき入ること。承諾。ていなふ。聽許。

ちやうなみ 町並【名】〓町ならび。各町。〓町のならび工合。〔俚語〕

ちやうなん 長男【名】そうりやうむすこ(總領息子)に同じ。

ちやうなん 廳南【名】〔地〕上總國長生郡にある町。茂原(もばら)の西南約三里。康正年間武田信榮(のぶよし)の據りし廳南城址あり。

ちやうなんじやう 廳南城【名】前條を見よ。

ちやうにち 長日【名】ちやうじつ(長日)〓に同じ。(主に佛敎上の文章にいふ) 梁花「長日の御修法」

ちやうにち 定日【名】ていじつ(定日)に同じ。「町費。

ちやうにふひ 町入費【名】町內の入費。

ちやうにん 町人【名】〓町家に住む人。商人。まちびと。(武士に對して) 〓町家に住む家持の人。町人衆。町衆。「話」

町人の刀好(かたなごのみ)【句】次條に同じ。〔諺語〕

町人の侍話(さむらひばなし)【句】身分の卑しき者が、高尙なる話をなす類の、不似合なることの譬。町人の刀好み。〔諺語〕

町人は筋目より金【句】町人は家柄より金を貴ぶ。〔諺語〕

ちやうにん 停任【名】官人を、その罪過により、一時罷免すること。平家「罪科もっとも逃れがたし。早く殿上の御札を削づって、闕官・停任行はるべきか」

ちやうにん 丈人【名】ちやうじん(丈人)〓に同じ。

ちやうにんごしらへ 町人拵【名】町人の娶に仕立つること。町人風になしたる身ごしらへ。一代男「帶はうす鼠のまがい織、町人拵、七所の大脇指すこし反らして」

ちやうにんしゆう 町人衆【名】ちやうにん(町人)〓に同じ。「大阪の語」俚言集覽「大阪にて町人と云ふ。又、町人衆といふは、家

持の事なり。家持たぬは、借家人といふ。京にては、家持を町衆といふ」

ちやうにんぶくろ 町人嚢【名】〔書〕町人の道徳を主として、資格・目的・方法などを平易に記したるもの。七巻。具原篤信の著。

ちやうねだん 定直段【名】定めたる直段。きまりの直段。定價。

ちやうねん 長年【名】㊀ながき年月。㊁ながいき。長生。㊂長き年月の間奉公すること。

ちやうねん-たいはう 長年太寶【名】次條「の略。

ちやうねんたいはう-せん 長年大寶錢【名】我が國の古錢の一。仁明天皇の嘉祥元年より文徳天皇の天安二年までに鑄造したる銅錢。面に「長年大寶」の文ありて、一枚にて、舊錢十枚に當てしめられたり。

ちやうのう 貞能【名】**ちやうのを**(鮒尾)に同じ。古寫本節用集「貞能矢根、鰶、鮒尾」節用集「器財。貞能矢」

ちやうの-うくわい 町農會【名】**ちやうそんのうくわい**(町村農會)を見よ。「下を見よ。

ちやうの-ぎ 仗の議【句】**ちやう**(仗)の條

ちやうのうきん 醸膿菌【名】〔醫〕くわのうきん(化膿菌)に同じ。

ちやうの-くらうど 廳の藏人【句】**ちやう**(廳)の條下を見よ。

ちやうの-ごばう 廳の御坊【句】**ちやう**(廳)の條下を見よ。

ちやうの-ざ 仗の座【句】**ちやう**(仗)の條

ちやうのじづる 長尋鶴【名】紋所の一。長の字を草書にかき、鶴の形とせるもの。

ちやうの-や 廳の屋【句】**ちやう**(廳)の條下を見よ。

ちやう-の-を 鮒尾【名】鏃の一種。古寫本節用集「貞能矢根、鰶、鮒尾」

(ちやうじのうやち)

ちやうば 帳場・帳塲【名】商店・工場などにて、帳附・金錢の出納・勘定などを行たふために特に設けたる所。

ちやうば 町場・丁場【名】㊀宿驛と宿驛との間。㊁人夫の役にあてられて、物を運送し、又は官道などを掃除する、その道程。㊂仕事の受持區域。工區。㊃石材の山もと。

ちやうはい 停廢【名】**ていはい**(停廢)に同じ。

ちやうはう 聽胞【名】〔動〕じなう(耳嚢)に同じ。

ちやうはう 長保【名】一條天皇の御代の年號(紀元一六五九年―一六六三年)。

ちやうばう 悵望【名】うらめしげになが むること。うらむること。

ちやうはうけい 長方形【名】〔數〕『英Oblong』くわい(矩形)に同じ。(正方形に對して)

ちやうはうじ 長保寺【名】紀伊國海草(きのくに)郡濱中村に在る天台宗の寺。慶德山と號す。一條天皇の勅願にて、長保年間に建立す。性空を開山とす。德川賴宣を葬りてより、藩主の菩提所となれり。

ちやうはうたい 長方體【名】〔數〕『英Oblong』高さ又は長さの、幅に比して長き立方體。

ちやうば-がうし 帳場格子【名】帳場に鉤の手に立つる格子の衝立。結界。

ちやうば-がかり 帳場係【名】帳場にて、帳簿記入・金錢出納などを取扱ふもの。

ちやうばく 帳幕【名】とばりとまくと。

ちやうはく-さん 長白山【名】〔地〕滿洲と朝鮮との界にある熄火山。高さ八〇〇〇尺。古名、太白山・白山。

ちやうばこ 帳箱【名】帳簿書附などを入「置く箱。

ちやうはじめ 廳始【名】院の廳または檢非違使廳にて行ひし、執務開始の儀式。

ちやうはち 長八【名】㊀てすぎもの(出過者)を云ふ。「大阪の語」㊁義俠者を暗にあしざまにいふ語。「大阪の語」

ちやうはつ 長髮【名】㊀さかやきを剃らずに、髮を長くすること。㊁頭髮の長きこと。(短髮に對して) 正統記「唐の則天皇后は、…太宗かくれたまひて、尼になりて、…おはしけるを、高宗見たまひて、長髮せしめて皇后とす」

ちやうはつ 醸發【名】はっかう(醱酵)に同じ。

ちやうばつ 杖罰【名】**ちやうざい**(杖罪)にて、帳附・金錢の出納・勘定などを行たふために特に設けたる所。

ちやうはつ-ぞく 長髮賊【名】『その徒皆髮を醬へて、淸俗の如く瓣髮ならざりしよりいふ』淸國の咸豐より同治に至る十數年間、洪秀全を首として、猖獗を極めし匪徒。

ちやうはふ 定法【名】定まりたるのり。きまりたるかた。おさだまり。「よ。

ちやうば-ばみ 丁食【名】**てうばみ**(調食)を見よ。

ちやうはん 丁半【名】㊀丁の數と半の數と。偶數と奇數と。㊁采の目の丁の數なるか半の數なるかを言ひあてて、勝負を爭ふ博奕(ばくえき)。丁半博奕。

ちやうばん 打板・提盤【名】㊀うんばん(雲板)に同じ。㊁紋所の一。前記の打板を象(かたど)りたるもの。劃(わり)打板・三(み)つ打板、その他種種あり。「に同じ。

おやうばん 定番【名】**じやうばん**(城番)㊁

ちやうはん-づきん 長範頭巾・長焚頭巾【名】くまがづきん(熊坂頭巾)に同じ。

ちやうはん-ばくえき 長半博奕【名】**ちやうはん**(丁半)㊁に同じ。

ちやうはんびし 打板菱・提盤菱【名】紋所の一。打板を菱形にせるもの。「を見よ。

ちやうひ 町費【名】**ちやうそんひ**(町村費)

ちやうひ 張飛【名】〔人〕支那三國時代の蜀の勇將。字は益德。涿郡の人、關羽と共に劉備を輔けて屢戰功あり。後その屬將張達・范彊に殺さる。

ちやうび 丁日【名】丁の數にあたれる日。即ち二日・四日・六日・八日など。丁の日。

ちやうび 長鼻【名】鼻筋のながき鼻。

ちやうび 長尾【名】ながき尾。

ちやうひ 醸費【名】醸造の費用。

おやうひきやく 定飛脚【名】定まりたる飛脚。定まりし宿驛を、常に往來するもの。

ちやうび-けい 長尾鷄【名】〔動〕雞の一變種。土佐國篠原の特産。雄雞の尾羽非常に長く、一丈四五尺乃至二丈に達す。白色種・褐色種・銀灰色種の三あり。普通嘴と脚趾とは黃色を呈し、冠は鮮紅色を呈す。ささなみ・ながをどり。

ちやうびけし 定火消【名】江戸時代の職制の一。江戸市内の防火の事を掌りしもの。萬治元年始めて四組を置き、元祿八年十五組に增加し、後には減じて、また四組となれり。若年寄の支配に屬す。「同じ。

おやうびけし-やく 定火消役【名】前條に

ちやうひこっきん 長腓骨筋【名】〔醫〕『羅Musculus peroneus longus』下腿腓骨側の一。二頭を有し、足の外緣を擧上し、又外轉する作用を營む。

ちやうびし-せい 長尾星【名】長く光芒を曳く星。はうきぼし。長星。

ちやうびや 丁火矢【名】昔時の大砲の一種。將軍吉宗の時、大筒役佐佐木助三郎盛に命じて製作せしめ、また同人をして、車仕掛大筒を製作せしめたること、史に見えたり。

ちやう-びやう 長病【名】ながやまひ。ながわづらひ。五人玄來屋の八左衞門、長病なりしが、今宵相果て申されしに」

ちやうびやう-にん 長病人【名】ながく病ふ人。ながやみする人。

ちやうびやく 丁百・丁陌【名】『ちやうじふ(丁五十)を見よ』次條の略。(九六百などに對して)

ちやうびやく-せん 丁百錢【名】**ちやうせん**(丁錢)に同じ。

ちやうびる-るゐ 長鼻類【名】〔動〕哺乳動物中の一目。鼻長き圓筒狀をなして突出し、鼻孔その尖端にありて、恰も手の如き動作を爲すもの。現時生存するものにては、ただ象のみこれに屬し、すでに死滅せるものにマンモスとマストドンとあり。

ちやうびる-るゐ 長尾類【名】〔動〕節足動物甲殼類・十脚類の一亞目。體は長くして、頭胸部と腹部とに分る。頭胸部は一箇の大なる筒狀の甲殼に被はれ、腹部は頭胸部より長くして、可動的なる六箇の環節と一箇の尾節とより成り、橈足(ろくそく)のよく發達したる尾扇を具ふ。通常、鰕類と稱す。(短尾類に對して)

ちやうふ 長婦【名】㊀『後漢書の馮衍傳に「自恥二短陋一、恐二子孫似一レ己、爲二子娶一長婦一」とあり』身の丈(たけ)高き婦(をんな)。㊁『爾雅に「長婦謂二稚婦一爲レ婦」とあり』長子の妻。あによめ。

ちやうふ 長府【名】〔地〕『長門國の府中の義。古、國府(こふ)の在りし地なるよりいふ』長門國豐浦(やまうら)郡にある町。下關(しものせき)を

距ること一里餘、周防灘に臨む。鐵道山陽線の一驛。毛利氏支藩の封地。仲哀天皇の豐浦宮の址あり。古稱、豐浦町。通稱、豐浦町。

ちやうぶ 町歩【名】町を單位として、反別を數ふること。

ちやうぶ【助數】ちやう(町)㊀に同じ。

ちやうふ 定府【名】徳川時代に、諸國の大名中の或者の、特に參觀交替をなさず、常に江戸に在府せしこと。例へば、三家中の水戸家を筆頭とし、伊豫西條・上野矢田・奥州守山・常陸府中及び宍戸(シシド)・越後糸魚川(イト)等の松平氏・近江宮川の堀田氏等。

ちやうふ 丈夫【名】『支那周尺の一丈が、人の身長なりしより』一人前の男子。ますらを。**だいぢやうふ**(大丈夫)參照。

ちやうぶ 丈夫【名】㊀身體の壯健なること。㊁堅固。堅牢。

ちやうふう 長風【名】遙かに遠き方より吹來る風。「長風萬里」

ちやうふくじ 長福寺【名】㊀山城國葛野(カヅノ)郡梅津村大字東梅津にある臨濟宗の寺。大梅山と號す。仁安三年眞理の創基にかかる。花園法皇、中興開山月林に歸依し給ひて、勅額を給ふ。足利の頃、禪林十刹の一に列せり。㊁山城國葛野(カヅノ)郡川勝寺村に在る眞言宗の寺。天明四年桃園天皇の皇后恭禮門院の創建。皓月宗嶺比丘尼の開基。一説に、後花園天皇の御願、天明年中の再興と。㊂常陸東茨城(ヒガシイバラキ)郡下大野村大字鯨崎に在る眞言宗の寺。應永二年の創立にて、槃導を開基とす。

ちやうぶそうし 長奉送使【名】古、齋宮の、伊勢に下りたまふ時、野宮(ノノミヤ)より伊勢の多氣(タケ)の宮まで送りたてまつりし勅使。納言・參議の中より選任せられたり。長泰送使。**ちやうそうし**(長送使)參照。源氏「ちやうぶそうしなど、さらぬ上達めも、やんごとなく、おぼえあるをえらせたまへり」

ちやうふだ 定札【名】芝居などにて、定連の證とする札。若鳳盤「鼻紙の間より定札六七枚も續きしを取出し、又近き程に見物したまへといへば」

ちやうぶつ 長物【名】㊀ながき物。㊁『ちやうたん(長短)㊂』を見よ』必要以外の物。無用の物。むだもの。贅物。「無用の長物」

ちやうぶん 長文【名】篇章のながき文。字數の多き文。(短文に對して)

ちやうぶんせい 張文成【名】〔人〕支那唐代の文學者。則天武后の宮中に入りて、その醜行を目撃し、事を神仙に托して遊仙窟を著せりと傳ふるも確證なし。桓城酒呑童丸「千度見れば、千千の想きびし、一度見るに、一つの面白い事深しとは、張文成が仙女に契りし詞」

ちやうへい 長兵【名】長き武器、卽ち槍な(ど。(短兵に對して)

ちやうへん 長篇【名】篇章の長き詩文。句數の多き詩文。(短篇に對して)

ちやうへんもの 長篇物【名】長篇の著作物。長篇。(短篇物に對して)

ちやうべゑ 長兵衛【名】〔人〕㊀戯れに長谷部左衛門尉信連の通稱に擬していふ。柳樽「御立(オタチ)だと長兵衛早太(ハヤ)ゆりおこし」㊁次條を見よ。

ちやうべゑぎく 長兵衛菊【名】文政頃の彫金工、菊川長兵衛の彫りたる菊。

ちやうぼ 帳簿【名】㊀**ちやうめん**(張面)に同じ。㊁財產に增減變化を及ぼす一切の取引事項を記載する帳簿。日記帳・仕譯帳・元帳等の如し。我が商法にて、帳簿は十箇年保存すべき規定あり。

ちやうほ 場圃・場圃【名】『詩經の豳風七月篇に「九月築二場圃一」とあり』はたけ。

ちやうほ 定補【名】定まりてその職に補すること。

ちやうぼ 丈母【名】しうとめ(姑)に同じ。(丈人に對して)

ちやうぼ 醸母【名】〔植〕**ちやうぼきん**(醸母菌)に同じ。

ちやうぼいん 長母音【名】〔語〕『英 Long vowel』聲を長く引きて發音する母音。例へば、a, e, i, o, u など。(短母音に對して)

ちやうぼかいけふ 長豐海峽【名】〔地〕**しものせきかいけふ**(下關海峽)に同じ。

ちやうぼそうし 長奉送使【名】**ちやうぶそうし**(長奉送使)に同じ。

ちやうぼうらく 長保樂【名】〔音〕高麗壹越(イチコツ)調の雅樂。泛野(ハンヤ)舞。

ちやうぼがかり 帳簿係【名】帳簿の記入・整理を受持つ役、又その掛員。帳簿方。帳面方。

ちやうぼかた 帳簿方【名】前條に同じ。

ちやうぼきん 醸母菌【名】〔植〕(酵母菌)に同じ。

ちやうぼく 長木【名】**かうぼく**(高木)に同じ。

ちやうぼたいしやくかんおやう 帳簿貸借勘定【名】**じんめいかんちやう**(人名勘定)に同じ。

ちやうほふじ 頂法寺【名】**ろくかくだう**(六角堂)參照。

ちやうぼへいさ 帳簿閉鎖【名】一定の期間內の收支決算をなすため、帳簿を締切ること。

ちやうほん 張本【名】**ていほん**(底本)に同じ。

ちやうぼん 張本【名】㊀『左傳の隱公五年の杜註に「晉內相攻伐、不レ告レ亂、故不レ書、傳具二其事一、爲二後晉事張本一」とあり』もと。おこり。原因。根本。㊁**ちやうぼんにん**(張本人)に同じ。蟬山姥「われは卜部熊武と申す山賊の張本」

ちやうぼんにん 張本人【名】惡事を行ふものの發頭人。盜賊などの首領。張本。

ちやうぼめん 帳簿面【名】帳簿の記載面、卽ちその記載したる事項・數量などの狀態。帳面づら。帳づら。

ちやうぼり 丁掘【名】根切工事の一。卽ち壁になるべき局部の下を、その方向に溝を掘ること。

ちやうまい 丁間【名】**ひろま**(廣間)に同じ。

ちやうまい 醸米【名】米を醸して、酒を造ること。

ちやうまつ 長松・丁松【名】徳川時代に、商家の兒童の名として多く用ひし語。ちよま。和莊兵衛「丁稚丁松に飯たかせ」野坡「長松が親の名で來る御慶かな」

ちやうまつこぞう 長松小僧【名】安永天明頃にありた物乞。左手に人形を持ち、右手に貰ひたる米錢などを入るるための角樽を下げて「長松小僧が參りました云云」と云ひつつ、市中を廻り歩きしもの。

ちやうまへ 帳前【名】京都三十三間堂にて通矢(トホシ)の矢數とその射手の名とを榜(カク)に記して堂上に懸けしこと。京童「帳前といふは、一すぢをとほすを望むなり」

おやうまへ 錠前【名】**ちやう**(錠)に同じ。

おやうまへなほし 錠前直【名】次條に同じ。

おやうまへや 錠前屋【名】錠前の修繕を業とする人。おやうまへなほし。

ちやうまん 帳慢【名】とばり。たれまく。

ちやうまん 腸滿・腸滿【名】〔醫〕腹膜に水樣液の溜りて、腹部の甚だ大きくなる病、卽ち腹部の水腫。今國姓爺「この中、腹滿頗ひ、皮一重下は水で御座る」

おやうみせ 定見世・定店【名】一定の場所にありて定まれる物を商ふ店。

おやうみとり 定見取【名】徳川時代に、開墾・埋立等に多額の費用を要せし畑に對して、一定の輕き租を永久に課せしこと。

ちやうみん 町民【名】町に住む人民。

おやうみやう 定命【名】㊀(佛)前世の因業(ゴフ)によりて、限定せられたる命數。承壽。㊁その人に定まりたる命數。

ちやうみやうとう 長明燈【名】じやうとう(常燈明)に同じ。

ちやうむ 廳務【名】㊀官廳の事務。㊁檢非違使(ケビヰシ)廳の事務。著聞「廳務ことにおこし沙汰ありけるに」㊂昔、門跡に仕へて、僧坊の事務を管掌せし僧職。肉食・妻帶をなし、齒を染め、僧衣を著、白袴を著けて、腰に刀を帶びたり。脇門跡にては官人といへり。坊官。

おやうむ 定務【名】さだまりたるつとめ。

ちやうめ 丁目【助數】同じ町の內を幾つかに分ちたる數の順序を示す語。「京橋區尾張町二丁目」

ちやうめい 長命【名】ながいき。長壽。(短)

ちやうめい 長明【名】〔人〕かもちやうめい(鴨長明)を見よ。

ちやうめいぎく 長命菊【名】〔植〕菊科に屬する多年生の草。高さ二三寸。葉は菠薐草(ハウレン)に似てやや細長く、一根より數葉を簇出す。春、長き花梗を抽き、形、小菊に似て、重瓣なる白・淡紅・覆輪等の花を開

く。ひなぎく。

ちやうめい-ぐわん 長命丸【名】徳川時代に行はれたる淫藥の一。守武千句「腹の痛きもやすきはたりちやうめい丸や合はすらん」

ちやうめい-さう 長命草【名】〔植〕一たばこ(煙草)(一)に同じ。二ちやうじかやくさ(丁字唐草)(二)に同じ。

ちやうめい-じ 長命寺【名】一近江國蒲生(ガマウ)郡奥の島に在る天台宗の寺。本尊は觀音等薩。武内大臣の本願とも、一説に、天智天皇の御願にて建立せりとも傳ふ。織田氏の頃、兵火に罹りしも、後再興す。西國巡禮三十一番の札所。明治三十七年特別保護建造物となる。二東京市本所區向島(ムカジマ)須崎(スサキ)町にある天台宗の寺。本尊は阿彌陀佛。脇門内に商ふ櫻餅を以て名高し。

ちやうめいせいざえもん 長命清左衛門【名】〔人〕ちやうめいりう(長命流)(一)を見よ。

ちやうめい-さう 長明燈【名】じやうやう(常燈明)に同じ。

ちやうめい-へいたらう 長命平太郎【名】〔人〕ちやうめいりう(長命流)(一)を見よ。

ちやうめい-みちのき 長明道記【名】〔書〕さうくわんきかう(東關紀行)を見よ。

ちやうめいーりう 長命流【名】一能(ノウ)の笛の一派。長命清左衛門(足利時代の人。初は寶生座に屬し、後、金剛座に轉ず)を祖とす。二狂言の一派。長命平太郎(蓑猿之助と稱す)を祖とす。

ちやうめい-る 長命縷【名】『風俗通に「五月五日以二五綵絲一繫レ臂、使二人不レ病レ瘟、一名長命縷、一名辟兵繪、一名五色縷、一名綵索、一日續命縷」とあるに本づく』我が國の藥玉(クス)の類。支那にて、端午に吊し下げて飾りしもの。五彩絲。續命縷。

ちやうめう-じ 頂妙寺【名】京都市上京區大菊町に在る日蓮宗の寺。妙國院と號す。四十四箇本山の一。後花園天皇の寶徳元年、日祝の開基に係る。

ちやうめん 帳面【名】〔植〕えどのき(奪疇果)を云ふ。〔土佐國の方言〕

ちやうめん 帳面【名】金錢・物品の出納及び日記などを記し置く册子。帳簿。

帳面に外(ノ)る【句】帳簿に載らぬ。曾我蕭我が墓まだ鹿一頭をも得ず、御帳面に外れしこそ安からねー

ちやうめん 定免【名】一きめてゆるすこと。二徳川時代に、年限を定めて、田租の幾分を免除せしこと。三徳川時代に、五年もしくは十年の檢見(ケン)の租額を平均して租率を定め、一定の年限内は、年の豐凶に關係なく、その租率によりて納めしめしこと。はめん(破免)參照。

ちやうめん-かた 帳面方【名】一ちやうばがかり(帳簿係)に同じ。二江戸幕府の職制の一。諸役所及び國國の計算帳などを檢することを掌るもの。

ちやうめん-づら 帳面面【名】帳面の上の記載の有樣。ちやうづら。帳簿面。〔俚語〕

ちやうめん-とり 定免取【名】定免(三)によりて、租稅を徵收すること。けみとり(檢見取)參照。

ちやうも 暢茂【名】草木などのびしげること。おひしげること。「母歯(ハハシ)」に同じ。

ちやうも-きん 釀母菌【名】かうもきん(酵母菌)

ちやうも-く 張目【名】目を見張ること。目を開きて睨むこと。

ちやうもく 長目・飛耳【句】『管子に「一日長月、二日飛耳、三日樹明、明知二千里外、隱微之中、目動姦動則變更矣」とあり』能く遠き事物を見、また聞くこと。飛耳長目。

ちやうもと 帳元【名】興行などの一切の勘定を取締る所、又その人。

ちやうもん 帳門【名】閨に垂したる幕の入口。謡曲(水無瀬)「更闌け、夜しづかに、帳門開かざるに、影の如くに見えたまふは」

ちやうもん 聽聞【名】一注意してきくこと。耳を引立ててきくこと。大鏡「聽聞しければ、ただ今や過去聖靈は、蓮臺の上にてひよと吠えたまふらんとのたまひしに」「頭上。二佛法の說教を聞くこと。

勘定を取締る所、又その人。

ちやうもん 帳門【名】閨に垂したる幕の入口。謡曲(水無瀬)「更闌け、夜しづかに、帳門開かざるに、影の如くに見えたまふは」

ちやうもん 頂門【名】いただきの最上部。頂門の一針(シン)【句】頭上に一本の針を刺す如くに、人の弱點を衝きて、辛辣(シンラツ)に戒むること。頂針。

頂門の金椎(ツヰ)【句】『黄庭堅の詩に「頂門須三更下二金椎一」とあり。鐵椎を以て、頭上を打つの義』前條に同じ。

ちやうもん 定文【名】定まれる文言。きまりの文書。ただめぶみ。

ちやうもん 定紋【名】その家の代代用ひ來れる紋所。表紋・裏紋の別あり。家紋。

ちやうもん-しゆ 聽聞衆【名】聽聞する人人。大鏡「清範律師の、犬のために法事しける人の講師に請(シヤウ)ぜられて、…聽聞衆ども、ささと笑ひて歸りにき」

ちやうもん-つき 定紋附【名】定紋の附きてあること、又その物。

ちやうもん-どころ 聽聞所【名】說教などを聽聞する場所。

ちやうや 長夜【名】一夜の時間の長きこと。冬の長き夜。ながよ。よなが。(短夜に對して)二『左傳の襄公十三年の條に「春秋寵歿之事」とありて、註に「寵・厚也、歿、夜也、厚夜猶二長夜一、春秋謂二祭祀一、長夜謂二葬埋一」、埋葬せらるること。めいど。よみぢ。三『史記の樂書に「輕積細過、忝心長夜」とあり』「長夜の飲(イン)」の略。

長夜の飲(イン)【句】『韓非子の說林篇に「紂爲二長夜之飲一」とあり』夜明くるも、尙戸を鎖し、燭を點じて、宴を續くること。夜通し宴を張ること。

ちやうや 廳屋【名】「廳の屋」に同じ。今昔「廳屋の大なる内に、長筵を敷滿てて」

ちやうやう 張揚【名】さかんに言ひふらすこと。誇張。

ちやうやう 長養【名】そだてやしなふこと。養育。

ちやうやく 町役【名】ちやうやくにん(町役人)に同じ。鳩翁道話「御年寄をはじめ、町役・家持の人人、一同に座に著きますると」

ちやうやく 定役【名】一平常設け置く稅目。(臨時役に對して)二武家の役所の、勘定その他の雜務を執る下役。「外國奉行支配定役」

ちやうやくにん 町役人【名】徳川時代に、市中に設けられて、その區域内の町民に關する事務を取扱ひしもの、即ち名主・町代・町年寄など。まちやくにん。ちやうやく。

ちやうやくば 町役場【名】町長の事務を取扱ふ役場。まちやくば。

ちやうやど 定宿【名】さだめの宿。いつも宿泊するやどや。常宿(ジヤウ)。麝筵波「蝶鳥の定宿なれや家ざくら」一代男「田舍の人、たまたまの遊興も是非なし。定宿をきはめ、大臣といはるるほどの人」

ちやうやう 張喰【名】〔文〕こちやうはふ(誇張法)に同じ。

ちやうやうゆうずゐ 長雄蕊【名】〔植〕自花受精を避くる自然の妙用として、一花中の雌雄蕊の長さ不同なる場合の、長き雄蕊。(短雄蕊中間雄蕊に對して)

ちやうやう 聽用【名】ききわけて用ふること。納得して用ふること。

ちやうやう 聽容【名】一てうよう(聽容)に同じ。二ちやうきよ(聽許)に同じ。

ちやうやうはふ 聽容法【名】〔法〕きよようはふ(許容法)に同じ。

ちやうやくるゐ 長翼類【名】〔動〕鳥類の一目。嘴は質硬く、通常その末端鉤狀に屈曲す。前の三趾は蹼(カキ)を張る。長大なる翼を具へて能く飛翔す。阿呆鳥(アハウ)・鷗(カモメ)・海燕(ウミツバメ)等、これに屬し、多くは海鳥なり。

ちやうらい 頂禮【名】印度の古代の最敬禮。長者の前に俯伏し、頭頂を以て、その人の足下を拜せしもの。「歸命頂禮」

頂禮高(カウ)じて、尼になる【句】信仰が過ぎて、遂に佛門に入る。〔諺語〕賀古敎信七變疊「幼き者に强意見。頂禮高じ

て尼ヶ崎」

ちやう-らう 長老【名】一年長けて敬すべき人。先輩。二〔佛〕學德共にすぐれたる僧。高僧。**さんちやうらう**(三長老)參照。三〔佛〕**じやうざ**(上座)㊀を見よ。四〔佛〕住持の僧。(主に禪宗にていふ)【增鏡】道覺上人を長老になされて、淨土宗を置かる」同「西大寺の長老」太平記「禪林寺の長老」五〔基〕『英 Elder 又 Presbyter』一の教會の名譽職又は牧師(按手禮によりて聖職となりたる長老(教職長老)と、按手禮によりて聖職とならざることを要件とする、謂はゆる信徒の長老(統治長老)との二種あり。前者のみを認むる教會と、後者をも認むる教會とあり。

ちやうらう-けうくわい 長老教會【名】〔基〕『英 Presbyterianism』基督教新教の一。改革派及びカルビン派の神學說を基礎として、その信仰箇條を定め、長老組織を以てその教會統治の形式とせる宗派。

ちやうらう-せいど 長老制度【名】〔基〕次條に同じ。

ちやうらう-そしき 長老組織【名】〔基〕『英 Presbyterianism』教會の組織の、教職長老の外、信徒の長老をも認めて、これにその統治權を委任し、信徒の總會は、信徒中より長老を選擧する權能はあれども、統治の本位は選出せられたる長老にのみあるべきものと定めたるもの、卽ち國家の貴族政體に類するもの。長老制度。**ちやうらう**(長老)五參照。

ちやうらう-うばな ちやうらう花【名】〔植〕**あけび**(木通)に同じ。

ちやうらう-うぶぎやう 長老奉行【名】室町時代に、禪寺の住持・移轉及び法儀等の事務を掌りし奉行。「話。

ちやうらう-かし【名】ちやうらかすこと。〔俚

ちやうらう-かす【動四他】馬鹿にす。なぶる。おひやらかす。からかふ。愚弄す。ちやかす。〔俚語〕「御臺所か姫君の樣に、猫ちやうらかしてござってもすまぬこと」

ちやう-らく 暢樂【名】心のびやかにして、たのしきこと。

ちやう-らく 長樂【名】とこしへにたのしきこと。たのしみの長きこと。

ちやうらく-きゆう 長樂宮【名】**くわうたいこうぐう**(皇太后宮)の別稱。

ちやうらく-じ 長樂寺【名】一京都東山の一部なる圓山(まるやま)安養寺の南にある時宗の寺。本尊は十一面觀音。洛陽三十三所觀音の一。延曆年間、桓武天皇の草創、傳敎大師の開基。二上野國新田(につた)郡世良田村世良田にある天台宗の寺。本尊は釋迦如來。叡山の學僧榮朝禪師の開基。後鳥羽天皇の勅願所。足利時代には、後柏原天皇の保護により、寺門の偉觀關東に冠たりしが、後大いに荒廢せしを、天海僧正、家康の命により再興し、家光の代、東照宮の廟の建立せられしより、莊嚴舊時にまさるに至れり。

ちやうらく-じ-ぎれ 長樂寺切【名】名物切(めいぶつぎれ)の一。後には、茶入の袋につくりて用ふ。

ちやうらく-じ-は 長樂寺派【名】〔佛〕次條「に同じ。

ちやうらく-じ-りう 長樂寺流【名】〔佛〕淨土宗の一派。法然の弟子にして、京都の長樂寺に住せし隆寬律師(世に長樂寺律師と呼ぶ)を祖とす。

ちやうらく-じ-りつし 長樂寺律師【名】〔人〕前條を見よ。

ちやうら-くむ 丈六組む【動四自】「丈六を襠(あて)く」に同じ。〔京都・大阪の語〕

ちやうらく-もん 長樂門【名】平安京舊內裏の內郭十二門の一。その南方、承明門の左にありしもの。

ちやうらく-もんゐん 長樂門院【名】〔人〕後二條天皇の中宮。藤原公孝の母。名は忻子(きんし)。正平二年薨ず。

ちやうら-らん 漲亂【名】水のみなぎりみだれて流るること。

ちやうら-らんけい 長卵形【名】卵形を長くしたる如き形。長き卵形。

ちやうらり 長吏〔名〕一頭だつ役人。二勸修寺園城寺及び延曆寺の橫川(よかは)などにて、その寺務を統ぶる役僧。勸修寺のは一に別當といひ、延喜十年滿尊のこれに任ぜられしを始とし、通例同寺の門主の兼職たり。園城寺のは、貞觀元年圓珍の任ぜられしを始とし、その門流相承くる例なりしが、近世は圓滿院・實相院・聖護院の三門跡交替してこれに任ぜられ、今は天台宗寺門派の管長を兼ぬ。橫川のは楞嚴(りやうごん)院檢挍ともいひ、貞觀の頃、安惠の任ぜられしを始とす。三穢多の頭。聖德太子の悲田院を建てたる時、命ぜる語なりといふ。

ちやうり 長利【名】後後までの長く久しき利益。永遠の利益。

ちやうり 張里【名】一伯樂。馬醫者。二

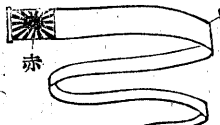
ちやうり(長吏)三に同じ。

ちやうり 定離【名】わかれはなるるに定まれること。「會者(えしや)定離」

ぢやうり 場裡・塲裡【名】一社會の、ある事の行はるる範圍內。「交際場裡の花」「逐鹿場裡」

ちやうり-りう 長流【名】白ながきながれ。

ちやうり-りう 長旒【名】海軍旗章の第一種旗章の一。その艦船の指揮權を有する將校の表章たるもの。



(うりうやち)

ちやうり-りう 漲流【名】みなぎるながれ。

ぢやうり-き 定力【名】〔佛〕禪定に由りて、煩惱(ぼんなう)を斷じ、佛果に到る力。太平記「我慢・邪慢の大天狗ども、…不退の行學を妨げんとしけれども、上人、定力堅固なりければ、隙を窺ふことを得ず」

ちやうり-つ 町立【名】『立の字の音、正しくはりふ』町にて設立すること。

ちやうり-つ 長律【名】〔文〕**はいりつ**(排律)に同じ。

ちやうりんばう 長吏坊【名】『ちやうり(長吏)三を見よ』(穢多)の俗稱。

ちやうりやう 張良【名】一〔人〕支那前漢の功臣。字は子房。韓のために、博浪沙に鐵椎を以て秦始皇を劫(おびや)かし、後、劉邦の臣となりて、秦を滅し、楚を平げて、漢業を成す。惠帝の六年に歿す。二話曲の一。支那前漢の張良が、圯上(いじやう)の老人より、兵法を授かりしことを作れるもの。

ちやうりやう 丈量【名】地積の測量。

ちやうりやう-りう 張良流【名】兵法の一流派。支那前漢の張良の兵法に基くと稱するもの。

ちやうりやく 長曆【名】後朱雀天皇の御代の年號(紀元一六九七年—一六九九年)。

ちやうりよ 長旅【名】長途の旅行。ながたび。【陳元贇】「とても長旅及びがたし」

ちやうりよく 張力【名】一はりのぶる力。はりひらく力。二〔理〕緊張せられたる物體に作用する力。三『英 Tension』絲に錘をつるすとき、絲の各部は錘の重さに等しき力にて、上下に引きあへる、その力、又絲の兩端に二力の作用して引きあふ場合にも、その各點に於て相隣する部分が、兩端に作用せる力を以て引きあへる、その力など。**へうめんちやうりよく**(表面張力)參照。

ちやうりやうゐん 町吏員【名】町の行政を取扱ふ吏員、卽ち町長・町助役・町收入役の類。

ちやうれい 廳例【名】撿非違使(けびゐし)廳にて、久しく慣行したる法式。

ちやうれい 廳令【名】一廳より發する命令。二北海道廳長官・樺太廳長官又は臺灣の各廳の廳長の、長官が部內の事務に付き、その職權もしくは特別の委任によりて發布する行政命令。

ちやうれい 頂禮【名】**ちやうらい**(頂禮)を見よ』

ちやうれい 長齡【名】**かうれい**(高齡)に同じ。

ぢやうれい 定例【名】**ていれい**(定例)に同じ。

ぢやうれい 杖藜【名】『藜を杖つく義。れいおう(藜杖)參照』藜(ざあ)の莖を杖として用ふること。「同じ。

ぢやうれん 定連【名】**じやうれん**(常連)に同じ。

ぢやうれんが 長連歌【名】〔文〕**くさりれんが**(鎖連歌)に同じ。(短連歌に對して)

ちやうろ 長老【名】**ちやうらう**(長老)の誤。

ちやうろう-じ 長瀧寺【名】美濃國郡上(ぐじやう)郡北濃(ほくのう)村大字長瀧にある天台宗の寺。本尊は阿彌陀如來。もと縣社白山神社の別當たり。

ちやうろく 長祿【名】後花園天皇の御代の

年號(紀元二一一七年—二一一九年)。

ちやう-ろく 丁六【名】てうろく(調六)を見よ。

ちやう-ろく 丈六【名】㊀一丈六尺。釋尊在世の時の人の身長は、普通八尺なりしに、釋尊のみは一丈六尺なりきとの傳に本づきて、主として、佛の身長にいふ。㊁「丈六の佛」の略。㊂「丈六、金色(コンジキ)の佛」 圓丈六の彌陀(ミダ)」 芭蕉「丈六にかげろふ高し石の上」 ㊃**ちやうろくぶつ**(丈六佛)の略。

ちやうろくのほとけ 丈六の佛(ホトケ)【句】たけ一丈六尺に作れる佛像。(主に趺坐の姿に作る)

ちやうろく-はちしゃく 丈六・八尺【句】釋尊の身長と、その當時の一般の人の身長と。

ちやうろくをかく 丈六を構(カマ)く【句】『ちやうろくを見よ』

ちやうろく-だう 丈六堂【名】〔佛〕丈六の阿彌陀佛を安置せる堂。

ちやうろく-つうはう 長祿通寶【名】後花園天皇の長祿年間に鑄たる銅錢。

ちやうろくね 丈六居【名】『丈六の佛』を見よ』あぐらをかくこと。趺坐。丈六。親長卿記、宣胤の返書に、龜居(カメヰ)・筒居(ツヽヰ)・丈六居」

ちやうわ 長和【名】三條天皇の御代の年號(紀元一六七二年—一六七六年)。

ちやうわ 貞和【名】光明天皇の御代の年號(紀元二〇〇五年—二〇〇九年)。

ちやう-わきよ 張橫渠【名】〔人〕ちやうさい(張載)に同じ。

ちやう-わん 茶碗【名】ちやわん(茶碗)の音便。〔古語〕大型の菜を摘みて、むしものといふ物にして、ちやうわんに盛りて」

ちやう-ゐ 長圍【名】㊀ながく取りかこむこと。長期の包圍。ながきかこみ。㊁長く圍ひめぐらしたる柵。

ちやう-ゐ 帳帷【名】とばり。たれまく。

ちやう-ゐ 腸胃・腸胃【名】㊀腸と胃と。㊁〔戰國策の秦國の條に「取三晉之腸胃」とあり〕肝要なる箇所を、人體の腸胃に比していふ語。肝腎。

ちやうゐ-かたる 腸胃加答兒【名】〔醫〕『羅(Gastroenteritis)』腸と胃とにカタルをおこせる病。腸胃の兩者は相連續せる消化管なるが故に、その一方にカタルおこる時は、移行しやすきなり。

ちやう-ゐん 廳員【名】廳の名稱なる官公署の職員。

ちやう-ゐんゐん 町委員【名】**ちやうそんゐゐん**(町村委員)を見よ。

ちやう-ゑ 定慧【名】〔佛〕禪定と智慧と。「定智。止觀。

ちやう-ゑ 定慧【名】〔佛〕『大日經疏卷三に「左手是三昧義、右手是般若義」とあり』禪定は靜的、智慧は動的にして、共に佛道修行に必要なること、人體の二手のごとくなること。左手を定に、右手を慧に配す。

ちやう-ゑ 定慧の二手(テ)【句】〔佛〕前條に同じ。盛衰記「定慧二手の掌の内に、佛法破滅の纓絡(マヽ)を捧げて、三井寺を燒亡さんと計ふらん」 謠曲(碁)「それ碁は、定慧の二手を見せ」

ちやう-ゑ 定慧・貞慧【名】〔人〕法相宗の僧。大和國多武峰妙樂寺の開山。藤原鎌足の子。出家して、慧隱を師とし、のち入唐し、歸路百濟に入り、詩を以て大名あり。國人の妬むところとなり、毒を進められ、歸朝後寂す。

ちやう-ゑん 長圓【名】〔人〕平安朝時代の佛像彫刻家。圓勢の子。康治二年法金剛院の佛像を作れり。圓勢の四子皆彫刻家たりし中に、この人最も技術に秀でたり。

ちやう-ゑん 長垣【名】小微の南にある星。

ちやう-をう 釀甕【名】酒をつくるかめ。

ちやう-をく 場屋・塲屋【名】くわぢやう(科場)に同じ。

ちやう-をん 長遠【名】**ちやうきう**(長久)に同じ。 狂言「壽命長遠でござらう」

ちやう-をけ 茶桶【名】**ちやうけ**(茶請)の轉訛。

ちやう-おほつ 茶大津【名】大津の茶色なるもの。壁の上塗に用ふ。

ちやうがけ 茶掛【名】茶席に掛くる掛物。多くは小幅にして、書幅を用ふることは珠光に始まり、畫幅は利休に始まりといふ。

ちやうせきがけ ちやせきがけ。

ちやうかご 茶籃【名】茶器を入るるかご。

ちやうかす 茶滓【名】**ちやがら**(茶殼)に同じ。

ちやうかす 【動四他】㊀輕んず。馬鹿にす。ちやにす。ひやかす。嘲弄す。ちやうらかす。〔俚語〕 椿庵「ここでお前樣(マヽ)に殺されりやあ、私(ワツ)もよつぽど有卦に入つたのだと、またちやかして」 ㊁**ちよろまかす**(一)に同じ。 雜組錦嚢「月の紅葉」十貫目といふ敵金を、あの女めにちやかされやうか」

ちやうかた 茶方【名】茶の式によるもの。茶の湯の形式又は慣習。 鴉齋道話「當時、京の町は茶の湯がはやると聞いたゆゑ、茶かたの雪隱を建てるつもりぢや」

ちやうかつしよく 茶褐色【名】黑ばみたる茶いろ。とびいろ。

ちやうがのこ 茶鹿子【名】茶色の鹿子絞(カノコ)。「(ボカシ)。

ちやうがはが 【貌】**ちやぐはぐ**に同じ。

ちやうがはり 茶代【名】**ちやだい**(茶代)(一)に同じ。 狂言「(盧橘寺)「なう御坊、茶代を忘れさつしやれた。」

ちやうがふ 茶合【名】煎茶の道具の一。通常、竹の中間に、一つ節を置きて二つ割にせるものにて作り、先づ茶をこれに移して、その量を見はからふに用ふるもの。

ちやうかぶき 茶歌舞伎【名】茶道の七事の一。茶の銘を隱し置き、飲味ひて、その銘をあつることと。かぶきちや。

ちやうがま 茶釜・茶鑵・茶鎗【名】㊀上の方窄くして、口狹き一種の釜。眞鍮鐵などにて造り、茶を煎ずるに用ふ。鑵子。 ㊁かまどしばら(落しばら)に同じ。「に同じ。

ちやうがまのき 【名】〔植〕かんあふひ(寒葵)

ちやうがゆ 茶粥【名】茶の煎汁にてたきたる粥。京都・大阪などの人、主としてこれを食ふ。いれやがゆ。**ちやめし**(茶飯)(一)參照。浮世床「京中で茶粥をすする音が、ごつちやになつて聲く音ぢや」

ちやうがゆ-ばら 茶粥腹【名】㊀茶粥を喫りたる腹。 ㊁幾內の人は、茶粥を多く食ふよりいふ。幾內の人を嘲りていふ語。〔關西の俚語〕

ちやうがら 茶殼【名】茶を煎じ出だしたる滓。ちやがら。

ちやうがる 【動四自】『さがる(下る)の轉か』わきへ退く。「上總國下野國の方言」

ちやうき 茶器【名】煎茶・抹茶の道具。ちやだうぐ。茶具。

ちやうき 茶氣【名】㊀洒脫にて、浮世ばなれせること。しぶみ。「茶氣を帶ぶ」 ㊁萬事を茶にする氣分。道樂氣分。ふざけ氣味。

ちやうぎ 茶技【名】**ちやだう**(茶道)(一)に同じ。「方言」

ちやうぎ 【名】あばた(瘡痕)を云ふ。〔周防國の

ちやうきちやうき 【名】衆人の中にて、はぶりのよき人。きけもの。はばき。「江戸っ子のちやうきちやうき」

ちやうきちやうき 【貌】㊀擊拆の音。かちかち。 ㊁剪刀(ハサミ)にて物を切る音。〔俚語〕

ちやうきん 茶巾【名】㊀茶器を拭ふ布。ちやぶきん。 ㊁茶家にて、茶碗を拭ふに用ふる麻の布巾。大きさは、曲尺にて長さ一尺、幅五寸を通常とすれど、一尺五分に五寸五分の大きさのもあり。昔は、朝鮮の照布(テリヌノ)を用ひしが、今は、主に奈良晒を用ふ。

ちやうきん-あらひ 茶巾洗【名】**ちやきんだらひ**(茶巾盥)に同じ。

ちやうきん-いも 茶巾薯【名】蒸したる薩摩薯を擂鉢にてすりつぶし、砂糖などにて味を附け、巾に包みて握り固めたる食品。

ちやうきん-さばき 茶巾捌【名】茶の湯の時の、茶巾の扱ひ方。 重寶記「茶杓の持ちやう、茶巾さばき習うておきや」

ちやうきん-しぼり 茶巾絞【名】茶巾茸・茶巾百合のごとく、茶巾にて包み、口をひねり

て、型をつけたるものの總稱。

ちやきん-だらひ 茶巾盥【名】茶の湯にて、茶巾または茶筌を洗ひすすぐに用ふる器。杉の曲物または陶製・銅製等あり。茶巾洗。

ちやきん-づつ 茶巾筒【名】茶の湯に使用する、茶巾を入るるに用ふ筒形の器。通常、竹にて作り、また陶製なるもあり。

ちやきん-づつみ 茶巾包【名】しやきんづつみ(砂金包)の訛。

ちやきん-ぶくろ 茶巾袋【名】茶巾を入るるための袋。隨意の布帛にて作り、上緣よりやや下の方に紐を附く。「金餅」の訛。

ちやきん-もち 茶巾餅【名】しやきんもち(砂金餅)の訛。

ちやきん-ゆり 茶巾百合【名】百合(ユリ)を原料として、茶巾薯の如くしたる食品。

ちやく 鐸【名】すず(鈴)に同じ。

ちやく 笛【名】ふえ(笛)に同じ。謠曲(羽衣)「笙・ちやく・篳・くご」

ちやく 嫡【名】一ちやくしゆつ(嫡出)に同じ。二ちやくし(嫡子)に同じ。三ちやくさい(嫡妻)に同じ。

ちやく 著着【名】『著の字につきては、つく(著く)を見よ』一衣服を身につくること。きること。二つくこと。到著。(發に對して)「午後六時著」

ちやく 著着【助數】一衣服を數ふるに用ふる語。「洋服二著」二『ちやくちやく(著著)を見よ』到著又は著手の順序を示すに用ふる語。「一橫著」「隣著」

ちやく 著着【接尾】無意味に添ふる語。

ぢやく 著着 持藥【名】持病などを治するために常に服用する藥。あひぐすり。

ちやぐ 茶具【名】ちやぶ(茶器)に同じ。

ちやく-い 著衣【名】一衣服を著ること。二著用したる衣服。著服。

ちやく-い 著衣の祝【句】「產衣(ウブ)の祝」に同じ。

ちやく-い 著意【名】一心を著くること。氣のつくこと。注意。留意。二心のつけどころ。著眼。三ちやくさう(著想)に同じ。

ちやく-え 著衣【名】一ちやくい(著衣)に同じ。二次條の略。

ちやく-え 著衣の祝【句】「產衣(ウブ)の祝」に同じ。

ちやく-えき 著驛【名】その列車の到著する停車場。(發驛に對して)「に同じ。

ちやくえ-はじめ 著衣初【名】「著衣の祝」生れたる子。法律上有効なる婚姻をなせる夫婦の間に出生せる子。

ちやく-か 嫡家【名】正統の血脈をひきたる家筋。ちやくけ。本家。宗家。

ちやく-かう 著港【名】港に到著すること。(發港に對して)

ちやくかう-とどけ 著港届【名】船舶が開港場に到著したる時、その旨を記して、船長より港長に差出す届。

ちやく-かふ 著甲【名】甲(よろひ)を身に著くること。擐甲(カンカフ)。

ちやくかふ-はじめ 著甲始【名】「鎧の著初(キソ)」に同じ。

ちやく-がへ 著替【名】きかへ(著替)に同じ。

ちやく-がん 著眼【名】一目をつくること、注意を向くること。二眼の著けどころ。きのつけどころ。著目。

ちやく-がん 著岸【名】岸に著くこと。

ちやく-がん-せう 著岩礁【名】〔地〕えんせう(緣礁)に同じ。

ちやく-がん-てん 著眼點【名】めのつけどころ。みつけどころ。著目點。「に同じ。

ちやく-きぼ 著鬼簿【名】てんきぼ(點鬼簿)に同じ。

ちやく-きやう 著京【名】京(ケイ)へ到著すること。きやうちやく。

ちやくきやく-じ 定額寺【名】ちやうがくじ(定額寺)に同じ。

ちやくきやく-そう 定額僧【名】ちやうがくそう(定額僧)に同じ。

ちやく-ぎよ 著御【名】たうちやく(到著)の「敬語。

ちやく-け 嫡家【名】ちやくか(嫡家)に同じ。太平記「名家は清花を超え、庶子は嫡家を越えて」

ちやく-こ 著袴【名】一はかまをつくること。二はかまぎ(袴著)に同じ。

ちやく-ご 著語【名】言葉を添ふること。

ぢやく-ご 著語【名】〔佛〕公案の下に著くる短評。

ちやく-ごん 著袴【名】ちやくこ(著袴)に同じ。名目抄「御著袴。オンチヤクゴン」

ちやく-ざ 著座【名】一座に就くこと。その場にすわること。著席。二任官せられて、官廳外記廳に著くこと。

ちやく-さい 嫡妻【名】正しき妻。正當なる妻。むかひめ。正妻。本妻。正配。嫡室。

ちやく-さう 著想【名】一心をつくること。思想を注ぐこと。著意。屬意。二思想を構ふること。おもひつき。工夫。著意。構想。

ぢやく-さう 著想【名】〔佛〕事物に執著する妄想。「し。

ちやく-し 嫡嗣【名】嫡出の世つぎ。てきし。

ちやく-し 嫡子【名】一嫡出の長子。嫡男。家嫡。正嗣。嫡出子。二家督を相續すべき嗣子。よつぎ。あとつぎ。てきし。

ちやく-しつ 嫡室【名】ちやくさい(嫡妻)に同じ。「日。

ちやく-じつ 著日【名】著く日。到著したる日。

ちやく-じつ 著實【名】落ちつきたること。うはつかぬこと。輕佻ならぬこと。「に。

ちやく-じに 著時に【副】ただちに。卽時。

ちやく-しん 著信【名】到著したる音信。受信。(發信に對して)「る心。

ぢやく-しん 著心【名】〔佛〕事理に執著すること。

ちやくしん-きよく 著信局【名】電報の著する方の電信局。(發信局に對して)

ちやくしん-きよくしよ 著信局所【名】他の電信局所より電報を受けて、受信人に交付する電信局所。(發信局所に對して)

ちやく-じやう 著城【名】城に到著すること。城下につくこと。

ちやく-しゆ 著手【名】一手を著くること。業にとりかかること。なしはじむること。てはじめ。二〔法〕殺人犯にて、刀を振上げ、人を斬らんとせしごとく、犯罪の實行に直接關係を有する行爲。

ちやく-しゆ 撰手・篠手【名】〔佛〕『梵 Vitarka の譯語。撰は張る義』拇指と中指とを張りひろげたる長さ。いっちやくしゆはん(一撰手半)參照。

ちやくしゆ-ちゆうしはん 著手中止犯【名】〔法〕中止犯の一。犯罪人が犯罪に著手しながら、實行に及ばずして、自らこれを中止したるもの。

ちやく-しゆつ 嫡出【名】正妻の腹に生ること。法律上有効なる婚姻をなせる夫婦の間に出生。

ちやくしゆつ-し 嫡出子【名】正妻の腹に生れたる子。法律上有効なる婚姻をなせる夫婦の間に出生せる子。

ちやくしゆつ-ひにん 嫡出子の否認【名】〔法〕夫が其の生兒の嫡出子たるを否認すること、卽ち民法の規定に、婚姻成立の日より二百日後、又は婚姻の解消もしくは取消の日より三百日內に生れたる子は、婚姻中に懷胎したるものと推定せり。故に婚姻成立の日より二百日前、又は解消取消の日より三百日後生れたる場合は、夫は其の生兒の嫡生出兒ならざることを主張することを得。

ちやくしゆ-みすゐはん 著手未遂犯【名】〔法〕未遂犯の一。犯罪に著手したれども、意外の失錯、障礙などにあひて、實行し得ざりしもの。(缺効未遂犯に對して)

ちやく-しよ 嫡庶【名】本腹と妾腹と。正妻の子と妾の子と。

ちやく-しよく 著色【名】繪畫に彩色を施すこと、又その彩色。布彩。

ちやくしよく-ぐわ 著色畫【名】著色したる繪畫。彩色したる繪。

ちやくしよく-しやしん 著色寫眞【名】『英 Chromophotograph』アニリン色素の如き透明なる顏料を用ひて、寫眞印畫に彩色を施せるもの。

ちやくす 著す【動佐變自】一著(ツ)く。とどく。到著す。二つきて離れず。附著す。三執著す。

ちやくす 著す【動佐變他】一著(ツ)ける。著用す。二身に著く。持つ。

ちやく-すゐ 著水【名】水上飛行機が、水上に降下せしこと。「じ。

ちやく-せき 著席【名】ちやくざ(著座)に同じ。

ちやく-せき-じゆん 著席順【名】著席する順序。又著席したる順序。

ちやく-せん 著船【名】船の、港に著くこと、又その著きたる船。(發船に對して)

ちやくせん-あんない 著船案內【名】ちやくせんしんこく(著船申告)に同じ。

ちやくせん-しんこく 著船申告【名】『英 Ships reports』船舶の或港灣に入港したる時、その地の稅關に、その旨の届出をなすこと。著船案内。

ちやく-そう 嫡宗【名】㊀同族中の總本家。㊁正統を傳ふるもの。

ちやく-そうそん 嫡曾孫【名】嫡孫の嫡子。正統記「舒明天皇は、…まさしき敏達の御孫、欽明の嫡曾孫なり」

ちやく-そん 嫡孫【名】嫡子の嫡子。本筋の

ちやくそん-しようそ 嫡孫承祖【名】〔法〕

しようそうぞく(承祖相續)に同じ。

ちやく-だ 著鉇【名】『鉇(ダ)は鐵にて作りたる械(アカセ)にして、「かなぎ」と訓ず』古、囚獄司にて、徒役の罪囚を駈役する時、又鑄錢司にて、私鑄錢を驅役せし時に、その足に鉇を著け、三四人連ね、且つ逃走を防ぐために鈴を附けてせしこと。

著鉇の勘文(ンジモ)【句】著鉇の政を行ふに當り、衞門府より、著鉇すべき獄囚を檢して、その員數、所貫及び年齡、罪名、贓物を錄め註記して奉りし勘文。

著鉇の政(コヒツ)【句】中古の公事の一。毎年五月・十二月に行はれたり。鞍馬村より召出して、囚人に擬したる者の首に白布を置き、檢非違使をして、笞にて打つ眞似をせしめしこと。

ちやく-たい 著帶【名】孕婦が五箇月目に腹帶を締むること、又その式。おび。ゆはたおび。東鑑「御臺所御著帶也」「じ。

ちやく-たい 著鉇【名】㊀ちやくだ(著鉇)に同著鉇の政(ケタヅ)【句】「著鉇(ケタヅ)の政」に同じ。

ちやくたい-しき 著帶式【名】著帶の儀式。吉日(近世は專ら戌の日)を擇びて行ひ、式畢りて、三獻・七五三等の儀あり。

ちやく-たう 著到【名】㊀たうちやく(到著)に同じ。㊁昔、官府などに備付けて、出勤の吏員の氏名を記せし帳簿。㊂昔、出陣の前、諸方より軍勢の來り著くを記したるもの。木を丸く細く削り、頭を切子(コヒツ)形にし、これを軸として、接ぎたる紙を卷きたるもの。その書方は、「年號月日、何之國勢著到之畳」と書きて、次に「誰殿幾千騎、幾百騎、誰殿幾拾騎」のやうに記すなりといふ。太平記「著到を附けて見よとて、國國を分けて、著到を附けたるに、手勢三千六百餘騎、外樣(マザ)の軍勢四千餘騎とぞ註しける」㊃ちやくたうわか(著到和歌)を見よ。

著到に附く【句】出陣に際して、諸方より來著せし諸將、その名を著到目錄に記錄せらる。謠曲「鉢の木」「痩せたりともあの馬にのり、一番に馳せ參じ、著到につき、さて合戰始らば」

ちやくたう-じやう 著到狀【名】昔、出陣の際、諸方より來著したる諸將の、部下の軍勢を率ゐて馳せ參ぜし旨を上將に報ぜし狀。これを受取りたる上將は、その奥に「承了」「一見了」「見了」等の文字を記入し、且つその下に花押を署し、又は單に花押のみを署して、再び本人に下付す。

ちやくたう-でん 著到殿【名】神社にて、勅使その他の參拜者の氏名を書記するために設けたる建物。床を設けず。大なる神社には、その設あり。

ちやくたう-もくろく 著倒目錄【名】古、出陣に當りて、諸方より到著したる人の名を順次に列記したるもの。

ちやくたう-やぐら 著到櫓【名】本城の大手門の脇などに設け、大將が勢揃(ロヘ)・馬揃などを展望するためにせし櫓。

ちやくたう-わか 著到和歌【名】百日を限として、毎日一定の場所に參集し、日日題を替へて、歌を詠むこと。ちやくたう。

ちやく-たく 著宅【名】家に到著すること。

ちやく-だん 著彈【名】發射せし彈丸の到達すること、又その到達したる彈丸。

ちやくだん-きより 著彈距離【名】だんちやくきより(彈著距離)に同じ。

ちやく-ぢん 著陣【名】㊀軍隊などの、陣所に到著すること。㊁陳の座に著くこと。徒然「近衞殿著陣したまひける時。膝突を忘れて、外記(ゲ)を召されければ」

ちやく-ちやう 著帳【名】武家時代に、馬馬の數などを記したる帳簿。

ちやく-ちやうし 嫡長子【名】嫡出の長子。

ちやく-ちやうしそん 嫡長子孫【名】㊀嫡長子と嫡長孫と。㊁嫡長子または嫡長孫。

ちやく-ちやうそん 嫡長孫【名】嫡出の長孫。

ちやく-ちやうだんし 嫡長男子【名】嫡出の長男子。

ちやく-ちやく 嫡嫡【名】嫡子より嫡子とつぎつぎに家を繼がしむること。保元「源太が產衣と膝丸とは、嫡嫡に傳ふることなければ」

ちやく-ちやく 著著【副】『接尾語のちやく(著)㊀を見よ』一步一步に。漸漸に。やうやうに。おひおひに。

ちやく-ちやく【副】『ちやくを重ねていへる語』手まめにするさま。ちよいちよい。よくちよく。ちやちや。〔俚語〕大手柄。なくちやくちやくと取れる蠟燭のくし」

ちやく-ておよ 嫡女【名】嫡出の長女。

ちやく-てい 嫡弟【名】嫡出の弟。

ちやく-てん 著點【名】附著する箇所。到著する地點。

ちやく-でん 著電【名】電信の到著すること、又到著したる電報。「正統の相傳。

ちやく-でん 嫡傳【名】嫡嫡相傳ふること。

ちやく-と【副】手ばやく振舞ふさま。すぐさま。すみやか。ちやっと。醒睡笑「嬉しげに手を出し、憚らずつかまんとしけるを、小兒、ちやくと手をとらへ」「じ。

ちやく-なん 嫡男【名】ちやくし(嫡子)に同じ。

ちやくなん-さうぞくはふ 嫡男相續法【名】〔法〕『英 Primo-enture』相續制度の一。嫡男が嫡女その他庶子等を排して、王位・家督又は遺產の全部を相續するもの。

ちやく-にん 著任【名】任所に到著すること。

おーやくにん 地役人【名】㊀その土地の役人。德川時代に、長崎などにて、その土著の人を取立てて、市中の小役人とせるもの。㊁島廳を置かざる東京府下三宅島・御藏島・神津島・新島等にて、島司と同一の職務を掌る判任官。

ちやく-ね 著値【名】〔商〕おきちやくね(沖著)に同じ。

ちやく-ばう 著帽【名】帽子を頭に著くること、又著けて居ること。「ると。發著。

ちやく-はつ 著發【名】到著すると出發すること。

ちやくはつ-しんくわん 著發信管【名】〔兵〕『英 Percussion fuze』彈丸の目標に到著したる瞬時に、その炸藥に點火する裝置。擊發信管。

ちやくはつ-しやげき 著發射擊【名】〔兵〕著發信管又は複動信管の著發裝置等を用ひ、彈丸を著發せしめつつ行ふ射擊。

ちやくはつ-だん 著發彈【名】〔兵〕著發信管を裝著せる彈丸。

ちやく-ひつ 著筆【名】筆を著くること。又、筆の著け方。書き樣。

ちやく-ふ 著府【名】府に到著すること。

ちやく-ふく 著服【名】㊀ちやくい(著衣)に同じ。㊁次條に同じ。

ちやく-ぶく 著服・著腹【名】窃かにわが有とすること。窃かに流むこと。

ちやく-ぼ 嫡母【名】庶子に對する、父の正妻。法律上、庶子との間の關係は、實母と實子との間に於けると同一とす。てきぼ。(庶母に對して)「したる米。

ちやく-まい 著米【名】輸送せられて到著

ちやく-みず 茶汲【名】茶を汲むこと。茶を汲みて薦むること、又その役、又その人。

ちやく-もく 著目【名】ちやくがん(著眼)に同じ。

ちやくもく-てん 著目點【名】ちやくがんてん(著眼點)に同じ。

ちやく-よう 著用【名】衣類を身に著くること。「洋服著用」「袴著用」

ちやくよう 著雍【名】『爾雅に「太歲:在」戊曰:著雍」とあり』つちのえ(戊)の異稱。

ちやく-らく 著落【名】らくちやく(落著)に同じ。

ちやく-らべ 茶較【名】茶の優劣を比較すること。狂言「止動方角」「山一つあなたへ茶くらべに參るが」

ちやく-りう 嫡流【名】㊀本家の家筋。正統の血統。(庶流に對して)正統記「上は、光孝の御子孫、天照大神の正統と定まり、下は、昭宣公の子孫、天兒屋(アメノ)命の嫡流と

なりたまへり」 ㊀正統の流派。

ちやく-りき 擇力【名】〔佛〕一切の事理を識別・批判する智慧の力。

ちやく-りく 著陸【名】飛行機の、空中より下りて、陸上に著すること。

ちやくり-ちやっと 【副】【副】 次條に同じ。

ちやくり-ちやっと 【副】ちょっくらちょっとに同じ。〔俚語〕 鷹狩遊「ふりもふったるなりのよき袖ていふ句に若い衆の茶の湯をちやくりちやと出して」

ちやく-れう 著料【名】㊀著用の料とするもの。 ㊁黄八丈の幅狭きもの。

ちやぐろ 茶黒【名】黒ずみたる茶色。

ちやくわ 茶菓【名】茶と菓子と。さくわ。

ちやくわい 茶會【名】客を會して、煎茶又は抹茶を供する小集。ちやのゑ。

ちやぐわし 茶菓子【名】茶を飲む時、あしらひに食ふ菓子。一代男「初雪の朝(アシ)、俄かに壺の口切りて、茶菓子は、鑞(非)の行器に入れ」

ちやーけ 茶家【名】茶の湯の道に遊ぶ人、又それを業とする人。

ちやーけふ 茶業【名】茶を栽培・製造し、又これを販賣する業。

ちやげふ-くみあひ 茶業組合【名】茶の製造を精良にし、また賣買を正確ならしむる目的にて、茶業者の組織する組合。茶業組合規則にて、強制的に設けしめらるるものにて、農商務大臣に於て加入の必要なしと認むる者の外、すべてこれに加入せざるべからざることと定めらる。

ちやげふくみあひ-きそく 茶業組合規則【名】茶業組合の組織を定めたる規則。明治二十年農商務省令第四號を以て公布せられたり。

ちやげふ-しや 茶業者【名】茶を製造・販賣する者、又は茶園を有し、茶の生葉を販賣する者、生葉若しくは製茶を仲賣又は販賣する者の總稱。

ちやーけむし 茶毛蟲【名】〔動〕ちやのけむし(茶毛蟲)に同じ。

ちやこし 茶漉【名】小さく深き篩に柄を著け、粉茶(コナチヤ)を入れて、上より熱湯を注ぎ、茶汁を下に滴らしむるやうにせる具。

ちやごと 茶事【名】先祖父母などの忌日に、牡丹餅などをこしらへ、茶を煮て、人を招くこと。【伊勢國の方言】一代男「初雪、火燵(クワタツ)の火にて、御華足(クワタツ)の團子を手に觸れ、茶事せしこと、見て興あり」

ちやーこもん 茶小紋【名】茶色の小紋。一代男「淺黄の麻上下に、茶小紋の著物(モノ)」

ちやーざい 茶劑【名】〔醫〕植物藥の混合せるを、茶のごとく熱湯に浸出して、多量に飲む藥劑。

ちやーさかもり 茶酒盛【名】酒の代りに、茶を用ひて、共に飲食し興ずること。

ちやーさじ 茶匙【名】抹茶をすくひ取るに用ふる細く狹き匙。

ちやーざしき 茶座敷【名】茶をたつる座席。茶の間。かこひ。數寄屋。茶室。茶寮。茶席。

ちやさん-しつ 茶盞室【名】煎茶道具の一。茶碗を入れおくに用ふる筒形の器。竹を編みて作る。

ちやーし 茶肆【名】ちやや(茶屋)㊀に同じ。

ちやーし 茶師【名】葉茶又は抹茶を製し、又は賣る人。はぢやや。 傾城酒呑童子「梅田と申す茶師にて候」

ちやーじ 茶事【名】茶の湯に關する事柄。新可笑記「今の町人、茶事は榮耀と心得、…數寄屋長路地(ロヂ)に商(アキナ)ひ茶昌の地をせばめ」

ちやーしき 茶式【名】茶の湯の法式。茶道。

ちやしき-くわげつしふ 茶式花月集【名】〔書〕茶人千家の系圖、及び同流の茶式の全般を圖說せるもの。四卷。著者不詳。

ちやしき-こげつせう 茶式湖月抄【名】〔書〕千家を基として編せる茶道の書。十卷。湖月老隱の著。

ちやーしつ 茶室【名】ちやざしき(茶座敷)に同じ。

ちやーじない 茶鵜【名】〔動〕あかはら(赤腹)に同じ。

ちやーしぶ 茶澁・茶澀【名】茶碗などに附く、煎茶のあか。

ちやーしん 茶神【名】茶の守護神。卽ち茶業者が、支那店の人陸羽を神として祀るもの。通常、陶器にて作り、茶の賣れぬ場合には、これに釜の湯を沃(ソヽ)ぎかくといふ。ちやのかみ。

ちやーじん 茶人【名】㊀茶の湯を好む人。茶道に通じたる人。 ㊁普通に異なることを嗜好する人。一風かはりたる人。ものずき。奇人。畸人。

茶人文盲(モンマウ)【句】茶人は學者らしく見ゆれども、實は無學なり。〔諺語〕

ちやーしやく 茶杓【名】抹茶をすくひ出だすに用ふる、細き小匙。竹又は象牙などにて造る。 重修本「ちいさい時から茶杓の持やう、茶巾さばきも習うておきや」

ちやしやくし 茶杓師【名】茶杓を製作するを業とする人。

ちやーしゆす 茶繻子【名】茶色の繻子。

ちやーしよく 茶職【名】ちやはう(茶坊主)に同じ。

ちやす 楪子【名】ちやつ(楪子)に同じ。

ちやすたあぜ 《獨 Diastase》【名】酵母の一。帶黄白色無味・無臭なる粉末にして、その水溶液を澱粉に作用せしむる時は、謂はゆる加水分解作用を生じて、これを糊精と麥芽糖との混合物、卽ち飴に變ぜしむる特性を有するもの。乾燥・粉碎せる麥芽を原料とし、酒精を加へて沈澱せしめて採集す。胃腸藥として用ひらる。糖化素。糖化酵素。

たかちやすたあぜ(高ヂヤスタアゼ)參照。

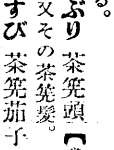
ちやーすりばち 茶摺鉢【名】茶臼の無かりし世に、抹茶をつくるに用ひし摺鉢。

ちやーせいろう 茶蒸籠【名】葉茶を蒸し製する具。普通の蒸籠より淺く大なり。

ちやーせき 茶席【名】ちやざしき(茶座敷)に同じ。

ちやせき-がけ 茶席掛【名】ちやがけ(茶掛)

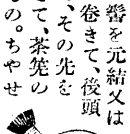
ちやーせん 茶筅・茶箋【名】㊀抹茶を立つるとき、これを掻きまぜほだつるに用ふる物。形ささらに似て、細く裂きたる方の末端、すこし内方に曲れり。白竹青竹又は油竹にて造る。 ㊁ちやせんがみ(茶筅髪)の略。 柳樽「何よりの手向茶筅でたてとほし」 ㊂ゑた(襤多)をいふ。〔安藝國吳の方言〕


(一)茶筅

ちやせん-おき 茶筅置【名】茶筅を置くに用ふる、茶碗様の陶器。

ちやせん-かざり 茶筅飾【名】茶の湯にて、大切なる茶碗を扱ふ時、茶巾と茶筅とを茶碗の中へ入れずして、水指の蓋の上へ飾ること。

ちやせん-がみ 茶筅髪【名】㊀男の髪の結ひ方の一。髻を元結又は紐などにて卷きて、後頭に高く立て、その先をほほけさせて、茶筅の形とせるもの。ちやせんまげ。 本朝三國誌「いやらしい茶筅髪、これが堺の歴歴小西といはるるなりかいな」 ㊁女の髪の結ひ方の一。髪先を切下げて、男の髪と同じやうに結びたるもの。未亡人などの結ふもの。ちやせんまげ。


(一)髪茶筅(茶)

ちやせん-さう 茶筅草【名】〔植〕いはかがみ(岩鏡)㊁に同じ。「とするもの。

ちやせん-し 茶筅師【名】茶筅を作るを業

ちやせん-しだ 茶筅齒朶【名】〔植〕水龍骨(ハフヒ)科に屬する多年生の草。根莖は短くして殆ど直立し、葉柄は毛茸(ジウ)多く、紫褐色にして光澤あり。胞子嚢群は裏面に生ず。各地の山野岩石の間に自生す。

ちやせん-そでがき 茶筅袖垣【名】筋違(スヂカヒ)に竹を組みて、その上部を竪に編みたる袖垣。

ちやせん-たて 茶筅立【名】茶の湯道具の一。茶筅を立ておくための器。通常、杉の板に、竹の串を三本立てたるもの。

ちやせん-づつ 茶筅筒【名】茶の湯道具の一。茶筅を入れおくための筒形の器。通常、竹にて作る。

ちやせん-つぶり 茶筅頭【名】茶筅髪に結ひたる頭、又その茶筅髪。

ちやせん-なすび 茶筅茄子【名】茄子を、竪に切目(キリ)を繁く附け、茶筅の如くにして煮たるもの。

ちやせんばな 茶筅花【名】〔植〕なでしこ（瞿麥）を云ふ。〔奥州の方言〕
ちやせんまげ 茶筅髷【名】ちやせんがみ（茶筅髪）に同じ。
ちやそ 茶素【名】〔化〕『英 Thein 又 Theïne』茶・珈琲等の中に含まりてある有毒なる成分。絹絲狀の結晶物にて、苦味あり。含有せる分量甚だ少なきを以て、害なく、却りて精神を興奮せしむる効あり。
ちやそば 茶蕎麥【名】蕎麥粉に抹茶を混じて打ちたる蕎麥。
ちやぞめ 茶染【名】茶色に染むること、又茶色に染めたる物。太平記「地黒に茶染の直垂（ヒタヽレ）」 續膝栗毛「茶染の木綿著物」
ちやぞめし 茶染師【名】㊀茶染を業とする職人。㊁『天皇の御衣黃櫨染（クワウロゼン）なる茶色の染物が、染物中の最高のものとせられしよりいふ』宮中・貴人等の御用に應ぜし、上等の染物師。〔德川時代の京都の語〕
ちやぞめや 茶染屋【名】㊀茶染を業とする家。㊁『前條を見よ』宮中・貴人などの御用に應ぜし、上等の染物屋。〔德川時代の京都の語〕
ちやだい 茶臺【名】客に茶をすすむる時に載せて出す茶呑茶碗の臺。茶托。托子。
ちやだい 茶代【名】㊀茶屋などに息ふとき、茶の代として與ふる金錢。茶料。㊁旅館・飲食店などにて、旅籠料・飲食料の外に心づけとして與ふる金錢。
ちやだいがいし 茶臺碍子【名】〔理〕『英 Shackle insulator』茶臺の如き形の碍子、架空電線の大いに屈曲せる所または引留など、電線の張力の强大なる箇所に取著く。しやくる碍子。
ちやだいがへし 茶代返【名】茶代をやりし時、返禮として、客に贈る品物。
ちやたう 茶湯【名】㊀茶と湯と。㊁茶を煎じたる湯。狂言（通圓）「古、通圓と申す茶坊主の御座候ふが、茶を點死（タテジニ）に致され候ふ。所の者、痛はしう存じ、今に命日には、茶湯を手向け、弔ひ申し候ふ」㊂禪家にて、每日又は忌日に、佛前・祖前・靈前に、茶と湯とを供ふること、又その供へたる茶。ちやたうび（茶湯日）參照。㊃禪家にて、晉山の時などに、茶を點じ、後、また湯を點ずること。

ちやたう 茶鐺【名】ちやがま（茶釜）に同じ。狂言（通圓）「これなる茶屋を見れば、茶鐺を手向けおかれて候」
ちやだう 茶道【名】さだう（茶道）に同じ。
ちやだうぐ 茶道具【名】㊀ちやき（茶器）に同じ。㊁ちやのゆだうぐ（茶湯道具）に同じ。
ちやだうばうず 茶道坊主【名】さだう（茶道）㊁に同じ。
ちやたうび 茶湯日【名】〔佛〕『佛前に茶湯を供ふる、定まりたる日の義』觀音等の諸佛に、その日參詣する者は、特別の利益（リヤク）を得といふ日。緣日の類。
ちやたうゑ 茶湯會【名】禪家にて、茶湯（チヤタウ）のために衆を會すること。
ちやたく 茶托【名】ちやだい（茶臺）に同じ。
ちやだし 茶出【名】きふす（急須）に同じ。博多小女郎浪枕「茶だしに唐茶つまみこむ」
ちやだち 茶斷【名】斷物（タチモノ）の一。神佛などに願掛（グワンガケ）したるとき、ある期間、又は生涯、茶の飲用を廢すること。
茶斷・鹽斷（シホダチ）・鯱鉾立（シヤチホコダチ）【句】さまざまに斷物（タチモノ）などして願掛（グワンガケ）するを、嘲弄的にいふ語。
ちやたてぐち 茶立口【名】茶室にて、主人の出入する口。勝手口。
ちやたてぼうこう 茶立奉公【名】めかけばうこう（妾奉公）に同じ。
ちやたてぼうこうにん 茶立奉公人【名】茶立奉公をする人。
ちやたてむし 茶立蟲・茶柱蟲【名】〔動〕擬脈翅（ギミヤクシ）類に屬する昆蟲。蚜蟲（アブラムシ）に類し、體は短小にして灰黃色を呈す。頭部は比較的に大にして、强大なる顎を具ふ。人家にも住し、顎にて戶・障子などを摩擦して、茶を點（タ）つる如き音を發す。かくれざとう。あづきあらひ。
ちやたてをんな 茶立女【名】大阪島の内の娼妓。〔德川時代の語〕
ちやだな 茶棚【名】茶道具を載するための棚。
ちやだんす 茶簞笥【名】茶道具を載せおくための、棚ある匣。

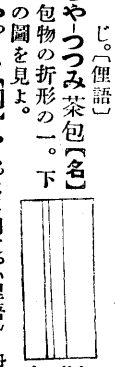
ちやちや 茶茶【名】㊀茶を煎じ出したる汁。ちや。〔京都・大阪の女の語〕㊁さまたげ。邪魔。妨害。〔俚語〕「ちやちやを入れる」㊂ちやちやはうちやの略。〔俚語〕㊃ちやや（茶屋）㊁を云ふ。〔京都・大阪の語〕
ちやちや【代】卑下していふ第一人稱。〔下層社會の語〕
ちやちや【貌】手早く又は多くて間に合ふさま。ちやくちやく。一代女「ちやちやと言葉に色を附けて、わけもない事あそばして、お敵さまへの漏れての御申分は、こちは存じませぬなどといふが、十五（ヒカコ）女郎の必ずおとしなり」
ぢやぢや【名】だだに同じ。〔俚語〕
ぢやぢやうま ぢやぢや馬【名】㊀あばれうま（暴馬）に同じ。〔俚語〕㊁小供の、亂暴なるもの。〔俚語〕
ちやちやくる【動四自】㊀ごまかして濟す。㊁手あたり次第に振舞ふ。亂暴す。めちやくちやにす。〔俚語〕㊂ちちくる（乳繰る）を云ふ。〔京都の方言〕
ぢやぢやばる【動四自】だだをこねる。がんばる。浮世風呂「そんな咄でもあるが最期、おれがぢやぢやばって、合點しねえ」
ぢやぢやぶぢやぶ【貌】數珠（ジュズ）爪繰りて、佛を拜むさま。〔俚語〕
ちやちやほうさ【貌】秩序なくなり、又は形無（カタナシ）になるさま。ちやちやほうちや。ささほうさ。
ちやちやほうちや【貌】前條に同じ。
ちやちやむちや【貌】ちやちやむちやくちやに同じ。
ちやちやむちやから【名】『ちやちやむちやに混ぜ漬けたる香香（カウカウ）の義』食用に供すべき種種の葉を混ぜて漬けたるからの物。昔、近江國より宮中に獻上したりといふ。
ちやちやむちやく【貌】ちやちやほうさに同じ。浮世床「皆身上ちやちやむちやくだ」
ちやちやむちやくちや【貌】ちやちやほうさに同じ。
ちやぢやわん 茶茶碗【名】ちやのみぢやわん（茶飲茶碗）に同じ。

ちやぢゆう 茶頭【名】〔佛〕さぢゆう（茶頭）を見よ。
ちやつ 楪子【名】『漢字の宋音』寺門にて使用する朱塗の木皿。大なるは直徑一尺、高臺つき。又はくり足を付けたるもあり。小なるは直徑三四寸・高さ二寸ばかり。もと菓子を盛るものなりしが、のち藥類を盛るに使用せらる。ちやす。ちやっす。銘銘盆。 壒嚢抄「楪子（チヤツ）」 五人女「近所の出入の嬶（カカ）ども集り、椀・家具・壺・平（ヒラ）・楪子まで取捌き、手ごとに拭きて、膳棚に重ねける」
楪子より深きここなし【句】『楪子は底の淺き物なるよりいふ』ものごとの淺淺しき形容にいふ語。〔諺語〕
ちやつう 楪子【名】前條に同じ。
ちやつう 楪津宇【名】餅菓子の一種。メリケン粉に砂糖を混ぜてこれを捏ね、薄く小さく切りて、餡を包み、胡麻を附著し、上面に葉茶を載せて、燒鍋に燒きたるもの。
ちやつき 茶坏【名】古、茶を飲むに用ひたる陶器。後世の茶碗の如きもの。
ちやづき【名】いろをとこ（色男）を云ふ。〔大阪の方言〕
ちやつぐみ 茶鶫【名】〔動〕しろはら（白腹）に同じ。
ちやっくり【副】ちよっくりに同じ。
ちやづけ 茶漬【名】㊀ちやづけめし（茶漬飯）の略。㊁煎茶を飯にかけて食ふこと。今宮心中「なまなか茶漬位ならいっそ戻って寢てくれう」
ちやづけぢやわん 茶漬茶碗【名】めしぢやわん（飯茶碗）に同じ。
ちやづけめし 茶漬飯【名】㊀飯に、煎茶を注ぎて食ふこと、又その飯。㊁ひやめし。冷飯。〔俚語〕 一代女「仕舞風呂に入りて、身をあらため、色作る間（マ）に、茶漬飯をこしらへ、箸、下に置くと、貸著物始末にかまはず引締め」㊂手輕なる食事。
ちやづけや 茶漬屋【名】安値なる割烹店。小料理屋。
ちやつじ 茶辻【名】茶屋染にて染めたるつじがはな。
ちやっす 楪子【名】ちやつ（楪子）に同じ。
ちやっちや【名】〔動〕みそさざい（鷦鷯）に

同じ。

ちやっちやの會採(コサイ)【句】ちっこに同じ。〔俚語〕

ちやーつつみ 茶包【名】包物の折形の一。下の圖を見よ。



ちやっと【副】ちょっとに同じ。〔俚語〕丹波與作「內より、顏が、によっと出る。ちやっと引けば」〔方言〕

ちやっぱ【名】てぬぐひ(手拭)を云ふ。〔奥州の一〕

ちやっぴい【名】おちやっぴいを見よ。

ちやっぽ 茶壺【名】■襲茶を貯へおくための、大いなる壺。**おちやっぽ**(御茶壺)參照。

ちやつみうた 茶摘歌【名】茶摘の時に謠ふうた。〔俚語〕

ちやづる【動四自】茶漬飯を食ふ。〔東京の屋。さてい。茶屋。

ちやてい 茶亭【名】ちやみせ。こしかけ茶

ちやてん 茶店【名】**ちやみせ**(茶店)に同じ。

ぢやてるみい(獨 Diathermie)【名】高周波電流を治療に應用せる電氣透熱療法。でやてるみい。電氣透熱療法。

ちやと【副】ちやっとに同じ。〔俚語〕「讀。

ちやとう 茶頭【名】**ちやちゆう**(茶頭)の誤

ちやとう ぬり 茶銅塗【名】漆塗の一種。茶銅色を現す。緑色にて雅致あり。

ちやどうぼう 茶同朋【名】室町幕府の同朋の、殿中又は城中にて、茶事を掌りしもの。卽ち江戸幕府の茶坊主と同じ。

ちやどころ 茶所【名】茶の名産地。

ちやとり 茶鳥【名】〔動〕**むなぐろ**(胸黑)に同じ。

ぢやな(羅 Dīna)【名】古代伊太利にて崇拜せし女神。光・狩獵・分娩等を司る。ぢやな。閑雅を貴び、自ら一定の法式あり。

ちやーには 茶庭【名】茶室に接する庭。幽靜

ちやーねずみいろ 茶鼠色【名】茶色を帶びたる鼠色。

ちやーの 千屋野【名】〔地〕備中國阿哲(アテ)郡千屋村にありし野。同村は、高梁(ハシカ)川の水源地にして、村內の山谷に鐵坑多く、謂はゆる古備(キビ)の眞金(マガネ)の產地なり。茶花「秋風になびくちやのの花すすきほにいでて見ゆる君がよろづよ」

ちやーのーかみ 茶神【名】**ちやしん**(茶神)に同じ。

ちやーのき 茶樹【名】〔植〕**ちやのき**(茶)□に同

ちやーのきにんぎやう 茶木人形【名】**うぢにんぎやう**(宇治人形)に同じ。

ちやのきばたけ 茶樹畑【名】**ちやばたけ**(茶畑)に同じ。芭蕉「いなすずめ茶の木畑や逃げ處」

ちやのきばら 茶樹原【名】**ちやばたけ**(茶畑)に同じ。狹衣(自房)「明月や處は寺の茶の樹原」

ちやーのーけむし 茶蛞蝓【名】〔動〕茶毛蟲蝶の幼蟲。年に二回發生し、體は長さ七八分、淡褐色にして、黑き斑紋あり。灰白色の短毛を具ふ。四月頃發生して茶・茶梅(サツサ)・山茶(サツキ)等の葉を食害す。ちやけむし。

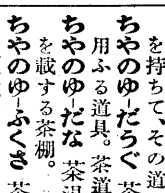
ちやのけむしてふ 茶毛蟲蝶【名】〔動〕鱗翅(ハネ)類に屬する昆蟲。雌は、長さ四分ばかり、體翅共に淡黃色にして、翅の中央に黑褐色の斑紋を有し、雄は長さ三分ばかり、體翅共に黑褐色、前翅に黃色なる二條の橫線あり。幼蟲は卽ち茶毛蟲なり。

ちやーのーこ 茶子【名】■次條に同じ。〔俚語〕

ちやのーみ 茶實【名】■茶の樹の果實。□紋所の一。種種あり。

ちやのみ 茶飲・茶呑【名】茶を多く飲むこと、又その人。

ちやのみーぎり 茶實桐【名】紋所の一。下の圖を見よ。


(りぎみのやち)

ちやのみぐさ 茶飲種・茶呑草【名】■茶飲話の材料。世話。雜談。

ちやのみーぢやわん 茶飲茶碗・茶呑茶碗【名】煎茶を飲むに用ふる、小さき茶碗。せんちやぢやわん。ちやぢやわん。ちやのみ。

ちやのみーどころ 茶飲所【名】仕事の間などに、茶を飲むために設けたる所。眞實伊勢物語「ありきあきんど職人夜をひまの茶呑所となしける」

ちやのみともだち 茶飲友達【名】■次條に同じ。□老いて迎へたる妻、又は夫。〔俚語〕

ちやのみなかま 茶飲仲間【名】しばしば寄合ひて、茶飲話などする老人連。

ちやのーみのむし 茶蓑蟲【名】〔動〕蓑蟲の一種。雄は蛾にして、體は長さ五六分、灰褐色、翅毛同色なり。雌は雄よりもやや大にして、羽化せず、蛹(キサナ)の形にて巢內に蟄伏す。幼蟲は葉片・細枝などを集めて、謂はゆる蓑を作り、その中に潛居す。通常、茶の葉を食害す。

ちやのみばなし 茶飲話【名】茶を飲みながらする話。ちやばなし。ちやわ。さわ。世話雜談。心中宵庚申「娘持つた人人は寄合・茶飲話にもそなたの噂」

ちやのみびし 茶實菱【名】紋所の一。茶の實を中央に描き、左右に配したる一枚づつの葉を各折曲げて、菱形とせるもの。

ちやーのゆ 茶湯【名】客を請じて、抹茶を點じ、懷石などを饗すること、又その會。ちやのゆ。

茶湯の會(エ)【句】**ちやのゑ**(茶會)に同

ちやのまーをんな 茶間女【名】茶の間に働く女中。ちやのま。一代女「よる年にしたがひ、身を持下げて、茶の間女となり」

ちやのみ 茶實【名】■茶の樹の果實。□紋所の一。種種あり。

ちやのみ 茶飲・茶呑【名】茶を多く飲むこと、又その人。

ちやのみーぎり 茶實桐【名】紋所の一。下の圖を見よ。

(りぎみのやち)

ちやのみぐさ 茶飲種・茶呑草【名】■茶飲話の材料。世話。雜談。

ちやのみーぢやわん 茶飲茶碗・茶呑茶碗【名】煎茶を飲むに用ふる、小さき茶碗。せんちやぢやわん。ちやぢやわん。ちやのみ。

ちやのみーどころ 茶飲所【名】仕事の間などに、茶を飲むために設けたる所。眞實伊勢物語「ありきあきんど職人夜をひまの茶呑所となしける」

ちやのみともだち 茶飲友達【名】■次條に同じ。□老いて迎へたる妻、又は夫。〔俚語〕

ちやのみなかま 茶飲仲間【名】しばしば寄合ひて、茶飲話などする老人連。

ちやのーみのむし 茶蓑蟲【名】〔動〕蓑蟲の一種。雄は蛾にして、體は長さ五六分、灰褐色、翅毛同色なり。雌は雄よりもやや大にして、羽化せず、蛹(キサナ)の形にて巢內に蟄伏す。幼蟲は葉片・細枝などを集めて、謂はゆる蓑を作り、その中に潛居す。通常、茶の葉を食害す。

ちやのみばなし 茶飲話【名】茶を飲みながらする話。ちやばなし。ちやわ。さわ。世話雜談。心中宵庚申「娘持つた人人は寄合・茶飲話にもそなたの噂」

ちやのみびし 茶實菱【名】紋所の一。茶の實を中央に描き、左右に配したる一枚づつの葉を各折曲げて、菱形とせるもの。

ちやーのゆ 茶湯【名】客を請じて、抹茶を點じ、懷石などを饗すること、又その會。ちやのゆ。

茶湯の會(エ)【句】**ちやのゑ**(茶會)に同

茶子の茶湯【句】「飯後(ゴハン)の茶會(ヂヤヱ)」に同じ。

ちやのゆーこそて 茶湯小袖【名】茶の湯の式に、好みて著る衣服。大縞の小袖に紅裏などを附けたるもの。

ちやのゆーしや 茶湯者【名】茶の湯に趣味を持ちて、その道に巧みなる人。

ちやのゆーだうぐ 茶湯道具【名】茶の湯に用ふる道具。茶道具。

ちやのゆーだな 茶湯棚【名】茶の湯の道具を載する茶棚。

ちやのゆーふくさ 茶湯紙紗【名】**ちやふくさ**(茶紙紗)に同じ。

ちやのゆもの 茶湯者【名】**ちやのゆしや**(茶湯者)に同じ。

ちやーのゑ 茶會【名】茶の湯の會。ちやのゆ。ちやぐわい。茶湯(ヂヤ)の會(エ)。茗讌。

ちやーばい 茶梅【名】〔植〕**さざんくわ**(茶梅)に同じ。

ちやーはいはい 茶盃拜【名】能(ノ)の狂言の一。唐人の妻となれる女の、久しき馴染なるに拘らず、近來その夫の口癖にいふ唐言葉の、我れを嫌ひて、故郷の妻を戀ふる意なる由を聞きて、葛藤を演ずる筋のもの。

ちやーばうき 茶帚・茶箒【名】茶の湯にて、茶爐などを拂ふに用ふる小さき羽帚。拂末。

ちやーはうじ 茶焙【名】■番茶を煎ずる前に、火にかけて焙るに用ふる具。曲物に柄を附けて、底に紙を貼り、又は針金の網を張りたるもの。かみはうろく。□**はうろく**(焙烙)を云ふ。〔常陸國の方言〕

ちやばうず 茶坊主【名】■『剃髮せるよりいふ』**さだう**(茶道)□に同じ。□小供の遊戲の一。室內にて、多數の小供並べる中に、一人鬼となりて、目隱(カシ)をなし、他の兒中の一人に對し「誰さん御茶をお上(カ)りなされ」とて、茶道をさし出だし、その名を指しあてられたる者は、代りて鬼となり、あたらぬ時は、鬼はそのままにて、また初の如くに行ふ。

「同じ。

ちやはかせ 茶博士【名】**ちやはく**(茶伯)に

ちやはき 茶掃【名】抹茶の、茶入の縁などにつきたるを掃落すに用ふる小さき羽箒。

ちやはきばこ 茶はき箱【名】抹茶を茶入

に移す時に用ふる茶杓、小さき羽箒などを入れたる箱。

ちやはく 茶伯【名】茶道の宗匠。ちやはか。

ちやばこ 茶箱【名】葉茶を詰めて、遠隔の地に送るに用ふる粗大なる箱。

ちやばしら 茶柱【名】茶碗に注ぎたる茶の中に、茶の莖の竪に立ちて浮べるもの。俗に吉事の兆とす。

ちやばたけ 茶畑・茶畠【名】茶を植ゑたる畑。茶の樹ばたけ。茶の樹はら。茶園。茶圃。

ちやばなし 茶話【名】茶を飲みながら閑話すること。ちやのみばなし。ちやわ。茶話(サワ)。

ちやばね-あぶらむし 茶羽油蟲【名】〔動〕直翅(ヂクシ)類に屬する昆蟲。形、蜚蠊(ゴキブリ)に酷似し、長さ七八分、茶褐色を呈し、前胸に二條の黒き縦線あり。我が國、各地に分布し、人家に棲みて、食物・毛織物等を食害す。

ちやはふ 茶法【名】ちやしき(茶式)に同じ。

ちやばん 茶番【名】■來客などの多くあるとき、茶を煎じて客に出だす役、又その役に當りたる者。■ちやばんきやうげん(茶番狂言)の略。

ちやばね-あぶらむし 茶羽油蟲【名】〔動〕直翅(ヂクシ)類に屬する昆蟲。形、蜚蠊(ゴキブリ)に酷似し、長さ七八分、茶褐色を呈し、前胸に二條の黒き縦線あり。我が國、各地に分布し、人家に棲みて、食物・毛織物等を食害す。

ちやばん 茶盤【名】ちやばん(茶盆)に同じ。

ちやばん-きやうげん 茶番狂言【名】仕方又は身振を以て、地口樣の事を演ずる滑稽狂言。略して、茶番ともいひ、立(タチ)茶番・口上茶番などの種類あり。

ちやばら 茶腹【名】■茶を多量に飲みたる時の腹ぐあひ。〔俚語〕■茶を飲みて、空腹を凌ぐこと。〔俚語〕

茶腹も一時【句】茶を飲みても、一時は飢を凌ぐに足る。〔諺語〕

ちやひき 茶挽【名】遊女の客を得ずに徒然としてゐるもの。「茶を挽く」參照。物類

「おちやひきのあはれ陰みせの東やま」

ちやひき 茶碾・雀麥【名】〔植〕『小供などが、その實を摘みて掌に載せ、靜かに吹くときは、茶臼の如くに旋轉するより名づくといふ』**からすむぎ**(鳥麥)に同じ。

ちやひきぐさ 茶碾草【名】〔植〕『前條を見よ』**からすむぎ**(鳥麥)に同じ。用明天皇職人鑑「班女が閨のさびしきは茶ひき草をもいふ語。だぶだぶ。

ちやぶね 茶船【名】■運送に用ふる、細長く小さき川船。今宮心中「はや本復の伊丹酒、茶船で下る樽看」■川遊に用ふる小船。屋根あるもなきもあり。■うろうろぶね(うろうろ船)に同じ。

ちやぶ-や 卓袱屋【名】『ちやぶだい(卓袱臺)を見よ』開港場などにて、主に、外國人のために營業せる、手輕なる飲食店。「じ。

ちやふらん 【名】〔植〕さふらん(沼夫藍)に同じ。

ちやふるひ 茶篩【名】抹茶をふるふに用ふる、目のこまかき篩。「に同じ。

ちやふろ 茶風爐・茶風呂【名】ふろ(風爐)

ちやへんたう 茶辨當【名】外出のとき、茶道具一式に辨當を加へて、從者に擔ひ行かしむる具、即ち茶瓶に辨當を添へたるもの。孕常鰐ゆゆしき女乘物に、茶辨當かたげしは折折鞍馬へ使に來る喜三太」

ちやぺる 《英Chapel》【名】〔建〕基督教にて、聖母その他の聖像を祀る所。獨立したるとチヤアチの内に附屬せるとあり、又大なると小なると、種種。

ちやほ 茶圃【名】ちやばたけ。茶園。

ちやぼ 矮鷄【名】■〔動〕『もと占婆(ヂンバ)國より舶來せるによりて名づくとも、西藏(ツバト)語なりともいふ』雞の一品種。最も小なるもの。羽色は種種あり。脛の長さ一二寸に過ぎず。冠は、大・中・小の三種あれども、何れも單冠・鋸齒狀にして五裂し、性質溫良なるが故に、愛玩用として飼養せらる。ちやぼとり。■身のたけ低き者を嘲りていふ語。ちび。ちよび。〔俚語〕

ちやぼ 矮【接頭】丈けひくく、又は小さき意。「ちやぼ栗」「ちやぼひば」

ちやぼ-ぐり 矮栗【名】小なる栗の實。

ちやぼ-けまん 矮華鬘【名】〔植〕こまくさ(駒草)に同じ。

ちやぼ-せきしやう 矮石菖【名】〔植〕百合(ユリ)科に屬する多年生の草。葉は根生し、披針形をなし、質厚くして光澤あり。初夏、葉間より纖細柔軟なる花梗を抽きて、花を著く。花は小形・白色にして、單生なるもあり、又、多數集まりて粗なる總狀花序に排列す。信濃・仲藝などの山中に自生す。

ちやぼ-つきみさう 矮月見草【名】〔植〕柳葉科(アカバ)に屬する二年生又は多年生の草。原産地は南米智利。葉は初め短小にして、地面に接して葉を叢生し、後、伸長して地に匍ふ。葉は大形・長楕圓形にして、羽狀に缺刻を有し、毛茸(ケウジウ)多し。夏秋の交花を著く。花は大形、初め白色にして、後紅に變ず。果實は倒卵形の蒴なり。觀賞用として栽培す。

ちやぼっ-とり 矮鷄【名】〔動〕ちやぼ(矮鷄)に同じ。

ちやぼ-のいはしやうぶ 矮岩菖蒲【名】〔植〕ちやぼせきしやう(矮石菖)に同じ。

ちやぼ-ひば 矮柏【名】〔植〕扁柏(ヒノキ)の變種。高さ二十尺餘に達す。葉は鱗片狀にして、四縦列に排列し、花は單性雌雄同株に生ず。果實は毬果。觀賞に適す。かまくらひば。「ちやぼん。

ちやぼん 茶盆【名】茶碗などを載する盆。

ちやぼや 【俳】小供をかはゆがりて、物いひやさしくあまやかし、又は人に愛嬌よく物を言ふさま。

ちやぼやぐり 【名】〔植〕扁柏(ヒノキ)の一變種。忍檜葉(ヒバホ)の如き枝葉と矮雞檜葉(ヒバホ)の如き枝葉と交り出づるもの。

ちやぼやなぎ 矮柳【名】〔植〕いはやなぎ(岩柳)に同じ。

ちやぼ-ゆづりは 矮交讓木【名】〔植〕太戟(フタヘイ)科に屬する常綠喬木。葉は卵狀披針形、鋭頭にして全緣、花は單性、果實は卵形、碧黒色の核果なり。北海道に産し、同地にては、單に「ゆづりは」といひ、新年の裝飾用に供すること、內地の「ゆづりは」に異ならず。ひめゆづりは。えぞゆづりは。

ちやほり-むし 茶掘蟲【名】〔動〕あとびさり(後びさり)[二]に同じ。

ちやぼろ 《英Diabolo》【名】ちあぼろを見よ。

ぢやま 地山【名】■その土地の山。■陸地の山。(島の山などと區別していふ)〔船子の語〕■自然層の地盤。(盛土(モリド)に對して)■〔動〕やまくぢら(山鯨)に同じ。〔料理屋の語〕■『英Country-rock』鑛床を圍繞する岩石。母岩。■〔動〕おのしし(野猪)の異稱。

ちやまが 茶釜【名】『子音がまとの轉換せるもの』ちやがま(茶釜)の訛。〔東京の語〕

ちやまくら 茶枕【名】茶殻を充して作りたる括枕(くくりまくら)。

ちやまだら 茶斑【名】茶色のまだら。

ちやまつだけ 地山松蕈【名】その地の山に生じたる松蕈。

ちやまめ 茶豆・褐大豆【名】〔植〕大豆の一品種。種子の色の、黄褐色乃至青褐色なるもの。

ちやまる 茶丸【名】茶字綸(ちやりん)の類。無地にて、色は茶・白茶・玉蟲等あり。多く袴の裏地に用ひられたり。天和の頃、京都の職工の、支那製に倣ひて、製作せしものといふ。

ちやみせ 茶店【名】路傍に行人を息はしめて、煎茶・菓子などを供する小店。かけぢやや。みづちやや。ちやや。ちやてん。

ちやん 錢【名】『錢の支那音 Chien の訛か』ぜに(錢)〔一〕に同じ。〔俚語〕

ちやん 爺【名】子より父を呼ぶ語。〔江戸時代の俚語〕

ちやん 藏《獨 Cyan》【名】〔化〕しやん(青素)

ちやん 瀝青【名】『青の字の支那音 Ching の訛なるべしとも、China turpentine の略なりともいふ』タアルを蒸溜して得る殘滓(かす)。色黑くして粘り、木材に塗りて、腐蝕を防ぎ、又その隙を塡むる等に用ふ。

ちやん 【名】**ちやんちやん**〔二〕に同じ。「ん」

ちやん 様【接尾】さん(様)の訛。「母(か)ちやん」

ちやん 丈【助數】『漢字の支那音』支那の長さの單位。尺(せき)の十倍、わが國の一一・八二尺に當る。

おやん 【貌】じやんを見よ。

ちやん 【名】**ちやん**(錢)に同じ。〔俚語〕

ちやん-から 【名】**ちやん**(錢)に同じ。〔俚語〕

ちやん-から 【名】『**はいから**〔二〕をもぢりて造りたる語。ばんから(蠻殼)參照』支那人めかしてあること、又その人。〔俚語〕

おやんがらが 【名】目の粗く透きたるもの。〔俚語〕「ちやんがらがの布」

ちやんから-やう ちやんから樣【名】唐樣に書ける書體を嘲りていふ語。〔俚語〕

ちやんきん 【名】〔植〕あさざ(荇菜)を云ふ。〔近江國の方言〕

ちやんきり 【名】次條に同じ。

ちやんぎり 【名】一 しやぎりの轉訛。二 俗間にて、笛・太鼓の囃子(はやし)に合はせて用ふる小形の鉦。紐を附けて、左の手に掛け、右手にて、細き棒の先に象牙などにて造りし丸子を以て、內面を擦り、且つ叩く。

(二)りぎんやち

ちやんこ 【名】一 女子の陰部。ちよんこ。ちんこ。〔俚語〕二 **ちやんちやんこ**の略。

ちやんこう 爺公【名】下賤なる者の父。ちやん。〔江戸時代の俚語〕

ちやんこう ちやん公【名】**ちやんちやん**〔一〕に同じ。〔俚語〕

ちやんころ 【名】一 **ちやん**(錢)に同じ。〔俚語〕春花五大力「朱は、もとより、錢と云ふちやあ、缺けたちやんころもない」柳營「ちやんころがないとみみずを掘って居る」二 小さくして取るに足らぬ物。〔俚語〕俗諺(磯節)「船はちやんころでも炭薪(すみ)は積まぬ」三 **ちやんちやん**〔一〕に同じ。〔俚語〕

ちやん-ちん 香椿・椿【名】〔植〕『香椿の支那音の轉訛』棟(せんだん)科に屬する落葉喬木。高さ四丈に達す。葉は奇數羽狀複葉、小葉は、廣披針形にて全緣。六月頃、筒狀にて、先端深く五裂せる小白花、簇(ふさ)り開き、茶褐色、楕圓形の果實を結ぶ。觀賞に供し、又その材を器具に用ふ。きやんちん。わらだいちん。たまつばき。ひやんちん。わらしらず。

ちやん-ちやん 【名】一 支那人の頭髮の風。辮髮。〔俚語〕二 支那人を嘲り呼ぶ語。ちやん。ちやん公。ちやんから。ちやんころ。ちやんちやんばうず。南京人。〔俚語〕三 **からこ**(唐子)〔二〕に同じ。〔江戸時代の語〕四 小供の著用する、袖無き羽織。ちやんちやんこ。そでなし。そでなし羽織。〔東京の語〕

ちやん-ちやん 【貌】『**ちやん**を重ねていへるもの』一 規則正しくするさま。きちん。ちやん。『家賃も、ちやんちやんと納め』二 刀にて接戰する音。「丁丁」

おやん-おやん 【名】じやんじやんを見よ。

おやん-おやん 【貌】じやんじやんを見よ。

ちやんちやん-こ ちやんちやん子【名】**ちやんちやん**四に同じ。〔東京の俚語〕

ちやんちやん-ばらず ちやんちやん坊主【名】**ちやんちやん**〔一〕に同じ。〔俚語〕

ちやんちやん-ばらばら 【名】『**ちやんちやん**は刀にて接戰する音。**ばらばら**は彈丸の落ち散る音』たたかひ。戰爭。〔俚語〕

ちやんちやら-おかしい ちやんちやら可笑しい【形】笑止千萬なり。かたはらいたし。〔俚語〕

おやんぢやら-ごま ぢやんぢやら獨樂【名】正しくまはらぬ獨樂。〔俚語〕

ちやん-と 【副】正しく。おごそかに。秩序ありて。整然と。しやんと。〔俚語〕

ちやんば 占婆・占城【名】一 〔地〕現今の安南の南方にありし地方。古來、支那に朝貢せしことあり。明代より安南と相侵略せしが、清代に及び、安南に併せられて、清に隷屬し、清佛條約の結果、佛國の保護領となれり。奈良朝時代に、その國人佛哲禪師の舞樂を傳へたるあり。豐臣・德川兩時代には、我が商人渡航して貿易を行ひ、家康は渡海の朱印を與へたることあり。ちやんばん。二 鮫皮の眞鮫(さめ)の一種。

ちやんばぎく 占城菊・博落廻【名】〔植〕罌粟(けし)科に屬する多年生の草。莖は直立して、高さ七八尺、細毛密生し、黃褐色の毒汁を含む。葉は互生し、大形の卵狀心臟形にして、ほぼ掌狀に淺裂す。夏季、暗白色または帶紅白色の小花多數集りて圓錐花序に排列す。黃褐色の蒴(さく)なり。我が國、各地の原野に自生す。その煎汁は、害蟲の驅除に用ひらる。おほかみだふし。けんくわぐさ。たかとう。たけにぐさ。

ちやんばん 占婆・占城【名】〔地〕**ちやんば**(占婆)〔一〕に同じ。

ちやんばん-いね 占城稻【名】〔植〕稻の一種。もと占城國より輸入せるもの。

ちやんぴおん 《英 Champion》【名】その技にすぐれたるによりて選出せられし人。選手。

ちやんぴおん-ふらぐ 《英 Champion flag》【名】チャンピョンに、名譽表彰のために與ふる旗。優勝旗。

ちやん-ぶくろ 茶袋【名】**ちやぶくろ**(茶袋)の訛。「國の方言」

おやん-ぼ 【名】さうしき(葬式)を云ふ。〔下野〕

ちやん-ぼこ 【名】どびやう(銅拍子)に同じ。「ま。〔俚語〕

ちやん-ぼん 【貌】かれとこれと混同するさま。〔俚語〕

おやん-ぼん 【名】さうしき(葬式)を云ふ。〔上野國の方言〕「訛。

ちやんめら 喃吶【名】**ちやるめら**(喃吶)の訛。

ちやんめ 茶目【名】一 こうさい(虹彩)の俗稱。二 ふざけ好き、又はいたづらなること、又その人。

ちやめ-きち 茶目吉【名】一 梅亭金鷲の滑稽本「七偏人」中に記されたる假設的人物の一人。二 道樂者又は滑稽者の異稱。

ちやめく 茶めく【動四自】滑稽めく。おどく。茶にす。ちやる。〔俚語〕

ちやめし 茶飯【名】一 葉茶の煎汁に鹽を加へて炊ぎたる飯。**ちやがゆ**(茶粥)ならちやめし(奈良茶飯)參照。二 醬油と酒とを交ぜて炊ぎたる飯。きがらちやめし。さくらめし。

ちやもおる 茶モオル【名】茶色のモオル。二代目だたぬ茶もうるの帶して」

おやもの ぢや者【接尾】で有る者の訛。「兄ぢやものに」「妻(かた)ぢやもの」

ちやや 茶屋【名】一 製茶を賣る店。はちやや。茶肆。二 **ちやみせ**(茶店)に同じ。三 茶室と邸宅とを混合せる一種の建物。(主に接頭語を添へて、御茶屋(おちや)といふ)四 **しばぢやや**(芝居茶屋)に同じ。五 客に飲食又は遊興などせしむる家。即ち料理茶屋・引手茶屋・待合茶屋・色茶屋など。御茶屋ともいふ。天の網島曾根崎の茶屋紀の國屋の小春といふ白人に」六 **ちやぜめや**(茶染屋)に同じ。

ちやや 中の茶屋【句】峠の中途にある茶店。

ちやや 茶屋【名】〔地〕備中國都窪(つくぼ)郡にある町。倉敷(くらしき)町の東約一里半。

ちやや-あそび 茶屋遊【名】色茶屋などにて、酒色の遊をすること。ちややこやあそび。遊蕩。

ちやや-がよひ 茶屋通【名】しばしば色茶

屋などに通ひて、酒色の遊に耽ること。ちややこやがよひ。「耽ること。

ちややーぐるひ 茶屋狂【名】茶屋あそびにちややーこや 茶屋小屋【名】酒色の遊興をなさしむる家。ちやや。いろぢやや。

ちややこやあそび 茶屋小屋遊【名】ちややあそび(茶屋遊)に同じ。

ちややこやーがよひ 茶屋小屋通【名】ちややかよひ(茶屋通)に同じ。「條に同じ。

ちややこやばいり 茶屋小屋這入【名】前

ちややーざけ 茶屋酒【名】色茶屋などにて飲む酒。いろざけ。

ちややーぞめ 茶屋染【名】『寛永の頃、茶屋宗理といふ者の始めたるものといふ』昔時、行はれたる一種の染模様。守貞漫稿「茶屋染、昔は蘆手模様を云ふ。…文字を書き、住吉神社と松とを間に描くの類なり。間間に、鹿子を交へ染むるもあり。これを茶屋辻といふ」

ちややーつじ 茶屋辻【名】茶屋染の間に鹿の子の金絲銀絲の繍(ヒ)を入れたるもの。江戸時代、御小性御側御次などの夏の衣に用ひたりといふ。前條參照。

ちややば 茶屋場・茶屋塲【名】芝居にて、演ずる色茶屋の場面。浮世風呂「紙治(カミヂ)の茶屋場を出して」

ちややーばうず 茶屋坊主【名】『ちやや茶屋』㊁を見よ』**ちやばうず**(茶坊主)㊀に同じ。狂言(遠圓)「あれは、いにしへ酒呑と申す茶屋坊主に御坐候が、茶を立て死にに致され候」

ちややーぼうこう 茶屋奉公【名】料理茶屋に女中などとして雇はるること。

ちややーやま 茶山【名】㊀茶を植ゑたる山。㊁山に茶を摘みにゆくこと。正秀「信樂(シガラキ)や茶山しにゆく夫婦づれ」

ちややーもの 茶屋者【名】料理茶屋・色茶屋などの家の人、又その抱(カカヘ)雇人など。天の網島「茶屋者請出し、女房は茶屋へ賣りおらう」

ちややーをんな 茶屋女【名】料理屋又は色茶屋に奉公して、客の酌又は給仕などをなす女中。

ちやら【名】ごまかしの言葉。でたらめ。ちやらぼこ。ちやらっぼこ。ちやらほら。ちやらんぽらん。〔俚語〕「ちやらを言ふ」

ちやらーく【名】次條㊁の略。蟲葉毛「いろいろ茶らくと斷を云ひらし」

ちやらーくら【名】㊀〔動〕かさごの一類の魚。㊁ちやらに同じ。〔俚語〕

ちやらくらーもの ちやらくら者【名】やちうっぽこもの(ちやらっぽこ者)に同じ。

ちやらくら者にす【句】「馬鹿(バカ)にす」に同じ。

ちやらける【動下一自】ちやらを言ふ。でたらめにしやべる。〔俚語〕

ちやらす【動四他】からかふ。だます。〔足利時代の語〕狂言(雁はじがみ)「いかい紙みせでおちやらぬか、あれは、皆からかみでおりやるほどに、なう、そばに積んだは、杉原でおりやる。おちやらしませ。この店を見さしませ」「歩む足音。

ちやらちやら【擬】雪駄の後金を鳴かせておやらおやら【擬】前條に同じ。

ちやらっーぼこ【名】『ちやらぼこの訛』ちやらに同じ。〔俚語〕

ちやらっぽこもの ちやらっぽこ者【名】常にちやらっぽこをいふ人。ちやらくらもの。

ちやらっぽこ【名】ちやらっぽこに同じ。蟲葉毛「古著屋めを、ちやらぼこではぐらかして、壹貫に見おとしは安いもんだ」

ちやらっほら【名】前條に同じ。

ちやーらん 茶蘭・金粟蘭【名】〔植〕金粟蘭(チヤラン)科に屬する常綠灌木。葉は茶に似、花は粟粒の如き黄色にして、蘭の花の如き香あり。寒さを愉れ、これを防げば常綠なり。盆栽とす。

ちやらん【擬】小形の金屬などの物にあたりて發する音。「たる音。

おやらん【擬】ちやらんと同樣にて、やや濁りて發する音。

ちやらん-くわ 金粟蘭科【名】〔植〕顯花植物被子類雙子葉門・離瓣花區の一科。草本灌木または喬木。主として、熱帶及び亞熱地方に産し、觀賞用または藥用に供せらるるものあり。草珊瑚(サンゴ)・茶蘭等これに屬す。きんぞくらんくわ。

ちやらん-ちやらん【擬】ちやらんを重ねていふ語。「ふ語。

おやらん-おやらん【擬】ちやらんを重ねていやらに同じ。〔俚語〕

ちやらん-ぼらん【名】『ちやらぼらの音便』ちやらに同じ。〔俚語〕

ちやり 茶利【名】『ちやる(茶る)の假體言』㊀人の笑をひく如き話、又は身ぶり。おどけ。諧謔。〔俚語〕㊁滑稽なる文句の淨瑠璃。〔俚語〕㊂女のもみあげ。

ちーやり 血槍【名】血にまみれたる槍。

おやりーいと 地遣絲【名】內地の機業地に向くる生絲。(輸出絲に對して)

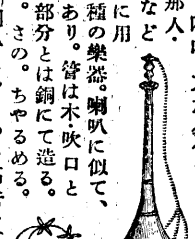
ちやりーがたり 茶利語【名】義太夫かたりのよくちやりを語るもの。

ちやりーば 茶利場・茶利塲【名】淨瑠璃・芝居などの滑稽なる場面。

ちやりーやく 茶利役【名】だうけかた(道化方)を云ふ。〔京都の語〕

ちやる【動四自】㊀茶氣を帶ぶ。茶人めく。㊁ちやりをなす。おどく。茶めく。〔俚語〕

ちやるめら 哨吶・太平簫(葡 Charamel)【名】支那人・朝鮮人などの、行列に用ひたる一種の樂器。喇叭に似て、七つの孔あり。管は木・吹口と喇叭狀の部分とは銅にて造る。唐人ぶえ。さの。ちやるめる。



(らめるやち)

國粹繪合壁「喇叭・ちやるめら高音を反らし」

ちやるめる 哨吶【名】前條に同じ。

ちやるめるさう 哨吶草【名】〔植〕ゆきのした(雪下)に同じ。

ちやるめろ 哨吶【名】ちやるめら(哨吶)に同じ。

ちやれい 茶禮【名】茶をたつる禮式。茶式。

ちやれう 茶料【名】ちやだい(茶代)に同じ。

ちやれろ 茶寮【名】すきや(數寄屋)㊁に同じ。

ちやーろ 茶爐【名】茶を煮るための爐。

ちやーわ 茶話【名】さわ(茶話)に同じ。

ちやーわかし 茶沸【名】茶を沸かす釜。ちやがま。

ちやわーくわい 茶話會【名】さわくわい(茶話會)に同じ。

ちやわーん 茶碗・茶盌【名】㊀茶を飲み又は飯を食ひ、その他飲食の用に充つる磁器。茶飲茶碗・湯飲茶碗・飯(メシ)茶碗・碗(ワン)茶碗・五郎八(ゴロハチ)茶碗など、種類多し。㊁陶器。〔古語〕蜻蛉「ちやわんの枕」㊂ちやわんもり(茶碗盛)の略。㊃陰毛のなき女陰。

茶碗こ茶碗【句】仲あしき者の間がら。〔俚語〕「關關雎鳩新根「いづくを當に行くぞとも問はれぬ義理は茶碗と茶碗」

茶碗を投げば、綿にて抱へよ【句】柔よく剛を制する譬にいふ語。〔諺語〕

ちやわーぐすり 茶碗釉【名】やきものぐすり(燒物釉)に同じ。

ちやわーざけ 茶碗酒【名】猪口(チヨク)にて飲むを普通とする酒を、茶碗に盛りて呷(アフ)ること。「女だてらに茶碗酒」

ちやわーたけ 茶碗竹【名】〔植〕眞子竹類に屬する隱花植物。茶碗狀をなし、その內面に子嚢を有す。

ちやわーばす 茶碗蓮【名】〔植〕蓮の一種。花の徑二三寸に過ぎざるもの。主に盆栽とせらる。「物鉢」。

ちやわんーばち 茶碗鉢【名】燒物の鉢。燒物(燒物釉)に同じ。

ちやわんーむし 茶碗蒸【名】鳥又は魚の肉・野菜・銀杏などを、適宜に配合して、醬油の味を附け、玉子を溶きたる煮出汁に入れ、大なる茶碗に盛り、蒸籠(セイロ)に入れて蒸したる食品。ちわんやき。

ちやわんーもり 茶碗盛【名】水に、鰹節又は昆布よりとりたる煮出しを調合し、鹽味を附けたる透明なる汁に、季節により、芝蝦・椎茸・白魚・三ツ葉又は魚鳥の肉などを適宜に配して、茶碗に盛りたる吸物。ちやわん。わんもり(椀盛)參照。

ちやわんーやき 茶碗燒【名】ちやわんむし(茶碗蒸)に同じ。「じ。

ちやゑん-ばたけ 茶園畑・茶園畠【名】前條に同じ。冥途飛脚「野路を探せと言ひすてて、茶園畠の間間を駈立ててこそ通

りけれ」「桶。

ちやをけ 茶桶【名】茶を貯へおくための

ちゐゆ 地楡【名】〔植〕**われもかう**(地楡に同じ。

ちゆ 治癒【名】病のいゆること。疾のなほること。平癒。本復。

ちゆう 仲【名】二番目の兄弟。**ちゆうふ**(仲父)参照。「伯仲叔」

ちゆう 中【名】一何れへもかたよらぬこと。まんなか。中央。中間。中庸。二善くもなく悪しくもなきこと。あまり大きくも小さくもあらぬこと。ちゆうぐらゐ。ちゆうへん。三大寶の制にて、男女十七歳より二十歳まで、後、天平寶字の初の改正にて、十八歳より二十一歳までの者、即ち少(ワカ)の上、丁(ヨロ)の下なる者。四**はん**(半)三に同じ。五**ちう**(宙)一に同じ。太平記「眞壁孫四郎を中に提げながら」大機虎が摩「親達は何うあるも、確と中では覺えませぬ」(天)『英 Culmination』天體の高度の最も高き所。最高度。**ちゆうす**(中す)参照

ちゆう 中【名】中の舞【句】能(ノウ)の舞の、序の舞ほど靜かならず、破の舞ほど急ならぬもの。例へば熊野(ユヤ)の曲の「深き情を人や知る」、自然居士(コジヰン)の曲の「つれなき人の心かな」の後なる舞など。

ちゆう 中を取る【句】一極端に走らず。中庸を得。折中す。二人と人との間に立ちて、私利を圖る。心中二枚襖草紙「お前は、當(アテ)もない花車や娘仲居にまで仕着(シキセ)をして取らせうと、約束ばかりで夢らゆる、私が中でも取ったかと、毎日毎夜の使立(ツカヒ)」

ちゆう 忠【名】一偏に眞心を盡すこと、又その人。忠實。二君主に盡す節義、又その節義を盡す人。忠義。三古の彈正臺の判官。大忠少忠に分れたり。

ちゆう 忠【名】忠が不忠になる【句】忠を致さんとてせしこと、不忠の結果になる。

ちゆう 忠は憎まれの元(モト)【句】忠臣の言は、人君の耳にさからふ。〔諺語〕

ちゆう 注【名】『注は、一の器の水を他の器に注ぎ移すがごとくに、難解の字句を平易の字句に移し改めて解く義。註は、注の偏を繼へて、後世作りたる字。二字とも正音は**ちゆ**』本文の解し難きところを明かしたる文句。ときあかし。註解。註釋。註疏。

ちゆう 柱【名】『柱の字の音、正しくは**ちゆ**』「に同じ。

こちう(琴柱)に同じ。

ちゆう 柱に膠(ニカ)す【句】「琴柱(コトヂ)に膠す」

ちゆう 誅【名】『誅の字の音、正しくは**ちゆ**』罪ある者を罰すること。罪ある者を殺すこと。誅殺。誅戮。太平記「天將レ下レ誅」

誅に伏(フ)す【句】その罪に服して誅せらる。正統記「薬子・仲成は誅に伏す」

ちゆう 智勇【名】才智と勇氣と。

ちゆう 中【接尾】一或範圍の中(ウチ)の意。「同級中の優等生」二その事の繼續せる間の意。「問合(トヒアハセ)中」

ちゆう 住【名】『住の字の音、正しくは**ちゆ**又**おゆ**』すむこと、又住さゞ居る所。「武藏の住」

ちゆう 柱【名】『柱の字の吳音**ちゆ**の訛。柱の字は、琵琶にのみ限るにあらざれども、我が國にては**ちゆう**と讀みて、琴柱(コトヂ)と區別す。**ちゆう**(柱)**お**(柱)参照』琴の琴柱(コトヂ)、三味線の駒と同樣に、琵琶の胴と絃との間に插むもの。〔古語〕源氏「ぢゆうさすほど、ばちおとのさまかはりて」

ちゆう 重【名】『重の字の吳音、正しくは**ちゆ**』**おゆうばこ**(重箱)の略。

ちゆう 重の中(ウチ)【句】重箱に入れたる物。

おゆう 重【接頭】『重の字の吳音、正しくは**おゆ**』〔化〕『英 Bi- 又 Di-』二酸の組成一分子特有元素原子二箇以上を含む意。例へば、クロム酸の H_2CrO_4 なるに對し、$H_2Cr_2O_7$ を重クロム酸といふ類。二酸式鹽に添へて用ふる語。例へば、酸式炭酸ナトリウム(炭酸曹達)を重炭酸ナトリウム(重炭酸曹達)といふ類。

おゆう 重【助數】『重の字の吳音、正しくは**ちゆ**』かさなりたる物事を數ふるに用ふる語。かさね。層。「五重の塔」

ちゆう 中【接尾】一**ちゆう**(中)二に同じ。「町(チヤウ)中の評判者」二**ちゆう**(中)三に同じ。「慶應義塾」この頃ぢゆうの雨で、千曲川は大水」

ちゆう 中【名】一まんなか。ただなか。中心。二首府。首都。

ちゆうあい 忠愛【名】一まごころをつくして、いつくしむこと。二忠義と仁愛と。三忠君愛國。「忠愛の思想」

ちゆうあい-てんわう 仲哀天皇【名】〔人〕第十四代の天皇。御名は足仲彦(タラシナカツヒコ)。日本武尊の第二子。御母は垂道入(イリ)姫。在位九年(紀元八五二年—八六〇年)。即位の九年崩ず。壽五十二。

ちゆうあう 中央【名】一まんなか。ただなか。中心。二首府。首都。

ちゆうあう-あじや 中央亞細亞【名】〔地〕支那の西部及び其の周邊を包括する地域。普通アルタイ(Altai)山脈を北境とし、インダス(Indus)河を南境とし、東方は楊子江・黃河の分水領を界とし、西方はパミル(Pamir)高原及び露領トルキスタン・イラン(Iran)高原一帶を包括す。土地高燥にして、氣候の激變甚しく、人種は蒙古人に屬し、游牧を事とし、河邊の民は農に從事す。

ちゆうあう-あふりか 中央亞弗利加【名】〔地〕**ちゆうぶあふりか**(中部亞弗利加)に同じ。

ちゆうあう-あめりか 中央亞米利加【名】〔地〕南北亞米利加大陸の僅に連れる地峽部の稱。墨西哥と哥倫比亞との間にあり、グァテマラ(Guatemala)・サルヴァドル(Salvador)・ホンヂュラス(Honduras)・ニカラグワ(Nicaragua)・コスタリカ(Costa Rica)・パナマ(Panama)の六共和國の總稱。中米。

ちゆうあう-えうねん-がくかう 中央幼年學校【名】りくぐんちゆうあうえうねんがくかう(陸軍中央幼年學校)の略。

ちゆうあう-きくわん 中央機關【名】**ちゆうあうぎやうせいきくわん**(中央行政機關)に同じ。(地方機關に對して)

ちゆうあう-きしやうだい 中央氣象臺【名】氣象に關する事項を研究し、各地の測候所の上に立ちて、氣象事業を統轄する所。文部大臣の管理に屬し、現時京に置かれ、臺長(技師中より選任)技師・技手・書記の職員あり。その附屬測候所及び各地の測候所よりの報告を照合して、全國の天氣豫報を調製す。氣象臺。

ちゆうあう-きしやうだい-ふぞくそくこうじよ 中央氣象臺附屬測候所【名】中央氣象臺に附屬せる測候所。中央氣象臺の枝手を所長とす。

ちゆうあう-ぎんかう 中央銀行【名】『英 Central bank』一國の金融機關の中樞として、資金供給の源となり、兌換(ダクワン)券發行の如き特殊の權限を付與せられ、又國庫金の取扱の任にあたる、特殊の銀行。例へば、我が國の日本銀行の類。

ちゆうあう-きんこ 中央金庫【名】大藏大臣の管轄に屬する金庫の、東京にありて、各地の本金庫と、本金庫を置かざる地方の支金庫とを總轄するもの。日本銀行これが事務取扱を委任せらる。日本銀行は、又各地の本金庫・支金庫の事務取扱のために、支店・出張店もしくは代理店を設く。

ちゆうあう-ぎやうせい 中央行政【名】〔法〕『英 Central administration』一中央行政機關のつかさどる行政。(地方行政に對して)二國家が直接に經營する行政。內閣・各省などは、即ちこれを行ふ機關なり。官治行政。(地方行政に對して)

ちゆうあう-ぎやうせい-きくわん 中央行政機關【名】〔法〕中央行政を處理する機關。中央行政官廳など。中央機關。(地方行政機關に對して)

ちゆうあう-ぎやうせい-くわん 中央行政官【名】中央行政の事務を取扱ふ官吏。中央官。(地方行政官に對して)

ちゆうあう-ぎやうせい-くわん-しよ 中央行政官署【名】〔法〕次條に同じ。

ちゆうあう-ぎやうせい-くわんちやう 中央行政官廳【名】〔法〕一般に施行する政務を、その名によりて施行する權限及び責任ある機關、即ち各省大臣(各省大臣は、一面國務大臣として、憲法上の機關たると同時に、他の一面には、各省の大臣として、行政機關なり)など、又その機關がその職務を處理する所。官省。中央官廳。中央行政官廳。中央行政官署。中央官署。中央政廳。(地方行政官廳に對して)二次條に同じ。(地方行政官廳に對して)

ちゆうあうぎやうせい-くわんぷ 中央行政官府【名】〔法〕その管轄する區域。一國全體に渉る官府。中央行政府。中央行政官廳。中央政廳。中央政府。中央官府。(地方行政官府に對して)

ちゆうあうぎやうせいちやう 中央行政廳【名】〔法〕前條に同じ。(地方行政廳に對して)

ちゆうあうぎやうせいふ 中央行政府【名】〔法〕ちゆうあうぎやうせいくわんぷ(中央行政官府)に同じ。(地方行政府に對して)

ちゆうあうくわこうきう 中央火口丘【名】〔地〕『英 Central cone』複成火山の中央に新に生じたる火口丘。必ずしも舊火口の中央部に存在すとは限らず、又その數も一二箇に止まらず。例へば、箱根火山の二子山・駒ヶ嶽・神山等の類。

ちゆうあうくわん 中央官【名】ちゆうあうぎやうせいくわん(中央行政官)に同じ。(地方官に對して)

ちゆうあうくわんしよ 中央官署【名】〔法〕ちゆうあうぎやうせいくわんちやう(中央行政官廳)に同じ。(地方官署に對して)

ちゆうあうくわんちやう 中央官廳【名】〔法〕ちゆうあうぎやうせいくわんちやう(中央行政官廳)に同じ。(地方官廳に對して)

ちゆうあうくわんぷ 中央官廳【名】〔法〕ちゆうあうぎやうせいくわんぷ(中央行政官府)に同じ。(地方官廳に對して)

ちゆうあう-けいさつ 中央警察【名】一國家一般の利害に關する警察。(地方警察に對して)　二中央官廳の權限に屬する警察。(地方警察に對して)

ちゆうあう-しふけん 中央集權【名】『英 Centralization』一權力の中央に集まること。(地方分權に對して)　二〔法〕全國の行政權を中央政府に集め、地方官廳は單にその意思を受け奉ずるのみなること。(地方分權に對して)

ちゆうあうぎやうせいちやう 中央政廳【名】〔法〕ちゆうあうぎやうせいくわんぷ(中央行政官廳)に同じ。(地方政廳に對して)

ちゆうあうせいど 中央制度【名】國家が直接に官府を設けて行政する組織。(地方制度に對して)

ちゆうあうせいふ 中央政府【名】〔法〕ちゆうあうぎやうせいくわんぷ(中央行政官府)に同じ。

ちゆうあう-せうくわ 中央小窩【名】〔醫〕『羅 Fovea centralis』網膜の黃點の中央なる凹(ヘこ)める部分。最明點。**こせん**(視線)參照。

ちゆうあう-たい 中央體【名】〔生〕『英 Centrosome』細胞內の一器官。核の附近に存する微細の小體。靜止細胞にもあれど、多くは分裂する時に現出するものなるを以て、細胞分割運動の中心と見做さる。中體。

ちゆうあう-だんたい 中央團隊【名】首府における團隊。(地方團隊に對して)

ちゆうあう-ちゆうだい 中央中臺【名】〔佛〕五佛を東・西・南・北及び中の五位に配して安置する時に、中央を占むる佛の臺。**ごぶつ**(五佛)參照。盛衰記 中央中臺の遮那(チヤ)の果滿」

ちゆうあう-でんちしき 中央電池式【名】**きようどうでんちしき**(共同電池式)に同じ。

ちゆうあう-どりやうかうきけんていじよ 中央度量衡器檢定所【名】農商務省工務局に置き、度量衡器の檢定、並びに度量衡器又は計量器の比較檢查、及び試驗に關する事務を掌る所。農商務技師を所長とす。

ちゆうあう-はうだいかん 中央砲臺艦【名】『英 Central battery ship』小數の大砲を船體中央部に集中して、砲臺を成せる戰艦。我が國の舊扶桑艦は、これに屬す。

ちゆうあう-はつでんしよ 中央發電所【名】一般の需要に應じて、廣大なる區域に供給すべき電力を發生する發電所。電燈會社などに設くるもの。

ちゆうあう-ぶ 中央部【名】中央の部分。まんなかの場所。中部。

ちゆうあう-へうじゆんじ 中央標準時【名】〔地〕我が國の東經百三十五度の子午線(丹波國福知山・播磨國明石及び紀伊國和歌山の西三里ほどの地を通過す)を基本とせる標準時。卽ち英國グリニチ天文臺の時刻より九時間進めるものにて、もと單に標準時と呼びしを、明治二十九年新に西部標準時を制定せしに對して、中央の二字を冠せしめたり。東は根室、西は那覇の地方時とこの標準時との間には、三十分に近き時差を生ず。**せいぶへうじゆんじ**(西部標準時)參照。

ちゆうあう-ゑいせいくわい 中央衞生會【名】內務大臣の監督に屬し、公衆衞生及び獸畜衞生に關する事項につき、各省大臣の諮詢に應じて、意見を開申する合議制の機關。會長一人、委員二十八人以內にて組織す。

ちゆうあく-にん 重惡人【名】きはめて惡しき性質の人。ごくあくにん。ごくちゆうあくにん。天の網島「ちゆうあくにんのこの治兵衞」

ちゆうあごんきやう 中阿含經【名】〔書〕**あごんきやう**(阿含經)を見よ。

ちゆうあらんにやしよ 住阿蘭若處【名】〔佛〕**づだ**(頭陀)を見よ。

ちゆうい 注意【名】『注の字の音、正しくは**ちゆ**』一氣をつくること。心をとどむること。　二用心。警戒。　三傍より戒め告ぐること。　四〔哲〕『英 Attention』廣義にては、集注せられたる意識。狹義にては、多少の努力を伴へる有意的の意識の集注。注意の高下(カウ)【句】〔哲〕次條に同じ。注意の振動【句】〔哲〕次條に同じ。注意の動搖【句】〔哲〕次條に同じ。注意の波動【句】〔哲〕『英 Fluctuations of attention』最小强度の刺戟(例へば一定の距離に在る懷中時計の音など)又は外圍に對して、最小可知の差違を有する刺戟(例へば白色上に置きたる淡灰色など)に注意を向け居るに、その感覺の、一定時の間隙を隔てて、或は消失し、或は興起する現象。注意を喚起す【句】次條に同じ。注意を惹(ひ)く【句】注意せしむ。注意を喚起す。

ちゆうい 誅夷【名】『誅の字の音、正しくは**ちゆ**』うちたひらぐること。つみしおろすこと。「よ。

ちゆういう 仲由【名】〔人〕しろ(子路)を見よ。

ちゆういう-き 中右記【名】〔書〕『中右は中御門右大臣といふべきを略せるなり』中御門右大臣藤原宗忠の日記。堀川天皇の寬治元年より崇德天皇の保延元年までの事を記せり。寫本百〇九冊。故實の考證となるもの多し。一名、中右抄。宗忠公記。**ちゆうないき**(中內記)參照。

ちゆういうせい 中遊星【名】〔天〕**いうせい**(遊星)を見よ。

ちゆういう-せう 中右抄【名】〔書〕**ちゆういうき**(中右記)に同じ。

ちゆうい-いかん 中醫監【名】**かいぐんぐんいちゆうかん**(海軍軍醫中監)の舊稱。

ちゆうい-さんいつ-しやう 注意散逸症【名】〔哲〕『英 Aprosexia』注の字の音、正しくは**ちゆ**』注意を集注する力を缺く精神症。

ちゆうい-じんぶつ 注意人物【名】『注の字の音、正しくは**ちゆ**』その筋より、常にその行動に注目せられをる、危險なる人物。

ちゆうい-いた 中板【名】一風爐の下敷に用ふる板の大板より小さく、小板より大なるもの。　二**いたわり**(板割)二に同じ。

ちゆうい-いん 中陰【名】〔佛〕一『此に死して、彼に生ずる、中間に於て受くる陰形の義。陰は五陰(ヲン)の陰なれば、實は臭音にて「オン」と發音すべきなり』**ちゆう**(中有)に同じ。　二人の死後七七四十九日までの魂魄の行著くところの果の善所・惡趣いづれとも未だ定まらぬ間。その間、身は童子のごとく、最も早きは七日の終に於て、往生の緣を得、然らざれば、第二七日の終に及びてこれを得。斯くのごとく七日づつを一期として、七七四十九日に至るといふによりて、四十九日間をこの期間とし、この間の作善(サぜ)道福によりて、善處に往生すといふ。又、極善者は、死後直ちに成佛し、極惡の者は直ちに惡趣に墮つるが故に、中陰は中善中惡の者にのみ存すと說

かる。 保元「一院崩御の御中陰をだに過させたまはずして」 「部地方。

ちゅういん 中印 【名】〔地〕五印度中の中

ちゅういんう 中陰有 【名】〔佛〕**ちゅういん**（中陰）に同じ。

ちゅういんきょう 中陰経 【名】〔書〕佛、中陰に入りて、大光明を放ち、一切中陰の衆生を集めて、大乗の法を説きしもの。初品に佛彌勒（ミロク）菩薩と中陰の法を論ずる記事あり。二巻。支那姚秦（シンの竺佛念の譯。 論曲「業業經」「中陰經の妙文（モン）」

ちゅうい-りょく 注意力 【名】『注の字の音、正しくは**ちゅ**』注意する力。注意の能力。 「よ。

ちゅうう 中有 【名】〔佛〕しう（四有）を見

ちゅうう 中有の旅 【句】〔佛〕『往生十因に「形無二常住一只有二守屍之鬼一神無二常家一獨跡二中有之旅一悲哉冥冥獨逝一人不レ從」とあり』中有の身の、往生の緣を求めてさまよふを、旅に譬へていふ語。 十訓「中有の旅のありさま心ぼそきさまなどいひて」

ちゅうう-の-みち 中有の道 【句】〔佛〕中有の旅にいでたつ道程に譬へていふ語。

ちゅううき 中右記 【名】〔書〕**ちゅういうき**（中右記）を見よ。

ちゅううけ 中浮 【名】扇の一種。疊みたる時、上部が中啓よりもやや狭く、六七分ほど開くやうに作りたるもの。室町時代より江戸時代の末まで、武家にて、儀式の時などに用ひたり。ぼんやり。中廣（チュウヒロ）。

ちゅううせう 中右抄 【名】〔書〕**ちゅういうせう**（中右抄）を見よ。

ちゅうえ 中衣 【名】〔佛〕**ちゅうげえ**（中偈「衣」の略。

ちゅうえい 柱櫨 【名】『柱の字の音、正しくは**ちゅ**』はしら。

おゆうえいさう 重營倉 【名】營倉の一。一日乃至三十日間營倉に錮し、演習及び敎育の外、勤務に服することを禁じ、唯飯及び湯鹽のみを給し、寢具を與へず、營內居住者に對しては、俸給の十分の八、營外居住者に對しては、その半額を減ずるもの。陸軍の下士卒及び諸生徒の故意に犯行に觸れたるものに科す。（輕營倉に對して）

ちゅうえう 中夭 【名】『維摩經に「命不二中夭一」とあり』中年にて死ぬること。わかじにに。はやじに。夭折。早死。

ちゅうえう 冲幼 【名】**えうちゅう**（幼冲）に同じ。 「書類」

おゆうえう 重要 【名】大事。肝要。「重要

おゆうえうひん 重要品 【名】㊀大切なる品物。貴重品。㊁市場にて、多量に賣買せらるる商品。「輸入重要品」「輸出重要品」

おゆうえうぶっさんごうげふくみあひ 重要物産同業組合 【名】重要なる物産製造又は販賣に關する營業者、及びこれと密接の關係を有する營業者の協同一致して、營業上の弊害を除き、その利益を增進する目的にて組織する公共組合。同業者の三分の二以上の同意を得て出願の上、組織する場合と、農商務大臣が必要と認めて、强制的に組織せしむる場合とあり。

おゆうえうぶっさんごうげふくみあひはふ 重要物産同業組合法 【名】重要輸出品同業組合法に代りて、明治三十三年制定せられたる法律。

おゆうえうぶつさんごうげふくみあひれんがふくわい 重要物産同業組合聯合會 【名】重要物産同業組合が、相互の氣脈を通じ、目的を達するために、農商務大臣の認可を得て、聯合して設立する公共組合。

おゆうえうゆしゅつひんごうげふくみあひはふ 重要輸出品同業組合 【名】明治三十三年四月以前、重要なる輸出品の生產・製造または販賣に從事する營業者、及びこれに密接なる關係を有する營業者が、營業上の弊害を矯正し、利益を增進する目的にて設置したる公共組合。

おゆうえうゆしゅつひんごうげふくみあひはふ 重要輸出品同業組合法 【名】重要輸出品同業組合に關して規定したる法律。明治三十三年重要物產同業組合法の實施と共に廢止す。

ちゅうえき 重液 【名】水より比重の大なる液。

おゆうえき-せんくわうはふ 重液選鑛法 【名】岩鹽液・鹽化石灰液・硫酸亞鉛液・沃化水銀液などのごとき重液を用ひて、選鑛する方法。

ちゅうえふ 中葉 【名】㊀なかごろ。中世。（初葉・末葉に對して） ㊁次條の略。

ちゅうえふ-がみ 中葉紙 【名】鳥子紙（トリノコガミ）の、厚葉より少し薄く漉（ス）きたるもの。（あつ葉うす葉などに對して）

おゆうえん 重緣 【名】かつて緣につながれる家とかさねて緣組をすること。

ちゅうおとし 中落 【名】謠曲の落節（オトシ）の一。中へ落すもの。

ちゅうおん 中音 【名】㊀高くも低くもあらぬ音聲。中ぐらゐの高さの聲。梅暦「くはへてゐた楊枝を按（ア）りながら、中音にて、お長さん、迷子にならねえやうに、手を曳かれてお出でよ」 ㊁〔音〕**あるさ**に同じ。

ちゅうおん 中陰 【名】〔佛〕**ちゅういん**（中陰）を見よ。

おゆうおん 重恩 【名】おもき恩德。深きめぐみ。厚きなさけ。 「に同じ。

おゆうおん 重音 【名】〔音〕**ふくおん**（複音）

おゆうおん-ぶ 中音部 【名】〔音〕『英 Alto part』あるさに同じ。

ちゅうおんぶきがう 中音部記號 【名】〔音〕『英 Alto clef』五線音譜表の第三線上に置きたる八字記號。

ちゅうか 中夏 【名】㊀夏のなかば。 ㊁〔地〕『中は、四方の夷狄に對していひ、夏は大なる意』**ちゅうくわ**（中華）に同じ。

ちゅうか 仲夏 【名】『夏三箇月の中の月なるよりいふ』夏の中の月、即ち陰曆五月。

ちゅうか 厨家・廚家 【名】**だいばんどころ**（臺盤所）に同じ。

ちゅうか 柱下 【名】『拾芥抄に「內記著作郎…柱下內史今世稱二柱下一」とあり。柱の字の音、正しくは**ちゅ**』**ないき**（內記）の異稱。柱下の史（シ）【句】㊀『漢書の張湯傳に「老子爲二柱下史一即藏室之柱下、因以爲二官名一」とあり』**らうし**（老子）の別稱。柱史。

ちゅうが 駐駕 【名】『駐の字の音、正しくは**ちゅ**』**ちゅうりん**（駐蹕）に同じ。

ちゅうか 重荷 【名】㊀おもき荷物。 ㊁身にあまるばかりの負擔。おもに。

おゆうか 住家 【名】『住の字の音、正しくは**ちゅ**』住みてある家。すみか。住屋。

ちゅうかい 注解・註解 【名】『注註の字の音、正しくは**ちゅ**』註を加へて、本文の意義を解釋すること、又その書。疏註。

ちゅうかい 中階 【名】㊀中央または中位の階段。 ㊁中位の階級。

ちゅうかい 中海 【名】〔地〕陸地に圍繞せられたる海。例へば地中海などの類。內海。

ちゅうかい 仲介 【名】㊀兩者の中に立ちて、雙方の便宜をはかること。なかだち。媒介。 ㊁〔法〕「居中調停」に同じ。

ちゅうがい 蟲害 【名】蟲のために受くる損害。

ちゅうがい 誅害 【名】『誅の字の音、正しくは**ちゅ**』責め殺すこと。

ちゅうかいしゃ 仲介者 【名】仲介する人。

ちゅうがいねん 中概念 【名】〔哲〕『英 Middle conept』三段論法にて、大・小兩前提に共通に存して、大・小兩概念を結合する媒介者となりし、斷案にはあらはれざる概念。例へば「人は死すべきものなり（大前提）、學者は人なり（小前提）、故に學者は死すべきものなり（斷案）」に於ける「人」の類。中名辭。媒介名辭。媒辭。

ちゅうかう 忠孝 【名】君に忠に、親に孝なること。

忠孝、一門に萃（アツ）まる【句】『晉書の卞壺傳に「微士翟湯聞レ之、歎曰、父死二於君一子死二於父一忠孝之道萃二一門一」とあり』忠臣孝子一門より出づ。

ちゅうかう 中行 【名】中正なるおこなひ。中道の行爲。「中行の士」

ちゅうかう 中項 【名】〔數〕『英 Middle term』**ないかう**（內項）に同じ。

ちゅうかう 中耕 【名】〔農〕土壤の風化作用を促進し、溫度・濕氣を調節し、作物の發育を助長するため、農作物の發育中、その條間の表土を疎鬆ならしむる耕作。中打。

ちゅうかう 中港 【名】〔地〕臺灣新竹廳竹南一堡中港溪の右岸に在る市街。基隆より

七四哩半、支廳あり。

ちゅう-かうぎ 中講義 【名】㊀もと工部省に設置されし教官。大講義の下、少教義の上にありし判任官。㊁けうだうしよく(教導職)を見よ。

ちゅう-かうぎせい 中講義生 【名】せんけうし(宣教使)㊁を見よ。

ちゅうかうてん 中交點 【名】〔天〕かうかうてん(降交點)に同じ。

ちゅうかく 忠恪 【名】心のまめやかにしてつつしみぶかきこと。忠謹。

ちゅう-かく 中角 【名】㊀角の折數(キヲン)の、五寸四方に造れるもの。(大角・小角(クカ)に對して)㊁大いさ中位なる牛の角。

ちゅう-がく 中學 【名】ちゅうがくかう(中學校)の略。「に同じ。

ちゅう-がく 重學 【名】〔理〕りきがく(力學)

ちゅうがく-かう 中學校 【名】『英 Middle school』男子に須要なる中等教育を施すを目的とする學校、即ち小學校と高等學校又は專門學校との中間の程度なるもの。もと尋常中學校と稱し、又高等學校を高等中學校と稱したり。

ちゅうがくかうれい 中學校令 【名】中學校の目的の設備等に關する根本的法規。明治三十二年勅令を以て公布せられ、二十二條より成りしが、その後、數回の小改正を經、四十四年更に大改正を加ふ。

ちゅう-がくく 中學區 【名】明治五年に定められたる學區の一。一大學區内を區分して、一箇の中學校を設くべしと定めし區域。(大學區・小學區に對して)

ちゅうがくけういく 中學教育 【名】ちゅうとうけういく(中等教育)に同じ。

ちゅう-がくしやう 仕學生 【名】『住の字の音、正しくはぢう』佛寺に住して外典を修むるもの。「徒。

ちゅうがく-せい 中學生 【名】中學校の生

ちゅうがく-ていど 中學程度 【名】中學校に於ける教育の程度。又、中學生の通常有する學力の程度。

ちゅうがくりん 中學林 【名】中學程度の教育を施す、僧侶の學校。だいがくりん(大學林)參照。

ちゅう-かさじるし 中笠標 【名】笠標の一。二幅のもの。(大笠標・小笠標に對して)

ちゅう-がた 中形 【名】㊀大ならず、小ならざる大きさの形。㊁模樣の形の中位のもの。(大形に對して)

ちゅうがた-ぞめ 中形染 【名】㊀中形に染むること。㊁中形に染めたる布帛。通常、縮緬岡木棉などにして、浴衣地となす。

ちゅう-かふ 衷甲 【名】『甲を衷にする義』きごみ。よろひした。「に同じ。

ちゅう-がへり 中返 【名】ちうがへり(宙返)

ちゅう-かん 忠諫 【名】まごころを以て意見すること。

ちゅう-かん 中間 【名】二つの物事の距離又はすきま。まあひ。なか。あひだ。

ちゅう-かん そしよう 中間訴訟 【法】中間の爭(句)(中間訴訟)に同じ。「に同じ。

ちゅう-かん 中瀚 【名】ちゅうじゅん(中旬)

ちゅう-かん 忠肝 【名】忠義の充ちたる肝(こころ)。忠義のまごころ。忠膽。義膽。忠肝義膽【句】『忠義の肝膽の義』忠義一徹の心。

ちゅう-かん 忠奸・忠姦 【名】忠誠と奸惡と。忠臣と奸臣と。「と。

ちゅうかん-き 忠諫 【名】眞心より諫むること。

ちゅうかん-きよく 中間局 【名】『英 Intermediate station』電信の一線路中、三局以上の通信機を連續せる回線の中間なる各局。

ちゅうかん-しずゑ 中間雌蕊 【名】〔植〕自花受精を避けしむるための自然の妙用により、一箇の花に長短不同の雌蕊を具ふる時の、中間の長さなるもの。(長雌蕊・短雌蕊に對して)

ちゅうかんしずゑくわ 中間雌蕊花 【名】〔植〕一種の植物中、中間雌蕊を有する方の花。前條參照。(短雌蕊花・長雌蕊花に對して)

ちゅうかん-しやうげふ 中間商業 【名】〔商〕『英 Commission trade』中間に立ちて、口錢を取る仲立人の手を經て行はるる商業。

ちゅうかん-しゅくしゆ 中間宿主 【名】〔生〕『英 Intermediate host』寄生蟲の、終結宿主に寄生する前に寄生する或動物。例へば條蟲の、人體を終結宿主とし、その卵、人體より外界に出でて、幼蟲となり、牛・豚又は魚類に寄生し、その筋肉中に潛みて、これを中間宿主とし、人のこれを食するにあたりて、始めて人類の腸に達する類。

ちゅうかん-しよく 中間色 【名】かんしよく(間色)㊁に同じ。

ちゅうかん-せい 中間性 【名】兩者の中間にありて、何れにもあらざる性質。中性。

ちゅうかん-せん 中間線 【名】『英 Intermediate submarine』海底電線の一種。海の深さ約三十尋より五百尋に至る場所に敷設するもの。

ちゅうかん-そしよう 中間訴訟 【名】〔法〕『獨 Zwischenstreit』或事件を裁判するにあたり、その一部分に特別に調ぶべき事實生じて、それが爭となりたるときの訴訟。中間の爭。

ちゅうかん-だいか 中間代價 【名】〔商〕賣方の要求する代價と買方の希望する代價との中を取りて、定めし代價。なかのねだん。

ちゅうかん-はんけつ 中間判決 【名】〔法〕或審級にて、終局判決を準備するため、その事件中、一局部の爭點に就きてのみ下す判決。(終局判決に對して)

ちゅう-かんべ 中神部 【名】だいかんべ(大神部)を見よ。「(中油)に同じ。

ちゅうかん-ゆ 中間油 【名】〔化〕ちゅうゆ

ちゅうかん-ゆうずゑ 中間雄蕊 【名】〔植〕自花受精を避くる自然の妙用として、一花中の雄蕊の長さの不同なる場合の、中間の長さなるもの。(長雄蕊・短雄蕊に對して)

ちゅう-かんり 中監吏 【名】だいかんり(大監吏)を見よ。

ちゅう-かもじ 中髢 【名】髢の一種。背、奥女中などの用ひしもの。

ちゅう-がら 中辛 【名】七色唐辛の一。大辛より辛味少なきもの。(大辛・小辛に對して)

ちゅうがり-したて 中刈仕立 【名】〔農〕桑の樹を仕立つるに、地上一尺乃至一尺五寸ほどの點より枝を生ぜしむる方法。凍害少なく、排耘・採葉に便なり。

ちゅう-き 中氣 【名】㊀そ、ちゅうぶ。辛中風(ニ)に同じ。㊁二十四節の中、冬至・大寒・雨水・春分・穀雨・小滿・夏至・大暑・處暑・秋分・霜降・小雪の十二を稱す。

ちゅう-き 中饋 【名】『易經の下經に「六二、无レ攸レ遂、在二中饋一貞吉」とあり。室中に在りて、饋食をつかさどる意』㊀にたき。めしごしらへ。㊁ふじん(婦人)の異稱。

ちゅう-き 中期 【名】㊀中間の時期。㊁〔商〕よくげつぎり(翌月限)に同じ。(取引所の語)

ちゅう-き 中機 【名】〔佛〕中等の機根。(上機・下機に對して)

ちゅう-き 中規 【名】的の、內規と外規との中間。內院。(外規・內規に對して)

ちゅう-き 注記・註記 【名】『注・註の字の音、正しくはちゅ』㊀文書を記錄すること。㊁〔佛〕論議の時、題者の指圖により、題を讀みあげ、又その問答を筆記する役僧。

ちゅう-ぎ 中儀 【名】節會の一種。大儀に次ぎ、小儀より重きもの。即ち元日・白馬・端午及び豐明の節會等。

中儀の節會(エヘ) 【句】中儀の時執行せらるる節會。太平記『伊勢太神宮より寶劍を進めらるべしとて、中儀の節會を被レ行候なり』

ちゅう-ぎ 忠義 【名】君に事へて盡すべき節義。まごころ。ちゆう。

ちゅう-き 重器 【名】ちようき(重器)を見よ。

ちゅう-き 重寄 【名】ちようき(重寄)を見よ。

ちゅうき 重喜 【名】龍(ヲ)の狂言の一。重喜といふ名の弟子坊主、その師僧の月代を剃るにつきての滑稽を作れるもの。

ちゅう-きう 誅求 【名】『誅の字の音、正しくはちゅ』せめもとむること。せびること。

ちゅうぎ-がほ 忠義顏 【名】忠義らしくよそほふこと。「監)を見よ。

ちゅう-ぎかん 中技監 【名】だいぎかん(大技監)を見よ。

ちゅう-ぎくわん 中議官 【名】だいぎくわん

(大議官)を見よ。

ちゆうきげふ 中企業【名】〔經〕大企業と小企業との中間にある企業。

ちゆうぎこう 忠義公【名】〔人〕ふぢはらのみち(藤原倫通)を見よ。「を見よ。

ちゆうぎし 中技師【名】だいぎし(大技師)

ちゆうぎしゆ 中技手【名】だいぎしゅ(大技手)を見よ。

ちゆうぎせい 中議生【名】だいぎせい(大議生)を見よ。

ちゆうぎだて 忠義立【名】『だて(立)は接尾語』忠義らしく見せてはたらくこと。ちゆうぎぶり。ちゆうせつだて。

ちゆうぎぶり 忠義振【名】前條に同じ。

ちゆうきん 忠勤【名】■まめやかに勤むること。■赤心を以て奉仕すること。

ちゆうきん 忠謹【名】心のまめやかにしてつつしみあること。忠恪。

ちゆうきん 中琴【名】琴(キン)の一種。長さ三尺六寸六分を度とするもの。(大琴・小琴・次大琴に對して)

ちゆうきん 中金【名】かふぁんちゆうきん(中安中金)の略。「銀」の略。

ちゆうぎん 中銀【名】えいちゆうぎん(永中銀)を見よ。

ちゆうきん 重禁【名】おもきいましめ。重大なる業令。大禁。

ちゆうきんがくは 重金學派【名】〔經〕重金主義を唱ふる學派。重金派。尚商學派。商估學派。貴金學派。貴金主義。

ちゆうきんこ 重禁錮【名】〔法〕舊刑法の禁錮の一。輕罪に科し、禁錮場に留置して、定役に服せしもの。(輕禁錮に對して)

ちゆうきんごく 重禁獄【名】〔法〕舊刑法の禁獄の一。九年以上十年の期間監獄に拘禁して、定役に服せしめざりしもの。(重禁獄に對して)

ちゆうきんこちやう 重禁錮場【名】重禁錮の刑に處せられたる者を拘禁する所。(輕禁錮場に對して)

ちゆうきんしん 重謹愼【名】〔法〕陸軍の刑法に於ける謹愼の一。その期間、俸給十分の五を減ぜらる。(輕謹愼に對して)

ちゆうきんしゆぎ 重金主義【名】〔經〕ちゆうしやうしゅぎ(重商主義)に同じ。

ちゆうきんぞく 重金屬【名】〔化〕『英 Heavy metals』比重四以上の金屬、即ち白金・金・銀・銅・水銀・錫・鉛・蒼鉛・鉄・亞鉛・コバルト・ニッケル・アンチモン・タングステン・タンタラム等。器物製造用に供する金屬にありては、アルミニウムの外、皆、これに屬す。(輕金屬に對して)

ちゆうきんは 重金派【名】〔經〕ちゆうきんがく(重金學派)に同じ。

ちゆうきやう 忠經【名】〔書〕人臣の君に事ふる道を述べたるもの。體裁は孝經に似たり。一卷。支那東漢の馬高融の著と稱するも疑はし。

ちゆうきやう 中京【名】〔地〕『東京と西京(京都)との間にありて、その繁華三府に亞ぐよりいふ』尾張國名古屋の異稱。

ちゆうぎやう 重行【名】いねちゆうぎやう(異位重行)を見よ。

ちゆうきやうふく 重輕服【名】重服(ヂユウク)と輕服(キヤウフク)と。

ちゆうきやく 注脚・註脚【名】『注・註の字の音、正しくはちゆ』■本文の間に入れたる註釋と、本文の下方に添へたる解釋と。■〔文〕のちがき(後書)に同じ。

ちゆうきやみ 中氣病【名】■中氣を病む人。中風病。■身體自由ならざる人を罵りていふ語。

ちゆうきよ 沖虛【名】心の廣く淡泊なること。我執我慢の念なきこと。

ちゆうぎよ 蟲魚【名】蟲と魚と。

ちゆうきよ 住居【名】『住の字の音、正しくはちゆ』すまひ。すみか。住所。住宅。

ちゆうきようてんわう 仲恭天皇【名】〔人〕第八十五代の天皇。御名は懷成(カネナリ)。順徳天皇の長子。御母は東一條院藤原立子。在位七十餘日(紀元一八八一年)。文暦元年崩ず。壽十七。

ちゆうきよく 中曲【名】雅樂の樂曲を、その規模の大小によりて、二品に區別したるものの一。例へば、唐樂の王照君・越天樂(エテンラク)、高麗(コマ)樂の皇仁庭(ワウイン)・狛鉾(コマボコ)・延喜樂など。(大曲・小曲に對して)

ちゆうきよけん 住居權【名】『住の字の音、正しくはちゆ』〔法〕自由權の一。法律の範圍内にて、他より妨害せらるることなく、自由に住居し得る權利。

ちゆうきよし 電鋸齒【名】〔植〕『英 Dissoconate』葉緣の鋸齒の再度分裂して、二重の鋸齒を形成せるもの。再鋸齒。

ちゆうきよしや 中擧者【名】だいぎよしや(大擧者)を見よ。

ちゆうきよち 住居地【名】『住の字の音、正しくはちゆ』住居する土地。居住地。

ちゆうきり 中限・中切【名】〔商〕よくげつぎり(翌月限)に同じ。

ちゆうく 重苦【名】重き苦患。

ちゆうくう 中空【名】■ちゆうてん(中天)に同じ。■なかの空(ロウ)なること。から。がらんどう。

ちゆうぐう 中宮【名】■『中央の宮殿又は内部の宮殿の義』皇后の御所。〔古語〕■さんぐう(三宮)に同じ。(大寶令の中などにはこの意に用ひられたり)■くわうごう(皇后)に同じ。(醍醐天皇の皇后藤原穩子(ヤスコ)入りて中宮となりしより此の稱始まる)■後世、皇后の外に置かせられたる、天皇の嫡妻。一條天皇の時、藤原道長の女彰子(アキコ)入りて中宮と稱し、當時すでに中宮たりし藤原道隆の女定子、改めて皇后と稱するに至りしより以來、皇后・中宮の並立珍しからず。但し、多くは中宮より皇后に陞進するを例としに徴すれば、中宮は皇后の次位に在りしものの如くなれど、皇后なくして、中宮のみなる場合もあり。册立の議式に於ても、兩者の間に差別なかりき。足利時代には、中宮の册立中絶し、德川時代に入りて、後水尾天皇、將軍秀忠の女和子(カズコ)を納れて正后とせらるるに及びて、また中宮の稱を用ひられしが、明治維新後その稱廢絶せり。■ほんめいやうしやう(本命星)を見よ。

ちゆうぐうさぶらひのをさ 中宮侍長【名】中宮に侍ふる侍の長。

ちゆうぐうじ 中宮寺【名】大和國生駒(イコマ)郡法隆寺村にある尼寺。昔は法相宗、今は眞言宗。推古天皇の十七年聖德太子の御母穴穗部間人(アナホベノハシヒト)皇后のために創建せしもの。一名、中宮尼寺。古名、斑鳩尼寺(イカルガニジ)。文永中に再興し、近世は尼宮門跡の一にして、斑鳩(イカルガ)御所といへり。

ちゆうぐうしき 中宮職【名】古、中務(ナカツカサ)省に屬して、皇后宮の事を掌りし役所。三宮ともにおはします時は、そのすべての御上をも掌り、後世、皇后・中宮並立したまふに及びて、皇后宮職・中宮職の二つに分れたり。職員は大夫(カミ)・亮(スケ)・大進(ダイジン)各一人、少進(ショウシン)二人、大屬(ダイサカン)一人、少屬(ショウサカン)二人、及び舍人(トネリ)四百人、その他使部(シブ)・直丁(ヂキチヤウ)各若干ありたり。きさいのみやのつかさ。なかのみやのつかさ。

ちゆうぐうしこ 中宮祠湖【名】〔地〕ちゆうぜんじこ(中禪寺湖)に同じ。

ちゆうぐうじに 中宮尼寺【名】ちゆうぐうじ(中宮寺)に同じ。

ちゆうぐうし 中宮侍【名】「の長官。

ちゆうぐうのかみ 中宮大夫【名】中宮職【句】だいきやう(大夫)の條下を見よ。

ちゆうぐうのだいぶ 中宮大夫【名】前條に同じ。

ちゆうぐくり 中括【名】■固くもゆるくもなき程に括ること。■『高(カタ)を括るを見よ』よい加減にあしらふこと。〔俚語〕世間娘氣質「主人を輕しめ、中ぐくりにする心より」

ちゆうぐち 中口【名】美濃國に産する一種の厚紙。縱九寸三分、横一尺三寸。德の山。床の山。

ちゆうくん 忠君【名】君に誠をつくすこと。

ちゆうくん 忠勳【名】忠義の勳功。まめやかなるいさを。

ちゆうぐん 中軍【名】左右又は前後の部隊の中間にある軍隊。多くは大將の直接指揮に屬す。中堅・本陣・(前軍・後軍に對して)

ちゆうぐん 中郡【名】大化二年郡を三等に分ちたる時の第二位。即ち四里以上三十

里以下の郡。大寶の制にては、改めて五等となし、その第三位即ち八里以上十一里以下の郡。(上郡・小郡・下郡に對して)

ちゅうぐん 駐軍【名】『駐の字の音、正しくは**ちゅ**』或る土地に軍隊の駐在すること、又その軍。

ちゅうぐらゐ 中位【名】一方にかたよらぬその中間の程度。なかほど。中等。

ちゅうぐり 中栗【名】粒の大きさの中ぐらゐなる栗。

ちゅうくろむさん-かり 重格魯謨酸加里【名】〔化〕次條に同じ。

ちゅうくろむさん-かりうむ 重格魯謨酸加留謨【名】〔化〕『獨 Kaliumdichromat』重クロム酸のカリウム鹽。三斜系に屬する橙赤色の大なる結晶にして、その水溶液は僅かに酸性を呈す。有機物を混ずる時、日光の作用を受くれば、速かに還元する特性あり。寫眞術・染色術・電池の製造に强酸化劑として、廣く應用せらる。劇藥に屬す。

ちゅうくろむさん-そおだ 重格魯謨酸曹達【名】〔化〕『英 Dichromate of soda』**ちゅうくろむさんなとりうむ**重格魯謨酸那篤留謨)に同じ。

ちゅうくろむさん-そかりうむ 重格魯謨酸曹加留謨【名】〔化〕『英 Sodium dichromate』前條に同じ。

ちゅうくろむさん-でんち 重格魯謨酸電池【名】『英 Dichromate cell』水銀に漬せる亞鉛棒と炭素棒とを硫酸にて、酸性にせる重クロム酸加里の溶液に立てたる電池。ボッヂンドルフ(Poggendorf)の發明に係る。

ちゅうくろむさん-なとりうむ 重格魯謨酸那篤謨【名】〔化〕『獨 Natriumdichromat』重クロム酸のナトリウム鹽。橙赤色の結晶にて、その性質重クロム酸カリウムに酷似し、その代用品として、工業上に用ふ。重格魯謨酸曹達。

ちゅうくろむさん-ぼたしらむ 重格魯謨酸剝篤叟謨【名】〔化〕『英 Potassium dichromate』**ちゅうくろむさんかりうむ**(重格魯謨酸加留謨)に同じ。

ちゅうくわ 中和【名】■**ちゅうわ**(中和)に同じ。■陰曆の二月の一日。

ちゅうくわのせつ 中和の節(ㇱ)【句】古、支那にて、陰曆二月朔日に行ひし節會。唐德宗の時、李泌の定めしものにて、三月の上巳と九月の重陽と合はせて、三令節となせり。

ちゅうくわ 中華【名】■〔地〕『四方の夷狄に對して、中央の開化したる所の義』支那人の自國を稱する語。中夏。中國。華夏。■**ちゅうくわまんぢゅう**(中華饅頭)の略。

ちゅうくわ 重科【名】重き罪科。大なるとが。重罪。

ちゅうくわ 住果【名】『住の字の音、正しくは**ちゅ**』靡聞(ビブン)緣覺の聖者の、各その所得の證果に安住して、更に向上の道を求めんとせざること。十劃「佳果の緣覺は佛所へは到るかと云はれければ」

ちゅうぐわい 裏懷【名】おもひ。こころ。

ちゅうぐわい 中外【名】■うちと、そとと。內外。■內國と外國と。內外。

ちゅうぐわい 駐外【名】『駐の字の音、正しくは**ちゅ**』外國に駐在すること。「駐外使臣」

ちゅうぐわい-けいゐでん 中外經緯傳【名】〔書〕我が國と支那・朝鮮との交涉を古史によりて考證せるもの。六卷。伴信友の著。

ちゅうくわう 重光【名】**ちゃうくわう**(重光)

ちゅうくわう-らく 重光樂【名】〔音〕唐樂に屬する雅樂。水調の新樂。

ちゅうくわ-げん 中和絃【名】〔音〕『英 Mediant』音階の第三音。主音の上方三度、即ち下方六度の音。主和絃と屬和絃との中間に在り。

ちゅうくわ-ここんちゅう 中華古今註【名】〔書〕**こんちゅう**(古今註)を見よ。

ちゅうくわ-くわしいれ 重菓子入【名】菓子を入るる重箱。五人玄「重菓子入れに燒飯」

ちゅうくわ-くわしつ 重過失【名】〔法〕故意の所行に等しきほどの重大なる過失。(輕過失に對して)

ちゅうくわ-たまご 中華玉子・中華卵【名】鯛の肉をよく擂り、卵を入れてよく解き、薄鍋にて程よく燒き、編笠の形に合はせたる食品。

ちゅうくわ-にん 重科人【名】罪科の重き人。重科の人。

ちゅうくわひ 中果皮【名】〔植〕『英 Mesocarpium』果實の、外果皮と內果皮との間にありて、食用に供する、厚き肉質の部分、即ち果實の肉。漿果皮。(外果皮・內果皮に對して)

ちゅうくわ-まんぢゅう 中華饅頭【名】皮を玉子・溫飩粉にて捏ねて製し、かしはもちの形にしたる唐饅頭。ちゅうくわ。

ちゅうくわ-みんこく 中華民國【名】〔地〕『**ちゅうくわ**(中華)■を見よ』**しな**(支那)に同じ。

ちゅうくわん 中浣・中澣【名】『**さんくわん**(三澣)を見よ』**ちゅうじゅん**(中旬)に同じ。(上浣・下浣に對して)

ちゅうくわん 中管【名】笛の一種。六孔にして、その長さ長笛と短笛との間にあり。古、雅樂に用ひ、また東遊には必ず用ひたるが、後世、高麗(コマ)笛を代用せしより、全く廢れたり。

ちゅうくわん 衷款【名】まごころ。衷心。

ちゅうぐわん 中觀【名】〔佛〕三觀の一。中諦(タイ)の理を觀じて、無明(ムミヤウ)の惑を斷ずること。實行的なる中道を智的方面より見たるもの。中道觀。(法相宗・天台宗の語)

ちゅうくわん 忠款【名】まめやかにして眞心あること。忠誠。

ちゅうくわん 重患【名】おもきやまひ。大病。大患。

ちゅうくわん 重關【名】〔佛〕悟道の難關。〔禪宗の語〕

ちゅうくわん-しゃ 重患者【名】おもき病人。大病人。

ちゅうくわんぼく 中灌木【名】〔植〕灌木の一種。その高さ凡そ五尺位より一丈位に達するもの。

ちゅうくわん-ろん 中觀論【名】〔書〕『梵 Madhyamaka-śāstra の譯語』三論の一。印度龍樹菩薩の著。支那姚秦(ヨウシン)の鳩摩羅什(クマラヂュウ)の漢譯。四卷。中道の理を說けるものにて、大藏經の大氣論部に屬し、大乘諸宗の共礎をなせり。一名、中論。

ちゅうくわ-もん 中和門【名】**ちゅうわもん**(中和門)に同じ。

ちゅうくわゐん 中和院【名】**ちゅうわゐん**(中和院)に同じ。

ちゅうけい 中京【名】國の中央なる首都。(左京・右京又は東京・西京などに對して)

ちゅうけい 中啓【名】親骨の上端を外へそらし、たたみても、なほ半ば啓ける如く造りたる扇。かはほり。すゑひろ。

(啓 中)

ちゅうけい 中繼【名】なかつぎ。「じ。

ちゅうけい 中徑【名】**ちょくけい**(直徑)に同じ。

ちゅうけい 中經【名】詩經と儀禮と周禮との總稱。(大經・小經に對して)

ちゅうけい 中景【名】〔美〕『英 Middle distance』繪畫にて、前景と後景との中間の部分。(前景・遠景に對して)

ちゅうけい 仲兄【名】長兄のすぐ次なる兄。二番目の兄。なかあに。仲氏。「こと。

ちゅうけい 忠敬【名】忠實にして愼深きこと。

ちゅうけい 重刑【名】おもき刑罰。おもきしおき。(輕刑に對して)

ちゅうけい-きょく 中繼局【名】次條の略。

ちゅうけいきょくしょ 中繼局所【名】電信にて、發信局と受信局との中間に介在し、電信の中つぎをなす處。中繼局。

ちゅうけいし 中警視【名】**だいけいし**(大警視)を見よ。

ちゅうけい-しやう 重輕傷【名】重傷と輕傷。

ちゅうけい-せつぞく 中繼接續【名】『英 Trunk Connection』電話交換手が自己の手の到達せざる加入者に接續せしむる時、他の交換手の力を借りてなすこと。

ちゅうけいせん 中繼線【名】『英 Trunk (又 junction) line』中繼接續をなすために使用する回線。

ちゅうけいないかく 中繼內閣【名】前內閣崩れて、次の內閣の成立する迄の間の內閣。

ちゅうけい-ほふ 中繼法【名】『英 Translation』遠距離電信にて中間局にて電信を取

繰ぐ法。

ちゆうけい-ばん 中繼盤【名】『英Repeater又はRepeater board』電信の中繼局にて、中繼の際、人手を要せずしてなし得る機械。

「部」を見よ。

ちゆう-けいぶ 中警部【名】だいけいぶ(大警部)を見よ。

ちゆうけう 中教【名】〔佛〕ちゆうだいけう(中道教)に同じ。

ちゆうけうじゆ 中教授【名】だいけうじゆ(大教授)を見よ。

ちゆうけうせい 中教正【名】けうだうしよく(教導職)を見よ。

「院」を見よ。

ちゆうけうゐん 中教院【名】けうゐん(教院)

ちゆうけえ 中價衣【名】〔佛〕『その價値、三衣(サン)中の中位に在るよりいふ』七條の袈裟(ケサ)。

ちゆうげこ 中下戸【名】大寶令の制度にて、資財を標準として、戸を九等に區別せしものの第六等、即ち十二貫以上、十六貫未滿の資財を有するもの。

ちゆう-けん 忠賢【名】忠義にして賢きこと、又その人。曾我蛇が曆「國家を治むるものは忠賢の臣による」

ちゆう-けん 中堅【名】一『士・中・下三軍のうちにて、最も精鋭なるより堅といふ』ちゆうぐん(中軍)に同じ。二中軍に比すべきもの。中心となる確乎たるもの。

ちゆう-げん 中言【名】中に立ちて告口をなすこと。なかぐち。なかごと。

ちゆう-げん 中元【名】三元の一。陰曆七月十五日。支那の道教にて、この日を人間贖罪(ショクザイ)の日として、道家の神を祀りといふ。我が國にもいつしか傳はり、佛家の盂蘭盆會(ウラボン)と混じて、節日の一となり、中元の眞意はつひに忘れらるるに至れり。(上元・下元に對して)

ちゆう-げん 中間【名】一何れにもつかぬこと。はした。〔古語〕源氏「いとことのほかなる事どもの、もしきこえあらば、ちゆうげんになりぬべき身なり」二ちゆうげんをとこ(中間男)の略。長門本平家「入道、小平大といふ中間を召して」三武家にて、下部(シモベ)の頭だちたるもの。著聞「ゆるされたる御ちゆうげんになされにけり」四ちゆうかん(中間)に同じ。孕婦盤塀を見上げて高念佛、立留りては又念佛、これぞ二佛の中間なり」

ちゆう-げん 中原【名】一『詩經の小雅篇に「中原有レ菽、庶民采レ之」とあり』廣き野の中央。二『晉書の石勒載記に「脫鴻二光武一、當二並驅一於中原一、未レ知二鹿死一誰手一」とあり』中國。天下。三競爭場裡。逐鹿場裡。

中原に鹿を逐ふ【句】『支那唐の魏徵の出關詩に「中原還逐レ鹿、投筆事二戎軒一」とあり』一帝王の位を得んとす。〔諺語〕二多くの人の得んと欲する者を、自己の手に入れんとす。ちくろく(逐鹿)參照。〔諺語〕

中原の鹿【句】一支那にて、天子の位に譬へて稱する語。二數人競爭して得んとするもの。

ちゆう-げん 忠言【名】忠告のことば。忠諫忠言、耳に逆(サカ)ふ【句】忠諫の言葉は、人聞くを厭ふ。諫言耳に逆ふ。金言耳に逆ふ。〔諺語〕今國姓爺「これや忠言耳に逆ひ、良藥口に苦り鹽」「同じ。

ちゆう-げん 重言【名】ちようごん(重言)に同じ。

ちゆうげん 重源【名】〔人〕高僧。字は俊乘、俗名は紀重定。京都の人。源空に師事し、のち入宋し、歸朝後、東大寺再建工事の大勸進となり、大佛頭の毀損を修し、建久六年に至りて工事竣成し、後鳥羽天皇の行幸を仰ぎ、源頼朝の參詣あり。盛儀人目を驚かす。建永元年寂す。年八十六。

ちゆうげん-おさへ 中間押【名】江戸幕府の職制の一。中間の取締をなしし者。

ちゆうげん-がしら 中間頭【名】一中間の頭。二江戸幕府の職制の一。若年寄の支配に屬し、役扶持八十俵を給す。中間の總數、五百四十乃至五百六十人を上中下の三組に分ち、組ごとに、三人又は四人の組頭を置き、更に三人の頭ありて、各組を統率したり。

ちゆうげん-さんまい 中間三昧【名】〔佛〕ちゆうげんぜん(中間禪)に同じ。

ちゆう-けんじ 中檢事【名】だいけんじ(大檢事)を見よ。

ちゆうげん-じやうりよ 中間靜慮【名】〔佛〕次條に同じ。

ちゆうげん-せいりよ 中間靜慮【名】〔佛〕

ちゆうげん-ぜん 中間禪【名】〔佛〕大梵天王所得の禪定。色(シキ)界の四禪天と無色(ムシキ)界の四天との各天の中間には、いづれも上を欣(ネガ)ひ、下を厭ふ中有(チウ)の位あるが故に、通じて八地の中間禪あるべきなれども、初禪二禪の二天の間は、覺と觀との有無に於て、大なる差等あるが故に、特にこの間のみをいふ。梵天王はこれを修して高臺の閣に就くといふ。中間三昧。中間定。中間靜慮。平家「中間禪の高臺の閣」

ちゆうげん-ぢやう 中間定【名】〔佛〕前條に同じ。

ちゆう-けんぶ 中檢部【名】だいけんぶ(大檢部)參照。

ちゆうげん-ぼふし 中間法師【名】妻帶にて、大僧に使はるる法師。ちやうばう。下僧(ゲソウ)。下法師(ゲホフシ)。〔古語〕著聞「ちゆうげんほふし當在といふあやしの者まで」

ちゆうげん-めつけ 中間目付【名】江戸幕府の職制の一。中間の目付をなししもの。

ちゆう-けんもつ 中監物【名】古、中務(ナカツカサ)の監物の、大監物の次位にありしもの。なかの監物。

ちゆうげん-をとこ 中間男【名】古、大名公家(クゲ)・寺院などにて、侍(サブラヒ)と小者(コモノ)との間に召使はれし男。ちゆうげん。〔古語〕著聞「ちゆうげんをとこが、首にかけさせたる革袋より取出して」

ちゆう-こ 中古【名】一なかむかし。中世。二歷史上の區別の一。史家により、其の見を異にすれども、多くは大化の新政より鎌倉幕府の創立に至る迄をいひ、西洋史に於ては、西羅馬帝國の滅亡よりコロンブスの亞米利加發見に至るまでを稱す。中世。

ちゆう-こ 中戸【名】一中流の家。(大戸・小戸に對して)二大寶令の制にて、丁(ヨボロ)の多少を標準として、戸を四等に區別せしものの第二等。即ち丁の四人又は五人あるもの。(大戸・中戸・下戸に對して)三酒量の中ぐらゐなること。(大戸・小戸に對して)酒豪參「ひとりのをのこは、中左衞門大夫中原仲成とて、酒も小づけも好む中戸なり」上戸も下戸もさまざまに、その德あまた聞ゆれど、世間出世になずらへて、中戸に過ぎたるものぞなき」

ちゆうご 中午【名】『太陽が午の方角に中(ア)る意。**なんちゆう**(南中)參照』まひる。正午。亭午。**ちゆうす**(中す)參照。

ちゆう-こう 中興【名】一『興るに中(ア)るとの意』興るべき道理に中りて興ること。二衰へたるを、中ごろに再び興すこと。中興の祖【句】中興の業を爲しとげたる祖先。

ちゆう-こう 中功【名】『中日の功程の義』大寶令にて、工匠などの工程を三等に區別せしものの一。二月・三月・八月・九月の日の工程。(長功・短功に對して)

ちゆう-こう 中候【名】昔、行軍に先ち、道路の險易、山川沼澤・水草の便宜などを偵察せしめし斥候。(遠候・「陣中の候」に對して)

ちゆう-こう 中菁【名】『詩經の鄘風牆有茨篇に「中菁之言不レ可レ道、所レ可レ道也、言之醜也」又、漢書の梁共王傳に「聽二閨門中菁之言一」とありて、顏師古の註に「應劭曰中菁材穢在二掌中一、顏曰、舍之交二積材木一蓋闥內隱奧處」とあり』ねやの中。閨中。

ちゆう-こう 忠功【名】忠義によりて建てたる功績。忠勳。

ちゆう-こう 忠厚【名】忠實にして情に篤し。

ちゆう-こう 重厚【名】ちようこう(重厚)に同じ。

ちゆう-こう 忠孝【名】忠義によりて「きこと。

ちゆう-こう 中工【名】〔工師(シ)〕一を見よ。

ちゆう-こうし 中工師【名】こうし(工師)一

ちゆう-こうしゆ 中工手【名】こうしゆ(工手)を見よ。

ちゆう-こうせい 中工生【名】こうせい(工生)

ちゆう-こうちやう 中工長【名】こうちやう(工長)一二を見よ。

ちゆうこうちやう-の-すけ 中工長介【名】こうちやう(工長)一を見よ。

ちゆうこかせん-さんじふろくにんでん 中古歌仙三十六人傳【名】〔書〕中古、三十六歌仙の傳記。一卷。群書類從に集む。

ちゆうこく 中刻・中剋【名】一刻を三分したる中間の時刻。(上刻・下刻に對して)

ちゆうこく 忠告【名】まごころを以て、他の過失を告げて意見すること。實意の勸告。こころぞへ。

ちゆうこく 柱國【名】㊀國家の柱石となりて守ること、又その人。ちゅうごく(柱石)㊁參照。㊂支那漢代の制にて、持節都督の下に立ちて、大將軍二人づつを統轄せし軍職。

ちゆうごく 中國【名】大寶令の制に、國の等級を四種に分ちたる第三位の國。即ち安房・若狹の如し。(大國・上國・下國に對して)

ちゆうごく 中國【名】書經の大雅篇に「惠此中國」以綏四方」とあり、傳に「中國京師也」とあり、國の中央の部分。天子の都のある地方。㊁大寶令の制に、人民より租調庸を上納せしむる場合、京畿よりの遠近によりて、全國を分ちたるものの一。即ち遠國と近國との中間の國。即ち遠江・伊豆・相模・信濃・越中・駿河・甲斐・飛驒・越前・伯耆・出雲・備中・伊豫・備後の十四箇國の稱。延喜の制にては、阿波・讃岐・加賀・能登の四箇國をこれに入れ、相模・伊豫を遠國とせり。㊂〔地〕『上方(かみがた)と西國(九州)・四國との中間に位する國國の意』山陽道と山陰道との總稱。古は、主として山陽道を指ししものの如し。㊃〔地〕ちゅうか(中華)㊀に同じ。㊄〔地〕徳川光圀の尊王愛國主義に本づきて、その著、大日本史歌人傳に用ひし語『我が日本國』。

ちゆうごく 重刻【名】さいはん(再版)に同じ。

ちゆうごく-かいだう 中國街道【名】〔地〕長門國赤間關より攝津國大阪に至る街道。里程百四十里餘。ちゅうごくぢ。

ちゆうごく-さんみやく 中國山脈【名】〔地〕中國地方の背梁をなせる山脈。主に山陰・山陽兩道の分水嶺をなす。近江國琵琶湖の西方なる三國嶽に起り、下關の北方鬼ケ城山に終る。

ちゆうごく-すぢ 中國筋【名】中國㊂の方

ちゆうごくせき 重國籍【名】〔法〕一人にて二國以上の國籍を有すること。

ちゆうごし-ぞり 中國反【名】こしぞり(腰反)に同じ。

ちゆうごく-たいへいき 中國太平記【名】〔書〕赤松圓心の事蹟を始め、同家代代の軍事を記せるもの。十一卷。馬場信意の著。

ちゆうごく-たんだい 中國探題【名】ながとたんだい(長門探題)に同じ。

ちゆうごく-ぢ 中國路【名】〔地〕ちゅうごくかいだう(中國街道)に同じ。

ちゆうこ-さんじふろくかせん 中古三十六歌仙【名】中古に有名なりし三十六人の歌人、即ち後鳥羽院・前中納言藤原定家・後鳥羽院宮內卿・參議藤原雅經・能因法師・祐京極攝政藤原良經・皇太后宮大夫藤原俊成・寂蓮法師・六條前太政大臣藤原顯實・藤原基俊・源三位賴政・前大僧正慈鎭・法橋顯昭・鴨長明・大藏卿藤原有家・宜秋門院丹後・皇太宮大夫俊成女・西行法師・久我通光・從二位藤原家隆・大納言源通具・藤原秀能・式子(しきし)內親王・崇德院・月輪關白藤原兼實・二條院讃岐・後德大寺實定・源俊賴・正三位藤原知家・西園寺公經・八條院高倉・小侍從・前大納言源經信・前大納言藤原長忠・前大納言藤原兼宗・藤原清輔。

ちゆうこ-し 中古史【名】中古の事を記したる歴史。

ちゆうこ-し 中腰【名】腰を半ば屈むること。ゐあひごし。

ちゆうこ-しやう 中小姓【名】武家にて、小生組と歩行衆(かち)との間に在りし扈從。會我庆が曳馬槍・お徒士・中小姓・鱗形のしるしまで、北條殿より貸したまひ」

ちゆうこだい 中古代【名】〔地〕ちゅうせいだい(中生代)に同じ。

ちゆうこ-ふ 中劫【名】〔佛〕こふ(劫)㊀を見よ。水鏡「この二つの小劫をあはせて、一の中劫とは申すなり」

ちゆうこ-ふ 住劫【名】〔佛〕『人類の安住する劫の義。住の字の音、正しくはぢゅう』四劫の一。成劫(じやうこふ)の次にありて、成立したる世界の持續する期間。この期間の初にある人間の壽命は八萬四千歲なるが、百年ごとに一歲づつを遞減して、十歲に至る間を一減劫といひ、更に十歲の壽命より百年ごとに一歲づつを遞增して、もとの八萬四千歲に達する間を一增劫といひ、かくてこの一增一減を繰返すこと二十回にして、壞劫(ゑこふ)の時期に入る。水鏡「成劫…。次に住劫と申して、又二十の中劫の程を過ぐるなり」

ちゆうこん 忠愍【名】寵實にして欺かざること。まごころ。忠誠。

ちゆうこん 忠魂【名】㊀まめやかなるこゝろ。忠義にこり固まれる心。忠膽。㊁忠義の爲に戰死せる人の靈魂。

忠魂義魄【句】忠義の魂魄。

ちゆうこん 中根【名】〔佛〕人の根機の上根と下根との間なるもの。人の根機の中等なるもの。(上根・下根に對して) 鶴林玉露「中根の者、いささか聽する所に」

ちゆうごん 中含【名】〔書〕ちゅうあごんきやう(中阿含經)の略。

ちゆうこん 重婚【名】〔法〕配偶者ある者が、重ねて結婚すること。

ちゆうごん 重言【名】同じ言葉を重ねて用ふること、例へば、「半紙の紙」などの類。やへことば。

ちゆうこん-さい 重婚罪【名】〔法〕重婚によりて成立する犯罪。犯罪者及び對手方は、二年以下の懲役に處せらる。

ちゆうこん-さくもつ 中根作物【名】〔農〕大根・人參などの如き根菜類。

ちゆうこんろくかせん 中古六歌仙【名】〔書〕源俊賴・藤原清輔・藤原基俊・僧俊惠・僧登蓮及び堀河局の六人の歌を撰集したるもの。一卷。纖群書類從に收む。「よ。

ちゆうさ 中佐【名】さくわん(佐官)㊀を見

ちゆうざ 中坐【名】㊀談話・用事などの中途に、隙を需求むること。㊁集會などに出席して、その會の半ばに座を退くこと。

ちゆうざ 中座【名】㊀江戸時代の京都の町役人の一。鐵棒引・四人の繩取などを勤むるもの。㊁〔佛〕僧侶が安居を十夏以上十九夏經たること。(上座・下座に對して)中等の才智。

ちゆうさい 中材・中才【名】中等の才智。

ちゆうさい 廚宰・厨宰【名】㊀庖廚を主どるもの。㊁明治五年軍艦に置かれたる職員の一。士官を以て任ず。尉その職掌を補佐する下士を置きて、廚宰介(すけ)と呼ふ。十七年廢せられたり。

ちゆうさい 仲裁【名】㊀他の爭の間に立入り、雙方を慰め諭して和せしむること。調停。㊁〔法〕第三者若しくは第三國が、當事者間又は當事國間の爭議に立入りて、これを裁斷し和解せしむること。

仲裁は時の氏神(うぢがみ)【句】『挨拶は時の氏神』に同じ。〔諺語〕

ちゆうさい 駐在【名】『駐の字の音、正しくはちゅ』㊀一定の場所にとどまりてゐること。㊁派遣せられて、その地に居ること。駐劄。

ちゆうざい 重罪【名】㊀おもきつみ。重科。㊁〔法〕舊刑法にて、死刑・徒刑・流刑・懲役又は禁獄の刑に處せられたる罪。現行法に由れば、これ等の罪名を廢せるも、他の法令の規定に、これ等の罪名を揚げたるものは變更せられず。死刑・無期懲役・無期禁錮・有期懲役・有期禁錮は舊刑法の重罪として取扱はる。(輕罪に對して)

ちゆうさい 重榮【名】食事にあまたの菜(さい)を一度に供ふること。

ちゆうざい-くわん 駐在官【名】『駐の字の音、正しくはちゅ』徴兵事務を取扱ふために、各地方に、在勤する陸軍の士官。各師團の大隊司令部附屬の者、これに當る。

ちゆうさい-けいやく 仲裁契約【名】〔法〕民事に關する爭議を、一人又は數人の仲裁人をして判定せしめ、當事者の雙方これに服從する契約。

ちゆうざい-こうはん 重罪公判【名】〔法〕重罪事件の公判。(輕罪公判に對して)

ちゆうざい-こく 駐在國【名】『駐の字の音、正しくはちゅ』その人の駐在せる國。

ちゆうさい-さいばん 仲裁裁判【名】〔法〕係爭國雙方の合意にて選定せる委員を裁判官として、紛議を裁斷せしむること。

ちゆうさい-さいばんくわん 仲裁裁判官

【名】仲裁裁判を行ふ爲に、當事國の合意によりて、當事國の雙方より選定せる裁判官。

ちゆうさい-さいばんしよ 仲裁裁判所【名】仲裁裁判をなさしむるため、臨時に組織する裁判所。所在地は當事國雙方の指定によりて定め、指定なき時は、和蘭國海牙(ハーグ)なる常設駐在裁判所に於てす。

ちゆうさい-さいばんしよ 重罪裁判所【名】司法裁判所の一。三箇月毎に重罪事件を裁判する爲に開廷す。明治十九年設置、同二十三年廢止せられたり。

ちゆうさいさいばん-じつやく 仲裁裁判條約【名】國際間にて、既に發生したる爭議又は將來に於て發生すべき爭議を仲裁裁判に附せんために、互に締結したる一種の約束。

ちゆうさい-しう 重罪囚【名】重罪に處せられたる囚人。

ちゆうさ-いしき 中彩色【名】〔美〕繪畫・彫刻・蒔繪等にて、極彩色と淡彩色との中間の程度の彩色。

ちゆうさい-じけん 重罪事件【名】重罪に當るべきものとして訴追せられたる刑事被告事件。(輕罪事件に對して)

ちゆうさい-しや 仲裁者【名】仲裁の事に當る者。

ちゆうざい-しよ 駐在所【名】『駐の字の音、正しくは**ちゆ**』■或人の駐在せる所。■巡査が受持區域内に駐在して、事務を取扱ふ所。

ちゆうさい-せんこく 仲裁宣告【名】仲裁裁判の結果を宣告すること。「裁判の宣告。」

ちゆうさい-てあて 駐在手當【名】『駐の字の音、正しくは**ちゆ**』或地方に駐在中の官吏に、特にそのために支給する手當。

ちゆうさい-てつづき 仲裁手續【名】〔法〕當事者間の契約により、民事上の權利關係に於ける事を、第三者をして判斷せしめ、その判斷に基きて、强制執行をなすに至るべき一切の手續。

ちゆうさい-にん 仲裁人【名】■仲裁にあたる人。さいにん。仲裁者。■〔法〕仲裁判斷をなす人。

ちゆうざい-にん 重罪人【名】重き罪を犯したる人。源平布引瀧、思へば、思へば、重罪人めと、死骸を足蹴にはったと蹴とばし」

ちゆうさい-のすけ 廚宰介・厨宰介【名】『ちゆうさい(廚宰)』を見よ。

ちゆうざいはうそう 中細胞層【名】〔生〕『英 Middle cell-layer』**ちゆうはいえふ**(中胚葉)に同じ。

ちゆうざい-はん 重罪犯【名】〔法〕重罪に「あたる犯罪。

ちゆうさい-はんだん 仲裁判斷【名】〔法〕仲裁契約に基き、當事者の合意又は裁判所の選定に依る一人もしくは數人の仲裁人が、財産權上の爭につきて、判斷すること。その判斷の宣言は、法律の適用にあらざれども、その効力は裁判所の判決と同じく、當事者間には、効力を生ず。但し强制執行をなすには、裁判所の執行判決を要す。

ちゆうざい-ねん 駐在員【名】『駐の字の音、正しくは**ちゆ**』その地に駐在する職員又は人員。

ちゆうざう 重創【名】■**おゆうしやう**(重傷)に同じ。■傷せる上に又負傷すること。

ちゆうざう-じんじや 重藏神社【名】能登國鳳至(フゲ)郡輪島町に在る鄕社。天冬衣(アメノフユキヌ)命・大國主命を合祀す。祟神天皇の頃、彦大命神託により、社殿を造營せしと傳ふ。

ちゆうざう-さき 重藏岬【名】〔地〕なかしれとこざき(中知床岬)を見よ。

ちゆうざかな 重肴【名】重詰(ヂユウヅメ)にしたる肴。「高時綸の重肴は、大座敷へ出せというたに」

ちゆう-さぎ 中鷺【名】〔動〕鷺の一種。總身純白にして、白鷺よりはやや大なり。背と胸とに長き裳毛を有す。嘴は、冬期黃色なれども、夏期に至れば、基部の外は黑變す。脚も黑し。しまめぐり。

ちゆう-さく 注釋・註釋【名】『注註の字の音、正しくは**ちゆ**』**ちゆうしやく**(註釋)[二]の約。〔德川時代の國學者の語〕

ちゆう-さくもん 中柵門【名】城中にある柵門。**ちゆうじやくもん**(中雀門)參照。

ちゆうさく-わん 中主典【名】主典(ヂヨウ)[二]の三等に分てるうち、大主典の下、少主典の上に位せしもの。省にては中錄、寮にては中屬、司にては中令史、開拓使にては中主典、提督府にては中典のごとく、官により、各文字を異にしたり。

ちゆう-さげ 中下げ【名】諸曲の下節(サゲ)。

ちゆう-させつやく 中刺戟藥【名】〔醫〕日本藥局方に定められたる第二號の藥(內徑三ミリメエトルある飾眼を有するもの)にてこしたる藥。

ちゆう-さつ 誅殺【名】『誅の字の音、正しくは**ちゆ**』罪ある者を殺すこと。

ちゆう-さつ 駐劄【名】『駐の字の音、正しくは**ちゆ**』**ちゆうさい**(駐在)[二]に同じ。

ちゆうさつ-ぐんたい 駐劄軍【名】『駐の字の音、正しくは**ちゆ**』次條に同じ。

ちゆうさつ-ぐんたい 駐劄軍隊【名】『駐の字の音、正しくは**ちゆ**』或地方に駐劄する軍隊。駐劄軍。

ちゆうさつ-ち 駐劄地【名】『駐の字の音、正しくは**ちゆ**』駐劄する土地。

ちゆうさん 仲算【名】〔人〕法相宗の高僧。應和三年比叡山の良源僧都と宮中に論議し、叡感に預る。安和二年般若心經を熊野山に講じて、千手・千眼の相を現じ、講を終へて、後に行く所を知らずといふ。法華書釋文・四分義私議の著あり。

ちゆう-さん 中産【名】中位の家産。

ちゆう-ざん 中山【名】〔地〕『山は島の義にて、琉球諸島を三分して、山北・中山・山南といひしが、中山の王尙巴志、山北・山南を亡して、國内を統一せしよりいふ』支那人の琉球國を指して呼びし稱。

ちゆう-さん 重三【名】二箇の栄(サカエ)の目の、二つとも三の數の出づること。朱三。平盃「昔は同じく重三・重四と申しけるを、唐の玄宗皇帝…重三の目が御用にて」

ちゆう-ざん 住山【名】■『住の字の音、正しくは**ちゆ**』山に住むこと。■僧の、寺に住むこと。やまずみ。

ちゆうさん-いかう 仲算已講【名】〔人〕**ちゆうさん**(仲算)を見よ。太平記「南都よりは松室眞松房、仲算已講ぞ參られける」

ちゆうさん-かいきふ 中産階級【名】勞働者と資本家との間に位する階級。卽ち勞働のみによりて生活せず、さりとて、資本のみによりて生活するまでに至らざるもの。

ちゆうざん-こく 中山國【名】〔地〕**ちゆうざん**(中山)に同じ。「山寺」に同じ。

ちゆうざん-じ 中山寺【名】なかやまでら(中山寺)に同じ。

ちゆうさん-たいふ 中散大夫【名】■支那唐の代に、正五品上の雅稱。■正五位上の唐名。

ちゆうざん-でんしんろく 中山傳信錄【名】〔書〕琉球國の世系・官職・制度・風俗等を記せるもの。六卷。支那清朝の徐葆光が冊封副使として康熙五十八年琉球に至り還りて此の書成る。

ちゆうざんね 中山嶺【名】〔地〕六百メエトル乃至二千メエトルの高さある山の集まれるもの。

ちゆう-さら 中皿【名】中位の大きさの皿。

ちゆう-し 駐止【名】『駐の字の音、正しくは**ちゆ**』■或土地にとどまりて進まぬこと。■〔兵〕軍の運動をとどむること。

ちゆう-し 注視【名】『注の字の音、正しくは**ちゆ**』目をつくること。みつむること。

ちゆう-し 柱史【名】『柱の字の音、正しくは**ちゆ**』「柱下の史」に同じ。

ちゆう-し 注子【名】『注の字の音、正しくは**ちゆ**』みづさし。銚子。「じ。

ちゆう-し 仲氏【名】**ちゆうはい**(仲兄)に同じ。

ちゆう-し 中子【名】中の子。二番目の子。

ちゆう-し 中巳【名】**ちゆうみ**(中巳)に同じ。

ちゆう-し 中祀【名】■支那における國家の祀典の、大祀と小祀との中間に位するもの。■大寶の制にて、國家の祭祀の三日間潔齋して行ふもの、又、延喜の制にて、祈年(トシゴヒ)祭・神嘗(カンナメ)祭・新嘗(ニヒナメ)祭・加茂祭など。(大祀・小祀に對して)

ちゆう-し 中使【名】■『禁中の使の義』**ちよくし**(勅使)に同じ。太平記「諸國御斗藪の後光嚴院へ御歸りありて、暫く御座ありけるが、中使しきりに到りて」■『中の字の音、正しくは**ちゆ**』中試【名】『試に中(アタ)る義』試驗に及第すること。登第。

ちゅうし 中紙【名】質の中等なる紙。

ちゅうし 中師【名】し(師)四五を見よ。

ちゅうし 中士【名】海軍の少尉相當官及び曹長相當官の總稱。前者を一等、後者を二等として分ちたり。〔明治六年以前の稱〕

ちゅうし 中指【名】**なかゆび**(中指)に同じ。〔編纂通話〕「人さし指を頭指(トウ)といひ、高指を中指(チュウ)といひ、小指(ショウ)を小指(ショウ)と申します」

ちゅうし 中止【名】中ほどにてやむること。

ちゅうし 忠士【名】忠義なる士人。

ちゅうし 忠死【名】忠義のために死ぬること。

ちゅうじ 中耳【名】〔醫〕『獨Mittelohr』聽器の一部。廣義にては、鼓室・乳嘴突起部及びオイスタヒ氏管の總稱。狹義にては鼓室にて、普通、後者の意に用ふ。(外耳・內耳に對して)

ちゅうじ 仲尼【名】〔人〕こうし(孔子)に同じ。正統記「昔、仲尼は猌麟に筆を絕つとあれば」

おゆうし 重四【名】二箇の采(サイ)の目の、二つとも四の數の出づること。朱四。平治「楊貴ま重四の日をこうて」

おゆうし 重視【名】おもく見ること。重大視すること。(輕視に對して)

おゆうじ 重二【名】二倍にすること。二箇の采(サイ)の目の、二つとも二の數の出づること。てっち。

ちゅうしう 中州【名】ちゅうごく(中國)四に同じ。

ちゅうしう 中洲【名】川の中にある洲。

ちゅうしう 中秋・仲秋【名】陰暦八月十五日。秋のもなか。

ちゅうしう 仲秋【名】『秋三箇月の中の月なるよりいふ。ちゅうしゅん(仲春)ちゅうか(仲夏)ちゅうとう(仲冬)參照』陰暦八月の異稱。仲商。正秋。

ちゅうしう 忠州【名】〔地〕朝鮮忠清北道の首都。京城の東南二十八里。「同じ。

おゆうしう 重修【名】ちょうしう(重修)に同じ。

おゆうしう 重囚【名】罪おもき囚人。

ちゅうじえん 中耳炎【名】〔醫〕『獨Mittelohrentzündung』中耳に發する炎症。感冒・熱性病・鼻腔・咽頭・喉頭などの疾患及び結核・梅毒、又は外傷によりて、鼓膜を破りたる場合等に發し、劇痛を感じ、耳鳴を生じ、耳內充塞せる如き感を起す。又、慢性に「を見よ。耳漏となるもあり。

ちゅうじがく 中視學【名】しがく(視學)三に同じ。

ちゅうじかたる 中耳加答兒【名】〔醫〕『獨Mittelohrkatarrh』中耳に起る病症。急性慢性の二種あり。耳內閉塞・聽力減退・輕度の耳鳴等は急性に屬し、精神沈鬱・記憶力減退・不眠等は慢性の特色なり。

ちゅうじき 中鳴・中鷄【名】〔動〕鳴の一種。嘴の長さ二寸餘、翼は黑褐色にして、黃色の斑なし。腹部白色を呈す。ちゅうしゃくしぎ。

ちゅうじき 中食【名】一〔佛〕『日中に食し、一瞬時にても正午を過ぐれば食はずとするによりていふ』さいじき(齋食)に同じ。二ちゅうしょく(晝食)に同じ。

ちゅうじぎん 中字銀【名】えいじぎん(永字銀)に同じ。

ちゅうじきゅ 中敷居【名】なかじきゐ(中敷居)に同じ。

ちゅうじこ 中鉋・中仕工【名】粗鉋(アラガンナ)にて削りたる面の凹凸を平かにするために用ふる鉋(カンナ)。なかしこ。(粗鉋(アラガンナ)・上鉋(ジョウガンナ)に對して)「見よ。

ちゅうじこう 中試工【名】しこう(試工)を見よ。

ちゅうじつ 中日【名】時間の長くも短くもあらぬ日。ちゅうこう(中功)參照。

ちゅうじつ 忠實【名】まめやかなること。正直。

ちゅうしはふ 中止法【名】〔語〕『大槻文彥氏の廣日本文典に初めて用ひし名稱』動詞・形容詞・助動詞の連用形の、文の中間にて中止し、末にある他の動詞・形容詞・助動詞の法に照應して、その法の意に從ふ用法。例へば、「花咲き、鳥啼く」・「山高く、水長し」などの類。

ちゅうしはん 中止犯【名】〔法〕『獨Rücktritt Versuch』未遂犯の一。犯人が犯罪の實行に著手したる後、任意に、その行爲を中止したること。著手中止犯と實行中止犯とに分つ。各その條を見よ。任意未遂。

ちゅうしまだ 中島田【名】中ぐらゐの大きさの島田髷。一代女「平髷(ヘラザ)の中島田に、掛捨の髪(モト)、よろづ初心にして」

ちゅうしん 衷心【名】次條(一)(二)に同じ。

ちゅうしん 中心【名】一胸のおもひ。心中。內心。衷情。「衷心」二まんなか。中央。四物事の集注する所。五〔理〕ちゅうしん(重心)に同じ。六〔數〕有限直線の兩端もしくは圓形の周緣より、又圓周又は球面のすべての點より等距離にある點。對稱中心。

ちゅうしん 中身【名】身分の中等なること、又その人。(大身・小身に對して)甲陽軍鑑「兩上杉家の大身・中身衆九人の外」

ちゅうしん 忠信【名】忠義と信實と。心の實を盡すと言の實を履むこと。

ちゅうしん 忠心【名】忠義のこころ。

ちゅうしん 忠臣【名】一忠義なる臣。二中古時代淮大臣の稱。忠臣は孝子の家より出づ【句】「忠臣を孝子の門に求む」を見よ。忠臣は國を去るに、その名を潔くせず【句】『史記の樂毅傳に「臣聞、古之君子交絕、不ㇾ出ㇾ惡聲、忠臣去ㇾ國、不ㇾ潔ㇾ其名ㇾこと」とありて、索隱に「禮曰、大夫去ㇾ其國、不ㇾ說ㇾ人以ㇾ無ㇾ罪、是也」とあり』忠臣は故ありて國を去るも、自分の不德の爲なりとして、其の名を淸くせざるをいふ。〔諺語〕

忠臣は二君に事へず【句】『史記の田單傳に「忠臣不ㇾ事ㇾ二君ㇾこと」とあり』忠臣は一旦主と定めし以上、再び他の君に事へざるをいふ。賢人二君に仕へず。〔諺語〕

忠臣を孝子の門に求む【句】『後漢書の韋彪傳に「求ㇾ忠臣ㇾ必于ㇾ孝子之門ㇾこと」とあり。註に孝經緯の文なりといへり』親に孝なる程のものは、必ず君にも忠なるものなれば、忠臣を求めんと欲せば、孝子の家につきて求めよ。忠臣は孝子の家より出づ。〔諺語〕

ちゅうしん 注進【名】『注の字の音、正しくはちゅ』差起りたる事件を注(シル)して申し進むること。申報。

ちゅうしん 注心【名】『注の字の音、正しくはちゅ』心をとむること。「た。料理人。

ちゅうじん 廚人・厨人【名】まかなひかた。

ちゅうじん 中人【名】一〔論語の雍也篇に「中人以上、可ㇾ以語ㇾ上也」とあり』なみの人。普通の人。二『漢書の文帝紀に「百金、中人十家之產」とあり』中等社會の人。中等の身分ある人。中產階級のもの。三

ちゅうにん(仲人)に同じ。平家「さても夕べ、中人をば而白うもしつるものかな」

おゆうしん 重臣【名】重役を負ふ臣。

おゆうしん 重心【名】〔理〕『英Centre of Gravity』一つの物體の各小部分に作用する重力の合力の、その物體の位置如何に關せず、必ず一定すべき一點。その物體の內にある時と外にある時とあり。重量の中心。

ちゅうせん(中線)參照。

ちゅうしん-うんどう 中心運動【名】〔理〕『英Central motion』一定點に向ふ力のみ作用せる場合の物體の平面運動、この點を中心と稱す。

ちゅうしん-かく 中心角【名】〔數〕『英Angle at the centre』圓の二つの半經の夾む角。卽ち圓內に在りて、その圓の中心に角頂を有する角。

ちゅうしん-がほ【名】忠臣顏。國性爺・吳三桂などが忠臣顏、口先の道理は誰も云ふこと。

ちゅうしん-ぐら 忠臣藏【名】一かなでほんちゅうしんぐら(假名手本忠臣藏)の略。二『假名手本忠臣藏』最も有名なりしより、總稱となれるなり』大石良雄以下赤穗四十七士の吉良義央(ナカヒサ)を襲ひて、主君の讐を報ぜし事蹟を脚色せる戲曲の總稱。淨瑠璃・外題(ゲダイ)は忠臣藏十一段つづき」

ちゅうしんこう 忠仁公【名】〔人〕ふぢはらよしふさ(藤原良房)の諡。

ちゅうしん-しさ 中心視差【名】〔天〕ちしん(地心視差)に同じ。

ちゅうしん-しんけいけいとう 中心神經系

統【名】〔醫〕神經系統中、腦髓と脊髓との總稱。神經中樞。（末梢神經系統に對して）

ちゅうしんじんぶつ 中心人物【名】或事件の中心に立つ人物。

ちゅうしんじゃう 注進狀・註進狀【名】『注の字の音、正しくは**ちゅ**』注進する書狀。合戰の時の注進狀は、合戰注文ともいへり。〔武家時代の語〕

おゆうしんじゃう 重中狀【名】にもんじゃう（二間狀）に同じ。

ちゅうしんしよく 中心食【名】〔天〕日蝕の一。太陰が太陽の影の圓錐の中心にある時に生ず。

ちゅうしんしりよく 中心視力【名】〔醫〕網膜の中心窩に於ける視力。通常、單に視力といふ。

ちゅうしんせい 中新世【名】〔地〕『英Miocene epoch』地質時代の一。近生代中の第三紀を、これに含まるる軟體動物の化石を標準として、三小別せるものの第二、又、四小別せるものの第三。化石として存する軟體動物中、百分の十乃至四十は、現今生存せるものと一致す。**ちゅうしんそう**（中新統）參照。

ちゅうしんせん 中心線【名】〔數〕『英Central line』圓の中心を通過する直線。

ちゅうしんたいしよう 中心對照【名】〔數〕『英Central symmetry』**てんたいしよう**（點對稱）に同じ。

ちゅうしんだて 忠臣立【名】忠臣ぶること。ちゅうぎだて。

ちゅうしんてん 中心點【名】㊀中心なる點。㊁〔理〕次條に同じ。

おゆうしんてん 重心點【名】〔理〕物體の重心たる點。中心點。**おゆうせん**（重線）參照。

ちゅうしんとう 中新統【名】〔地〕『英Miocene series』地質系統の一。中新世に生じたる地層化石等の總稱。

ちゅうしんばしら 中心柱【名】「心（シン）の柱」に同じ。

おゆうしんはふ 重信法【名】『英Multiple telephony』各回線の通話を妨害することなく、二回線以上の電信實回線を利用し、一回線以上の獨立せる電話回線を組織する方法。

ちゅうしんもくしつ 中心木質【名】〔植〕しんざい（心材）に同じ。

ちゅうしんりよく 中心力【名】〔理〕『英Central force』中心運動に於ける、その作用せる力。

おゆうしんねくわんそく 重心維管束【名】〔植〕『英Concentric fibro-vascular bundle』維管束中、木質部の中心に在りて、靱皮部がその周圍に輪狀を形づくるもの。（包圍維管束に對して）

ちゅうしゃ 注射【名】『注の字の音、正しくは**ちゅ**』㊀つぎこむとそそぎかくると。㊁〔醫〕治療の一法として、一定量の藥液を、注射器にて、病者の體内に注入すること。多くは急病の場合に行ひ、腔内注射と皮下注射との別あり。

ちゅうしゃ 中社【名】㊀古、社格を大・中・小の三等に分ちたる場合の中間に位せし神社。卽ち賀茂社・住吉社など。又、從三位以下從四位の神社をいへりとの說あり。（大社・小社に對して）㊁**くわんぺいちゅうしゃ**（官幣中社）又は**こくへいちゅうしゃ**（國幣中社）の略。

ちゅうじゃ 忠邪【名】忠なると、よこしまなると。忠義と奸邪と。

ちゅうじゃう 中生【名】〔佛〕極樂往生の階級なる上品（ジャウ）・中品・下品の各の中位なるもの。（上生・下生に對して）「同じ。

ちゅうじゃう 中症【名】ちゅうぶ（中風）に同じ。

ちゅうじゃう 中殤【名】十二歲より十五歲までの間に死ぬること。中夭。（長殤・下殤に對して）

ちゅうしゃう 中傷【名】『人の過失をねらひ中（ア）てて傷ふ義』他人に無實の惡名を負はせて傷ふこと。「中央の檣。

ちゅうしゃう 中檣【名】三檣ある帆船の、

ちゅうしゃう 忠賞【名】忠義なりとして賞すること。

ちゅうしゃう 仲商【名】『商は五音（シャウ）の中の、秋に配せらるるもの』陰曆八月の異稱。仲秋。

ちゅうじゃう 中將【名】㊀近衞府の次官の一。大將（長官）の下に位し、左右に分れたり。又その下に位して、同じく次官の一なりし少將と併稱して、次將とも介（スケ）ともいひ、又、少將と區別して、大介（オホスケ）ともいへり。左近衞府のは左近衞中將、略して左中將といひ、右近衞府のは右近衞中將、略して右中將といひ、初め左右各一人なりしが、後には權官をも置く等、漸次增員して、左右各二人となり、更に各四人となり、中世以後、正・權を通じて、數十人に及べり。**さいしょうちゅうじゃう**（宰相中將）と**うのちゅうじゃう**（頭中將）參照。㊁外衞府（ウヱ）の次官。㊂天平以來授刀衞の次官。㊃將官の一。大將の次、少將の上位にあるもの。陸軍中將と海軍中將とあり。

ひだりのちゅうじゃう 左の中將【句】さちゅうじゃう（左中將）に同じ。平家「西國にて、左の中將失せたまひぬ」

みぎのちゅうじゃう 右の中將【句】うちゅうじゃう（右中將）に同じ。農家訓「勇の德に、右の中將になりたまひ」

ちゅうじゃう 中情・衷情【名】ちゅうしん（中心）㊀㊁に同じ。

ちゅうじゃう 忠情【名】まめやかなる心。まごころ。忠誠。

ちゅうじゃう 柱狀【名】『柱の字の音、正しくは**ちゅ**』柱に似たる形。

おゆうしゃう 重障【名】〔佛〕重き罪障。佛果を求むるにつきての重大なる障碍。卽ち十惡・五逆の類。太平記「平生の振舞を聞けば、十惡・五逆、重障過極の人なり」

おゆうしゃう 重傷【名】大なる怪我。おもで。ふかで。**重創**。（輕傷に對して）

おゆうしゃう 重症【名】おもき病氣。重病。大病。（輕症に對して）

おゆうしゃう 重賞【名】おもき賞。あつき賞。

おゆうしゃうがくは 重商學派【名】〔經〕

おゆうしゃうぎんがくは（重金學派）に同じ。

ちゅうしゃうき 中賞記【名】しゃうき（賞記）㊁を見よ。

ちゅうしゃうぎ 中象棋・中將棊【名】將棊の一。足利時代の初より行はれしもの。盤面は縱橫十二間（ケン）。駒の數は兩軍合して九十二箇。玉將（一方は王將）・醉象（成れば太子）の外、麒麟（成れば獅子）・鳳凰（成れば奔王）・盲虎（成れば飛鹿）・龍王（成れば飛鷲）・龍馬（成れば角鷹）等の名目あり。勇猛合戰、勝負せめたる中將棊の盤の上、處すさまじき足なみ入亂れて、鳳凰は奔王となりて、八方を破り、飛鷲（ヒジ）・角鷹（カク）は威を振ひて、當るを居食ふ、その働にも似たり」

ちゅうじゃうじ 中將寺【名】しゃうくわんじ（將官旗）を見よ。

ちゅうしゃうぐん 中將軍【名】中軍の大將。（前將軍・後將軍に對して）

ちゅうじゃうこ 中上戶【名】大寶令に定められたる九等の戶（コ）の一。資財二十貫以上四十貫未滿のもの。

ちゅうしゃうし 中尚史【名】たくみのかみ（內匠頭）の唐名。

ちゅうしゃうし 中匠司【名】しゃうし（匠司）を見よ。

おゆうしゃうしゅぎ 重商主義【名】〔經〕『英Mercantilism』經濟上の一主義。貨幣を重視し、貨幣あらば、その特質に依りて何事をも成すべし。國利民福を計るには、先づ國内に於ける貨幣を增加すべしとなし、その結果として、專ら商工業を重んじ、農業を度外視するもの。昔時、佛蘭西その他の歐羅巴諸國に於て流行したり。こるべえる主義。拜金經濟學。重金主義。尙商主義。貴金主義。制限主義。**おゆうのうしゅぎ**（重農主義）參照。

おゆうしゃうせき 重晶石【名】〔鑛〕『英Baryte』成分は硫酸バリウムなる甚だ重き石。板狀又は柱狀の結晶をなし、又は球狀・纖維狀となり、銀・銅の硫化礦床に產す。透明無色又は黃・青・褐等の色を有し、熱すれば、散裂する性あり。粉となして、白粉に和し、顏料とす。

ちゅうじゃうせつり 柱狀節理【名】〔地〕『英Columnar joint』柱の字の音、正しくは**ちゅ**』節理の一。自然に割れて柱狀を成すもの。玄武岩・安山岩に多く見ゆ。

ちゅうしゃうてん 中掌典【名】しゃうてん

(掌典[二]を見よ。

ちゅうしゃうは 重商派【名】〔經〕ちゅうしゃうしゅぎ(重商主義)に同じ。

ちゅうじゃうひめ 中將姫【名】〔人〕橫佩(ヨコヘ)右大臣藤原豊成の女。乙縄の妹。父豊成により、太宰員外帥に貶せらるるや、大和國の當麻(タギ)寺に入りて、深く佛道に歸依し、生身の彌陀を拜せんことを願ふ。一尼化現して、藕絲(ハス)以て曼陀羅を織りて授く、これを當麻曼陀羅と稱す。寶龜六年寂す。年二十九。俗說には姫十五歳の時宮中に箏を奏し、寵愛の餘り、三位に敍し、中將姫の名を賜はる、のち繼母のために雲雀山に棄てられ、將に殺されんとせしも、免れて家に歸り、終に尼となると。

ちゅうじゃうひめまんだら 中將姫曼荼羅【名】たいまんだら(當麻曼荼羅)に同じ。

ちゅうしゃえき 注射液【名】『注の字の音、正しくはちゅ』注射の法によりて、身體内に注入する藥液。

ちゅうしゃかくきん 中斜角筋【名】〔醫〕『羅 Musculus Scalenus Medius』頭筋深在外列筋の一。肋骨を擧上し、吸息を助く。

ちゅうしゃき 注射器【名】『注の字の音、正しくはちゅ』注射に用ふる器械。通常、注射液を吸入るる度盛せる圓筒形の一端に、注射針と稱する針を裝置せるもの。

ちゅうしゃく 駐錫【名】〔佛〕『駐の字の音、正しくはちゅ』くわしゃく(掛錫)に同じ。

ちゅうしゃく 注釋・註釋【名】『注・註の字の音、正しくはちゅ』■本文の意義を解きあかすこと、又その解釋。■やくみ(藥味)[三]に同じ。七十一番歌合、心ぶと召せ、ちゆうしゃくも入れて候」

ちゅうしゃく 鑄石・鑄鉑【名】〔鑛〕『鑄の字の音、正しくはちゅ』眞鑄を自然に含める石。ベルシヤに產すといふ。和名、鑄石。俗云中尺」

ちゅうしゃくいろ 鑄石色・鑄鉑色【名】『鑄の字の音、正しくはちゅ』鑄石の色に似たる色。甲陽軍鑑「徒黨結びたる弱者ども、鑄石色になり」

ちゅうしゃくしぎ 中杓鷸・中杓鶴【名】「動」ちゅうしぎ(中鳴)に同じ。

ちゅうじゃくもん 鑄石門・鑄鉑門【名】『鑄の字の音、正しくはちゅ』扉に鑄石の化粧金を取附けたる門。

ちゅうじゃくもん 中雀門【名】『ちゅうさくもん(中柵門)の訛稱なりといふ』■身分高き武家の門。■江戸城三十六門の一。大玄關前の正門。城門造にして、屋根を矢倉造となしたり。御書院番頭・與力及び同心これを預れり。一名、御書院大御門。

ちゅうしゃさい 注射劑【名】『注の字の音、正しくはちゅ』〔醫〕體中に注射する藥劑。

ちゅうしゃじせい 中寫字生【名】しゃじせい(寫字生)[二]を見よ。

ちゅうしゃしゃちゃう 中舍長【名】しゃちゃう(舍長)[二]を見よ。

ちゅうしゃはふ 中斜法【名】〔理〕「力の中斜法」を見よ。

ちゅうしゅ 中酒【名】■『史記の樊噲傳に「項羽既饗軍士中酒」とありて、註に「飲酒之半也」とあり』酒宴の中途。■懷石にて、食事の中途に酒を飲むこと。[三]を見よ。

ちゅうしゅ 中手【名】〔佛〕ちゅうだうしゅ(中道宗)の略。

ちゅうしゅき 中主記【名】しゅき(主記)[一]を見よ。

ちゅうしゅせきさんかりうむ 重酒石酸加儞謨【名】〔化〕しゅせきさんすなとかりうむ(酒石酸水素加儞謨)に同じ。

ちゅうしゅつ 重出【名】ちょうしゅつ(重出)に同じ。

ちゅうしゅん 仲春【名】『春三箇月の中の月なるよりいふ。ちゅうか(仲夏)ちゅうしう(仲秋)ちゅうとう(仲冬)[参照]陰暦二月の異稱。仲陽。

ちゅうじゅん 中旬【名】一箇月の中の十日。中浣。中澣。(上旬・下旬に對して)

ちゅうじゅん 忠純【名】心のすなほにしてわだかまりなきこと。[を見よ。

ちゅうしゅり 中主理【名】しゅり(主理)[二]〔哲〕『暑に中(ア)たる義』暑氣あたり。あつさあたり。かくらん。

ちゅうしょ 中暑【名】■ちゅうしょせい(中書省)を見よ。■なかつかさ(中務)の唐名。

ちゅうしょ 中書【名】■ちゅうしょせい(中書省)を見よ。■なかつかさ(中務)の唐名。

ちゅうしょ 蟲書【名】篆書の一種。蟲鳥の形をなすもの。鳥蟲書。

ちゅうしょ 誅鋤【名】■『誅の字の音、正しくはちゅ』鋤にて掘盡くすこと。■惡者を殺したやすこと。ねだやし。

ちゅうしょ 忠恕【名】『論語の里仁篇に「曾子曰、夫子之道、忠恕而已矣」とあり。忠は中心の義、恕は心の如しとの義にて、己の心を推して人に及ぼすをいふ』まごころと、おもひやりと。

ちゅうしょ 住所【名】『住の字の音、正しくはちゅ』■すみか。すまひ。すまひどころ。■[法]生活の本據たる場處。(居所に對して)

ちゅうしょ 住所の不可侵【句】〔法〕『大日本帝國憲法第二十五條に出づ』憲法の認めたる自由權の一。即ち日本臣民は法律に定めたる場合を除くの外、其の許可なくして、住所に侵入せられ、及び捜索せらることなし。

ちゅうしょ 重書【名】■貴重なる書物(ブツ)又は書籍。■地所の讓渡し狀。讀曲「藤榮」「叔父御の藤榮殿に、跡を押領せられ、かやうに不思議なるところにて御入候ふ。言語道斷の次第にて候ふ。さて重書をばおん持ち候はぬか」

ちゅうしょ 中稱【名】〔語〕指示代名詞のあらはす事物又は場處が、やや隔りてあるを示すもの。即ち「そ」・「それ」・「そこ」の類。(近稱・遠稱に對して)

ちゅうしょ 中丞【名】■支那唐・宋時代の御史臺の次官、即ち御史大夫に次ぎしもの。定員、唐にては二人、宋にては一人。■ちゅうべん(中辨)の唐名。

ちゅうしょ 中書格【名】極めて方正・莊重なる楷書。古、詔敕・宮殿の扁額などを書するに用ひたる筆法。

ちゅうしょかん 中書監【名】中務(ナカツカサ)省の次官の一なる中務大輔(ナカツカサノタイフ)の唐名。

ちゅうしょき 中書記【名】しょき(書記)[四]五を見よ。

ちゅうしょきせい 中書記生【名】しょきせい(書記生)[二]を見よ。

ちゅうしょく 重職【名】任務の重き職。重要なる役目。重役。大役。

ちゅうしょく 住職【名】『住の字の音、正しくはちゅ』寺院の管理者として、寺に住して宗務を執る僧。現制は、各宗の管長これを任免・進退し、敎規・宗制等により、罷免又は懲戒處分をなす場合には、文部省に届け出づべき規定とす。住持。方丈。

ちゅうしょくん 中書君【名】『韓愈の毛穎傳に「上嘗呼爲中書君」とあり。中書は殿中書記の義』ふで(筆)の異稱。

ちゅうじょけう 中助敎【名】じょけう(助敎)[三]四五を見よ。

ちゅうしょじゃじん 中書舍人【名】■支那の中書省の第三等の官職。■中務(ナカツカサ)省の第三等の官職なる中務丞(ジョウ)の唐名。

ちゅうしょじらう 中書侍郎【名】■中務(ナカツカサ)省の次官の一なる少輔(ショウ)の唐名。■支那の中書省の第二等の官職。

ちゅうしょしょせい 中書省【名】■『中書は殿中書記の義』支那明朝以前の官衙の一。中書の名は、前漢の武帝に始まり、宮中にありて、天子に侍し、王命の出納を掌りしが、魏・晉の代より、立てて一省となし、元代には、尚書省に代りて、一般の行政を統轄せしが、清に至りて、つひに廢止せられたり。■なかつかさしゃう(中務省)の唐名。

ちゅうしょしょせうけい 中書少卿【名】ちゅうしょじゃう(中書侍郎)[二]に同じ。

ちゅうしょしょたいけい 中書大卿【名】中務

(カナガワ)省の次官の一なる中務大輔(ナカツカサノタイフ)の唐名。

ちゅうしょ-ち 住所地【名】『住の字の音、正しくは**じゅ**』〔法〕その人の住所、即ち生活の本據たる地。

ぢゅうしょち-はふ 住所地法【名】『住の字の音、正しくは**じゅ**』〔法〕住所地を支配する法律。即ちその住所地の屬する國家の法。(居所地法に對して)

ぢゅうしょ-ふじゃう 住所不淨【名】『住の字の音、正しくは**じゅ**』〔佛〕五不淨の一。人間の在る所の不淨なること。即ち毋胎・糞穢の中に在るに因るもの。

ちゅうしょれい 中書令【名】[一]支那の中書省の長官。[二]なかつかさのかみ(中務卿)の唐名。

ちゅうしょわう 中書王【名】『**ちゅうしょせい**(中書省)[一]を見よ』親王にして中務(ナカツカサ)卿に任ぜられたる者。兼明(カネアキラ)親王と具平(トモヒラ)親王との二人、最も著れ、後者は、前者に對して、後中書王と稱せらる。

ちゅう-しろ 中白【名】[一]白砂糖と赤砂糖との間なる淡色の砂糖。[二]一種の味噌。赤味噌と白味噌との間なる淡色のものなるべし。浮世風呂「中白とは、四方のおむしでございますよ」

ちゅうす 誅す【動佐變他】『誅の字の音、正しくは**ちゅ**』罪ある者を殺す。誅罰す。成敗す。

ちゅうす 中す【動佐變自】『**ちゅう(中)**』**ちゅう**(中午)**なんちゅう**(南中)を見よ』まなかに至る。「日、已に中す」

ちゅうす 沖す・冲す【動佐變自】高くのぼる。ひひる。「日、天に沖す」

ちゅうす 注す・註す【動佐變他】『注・註の字の音、正しくは**ちゅ**』[一]しるす。かきあぐ。[二]ときあかす。とく。

ぢゅうす (英Deuce)【名】庭球にて、一回のゲエム中、雙方とも三點づつ失敗したる場合。

ぢゅうす 住す【動佐變自】『住の字の音、正しくは**じゅ**』[一]すむ。住居す。すみかとす。[二]〔佛〕心の安定を得。安住す。信仰を得。平等、普賢の悲願に住し」

ちゅう-すう 中數【名】〔數〕『英Mean』五にその量を異にする二箇以上の數を平均して得たる數。又、或數の甲數に於ける比が、乙數のその或數に於ける比に等しきときの、その或數。

ちゅう-すう 中樞【名】[一]主要なる部分。まなか。まんなか。中心。樞軸。「神經中樞」[二]中央政府。

ちゅうすう-しんけい 中樞神經【名】〔醫〕**ちゅうしんしんけいけいとう**(中心神經系統)に同じ。

ちゅうすう-ふ 中樞府【名】次條[一]を見よ。

ちゅうすうゐん 中樞院【名】[一]朝鮮の李朝以前高麗の代に、出納・宿衞・軍機の政を掌りし官府。李朝に至りても、この制を襲用し、一旦三軍府と改稱したれども、また舊に復し、後又中樞府と改め、文武堂上官の所任なき者を待遇する所となせり。[二]**てうせんそうとくふちゅうすうゐん**(朝鮮總督府中樞院)の略。

ちゅうずん 中旬【名】**ちゅうじゅん**(中旬)の約。「古語」㊟「かかる程にちゅうずんになりぬ」

ちゅう-すゐ 中水【名】地下の岩盤より上にある水。「中水の井戸」

ちゅう-せい 中世【名】[一]『接尾語のせい(世)を見よ』祖先より現代に至るまでの中間の代。[二]**ちゅうこ**(中古)[一]に同じ。

ちゅう-せい 中正【名】[一]中庸にして方正なること。邪ならざること。[二]ほどよきこと。かたよらぬこと。度にかなへること。中を得たること。

ちゅう-せい 中性【名】[一]物事の中間にある性。例へば寒と熱との間にある類。中間性。[二]〔語〕『英Neutral gender』**せい**(性)を見よ。[三]〔化〕『英Neutrality』酸性にても鹽基性にてもあらぬこと、即ち指示藥に對して、反應を呈せざること。但し習慣上、中性反應と呼ぶこと多し。又、指示藥は、種類により感度異なるため、一の指示藥に對して中性なるものも、他の指示藥に對しては、微弱ながら、酸性もしくは鹽基性の反應を呈することあり。普通の物質はこれに屬し、酸と鹽基とを適當に加ふる時にも得らる。**ちゅうわ**(中和)[三]參照。「中性の物質」「中性の溶液」

ちゅう-せい 忠誠【名】まごころ。まこと。●蠹忠。忠悃。忠款。

ちゅう-せい 忠正【名】まめやかにして、正しきこと。忠實にして正直なること。忠直。

ちゅう-せい 中背【名】普通なる身長。なみのせたけ。高くもなく低くもなき身のたけ。

ぢゅう-せい 重生【名】〔基〕『英Regeneration』信者となりて、新なる心靈的生活に入ること。再生。新生。「と。

ぢゅう-せい 重誓【名】〔佛〕重ねて誓ふこと。重誓の偈(ゲ)【句】〔佛〕法藏菩薩が、四十八の誓願を立てし後、重ねて三事を誓ふために述べたる偈。「我建起世願」を起首とする五言・四十四句より成り、大無量壽經に出づ。一名、三誓の偈。

ぢゅう-ぜい 重稅【名】個人が租稅として負擔し得る制限を越えて課する稅。(輕稅に對して)

ちゅうせい-えん 中性鹽【名】〔化〕**せいえん**(正鹽)を見よ。

ちゅうせい-かい 中生界【名】〔地〕『英Mesozoic group』地質系統の一。中生代に生ぜし、地層・生物等を總轄したるもの。中生大統。

ちゅうせい-くわ 中性花【名】〔植〕『英Outer flower』全く雌雄藥を缺ける花。

ちゅうせい-し 中世史【名】**ちゅうこし**(中古史)に同じ。

ちゅうせい-しゆせきさんかりうむ 中性酒石酸加個謨【名】〔化〕**しゆせきさんかりうむ**(酒石酸加個謨)に同じ。(酸性酒石酸加個謨に對して)

ちゅうせい-そう 中生層【名】〔地〕『英Mesozoic formation』中生代に生成せる地層。礫岩・砂岩・泥灰岩・真(ズク)岩・石灰岩・白雲岩等より成り、褶曲(シフキョク)の比較的少なきは、火山作用のやや穩かなりしを知るに足り、又、前代以前の地球上、到る處溫暖なりしも、漸く變じて、氣候帶の區分を發生せるが如く、その含有せる化石によりて、生物繁殖し、植物には松柏科・蘇鐵科・羊齒(シダ)科に屬するもの多く、且つ闊葉樹の出現を見、動物には、魚類もあれど、爬蟲類・軟體動物特に繁盛を極め、始祖鳥及び哺乳動物に・ありては、已に有袋類の生現せるを知る。

ちゅうせい-だい 中生代【名】〔地〕『英Mesozoic era』古生代と近生代との中間なる生物の時代といふ意。地質時代四大別の第三期、即ち古生代の次、新生代の前。更に細別して、三疊紀・侏羅・白堊紀の三とす。中古代。第二紀。前條參照。

ちゅうせい-たいとう 中生大統【名】〔地〕**ちゅうせいかい**(中生界)に同じ。

ちゅうせい-だう 忠清道【名】〔地〕朝鮮八道の一。百濟の故地にして、西南部に位す。今は南・北二道に分たれ、南道は西、黃海に接し、北道は海に瀕せず。共に地味肥え、穀物豐かなり。「前條を見よ。

ちゅうせい-なんだう 忠清南道【名】〔地〕

ちゅうせい-はんおう 中性反應【名】〔化〕『英Neutral reaction』**ちゅうせい**(中性)[三]を見よ。

ちゅうせい-ほくだう 忠清北道【名】〔地〕**ちゅうせいだう**(忠清道)を見よ。

ちゅうせい-ゆ 中性油【名】〔化〕**ちゅうゆ**(中油)に同じ。

ちゅうせい-れき 中星曆【名】古、八十二年ごとに時差を測量して造進したりと傳ふる、一種の曆。

ちゅうせう 中宵【名】なかぞら。おほぞら。中空。半空。

ちゅうせう 中宵【名】**ちゅうや**(中夜)に同じ。「よ。

ちゅうせう 中焦【名】**さんせう**(三焦)を見よ。

ぢゅうせうばん 重燒麭包【名】硬燒(カタヤキ)にしたる食麭包。軍用ぱん。「じ。

ちゅうせき 中夕【名】**ちゅうや**(中夜)に同じ。

ちゅうせき 中積【名】纜の數四十艇內外を立つる船。

ちゅうせき 柱石【名】[一]柱の字の音、正しくは**ちゅ**』[二]柱と、いしずゑと。柱礎。[三]柱と礎との如く賴みになるもの。柱棟。柱梁。**ちゅうこく**(柱國)[一]參照。

ちゆう-せき 誄責【名】『誄の字の音、正しくはちゅ』きびしくせめつくること。

おゆう-せき 重責【名】おもき責任。

おゆう-せき 重積【名】ちょうせき(重積)に同じ。

おゆう-せき 重石【名】〔鑛〕『英Scheelite 比重の大なること他に比類なきよりいふ』ウオルフラム酸カルシウムより成り、其の形態一定せざれども、主に正方晶系に属し、板狀・塊狀・粒狀等をなす。多く花崗岩中の石英脈等に發見せらる。

ちゆうせき-き 沖積期【名】〔地〕『英Alluvial epoch』地質時代中、近世代の第四紀に屬して、洪積期よりも更に新しきもの、即ち現代。沖積世。ちゅうせきそう(沖積層)參照。

おゆうせきくわう 重石鑛【名】〔鑛〕『英Tungsten ore』重石その他タングステンの鑛石の總稱。

ちゆうせきすゐ 沖積錐【名】〔地〕ちゅうせきえんすゐ(沖積圓錐)に同じ。

ちゆうせきせい 沖積世【名】〔地〕ちゅうせき(沖積期)に同じ。

ちゆうせきせん 沖積扇【名】〔地〕『英Alluvial fan』大雨又は雪どけなどの時、山間の土砂の流水と共に運搬せられたるもの。傾斜の緩かなる土地に出でて、流勢俄に減ずると共に、沈積して生じたる扇狀の地。その形は河口における三角洲に類す。

ちゆうせきそう 沖積層【名】〔地〕『英Alluvial formation』沖積期に生成せる地層、即ち最新の地層。河海沿岸の砂礫及び火山灰・泥炭・珊瑚礁等にして、岩石いづれも粗鬆、地勢概して平坦、交通便なるにより、人文の發展著し。「條に同じ。

ちゆうせきそうど 沖積層土【名】〔地〕次ちゆうせきど 沖積土【名】〔地〕『英Alluvial soil』沖積層に屬する土、即ち諸高地に於ける諸種の成分なる土砂の、水に運ばれて、低地に漸次堆積せるもの。概ね生産力に富む。沖積層土。

ちゆうせきとう 沖積統【名】〔地〕『英Alluvial series』地質系統の一。沖積期に生じたる地層・生物等を總括したる稱。

ちゆうせき-ぶつ 沖積物【名】〔地〕『英Alluvial deposit』河水の運搬し來れる泥土・砂礫等の堆積せるもの。水成岩と同樣に層理あれども、多くは近距離の範圍内にても、不規則なる變化を示す。

ちゆうせき-えんすゐ 沖積圓錐【名】〔地〕『英Alluvial cone』沖積層の傾斜急なるもの。沖積錐。

ちゆう-せつ 忠切【名】眞心こもりて懇切なること。

ちゆうせつ 忠節【名】君に盡す節義。

ちゆう-せつ 注說【名】『注の字の音、正しくはちゅ』書きしるして說くこと。說きあかすこと。太平記「天文博士注說す」

ちゆう-ぜつ 中絕【名】㊀中途にて絕え、又は絕つこと。中斷。㊁交友の一時絕ゆること。

おゆう-せつ 重說【名】重ねて說くこと。繰返して說くこと。

ちゆうせつ-だて 忠節立【名】『だて(立)は接尾語』ちゅうぎだて(忠義立)に同じ。國姓爺「忠節立する呉三桂」

ちゆう-せっぱ 中切羽【名】大切羽より少しく小さき切羽。

ちゆう-せん 鑰錢【名】『鑰の字の音、正しくはちゅ』しんちゅうせん(眞鑰錢)に同じ。

ちゆう-せん 忠戰【名】忠義の心を以てたたかふこと。

ちゆうせん 中船【名】艫を五六十挺立つる船。

ちゆうせん 中線【名】〔數〕『英Median line又Median』三角形の一の頂點より、その對邊の中點に引きたる直線。即ち三角形にはすべて三箇の中線ありて、三線とも一點に於て交叉し、この交叉點はやがてその三角形の重心なり。

おゆうせん 重線【名】〔理〕『英Heavy line』物體の重心の經過する直線。一の物體を一條の絲に吊し、その物體の靜止するとき、重線はその絲の線中にあり、又その物體の他の一點をとりて、再び斯くの如くして、他の重線を知るとき、その二箇の重線の交叉點が即ち重心點なり。

ちゆうせんおん 中線音【名】〔語〕『英Medial sound』口腔の中線に當る部分を要所となして發する音。例へば、英語のSの如し。(側音に對して)

ちゆう-せんけうし 中宣敎使【名】せんげうし(宣敎使)㊁を見よ。

ちゆうぜんじ-こ 中禪寺湖【名】〔地〕下野國日光山中男體(ナンタイ)山の麓にある湖。男體山噴火の結果生成せし火山湖。その溢れて落つるものは、即ち華嚴(ケゴン)瀑、大谷(オホヤ)川の水源たり。周回、六里弱。別稱、中宮祠湖。

ちゆうぜんじさん 中禪寺山【名】〔地〕下野國男體(ナンタイ)山の別稱。

ちゆうぜんじな 中禪寺菜【名】〔植〕やまがらし(山芥)に同じ。

ちゆうせん-じんじゃ 中山神社【名】美作國苫田(トマナ)郡一宮(イチノミヤ)村に鎭坐せる國幣中社。祭神は金山彦(カナヤマヒコ)命。

ちゆうぜんじ-をんせん 中禪寺溫泉【名】〔地〕ゆもとをんせん(湯本溫泉)㊁に同じ。

ちゆう-せんせかい 中千世界【名】〔佛〕小千世界を一千集めたるものの總稱。(小千世界・大千世界に對して)

ちゆうそ 柱礎【名】『柱の字の音、正しくはちゅ』ちゅうせき(柱石)に同じ。

ちゆうそ 注疏・註疏【名】『注・註の字の音、正しくはちゅ』註と疏と。註釋。「じ。

ちゆうそ 重祚【名】ちょうそ(重祚)に同じ。

ちゆうそう 中宗【名】國君の中興の祖。

ちゆうそう 住僧【名】『住の字の音、正しくはちゅ』その寺に住める僧侶。住侶。

ちゆうそお 重曹【名】〔化〕ちゅうたんさんそおに(重炭酸曹達)の略。

ちゆうそくえん 重測鉛【名】『英Deep-sea lead』深海の深さを測るに用ふる測鉛。(輕測鉛に對して)

ちゆうそ-じやう 重訴狀【名】鎌倉・室町兩時代に、訴人(原告)が論人(被告)の陳狀(初答狀)に對して重ねて出だしし訴狀。重申狀。ちゅうちんじやう(重陳狀)參照。

ちゆうそて 中袖【名】鎧の袖の、中ぐらゐの大いさなるもの。

ちゆうそ-ぼん 注疏本・註疏本【名】『注・註の字の音、正しくはちゅ』註疏を施したる書。

ちゆうぞん 中尊【名】〔佛〕中央の尊像、即ち三尊のうちの阿彌陀如來、五佛のうちの大日如來、五大明王のうちの不動明王など。中臺の尊。大鏡「あみだだうの、ちゆうぞんの御前についゐさせたまひて」

ちゆうぞん-じ 中尊寺【名】陸中國西磐井(ニシヒライ)郡平泉(ヒライヅミ)村大字衣關(コロモノセキ)にある天台宗の寺。弘臺壽院と號す。本尊は阿彌陀如來。寺傳に、嘉祥三年慈覺大師の開基とあれど、實は長治二年藤原淸衡の本願により建立せられしものといふ。今は金色(コンジキ)堂と經藏とを存するのみ。こんじきだう(金色堂)參照。

ちゆうぞり 中剃【名】月代を中位に剃ること。五人女「みづからよき程に切りて、中剃して、衣類も、かねての用意にや、まんまと若衆にかはりて忍びて行くに」

ちゆうたい 柱體【名】〔數〕『柱の字の音、正しくはちう』かくたい(角壔)に同じ。

ちゆうたい 中隊【名】歩兵・騎兵及び砲兵等の戰鬪單位、かつ戰術單位。普通三乃至四小隊に分つ。戰時に於ける歩兵中隊は二百乃至二百五十人、騎兵は百五十人內外、砲兵は砲四門乃至八門、及びこれに要する人馬とし、大尉これを指揮す。

ちゆうたい 中台【名】〔天〕さんたいせい(三台星)を見よ。

ちゆうたい 中諦【名】〔佛〕さんたい(三諦)を見よ。

ちゆうたい 中體【名】㊀〔生〕ちゅうあたい(中央體)に同じ。㊁〔佛〕中央にある佛の像。三尊又は五佛等にいふ。中尊。

「蓮の紐をむらごの紐にして、九體の御手より通して、中體の御手にとぢめて」

ちゆうたい 中臺【名】〔佛〕蓮華の中心、佛の臺座となる處。

「廊を渡りて大御堂に參れば、ちゆうだい高くいかめしうおはします」

中臺の五尊【句】〔佛〕中臺八葉の院の中なる五佛。

中臺の尊【句】〔佛〕ちゅうぞん(中尊)に同じ。

「中臺の尊高く、いかめしうおはしまして、大日如來におはします」

中臺八葉の院【句】〔佛〕密敎にて、胎

藏界曼荼羅の中央なる一區域。八瓣の蓮華の開敷(カイ)せる形に、凡夫の肉團心の開敷を示せるもの。その中臺に大日如來あり、八瓣に四佛・四菩薩あり。

ぢゆうたい 重態・重體【名】病のさし重りたる有樣。危篤の容體。

ぢゆうだい 重代【名】幾代をも經ること。代を重ぬること。祖先より傳來せること、又そのもの。「重代の御佩刀」

ぢゆうだい 重臺【名】重箱を載するための臺。足ある膳のごときもの。

ぢゆうだい 重大【名】容易ならぬこと。おもきこと。重要。

ぢゆうだいけ 重代家【名】昔時、仕勢にて、その家系の人の神官の禰宜(ネギ)に任ぜらるることに定まりをりし家。內宮には、薗田(ソノダ)・中川・佐八(サヤ)・藤浪・世木(セキ)・澤田、外宮には、松木・檜垣(ヒガキ)・宮後(ミヤジリ)・川崎・久志本(クシモト)・佐久目(サク)の諸家。

ぢゆうたいけうれん 中隊教練【名】〔兵〕基本教練の一。一中隊にて行ふもの。一指揮官の號令の下に行ふ射擊指揮は、中隊を限度とす。

ぢゆうだいこ 中太鼓・中太皷【名】つりだいこ(釣太鼓)の古稱。

ぢゆうだいさう 重體操【名】重くして使用するに力を要する大なる器具、又は据附器械とを用ふる體操。古代の體操は此の類に屬せり。(輕體操に對して)

ぢゆうだいさぶらひ 重代侍【名】代代その家に仕ふる侍。譜代の侍。

ぢゆうたいじゆうたい 中隊縱隊【名】〔兵〕歩兵と騎兵とにありては、小隊の橫隊を前後に重疊せる中隊の隊形、砲兵にありては、閉牧間隔橫隊の中隊を前後に重疊せる大隊の隊形。集合及び運動に用ふ。

ぢゆうたいせき 中堆石【名】〔地〕『英 Central moraine』たいせき(堆石)を見よ。

ぢゆうたい-ちやう 中隊長【名】中隊の長官。大尉を以て任ぜられ、大隊長の命を承けてこれを指揮す。

ぢゆうたい-どうじ 中大童子【名】中童子と大童子と。大中童子。 ㊟「中大童子、大童子」

ぢゆうだいなうどうみやく 中大腦動脈【名】〔醫〕『羅 Arteria cerebri media』內頸動脈の分枝。大腦側面に分布し、後交通動脈及び脈絡膜動脈に分岐す。

ぢゆうたいふ 中大夫【名】㊀支那唐代の從四品下の雅稱。㊁我が國の從四位下の唐名。

ぢゆうだいみやう 中大名【名】江戶幕府にて、柳營の柳の間詰の大名の稱。

ぢゆうたう 偸盜【名】〔佛〕『偸の字の音、正しくは『とう』五惡又は十惡の一。物をぬすむこと。

ぢゆうたう 中唐【名】〔文〕支那の唐代を、詩體の變遷上四期に區分したるうちの一。盛唐の次、晩唐の前。(初唐・盛唐・晩唐に對して)

ぢゆうだう 中道【名】㊀ちうどう(中途)に同じ。㊁〔佛〕『梵 Madhyama の譯語。中は絕對・不二の義』佛教の根本理想を示す語。法相宗にては唯識、三論宗にては八不(ハッ)、天台宗にては實相、華嚴宗にては法界を指す等、宗派により解釋一定せず。

ぢゆうぐわん 中觀【名】〔佛〕『般若』「色卽是空、空卽是色」なるが故に、これを相好光明といふ。「色・一香中道にあらずといふことなし」㊂當士登山者が、その半腹を橫に一巡すること。(敬語を添へて御(オ)中道ともいふ)

ぢゆうだう 中堂【名】㊀支那にて、宰相の政治を行ふ場所。㊁さいしやう(宰相)の異稱。㊂天台宗の寺の本堂。㊃こんぽんちゆうだう(根本中堂)の略。山門堂舍記「根本中堂(初號比叡寺、後稱二乘止觀院、亦曰二中堂一)：此堂元者三字各別、文殊堂・藥師堂・經藏等也、藥師堂以レ在二中故曰二中堂一、但彼經藏、今大師堂也」

ぢゆうたうかい 偸盜戒【名】〔佛〕『偸の字の音、正しくは『とう』五戒又は十戒の一。五惡又は十惡の一なる偸盜を禁ずること。

ぢゆうだうくわん 中道觀【名】〔佛〕ちゆうぐわん(中觀)に同じ。

ぢゆうだうけう 中道敎【名】〔佛〕有(ウ)・空の何れにも偏せざる中道の理を說く敎、卽ち法相宗の敎。三時敎の第三期に屬すと稱らる。第三時敎。中敎。中道宗。中宗。

ぢゆうたうざい 偸盜罪【名】『偸の字の音、正しくは『とう』ぬすみ取る罪。

ぢゆうだうしゆう 中道宗【名】〔佛〕ちゆうだうけう(中道敎)に同じ。

ぢゆうたか 中高【名】㊀次條の略。(大高・小高に對して)㊁高蒔繪の、肉の高さ中位なるもの。

ぢゆうだかだんし 中高檀紙・中鷹檀紙【名】檀紙の一。その寸法の大高に次ぐもの。長さ二尺・幅一尺五寸五分。〔中臈〕

ぢゆうたく 住宅【名】『住の字の音、正しくはぢゆう』住居する家屋。すまひや。住家。

ぢゆうたくひ 住宅費【名】『住の字の音、正しくはぢゆう』次條に同じ。

ぢゆうたくれう 住宅料【名】『住の字の音、正しくはぢゆう』住宅に要する費用、卽ち家賃などの料として支給する金。宅料。

ぢゆうたち 中裁【名】『四つ身と本裁(ホンダチ)との中間の義』並幅二丈三尺にて製すること、又その衣服。十三四歲の小供の著るものとす。

ぢゆうたつ 仲達【名】〔人〕しばい(司馬懿)に同じ。

ぢゆうだに 中谷【名】たいいがみ(太平紙)に同じ。

ぢゆうたん 中丹【名】胸中の眞心。丹心。

ぢゆうたん 中單【名】あせとり。はだぎ。

ぢゆうたん 忠膽【名】忠義なる心。太平記「宜レ專二朝廷扶危之忠膽一矣」

ぢゆうたん 沖淡・沖澹【名】心淡白にして無欲なること。

ぢゆうたん 中段【名】㊀なかのきざみ。なかのだん。㊁段の中央。㊂〔建〕書院造(ショインヅクリ)にて、上段の間(マ)より一段低く、下段の間より一段高く造りたる所。㊃劍術・槍術などの、構にての、上段と下段との中間なるもの。星眼(セイガン)。(上段・下段に對して)㊄けんぎよふにしん(建除十二辰)を見よ。

ぢゆうだん 中壇【名】〔佛〕五壇の御修法(ミシホ)の中央の壇、卽ち五大明王の中の中尊たる不動明王の壇。增鏡「六日より七佛藥師・五壇の御修法など始まる。中壇は、櫻井の宮、勘めさせたまふ」

ぢゆうだん 中斷【名】㊀眞中より切ること、又切ること。㊁とだゆること。中絕。㊂〔法〕中途に斷絕して、これまで經過せし效力を失はしむること。例へば、十年のものを三年にて中斷せるときは、前三年は無效となりて、更に一年より始まるが如きこと。「時效の中斷」

ぢゆうだん 中男【名】ちゆうなん(中男)に同じ。

ぢゆうたん 重擔【名】㊀重量の荷物。おもに。㊁おうにん(重任)に同じ。

ぢゆうたんさんかり 重炭酸加里【名】〔化〕次條に同じ。

ぢゆうたんさんかりうむ 重炭酸加儞謨(獨 Kaliumbikarbonat)【名】〔化〕炭酸瓦斯を炭酸カリウム末又は濃厚水溶液に化合せしめたるものにして、無色結晶物、弱きアルカリ性を有し、水に溶け易く、酸類によりて分解せらる。重炭酸ナトリウムに似たり。重炭酸ぼたしうむ。

ぢゆうたんさんそおだ 重炭酸曹達(英 Bicarbonate of soda)【名】〔化〕成分は炭酸水素ナトリウム、卽ち酸式炭酸ナトリウムなる白色の結晶塊、或は白色結晶性の粉末、少しアルカリ性あり。故に酸類を和すれば、著しく沸騰して、炭酸瓦斯を發す。藥用には制酸劑・合嗽(ガフソウ)劑・吸入藥等に供し、麪包を膨らがすに用ひ、又しばしば食物を煮るに加へて用ふ。重炭酸そうむ。重炭酸なとりうむ。重曹。

ぢゆうたんさんそおだえき 重炭酸曹達液【名】重炭酸曹達を二十倍程の水に融したる液。酸類を忌む食物の消毒に用ふ。

ぢゆうたんさんそうむ 重炭酸曹達(英 Sodium Bicarbonate)【名】〔化〕ぢゆうたんさんそおだ(重炭酸曹達)に同じ。

ぢゆうたんさんなとりうむ 重炭酸那篤儞謨誤(獨 Natriumbikarbonat)【名】〔化〕ぢゆうたんさんそおだ(重炭酸曹達)に同じ。

ぢゆうたんさんぼたしうむ 重炭酸剝篤

曳誤(英Po.assium bicarbonate)【名】〔化〕おゆうたんさんかりうむ(重炭酸加爾謨)に同じ。

ちゅうーち 中智【名】上ならず下ならず中等の知慧、又その人。

ちゅうーち 中池【名】こころ(心)の異稱。

ちゅうーち 蟲豸【名】『禦雅に「有レ足謂二之蟲一、無レ足謂二之豸一」とあり』むしけら。ちゅう(豸蟲)參照。

ちゅうーお 住持【名】『住の字の音、正しくはじゅ』■佛法をこの世に住(とゞ)め持(たも)ちて、末代までも傳ふること。太平記「寺門繁昌して、三寶の住持も全かりつるに」■その寺の主僧となること、又その僧。住職。方丈。寺主。堂頭和尚。拾遺「住持し侍りける法師に、歌よめといひければ」

ちゅうーおうさん 住持三寶(ジュウ)【句】〔佛〕釋迦滅後の今日まで持續せらるる三寶、即ち木像畫像に表徴せられたる佛寶と、黄卷赤軸の經文に現れたる法寶と、剃髪染衣にて修行する僧寶と。蓋し釋迦在世の時は、佛寶に生身(シャウ)の佛、法寶に佛の直說(ヂキセツ)、僧寶に七衆の弟子ありしが、釋迦の滅後は、住持の三寶これに代りて、衆生を濟度すと說かる。寺院の住職を住持と云ふもこれに本づく。

ちゅうーちがひだな 重違棚【名】戸棚の一。小道具を容るるに用ふ。袋棚の下を縦に三段に、横に二段に仕切り、其の各段に開閉し得る襖(フスマ)を設けたるもの。

ちゅうーぢく 中軸【名】物體の中央に在る軸。なかぢく。

ちゅうーぢくたいざ 中軸胎座【名】〔植〕『英Axile placenta』胎座の一種。胚珠が子房の中軸に位するもの。百合(ユリ)、桔梗(キキヤウ)などに見るを得べし。

ちゅうーぢーぶぎやう 住持奉行【名】『住の字の音、正しくはじゅ』ぜんりっちぎゃうぶぎやう(禪律住長老奉行)に同じ。

ちゅうーちん 中鎭【名】ちん(鎭)■を見よ。

ちゅうーぢん 中陣【名】神社又は佛閣の、内陣と外陣との中間なる間(マ)。

ちゅうーちん 重鎖【名】■重きおさへ、又その任に在る人。■有力にして、一方面のおさへたる人。

ちゅうーちんじやう 重陳狀【名】にたふじやう(二答狀)に同じ。

ちゅうーちやう 中長【名】ちやう(長)七を見よ。

ちゅうーちやう 中腸・中膓【名】はらのなか。こころのうち。中心。内心。「袈裟。

ちゅうーちやくえ 中著衣【名】〔佛〕五條の

ちゅうーちやぼ 中茶穗【名】木綿の縫針の一種。大茶穗より小、小茶穗より大なるもの、即ち長さ曲尺の一寸二分なるもの。

ちゅうーちゅう 【名】〔動〕『なき聲より轉用せるもの』■ねずみ(鼠)を云ふ。〔小供の話〕■すずめ(雀)を云ふ。〔小供の話〕

ちゅうーちゅう 仲忡【號】心配するさま。「憂心、忡忡たり」

ちゅうーちゅう 沖沖・沖沖【號】氷を穿つ音の形容。

ちゅうーちゅう 【號】■鼠雀などの鳴聲。■汗などを吸ふ音の形容。

ちゅうーおゆう 中重【名】なかのへ(中重)を

おゆうーぢゆう 重重【號】かさなるさま。かさねがさね。凱陣八島「重重御道理」

ちゅうーちゆうこ 中中戸【名】大寶令にて、九等に分たる戸(コ)の一。資財十六貫以上、二十貫未滿のもの。

おゆうおゆうーだな 重重棚【名】室内に設くる棚の一種。地板より鴨居下まで五段位に別ち、棚板を架し、各段に小襖(コフスマ)を建てたるもの。

ちゅうーおよ 中女【名】なかの娘。第二女。

おゆうーちよう 重徴【名】租稅などを重く徴收すること。

おゆうーちようえき 重懲役【名】〔法〕舊刑法にて、國事犯以外の重罪に科する主刑の一。九年以上十一年以下監獄に拘禁し、定役に服せしむるもの。(輕懲役に對して)

ちゅうーちよく 忠直【名】まめやかにすなほなること。りちぎ。忠正。

ちゅうーちよく 中直【名】えいじはっぽふ(永字八法)を見よ。

ちゅうーっぱら 中腹【名】■すこし腹をたつること。怒を含めるごとき物いひ・ふるまひ。〔俚語〕俗曲〔松魚節〕「かつをかつをと賣る聲も、勇肌なるちゆうっぱら」■きほひなる人。勇肌なる人。

ちゅうーづめ 中詰【名】年わかき遊女。〔京都祇園町の遊廓の話〕

おゆうーづめ 重詰【名】食品を重箱に詰むること、又その食物。

ちゅうーづもり 中積【名】■中(ヂユウ)にて適度に見積ること。おほざっぱの見積。若風盤十露盤(バン)彈き、酒肴茶煙草、大かた中づもりにして何程と、納涼(スヾミ)中の入用を勘定して」■深くもなく、すくなくもなく、中ぐらゐにつもること。鹿鳴遊「雪げぞといひふらすやもちゆうづもり」

ちゅうつぼはう 中追放【名】江戸幕府時代の刑罰の一。御定書百ケ條「中追放、武藏・山城・攝津・和泉・大和・肥前・東海道驛路・木曾路・下野・日光道中・甲斐・駿河、但田畑・家屋敷敷缺所、家財無レ構」

おゆうつぼはう 重追放【名】江戸幕府時代の刑罰の一。御定書百ケ條「重追放、御構場所武藏・相摸・上野・下野・安房・上總・下總・常陸・山城・攝津・和泉・大和・肥前・東海道筋・木曾路筋・甲斐・駿河、但缺所、右同所田畑・家屋敷・家財共缺所」

ちゅうーてい 忠貞【名】■まめやかにして操の正しきこと。■忠義と貞節と。

ちゅうーてい 中庭【名】なかには(中庭)に同じ。

ちゅうーてい 中丁【名】その月の中旬の丁(ヒノト)の日。

ちゅうーてい 厨丁・廚丁【名】くりやをとこ。だいどころがた。料理人。

おゆうーてい 住邸【名】『住の字の音、正しくはじゅ』すまひ。邸宅。住宅。

おゆうーてい 重體【名】おゆうたい(重態)に同じ。

おゆうーてい 重訂【名】ちようてい(重訂)に同じ。

ちゅうーてう 中朝【名】■『中は禁中の義』てうてい(朝廷)に同じ。■『世界の中央に位する朝廷の義』我が朝廷。我が國。■中ごろの世。中世。中古。

ちゅうーてう 中條【名】『中條流産科などいへる看板を出して行ひたるよりいふ。一說に、中條流の醫法を傳へたる產婆より出でたりともいふ』こおろし(子墮)■に同じ。

ちゅうてうりう 中條流【名】■參照。

ちゅうーてつ 中鐵【名】柳燁「中條の門(カド)に立つてるのが相手」

ちゅうてう-じしつ 中朝事實【名】〔書〕我が國の事實を敍べ、皇道の萬邦に冠絶せる所以を說きたるもの。二卷。山鹿素行の著。

ちゅうてう-ひやうこのすけ 中條兵庫介【名】〔人〕中條流劍術の祖。名は長秀。相模國鎌倉の人。次條■參照。

ちゅうてうりう 中條流【名】■劍術の一流派。中條兵庫助長秀を流祖とするもの。■產科の一流派。豐臣秀吉の臣にして、金創と產科との治術に名ありし中條帶刀(タテワキ)を流祖とするもの。「見よ。

おゆうーでふ 重疊【名】ちようでう(重疊)を

ちゅうーてまり 中手鞠【名】〔植〕櫻の一品種。花の形てまりに似て、白く、八重なるもの。

ちゅうーてん 中天【名】■天の中心に至ること。■なかぞら。中空。半空。中宵。天心。■〔地〕ちゅうてんぢく(中天竺)の略。

ちゅうーてん 中點【名】〔數〕『英Middle point』有限直線を二等分したる點。二等分點。

ちゅうーてん 沖天・冲天【名】『ちゅうす(沖す)を見よ』天にのぼること。空に上ること。「沖天の勢」

ちゅうーでん 中殿【名】■『曹植の詩に「左右爲二供養一中殿宣二皇子一」とあり』なかの御殿。■せいりやうでん(淸涼殿)の異稱。■神社の、拜殿と本殿との中間なる間(マ)。

やつむねづくり 中殿の歌會(クワイ)【句】王朝時代に、吉日を選びて、淸涼殿にて行はれし歌會。後冷泉天皇の時に始まる。管絃の御遊もありて、歌人には祿を賜へり。

ちゅうでんのさくもん 中殿の作文(サクモン)【句】淸涼殿にて、朝臣を會して、詩を賦せしめし會。正統記「具平(トモヒラ)親王、…一條の御代に、よろづ昔をおこし、人を用ひましければ、この親王、昇殿したまひし日、淸涼殿にて作文ありしに(中殿の作文といふこと、

これより始まる)「所貴是賢才」といふ題にて題を探らることあり」 増鏡「みなづきの頃、中殿の作文せさせたまふ。題は式部大輔藤範泰る。久しかるべきは賢人の徳、とかや聞えしにや」

ちゅう-てん 重典【名】㊀おもき制度又は儀式。重大なる典禮。重儀。大典。㊁重要又は嚴重なる法典。嚴法。

ちゅう-てん 重點【名】㊀〔理〕槓杆の、動かさるべき物體のかかる點。(支點・力點に對して) ㊁かさねじ(重字)に同じ。

ちゅう-てん 中田【名】中古以後、田租の割合を定むるため、肥瘠によりて、田地を上・中・下の三等または上・中・下・下下の四等に分ちたるうちの第二等、又、貞享三年に、上上・上・中・下・下下の五等に分ちたるうちの第三等なるもの。(上田・下田に對して)

ちゅう-てんい 中典醫【名】てんい(典醫)㊀を見よ。

ちゅうでん-きん 中臀筋【名】〔醫〕『羅Musculus Glutaeus medius』外臆骨筋第二層の筋肉。大腿を外轉する作用を營む。

ちゅう-てんちく 中天竺【名】〔地〕五天竺のうちの、中央に位する部分。中天。中印。十數昔、中天竺に、佛滅後萬歲ばかり過ぎて、優婆崛多(うばくた)と申す佛果の羅漢おはしけり」

ちゅう-と 中途【名】㊀行く路のなかば。半途。中路。中道。㊁事をなすなかば。事を成就するまでに至らぬ間。半途。中道。中路。

ちゅう-と 中砥【名】粗砥(とあら)にて砥ぎし刃物を、更に礪ぐに用ふる砥。普通なるは青砥にて、これにて磨きたる刃物は、さらに仕上砥(とぎ)にかくるを要す。

ちゅう-ど 重土【名】〔化〕『英Baryta』さんわばりうど(酸化拔留謨)に同じ。

ちゅう-とう 柱棟【名】『柱の字の音、正しくはちゅ』㊀はしらと、むなぎと。むなぎとらとむなぎとの家の構造に缺くべからざるが如く、たのみとなるもの。柱石。柱梁。「國家のちゅうとう」

ちゅう-とう 柱頭【名】『柱の字の音、正しくはちゅ』㊀〔建〕柱の上部。㊁〔植〕『英Stigma』雌蕊の上部、卽ち常に粘液を分泌し、雄蕊の花粉を受くる部分。

ちゅう-とう 中等【名】上等又は高等と下等又は初等との間。第二等。(上等・下等に對して)

ちゅう-とう 仲冬【名】『冬三箇月の中の月なるよりいふ。ちゅうしゅん(仲春)ちゅうか(仲夏)ちゅうしう(仲秋)參照』陰曆十一月の異稱。

ちゅう-とう 中東【名】〔地〕『英Middle East』極東と近東との中間の地方、卽ちペルシヤ・印度・アフガニスタン等。(近東・極東に對して)

ちゅう-どう 沖童・沖童【名】をさなき男の「兒。わらべ。

おう-どう 重瞳【名】ちょうとつ(重瞳)に同じ。今國姓爺「凡人ならぬ公の人相、眉のはっさい、目の重瞳」

ちゅうとう-けいいく 中等教育【名】初等教育を終へたる者に、更に社會の中流以上に立つ人物たるに適せしむる目的を以て施す、高等なる普通教育。中學校・高等女學校などの教育、卽ちこれなり。中學教育。(初等教育・高等教育に對して)

ちゅうとう-けうゐん 中等教員【名】中等教育の任に當る教師。

ちゅう-どうじ 中童子【名】童子㊀の、幡・綱などを持ちて、身分ある僧の出行の時、供するもの。(上童子・大童子・小童子に對して)

ちゅう-どく 中毒【名】『毒に中(あ)てらるる義』毒性ある物を飲食するより起る病。毒菌・河豚・水銀・鉛・銅・魚類等の中毒は、その主なるものなり。どくあたり。

ちゅう-どく 蟲毒【名】人體に害をなす蟲類の有する毒質。

ちゅう-とくがく 中督學【名】とくがく(督學)㊀を見よ。

ちゅう-とくげふせい 中得業生【名】とくげふせい(得業生)㊀㊁㊂を見よ。

ちゅう-とくじやくし 中毒弱視【名】〔醫〕中毒により起る視力障害。急劇に來るものと、徐々に發現するものとあり。

ちゅうとき-べ 中解部【名】ときべ(解部)㊂を見よ。

ちゅう-ときべ 中解部【名】ときべ(解部)㊂の幡・綱などを持ちて、身分ある僧の出行の時、供するもの。(上童子・大童子・小童子に對して)

ちゅう-とく 中督【名】『督(とく)の中(あ)てらるる義』毒性ある物を飲食するより起る病。毒菌・河豚・水銀・鉛・銅・魚類等の中毒は、その主なるものなり。どくあたり。

ちゅう-どく 蟲毒【名】人體に害をなす蟲類の有する毒質。

ちゅう-とくがく 中督學【名】とくがく(督學)㊀を見よ。

ちゅう-とくげふせい 中得業生【名】とくげふせい(得業生)㊀㊁㊂を見よ。

ちゅう-どくじやくし 中毒弱視【名】〔醫〕中毒により起る視力障害。急劇に來るものと、徐々に發現するものとあり。

ちゅう-とし 年增【名】年增(としまし)參照。皇都午睡「女の物名をたぼといふ……二十より三十二三歲までを中年增といふ」 梅暦「素顏(すがほ)の意氣な中年增」

ちゅう-どしより 中年寄【名】江戸幕府の大奥に於ける女中の一。御年寄に次ぐ要職にて、表役の若年寄に似たるもの。通常二人を置けり。

ちゅう-どすゐ 重土水【名】〔化〕『英Baryta-water』水酸化バリウムの水溶液。

ちゅう-どちゃうせき 重土長石【名】〔鑛〕長石の一。石灰岩中に産し、その成分は灰長石と正長石を混じたるが如く、しかもその中の石灰を重土に代へたるものなり。

ちゅう-どはうかいせき 重土方解石【名】〔鑛〕炭酸カルシウムと炭酸重土より成れる鑛物、白色透明にして、光澤を有す。

ちゅう-どはく 重土白【名】〔化〕りうさんばりうど(硫酸拔留謨)の異稱。

ちゅう-とはんば 中途半端【名】物事の、十分なるに至らぬこと。なからはんじゃく。なからはんと。ちゅうはんば。

ちゅう-とほり 中通【名】㊀物事の、よくもなく、あしくもなきこと。ちゅうぐらゐ。なみ。普通。㊁俳優の名題役者の下にて、下廻(したまわり)より上なるもの。

ちゅう-とん 駐屯【名】『駐の字の音、正しくはちゅ』軍隊がその處に陣を構へて屯在すること。

ちゅう-どんきよし 重鈍鋸齒【名】〔植〕『英Duplocrenate』葉緣の鈍鋸齒の齒牙が、各分裂せるもの。再鈍鋸齒。

ちゅうとん-ぐん 駐屯軍【名】『駐の字の音、正しくはちゅ』その地に駐屯せる軍隊。

ちゅうとん-へい 駐屯兵【名】『駐の字の音、正しくはちゅ』その地に駐屯せる兵。

ちゅうとん-しき 駐屯式【名】〔建〕英國にて、第十五世紀の末より第十六世紀の半へかけて、ゴシック式建築の變化して生じたる一樣式。複雜にして、豐富なる裝飾を有す。

ちゅう-ない 中内記【名】〔書〕『中内とは中御門内大臣の略』中御門内大臣藤原宗能(むねよし)の記錄。宗能は中右記の著者宗忠の子にて、この書、卷頭闕けて詳かならねど、殘部は保延三年六月より久安五年七月に渉れり。三册。

ちゅう-なう 中腦【名】〔醫〕『英Middle brain』腦の基部に位し、大腦の左右兩半球を連絡する部分。

ちゅう-なごん 中納言【名】古の太政官の次官。令外(りやうげ)の官にて、大納言の次位に立ち、職掌は大納言に准ぜり。その稱、天智天皇の代に見え、文武天皇の大寶元年一時廢せられしが、慶雲二年また設置して、三人を定員とせられ、天平勝寶八年始めて權官の增設あり、定員その後漸次に增加して、四人・五人等より十人に至り、後更に八人に減ぜり。なかのものまうすつかさ。唐名、黄門。

ちゅう-なん 中男【名】㊀なかのむすこ。次男。㊁せうちゃう(少丁)に同じ。

ちゅうなん-さくもつ 中男作物【名】中男㊁の負擔すべき人頭稅、卽ちその自ら作りたる物を、朝廷に輸せしこと。その額は、大寶令にて、正丁の四分の一と定めたり。

ちゅうなんさくもつ-ちゃう 中男作物帳【名】調帳枝文(だえ)の一。中男作物を記載したるもの。

ちゅうなん-ざんちゃう 中男殘帳【名】大計帳枝文(だえ)の一。中男の殘疾の者を記載したるもの。

ちゅうなん-ちゃう 中男帳【名】大計帳枝文(だえ)の一。中男㊁に關する事項を記載したるもの。「同じ。

ちゅうに 仲尼【名】〔人〕ちゅうじ(仲尼)に同じ。

ちゅう-に 重二【名】ちゅうじ(重二)に同じ。

ちゅう-に 重二・重二【名】〔句〕『でっち(重二)を見よ』あまり普通のなきこと。五十歩百歩。

ちゅう-にかい 中二階【名】㊀普通の二階よりは低けれど、平屋よりはやや高く構へたる二階。一代男「中二階の古きに氣をつけ、亭主呼出し、これでは置かれじと、普請を受合ひ」㊁『樂屋の中二階に、その部屋を見よ。

ちゅう-ない 中内記【名】〔書〕『中内とは中御門内大臣の略』中御門内大臣藤原宗能(むねよし)の記錄。宗能は中右記の著者宗忠の子にて、この書、卷頭闕けて詳かならねど、殘部は保延三年六月より久安五年七月に渉れり。三册。

ちゅう-なう 中腦【名】〔醫〕『英Middle brain』腦の基部に位し、大腦の左右兩半球を連絡する部分。

ちゅう-なごん 中納言【名】古の太政官の次官。令外(りやうげ)の官にて、大納言の次位に立ち、職掌は大納言に准ぜり。その稱、天智天皇の代に見え、文武天皇の大寶元年一時廢せられしが、慶雲二年また設置して、三人を定員とせられ、天平勝寶八年始めて權官の增設あり、定員その後漸次に增加して、四人・五人等より十人に至り、後更に八人に減ぜり。なかのものまうすつかさ。唐名、黄門。

ちゅう-なん 中男【名】㊀なかのむすこ。次男。㊁せうちゃう(少丁)に同じ。

ちゅうなん-さくもつ 中男作物【名】中男㊁の負擔すべき人頭稅、卽ちその自ら作りたる物を、朝廷に輸せしこと。その額は、大寶令にて、正丁の四分の一と定めたり。

ちゅうなんさくもつ-ちゃう 中男作物帳【名】調帳枝文(だえ)の一。中男作物を記載したるもの。

ちゅうなん-ざんちゃう 中男殘帳【名】大計帳枝文(だえ)の一。中男の殘疾の者を記載したるもの。

ちゅうなん-ちゃう 中男帳【名】大計帳枝文(だえ)の一。中男㊁に關する事項を記載したるもの。「同じ。

ちゅうに 仲尼【名】〔人〕ちゅうじ(仲尼)に同じ。

ちゅう-に 重二【名】ちゅうじ(重二)に同じ。

ちゅう-に 重二・重二【名】〔句〕『でっち(重二)を見よ』

ちゅう-にかい 中二階【名】㊀普通の二階よりは低けれど、平屋よりはやや高く構へたる二階。一代男「中二階の古きに氣をつけ、亭主呼出し、これでは置かれじと、普請を受合ひ」㊁『樂屋の中二階に、その部屋

のありしよりいふ』女形の俳優の異稱。

ちゆうにく 中肉【名】㊀身體の、肥えも痩せもせずして、ほどよき肉附。「中肉・中ぜい」㊁品質の中等なる獸肉。

ちゆうにくーぼり 中肉彫【名】**はんにくぼり**（半肉彫）に同じ。

ちゆうにち 中日【名】〔佛〕彼岸七日間の眞中にあたる日、即ち春分・秋分の日。朝廷にては、この日皇靈祭を行はる。時正（ジシヤウ）。

ちゆうーにち 重日【名】陰陽道にて、陽が陽に重なり、陰に陰が重なるといふ日。故に百事みな相重なることを主として、善事に用ふれば吉事を重ね、惡事に用ふれば凶事を重ぬといふ。平安今日は、重日なりとてわたさず」

ちゆうーにふ 注入【名】『注の字の音、正しくは**ちゆ**』㊀そそぎ入るること。つぎこむこと。㊁〔哲〕『英Cramming』教育法の一。記憶と諳誦とによりて、知識の增加をはかること。（開發に對して）

ちゆうにふーさい 注入劑【名】『注の字の音、正しくは**ちゆ**』注射器を用ひて、體内に注入する藥劑の總稱。

ちゆうにふーしゆぎ 注入主義【名】〔哲〕『英Cramming principle注の字の音、正くは**ちゆ**』兒童教育上の一主義。注入㊁を教育法の本旨となすもの。（開發主義に對して）

ちゆうーにん 仲人【名】㊀なかだち。㊁仲裁人。中保。

おゆうーにん 住人【名】『住の字の音、正しくは**ちゆ**』㊀その土地にすまへる人。わが生れし地に居る人。㊁ある一地方に久しく住馴れて、家來も多く、かつ兵馬などをも貯ふる人。

おゆうーにん 重任【名】㊀重大の事に任ずること。重き役目。大任。㊁**ちようにん**（重任）に同じ。

ちゆうーぬき 中貫【名】貫板の一種。幅三寸三分乃至三寸六分・厚さ五分五厘乃至六分五厘にして、長さは大貫と同じく、二間または九尺なるもの。

ちゆうーねつ 中熱【名】㊀**ちゆうしよ**（中暑）に同じ。㊁體内の熱。しんねつ。㊂〔醫〕『獨Massiges Fieber』發熱の、輕熱と高熱との中間なるもの。

ちゆうねん 中年【名】㊀人の生ひ立ちのさかりの齡。三四十歳の頃。壯年。㊁中年より、年期奉公に入りたること、又その人。

ちゆうねんもの 中年者【名】中年より年期奉公に入りたるもの。（子養者（コヤガセ）に對して）

ちゆうのう 中農【名】中農地を有して、農夫を使役しながら、自身も共に農業に從事するもの。（大農・小農に對して）

ちゆうのうーしゆぎ 重農主義【名】〔經〕『英Physiocrats』第十八世紀の中頃、重商主義の反動として、佛國に起れる學說。重商主義が富國の道をただ商工業にありとせしに對し、土地の生産業殊に農業を重んじて、國本とし、商工業は單に既成の財の價格を增加するに止まり、財その物の分量を增加するものにあらず、土地の利用によりて、生産額を多からしむる時は、工業品等の需要加はり、延いて一般産業界に利潤あらしめ、その間に利益の調和を得べしと說けるもの。仰農主義。商農派。重農派。

ちゆうのうーせい 中農制【名】中農法を行ふ制度。（大農制・小農制に對して）

ちゆうのうーそしき 中農組織【名】〔經〕耕作地を中農地に區劃して、中農の經營によりて行ふ組織。（大農組織・小農組織に對して）

ちゆうのうち 中農地【名】中農の所有地、即ち面積の、大農地より狹く、小農地より廣き耕作地。（大農地・小農地に對して）

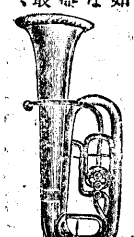
おゆうのうーは 重農派【名】〔經〕**ちゆうのうしゆぎ**（重農主義）に同じ。

ちゆうのうーはふ 中農法【名】中農組織の作法。（大農法・小農法に對して）

ちゆうーのーじ 中字【名】**ちゆうばら**（中腹）に同じ。〔俚語〕

ちゆうーのり 中乘【名】**ちうのり**（宙乘）に同じ。

ちゆうば（英Tuba）【名】西洋樂器の一。大なる喇叭の如き形をなし、管樂器中その形最大にして、



（ばうゆち）

その音は最低なり。絃樂器のグルベエス（Double bass）に對す。

「に同じ。

ちゆうば 中歯【名】**ひよりげ**（日和下駄）に同じ。

ちゆうばい 中媒・仲媒【名】なかうど。なかだち。蓉廼家彼のちゆうばいのよくいひおくれるなり」

おゆうばい 重杯・重盃【名】幾度も杯（サカヅキ）を重ねて、酒を飲むこと。

ちゆうーばいえふ 中胚葉【名】〔動〕『英Mesoblast』**ちゆうはいそう**（中胚層）に同じ。（內胚葉・外胚葉に對して）

ちゆうばいーくわ 蟲媒花【名】〔植〕『英Entomophilious flowers』昆蟲類により、他花受粉を遂ぐる花。香氣高く、葉色多くは美にして、これらの昆蟲類を誘ふに適す。（風媒花・鳥媒花・水媒花に對して）

ちゆうばいーしよくぶつ 蟲媒植物【名】〔植〕『英Entomophilious plants』蟲媒花を有する植物。（風媒植物・鳥媒植物・水媒植物に對して）

ちゆうばいーそう 中胚層【名】〔動〕『英Mesoblastic layer』多細胞動物の發生の初期に、內外二層の胚葉の分れたる後、その何れかより別に派生して、兩者の中間を占むるに至る胚層。筋肉・骨骼・血液・淋巴系・脾臟・腹膜・胸膜・心囊・泌尿生殖器等は、この物の細胞の分化分合等によりて生ず。中胚葉。中細胞層。

ちゆうーはう 中保【名】とりなしびと。仲裁人。仲人。

ちゆうーばう 廚房・厨房【名】『廚・厨の字の音、正しくは**ちゆ**』くりや。だいどころ。

ちゆうーばう 中方・中坊【名】**ちゆうげんぼふ**（中間法師）に同じ。太平記「山徒の召仕へし中方の者ども、太刀・長刀の鋒をととのへ、四脚の門より込入りて」

おゆうーはう 重砲【名】〔兵〕『英Heavy cannon』なるたけ彈丸を重くし、強き裝藥を用ひて、初速を大ならしめたる火砲。口徑九珊以上とす。（輕砲に對して）

おゆうーはう 重寶【名】大切なる寶物。貴重なる寶。

重寶を抱く者は夜行せず【句】大目的を抱く者はその身を大事にす。〔諺語〕

ちゆうばう 住房【名】『住の字の音、正しくは**ちゆ**』住むへや。平家「子の刻ばかり、眠しきりなるが故に、住房に歸りて打臥す」

おゆうはうさんなこりうむ 重酸硼那篤（當て字）【名】〔化〕**はうしやく**（硼砂）に同じ。

おゆうはうたい 重砲隊【名】重砲兵を以て編成する軍隊。

おゆうはうへい 重砲兵【名】〔兵〕要塞の衛戍として屯在する砲兵。舊稱、要塞砲兵。（日露戰爭後、今の名稱に改む）

おゆうはうへいかん 重砲兵監【名】教育總監部の職員。教育總監に隷し、重砲兵監部の長として、これを主理し、各重砲兵隊の教育上、其の進歩一齊の責に任ずるもの。

おゆうはうへいかんぶ 重砲兵監部【名】教育總監部の一部局。重砲兵監これを主宰す。

おゆうはうへいーしやげきがくかう 重砲兵射擊學校【名】**りくぐんちゆうはうへいしやげきがくかう**（陸軍重砲兵射擊學校）の略。

ちゆうはかせ 中博士【名】㊀**はかせ**（博士）㊁を見よ。㊁**せんけうし**（宣教使）㊁を見よ。

ちゆうはく 中白【名】中等なる白米。上白と下白との中間に位するもの。

ちゆうーばく 沖邊【副】深遠廣大なるさま。梁苑「佛法之沖邊、不可得而稱者也」

おゆうーばこ 重箱【名】食物を容れ、又は配物（ヨセモノ）などするに用ふる、四角なる扁き箱。大抵漆器にて、蒔繪など施し、同形のもの二箇以上五箇まで重なるが常なれど、又、一箇のものあり。ちゆう。

重箱で味噌を擂（す）るやう【句】すべて物は、各其の特異の用途定まりて、そのものに非ざれば、如何に立派なるも用にたちがたきをいふ。〔諺語〕

重箱の隅は杓子で拂へ【句】些細なる事まで穿鑿すべからざる譬。〔諺語〕

重箱の隅を楊子でほじくる【句】些細なる事までも、煩しく穿鑿（センサク）だてする譬。〔諺語〕

ちゆうばこーざかな 重箱肴【名】**ちゆうざか**

じ。

ちゅう-ふく 重複【名】**ちょうふく**(重複)に同じ。

おゆう-ふく 重服【名】おもき忌服。父母の忌服。(輕服(ケイフク)に對して)**ちゅうも**(重喪)

参照。千載、十月に、ちゅうふくになりてはべりけるまたの年の春」盛衰記「維盛朝臣は重服なりければ、つるばみの袍(ホウ)に衣冠にて、東門より参入」正徹「花園の有仁(アリヒト)の大臣、…御孫ながら御子の義なれば、重服を著させたまひけり」

おゆう-ふく-え 重複衣【名】〔佛〕『欝多羅僧(ウツタラソウ)の上に重ねて著るよりいふ』**そうかり**(僧伽梨)に同じ。

ちゅう-ぶくき 重服忌【名】服忌の重なる場合。重き服忌中に輕き服忌を受くるに當り、輕き服忌の日數が重き服忌の終る日數より餘る時は、その餘れる數だけ、引續きて服忌し、又輕き服忌中に重き服忌を受くる時は、その重きに遇ひたる日より數へて、重き服忌を受く。

おゆう-ふく-さいていかはせ 重複裁定爲替【名】**ちょうふくさいていかはせ**(重複裁定爲替)に同じ。

おゆう-ふく-せい 重複星【名】〔天〕**ちょうふくせい**(重複星)に同じ。

おゆう-ふく-にんしん 重複姙娠【名】〔醫〕**ちょうふくにんしん**(重複姙娠)に同じ。

おゆう-ふく-ふりかへ 重複振替【名】**ちょうふくふりかへ**(重複振替)に同じ。

おゆう-ふく-ほけん 重複保險【名】〔商〕**ちょうふくほけん**(重複保險)に同じ。

おゆう-ぶつ 重物【名】貴重なる物。ちょうぶつ。「督五」を見よ。

ちゅうぶ-ととく 中部都督【名】**ととく**(都督)に同じ。

ちゅうぶ-ととくぶ 中部都督部【名】都督部の一。中部都督の執務したる所。

ちゅうぶ-へうごゆんじ 中部標準時【名】〔地〕**ちゅうあうへうごゆんじ**(中央標準時)に同じ。

ちゅう-ぶん 忠憤【名】忠義の心よりしていきどほること。

ちゅう-ぶん 中分【名】一半分づつ分くること。「天下を中分す」二**ちゅうさい**(仲

ちゅうは

ちゅう-はんじ 中判事【名】一**はんじ**(判事)四を見よ。二**はんじ**(判事)四を見よ。

ちゅうはん-だち 中半太刀【名】『太刀にもあらず、刀にもあらざる中途半端なる太刀の義』通常の太刀よりも短く作りたる太刀。はんだち。

ちゅう-ばらへ 中祓【名】神事の罪穢を犯しし罪人に、その罪穢を拂ふために、祓を科し、その料物を出さしめしわざを、延暦二十年五月に、その犯罪の輕重によりて、大祓上祓中祓下祓の四等に分ちたるうちの第三等。大忌(オホイミ)・風神・鎭花(ハナシヅメ)・三枝(サイ)・鎭火(ヒシヅメ)・相嘗(アヒナメ)・道饗(チガヘシ)・平野・園韓神(ソノカラカミ)・春日等の祭事を闕怠し、物忌戸座(トク)・御火炬を殿し、物忌女を奸し、穢惡の事に觸れて、御膳所に預り、忌火等の祭の齋日、祝(ハフリ)・禰宜(ネギ)及び祭に預る神戸(ベ)の人を殿し、喪を弔し、病を問ふ等、六色の禁忌を犯す者に科せり。

ちゅう-ひ 厨婢・厨婢【名】くりやをんな。おさんどん。厨婦。みづしをんな。

ちゅうひ 忠婢【名】まめやかなる下女。

ちゅうひ 忠否【名】忠義なることと、忠義ならざることと。

ちゅうひ 中皮【名】〔生〕内胚葉の一部より成り、體腔の内面を被覆するもの。中葉。

ちゅうび 中微【名】王威家道などのなかごろ衰ふること。「見よ。

ちゅうひし 中祕史【名】ひし(祕史)二を見よ。

ちゅうひしうし 中菱牛【名】ひしうし(菱牛)を見よ。

ちゅうひしよ 中祕書【名】ひしょ(祕書)を見よ。

ちゅうひじりうし 中聖牛【名】ひじりうし(聖牛)を見よ。

ちゅうひつ 駐蹕【名】『駐の字の音、正しくはちゅう。蹕(ヒツ)を駐(ヒ)むる義。けいひつ(警蹕)參照』君主の行幸中、或地にとどまりたまふこと。駐蹕。

ちゅうびと 中人【名】酒造藏人の一。上人(カミビト)の下、下人(シモビト)の上に位し、役人(ヤクニン)の擔任の事務を補助するもの。

ちゅうびねり 中捻【名】あまり大裳裝にあらず、さりとてあまりに少なからず、中ぐらゐに捻ること。五人女「吉彌(キチヤ)笠に四つかはりのくけ紐を附けて、顏自慢に淺かづき、ぬき足、中びねりのあるき姿」

ちゅう-ひん 中品【名】中ぐらゐの品。

おゆう-びやう 重病【名】おもきやまひ。おほわづらひ。大病。大患。

ちゅう-びらき 中開【名】中ぐらゐに開くこと。半は閉ぢ、半は開くこと。浮世床「けたたましい麗を張りあげて、目などをちゆうびらきにしをって」

ちゅう-びろ 中廣【名】一**ごぜんひろ**(御前廣)に同じ。二三味線の駒の一臺の大廣よりは狹く、普通のよりは廣きもの。新内節などに用ふ。「に同じ。

ちゅう-ひろがり 中廣【名】**ちゅううけ**(中浮)

ちゅうふ 仲父・中父【名】父の兄弟の、伯父と叔父との間なるもの。「ふ男。

ちゅう-ふ 厨夫・厨夫【名】臺所のことを扱ふ男。**ちゅうひ**(厨婢)に同じ。

ちゅうぶ 鉛筒(英 Tube)【名】『もと單に管・筒の義』しぼりだし(擠出)に同じ。

ちゅうぶ 中風【名】そっちゅうぶ(卒中風)に同じ。

ちゅうぶ 中部【名】まんなかのところ。中央の部分。(上部・下部に對して)

おゆうふ 重夫【名】夫(フヅ)を替ふること。若風俗「近江國筑摩(マヅマ)の祭を見しに、…重夫の數ほど鍋をかづかせ」

ちゅうぶ-あふりか 中部亞弗利加【名】〔地〕『英 Central Africa』亞弗利加の中央スダン(Sudan)及びコンゴオ河の流域の總稱。大森林帶にして、氣候炎熱、降雨多し、リベリア(Liberia)及びエテオピヤ(Ethiopia)の二小獨立國介在す。「じ。

ちゅうぶ-ぶう 中風【名】**ちゅうぶ**(中風)に同じ。

ちゅうぶ-ふうたい 中風帶【名】掛物の風帶の、中の帛にて作りたるもの。

ちゅう-ふく 仲伏【名】三伏の一。夏至(ゲシ)後第四の庚(カノエ)の日。(初伏・末伏に對して)

ちゅう-ふく 中覆【名】(生)**ちゅうひ**(中皮)に同じ。

ちゅうふく 中腹【名】はんぷく(半腹)に同

ちゅうは

ちゅう-はんじ 中判事【名】一**はんじ**(判事)四を見よ。二**はんじ**(判事)四を見よ。

ちゅうはん-だち 中半太刀【名】『太刀にもあらず、刀にもあらざる中途半端なる太刀の義』通常の太刀よりも短く作りたる太刀。はんだち。

ちゅう-ばらへ 中祓【名】神事の罪穢を犯しし罪人に、その罪穢を拂ふために、祓を科し、その料物を出さしめしわざを、延暦二十年五月に、その犯罪の輕重によりて、大祓上祓中祓下祓の四等に分ちたるうちの第三等。大忌(オホイミ)・風神・鎭花(ハナシヅメ)・三枝(サイ)・鎭火(ヒシヅメ)・相嘗(アヒナメ)・道饗(チガヘシ)・平野・園韓神(ソノカラカミ)・春日等の祭事を闕怠し、物忌戸座(トク)・御火炬を殿し、物忌女を奸し、穢惡の事に觸れて、御膳所に預り、忌火等の祭の齋日、祝(ハフリ)・禰宜(ネギ)及び祭に預る神戸(ベ)の人を殿し、喪を弔し、病を問ふ等、六色の禁忌を犯す者に科せり。

ちゅう-ひ 厨婢・厨婢【名】くりやをんな。おさんどん。厨婦。みづしをんな。

ちゅうひ 忠婢【名】まめやかなる下女。

ちゅうひ 忠否【名】忠義なることと、忠義ならざることと。

ちゅうひ 中皮【名】〔生〕内胚葉の一部より成り、體腔の内面を被覆するもの。中葉。

ちゅうび 中微【名】王威家道などのなかごろ衰ふること。「見よ。

ちゅうひし 中祕史【名】ひし(祕史)二を見よ。

ちゅうひしうし 中菱牛【名】ひしうし(菱牛)を見よ。

ちゅうひしよ 中祕書【名】ひしょ(祕書)を見よ。

ちゅうひじりうし 中聖牛【名】ひじりうし(聖牛)を見よ。

ちゅうひつ 駐蹕【名】『駐の字の音、正しくはちゅう。蹕(ヒツ)を駐(ヒ)むる義。けいひつ(警蹕)參照』君主の行幸中、或地にとどまりたまふこと。駐蹕。

ちゅうびと 中人【名】酒造藏人の一。上人(カミビト)の下、下人(シモビト)の上に位し、役人(ヤクニン)の擔任の事務を補助するもの。

ちゅうびねり 中捻【名】あまり大裳裝にあらず、さりとてあまりに少なからず、中ぐらゐに捻ること。五人女「吉彌(キチヤ)笠に四つかはりのくけ紐を附けて、顏自慢に淺かづき、ぬき足、中びねりのあるき姿」

ちゅう-ひん 中品【名】中ぐらゐの品。

おゆう-びやう 重病【名】おもきやまひ。おほわづらひ。大病。大患。

ちゅう-びらき 中開【名】中ぐらゐに開くこと。半は閉ぢ、半は開くこと。浮世床「けたたましい麗を張りあげて、目などをちゆうびらきにしをって」

ちゅう-びろ 中廣【名】一**ごぜんひろ**(御前廣)に同じ。二三味線の駒の一臺の大廣よりは狹く、普通のよりは廣きもの。新内節などに用ふ。「に同じ。

ちゅう-ひろがり 中廣【名】**ちゅううけ**(中浮)

ちゅうふ 仲父・中父【名】父の兄弟の、伯父と叔父との間なるもの。「ふ男。

ちゅう-ふ 厨夫・厨夫【名】臺所のことを扱ふ男。**ちゅうひ**(厨婢)に同じ。

ちゅうぶ 鉛筒(英 Tube)【名】『もと單に管・筒の義』しぼりだし(擠出)に同じ。

ちゅうぶ 中風【名】そっちゅうぶ(卒中風)に同じ。

ちゅうぶ 中部【名】まんなかのところ。中央の部分。(上部・下部に對して)

おゆうふ 重夫【名】夫(フヅ)を替ふること。若風俗「近江國筑摩(マヅマ)の祭を見しに、…重夫の數ほど鍋をかづかせ」

ちゅうぶ-あふりか 中部亞弗利加【名】〔地〕『英 Central Africa』亞弗利加の中央スダン(Sudan)及びコンゴオ河の流域の總稱。大森林帶にして、氣候炎熱、降雨多し、リベリア(Liberia)及びエテオピヤ(Ethiopia)の二小獨立國介在す。

ちゅうぶ-ぶう 中風【名】**ちゅうぶ**(中風)に同じ。

ちゅうぶ-ふうたい 中風帶【名】掛物の風帶の、中の帛にて作りたるもの。

ちゅう-ふく 仲伏【名】三伏の一。夏至(ゲシ)後第四の庚(カノエ)の日。(初伏・末伏に對して)

ちゅう-ふく 中覆【名】(生)**ちゅうひ**(中皮)に同じ。

ちゅうふく 中腹【名】はんぷく(半腹)に同

ちゅうふ

じ。

ちゅう-ふく 重複【名】**ちょうふく**(重複)に同じ。

おゆう-ふく 重服【名】おもき忌服。父母の忌服。(輕服(ケイフク)に對して)**ちゅうも**(重喪)

参照。千載、十月に、ちゅうふくになりてはべりけるまたの年の春」盛衰記「維盛朝臣は重服なりければ、つるばみの袍(ホウ)に衣冠にて、東門より参入」正徹「花園の有仁(アリヒト)の大臣、…御孫ながら御子の義なれば、重服を著させたまひけり」

おゆうふく-え 重複衣【名】〔佛〕『欝多羅僧(ウツタラソウ)の上に重ねて著るよりいふ』**そうかり**(僧伽梨)に同じ。

ちゅう-ぶくき 重服忌【名】服忌の重なる場合。重き服忌中に輕き服忌を受くるに當り、輕き服忌の日數が重き服忌の終る日數より餘る時は、その餘れる數だけ、引續きて服忌し、又輕き服忌中に重き服忌を受くる時は、その重きに遇ひたる日より數へて、重き服忌を受く。

おゆうふく-さいていかはせ 重複裁定爲替【名】**ちょうふくさいていかはせ**(重複裁定爲替)に同じ。

おゆうふく-せい 重複星【名】〔天〕**ちょうふくせい**(重複星)に同じ。

おゆうふく-にんしん 重複姙娠【名】〔醫〕**ちょうふくにんしん**(重複姙娠)に同じ。

おゆうふく-ふりかへ 重複振替【名】**ちょうふくふりかへ**(重複振替)に同じ。

おゆうふく-ほけん 重複保險【名】〔商〕**ちょうふくほけん**(重複保險)に同じ。

おゆう-ぶつ 重物【名】貴重なる物。ちょうぶつ。「督五」を見よ。

ちゅうぶ-ととく 中部都督【名】**ととく**(都督)に同じ。

ちゅうぶ-ととくぶ 中部都督部【名】都督部の一。中部都督の執務したる所。

ちゅうぶ-へうごゆんじ 中部標準時【名】〔地〕**ちゅうあうへうごゆんじ**(中央標準時)に同じ。

ちゅう-ぶん 忠憤【名】忠義の心よりしていきどほること。

ちゅう-ぶん 中分【名】一半分づつ分くること。「天下を中分す」二**ちゅうさい**(仲

裁)に同じ。狂言、禁野「一身どもは、弓矢で射殺さうと申さう。こなた、ちゆうぶんに入って」 ㊂中等なる身分。

ちゆうぶん 重文【名】〔語〕**ちようぶん**(重文)に同じ。

ちゆうふーやみ 中風病【名】**ちゆうきやみ**(中風病)に蒟蒻(コンニャク)持たす【句】體がぶるぶる震ふ譬にいふ。

ちゆうふらり 中ぶらり【名】彼にもつかず、これにもつかぬこと。ちゆうぶらりん。〔俚語〕〔同じ。〕

ちゆうふらりん 中ぶらりん【名】前條に同じ。

ちゆうふる 中古【名】やや古くなりたること、又その物。

ちゆうへい 駐兵【名】『駐の字の音、正しくは**ちゆ**』兵を一地點にとどむること、又、とどまれる兵。頓在せる兵

ちゆうへい 中米【名】〔地〕**ちゆうあうあめりか**(中央亞米利加)の略。

ちゆうへいきん 重屏禁【名】〔法〕屏禁の一。一定期間、罰室内に晝夜屏居せしむること。(輕屏禁に對して)

ちゆうべつがは 忠別川【名】〔地〕石狩國上川郡に在る川。源を忠別嶽に發し、西北流して、美瑛川と合し、石狩川に入る。長さ十七里二十三町。

ちゆうべつだけ 忠別嶽【名】〔地〕『前條を見よ』石狩國上川郡にある山。北海道の最高山。圭峯は高さ七七三九尺。

ちゆうへん 中篇・中編【名】上編と下編との間にあるもの。(上篇・下篇に對して)

ちゆうへん 中邊・中篇【名】程よきこと。中ぐらゐ。なかほど。

ちゆうべん 中辨【名】㊀辨官の一。大辨の下、少辨の上に位し、左・右の二つに分れたり。 ㊁明治二年に太政官に置かれし職員。大辨の下、少辨の上にありし勅任官。

ちゆうべん 重瓣【名】〔植〕花冠の花瓣が相集りて、内外二輪を成すこと、又その花冠。花中の雄蕊の變化して、花瓣狀を呈するもの多し。(單瓣に對して)

ちゆうべんくわ 重瓣花【名】〔植〕重瓣の花冠を具ふる花。(單瓣花に對して)

ちゆうべんむし 中辨務使【名】**べんむし**(辨務使)を見よ。

ちゆうべんね 重瓣胃【名】〔動〕『英 Omasum』反芻(ハンスウ)獸類の胃の一部。上は蜂巢胃の上部に在る溝を以て食道に連なり、下は直ちに皺胃に續く。蜂巢胃より反芻して、再び咀嚼せられたる食物を受けて消化し、皺胃に送る。

ちゆうべり 中緣【名】軸物の大和表具にて、天地の間にありて、本文を圍める部分。一文字と風帶とに次ぎて、良質なる切(キレ)を用ふるを常とす。ちゆう。

ちゆうほ 中埔【名】〔地〕臺灣嘉義廳嘉義東堡の首邑。

ちゆうぼいん 重母音【名】〔語〕『英 Diphthong』二個の母音の、親密に結合して、一シラブルに發音せらるるもの。例へば、愛(イ)の「アイ」、家(イ)の「イエ」の類の、普通の談話の際に於ける發音の類。但し一取離して明晰に發音すれば、二シラブルとなるが故に、重母音にはあらず。二重母音。

ちゆうほう 重奉【名】力を盡して、主君に仕ふること。

ちゆうぼうしよ 中奉書【名】奉書紙の一種。大いさ大奉書に次ぐもの。その寸法は、縦一尺二寸・横一尺六寸七分。あひまき。

ちゆうほうてん 住峯天・住峰天【名】〔佛〕『住の字、正しくは**ちゆ**』三十三天の一。忉利天の西方にあり。**たうりてん**(忉利天)參照。

ちゆうほうもんこ 中峯門・中峰門徒【名】〔佛〕**こぜんは**(古先派)に同じ。

ちゆうぼおん 重母音【名】〔語〕**ちゆうぼいん**(重母音)に同じ。

ちゆうぼく 忠僕【名】忠義なるしもべ。

ちゆうぼくぐわや 忠僕茶屋【名】山城國京都清水寺の賽路(サイロ)の傍にある茶屋。

ちゆうほん 中本【名】㊀小菊判の書籍。 ㊁『小菊紙に摺りて、其の大きさ半紙本と、小本との中間にあるを以て名づく』大半紙二つ切の大きさの本にて、德川時代に出版せし小說。繪少なく、一二卷を一篇とす。「膝栗毛」「浮世風呂」「梅暦」等は皆これに屬す。 ㊂現實社會の描寫を主としたる江戸時代の小說。滑稽本・人情本などの總稱。

ちゆうぼん 注本・註本【名】『注・註の字の音、正しくは**ちゆ**』註釋を附したる書物。

ちゆうぼん 中品【名】〔佛〕九品の内の中位にある三品(上中品・中中品・下中品)の總稱。

ちゆうぼん 重犯【名】**ちゆうはん**(重犯)〔に同じ。〕

ちゆうほんざん 中本山【名】**ほんざん**(本山)を見よ。

ちゆうほんみ 中本身【名】衣服の裁方の一。本身に次ぐもの。いつつみ。

ちゆうまつーひれい 中末比例【名】〔數〕『英 Extreme and mean ratio』或數量と共の一部分との比例中數が殘餘の部分と相等しき時、其の數量は中末比例に分たれたりと稱す。例へば、AB:AC=AC:CB の場合A・B・Cに於て、中末比例に分たれたりといふが如し。

ちゆうまつやく 中末藥【名】〔醫〕日本藥局法に定めたる第五號の篩(フルヒ)、卽ち長さ一センチメエトルにつき、二十六箇の篩眼を有する篩にて漉したる粉藥。

ちゆうまはし 中廻【名】能樂の廻節(マハシ)の一種。上を直に持ち、下は當りさげにすること。

ちゆうみ 中巳【名】三月の中の巳の日。ちゆうし。**じやうみ**(上巳)參照。

中巳の祓【句】古昔、中巳の日に行ひし祓。東鑑「將軍家中巳御祓、爲親朝臣奉仕之」

ちゆうみせ 中店【名】㊀中ぐらゐの店。 ㊁吉原の游廓にて、中等の妓樓。まじり。

ちゆうみん 中民【名】中等の人物。

ちゆうみん 住民【名】『住の字の音、正しくは**ちゆ**』その地に住まへる民。居民。

ちゆうむかし 中昔【名】**なかむかし**(中昔)に同じ。

ちゆうむしやう 中務省【名】**なかつかさしやう**(中務省)に同じ。

ちゆうめ 中馬【名】古、馬をその質により、三等に分ちたる内の中等のもの。

ちゆうめいじ 中名辭【名】〔哲〕**ばいじ**(媒辭)に同じ。

ちゆうめん 柱面【名】〔鑛〕『英 Prismatic faces 柱の字の音、正しくは**ちゆ**』晶面の一。主軸に平行し、他の二軸に會するもの。(錐面・卓面に對して)

ちゆうめつ 誅滅【名】『誅の字の音、正しくは**ちゆ**』殺したやすこと。うちほろぼすこと。せめほろぼすこと。

ちゆうも 重喪【名】父母の喪。古、この時には、酒を飲まず、肉を食はず、弔せず、賀せず、音樂を作さず、嫁娶せず、兄弟財を分たざるを法とせり。**おうぶく**(重服)參照。

ちゆうもく 注目【名】『注の字の音、正しくは**ちゆ**』目をそそぐこと。目をつくること。注視。囑目。著目。「すべき物。

ちゆうもつ 重物【名】大切なる物。大事にと。

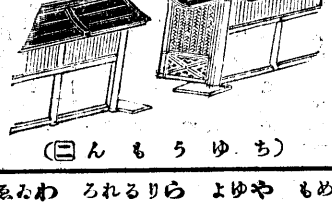
ちゆうもとゆひ 中元結【名】**ひらもとゆひ**(平元結)に同じ。

ちゆうもの 中物【名】㊀中等なる品質の物。 ㊁中等の大いさなる物。 ㊂**かうやがみ**(高野紙)に同じ。

ちゆうものみ 中物見【名】侍大將・番頭が數十騎を引具してなす斥候。

ちゆうもみ 中紅【名】中等のもみ。一代男「女郎は、湯衣染(ユカタ)の帷子(カタビラ)に中紅の脚布(キヤ)をわざと見せかくる」若風俗「加賀絹に中紅の裏を附け」

ちゆうもん 中門【名】㊀貴人の邸内の外門と寢殿との間に設けたる門。「中門の廊」參照。源氏「御車よせたるちゆうもん」 ㊁神社の本殿と拜殿との中門、又寺の總門の中にある門。謠曲(雷電)「滿山護法一列し、中門の扉をたたきけり」



(㊁ んもうゆち)

中門の廊【名】對屋(タイ)の前面より直角に造り出して、釣殿・泉殿に通ふやうにせる廊。對面の席又は祇候(シコウ)の座に供する處にて、その中央に中門を設けて通行に便ならしめたり。中廊。增鏡「中門の廊に上﨟給へれば」

ちゆうもん 注文・註文【名】一『注・註の字の音、正しくは**ちゆ**』注進の文書。二文書。書付。盛衰記「黃紙(ワウ)に書きたる文一巻あり。その文に、座主の次第を注(シル)したり。…かの箱を開いて、その注文を見るに」三希望・願望・申請等を箇條書にせる書附。四物品供給の請求。あつらふこと。あつらへ。五あつらへ物の條件、又その書付。六進物を箇條書にしたる書付。七斯くあれかしと望みて、その結果を待つこと。期待。八掛金請求の書付。〔中國邊の方言〕

ちゆうもん-がき 注文書・註文書【名】『注・註の字の音、正しくは**ちゆ**』物品などを注文する事項を書記すこと、又その書き物。ちゆうもんしよ。

ちゆうもん-きき 注文聞・註文聞【名】『注・註の字の音、正しくは**ちゆ**』**ちゆうもんとり**(注文取)に同じ。

ちゆうもん-ぐち 中門口【名】中門の入口。太平記「はや中門口打つ程になりぬれば、鼠戸の口も塞りて入るべき方もなし」

ちゆうもん-さき 注文先・註文先【名】『注・註の字の音、正しくは**ちゆ**』注文せし先方。(買手なるにも賣手なるにもいふ)

ちゆうもん-しや 注文者・註文者【名】『注・註の字の音、正しくは**ちゆ**』一注文する者。注文したる人。二〔法〕請負契約當事者の一方にて、仕事の結果に對し報酬の義務を負ふもの。

ちゆうもん-じやう 注文狀・註文狀【名】『注・註の字の音、正しくは**ちゆ**』次條に同じ。

ちゆうもん-しよ 注文書・註文書【名】『注・註の字の音、正しくは**ちゆ**』**ちゆうもんがき**(注文書)に同じ。

ちゆうもん-ちがひ 注文違・註文違【名】『注・註の字の音、正しくは**ちゆ**』まちがへて注文すること。

ちゆうもん-ちやう 注文帳・註文帳【名】『注・註の字の音、正しくは**ちゆ**』注文先の氏名・住所、その注文品の名稱・數量・年月日・代價、及びこれが引渡の條件・期限など種類・代價を控へおく帳簿。注文控帳。

ちゆうもん-とり 注文取・註文取【名】『注・註の字の音、正しくは**ちゆ**』得意先へ注文を聞きにゆくこと、又その人。注文聞き。

ちゆうもん-ながれ 注文流・註文流【名】『注・註の字の音、正しくは**ちゆ**』注文を受けて、製作又は仕入れたる物品の、注文主に引取られずして、そのままになること、又その物品。

ちゆうもん-ひかへちやう 注文控帳・註文扣帳【名】『注・註の字の音、正しくは**ちゆ**』**ちゆうもんちやう**(注文帳)に同じ。

ちゆうもん-ひん 注文品・註文品【名】『注・註の字の音、正しくは**ちゆ**』次條に同じ。

ちゆうもん-もの 注文物・註文物【名】『注・註の字の音、正しくは**ちゆ**』注文したる物。注文せられたる物。注文品。

ちゆう-もやう 中模樣(高裾模樣)【名】**たかすそもやう**に同じ。

ちゆう-や 中野【名】野原のなか。のなか。

ちゆう-や 中夜【名】一よなか。夜中。半夜。夜半。中夕。中宵。二子・丑の二刻、即ち今の午後十時頃より翌日午前二時頃まで。三〔佛〕初夜と後夜(ゴヤ)との間の時。(初夜・後夜に對して)**ろくじ**(六時)參照。

ちゆう-やう 仲陽【名】**ちゆうしゆん**(仲春)に同じ。

ちゆうやう-きん 蟲樣筋【名】〔醫〕『羅Musculi lumbricales』手筋の中央部にある四箇の筋。指骨の第一節を屈折せしむる作用をなす。二足蹠筋(ソクセキキン)中央部の一筋。各趾の第一節を屈折せしむる作用をなす。

ちゆうやう-すゐ 蟲樣垂【名】〔動〕『英Vermiform appendix』盲腸の下端に垂下する尾狀物。中空にして、長さ三寸内外。人類の外は、類人猿にのみ存す。その作用は未だ明かならず。蟲樣突起。

ちゆうやう-とつき 蟲樣突起【名】〔動〕前條に同じ。

ちゆうやうとつきえん 蟲樣突起炎【名】〔醫〕『羅Appendicitis』盲腸の周圍又は回腸に起る炎症。

ちゆう-やく 釉藥【名】**うはぐすり**(上藥)に同じ。

ちゆう-やく 重譯【名】**ちようやく**(重譯)に同じ。

ちゆう-やく 重厄【名】一重大なる災厄。二陰陽家にて、一生に於ける重き厄年なりといふもの。男は四十二歳、女は三十三歳。大厄年。大厄。

ちゆう-やく 重役【名】一重き役目、又その役目をつとむる人。二諸侯の家の家老。三年寄・用人などの總稱。おもやく。三銀行・會社などの社長・取締役・監査役等使用人に非ざるものの總稱。

ちゆうやく-くわいぎ 重役會議【名】銀行・會社などの重役が、その擔當せる事務上につきて行ふ會議。

ちゆうやく-くわん 中譯官【名】**やくくわん**(譯官)二を見よ。

ちゆうやく-しや 中役者【名】中通(チウドホリ)の俳優。**いたのま**(板間)三參照。

ちゆう-やまだか 中山高【名】山高帽子の、中ぐらゐの高さなるもの。

ちゆうや-りう 忠也流【名】劍術の一流。伊藤典膳忠也を流祖となすもの。

ちゆうゆ 中油【名】〔化〕『輕質なる油の意にて、最も輕質なる揮發油を含まざるによりていふ』**けいゆ**(輕油)二に同じ。

ちゆうゆ 重油【名】〔化〕『英Heavy oil』又Thick oil』原油又はコオルタアルを分餾する時、三百度乃至三百六十度の温度にて餾出する粘質の部分。比重一・二乃至一・三、青綠色又は黑褐色を呈し、汽船・汽車・軍艦等の燃料とし、又機械油・石油瓦斯等製造の原料に供せらる。(輕油に對して)

ちゆう-ゆう 忠勇【名】一忠義にして、且つ勇氣あること。二忠義と勇氣と。

ちゆうゆう-けんしやうくわい 忠勇顯彰會【名】明治三十七八年戰役以後の各戰役に參加せる軍人・軍族の忠勇義烈なる行動等を傳して刊行し、又はその他の方法により顯彰するを目的とする社團法人。明治三十七年の創立にして、總裁には皇族を推戴す。

ちゆう-ゆう 中搖【名】能樂の搖節(ユスリ)の一種。

ちゆうよう 中庸【名】一片寄らずして、常にかはらぬこと。中正にして平易なること。二材能の尋常なること。中材。三〔書〕四書の一。中庸不偏の德につきて說けるもの。一卷。支那子思の著といへど、實は秦末漢初の儒者の著ならんといふ。とも禮記中の一篇なりしを、朱子これを單行本とせり。

ちゆう-よう 重用【名】おもき地位を與へて用ふること。

ちゆうよう-はつき 中庸發揮【名】〔書〕子思の中庸に詳細なる註を施し、且つ自家の見識を發揮せるもの。一卷。伊藤仁齋の著。

ちゆうらい-まい 重來舞【名】**しきて**(敷手)に同じ。

ちゆう-らう 柱廊【名】〔建〕『柱の字の音、正しくは**ちゆ**』**ころねざし**に同じ。

ちゆう-らう 中老【名】一初老より一層年寄りたる人、即ち五六十歳の人。(宿老に對して)二武家時代の重臣の一。鎌倉・室町兩幕府時代にては、幕府及び關東管領の引付衆をいひ、豐臣時代には、五大老と五奉行との間に位し、定員三人なりしより三中老の稱ありき。又足利の時代及び德川時代の諸侯の家老の次席にも、この稱ありたり。小年寄。

ちゆうらう 中廊【名】〔建〕『中門の廊』の略。

ちゆうらうしやう 中郎將【名】支那秦代以後唐代以前に於て、殿門宿衛の事を掌りしもの。五官中郎將・左右中郎將の三あり、後に虎賁中郎將・東西北中郎將等あり。

ちゆうらうぶん 中老分【名】**からうれつ**(家老列)に同じ。

ちゆうらそつ 中邏卒【名】らそつ(邏卒)二を見よ。

ちゆうらふ 中臈【名】一臈の中位なるもの。(上臈・下臈に對して)二**ちゆうらふによう**ばう(中臈女房)の略。源氏「かたちよき名とりたる、ところどころのちゆうらふの人なり」三おなか(御中)三に同じ。四

江戸幕府の大奥の女中の一。上臈・年寄などの下に位し、君側に侍せしもの。中老。㊁明治二十年に制定せられし宮中の女官。小上臈の下、下上臈の上位にあり。

ちゅうらふ 蟲蠟【名】いぼたらふ(蟲白蠟)に同じ。

ちゅうらふがしら 中臈頭【名】㊀おなかがしら(御中頭)に同じ。㊁徳川時代、大奥に仕へし女中。中臈の頭にして重役。

ちゅうらふずゐじん 中臈隨身【名】近衛の舎人(とねり)の中の頭だちたるもの八人を選びて召具せしもの。番頭(ばんとう)。

ちゅうらふだち 中臈立【名】おなかだち(御中立)に同じ。

ちゅうらふにようばう 中臈女房【名】みやづぼ(命婦)の異稱。(上臈女房・下臈女房に對して)

ちゅうらん 駐鑾【名】『駐の字の音、正しくはちゅ』行幸の途中、一時鑾輿を駐(とど)めたまふこと。駐蹕。駐蹕。「同じ。

ちゅうらん 重攢【名】ちょうらん(重攢)に同じ。

ちゅうり 重利【名】㊀おもき利益。㊁ふくり(複利)に同じ。(單利に對して)

ちゅうりう 中流【名】㊀川の眞中。かはなか。(上流・下流に對して)㊁中等の生活をなす人人。(上流・下流に對して)

中流に船を失へば、一壺千金【句】『龍冠子に「中河失レ船、一壺千金、貴賤無レ常時使レ物然ことあり。流又河に作る』壺は瓠なり、壺は廉價なれども、難船せし場合には、人命を濟ふを得べしといふこと。〔諺語〕太平記「中流に船を覆して、一壺の浪に漂ひ、暗夜に燈消えて、五更の雨に向ふがごとし」

中流の砥柱(ちゅうちう)【句】『支那の砥柱山は、禹の黄河を開鑿して、水を通ぜしめたるところ。河南省河南府陝州の東四十清里に在り、河水分れて流れ、この山水中に屹立して、柱の如くに見ゆるよりいふ』汚濁の中に獨立して、人の儀表となる者の譬。

ちゅうりうさん 重硫酸【名】〔化〕濃硫酸に液狀酸化硫黄を加へて得る、褐色・發煙性の酸。通常、油狀の液體にして、純粹なるものは結晶を成す。

ちゅうりうしゃくわい 中流社會【名】上流と下流との中間の地位に在る社會。中流の社會。中等社會。(上流社會・下流社會に對して)

ちゅうりく 誅戮・誅僇【名】『誅の字の音、正しくはちゅ』罪をただして殺すこと。罪ある者を殺すこと。誅殺。

ちゅうりつ 中立【名】㊀中正の道に立ち、いづれにも片寄らぬこと。㊁何れにも味方せぬこと。よらずさはらず。「中立不偏」

ちゅうりつ 仲立【名】㊀中間の位置に立つこと。㊁ちゅうかい(仲介)に同じ。

ちゅうりつかう 中立港【名】㊀中立國の領域内に在る港。㊁〔法〕國際條約により、局外中立の地位に置かれたる港。

ちゅうりつきそく 中立規則【名】〔法〕『英 Neutrality laws』局外中立に關する規則。戰時法規の一部を成し、國際法たる性質を有する國際的中立規則と、その國内にのみ効力ある國内的中立規則とあり。

ちゅうりつぎむ 中立義務【名】〔法〕『英 Neutral duties』局外中立國及び中立人の義務。局外中立國の義務は、國際法上の規定の慣行に基き、交戰國の雙方に對し、公平を維持し、又直接戰爭に關係ある一切の行爲を爲さず、又爲すことを許さざる回避の義務あり。又中立人の義務は、その船舶が公海又は交戰國領海内に於て、交戰國の軍艦の臨檢、その他の捕獲權に服すること、及び交戰國の有効に設定せる封鎖を尊重すること等なり。

ちゅうりつくわ 中立貨【名】次條に同じ。(敵貨に對して)

ちゅうりつくわぶつ 中立貨物【名】〔法〕『英 Neutral goods』海上捕獲法に於て、中立性を有する貨物。いかなる貨物を中立貨物となすかに關し、英・佛の二主義に分かる。前者は中立國籍を有するものに屬する貨物を稱し、後者は原則として、中立國に住所を有する者の貨物を中立貨とするも、其の貨物が敵國の産物なるときは、敵貨とす。

ちゅうりつけん 中立權【名】〔法〕『英 Neutral right』中立國及び中立人の權利。中立義務により、制限せられざる限りは、交戰國との關係に於て、平時と同一なるものなり。即ち中立國は、交戰國をして、中立侵害となる可き行爲をなさしめず、又自ら中立違反とならざる範圍にて、交戰國と平時と等しく、通商其の他の關係を持續するを得ること、中立人の權利は、中立人として、敵對行爲の外にあること、即ち敵國人民と同一の取扱を受けざる權利。

ちゅうりつこく 中立國【名】『英 Neutral states』戰爭に關係せぬ國。條約に基きて、常に且つ一般に戰爭に關係せぬ國、即ち永久局外中立國と、その國の自由意志に基きて、特定の戰爭にのみ關係せぬ普通の中立國との別あり。

ちゅうりつし 中律師【名】〔佛〕りっし(律師)を見よ。

ちゅうりつじん 中立人【名】中立國の人民。中立性を有する人民。

ちゅうりつすゐ 中立水【名】〔法〕國際條約によりて、局外中立の地位に置かれたる河川湖沼・江灣など。

ちゅうりつせい 中立性【名】〔法〕局外中立たる性質。交戰國との關係にて、平常と同一の地位にある性質。

ちゅうりつせん 中立船【名】局外中立國の船舶。中立性を有する船舶。

ちゅうりつせんしょう 中立船證【名】『英 Sea letter』中立國の商船の船長が、その國の政府より中立船たる證として交付せらるる文書。

ちゅうりつたう 中立黨【名】ちゅうりつは(中立派)に同じ。(中立派)に同じ。

ちゅうりつち 中立地【名】『英 Neutral territory』㊀中立國の領域たる土地。㊁國際法によりて、局外中立の地位に置かれたる土地。中立地帶。「同じ。

ちゅうりつちたい 中立地帶【名】前條に同じ。

ちゅうりつにん 中立人【名】なかだちにん(仲立人)に同じ。

ちゅうりつにんくみあひ 中立人組合【名】〔法〕官許を受けたる仲立人十人以上の團體。

ちゅうりつは 中立派【名】何れの黨派にも屬せざる一派。中立せる黨派。中立黨。

ちゅうりつはふき 中立法規【名】『英 Neutrality laws』局外中立に關する國際法上の規定。

ちゅうりっぷ 《英 Tulip》【名】〔植〕百合(ゆり)科に屬する多年生の草。地下に球莖を有す。地上莖は水仙に類し、單一なり。葉は披針形・平行脈にして、花は莖頂に單生す。初夏の頃開花す。種類多くして、花色又多樣なり。原産は西洋、觀賞用として栽培す。鬱金香。

ちゅうりはふ 重利法【名】〔數〕ふくりはふ(複利法)に同じ。

ちゅうりふ 中立【名】ちゅうりつ(中立)に同じ。

ちゅうりふ 仲立【名】ちゅうりつ(仲立)に同じ。

ちゅうりん 中林【名】〔農〕『獨 Mittelwald』喬林と矮林との混合せる森林。

ちゅうりんさん 重燐酸【名】〔化〕せうりんさん(焦燐酸)に同じ。

ちゅうりんてん 住輪天【名】〔佛〕『住の字の音、正しくはちゅ』三十三天の第二十九天。忉利天(とうりてん)の南方に在り。

ちゅうりゃう 忠良【名】㊀忠義なる人と善良なる人と。㊁忠誠にして善良なることと、又その人。「忠良なる臣民」

ちゅうりゃう 柱梁【名】『柱の字の音、正しくはちゅ』㊀はしらと、うつばりと。㊁『はしらとうつばりとの家の構造に缺くべからざるに譬へていふ』重要視せらるる人。柱石。柱棟。

ちゅうりゃう 重量【名】㊀おもさ。おもみ。かけめ。㊁〔理〕『英 Weight』物體が地球の重力に引かれて起る力の分量。質量の大なるほど重く、地球の中心を離るるに從ひて輕くなる。(輕量に對して)

ちゅうりゃうふへんのていりつ 重量不變の定律【句】〔理・化〕「物質不滅の定律」に同じ。

ちゅうりゃうほぞんのていりつ 重量保存の定律【句】〔化〕「質量不變の定律」に同じ。

おゆうりやうかんだんけい 重量寒暖計【名】『英 Weight thermometer』寒暖計の一種。玻璃筒の一端は密閉せられ、一端は僅かに毛細管をなし、水銀を盛れるもの。温度を測定せんとする場所に横置するとき、水銀膨脹して、毛細管より流出する量を秤量し、温度を算せず。

おゆうりやうくわぶつ 重量貨物【名】重量の大なる貨物。おもに。

おゆうりやうとん 重量噸【名】せきとんすう(積噸數)を見よ。

おゆうりやうひん 重量品【名】〔商〕運賃を計算するに當り、重量を以て計算する物品。(輕量品に對して)

おゆうりやうぶんせき 重量分析【名】『英 Gravimetric analysis』定量分析の一方法。化學反應、電氣分解、蒸溜、溶解、抽出、透析等の方法により、其の成分を分離し、天秤にて測定するもの。(容量分析に對して)

ちゆうりやく 中略【名】他の文言を引用する場合に、その中ほどの不用なる部分を省略すること。(上略、下略に對して)

ちゆうりよ 中呂【名】■(音)ふにりつ(十二律)を見よ。■陰暦四月の異稱。

おゆうりよ 住侶【名】『住の字の音、正しくはぢゆ』その寺院の中に住居する僧侶。住僧。

おゆうりよく 重力【名】■大なるちから。重き壓力。■〔理〕『英 Gravitation』地球が地球上の諸物體に及ぼす引力。おもりやう(重量)■參照。

おゆうりよくするしや 重力水車【名】水に作用する重力、即ち水の重さを利用したる水車。古來、我が國にて、一般に使用し來れるもの。

おゆうりよくたんゐ 重力單位【名】〔理〕『英 Gravitational unit』重力を計るに標準とする力の單位。例へば、一ポンドの力、一貫の力などの類にて、地球の形狀が眞正なる球ならざるため、重力は場所により、少しづつの差異あれども、實用上には、これを標準として十分なる場合多し。重さの單位。(絶對單位と區別していふ)

おゆうりよくでんち 重力電池【名】『英 Gravity cell』ダニエル(Daniel)電池の變形、即ちダニエル電池の素燒筒を除けるもの。

ちゆうる 中流【名】■古、流刑を、罪の輕重によりて、三等に別ちたるうちの、中等のもの。延喜式には、信濃、伊豫等の國に流さるるをいひ、その後變遷ありて、一定せず。(遠流(ヲンル)、近流(キン)に對して)■〔佛〕『衆生は、煩惱のために、生死(シヤウジ)の中流にあるよりいふ』ぼんなう(煩惱)の譬。

ちゆうるい 中靈【名】いんきやう(陰莖)の異稱。

おゆうるい 重嶺【名】ちようれい(重嶺)に同じ。

ちゆうるいじん 中伶人【名】れいじん(伶人)■を見よ。

ちゆうるうちやう 中寮長【名】れうちやう(寮長)■を見よ。

ちゆうるつ 忠烈【名】忠義のあつきこと。極めて忠なること。

ちゆうるん 駐輦【名】『駐の字の音、正しくはちゆ』ちゆうひつ(駐蹕)に同じ。

ちゆうるん 注連【名】『注の字の音、正しくはちゆ』しめ。しめかざり。しりくめなは。七五三。

ちゆうるん 柱聯【名】『柱の字の音、正しくはちゆ』はしらかけ。はしらかくし。

ちゆうれん 中聯【名】〔文〕律詩の八句の中にて、第三・四・五・六の四句、即ち前聯と後聯との總稱。

おゆうれん 住蓮【名】〔人〕淨土宗の僧。東大寺の維那實遍の子。法然の弟子。安樂と共に洛東鹿谷(ダンヂ)に念佛會を修したる時、鳥羽上皇の宮女松蟲・鈴蟲の二人これに隨喜して、尼となれるため、上皇の逆鱗に觸れ、元永元年斬らる。

ちゆうろ 中呂【名】ちゆうりよ(中呂)に同じ。

ちゆうろ 中路【名】■道路の中央。中道。中途。■事物のなかほど。中途。中道。半途。■大寶令の制にて、朝使の往來の多少を標準として驛路を三等に分ちたるうちの第二等。東海道及び東山道これなり。(大路、小路に對して)

ちゆうろく 中肋【名】〔植〕『英 Midrib』葉の葉身の中央を縱走せる太き脈。中肋脈。

おゆうろく 重祿【名】多き知行。たかき扶持。高祿。大祿。「を見よ。

ちゆうろくじ 中錄事【名】ろくじ(錄事)四

ちゆうろくみやく 中肋脈【名】〔植〕ちゆうろく(中肋)に同じ。

ちゆうろん 中論【名】〔書〕ちゆうくわんろん(中觀論)の略。

ちゆうわ 中輪【名】紋所などの周圍の輪の、中ぐらゐの太さなるもの。

ちゆうわ 中和【名】■氣候また人の性質などの、程よくおだやかなること。溫和。正統記「萬物混然として相離れず、これを混沌といふ。その後、輕く清き物は天となり、重く濁れる物は地となり、中和の氣は人となる。これを三儀といふ」■性質相異なる物の相合して、各その特性の無くなること。■〔理〕『英 Neutralization』その量相等しき陰陽兩電氣の、導線を通じ、若しくは絕緣體を破りて相合一し、帶電現象の消失すること。即ち電位差の消失すること。四〔化〕『英 Neutralization』酸性物と鹽基性物と適當に混じて、兩者の特性消滅し、中性の物質となること。えん(鹽)參照。

おゆうわぐんじん 重横陣【名】〔兵〕艦隊の陣形の一。横陣にして、數列なるもの。小隊横陣。小隊横陣。

ちゆうわきざし 中脇指【名】中ぐらゐの長さなる脇指。(大脇指・小脇指に對して)若風俗「昔指(ムカシザシ)の中脇指」武家義理物語「鮫鞘の中脇指常住反(ツネゾリ)返して、目に角(カド)を入れ」

ちゆうわく 中枠【名】わく(枠)三を見よ。

ちゆうわねつ 中和熱【名】〔化〕『英 Heat of neutralization』酸と鹽基との中和に際して發する熱。

ちゆうわもん 中和門【名】内裏中和院の東にある外門。大内裏圖によれば、中和院正面の内門なる中門及び南朝院の昭慶門に對する宮城門をいふ。ちゆうくわもん。

ちゆうわもんゐん 中和門院【名】後陽成天皇の女御。後水尾天皇の母。藤原前久の三女にて、御名は前子、寛永七年薨ず。ちゆうくわもんゐん。

ちゆうわゐん 中和院【名】平安城の大内裏に在りし殿の一。内裏の西、眞言院の東に位し、新嘗祭・神今食(ジンコン)の式等、天神・地祇の御親祭を行はせられし所。正殿を神嘉殿といへり。ちゆうくわゐん。中院。神今食院(ジンコンヰン)。

ちゆうゐ 中位【名】■中正の位。中樞の地位。■位附の中程なるもの。中等の地位。一代女「婬婦中位」

おゆうゐ 中尉【名】ねくわん(尉官)を見よ。

おゆうゐ 住位【名】『住の字の音、正しくはおゆ』(佛)てんさうちゆうゐ(傳燈住位)の略。高位。

おゆうゐ 重位【名】貴きくらゐ。高位。

おゆうゐ 重圍【名】ちようゐ(重圍)に同じ。

ちゆうゐこうちやう 中尉工長【名】たいゐこうちやう(大尉工長)を見よ。

ちゆうゐん 中院【名】■法皇の同時に多くあらせられたる時、本院の次の御方を申す。なかのゐん。(本院・新院に對して)■齋宮の寮頭以下の役人の詰る所。(内院・外院に對して)【名】神祇の瑞籬(ミヅガキ)の外にして、外院(ゲヰン)の内方に位する處。(内院・外院に對して)四齋宮寮頭以下の役人の詰所。(内院・外院に對して)五ちゆうゐん(中規)に同じ。(内院・外院に對して)六ちゆうき(中規)に同じ。(内院・外院に對して)

ちゆうゐんしやうちやう 中院正廳【名】しんかでん(神嘉殿)の異稱。

ちゆうゐゑ 中衛【名】■ちゆうゑふ(中衛府)の略。「中衛の大將」「中衛の中將」「中衛の少將」■中衛府の舍人(トネリ)。

ちゆうゑふ 中衛府【名】中古、禁中の警衛に任ぜし官府の一。神龜五年に創設す。職員は大將・少將各一人、將監(ジヤウゲン)・將曹各四人、府生(フシヤウ)・番長各六人、舍人(トネリ)三百人。一名、東舍人(トネリ)と呼びしに徵すれば、東人(アヅマ)を以て組織せしものなるべく、天平勝寶八年授刀舍人(トジタウ)をも管轄して、員數四百となり、本府の舍人もまた四百に限り、天平寶字二年鎭國衛と改稱し、大將を大尉、中將を驍騎將軍、員外將、少將を次將等と改稱せしが、八年舊稱に復す。天平神護元年授刀衛は近衛府と改稱し

て、本府と相對することとなり、寶龜三年外衞府及び內竪署の廢せらるるや、その舍人は近衞府・左右兵衞府と本府とに分屬し、大同二年近衞の左近衞府と改稱せらるるや、右近衞府と改稱せられたり。

おゆう-をく 住屋【名】『住の字の音、正しくは**ちゅう**』**おゆうか**(住家)に同じ。

ちゆう-をんな 中女【名】二十歲前後の女。一代女「近年は勝手づくにて、中女を置けば、寢道具の上下(ロアゲオ)、乘物の前後に連れても見よげなるとて、十八九より二十四五までなるを使へり」

ちゆくち(英Chukchi)【名】『もと土語Tusk(同胞の義)の轉訛』シベリヤの東北地方に住する種族。皮膚はやや銅色に近く、體痞せ、丈高し。亞細亞的人種に屬するもやや エスキモオに酷似す。

おゆ-ごふ 住劫【名】『住の字の音、正しくは**おゆ**』〔佛〕**おゆうごふ**(住劫)を見よ。

おゆごん 儒艮(英Dugon)【名】〔動〕**じゅごん**(儒艮)を見よ。

おゆ-さん 重三【名】**しゅさん**(朱三)に同じ、

ちゆっ-ちよく 黜陟【名】『書經の舜典に「三載考レ績、三考黜二陟幽明一」とあるに本づく。黜は却く、陟は上ぐる義』官職を却くると上ぐると。

ちゆっとう 黜等【名】等級をおとすこと。

ちゆっ-っぱら 中腹【名】**ちゆうっぱら**(中腹)の約。浮世風呂「目に見えぬ鬼神を隻腕に雕りたる俠客(バキュ)も、御免なさいと、石榴口に屈むは、錢湯の德ならずや」

ちゆ-てん 丶點【名】■語・句の意の中止するしるしに打つ點。**けんてん**(圈點)參照。■字畫の點。

ちゆらにあん-ご チユラニアン語(英Turanian)【名】〔語〕次條に同じ。

ちゆらにやん-ご チユラニヤン語【名】〔語〕**うらるあるたいご**(烏拉見阿爾泰語)に同じ。

ちゆれに-じま 「ばたう(海馬島)【名】〔地〕**かいちよ**著【名】**ちよじゆつ**(著述)に同じ。「何某の著」「數種の著あり」「して救郎す」

ちよ 貯儲【名】たくはへ。貯蓄。「貯を廢べくあり。 琦鯨「洲崎に立てる鶴のけしきも、千代をこめたる霞の洞を、誠にやまびとの宮も斯くや、と見えたり」

ちよ 緒【名】『緒は本音しよ』■いとぐち。こぐち。端緒。■後に殘されたる事業。遺業。

ちよ 瀦【名】水のとまり堪ふること。水をせきとめて堪へしむること。みづたまり。

ちよ 千代・千世【名】**ちとせ**(千歲)に同じ。萬葉「たかまどの野べはふ葛の末つひにちよにわすれむわが大君かも」

ちよ 千代に一度(ヒト)澄む【句】『王子年の拾遺記に「丹邱千年一燒、黃河千年一淸、皆至聖之君以爲二大瑞一」とあるに本づく』支那の黃河は、その水つねに黃濁して、殆と澄む時なし。その澄むは、千年に一度のみ。河淸。新勅撰「大井川けふのみゆきのしるしにや千代に一たびすみ渡るらん」

ちよ 千代に八千代(ヤチ)に【句】千年にても八千年にても、何千年にても。

ちよ 千代の秋【句】幾千年の後の秋。

ちよ 千代の翳(カザ)【句】千年までと祝ひてさすかざし。「千代にかけていふ。

ちよ 千代の川竹(カハヂ)【句】竹の節の多きを千代の聲【句】千年を祝ふ聲。

ちよ 千代の坂【句】千年の齡のつもるを坂に譬へていふ。「例。

ちよ 千代の例(ケイ)【句】千年までも榮ゆる

ちよ 千代のごち【句】幾千年までも共に榮ゆるなかま。

ちよ 千代の友【句】千代までも契る友。

ちよ 千代の殘(ノコ)り【句】千年までに達する殘りの年。新古今「七十にみつの濱松老いぬれど千代の殘りはなほそはるけき」

ちよ 千代の始【句】千年までも經べきそのはじめ。

ちよ 千代の春【句】千代もと祝ふ新春。(但し新曆にては、新年と春とは伴はぬが故に用ひられず)芭蕉「伊勢が寶る家にも來たり千代の春」

ちよ 千代まつ(待つ・松)の木【句】千年を經べき松の木。萬葉「しげをかに神さびたちて榮えたる千代まつのきの年のしらなく」

ちよ 千代を籠(コ)む【句】行くすゑ長く榮ゆべくあり。 琦鯨「洲崎に立てる鶴のけしきも、千代をこめたる霞の洞を、誠にやまびとの宮も斯くや、と見えたり」

ちよ 千代を並ぶ【句】千歲を重ぬ。源氏「生ひそめし根も深ければ武限の松に小松に千代をならべん」

ちよ 千代【名】■〔人〕女俳人。加賀の千代として知らる。福增屋六兵衞の二女。幼名はつ。晚に尼となりて、素因と號す。加賀國松任(マツ)の人。金澤の表具師福岡彌八に嫁し、二十五歲夫を亡ひ、盧元坊に學びて一家をなす。安永四年歿す。年七十四(一說に七十五)。■〔地〕筑前國筑紫(ツクシ)郡にある町。千代の松原の西端。博多灣に臨み、東は箱崎町に接す。福岡帝國大學あり。

ちよ 千代【名】多くの夜。あまたのよる。「古語」伊勢「秋の夜のちよをひとよになせりともことば殘りて鳥や鳴きなん」

ちよ 千夜を一夜(ヒト)に【句】『伊勢物語に「さねぬ夜は千夜を一夜になずらへて八千夜しねばや飽く時のあらん」とあるに本づく』千日の夜を一夜と見つもるほどに長き間。 狹衣「御有樣の美しさは、千夜を一夜にまもり聞くとも、あく世あるまじくおぼゆるにも」

ちよ 千節【名】竹・蘆などの多くの節。

ちよ 地輿【名】『淮南子に「以レ天爲レ蓋、以レ地爲レ輿」とあり』**よち**(輿地)に同じ。

ちよ【感】雀千鳥などの鳴く聲。

ちよ 女【名】■をんな。をなご。■むすめ。處女。■(天)二十八宿の一。北方にあるもの。うるきぼし。

ちよ 除【名】わりざん。除法。

ちよい 苧衣【名】まをにて織りたる衣。あさぎぬ。かたびら。「〔俚語〕」

ちよい【名】**ちよんのま**(ちよんの間)に同じ。

ちよい【貌】ちよっと。心中宵庚申「出刃庖丁で、ちよいちやぞや」

ちよい 女醫【名】女子にて、醫を業とする者。**によい**(女醫)參照。「しや。

ちよいう 女優【名】女の俳優。をんなやく

ちよいうまげ 女優髷【名】女の髮の結ひ方の一。女優の常に結ぶもの。

ちよい-ちよい【副】をりをり。たまたま。まれまれに。「俚語」

ちよい-ちよい【感】舞踊・聲曲などを囃むるときの語。追善滿十郎奴俳諧「ちよいちよいや、花のやうなる茶屋のかか」

ちよいちよい-ぎ ちよいちよい著【名】ちよいちよい著る著物。ちよくちよくぎ。

ちよいと【副】ちよっと(一寸)に同じ。「俚語」

ちよいと【感】人を呼びかくる聲。「俚語」

おいはかせ 女醫博士【名】**によいはかせ**(女醫博士)に同じ。

ちよ-いん 女陰【名】婦人の陰部。

ちよう【名】〔動〕甲殼類に屬する節足動物。微塵子(ミジンコ)の類。金魚・緋鯉等の體の表面に寄生し、その血液を吸ひて、大いにこれを苦しむ。

ちよう 龍【名】めでいつくしむこと。愛すること。氣に入ること。

ちよう 徵【名】■めし。よびだし。「徵に應ず」■しるし。きざし。徵候。兆。「不穩の徵有り」

ちよう 重【名】■**ちやう**(丁數)に同じ。枕「ちようばみに、ちよう多く打ちたる」■おもきこと。「重量」■かさなること。「重疊」

ちよう 乳癰【名】**にゅうよう**(乳癰)に同じ。

ちよう-あい 寵愛【名】めでいつくしむこと。かはゆがること。鍾愛。「じ。

ちよう-あく 懲惡【名】「勸善懲惡に同じ。

ちよう-えい 塚塋【名】はか。つか。はかば。

ちよう-えい 寵榮【名】恩寵を蒙りて榮ゆること。ときめくこと。

ちよう-えき 懲役【名】〔法〕主刑の一。自由刑に屬する刑。既決罪人を內地の懲役場に入れて、定役に服せしむ。輕・重に分つ。

ちようえき-かん 懲役監【名】監獄の一。

懲役に處せられたる者を拘禁する所。**ちょうえきおやう**(懲役場)參照。「刑。懲役。

ちょうえきけい 懲役刑【名】〔法〕懲役の

ちょうえきしう 懲役囚【名】懲役に處せられたる囚人。懲役人。

ちょうえきしゅうしん 懲役終身【名】しゅうしんちょうえき(終身懲役)に同じ。

ちょうえきおやう 懲役場・懲役場【名】舊刑法にて、懲役に處せられたる囚徒、及び徒刑に處せられたる婦女を拘禁して、定役に服せしめし場處。卽ち舊監獄則の集治監・假留監、地方監獄に於て、現今の懲役監に當る。ちょうえきば。

ちょうえきにん 懲役人【名】ちょうえきしう(懲役囚)に同じ。

ちょうえきば 懲役場・懲役場【名】ちょうえきおやう(懲役場)に同じ。

ちょうおう 徵應【名】おうほう(應報)に同じ。「じ。

ちょうおん 重恩【名】おゆうおん(重恩)に同じ。

ちょうおん 寵恩【名】寵愛によりてうくる恩澤。御めぐみ。恩寵。「重典。

ちょうか 重荷【名】おもき荷物。おもに。

ちょうか 癥瘕【名】かめばら(龜腹)㊀に同じ。

ちょうかい 懲戒【名】㊀こらしいましむること。こらしめ。㊁『漢書の諸侯王表に「漢興初、鑒二戒亡秦孤立之敗一」とあり』こりて戒慎すること。㊂不正又は不當なる行爲に對し、制裁を加ふること。㊃〔法〕官吏・公吏などが、その服務律に違背せる時加へらるる、行政上の制裁。懲罰。

ちょうかいけん 懲戒權【名】〔法〕懲戒を行ふ權力權限又は權利。懲罰權。

ちょうかいさいばん 懲戒裁判【名】〔法〕公務員に懲戒處分を加ふべき形跡あるとき、その眞否を裁判し、その罪ある場合には、懲戒處分を宣告する裁判。

ちょうかいさいばんしょ 懲戒裁判所【名】〔法〕『獨 Disziplinargericht』㊀懲戒裁判を行ふ國家の機關。㊁判事・辯護士・行政裁判所長官・評定官又は會計檢査官等の懲戒裁判を行ふ裁判所。

ちょうかいじけん 懲戒事件【名】〔法〕懲戒に關する訴訟事件。

ちょうかいしょ 懲戒書【名】懲戒に處する旨を記して交付する文書。

ちょうかいしょぶん 懲戒處分【名】〔法〕公務員に懲戒を加ふる行政處分。懲罰處分。

ちょうかいそつね 懲戒訴追【名】〔法〕其の件に關して、權限を有する國家機關が、特定人の行爲に對し、懲戒法を適用すること。を懲戒裁判所に請求すること。

ちょうかいおやう 懲戒場・懲戒場【名】ちょうえきおやう(懲治場)に同じ。

ちょうかいばつ 懲戒罰【名】〔法〕行政罰の一。懲戒處分によりて課するもの。

ちょうかいはふ 懲戒法【名】懲戒に關する法規又は方法。

ちょうかいめんしょく 懲戒免職【名】〔法〕懲戒處分としての免職。

ちょうかいゐゐん 懲戒委員【名】〔法〕懲戒委員會を組織する委員。卽ち文官高等懲戒委員・文官普通懲戒委員等にて、高等官及び判任官中より任命す。

ちょうかいゐゐんくわい 懲戒委員會【名】㊀官吏の懲戒を議決するために、懲戒委員を以て組織せる會。㊁懲戒を要する事項に關する懲戒委員の會議。

ちょうかいゐゐんちやう 懲戒委員長【名】懲戒委員と共に懲戒委員會を組織して、これを主理するもの。

ちょうかう 寵幸【名】特別にかはゆがること。寵愛。正統記「すずろに寵幸ありて、抽賞せられしかば」

ちょうかう 重剛【名】『易經の文言傳に「九四、重剛而不レ中、上不レ在レ天、下不レ在レ田、中不レ在レ人」とあり』剛の過ぎたること。ちゆうかう。

ちょうがう 澄豪【名】〔人〕㊀天台宗の僧。西山流の祖。參議藤原顯成の子。一名は法圓、世に傳法和尙といふ。顯密の法を究めて大阿闍梨となる。正平五年寂す。年九十二。㊁天台宗の僧。境那院流の學匠。宗學の學統を繼續す。長元・長曆の頃の人。

ちょうき 重寄【名】重大なる寄託。重任を賴まるること。ちゆうき。

ちょうき 重器【名】㊀貴重なるうつは。㊁重き役目、大任。

ちょうぎ 重儀【名】ちょうや(重陽)に同じ。(但し節會につきていふ)

ちょうぎ 寵姬【名】寵愛する姬妾。寵妾。

ちょうぎ 寵戲【名】寵愛のあまりのたはぶれ。右大將鎌倉實記「誠に犬は三日養へばその主を忘れず…撫でさすり戲るる寵戲に乘って、鼻くんくん」

ちょうきう 重九【名】『九月九日は九の數の重なるによりていふ。ちようさん(重三)・ちようご(重五)參照』陰曆九月九日の節句。重陽。

ちょうぐう 寵遇【名】寵愛して、特別に待遇すること。寵待。眷遇。「同じ。

ちょうくわ 重科【名】おゆうくわ(重科)に同じ。(但し節會につきていふ)

ちょうくわい 徵會【名】呼びあつむること。召しよすること。

ちょうくわう 重光【名】㊀『書經の顧命篇に「昔君文王武王宣二重光一」とあり』明君の相繼ぎ、重ねて德光を放つこと。㊁『爾雅に「太歲…在レ辛曰二重光一」とあるに本づく』かのと(辛)の異稱。

ちょうげつ 澄月【名】〔人〕歌僧。俗姓は西山。醉夢庵又梨雪軒と號す。備中國玉島の人。歌を武者小路實岳(サネタカ)に學びて、一家をなし、京都に住して、諸弟子に教授す。小澤蘆庵・伴蒿蹊・僧慈延と共に京都和歌四天王の目あり。寬政十年寂す。年八十五。

ちょうけん 寵眷【名】寵愛して目をかくること。寵遇。「顧。

ちょうけん 懲瞼【名】ききめ。しるし。効

ちょうける 【動下一自】じやうけるに同じ。

ちょうご 重五・重午【名】『五月五日は、五の數、二つ重なるよりいふ。ちようさん(重九)・ちようさん(重三)參照』陰曆五月五日の節句。端午の節句。

ちょうこう 徵候【名】しるし。きざし。兆「候。

ちょうこう 重厚【名】態度重重しくして、人情厚きこと。おちつきて篤實なること。ちゆうこう。(輕薄に對して)

ちょうこん 重婚【名】おゆうこん(重婚)に「に同じ。

ちょうさい 重歲【名】ちようねん(重年)㊀に同じ。

ちょうさい 冢宰【名】『冢は長、宰は治の義。書經の周官篇に「冢宰掌二邦治一統二百官一」とあり』㊀支那周代の官職の一。天子を輔佐して、百官を統御せしもの。一說に、後世の吏部尙書に該當すと。㊁家臣の長。家老。太平記「新帝、幼主にて御坐ある上、君崩じたまひたるのち、百官、冢宰に任せて、三年政を聞しめされぬことなれば、萬機悉く北畠大納言の計として」

ちょうさう 懲創【名】『創も懲の義』こらしいましむること。懲りて氣を附くること。

ちょうさん 重山【名】幾重にもかさなれる山山。重嶺。重峰。

ちょうさん 重山・複水【句】『重複せる山水の義』山や川の入組みかさなれるもの。

ちょうさん 重山・複嶺【句】『重複せる山嶺の義』ちようさん(重山)に同じ。

ちょうさん 重三【名】㊀ちゆうさん(重三)に同じ。㊁『三月三日は三の數の重なるよりいふ。ちようご(重五)・ちようきう(重九)參照』上巳(ジヤウシ)の節句。

ちょうさん 重塹【名】『塹の字の音、正しくはせん』城のほりの、幾重にも掘りめぐらしたるもの。

ちょうし 寵賜【名】寵愛せられて賜與せらるること、又そのたまもの。寵錫。「子。

ちょうし 寵子【名】寵愛する子。寵兒。愛

ちょうし 冢子【名】『冢は大の義』㊀ちやくちやうし(嫡長子)に同じ。㊁太子。世子。

ちょうし 徵士【名】㊀朝廷・官府などに召し出さるる、諸方の人士。㊁明治の初年に、朝廷に召し出されし諸藩の人士及び都鄙の秀才。在職期を四箇年とし、廣く天下の賢才を集め、參與職又は各局の知事たらしめしもの。後その期を延長して、八年とす。同二年雇士と改稱す。

ちょうじ 寵兒【名】㊀ちやうし(寵子)に同じ。㊁好運なる人。時めく人。

ちょうじ 重事【名】重大なる事件。大事。

太平記、すはや天下の重事出(イ)來ぬるはと、才ある人は、潛かにこれを危みける」

三個の重事【句】三つの重大なる公事(クジ)、即ち御即位・御禊(ゴケイ)・大嘗會。

ちようしう 徴収【名】官府が人民より財物をとりたつること。

ちようしう 重修【名】㊀重ねて手いれすること。再び修復すること。㊁重ねて修補すること。再び修正すること。

ぢようしう 濃州【名】〔地〕**みの**(美濃)に同じ。因果物語、濃州別丕(ベツ)の近處に、仁井(ニヰ)村といふ處の六太夫といふ者」

ちようしう-そうはうこくしよ 徴収總報告書【名】歳入の事務管理廳にて、毎月の徴收の全體を徴收報告書に據りて記載し、大藏大臣に送付・報告する文書。

ちようしう-はうこくしよ 徴収報告書【名】歳入を徴收する官吏が徴收簿の結果により調製し、歳入の事務管理廳へ送付する毎月の徴收報告書。

ちようしう-ひよう 徴収費【名】次條に同じ。

ちようしう-ひよう 徴収費用【名】租稅・手數料等を徴收するに要する費用。徴收費。

ちようしう-ぼ 徴収簿【名】歳入を徴收する官吏が、その徴收に關し、調定濟額・收入濟額・未納缺損額・收入未濟額の四種に區分して記載する帳簿。

ちようしう-ほんざうからもくけいもう 重修本草綱目啓蒙【名】〔書〕本草學に於ける群書の考證及び著者の實驗を集成せるもの。同學上不朽の寶典と稱す。三十六卷。小野蘭山の著。

ちようしふ 徴集【名】㊀人をめしあつむること。㊁現役兵を召集すること。

ちようしふ 重襲【名】㊀かさぬること。㊁衣物を幾重にも重ねつつむこと。

ちようしふ-いふよ 徴集猶豫【名】各師範學校・中學校・官立學校、又文部大臣が中學程度以上と認めたる學校又文部大臣の認可を經たる專門學校の本科在學生及び外國(露領樺太・沿海洲・支那・香港・澳門(マカヲ)等を除く)在留者中の兵役義務ある者に對して、一定の期間許可する、兵役徴集の猶豫。在學者は滿二十八歳までにて、その期間内に退校するか、又はその期限を過ぎて、なほ在學する時は、一年志願兵又は六週間現役兵にあらざる限は、抽籤によらず直ちに徴集せられ、在留者は滿三十二歳までに、その期限内に歸朝し、且つ一年志願兵を志願せざる場合も、これに同じ。大正九年この規定廢せられて、入營猶豫と改められる。徴兵猶豫。**にふえいいうよ**(入營猶豫)參照。

ちようしふいういうよ-しようしよ 徴集猶豫【名】徴集猶豫の證書。聯隊區徴兵官又は警備隊區徴兵官これを作製して、市町村長又は區長より、被猶豫者に下付す。

ちようしふ-えんき 徴集延期【名】壯丁の身體の狀態またはその家族の生活上の事情により、若しくは禁錮以上の刑に該(ガイ)る犯罪のため、豫審又は公判中の者、犯罪の爲に拘禁中の者、刑の執行中止中のもの、又假出獄中の者等に對して、一定の期間徴集を延期すること。

ちようしふえんき-しようしよ 徴集延期【名】徴集延期の證書。聯隊區徴兵官又は警備隊區徴兵官これを作製して、市町村長又は區長より被延期者に下付す。

ちようしふ-めいぼ 徴集名簿【名】その年度に徴集せらるる事に定められたる壯丁、即ち徴集延期・徴集猶豫・徴集免除及び兵役免除の何れにも屬せざる壯丁の名簿。壯丁の身體檢査結了の後、聯隊區徴兵官又は警備隊區徴兵官これを作製す。

ちようしふ-めんぢよ 徴集免除【名】徴集の際、體格完全且强壯なるも、身幹未だ定尺に達せざるもの、疾病中又は病後にして、勞役に堪へざるもの、次年に於ても、尚徴集に適せざる場合、又其の家族自活すること能はざる確證あるもの、其の後三年を過ぐるもなほ止まざる場合、徴集延期中、外國にありて、三十七歳を過ぎたるものの徴集を免ずること。徴兵免除。

ちようしん 重臣【名】**ちゆうしん**(重臣)に同じ。盛衰記、守屋(モリヤ)大臣は、朝家三公の重臣たりしかども」

ちようしん 寵臣【名】寵愛せらるる臣下。

ちようしん 寵人【名】寵愛せらるる人。ちようにん。

ちようしやう 寵賞【名】寵奬して授くる「恩賞。

ちようしやう 寵商【名】當路の大臣等より恩寵を蒙る商人。

ちようしやう 重賞【名】**ちゆうしやう**(重賞)「に同じ。

ちようしやう 徴償【名】㊀賠償をもとむること。つぐのはすること。要償。㊁徴賞處分をなすこと。

ちようしやう-しよぶん 徴償處分【名】〔法〕『獨 Ersatzstrafe』犯罪人にその裁判費用を出ださしめ、又は贓物の還給、損害の賠償を命ずること。〔舊刑法の語〕

ちようしゆつ 重出【名】かさねて出づること。同一の記事の再び記されてあること。ちゆうしゆつ。

ちようしよう 徴證【名】しるし。あかし。證據。徴憑。

ちようじよく 寵辱【名】㊀愛せらるると、はづかしめらるると。㊁えいじよく(榮辱)に同じ。

ちようす 徴す【動佐變他】㊀召す。呼出す。徴召す。㊁證據とす。證す。㊂とりたつ。徴收す。㊃もとむ。要求す。

ちようす 寵す【動佐變他】なさけをかく。愛す。いつくしむ。

ちようず 懲ず【動佐變他】こらす。こりさす。〔古語〕「竹聖血の流るるまで懲ぜさせ給ふ」落窪「これをいみじき寶に思ひて、これが事につけて、我が妻(メ)を懲ぜしぞかし」

ちようせい 澄晴【名】空の、はれわたること。

ちようせい 澄清【名】㊀せいちよう(清澄)に同じ。㊁亂世を治め清むること。世の清く治まること。「天下を澄清す」

ちようぜい 徴稅【名】租稅を徴收すること、又その租稅。

ちようぜい-でんれいしよ 徴稅傳令書【名】〔法〕市町村長が徴稅令書により、更に調製して、府縣稅の各納稅者に交付し、納稅義務の履行を命ずる文書。此の文書を受けたる人は、市町村の收入役に其の稅金を拂込み、其の領收證を得て、納稅義務を完了す。

ちようぜい-ひ 徴稅費【名】徴稅に要する府縣稅の徴收につき、府縣知事又はその委任を受けたる官吏吏員が徴稅の義務ある市町村に對し、又は直接に納稅人に對して發し、納稅義務の履行を催告する書面。此の文書を受けたる納稅人は、其の稅金を府縣金庫に拂込み、其の領收證を得て、納稅の義務を完了す。

ちようぜいれいしよ 徴稅令書【名】〔法〕府縣稅の徴收につき、府縣知事又はその委任を受けたる官吏吏員が徴稅の義務ある市町村に對し、又は直接に納稅人に對して發し、納稅義務の履行を催告する書面。此の文書を受けたる納稅人は、其の稅金を府縣金庫に拂込み、其の領收證を得て、納稅の義務を完了す。

ちようせう 召す【名】㊀召すこと。呼出すこと。㊁引きあぐること。取りよすること。

ちようせう 徴招【名】よびまねくこと。

ちようせう 寵招【名】特別なる思召にてまねくこと。辱き御招待。優招。「積重。

ちようせき 重積【名】つみかさなること。

ちようせき 寵錫【名】**ちようし**(寵賜)に同じ。「もひもの。

ちようせふ 寵妾【名】寵愛するめかけ。おと。再びえらぶこと。

ちようせん 重選【名】重ねて選ばること。

ちようせん 澄泉【名】清澄なる泉。清泉。

ちようそ 重祚【名】『祚を重ぬる義。祚は位』天皇の、讓位後、再び卽位し給ふこと。皇極天皇の孝德天皇崩後、再び卽位して、齊明天皇と稱し、淳仁天皇廢せられ後、孝謙天皇再び卽位して、稱德天皇と稱せられしが如し。復辟。復祚。再祚。更位。

ちようたい 寵待【名】**ちようぐう**(寵遇)に同じ。

ちようち 懲治【名】㊀こらして心を改めしむること。いましめこらすこと。㊁〔法〕是非の辨別を缺ける少年犯罪者、又は痼癘(コレイ)犯罪者に對し、舊刑法にて認めたる一種の教育方法。

ちようぢかん 懲治檻【名】不論罪にかかる幼者、又は痼癘者を懲治するために入れ置く監獄。

ちようちく 徴逐【名】『徴は召す義』互に呼寄せ、互に逐ひまはして、親しく附合ふこと。互につきまとふこと。「詩酒徴逐」

ちようぢそう 徴治卒【名】徴治隊に收容して、徴治する陸軍の兵卒。但し原隊の定員内に屬す。

ちようぢ-たい 懲治隊【名】りくぐんちようぢたい(陸軍懲治隊)の略。

ちようぢ-ぢやう 懲治場【名】監獄の一種。幼年又は癈痾者等の犯罪者を情狀に因りて、懲戒の目的にて留置する所。

ちようぢ-にん 懲治人【名】懲治場に留置せられて懲治を受くる人。

ちようぢ-ば 懲治場【名】ちようぢぢやう(懲治場)に同じ。

ちようちゆう 冢中・塚中【名】塚の中。墓の中。「冢中の枯骨」【句】『三國志』蜀志先主傳に「孔融謂二先主一曰、袁公路豈憂レ國忘レ家者耶、冢中枯骨何足レ介レ意、今日之事、百姓與レ能、天與不レ取、悔不レ可レ追」とあり』■死せる人。■人の無能を嘲りていふ。「の中。

ちようてい 澄渟【名】水のたまりて清くすむこと。澄澄。

ちようてい 重聽【名】『漢書』の循吏傳に「黃霸爲二潁川太守一…許丞老、病レ聾、督郵白欲レ逐レ之、霸曰、許丞廉吏、雖レ老尙能拜起送迎、正頗重聽何傷」とあり』耳のよく聞えざるによりて、幾度も聽きかへすこと。

ちようてい 重疊【名】幾重にもかさなること。■『重疊よし』などいふ重疊の用法の轉じたるもの』至極滿足なること。何より結構なること。

ちようてん 重點【名】〔語〕ちゆうてん(重點)に同じ。

ちようてん 重典【名】ちゆうてん(重典)に同じ。

ちようてん 重瞳【名】■『史記の五帝紀に「舜者名曰二重華一」と、正義に「目重瞳子、故曰二重華一」とあり』一つの眼に瞳(ヒトミ)の二つあること。かさねひとみ。雙瞳。重瞳子。■『前項の故事に本づく。王禹偁の待漏院記に「九門既闢、重瞳屢回」とあり』天子の眼。

ちようてん 重點【名】〔語〕ちゆうてん(重點)に同じ。

ちようてん 重典【名】ちゆうてん(重典)に同じ。

ちようてん 重瞳【名】■『史記の五帝紀に「舜者名曰二重華一」と、正義に「目重瞳子、故曰二重華一」と、正義に「目重瞳子、故曰二重華一」と、一つの眼に瞳(ヒトミ)の二つあること。かさねひとみ。雙瞳。重瞳子。■『前項の故事に本づく。王禹偁の待漏院記に「九門既闢、重瞳屢回」とあり』天子の眼。

ちようてん 重訂【名】書籍などを再び訂正すること。ぢゆうてい。再訂。

ちようてう 徵兆【名】てうこう(兆候)に同じ。

ちようてつ 澄澈【名】水の清く澄むこと。

ちようてふ 重疊【名】■幾重にも重なること。■『重疊よし』などいふ重疊の用法の轉じたるもの』至極滿足なること。何より結構なること。

ちようてん 重點【名】〔語〕ちゆうてん(重點)に同じ。

ちようてん 重典【名】ちゆうてん(重典)に同じ。

ちようてん 重瞳【名】■『史記の五帝紀に「舜者名曰二重華一」と、正義に「目重瞳子、故曰二重華一」と、一つの眼に瞳(ヒトミ)の二つあること。かさねひとみ。雙瞳。重瞳子。■『前項の故事に本づく。王禹偁の待漏院記に「九門既闢、重瞳屢回」とあり』天子の眼。

ちようど 寵童【名】寵愛の童。「寵童二郎丸」〔著聞集〕「御

ちようどう 寵童【名】寵愛の童。

ちようどうし 重瞳子【名】前條■に同じ。

ちようにん 重任【名】『任を重ぬる義』■『おもにん(重任)と讀むを故實とすともいふ』中世、諸國司の、任期滿つるに臨み、奏請して再任せしこと。■重任の功【句】中世、造宮造寺等の朝廷の用途に對し、資を獻じたるによりて、重任■の賞に預かりしこと。〔續古事談〕「諸國の重任の功といふこと、ながく停止せられけるとき」「同じ。

ちようにん 寵人【名】ちようじん(寵人)に同じ。

ちようねん 重年【名】■年齡をかさぬること。重齡。重歲。加年。■年限をかさぬること。■秦公の年期を更に重ねてつとむること。

ちようば 徵馬【名】馬匹を徵發すること、又その馬。「又その馬。

ちようはう 重寶【名】■ちゆうはう(重寶)に同じ。■用ふるに便利なること、又その物。

ちようばくわんく 徵馬管區【名】徵發區の一種。各師團にて行ふ馬匹徵發に關する管轄區域。一郡を一區とす。

ちようはつ 徵發【名】戰時又は事變・行軍・演習などにて、陸軍又は海軍の全部又は一部を動かす時、使役し、又は軍需品・糧食等をその地の人民より徵すること。

ちようばつ 懲罰【名】■つみしこらすこと、又その罰。■ちようかい(懲戒)四に同じ。

ちようはつ-ぎむしや 徵發義務者【名】徵發を受けて、軍需を供給する義務ある者。

ちようはつ-く 徵發區【名】徵發令に據りて、徵發を行ふべき區域。徵發すべき物件の種類により、府縣・郡・區・町・村の別あり。又、船舶會社所有の船舶・鐵道會社所有の汽車は、その會社を徵發區に準ず。

ちようばつ-けん 懲罰權【名】〔法〕■訴訟上の取締を目的として、法廷の秩序を維持する權。例へば、審理の妨害をなす者に退廷を命じ、又は閉廷の時まで拘留する權など。■ちようかいけん(懲戒權)に同じ。

ちようばつけん-しや 懲罰權者【名】徵罰權を有する者。

ちようばつ-じはん 懲罰事犯【名】〔法〕法律・命令の規定に背きて、懲罰に付せらるべき行爲。

ちようはつ-しよ 徵發書【名】徵發令に據りて徵發を行ふ場合に、その權限を有する陸・海軍の官憲の發行する令狀。徵發區に從ひ、府縣知事・郡區・町村長・停車場長・船舶會社の店長に交付するを以て、效力を生じ、これを受理せるものは、時期を誤たず、其の供給を完全にするの責任あり。

ちようばつ-しよぶん 懲罰處分【名】ちようかいしよぶん(懲戒處分)に同じ。

ちようはつ-ぶつけん 徵發物件【名】徵發の目的物。

ちようはつ-れい 徵發令【名】徵發の定義・手續・物件・賠償及び不應者に對する制裁等を規定せる法令。明治十五年の公布。

ちようばつ-れい 懲罰令【名】〔法〕徵戒罰を規定したる法令。

ちようばつ-ゐゐん 懲罰委員【名】貴族院及び衆議院の常任委員の一。議員の行爲に不正不當のことありと認めし時、その事實を調査し處分するもの。

ちようばみ 重食【名】てうばみ(調食)を見よ。〔古語〕俊頼髓ちようばみ。枕草紙に「はぐろめよくつきたる、ちようばみにちよう多く打ちたる」と見えたり。重食の義、ト食のはみに同じ。雙六の采なり」

ちようはん 重犯【名】ちゆうはん(重犯)に同じ。「同じ。

ちようはん 重半【名】ちやうはん(丁半)に同じ。

ちようひやく 重百【名】ちやうひやく(丁百)に同じ。

ちようひよう 寵憑【名】■ちようしよう(徵證)に同じ。■〔法〕或間接の事實を證明して、それに推理を加へ、初めて直接の事實を證明せるもの。間接證據。

ちようひろく 懲毖錄【名】〔書〕『詩經周頌の小毖篇に「予其懲而毖(ツツシ)後患」とあるに取りて名づく』朝鮮國の壬辰の役、即ち我が國の文祿の役に關する事項を記せるもの。十七卷。朝鮮の柳成龍の著。

ちようふ 寵婦【名】寵愛する婦女。

ちようふ 重負【名】ちようか(重荷)に同じ。「重負を釋く」

ちようふく 重複【名】■同じ事のかさなること。ぢゆうふく。二重。■重り合ふこと。「重山(ヂウザン)複水」參照。「同じ。

ちようふく 重服【名】おゆうぶく(重服)に同じ。

ちようふく-さいていかはせ 重複裁定爲替【名】『英 Compound arbitration of exchange』爲替相場上の差違を利得せんがために、特に二國以上の國を廻轉して、爲替の裁定をなすもの。複雜裁定爲替。(單一裁定爲替に對して)

ちようふく-じゆせい 重複受精【名】〔植〕『英 Double fertilization』被子植物の花粉管内なる二雄核の一が、卵核と合して、胚を形成し、他の一核が胚囊核と合して、胚乳組織を形成する二作用。

ちようふく-せい 重複星【名】〔天〕たぢゆうせい(多重星)に同じ。

ちようふく-にんしん 重複妊娠【名】〔醫〕『獨 Mehrfache schwangerschaft』同時に二箇以上の胎兒を子宮内に藏する妊娠。即ち雙胎・三胎・四胎・五胎等にて、人類に在りては、六胎を限度とす。

ちようふく-ふりかへ 重複振替【名】『英 Double transfer』簿記法にて、一つの取引を二重に振替ふること。例へば、約束手形を支拂ふに當り、銀行における當座預金に對する小切手を以てする場合に於て、單純なる振替にて、借方を仕拂手形、貸方を當座預金とするに對し、重複振替にては、借方を現金及び仕拂手形、貸方を當座預金及び現金とする類。即ち實際上、現金の收支に關係すると否とを問はず、必ずまづ現金の收支をなしたるものと假定して、振替を行ふ。(單一振替に對して)

ちようふく-ほけん 重複保險【名】『英 Double insurance』保險者が一旦保險に付したるものを、被保險者が更に他の保險者に保險に付すること。即ち同一の被保險物に對し、同時又は時を異にして、數箇の保險契約を結ぶこと。

ちようぶつ 重物【名】貴重なる物。大切なる物。ぢゆうぶつ。

ちようぶん 重文【名】一〔語〕『英(Compound sentence)』二箇以上の、同格の節より成れる文。例へば、「山高く、水長し」「太郎は書を讀み、次郎は字を書く」の類。合文。(單文・複文に對して) 二かさねじ(重字)に同じ。

ちようへい 寵嬖【名】氣に入りて愛すること、又その愛せらるる人。

ちようへい 徵聘【名】禮を厚くして召すこと。招聘。

ちようへい 徵兵【名】一國中一般の壯丁を徵集し、體格などを檢査して、合格の者を陸軍・海軍の兵役に就かしむること、又その兵。 二**ちようへいけんさ**(徵兵檢査)の略。〔俚語〕 三**ちようへいてきれい**(徵兵適齡)の略。〔俚語〕

ちようへいいうよ 徵兵猶豫【名】にふえいうよ(入營猶豫)の舊稱。

ちようへいいくわん 徵兵醫官【名】舊徵兵官員の一。定員は一師管徵兵區に一人づつにて、軍醫これに任じ、徵兵使の指揮を受けて、壯丁の身體を檢査することを掌りしもの。

ちようへいかんごそう 徵兵看護卒【名】陸軍に於ける看護卒の明治二十年十二月以前に於ける舊稱。

ちようへいきひ 徵兵忌避【名】(法)徵兵適齡者が、兵役を免れんため、身體を毀傷し、又疾病を作爲し、その他詐僞の行爲、若しくは逃亡・潛匿したる等の行爲。

ちようへいきひざい 徵兵忌避罪【名】(法)徵兵忌避の行爲をなしたるに因りて成立する罪。一月以上一年以下の懲役(重禁錮)に處せらる。

ちようへいくわん 徵兵區【名】徵兵事務施行の便宜のために劃定したる地域。師管と聯隊區又は警備隊區の區域に從ふ。**ちようぼく**(徵募區)參照。

ちようへいくわん 徵兵官【名】一徵兵の事務を取扱ふ官吏。分ちて總理徵兵官・師管徵兵官・聯隊區徵兵官・警備區徵兵官及び聯隊區聯合徵兵署徵兵官となす。 二次條に同じ。

ちようへいくわんぬん 徵兵官員【名】徵兵事務に從事する官員。卽ち明治十二年設置せられ、同十六年廢止せられし徵兵使・徵兵副使・徵兵醫官・徵兵副醫官・徵兵書記・徵兵事務長等。

ちようへいけんさ 徵兵檢查【名】徵兵官が、地方の徵兵適齡者を召集して、兵役に服する資格の有無を檢査すること。身體檢査はその主なるものにて、その結果甲・乙・丙・丁・戊の五種に分ち、甲・乙(身長定尺以上にて强健なる者)を合格者とし、丙・丁・戊(身體に故障ある者・身長の定尺に達せぬ者、及び病中または病後にて、服役に堪へぬ者)を不合格者として、延期又は免除す。

ちようへいけんさじよ 徵兵檢查所【名】徵兵檢查を執行する場所。

ちようへいさいけつ 徵兵裁決【名】〔法〕聯隊區徵兵官または警備隊區徵兵官が、徵集の猶豫延期または兵役免除等に關してなす裁決。

ちようへいさんじぬん 徵兵參事員【名】聯隊區徵兵參事員と警備隊區徵兵參事員との總稱。

ちようへいし 徵兵使【名】舊徵兵官員の一。定員は一師管徵兵區に一人づつにて、陸軍佐官これに任ぜられ、開拓使・府・縣に出張して、使・府・縣の徵兵事務長と議して、徵兵の事務を掌りしもの。**ちようへいくわんぬん**(徵兵官員)參照。

ちようへいじむくわん 徵兵事務官【名】舊徵兵官員の一。初は陸軍下士、後には後備軍の使・府・縣駐在官これに任ぜられ、郡區を巡行して、徵兵下檢查の事を掌り、また徵兵署の事務を補助せしもの。

ちようへいじむちやう 徵兵事務長【名】舊徵兵官員の一。開拓使・府・縣に置き、地方長官または書記官これに任じ、管内に於ける徵兵の事務を掌りしもの。

ちようへいしんたいけんさ 徵兵身體檢查【名】徵兵の目的にて施行する壯丁の身體檢查。**ちようへいけんさ**(徵兵檢查)參照。

ちようへいしよ 徵兵署【名】聯隊區徵兵署・警備隊區徵兵署及び聯隊區聯合徵兵署の總稱。

ちようへいてきれい 徵兵適齡【名】兵役義務者が、その年の十一月三十日までに、滿二十歲に達する年、卽ちその年の徵兵檢查を受くべき年齡に達すること。

ちようへいてきれいしや 徵兵適齡者【名】徵兵適齡の壯丁。

ちようへいふくし 徵兵副使【名】舊徵兵官員の一。陸軍尉官これに任ぜられ、徵兵使を佐けて、開拓使・府・縣の徵兵事務官及び徵兵副醫官と共に徵兵檢查所を巡行し、徵兵檢查抽籤等の事務を掌りしもの。**ちようへいくわんぬん**(徵兵官員)參照。

ちようへいほけん 徵兵保險【名】〔商〕『獨 Militärdienstversicherung』被保險者の身上に於いて、徵兵に關する一定の事故の生じたる場合に、保險金を支拂ふべき生命保險。その方法は國により、また會社により樣樣なり。

ちようへいめんぢよ 徵兵免除【名】**ちようしふめんぢよ**(徵集免除)に同じ。

ちようへいりよひ 徵兵旅費【名】徵兵に關して、壯丁と抽籤總代人との要する旅費、又は現役兵の要する入營旅費などの總稱。

ちようへいれい 徵兵令【名】兵役義務に關する諸般の規定、卽ち兵役に服すべき年齡、兵役の種別、服役・免役・延期・猶豫、服役年期の計算、及び罰則等を載せたる法律。明治二十二年の公布。

ちようへき 徵辟【名】官に任ぜんがために、在野の士を朝廷に召し出だすこと。

ちようへん 重編【名】重ねて編輯すること。再び編集すること。

ちようへんおうにんき 重篇應仁記【名】〔書〕文安より永祿の足利氏滅亡まで、百餘年間の世態推移の狀況を記せるもの。前記二卷・廣記(應仁記を敷衍せるもの)五卷、後記三卷、續後記十卷、合はせて二十卷。著者詳かならず。

ちようぼ 徵募【名】一あつめつのること。呼びあつむること。徵集。 二現役に服せしむる爲に召集すること。

ちようぼ 冢墓・塚墓【名】つか。はか。墳墓。

ちようほう 重峰【名】攀重にも重なれる峰(ネ)。重山。

ちようぼく 徵募區【名】徵兵區内の小區分。一郡・一市・一島嶼(北深道のみは區)の管轄區域を一區とす。又、一市にて二聯隊區に分屬せるものは、各別に一區とす。

ちようみ 重味【名】淡泊ならぬ味。厚味。

ちようめ 重目【名】雙六(ロク)にて、同じ數の采の目が、二つ同時に出づること、卽ち重一(デ)・重二(ニ)・重三(サン)・重四(シ)・重五(ゴ)・重六(ロク)の總稱。

ちようめい 寵命【名】主君の恩愛深き仰せ。恩命。

ちようめい 澄明【名】水などのすみわたること。

ちようめんくわえきちやう 徵免課役帳【名】古、官にて、課役の徵收・免除に就きて記載せし帳簿。每年四季に、三通づつ作製せり。

ちようもつ 寵物【名】氣にいりの姿。おもひもの。著聞 知定院殿に、小物御前と申す御寵物ありけり。後には播磨殿と申し」

ちようやう 重陽【名】『類書纂要に「九爲陽數、九月與二九日一並應、故曰二重陽一」とあり』五節句の一。もと古、支那にて、この日、高山に登り、菊酒を飲み、茱萸(シユ)の囊を佩ぶる風習ありしものの、我が國にも傳はれるにて、朝廷にても、賀宴を催され、一般にも、菊の著綿(キセワタ)等の事行はれたり。陰曆九月九日の節句。菊の節句。重九。

重陽の宴(エン)【句】古、九月九日に、朝廷にて、天皇南殿に出御せられ、節會(セチヱ)を行はれし儀式。菊花の宴。

ちようやく 重譯【名】『譯を重ぬる義』一の國語を第二の國語に譯し、次いで第三の國語に譯す等、二回以上に飜譯すること。

ちようやく 重厄【名】おもき災厄。**ちゆうやく**(重厄)參照。 八犬傳「やよ俟ちたまへと禁(ト)めても、ちつとも聽かぬ無法の太刀風、…右手(テ)の肘を一寸ばかり、かすり痕(キズ)負ひつつ右に拄(ツ)へ、左に當る一期の重厄、いとも危く見えたる折から」

ちよう-よう 徴用【名】〔法〕徴牧して使用すること。公共の事業に土地などを牧用する類。

ちよう-らい 【名】ちようあい(寵愛)の訛。

ちようらい高(カ)じて、尼になす【句】「寵愛高じて尼になす」の訛。「頂禮(ライ)高じて尼になる」参照。「諺語」カナナホシ「寵愛カウジテ尼ニナスといふべきことをチョウライカウジテ尼ニナスといふ」

ちよう-らん 重疊【名】幾重にも重なりたる山山。屏嶂。

ちよう-り 重利【名】ふくり(複利)に同じ。

ちよう-りはふ 重利法【名】ふくりはふ(複利法)に同じ。

ちよう-りん 重鱗【名】鷹の翼の一部。

ちようりん-ばう ちようりん坊【名】ちようりんばう(長吏坊)を見よ。

ちよう-れい 重齢【名】ちようねん(重年)に同じ。

ちよう-れい 重嶺【名】幾重にも重なれる山。

ちよう-ろ 女郎【名】ちようろう(女郎)の訛。

ちようろ-いも ちようろ芋【名】〔植〕次條に同じ。

ちようろ-ぎ 草石蠶【名】〔植〕ちよろぎ(草石蠶)に同じ。

ちよう-ろく 重六【名】てふろく(疊六)に同じ。

ちよう-ろく 重祿【名】■俸祿を重くすること。■重き俸祿。ちゆうろく。

ちよう-ろく 寵祿【名】寵愛して俸祿を多く賜ふこと。又その俸祿。

ちよう-ね 重閨【名】幾重にも取巻き圍むこと、又そのかこみ。ちゆうね。

ちよえい 女英【名】〔人〕支那上代の帝王舜の妃。堯の女。貞女なり。

ちよえつ-ぐわん 女悅丸【名】昔、行はれし淫藥の一。三代男「ゐもりの黒燒・女悅丸としたるが、安神數に包みそへたる」

ちよおく (英 Chalk)【名】はくぼく(白墨)に同じ。

ちよおく-ぐわ チヨオク畫【名】チヨオクをもつて描きたる畫。

ちよおく-ばん チヨオク版【名】鋼板の面に白墨の薄層を塗り、特殊の針にて、圖畫又は文字を彫刻し、これを原型となして、活字金を流込みて得る鉛板。

ちよか 【名】■琉球國の人ちよかなるもの薩摩に來りて製し始めたるよりいふ。■土瓶など、すべて液體を入るる器物。〔薩摩國の方言〕■『ちよかちよかを見よ』心おちつかず、行動の輕輕しきこと、又その人。〔關西の俚語〕

ちよかい 女戒【名】女に適れざるやうにいましむること。「訓。」

ちよかい 女誡【名】婦女に對する訓誡。女訓。【名】〔書〕卑弱・夫婦・敬順・婦行・專心・曲從・和叔妹の七編に分ちて、女子の行を說きたるもの。我が國にても、女子の修身書として、一時用ひられたりき。一卷。支那漢の班昭(班固の妹)の著。

ちよかい 除害【名】害をのぞくこと。

ちよがう 女校【名】ちよがくかう(女學校)に同じ。(男校に對して)

ちよがう 除號【名】〔數〕除法の符號、即「ち÷」。

ちよかうきやう 女孝經【名】〔書〕孝經に倣ひたるもの。十八章より成る。我が國にても、一時和譯して行はれき。一卷。支那唐の陳邈の妻鄭氏の著。

ちよかく 女客【名】女の客。婦人客。

ちよがく 女學【名】女子の修むべき學問。

ちよがく 女樂【名】■女子と舞樂と。■女子の奏する舞樂、又舞樂を行ふ女子。

女樂の拜(ハイ)【句】豐明(アカリ)の節會の女樂を、陪覽するものの、御禮を申上ぐる儀。

ちよがくかう 女學校【名】女子を教育する學校の生徒。

ちよがく-せい 女學生【名】女の學生。女學「語」

ちよか-ちよか 【貌】ちよこちよこに同じ。〔俚

ちよかに-ぶね ちよかに船【名】近江國堅田にて、漁夫が釣魚に用ふる小形の漁船。

ちよ-がみ 千代紙【名】種種の花紋を摺出したるもがみ。小筥類の面に貼りて裝飾とし、又は女兒の弄ぶもの。紙質、もとは地柾(ヂマサ)、今は西洋紙をも用ふ。

ちよかん 猪羹【名】羊羹の類なるべしといふ。庭訓往來「羊羹・猪羹」

ちよかん 女監【名】女囚を收容する監房。(男監に對して)「手本。

ちよかん 女鑑【名】女子にものの行の職員の一。看守長の指揮監督を受けて、在監の婦女の戒護及び取締をなすもの。判任待遇とす。

ちよかん-とりしまり 女監取締【名】監獄

ちよがらかす 【動四他】ちやうらかすに同じ。女殺油地獄「ちよがらかされにや來申さない」

ちよき 貯氣【名】〔醫〕『獨 Reserveluft』通常の呼息の後になほ肺内に殘りゐて、强き呼息によりて排出し得べき空氣。

ちよき 猪牙【名】■ちよきぶね(猪牙船)の略。俗曲(尾上の雲助)「總じて、浮世の有樣は、猪牙に追手や風の征矢」柳燕「首尾の松風さっさっと猪牙で行き」同「後を見ぬ人の乘るゆゑ猪牙といふ」■攝津國難波(大坂)地方にて用ふる艘船(ソウセン)。

ちよき 千代木・千世木【名】〔植〕まつ(松)■の異稱。〔古語拾遺抄〕「君が經んやほよろづよのためしかなちよきの枝に鶴すくふなり」

ちよき 除棄【名】のぞきすつること。とりさること。

ちよきう 樗牛【名】〔人〕たかやまりんじらう(高山林次郎)を見よ。

ちよきう-ぜんしふ 樗牛全集【名】〔書〕高山林次郎の遺文、美學及び美術史・文藝評論・史論及び史傳・時論及び思索・想華より日記・消息までを網羅せるもの。六卷。

ちよきき 貯氣器【名】〔化〕『英 Gas holder』水に吸收せられざる氣體(殊に酸素)を器内の水上に貯へ置く裝置の器械。

ちよきさう 貯氣槽【名】がすだめ(瓦斯溜)■に同じ。

ちよき-ちよき 【貌】■物をきざむ音、又は鋏にて物を截る音の形容。〔俚語〕■手廻よきさま。「する音。

ちよき-ぢよき 【貌】物をこまかく刻みなど

ちよき-ぶね 猪牙船【名】『長吉と呼びし者、船を操研の形に作りて、押送(オシオク)に用ひしに、足至つて早かりしより、明曆の頃、兩國橋の筵屋利兵衞、見附の玉屋勘兵衞といひし者、これに倣ひて作り、長吉船と呼ぶべかりしを、「ちよき船」といひ、後、猪牙の字を宛つるに至りしなり。又その形、猪の牙に似たりしよりいへりとも、ちよきちよきと手廻(テマワ)よき意にて呼びならはしたりともいふ。一說に、艘の訛音Clerkの轉と』形細長くして、屋根なく、船足の早き川船。江戸時代に遊船として用ひられ、特に山谷(サン)通ひの者多く乘用とせり。柳燕「一時に立つて猪牙船叱られる」同「たのもしい奴(ヤツ)猪牙船へかじりつき」

ちよきん 貯金【名】■金錢を貯ふること、又貯へたる金錢。貯蓄金。儲金。■いうびんちよきん(郵便貯金)の略。

ちよきん 【貌】■まつすぐに立ちたるさま。■ちよきりに同じ。〔俚語〕

ちよきん-あづかりきよく 貯金預局【名】明治十年一月以前に、郵便爲替及び郵便貯金を取扱ひたる郵便局。

ちよきん-あづかりしよ 貯金預所【名】明治二十六年以前に、遞信大臣にて必要と認むる地に設置し、郵便貯金の預入を取扱はしめたる郵便受取所。

ちよきん-あつかひにんげんぼ 貯金預人原簿【名】郵便貯金原簿所管廳に備へ、郵便貯金の受入及び拂出を登記する帳簿。

ちよきん-かよひちやう 貯金通帳【名】郵便局又は銀行などの貯金の預け入に、その局又は銀行より渡しおきて、預入又は引出の度毎に、その金額を記入するための通帳。

ちよきん-げんぼ 貯金原簿【名】貯金原簿所管廳に備へ、郵便貯金に關する登記をなす帳簿。

ちよきんげんぼ-しよくわんちやう 貯金原簿所管廳【名】貯金原簿を管理する官廳。

ちよきん-つうちやう 貯金通帳【名】ちよきんかよひちやう(貯金通帳)に同じ。

ちよきん-はらひもどしきん-じゆりやうしよ 貯金拂戻金受領證【名】郵便貯金の預入が、貯金の即時拂又は局待拂を請求せんとする時、郵便局所にて交付する一定の用紙にて調製し、通帳と同時に、其の郵便局に差出す證書。

ちよきん-はらひもどし-しようしよ 貯金拂戻證書【名】貯金拂戻請求書を受けたる貯金原簿所管廳が、その請求書に誤なきを認めたる場合に調製して、その請求人に送達する證書。請求人は、その發行後六十日以内に、これを拂渡郵便局所に差出す時は、拂戻金を受取ることを得。

ちよきん-はらひもどし-せいきうしよ 貯金拂戻請求書【名】郵便貯金の預入が貯金の拂戻を請求する場合に、郵便局所よりその用紙の交付を受けて調製し、貯金通帳と共に、貯金原簿所管帳(全額の場合)又は郵便局所(一部の場合)に差出す請求書。

ちよきゆう 儲宮【名】**ちよくん**(儲君)【一】に同じ。

ちよきよ 除去【名】のぞきさること。

ちよきり【脫】【一】剪刀にて、剪み切る音の形容。ちよきん。ちよっきり。【二】短きさま。手輕きさま。ちよっきり。

ちよく 勅・敕【名】天子の御言葉。主上の仰せ。みことのり。**せう**(詔)參照。

ちよく 知浴【名】〔佛〕禪宗にて、浴室の事を掌る役。浴主。

ちよく 直【名】【一】なほきこと。正直。「直を愛す」【二】高ぶらぬこと。氣がる。率直。「ちよくな人」【三】てがる。簡易。【四】**あんちよく**(安直)の略。

ちよく 猪口【名】【一】『猪口は宛字にて、鐘の字の福建省地方の音。また朝鮮音なりとも、酌の支那音Dioh の轉なりともいふ』陶製にて、形小さく、上開き、下すぼめる杯。さかづき。ちよこ。酒盞。【二】猪口の形にて、稍大きく造り、菜を盛るに用ふる陶磁器。

ちよく-あく 濁惡【名】〔佛〕人世濁亂して、惡法さかんに興ること。五濁十惡。

濁惡の世【句】〔佛〕『法華經の方便品に「我出二濁惡世一」、同書普賢勸發品に「後五百歲濁惡世中」、觀無量壽經に「不レ樂二閻浮提濁惡世一也、此濁惡處、地獄・餓鬼・畜生充滿、多二不善聚一」とあり』濁惡なる時期。五濁(ごぢよく)惡世。惡世。濁世。方丈記「濁惡の世にしも生れあひて」

ちよくあん-りう 直鞍流【名】馬術の一流派。神尾織部吉久を流祖とす。「御趣意。

ちよく-い 勅意・敕意【名】みことのりの意に同じ。

ちよく-いん 直音【名】〔語〕**ちよくおん**(直音)と。

ちよく-えい 直營【名】直接に經營すること。

ちよく-おん 直音【名】〔語〕拗音と促音との外の、普通の音。(拗音に對して)

ちよく-おん 勅恩・敕恩【名】勅旨による恩惠。

ちよく-か 直下【名】【一】すぐ下。まつした。目の下。(直上に對して) 右大將鎌倉實記「やあ鎌倉を直下に見たる言分」【二】まつすぐに下ること。ひたおしに下ること。(直上に對して)「急轉直下の勢」

ちよく-かう 直行【名】【一】寄路せず、乘換を要せずに、志す所へ眞直ぐに行くこと。【二】心のままを矯めず飾らず行ふこと。直情徑行。

ちよく-かう 直航【名】航海するとき、他の港に寄らず、その志すところに向ふこと。

ちよく-かう 直講【名】**おきかう**(直講)に同じ。

ちよく-かう 直交【名】〔數〕『英 Mutually perpendicular』一の圖形と他の圖形とが直角に相交ること。「降。

ちよくかう-かう 陟降【名】のぼりくだり。昇

ちよくかう-しん 直行進【名】眞直ぐに進行すること。(斜行進に對して)

ちよくかう-ゑん 直交圓【名】〔數〕『英Orthocircle』直角に相交る圓。

ちよく-かく 直覺【名】〔哲〕『英 Intuition』外界の事物を、想像・記憶・推理・類推等の複雜なる精神作用によらず、五官の力によりて、その對象とする事物を直下に覺得すること。直觀。觀象。

ちよく-かく 直角【名】〔數〕『英 Right angle』二直線が相交りて、兩側に生ずる角度の、相等しきもの、卽ち平角の二分の一なるもの。弧度法にては九十度。かねの。

ちよく-がく 勅額・敕額【名】天子の御親筆の額面。

ちよく-がく 勅樂・敕樂【名】古、天皇が神社佛閣に奉納せられたる歌舞音樂。勅會(ちよくゑ)。

ちよくかく-き 直角器【名】『英 Cross』與へられたる線に對しての垂線の方向を求むるための測量器。十字桿・半圓器・矩鏡等、これに屬す。直角儀。

ちよくかく-ぎ 直角儀【名】前條に同じ。

ちよくがく-くわじ 勅額火事・敕額火事【名】元祿十一年九月六日東叡山寬永寺の瑠璃殿の勅額、京都より到著す。此の日偶江戸南鍋町より出火して、東叡山の靈屋亦災上せし時の大災。

ちよくかく-こぐちだい 直角木口臺【名】板の木口を他の面と直角に削るに用ふる器械。厚き長形の板の一邊に緣を附け、その側面を正しく直角に造りたるもの。

ちよくかく-さんかくけい 直角三角形【名】〔數〕『英 Right-angled triangle』一角が直角をなせる三角形。直三角形。

ちよく-がくし 直學士【名】【一】支那唐代の中書省の被管なる集賢殿書院の第二等の職員。學士の下、傳讀學士の上。【二】**ちよくかう**(直講)の唐名。

ちよくかく-しゆぎ 直覺主義【名】〔哲〕**ちよくかくせつ**(直覺說)に同じ。

ちよくかく-せき 直角石【名】〔鑛〕『英 Orthoceras』三疊紀層に發見せらるる一種の筒狀の介殼化石。

ちよくかく-せつ 直覺說【名】〔哲〕『英 Intuitionism 又 Intuitionalism 又 Intuitivism』【一】知的直覺により、絕體的實在の認識に到達すべしとなす學說。直觀說。【二】智的直覺によりて、直接に善惡を判斷する能力を有し、原理・法則を知るを得べく、何が故に然るかと問ふ必要はなしとなす學說。リイド(T. Reid)その代表者たり。知覺的直覺說・獨斷的直覺說・哲學的直覺說等に分つ。直觀說。直覺主義。けいしき(形式主義)參照。

ちよくかく-たう 直角墻【名】〔數〕『英 Right prism』側稜が端面に對して直交する角墻。直角柱體。直立角墻。(斜角墻に對して)「に同じ。

ちよくかく-ちゆう 直角柱【名】〔數〕前條

ちよくかく-ちゆうたい 直角柱體【名】〔數〕前條に同じ。

ちよくかく-は 直覺派【名】〔哲〕直覺說を主張する人人の一派。

ちよくかく-へいかうろくめんたい 直角平行六面體【名】〔數〕『英 Rectangular parallelopiped』**ちよくろくめんたい**(直六面體)に同じ。

ちよくかく-りよく 直覺力【名】直覺する「能力。

ちよくかし 勅加謚・敕加謚【名】既に禪師の號を賜はれる僧に、後更に加へ賜ふこと、又その號。

ちよく-かつ 直轄【名】直ちに管轄すること。直管。直隸。

ちよくかつ-がくかう 直轄學校【名】主務省の直轄に屬する學校。

ちよくかつ-かせん 直轄河川【名】內務省にて、直接に其の改修工事を施行する河川。利根川・信濃川・木曾川・濱(ヒン)川・北上川・御物(オモ)川・荒川・阿賀川・富士川・天龍川・阿武隈川・九頭龍(クヅリュウ)川・吉野川・最上川・筑後川・那珂川・庄內川・神通川・中川・岩木川・手取川・矢作(ヤハギ)川・大和川・庄川・吉井川・馬淵川・紀ノ川・加古川・大淀川・由良川・多摩川・鯛川・高梁(カウヤナ)川・綾川・米代川・鳥瀨川・妻伊川・遠賀(オガ)川・久慈川・菊池川・鄉川・旭川・渡川・蘆田川・川內川・相坂川・千代川・鶴見川・大野川・球磨(クマ)川・相模川・肱川・矢部川・狩野川・圓山川・肝屬(キモツキ)川・大田川(廣島)・豐川・白川・大分(オホイタ)川・酒匂(サカワ)川・鈴鹿川・名取川・仁淀川。

ちよく-かん 勅勘・敕勘【名】天子よりの御咎。勅命の勘當。宥免の勅許下るまでは、閉門・籠居して謹愼する例なりき。〔古語拾遺記〕當時、勅勘の者にはべる」

ちよく-かん 直諫【名】忌憚なく諫むること。うちつけにいさむること。面爭。

直諫は一番槍より難し【句】直諫の極めて難き譬。〔諺語〕「直諫は一番槍より難し」

ちよくきん 直近【名】〔法〕直接に近親ること。

ちよくきんじやうきふ 直近上級【名】すぐ上の等級。すぐの上級。例へば、東京地方裁判所にて、直近上級の裁判所といへば、東京控訴院なる類。

ちよくきよ 勅許・勅許【名】一天子の御ゆるし。勅命の免許。勅免。二〔法〕皇室の重大事項の實行に關して、機關によらず天皇の親裁に基く許可。

ちよくきよ 勅挙・勅挙【名】勅命により て擧用すること。

ちよくくわん 勅喚・勅喚【名】勅により喚出だすること。

ちよくくわん 直管【名】一**ちよくかつ(直轄)**に同じ。二木工に用ふる土管の、眞直ぐなるもの。(異形管に對して)

ちよくくわん 直観【名】〔哲〕**ちよくかく(直覺)**に同じ。

ちよくぐわん 勅願・勅願【名】天子の御祈願。

ちよくくわんけうじゆ 直観教授【名】〔哲〕『英 Intuitive teaching』性質・分量及び調子を明瞭ならしむるために、實物又は模型・寫眞・繪畫などを用ひ、兒童の直觀に訴へて行ふ教授。瑞西人ペスタロッヂ(J. H. Pestalozzi)の主張せしもの。實物教授。

ちよくぐわんじ 勅願寺・勅願寺【名】じぐわんじ(御願寺)を見よ。

ちよくぐわんじよ 勅願所・勅願寺【名】勅願により創立せられたる社寺。

ちよくくわん-せつ 直観説【名】〔哲〕**ちよくかくせつ(直覺説)**に同じ。

ちよくくわん-てき 直観的【形】〔哲〕論理的の手續を履まずして、直下に或思想・觀念・精神狀態に到達すること。現量的。

ちよくくわんてき-ごせい 直観的悟性【名】〔哲〕『英 Intuitive intellect』**ちよくちよくくわん(知的直觀)**に同じ。

ちよく-けい 直径【名】〔數〕**けい(徑)二**に同じ。

ちよくくわん-けい 直系【名】〔法〕祖先より嫡子相續きて、直線的につながれる系統。(傍系に對して)

ちよくけい 勅計・勅計【名】參仕人の交名(きやうめう)を奏すること。

ちよくけい-いんぞく 直系姻族【名】〔法〕或人とその人の配遇者、妻の子にて、夫と居を同じくせる者を除くの直系血族との關係。(傍系姻族に對して)

ちよくけい-けつぞく 直系血族【名】〔法〕直系的の關係ある血族。その内、父母・祖父母・曾祖・玄祖・高姑の如く、祖先より自己に至る直線中にあるを直系尊屬といひ、子孫・曾孫・玄孫などの如く、自己より子孫に至る直線中にあるを直系卑屬といふ。(傍系血族に對して)

ちよくけい-しん 直系親【名】〔法〕直系の關係ある親族、卽ち或人とその直系血族及び直系姻族との關係。(傍系親に對して)

ちよくけい-しんぞく 直系親族【名】〔法〕或人に對して、直系親の關係あるもの。(特に六親等以内の直系血族と、三親等以内の直系姻族とをいふ。(傍系親族に對して)

ちよくけい-しゆぎ 直系主義【名】〔法〕直系卑族をして、相續または王位の承繼をなさしむる主義。

ちよくけい-そんぞく 直系尊屬【名】〔法〕尊屬に對して)

ちよくけいけつぞく 直系卑屬【名】〔法〕(直系血族)を見よ。(傍系卑屬に對して)

ちよくけつ 直結【名】傳力裝置にて、調革を掛けずして、車軸と車軸とを直接に連結する法。

ちよくけつはふ 直結法【名】傳力裝置にて、調革を掛けずして、車軸と車軸とを直接に連結する法。「語」に同じ。

ちよく-げん 勅言・勅言【名】ちよくご(勅語)ものいふこと。ありのままにいふこと。苦言。讒言。二絶對無條件なる言語。

ちよくげんてき-めいだい 直言的命題【名】〔哲〕**ていげんてきめいだい(定言的命題)**に同じ。「前條に同じ。

ちよくげん-めいれい 直言命令【名】〔哲〕『英 Categorical imperative』無條件的に又綱體的に守らざるべからざる道德法。道德律の遵奉を幸福を得るためなりとする幸福論と、神の命令なるが故なりとする基督教とに對して、カント(Kant)の創唱せるもの。無上命令。假言命令。無上命法。

ちよく-ご 直後【名】すぐ後(のち)にあたれる處。又すぐあと。(直前に對して)

ちよく-ご 勅語・勅語【名】一天子の御ことばみことのり。勅言。二〔法〕天皇が、機關の參與を俟たず、親ら臣民に對して、その意志を發表せらるるものの、勅命の形式を備へぬもの。憲法發布の勅語、敎育勅語の如き、これなり。**ちよくし(勅使)二**參照。

ちよく-こん 直根【名】〔植〕『英 Axial root』幼根の下端より、直接に仲長せる根。雙子葉植物にありては、この根最もよく發達す。(副根に對して)

ちよく-ざさ 千代草【名】〔植〕一**まつ(松)二**の異稱。二**きく(菊)二**の異稱。〔古語〕

ちよくさい 勅祭・勅祭【名】勅命によりておこなふ祭事。

ちよくさい 勅裁・勅裁【名】天子の御裁決。親裁。上裁。天裁。叡裁。宸裁。勅斷。正統記「賴朝、高官に昇り、守護の職を賜ふ、これ皆法皇の勅裁なり」

ちよくさい 直裁【名】ちきさい(直裁)に同じ。

ちよくさいゐん 勅齋院・勅齋院【名】さいゐん(齋院)二を見よ。

ちよくさく 勅作・勅作【名】勅旨により て作ること、又その作りたる物。

ちよくさん 勅參・勅參【名】勅任の參事官の略稱。

ちよくさんかくけい 直三角形【名】〔數〕**ちよくかくさんかくけい(直角三角形)**の略。

ちよくし 勅旨・勅旨【名】一みことのりの御旨意。二〔法〕天皇が機關の參與を俟たず、皇室・國家又は陸海軍統帥の事務に關して、親ら發したまふ處分令。勅令又勅語と性質は同じく、ただその形式と用語とを異にす。

ちよくし 勅使・勅使【名】天子よりの御使者。天使。制使。源氏「三位のくらゐおくりたまふまし、勅使きたりて、その宣命を讀むなん悲しき事なりける」

ちよくし 勅諡・勅諡【名】一勅命により て諡(おくりな)を賜ふこと、又その號。二禪師の號を、本人の歿後に賜ふこと、又その「と。

ちよくし 直視【名】眞直ぐに見詰むること。

ちよくじ 植字【名】しよくじ(植字)に同じ。〔活版職工の語〕

ちよくし-かいでん 勅旨開田・勅旨開田【名】ちよくしでん(勅旨田)に同じ。

ちよくし-きやう 勅旨卿・勅旨卿【名】勅旨省の長官。

ちよくし-ぐわはふ 直視畫法【名】〔地〕**ちよくしやはふ(直射圖法)**に同じ。

ちよくし-さう 勅旨莊・勅旨莊【名】勅旨により て營かれたる莊園。勅書莊。

ちよくし-しやう 勅旨省・勅旨省【名】中古、臨時の勅旨により、服飾・甑具等の事を掌りし役所。設置の年代詳かならざれども、續日本紀天平寶字八年十月の條に初めてこの名稱見ゆ。卿・大輔・少輔・大丞・少丞等の職員ありしものの如し。延曆元年廢止せられたり。

ちよくし-じつ 直日【名】宿直の日。當番日。とのゐの日。「同じ。

ちよくし-じつ 直實【名】じつちよく(實直)に同じ。

ちよくし-でん 勅旨田・勅旨田【名】不輸租田の一。閑地・荒地を勅旨にて開發せし墾田。これを後院の御領とし、或は院宮・皇子・臣下に賜ひしことも屢にて、後に莊園となりしもの少なからず。勅旨開田。

ちよくし-ねんかう 勅使拈香・勅使拈香【名】〔佛〕佛寺にて、法事の席に臨む勅使のために拈香すること。

ちよくし-まき 勅旨牧・勅旨牧【名】王朝時代に、勅旨により て、朝廷の御料と定められたる牧場。每年八月その飼養の馬を朝廷に致す定なりき。

ちよく-しん 直進【名】躊躇せずにすすむこと。まっすぐにすすむこと。直往。

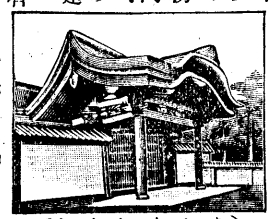
ちよく-しん 直臣【名】忠直なる臣。ただしき臣下。

ちよく-しん 勅信・勅信【名】ちよくし(勅

使）に同じ。

ちよくじん 直人【名】『文中子に「子謂二魏徵一曰、汝與レ凝皆天之直人也。徵也遂、凝也挺、若幷行二於時一、有二用捨一焉」とあり』正直なる人。

ちよくしもん 勅使門・敕使門【名】寺院にて、勅使參向の時の通用門として建てたる門。


（んもしくよち）

ちよくしや 直者【名】なほき人。正しき人。「すこと。

ちよくしや 直寫【名】そのまま書きうつ

ちよくしや 直射【名】一まともに射ること。まっすぐにそそぐこと。二まともに照すこと。まっすぐに照すこと。「日光の直射」三『英 Direct fire』强裝せる火藥を用ひて、低き彈道をなすやう砲を射撃する法。四【數】せい（正射）に同じ。

ちよくしやう 勅請・敕請【名】勅旨による請待（ショウ）。「勅ヂ）に同じ。

ちよくじやう 勅狀・敕狀【名】ちよくしよ

ちよくじやう 直上【名】一すぐの上にあたる處。まうへ。（直下に對して）二まっすぐに上ること。（直下に對して）

ちよくじやう 直情【名】『次條を見よ』已の思ふままに矯めず飾らぬこと。直情徑行【句】『禮記の檀弓下篇に「子游曰禮有二微レ情者一、有二以故興物者一、有二直レ情而徑行者一、戎狄之道也」とあり。徑行は徑（タダ）に行ふ義』心のままを、矯めず飾らず擧動にあらはすこと。眞率なる性行。

ちよくしやく 直尺【名】ものさしの一種。眞直なる金屬・竹木又は象牙等にて作り、目盛をなせるもの。

ちよくしやづはふ 直射圖法【名】〔地〕次條に同じ。（航海圖法・圓錐圖法に對して）

ちよくしやとうえいはふ 直射投影法【名】〔地〕次條に同じ。

ちよくしやとうしづはふ 直射透視圖法【名】〔地〕せいしやとうしづはふ（正射透視圖法）に同じ。

ちよくしやはつ 直射砲【名】僅少なる俯仰可度にて發射する砲。海軍の艦砲は、航空機射撃砲の外は、皆この種の砲なり。ちよくしや（直射）三參照。

ちよくしゆ 勅修・敕修【名】〔佛〕勅旨により、法を修し又は言句を修撰すること。

ちよくじゆ 直授【名】直接に授け又は授かること。

ちよくじゆ 勅授・敕授【名】『勅命により、授くる義』大寶令の制にては、内外五位の敍位、六等以上の敍動。現時の制にては、從四位以上の敍位にして、宮内大臣これを奏行す。（奏授・判授に對して）「と。

ちよくしゆ 濁酒【名】だくしゆ（濁酒）に同

ちよくじゆたいけん 勅授帶劍【名】帶劍すまじき職にありながら、勅許を蒙りて、特に劍を帶すること。

ちよくしゆつこでん 勅修御傳・敕修御傳【名】〔書〕淨土宗の開祖法然（ネン）の繪詞傳。比叡山・功德院の舜昌が後伏見上皇の勅命に由りて撰述せしもの。四十八卷。法然上人行狀畫圖。

ちよくじゆねんき 勅授位記・敕授位記【名】令制に於ける勅授の際に賜ひし位記。

ちよくじゆねんきしき 勅授位記式・敕授位記式【名】勅授位記の書式。

ちよくしよ 勅書・敕書【名】一勅旨を書きて下す公文書の一。尋常の小事に用ふ。

せうしよ（詔書）參照。二〔法〕皇室又は國家の事に關する勅旨を記載して、受命者に下付する文書。親署・御璽の次に、宮内大臣（皇室の事務に關する場合）もしくは總理大臣（國家の事務に關する場合）、年月日を記入して副署す。**せうしよ**（詔書）參照。

ちよくしよさつ 勅書莊・敕書莊【名】ちよくしよさう（勅旨莊）に同じ。

ちよくしるる 直翅類【名】〔動〕昆蟲類の一目。やや脈翅類に似、變態不完全にして、口部は咀嚼（ヤク）に適し、翅は直くして、脈多く、前翅は細く、後翅より堅牢にして、後翅を保護する用をなし、後翅は幅廣くして、專ら飛翔の用をなす。螳螂（カマキリ）・螻蟻（ケラ）・蝗（イナゴ）・螽蟖（クツワムシ）・鉦斯（スイッチョ）・鈴蟲・松蟲・蟋蟀（コホロギ）等、これに屬す。

ちよくす 直す【動佐變自】とのゐす。宿直「す。

ちよくせ 濁世【名】〔佛〕『法華經の勸持品に「濁世惡比丘」とあり』「濁惡（ジヨク）の世」に同じ。盛衰記「國は衰散邊土なり、時は濁世末代なり」

濁世成佛（ジヨウブツ）【句】〔佛〕濁世の衆生が佛となること。盛衰記「三世の如來區區なりといへども、濁世成佛の導師なり」と。

ちよくせい 直請【名】直接に請願すること。

ちよくぜい 直稅【名】〔法〕ちよくせつぜい（直接稅）の略。（間稅に對して）

ちよくせう 勅詔・敕詔【名】一勅と詔と。詔勅。二みことのり。勅命。

ちよくせつ 直接【名】隔つる物無く、直ちに相接すること。うちつけ。ぢか。（間接に對して）

ちよくせつ 直截【名】まっすぐにきっぱりとしてあること。まはりくどくなきこと。「直截簡明」

ちよくせつかうどう 直接行動【名】『英 Direct action』一規範・制度等に束縛せられず、自己の可とする方法を執りて行動すること。二代議政治の精神に戻りて、實際政治の局に當りをらざる者が、相當の機關を經由せずに、政治上の行動をなすこと。

ちよくせつかうよう 直接効用【名】〔經〕『英 Direct utility』財貨の効用の一。吾人の欲求を直接に滿足せしめ得べき場合に於けるもの。（間接効用に對して）

ちよくせつかはせ 直接爲替【名】『英 Direct exchange』爲替の普通なる場合、即ち或國の商人が他國の商人へ送金するとき、その國家の手形を買入るる場合のもの。（間接爲替に對して）

ちよくせつきくわん 直接機關【名】〔法〕『獨 Unmittelbare Staatsorgan』國家機關の一。國家の意志を構成する自然人の、憲法上直接に國家機關たるもの。君主國の君主・攝政、共和國の國會の如きこれなり。（間接機關に對して）

ちよくせつきやうせい 直接强制【名】〔法〕行政處分によりて、個人のなすべき行爲を强制して、履行せしむる方法。例へば、警察官吏が交通の妨害となる群衆を直接に强制して、解散せしむる類。

ちよくせつきやうせいこうさい 直接强制公債【名】强制公債の一種。各人の財力に應じて、强制的に引受けしむるもの。（間接强制公債に對して）

ちよくせつきやうせいこくさい 直接强制國債【名】强制國債の一種。各人の財力に應じて、强制的に引受けしむるもの。（間接强制國債に對して）

ちよくせつぜい 直接稅【名】〔法〕直接國稅【名】直接稅の性質なる區稅。（間接區稅に對して）

ちよくせつけいけん 直接經驗【名】〔哲〕『獨 Unmittelbare Erfahrung』推理・聯想等の作用によりて變化を與へられざる經驗。

ちよくせつけうさ 直接敎唆【名】〔法〕けうさ（敎唆）一に同じ。（間接敎唆に對して）

ちよくせつこくさいうりだしはふ 直接國債賣出法【名】〔經〕いつぱんこくさいぼしふはふ（一般國債募集法）に同じ。（間接國債賣出法に對して）

ちよくせつこくさいはつかうはふ 直接國債發行法【名】〔經〕いつぱんこくさいぼしふはふ（一般國債募集法）に同じ。（間接國債發行法に對して）

ちよくせつこくさいぼしふはふ 直接國債募集法【名】〔經〕いつぱんこくさいぼしふはふ（一般國債募集法）に同じ。（間接國債募集法に對して）

ちよくせつこくぜい 直接國稅【名】〔法〕『英 Direct national tax』國稅の一種。直接に納稅者の負擔するもの。分ちて、對人國稅（所得稅）・對物國稅（地租・營業稅・相續稅）の二種とす。（間接國稅に對して）

ちよくせつこくぜいふかぜい 直接國稅附加稅【名】〔法〕直接國稅に附加して課する地方稅。（間接國稅附加稅に對して）

ちよくせつ-しぜい 直接市税【名】直接税たる市税。(間接市税に對して)

ちよくせつ-しちやうそんぜい 直接市町村税【名】〔法〕市町村にて、直接税として課する租税。分ちて、直接國税附加税府縣税附加税及び段別税となす。(間接市町村税に對して)

ちよくせつ-しっかう 直接執行【名】〔法〕ちよくせつきやうせい(直接强制)に同じ。

ちよくせつ-しんいせつ 直接神意説【名】〔基〕神が直接に國家を創造し、その意志を法律に發現すとなす説。(間接神意説に對して)

ちよくせつ-しんり 直接審理【名】〔法〕裁判官が直接五官的實驗によりて審理すること。例へば、判決裁判所の判事が辯論證言を直接に聽き、證據物件を自ら點檢する類。(間接審理に對して)

ちよくせつしんり-しゆぎ 直接審理主義【名】〔法〕『獨 Unmittelborkeitsprinzip』審理の方式の一。直接審理に據るもの。(間接審理主義に對して)

ちよくせつ-しやげき 直接射撃【名】〔兵〕目標を通視し得る射撃。(間接射撃に對して)

ちよくせつ-じゆんそく 直接準測【名】ちよくせつすゐじゆんそくりやう(直接水準測量)の略。

ちよくせつ-しようこ 直接證據【名】〔法〕證明を要する事實を、直接に證明するもの。單に證據ともいふ。(間接證據に對して)

ちよくせつ-すゐじゆんそくりやう 直接水準測量【名】『英 Direct leveling』水準測量の一方法。水準器を使用して、直接に高さ又は高さの差を見出すもの。酒精準測。直接準測。(間接水準測量に對して)

ちよくせつ-すゐり 直接推理【名】〔哲〕『英 Immediate inference』他の概念の媒介を經ず、單一の前提よりして、直接に結論を生ずる推理。前提に含まれたる斷定を分解するに過ぎざるが故に、知識に益する所少なし。間接推理中の演繹推理にありても、「彼は不攝生なるが故に、病に罹るべし」といふが如きは、直接推理に似たる形式にて行はるること多けれども、實は、「不攝生なる者は、すべて病に罹るべし」との一前提を省略せるなり。

ちよくせつぜい 直接税【名】〔法〕『英 Direct tax』租税の一種。納税者の直接に負擔するもの。即ち租税負擔者の明かなるもの。例へば、地租・所得税・營業税及び鑛業税など。直税。(間接税に對して)

ちよくせつ-せいさんひ 直接生産費【名】〔經〕『英 Direct productive expense』生産費の一種。生産事業をなすに直接に要する經費。(間接生産費に對して)

ちよくせつ-せいはん 直接正犯【名】〔法〕正犯の一。自ら犯罪を實行したるもの。實行正犯。(間接正犯に對して)

ちよくせつ-せうひぜい 直接消費税【名】〔法〕消費税の、生産者又は販賣者より納むるものに對して、課税品の消費者より直接に納むるもの。例へば、馬車・畜犬に課する税の類。(間接消費税に對して)

ちよくせつ-せんきよ 直接選舉【名】〔法〕『英 Direct election』選舉の一法。選舉人が直接にその選舉の目的たる人を選舉するもの。單選舉。(間接選舉に對して)

ちよくせつ-せんれう 直接染料【名】『英 Direct dye』媒染劑を用ひずして、直接に纖維を染得る染料。

ちよくせつ-そけん 直接訴權【名】〔法〕はいひとけん(廢罷訴權)に同じ。(間接訴權に對して)

ちよくせつ-だいり 直接代理【名】〔法〕『英 Direct representation』代理人が、本人の名に於て、本人のために意思表示をなすに因りて、その意思表示の効力を直接に本人に對して生ぜしむること。(間接代理に對して)

ちよくせつ-だんぱん 直接談判【名】おかだんぱん(直談判)に同じ。

ちよくせつ-ちやうそんぜい 直接町村税【名】町村に於いて、直接税として課する租税。(間接町村税に對して)

ちよくせつ-ちようしうはふ 直接徴收法【名】Ⅰ租税手數料徴收法の一。現金を以て納付せしむるもの。Ⅱ租税徴收法の一。中央官廳が地方行政官公署の手を經ずして、直接に徴收するもの。(間接徴收法に對して)

ちよくせつ-とりひき 直接取引【名】ちきとりひき(直取引)Ⅰに同じ。

ちよくせつ-ばいばい 直接賣買【名】代理業者を經ずして、直接に行ふ賣買。(間接賣買に對して)

ちよくせつ-はふ 直説法【名】〔語〕『英 Indicative mood』動詞の法の一。動作を有りのままに直説するもの。分ちて、終止法・連用法・連體法の三となす。(曲説法に對して)

ちよくせつ-はんばい 直接販賣【名】『英 Direct sale』仲介者の手を經ずして、直接に販賣すること。(間接販賣に對して)

ちよくせつ-ひれう 直接肥料【名】肥料の、その三要素、即ち窒素・燐酸・加里のうち、一二乃至全部を具へ、直接に作物の養料となるもの。單に肥料といふは、通常この物に外ならず。即ち人糞・過燐酸石灰・乾魚・木灰等の如きもの。(間接肥料に對して)

ちよくせつ-ふけんぜい 直接府縣税【名】府縣にて、直接税として課する租税。戸數割・家屋税・營業税・雜種税及び直接國税附加税の五種に分つ。(間接府縣税に對して)

ちよくせつ-ぶんれつ 直接分裂【名】〔生〕一細胞の中部次第に縊れ、遂にそこより二細胞に分離する現象。

ちよくせつ-ぼうえき 直接貿易【名】〔經〕『英 Direct trade』外國人の手を經ずして、自國人が直接に輸出輸入をなすこと。(間接貿易に對して)

ちよくせつ-ぼしふはふ 直接募集法【名】〔經〕いつぱんこくさいぼしふはふ(一般國債募集法)に同じ。

ちよくせつ-みんしゆせいたい 直接民主政體【名】〔法〕『獨 Unmittelbare Demokratie』民主政體の一。參政權を有する人民のすべてを以て組織したる國民總會にて、直接に統治作用を總攬するもの。現今にては、瑞西聯邦の二三の小州にて行はるるのみなり。(間接民主政體に對して)

ちよくせつ-めん 直截面【名】〔數〕角壔の側稜に垂直なる平面の、その角壔(かくとう)を截り、又、圓壔の線に垂直なる平面の、その圓壔を截りて生じたる平面。直截口(ちよくせつこう)。

ちよくせつりかう 直接履行【名】〔法〕義務の履行を怠りたる者に對し、裁判所より、これが履行を命ずること。

ちよくせつりようかち 直接利用價値【名】〔經〕『獨 Unmittelbarer Gebrauchswert』りようかち(利用價値)に同じ。

ちよく-せん 勅撰・敕撰【名】勅命により て、書籍を作ること、又天子の親ら書籍を作りたまふこと。

ちよく-せん 勅選・敕選【名】天子親ら選抜したまふこと。天皇の御選定。

ちよく-せん 勅宣・敕宣【名】勅命の宣旨。みことのり。勅諚。平家「ちよくせんのしいしゆをまもつて」太平記「勅宣三度に及びければ」

ちよく-せん 直線【名】Ⅰ眞直なるすぢ。線。Ⅱ〔數〕『英 Straight line』眞直なる線。其の何れの一部分を取りて、他の部分に重ぬるも、各部分全く重り合ふ如き線。又、二點の間をつなぐ最短距離は、この線なり。(曲線に對して)

直線上の平面形【句】〔數〕正方形の一邊が、支へられたる直線に等しきもの。

ちよく-ぜん 直前【名】Ⅰ躊躇せずに進み出づること。Ⅱすぐの前にあたれる處。(直後に對して)

ちよくせん-うんどう 直線運動【名】〔理〕『英 Rectilinear motion』物體の運動の、一直線上を移行し、その方向の恆に同一なるもの。

ちよくせん-かしふ 勅撰歌集・敕撰歌集【名】〔書〕勅命を奉じて撰したる和歌集。醍醐天皇の朝に於ける古今集に始まり、後花園天皇の朝の新續古今集に終る。總稱して二十一代集といふ。また三代集・八代集・十三代集等の名目もあり。勅撰和歌集。

ちよくせん-ぎゐん 勅選議員【名】勲功又は學識ある滿三十歳以上の者を勅選して、任命せらるる貴族院議員。任期は終身。員數は百二十五人以内にして、多額納稅議員と合はせたる數が有爵議員の數以上なるを得ざる定とす。

ちよくせん-けい 直線形【名】〔數〕ちよくせんへいめんづけい(直線平面圖形)に同じ。

ちよくせん-さくしやぶるゐ 勅撰作者部類【名】〔書〕古今集より新千載集に至る、作者の官位・世系、又その集に入れる歌の數をも記せるもの。三卷。僧元盛の著。

ちよくせん-しそう 勅選詩宗【名】けいくわんしそう(桂冠詩宗)に同じ。

ちよくせん-しふ 勅撰集【名】〔書〕ちよくせんかしふ(勅撰歌集)の略。

ちよくせん-づ 直線圖【名】〔數〕ちよくせんへいめんづけい(直線平面圖形)に同じ。

ちよくせん-へいめんけい 直線平面形【名】〔數〕次條に同じ。

ちよくせん-へいめんづけい 直線平面圖形【名】〔數〕たかくけい(多角形)に同じ。

ちよくせん-わかしふ 勅撰和歌集【名】〔書〕ちよくせんかしふ(勅撰歌集)に同じ。

ちよく-そう 直送【名】直接に送ること。

ちよく-だい 勅題・敕題【名】一勅筆の題額。二天子自ら仰出されたる詩歌の題。

ちよくだい-えいさう 勅題詠草【名】勅題を讀みし和歌の草稿。

ちよく-だう 直道【名】一眞直なる道路。直路。二人の履行すべき正しき道。正道。三『道を直くする義』自家の信ずる道を矯めずに行ふこと。

ちよく-たふ 直答【名】一その場にて直ちに答ふること。卽答。二人づてならず直接に答ふること。ぢきたふ。

ちよく-たふ 勅答・敕答【名】一天子の御答。二(誤りて)天子の御下問に答へ奉ること。太平記「主上、…正行を近く召して、…正行、頭を地につけて、とかくの勅答に及ばず、只これを最期の參內なりと思ひ定めて退出す」「する使者。

ちよく-たふし 勅答使【名】答勅[ト]を傳達の高等官の場合にて、辭令書に、御璽(ギョジ)を捺し、內閣總理大臣これを奉行す。

ちよく-だん 勅斷・敕斷【名】天皇の御裁斷。勅裁。宸斷。聖斷。

ちよく-ちやう 直腸・直腸【名】〔醫〕『英Rectum』大腸と肛門との間にありて、不消化物を肛門に送る管。だいちやう(大腸)參照。

ちよく-ちやう 勅諚・敕諚【名】天子の仰せ。勅命。平家「勅諚なれば、人に車借つて、蟾峨へゆきむかふ」

ちよく-ちやう-えん 直腸炎【名】〔醫〕『羅Proctitis』糞便、異物の刺戟、直腸の潰瘍等に因りて起る病。肛門の灼熱・痛痒を感じ、疼痛・下痢・下血等あり。

ちよく-ちやう-しうゐえん 直腸周圍炎【名】〔醫〕『羅Periproctitis』直腸の異物・潰瘍及び外傷等より直腸の周圍結締織に感染して起る炎症。

ちよくちゆう-たい 直柱體【名】〔數〕せいかくたう(正角壔)に同じ。

ちよく-ちよく【副】ちよくちよくぎ ちよくちよく著【名】ちよいちよいぎ(ちよいちよい著)に同じ。

ちよく-つう 直通【名】一二つの地點間を、障碍も中繼もなく、直接に通ずること。二列車が、直接に目的地に通ずること。

ちよくつう-れつしや 直通列車【名】中間にて乘換ふる必要なく、ただちに目的地に通ずる列車。

ちよく-てい 勅定・敕定【名】勅命によりて定むること。

ちよく-ていけい 直梯形【名】〔數〕『英Trapezoid』平行せざる二邊の中の一邊が平行邊に對して、垂直なる梯形。

ちよく-どう 直動【名】〔地〕じやうかどう(上下動)に同じ。

ちよくどく-ちよくかい 直讀直解【名】西洋文を解釋するに、なるべく語句の順序に意味を取りて、下より上へ返ることを少なくすること。「同じ。

ちよく-にち 直日【名】ちよくじつ(直日)に同じ。

ちよく-にん 勅任・敕任【名】天子の親しく官職に任じたまふこと、又その官職。昔は大納言以上及び左右大辨・卿・五衞府の督・彈正尹・太宰帥(ソチ)・皇太子傅(フ)など。現時の制度にては、親任官及び一等・二等の官に對して)

ちよくにんくわん-たいぐう 勅任官待遇【名】勅任官にあらずして、その待遇を受くること、又その者。例へば、錦雞間祗候などの類。勅任待遇。

ちよくにん-さんじくわん 勅任參事官【名】勅任の參事官の通稱。勅參。

ちよくにん-たいぐう 勅任待遇【名】ちよくにんくわんたいぐう(勅任官待遇)の略。

ちよく-の-べったう 勅別當【名】古、親王家と齋院司とに置かれし職員。親王家の長官にして、侍者・御監以下を指揮して、家政を主宰し、齋院司の長官にして、齋院司は、親王家のより後れて設置せられしものにて、齋院司長官の上位に在りて、庶務を總掌せり。共に公卿の兼任にして、別勅を以て補せられたり。勅別當。

ちよく-はいたつ 直配達【名】直接に配達すること。「電報直配達區域」

ちよくほう-たい 直方體【名】〔數〕ちよくろくめんたい(直六面體)に同じ。

ちよくほう-たい 直堡體【名】〔數〕ちよくろくめんたい(直六面體)に同じ。〔和算の語〕

ちよく-はかせ 直博士【名】ぢきはかせ(直博士)を見よ。

ちよく-ひ 直披【名】ぢきひ(直披)に同じ。

ちよく-ひつ 直筆【名】一筆をまつすぐに持ちて書くこと。「懸腕直筆」二事柄をつつみ隱さずに書きしるすこと。

ちよく-ひつ 勅筆・敕筆【名】天子の親ら筆を執りて書かせ給ふこと。宸筆。

ちよくひつ-やう 勅筆樣・敕筆樣【名】次條に同じ。

ちよくひつ-りう 勅筆流・敕筆流【名】和樣(ヤウ)書道の一派。後圓融院の勅筆(もと尊圓法親王より出で、廣く諸流を折衷せられたり)を祖とす。後柏原院流及び三條院流は、更にこれより出づ。

ちよく-ふ 勅符・敕符【名】勅命によりて下す符。例へば、讓位の時、伊勢・近江・美濃の三國の國司に、關を固むべき由を仰せ下されし文書の類。

ちよく-ふう 勅封・敕封【名】勅命によりて封印すること。

勅封の倉【句】勅命によりて封じ、妄りに開く事を禁ずる倉。奈良の東大寺正倉院の如きもの。

ぢよく-ふく 匿伏【名】かくれひそむこと。

ちよくふく-きん 直腹筋【名】〔醫〕『羅Musculus rectus abdominis』前腹の三層より成る最下層なる筋肉。卽ち尖端を下方に向けて延長せる、三角形の扁平筋肉にして、前腹壁の主部をなす。

ちよく-べったう 勅別當【名】「勅の別當」に同じ。

ちよく-ほ 勅補【名】勅旨にて補すること。

ちよく-ぼく 直木【名】眞直なる立木。

直木は先づ伐らる【句】『莊子に「直木先伐、甘井先竭」とあり』才能ある者は、早く衰へ廢るる譬。〔諺語〕

ちよく-ほん 勅本・敕本【名】勅旨によりて板行したる本。

ちよく-みやく 直脈【名】〔植〕へいかうみやく(平行脈)に同じ。

ちよくみやくえふ 直脈葉【名】〔植〕へいかうみやくえふ(平行脈葉)に同じ。

ちよくん 儲君【名】一くわうそん(皇儲)に同じ。二皇嗣たるべき皇子に宣下せらるる稱。

ぢよくん 女訓【名】婦女子のための敎訓。

ぢよぐん 女群【名】婦女のむれ。女隊。

ちよく-めい 勅命・敕命【名】一天子の仰せ。みことのり。勅諚。二天皇の下し給ふ命令。勅命。三〔佛〕『如來は無上法王なるよりいふ』如來の敎命

勅命に背く者は劍(ギッ)を歩むが如し【句】勅命に背くものは、その身危きをいふ。〔諺語〕

ちよく-めん 勅免・赦免【名】勅命による免許、又は赦免。太平記「吉野殿へ奏聞を經て、勅免を蒙り、宣旨に任せて、都を傾け、將軍を攻め奉らんは、天の忿、人の譏もあるまじとて」

ちよく-もん 勅問・敕問【名】天子の御下問。

ちよく-や 直夜【名】宿直の夜。

ちよく-やく 直約【名】天子の御約束。盛衰記「かねての勅約はありしかども、八幡大菩薩の仰、いかでか背き奏すべき」

ちよく-やく 直譯【名】外國の文書を、その文言通りに、邦語になほすこと。(意譯に對して)「文體。」

ちよくやく-たい 直譯體【名】直譯風なる文體。

ちよく-ゆ 勅諭・敕諭【名】■天子よりの御さとし。勅命。■ぐんじんちよくゆ(軍人勅諭)の略。

ちよく-ゆ 直喩【名】〔文〕ちよくゆほう(直喩法)に同じ。

ちよくゆしゅつ-ぼうえき 直輸出貿易【名】『輸の字の音、正しくはしゅ』直輸出による貿易。

ちよくゆにふ 直輸入【名】『輸の字の音、正しくはしゅ』外國貨物を、仲介商人の手を經ずに、直接に輸入すること。ちきゆにふ。

ちよくゆにふぼうえき 直輸入貿易【名】『輸の字の音、正しくはしゅ』直輸入の方法による外國貿易。

ちよくゆ-ほう 直喩法【名】〔文〕『英 Similie』修辭上、多くは「譬へば」「恰も」「如し」「似たり」等の語を用ひて、一物をあらはに他に喩(たと)ふる方法。例へば「角は鹿に似、頭は駝の如し」の類。明喩法。

ちよくゆほうぶくしき 勅諭奉讀式【名】軍人勅諭を奉讀する儀式。「同じ。

ちよくら-ちよっ-と 【副】ちよっくらちよっとに

ちよく-らん 濁亂【名】〔佛〕惡事盛んに起りて、人を濁し、世を亂すこと。又、身の惡法に濁りたること。およくあく(濁惡)參照。

譬曲(身延)「濁亂の衆生なれば」

ちよく-りゅう 直流【名】■まっすぐになるながれ。■〔理〕『英 Direct current』同一方向にのみ通ずる電流。例へば、電池より生ずる電流の類。(交流に對して)

ちよくりゅう-だいなも 【名】〔理〕ちよくりうはつでんき(直流發電機)に同じ。

ちよくりゅう-でんどうき 直流電動機【名】〔理〕『英 Direct current motor』電動機の一種。直流により働くもの。

ちよくりう-はつでんき 直流發電機【名】〔理〕『英 Direct current dynamo』發電機の一種。發電子中に發生する交流を、整流子の裝置によりて、直流に變ぜしめたる上、外部の導線に傳はり來るやうにしたるもの。直流だいなも。

ちよく-りつ 直立【名】『立の字の音、正しくはりふ』■まっすぐに立つこと。「直立不動の姿勢」■山などの高く上方に聳えてあること、又その高さ。「直立六千尺」■すうちよく(垂直)に同じ。

ちよくりつ-えふ 直立葉【名】〔植〕『英 Erect leaf. 立の字の音、正しくはりふ』直立せる、又は殆んど直立せる葉。「あやめ」「かきつばた」等の葉の類。

ちよくりつ-けい 直立莖【名】〔植〕『英 Erect stem 立の字の音、正しくはりふ』地上莖の一。眞直に上方に生長するもの。普通の莖はこれに屬す。

ちよくりつ-しせい 直立姿勢【名】『立の字の音、正しくはりふ』身體の、直立せる姿勢。

ちよくりつ-せき 直立跡【名】〔美〕『立の字の音、正しくはりふ』投影畫にて、線の立直面と交切する點。

ちよくりつ-せつめん 直立截面【名】〔數〕『英 Plane of vertical section 立の字の音、正しくはりふ』任意曲面上の一點に於て、その曲面に垂直に截りたる平面。

ちよくりつ-せん 直立線【名】〔數〕立の字の音、正しくはりふ』水平面に對して垂直なる直線。

ちよくりつ-たい 直立體【名】『英 Vertical style 立の字の音、正しくはりふ』直立せるかたち。「直立體英習字帖」

ちよくりつ-めん 直立面【名】〔數〕『英 Vertical plane 立の字の音、正しくはりふ』一の平面に對して垂直なる平面、即ち一の平面に對して、これに對する垂直線を含む平面。「見よ。

ちよく-りふ 直立【名】ちよくりつ(直立)を

ちよく-れい 勅令・敕令【名】■天皇の命令。勅命。詔令。■〔法〕國務に關し、天皇が、帝國議會の協贊を經ずして、その大權によりて制定・發布せらるる命令。憲法・法律に牴觸せず、また法律事項に屬せざる事項に就きて規定し、上諭を附して公布す。臣民の權利・義務に直接の關係を有すると雖ども、緊急勅令はその例外にして、法律を改廢する效力を有す。

法律に代るべき勅令【句】〔法〕きんきふちよくれい(緊急勅令)に同じ。

法律の力を有する勅令【句】〔法〕前條に同じ。「すること。

ちよく-れい 直隷【名】直接に天子に隷屬

ちよく-れつ 直列【名】〔理〕『英 Series』各異なる電極を順次に連結すること。例へば、(+)より(−)、(−)より(+)と一列に繼ぐが如し。(並列に對して)

ちよくれつ-くわいろ 直列回路【名】〔理〕直列式に連結せる電氣の回路。(並列回路に對して)

ちよくれつ-とう 直列燈【名】『英 Series lamp』數多の電燈を直列に連結して、點火すべからしめたる電燈、即ち直列回路に用ふる電燈。(並列燈に對して)「し。

ちよく-れん 直輦【名】ぬりごし(塗輿)に同

ちよく-ろ 直廬【名】■古、內裡にありて、攝政・關白・大臣・大納言などの宿直もしくは休息せし所。〔古語〕月讀「內裡のちよくろにはべりけるころ」■ごこよ(小御所)に同じ。「同じ。

ちよく-ろ 直路【名】ちよくだう(直道)■に

ちよく-ろく 勅祿・敕祿【名】古、勅旨によりて、臨時に四絹・大絁(オホキ)・綿その他の物を賜ひしこと、又その物。大鏡「躬恒(ミツネ)を召して、…大褂(オホホウ)賜ひて、…さばかりの者を近う召寄せて、勅祿賜はすべきことならねど」

勅祿の手【句】『普通本に、祿は錄に作る。これを舞ふ時は、勸賞を賜はりしよりいふ』胡飲酒(コイン)の舞の異稱。增鏡「ちよくろくの手といふ事仕うまつる時」

ちよく-ろくめんたい 直六面體【名】〔數〕『英 Parallelepiped』各面が矩形なる平行六面體。直方體。直堡體。

ちよく-わ 直話【名】ちきわ(直話)に同じ。

ちよくわ 女媧【名】支那の太古に、伏犧氏に次ぎて立ちし帝(一說に、女帝)にて、諸侯に共工氏あり、祝融と戰ひて敗れ、怒りて、頭を不周山に觸れしため、天柱折れ、地維缺けし時、五色の石を鍊りて、天を補へりと傳へらるる神人。又、笙簧(シヤウクワウ)を作れりといふ。「同じ。

ちよくわ 女科【名】ふじんくわ(婦人科)に同じ。

ちよくわ 女禍【名】ちよなん(女難)に同じ。

ちよくわ 除外【名】範圍外又は規定外におくこと。とりのけ。

ちよくわい-はふ 除外法【名】〔法〕『英 Exception law』一般の法規に對して、或特別なる場合を律せんがため、その一般法規を除外せんとする法規。商法は民法に對し、陸海軍刑法は普通刑法に對して、除外法の一なるが如き類。特別法。

ちよくわい-れい 除外例【名】除外せられたる、また除外すべき例。例外。「同じ。

ちよくわう 儲皇【名】くわうちよ(皇儲)に同じ。

ちよくわう 直往【名】■躊躇せずに直ちに往くこと。ひたゆきにゆくこと。直前。勇往。■まっすぐに往くこと。

ちよくわう 女皇【名】女の皇帝。女帝。

ちよくわうし 女媧氏【名】ちよくわ(女媧)を見よ。

ちよくわん 女官【名】宮中に仕ふる婦人。宮中の女官は典侍・權典侍・掌侍・權掌侍・命婦・權命婦とし、東宮の女官は東宮女官長・東宮女官・東宮女孺とす。にようくわん(女官)參照。

ぢょくわん 除官【名】『官に除する義。ぢょす(除す)(二)参照』任官。敍官。

ぢょくゐ 勅威・敕威【名】聖勅の威光。盛衰記「就中、亡父太政大臣…重ニ勅威ニ軽ニ愚命ニ」

ぢょくゐ 直位【名】ぢきゐ(直位)に同じ。

ぢょくゐん 直員【名】(一)朝鮮の經學院の職員。庶務を掌るもの。(二)朝鮮の府・郡に於ける文廟を直守し、又庶務を掌る名譽職。各文廟に一名を置く。

ぢょくゑ 勅會・敕會【名】(一)勅旨によりて修する法會、即ち天台三會・南京三會の類。(二)ぢょくがく(勅樂)に同じ。

ぢょくゑんすゐ 直圓錐【名】〔數〕『英Right circular cone』頂點より底に引ける垂線が、その底面の中心を通過する圓錐。直角三角形をその直角に隣る一邊を軸として一回轉せしむるとき、この形を生ず。

ぢょくゑんたう 直圓壔【名】〔數〕『英Right circular cylinder』母線が母圓の面に對して垂直なる圓壔。矩形の一邊を軸として一回轉せしむるとき、この形を生ず。

ぢょくゐ 女形【名】女のかたち。

ぢょくゐ 女兄【名】あね(姉)に同じ。

ぢょくゐ 女系【名】によゐ(女系)に同じ。(男系に對して)

ぢょけい-にち 除刑日【名】江戸時代に、重き祝祭日・將軍の忌日等にて、刑罰を執行せざることに定めたる日。

ぢょ-けう 女敎【名】女に對する敎訓。女訓。女誡。『浮世風呂』世に女敎の書許多(ママ)あれど、女大學・今川の類、丸藥の口に苦ければ、婦女子も心に味ふこと勘し」

ぢょ-けうし 女敎師【名】女の敎師。女子の敎員。女敎員。

ぢょ-けうゐん 女敎員【名】前條に同じ。

ぢょ-けつ 女傑【名】女子にて、智勇の衆にすぐれたるもの。女丈夫。

ぢょ-げつ 除月【名】『ぢょじつ(除日)を見よ』陰暦十二月の異稱。

ぢょ-げん 緒言【名】しょげん(緒言)の誤讀。

ぢょ-けん 女權【名】女子の權力また權利。

ぢょ-げん 女言【名】婦女子の言語。

ぢょ-げん 女衒・女見【名】ぜげん(女衒)に同じ。不角、一騎討後集「女見をば親父ぢゃというて遣る妹」

ぢょけんはんけつ 除權判決【名】〔法〕『英Judgment of exclusion』公示催告に對し、請求權利の屆出又は證書の提出なき場合に、その權利の喪失を宣言する判決。

ぢょこ 猪口【名】(一)ちょく(猪口)の轉訛。(二)ちょこざい(猪口才)の略。〔俚語〕「じ。

ぢょ-こ 女戸【名】ぢょこしゅ(女戸主)に同じ。

ぢょ-こう 女工【名】(一)女の手仕事。女の職工。工女。(男工に對して)(二)婦女の仕事。女の手わざ。をんなの仕事。婦功。〔女功・女紅〕百合若大臣野守鏡「殊に立花女工の手利(テキ)、柳の皮をたいてうみつむぎ」

ぢょこう-ば 女工場・女功場・女紅場【名】女の、手仕事をする所。ぢょこうぢやう。

ぢょ-こく 女國【名】『東海の女國』を見よ。

ぢょこ-ざい 猪口才【名】『猪口は假借の字、ちょこちょこする意』あさはかなる小才。なまいき。こりこう。續膝栗毛「こりや、えらいへげたれぢや。…へへ、猪口才な」

ぢょ-こしゅ 女戸主【名】女子の戸主たるもの。にょこしゅ。ぢょこ。「方言」

ぢょこ-ぢょこ 【貌】(一)足取こまかに歩むさま。續膝栗毛「ちょこちょこと足の運の輕いは」(二)擧動の輕率にてせはしげなるさま。ちょかちょか。ちょこまか。〔俚語〕(三)ちょこちょこ-あるき に同じ。

ぢょこぢょこ-あるき ちょこちょこ歩【名】ちょこちょこと歩むこと。ちょろちょろあるき。

ぢょこぢょこ-ばしり ちょこちょこ走【名】ちょこちょこと走ること。こばしり。〔俚語〕天の網島「人だちまぎれに、ちょこちょこばしり、とっ河内屋へかけこめば」

ぢょこ-なん 【貌】ぢょこんに同じ。

ぢょこ-ねん 【貌】前條に同じ。

ぢょこ-ぼ 除戸簿【名】臺灣の廳支廳に備へつけて、戸口調査簿より除外したる者を編綴して保存する帳簿。「語」

ぢょこ-まか 【貌】ぢょこぢょこ(二)に同じ。〔俚語〕

ぢょこん 【貌】ちぢまりてかしこまりゐるさま。ちょこなん。

ぢょごり 赤古里・褚【名】朝鮮服の一種。筒袖にして、身丈は腰の邊に及び、紐を以て結ぶ。色は冬は藍・鼠・紺・小豆等にして、夏は水色又は白色なり。洋服の上衣に當る。

ぢょこれえと (英Chocolate)【名】カカオ樹の種子、即ちココアを焙りて粉としたるもの、又はカカオの種子より油を搾りたる粕を煉固めたるもの。これに同量の砂糖及び少量の肉桂・バニラまた黄色の色素を混じ、香味を加へ、薯色して菓子に製し、又は湯に溶かして、飲料となす。かかお。

ぢょこれえと-のき チョコレエト樹【名】〔植〕かかお(柯柯阿)(一)に同じ。

ぢょ-さ 除沙【名】(一)すなをとりのぞくこと。(二)蠶の時、蠶を入れたる籠又は筵より、桑の屑又は蠶の糞を除き去ること。

ぢょ-ざい 樗材・樗才【名】ちょれき(樗櫟)に同じ。

ぢょ-ざい 貯財【名】ちくざい(蓄財)に同じ。

ぢょ-ざい 除歳【名】ぢょや(除夜)に同じ。

ぢょ-さい 除災【名】災害をのぞくこと。太平記「除災與樂の御祈」

ぢょ-さい 【名】ぢやうさい(定齋)の訛。

ぢょ-ざう 貯藏【名】(一)たくはへをさむること。しまひおくこと。貯蓄。(二)〔經〕『英Saving』生産を助くる目的はなくして、單に物を貯へおくこと。ちょちく(貯蓄)(三)參照。

ぢょ-さう 女相【名】女のかたち。女體。「よさう。

ぢょ-さう 女裝【名】男子が女子のよそほひをなすこと。によさう。(男裝に對して)

ぢょ-さう 除草【名】雜草を除き、又は雜草の生ぜぬやうにすること。くさとり。

ぢょさう-き 除草器【名】雜草を除くに使用する農具。我が國の草刈鎌のごときは、その最も簡單なるものなり。

ぢょさう-こ 貯藏庫【名】貯藏する倉庫。

ぢょさう-こん 貯藏根【名】〔植〕『英Reserve root』主根の多漿・肥大にして、組織内に、その植物の他日の發育の準備として、澱粉・砂糖・蛋白質その他の養分を貯藏せるもの。例へば、大根・牛蒡の根などの如き類。貯蓄根。

ぢょさう-ぜい 貯藏稅【名】〔經〕『獨Einlagebesteuerung』運搬稅の一。消費物の、發送後、收藏したるものに課するもの。

ぢょさう-でんぷん 貯藏澱粉【名】〔植〕『英Reserve starch』葉の同化作用により作られたる澱粉の、一たび溶解して、組織内を流動し、地下莖・塊根などの如き葉綠なくして、養分を貯藏すべき部分に行きて、再び澱粉の形となりをるもの。馬鈴薯(ジャガタライモ)・薩摩芋・片栗(カタクリ)・蕨等に見るが如きもの、これなり。(同化澱粉に對して)

ぢょさう-ひん 貯藏品【名】貯藏したる、又は貯藏すべき物品。

ぢょさうひん-かんぢやう 貯藏品勘定【名】〔商〕『英Store account』消耗品の、貯藏中に屬し、將來に於いて消費せらるべきものの勘定科目。消耗品は本來損益勘定に屬すべきなれども、將來に消費せらるべきものに對しては、特にこの科目を設けて處理す。

ぢょさう-まい 貯藏米【名】貯藏したる米。

ぢょ-さく 著作【名】(一)ちょじゅつ(著述)に同じ。(二)精神的勞力によるもの、即ち學術・文藝・美術などの範圍に屬するものを現出すること。文書・圖畫・樂譜・演述・彫刻・模型・寫眞などによりて、自己の意見・思想を發表すること。

ぢょさく-か 著作家【名】著作を業とする人。著述家。

ぢょさく-げふ 著作業【名】著作の職業。

ぢょさく-けん 著作權【名】〔法〕『英Copyright』著作者が行政官廳に申請し、登錄の手續を了へたるによりて、その著作物の複製・飜譯又は興行を占有する權利。著作者の生存中及び死後三十年間(二人以上の合著作なる場合には、最終に死亡したる者の死後三十年間)これを獨占することを得。但し、寫眞のみは十年とす。舊法には、單に版權と稱したり。出版權。

ぢょさくけん-しゃ 著作權者【名】〔法〕著作權を有する者。

ぢょさくけん-はふ 著作權法【名】著作者の權利及び僞作とその罰則等を規定した

る法律。舊版權條例に代へて、明治三十二年公布せしもの。

ちよくさく-さらう 著作佐郎【名】圖書助（ハカセ）の唐名。

ちよさく-しや 著作者【名】㊀著作業の人。㊁〔法〕著作物を著作したる人。

ちよさく-だう 著作堂【名】〔人〕たきざはきん（瀧澤馬琴）の號。

ちよさく-ぶつ 著作物【名】著作者により著作せられたる物。文章演述・圖畫・彫刻・建築・寫眞等、學藝・美術の範圍に屬するものを包含す。

ちよさくぶつ-ほごどうめい 著作物保護同盟【名】文學・美術に係る著作物を保護する目的にて、一八八六年瑞西國ベルンにて開催せし萬國同盟。英吉利・白耳義・佛蘭西・獨逸・ハイチ（Haiti）・伊太利・リベリヤ（Liberia）・西班牙・瑞西・チユニス（Tunis）等參加し、日本・丁抹は、後より加盟せり。

ちよさく-らう 著作郎【名】㊀唐代に、祕書省に屬する著作局の一等官。㊁づしよのかみ（圖書頭）及びないき（内記）の唐名。

ちよさん 樗散【名】『樗櫤散木の義』才無くして、世に用なき人。

ちよさん 樗蠶【名】〔動〕『樗（チヨ）の葉を食すを以て、此の名あり』天蠶蛾（ヤママユ）科に屬する昆蟲。幼蟲は綠色にして、體に多くの突起を有し、成長するに及びて、白粉を分泌す。老成すれば、繭を結び、その纖維は光澤あり。綿となし使用す。「同じ。

ちよざん 除算【名】〔數〕おはふ（除法）に同じ。

ちよし 儲嗣【名】くわうちよ（皇儲）に同じ。

ちよし 儲士【名】健兒（アヂア）の豫備ならんといふ。〔古語〕

ちよじ 儲貳【名】ちよし（儲嗣）に同じ。

ちよし 女子【名】㊀をんなのこ。よし。女兒。（男子に對して）㊁ふじん（婦人）の總稱。よし。（男子に對して）

女子と小人とは養ひがたし【句】『論語の陽貨篇に「子曰、唯女子與二小人一爲レ難レ養也、近レ之則不遜、遠レ之則怨」とあり』女子と小人とはてなづけ難し。

ちよし 女史【名】㊀『周禮の天官篇に「女史掌二王后之禮職一」とあり』古、支那にて、後宮に仕へて、記錄を掌りし女官。㊁我が國の古の女官の一。文書を掌りしもの。

ちよし 女使【名】女の使者。

ちよし 女史【接尾】女の學者・藝術家などの雅號などに添へていふ稱。

ちよじ 女侍【名】こしもとのをんな。

ちよじ 女兒【名】をんなのこ。女子。によじ。

ちよしう 女囚【名】女子の囚人。によう。（男囚に對して）

ちよしう 除臭【名】臭氣を除去すること。

ちよし-かうとうふつうがくかう 女子高等普通學校【名】女子師範學校・師範學校女子部・高等女學校などの女教員を養成し、兼ねて普通教育及び幼兒保育の方法を研究する目的の官立學校。現今、東京市と奈良市とに設置せらる。

ちよし-かうとうふつうがくかう 女子高等普通學校【名】女子に程度高き普通學を授くる學校。「京城女子高等普通學校」

ちよし-がくしふゐん 女子學習院【名】華族の女子教育のために設立し、宮内大臣の管理に屬する學校。明治十八年學習院の女子教科廢止と同時に設立したる華族女學校の後身にして、明治三十九年また學習院に合併せられて、學習院女子部と稱し、後、更に獨立して、現稱に改めたり。

ちよし-しき 女色【名】ちよしよく（女色）に同じ。五人女「我、そもそも出家せし時、女色はふつと思ひ切りし佛願なり」

ちよし-ぎげいがくかう 女子技藝學校【名】女子に技藝を授くる學校。

ちよし-しほんがくかう 女子師範學校【名】女子の小學校教員たるべき者を養成する學校。各府縣に設置せらる。しほんがくかう（師範學校）參照。

ちよし-しゆげいがくかう 女子手藝學校【名】女子に手藝を授くる學校。

ちよし-しよくげふがくかう 女子職業學校【名】女子に、裁縫・刺繍等の職業に就くに必要なる知識・技能を授くる學校。

ちよじつ 除日【名】『その日かぎりにて、その歳の除かるる意。』**ちよげつ**（除月）**ちよや**（除夜）參照』一年の最終の日。大晦日。

ちよにち（除日）參照。

ちよじん 儲人【名】ちよし（儲士）に同じ。

ちよじん 女眞【名】支那吉林省の東北部より露領沿海洲方面に住せるツングウス民族。古の靺鞨（マツカツ）・金清兩朝の帝室はこの民族より出でたり。つんぐうす（通古斯）參照。

ちよじん 女神【名】女の神。めがみ。

ちよじん-もんだい 女子問題【名】ふじんもんだい（婦人問題）に同じ。

ちよしや 著者【名】その書物を作りたる人。作者。著述者。

ちよしやう 儲餉【名】糧食を貯へ置くこと、又貯へおきたる糧食。

ちよじやう 楮上【名】『紙は楮（カウゾ）の纖維にて製するによりていふ』紙の上。楮表。甫庵太閤記「御内狀の趣、忝き次第、楮上に盡しがたく」

ちよしやう 女性【名】によしやう（女性）に同じ。

ちよしやう 女將【名】㊀をんなの大將。㊁料理屋・待合・船宿等の主婦。おかみ。によしやう。女亭。

ちよしやう 女墻【名】ひめがき（姫垣）に同じ。

ちよしやうぐん 女將軍【名】㊀をんなの將軍。㊁權力をふるひて、萬事に干渉する婦人。

ちよじやう-し 抒情詩【名】〔文〕じよじやうし（抒情詩）に同じ。

ちよしやう-ぶつちやう 除障佛頂【名】〔佛〕そんしやうぶつちやう（尊勝佛頂）に同じ。

ちよしやく 除籍【名】おとせき（除籍）㊁に同じ。

ちよしゆ 女主【名】㊀をんなの君主。又は皇后。㊁女の主人。

ちよじゆ 女孺【名】召使の小をんな。「じゆ。

ちよじゆつ 著述【名】書物を著はし述べつくること、又その書物。著作。述作。

ちよじゆつか 著述家【名】著述を專門とする人。著作家。著作者。

ちよじゆつ-しや 著述者【名】その書物を著述したる人。著者。「書物。著書。

ちよじゆつ-しよ 著述書【名】著述したる書【名】前條に同じ。

ちよしよ 除書【名】おもく（除目）に同じ。

ちよじよ 除敍・除叙【名】除官と敍位と。

ちよしよく 女色【名】㊀女の色香。女の容貌。によしよく。ちよしき。㊁女との關係。いろごと。情事。（男色に對して）

ちよす 瀦す【動佐變他】水をせきとめてたたふ。水たまりをつくる。

ちよす 除す【動佐變他】㊀のぞく（除く）に同じ。㊁『夢溪筆談に「除二拜官職一謂レ除二其舊職一不レ然也、除、猶レ易也、以レ新易レ舊曰レ除、如二新舊歳之交一謂二之歳除一」とあり』故の官を除去して、新なる官に就く。㊂〔數〕割算を行ふ。わる。

ちよすう 除數【名】〔數〕『英 Division』除法にて、甲數を乙數にて除する場合の、その乙數。法（ハフ）（被除數に對して）

ちよすゐ 瀦水【名】水をせきとむること、又せきとめたる水。たまりみづ。ためみづ。

ちよすゐ 貯水【名】水をたくはふること、又たくはへたる水。「水。瓢水。

ちよすゐ 除水【名】水を排除すること。排水。

ちよすゐ-しよくぶつ 貯水植物【名】〔植〕たにやうしよくぶつ（多漿植物）に同じ。

ちよすゐ-そしき 貯水組織【名】〔植〕『獨 Wasserspeichergewebe』多量の水分を貯蓄する細胞の形成せる組織。旱魃にも枯死を免れしむるためのものにて、多くは大なる柔細胞より成る。紫萬年青（ムラサキオモト）の葉の表面部の表皮組織のごとし。

ちよすゐ-ち 貯水池【名】『英 Reservoir』給水・灌漑及び給力等の爲めに、大量の水を貯ふる池。

ちよすゐりやう 褚遂良【名】〔人〕支那唐の名臣。字は登善。杭州錢塘の人。褚亮の子。博學にして、楷隷書を巧にし、太宗に用ひられて諫議大夫たり。後、高宗の武后を立てんとするや、力諫して聽かれず、貶せらる。顯慶三年歿す。年六十三。

ちよせい 著姓【名】その土地にて有名なる家。いへがら。名家。

ちよせい 女性【名】㊀女の性質。㊁『英 Femle sex』女に生れつきたること。によ

しやう。をんな。(男性に對して) 二〔語〕『英Female gender』**せい**(性)五を見よ。

おとせい 女婿【名】一家附の娘の夫。むこ。二〔法〕娘の夫。通常一親等の姻族なれども、婿養子たる女婿は、一親等の準血族たり。むこ。「略。

おとせい 女生【名】**おとせいと**(女生徒)の

おとぜい 除稅【名】租稅を免除すること。

おとせいと 女生徒【名】女の生徒。女生。

ちよせき 貯積【名】**ちくし**(蓄積)に同じ。

おとせき 除夕【名】**ちよや**(除夜)に同じ。

おとせき 除斥【名】一とりのけ。排斥すること。二〔法〕『獨Ausschliessung』裁判の公正を保たんがために、判事及び裁判所書記を、當然にその職務の執行より排斥すること。その判事及び書記が被害者なるとき、判事書記又その配偶者が被告人被害者又その配偶者と親屬なる時、その他種種の場合におこる。これらの場合に、訴訟關係人は、忌避の申立をなすことを得。三〔法〕債權者を清算手續より除外すること。

おとせき 除籍【名】一名簿よりその名を除き去ること。二中古、朝臣にして、罪過ありし者の名を、日給の簡(カン)より削り去りしこと。ちよしやく。三〔法〕戸籍より其の氏名を除くこと。

おとせききかん 除斥期間【名】〔法〕『獨Ausschlussfrist』權利の存續を限定する期間、例へば、盜品又は遺失物に付きて、その占有者に對する被害者又は遺失主が、その物の回復を請求する權利には、二年の除斥期間存するを以て、其の期間を過ぐれば、絕對に回復權を失ふ。

ちよせんせい 楮先生【名】『紙は楮(カウゾ)の纖維にて造るよりいひ、又、漢の世に、史記を補へる褚少孫といふ人ありて、今の史記に「褚先生曰」と記せるより擬していへるなりともいふ』**かみ**(紙)の異稱。

おとそ 除租【名】**めんそ**(免租)に同じ。

おとぞく 除族【名】華士族の罪を犯したるとき、その族籍を除き去りて、平民籍となすこと。

おとぞく 女賊【名】女の盜賊。

おとそん 女孫【名】むすめの生みたるまご。外孫。

おとそんだんび 女尊男卑【句】女を尊しとし、男を卑しとすること。「こと。

おとだい 著大【名】いちじるしく大なること。

おとだい 女體【名】女の姿。女性の形體。によたい。女相。(男體に對して)

おとたい 女隊【名】女どもの一隊。女群。

おとたい 除隊【名】現役兵が規定の服務期間を經過したる時、又は特別の事由にて、服務期間中服役を解除せらるること。その時期は、毎年十一月下旬と定められる。

きぎうちよたい(歸休除隊)**まんきおとたい**(滿期除隊)參照。

おとたいしき 除隊式【名】除隊の日、隊長より別辭・訓示等を與へらるる儀式。「う。

おとたう 女盜【名】女の盜賊。女どろぼう。

おとだう 女道【名】女子の守るべきみち。

にようだう(女道)參照。

おとたけ 千代茸【名】〔植〕**まんねんたけ**(萬年茸)に同じかるべしといふ。

おとだゝみ 千代田疊【名】東京近在及び武藏國(ムサシ)厥(コウ)町附近より産する木綿織。

おとだゝみやう 千代田城【名】『城邊の地にもと千代田・寶田・祝田などの村名ありしに、太田道灌夢想によりて、その住名の地に築城するに至れりとの俗說に本づく』**えどじやう**(江戸城)の異稱。

おとたん 猪膽【名】野猪(シヽ)のきも。熊膽(ユウタン)に似たるより、多くその僞造用とす。

おとたん 貯炭【名】石炭又は木炭をたくはふること。又たくはへおく石炭、又は木炭。「つる場處。

おとたんじよ 貯炭所【名】貯炭の用に充

おとたんせん 貯炭船【名】『英Floating coal depot』船艙に貯炭所を備へ、石炭を貯へて、他船に供給する船。

おとち 除地【名】一とりあげたる土地。二德川時代に、神社・佛閣の境内などのごとく、御朱印地・見捨地(ミステ)以外にして、地租を免除せる地所。その高(カウ)あるものは、除地高と呼びたり。**ちよてん**(除田)參照。

ちよちく 貯蓄【名】一たくはふること、又その物。〔儲蓄〕二金錢をたくはふること、又その金錢。蓄財。〔儲畜〕「多少の貯蓄あり」三〔經〕財を向後の生産のためにたくはふること。**ちよざう**(貯藏)二參照。

ちよちく 儲蓄【名】たくはふること。たむること、又その物。

おとぢく 杼軸【名】一機(ハタ)の緯(ヨコイト)を支ふる具、卽ち「ひ」と、その經(タテイト)を受くる具卽ち筬(サヽ)と。**きおと**(機杼)**きぢく**(機軸)參照。二『陸機の文賦に「雖レ杼二軸於予懷一、恥二他人之我先一」とあり。機(ハタ)にて布帛を織るに譬へたるなり』文章を組成すること。

杼軸空虛【句】『詩經の小雅大東篇に「小東大東、杼軸其空」また晉書食貨志に「良苗盡二于蝗蝝之口一、杼軸空二于公私之家一」とあり』織物の皆無なるをいひ、國の貧なるに譬ふ。

ちよちくきくわん 貯蓄機關【名】貯蓄の目的を以て、其の預金を安全有利に增殖する公私の施設。歐米諸國にては、何れも社會政策上より細民零細の資を保管し、これを利殖して、貯蓄心を涵養せんとせり。

ちよちくきん 貯蓄金【名】貯蓄したる金錢。たくはへきん。貯金。

ちよちくぎんかう 貯蓄銀行【名】複利の方法にて、專ら小額の預金を取扱ひ、國民一般に勤儉貯蓄の風を奬勵するを目的とする、銀行。資本金は三萬圓以上、取締役は、連帶責任を有し、退職後も二年間は在職中の事業の結果につきて責任を負ひ、預金拂戻の擔保として、預金總額の四分の一以上の金額なる利附國債證券又は地方債證券を供託所に供託すべきものとす。

ちよちくぎんかうていれい 貯蓄銀行條例【名】貯蓄銀行に關する規定を記したる法律。明治二十三年の公布。

ちよちくこん 貯蓄根【名】〔植〕**ちよざうこん**(貯藏根)に同じ。

ちよちくさいけん 貯蓄債券【名】政府が、非常特別稅法の存續期限を限り、貯蓄債券法により、日本勸業銀行に發行せしめし債券。債券を五圓とし、利率は四分以下。五百圓以內の剩增金を附す。償還期限は二十年以內とす。

ちよちくさいけんはふ 貯蓄債券法【名】貯蓄債券の發行に關する法令。明治三十七年の發布。

ちよちくしん 貯蓄心【名】財物を貯蓄せんとする心。「よ。

おとぢくだか 除地高【名】**ちよち**(除地)ノを見

ちよちてよち 手打手打【名】**てうちてうち**(手打手打)を見よ。

ちよちちよちあはは 手打手打あはは【名】**てうちてうちあはは**(手打手打あはは)を見よ。

おとぢんき 除塵機【名】紡績工業に於て、綿花・羊毛・襤褸(ラムル)などを開き、又は振ひつつ、これに附著又は混合せる砂塵等を除去するに用ふる機械。

おとちやう 女丁【名】女の仕丁。女仕丁(ジヨヂヤウ)。仕女(ジヨヂヨ)。力婦。今養蜂其女丁者大國四人、上國三人、中國二人、小國一人」

おとぢやうふ 女丈夫【名】女にて、智勇のすぐれたるもの。男まさりの女。女のえらもの。女傑。

おとちゆう 除蟲【名】蟲を驅除すること。

おとちゆう 女中【名】一婦女のなか。「女中の傑」「女中の堯舜」二をんな。女性(ジヨセイ)。によしやう。三宮仕又は奉公して、各その役目ある婦人。四げぢよ。下婢。

おとちゆうかご 女中駕籠【名】女房・御殿女中などの乘用の駕籠。をんなかご。にようばうごし。をんなごし。をんなのりもの。五人女「但馬屋の一家、春の野あそびとて、女中駕籠つらせて」

おとちゆうがしら 女中頭【名】多くの女中の中にて、これを取締る役のもの。

おとちゆうぎく 除蟲菊【名】〔植〕**むしよけぎく**(蟲除菊)に同じ。

おとちゆうことば 女中詞【名】**にようばうことば**(女房詞)に同じ。

おとちゆうしゆう 女中衆【名】一女の人たち。二他家の下女を呼ぶ敬語。をなごしゆ。

おとちゆうのりもの 女中乘物【名】**ちよちゆうかご**(女中駕籠)に同じ。五人女「大かた

は女中乗物見ぬが心にくし」

およちゆう-ぼうこう 女中奉公【名】女中として、他家に仕ふること。下女奉公。

ちよ-ちよ【貌】 千鳥の鳴き聲。

ちよちよら【名】 口より出まかせに、いい加減なることをいふこと。通增安宅關「鎌倉の御前何は、梶原がちよちよらをってさっぱりと治まりければ」

ちよっ-かい【名】 猫の手出(シテ)をして、物を掻寄すること。〔俚語〕 ㊁他より餘計なる手出をすること。ちよっけ。〔俚語〕

ちよっき【名】 『英Jacketの訛』一說には一寸著る意、又一說に、**ちよこり**(赤古里)の訛といふ』洋服の上著の下に著る、袖なくして、腹と背とのみを被ふ衣。

ちよっきり【名】 **ちよっきりむすび**(ちよっきりなるさま。

ちよっきり【貌】 ㊀**ちよきり**に同じ。 ㊁丁度

ちよっきり-むし ちよっきり蟲【名】〔動〕象鼻(ゾウビ)蟲の一種。紫色の美なる小蟲にて、體長二三分。

ちよっきり-むすび ちよっきり結【名】羽織の紐などを、唯こまむすびに結ぶこと。ちよっきり。〔俚語〕

ちよっきり-もり ちよっきり銛【名】漁具の一。海獸又は「かぢき」を獲るに用ふ。鍛鐵にて造り、三尋餘の木柄を附し、其の端に綱を附す。〔俚語〕

ちよっ-くら【貌】 僅かの時の間に爲すさま。

ちよっくら-ちよっ-と【貌】 **ちよっと**(一寸)に同じ。〔俚語〕

ちよっくら-もち ちよっくら持【名】こそこそどろぼう。こぬすびと。鼠賊。小盜。〔俚語〕

ちよっ-くり【貌】 **ちよっくら**に同じ。〔俚語〕

ちよっ-け【名】 **ちよっかい**に同じ。〔俚語〕

ちよっ-こり【貌】 ちよいと。ちよっと。 齋の門松「又ちよっこりと歩て合いたす」

ちよっ-ちよ【貌】 **ちよいちよい**に同じ。〔俚語〕

狂言(六地藏)「膝をもってちよっちよと附てまはるによって」

ちよっ-と 一寸・烏渡【副】㊀しばし。少し。ちっと。ちょいと。ちょと。 ㊁たやすく。てがるに。

ちよっこ來いに油斷すな【句】輕く呼ばれたる時、油斷して、何氣なくそれに從へば、意外に災難を招くことあれば、用心せよ。〔諺語〕

ちよっこした【句】普通よりややすぐれたる。可なりの。〔俚語〕「ちよっとした美人」

ちよっこ-ずき 一寸好・烏渡好【名】その人にちよっと接して、輕く好(ス)くこと。

ちよっこ-み 一寸見・烏渡見【名】ちよっと見たること。

ちよっこ-も【副】 ちっとも に同じ。

ちよっぱ-くさ【貌】 **ちよぼくさ**に同じ。〔俚語〕手習鑑「女同士の、口さきで、ちよっぱくさだまして見よ」

ちよっぴり【貌】 **ちよぼり**に同じ。〔俚語〕梅曆「ちよっぴり生姜(ショウガ)と行きやせうかねと、生姜を撮んで出す」

ちよっぺい【名】 ㊀**ちよろっかに**同じ。〔俚語〕 ㊁『**とっぱい**(頭盔)の訛といふ』**おこそづきん**(御高祖頭巾)を云ふ。〔武藏國秩父の方言〕

ちよっぽまき ちよぼ播【名】〔農〕**てんば**(點播)に同じ。

ちよっぽり【名】 **かぶろ**(禿) 四の異稱。 潮來風誌「折から九つばかりのちよっぽり來りて、女郎の煙草盆二つ持出る」

ちよっぽり【貌】 ちよんぼりに同じ。〔俚語〕

ちよっる【動四他】 つるりと剃る。 齋の門松「山崎の與次兵衛めに、小袋先をちよつられた」

おとよい 女弟【名】㊀**いもうと**(妹)に同じ。

おとよい ㊁女の弟子。

おとよい 女亭【名】『亭は亭主の略』**おとよう**(女將)㊁に同じ。〔俚語〕 「てい。

おとよい 女帝【名】女の皇帝。女皇。によ

おとよつ 女姪【名】**めひ**(姪)に同じ。

おとよでん 除田【名】中古以後、神田・寺田等の如き免祖の田地の總稱。卽ち近代の除地と同性質のもの。

おとよと 一寸【副】**ちよっと**(一寸)に同じ。

〔俚語〕きのふはけふの物語「我我は、ちよとよそへ參り候ふほど、あとを頼む」

おとよとう 女童【名】**どうおよ**(童女)に同じ。

おとよとつ 猪突・豬突【名】㊀猪の突進すること。むかふみず。かるはずみ。猪勇。豨突(ヰトツ)。「猪突・豨勇」 ㊁左右を顧みずに事をなすこと。

おとなぐさ 千代榮草【名】**わかな**(若菜)の異稱。〔古語〕藻鹽草「いづくにも今日や摘むらんちよなくさみつぎの月の種をそなへて」

おとなん 女難【名】男子が女の事により受くる災難。女禍。

おとに 千代尼【名】〔人〕**かがちよ**(加賀千代)に同じ。 「ちら。ぽたん。

おとにく 猪肉【名】ゐのししの肉。やまくじら。

おとにくしふ 千代尼句集【名】〔書〕加賀千代尼の俳句集。二卷。

おとにん 女人【名】**にょにん**(女人)に同じ。

おとにち 除日【名】江戸幕府の頃、將軍の忌日等にて、死罪の執行などを除けし日。**おとじつ**(除日)參照。

おとねん 去年【名】**きょねん**(去年)の轉訛。〔岩代國の方言〕

おとのう 千代能・千代野【名】〔人〕安達泰盛の女。金澤實時の妻。夫の死後落飾して尼となり、法名を景愛と號す。佛光に師事し、景愛寺の第一代なり。**けいあいじ**(景愛寺)參照。

おとの-ふるみち 千代古道【名】〔地〕山城國葛野(カヅノ)郡にある歌枕。廣澤池を東に距ること約三町、同郡太秦(ウヅマサ)村大字常盤(トキハ)谷に通ずる細道これなりといふ。後撰、嵯峨の山ゆきたえにし芹川の千代のふる道あとはありけり」

おとのまつばら 千代松原【名】〔地〕筑前國糟屋・筑紫兩郡の海岸に跨る松原。景勝に富み、福岡市の東公園・箱崎の宮・崇福寺・福岡大學・元寇記念碑等この地域にあり。古來、箱崎宮の神木と稱せられ、伐採を嚴禁せられたり。一名、箱崎の松原。

おとはくし 女博士【名】古、支那にて、女にして博士となれるもの。

おとばつ 除伐【名】〔農〕**せんばつ**(洗伐)に同じ。

おとはふ 除法【名】〔數〕『英Division』乘法の反對にして、積と、その一因子とを知りて、他の因子を見出だす算法。既知の一因子を法といひ、積を實といひ、得たる結果を商といふ。わりざん。

おとひ 楮皮【名】楮(カウゾ)の樹の皮。紙を製するに用ふ。 「じ。

おとびと【貌】 僅かなるさま。ちよっぴり。四天王大通仕立「神事は神主へちよびと握らせの宜いやうに頼み」

おとびかは【貌】 いそがしげなるさま。心中宵庚申「わが見る前ではちよびかはして、一寸立てばはや何處へ、大切な主の煩、藥一つ溫めうともせぬ」

おとびすけ 猪鼻助【名】㊀ちよこざいなる人、又はなまいきなる小供を嘲りていふ語。〔俚語〕 ㊁**ちびこ**に同じ。〔俚語〕

おとびちよびちよび【貌】 **ちびちび**に同じ。〔俚語〕

おとびちよびちよび-ぐち ちよびちよび口【名】側に居て、ちよいちよい讒訴などすること。右大將鎌倉實記「梶原がちよびちよび」

おとびっ-と【副】 次條に同じ。

おとびと【副】 ちよいと。わづか。すこし。人心聞面鑑「此儘でも歸られめえから、ちよびと行ってやらうといふ氣になり」

おとびな【名】 **にんぎょう**(人形)を云ふ。〔陸奥國青森の方言〕

おとびひげ ちよび髭【名】ちよんびりと生やしたる髭。〔俚語〕

おとびやう 除病【名】病氣を除き去ること。盛衰記「阿彌陀如來一體造立あり。除病・延命の御祈」

おとびん-と【副】 **ちよびと**の音便。

おとぶ 猪武【名】**ちよゆう**(猪勇)に同じ。

おとふ 女婦【名】ふじょ(婦女)に同じ。 謠曲「葵上」「綾女絲女の女婦を添へ」

おとふうし 楮夫子【名】『**ちよせんせい**(楮先生)を見よ』かみ(紙)の異稱。

おとふく 女福【名】**えんぷく**(艷福)に同じ。

おとふく 女服【名】女の著る衣服。

およ-ぶく 除服【名】Ⅰ喪服を脱ぐこと。いみあけ。げおよ。ぶくあけ。Ⅱ忌中に喪服を脱ぐこと。

おようく-しゅっし 除服出仕【名】喪にあたりて、引籠り居る官吏の、除服して、その官衙に出勤すること。いみ御免。奪情從公(ダツジヤウジユウク)。

ちよ-へい 楮幣【名】『ちよせんせい(楮先生)を見よ』しへい(紙幣)に同じ。「じ。

ちよ-へう 楮表【名】ちよじやう(楮上)に同

ちよぼ 樗蒲【名】『事物紀原に「博物志曰樗蒲、老子入二西戎一所造、或云、胡亦以レ此ト也」、又、樗蒲經略に「博之流爲二樗蒲一、爲二握槊一、呼博爲二酒令一、體製雖レ不二全同一、而行レ塞勝負、取二決於投一、則一理也」とあり』Ⅰ古、支那にて行はれ、我が國にも渡來せし一種の賭博。但し、その方法と用具とは、今詳かならず。かりうち。Ⅱばくち。博奕。

ちよぼ【名】Ⅰ『樗蒲の采(サイ)の目の打方に似たるよりいふとぞ』しるしに打つ點。Ⅱ『床本(ユカホン)の語るべき部分に、赤又は藍の紙を貼りて目じるしとなすを、ヘ(ホテヨ)を打つといふ義に取りていふ』芝居の狂言に用ふる義太夫節の淨瑠璃。床(ユカ)の淨瑠璃。**ちよぼゆか**(ちよぼ床)參照。〔俚語〕Ⅲ**ちよぼがたり**(ちよぼ語)の略。〔俚語〕Ⅳはな。祝儀。〔關西の語〕Ⅴ〔動〕いな(鯔)を云ふ。〔加賀國の方言〕

ちよぼ【助數】『柳亭記に「白魚を一樗蒲といふは、二十一筋なりしが故なり。二十一は賽(サイ)の目の數なり。川柳點の前句に「佃島(シマ)女房は二十筋かぞへ」、女は客を故に、一筋少なく數へたる人情をいひしなり。その句、安永頃の吟なれば、當時までは、二十一筋なりし證とすべし。今はおしなべて二十筋となりて、樗蒲の義聞えず」とあり』白魚(シラウヲ)を二十一匹(後には二十四)づつ一まとめにして數ふるに用ふる語。柳樽「白魚を半ちよぼ出して嫁拜み」(この白魚は美人の手を形容していへるなり)。

ちよぼ-いち 樗蒲一【名】『樗蒲一箇の義とも、樗蒲打の轉ともいふ』采(サイ)一箇にて行ふ博奕。豫め定めたる目の出づるときは、その賭錢の四倍だけを得るもの。おいちよ。〔俚語〕風俗文選(許六、四季辭)「賽ふり・樗蒲一の寄所(ヨリドコロ)にして」當らぬものは、夢ぞ樗蒲一【句】當にすべからぬものの意の譬。

ちよぼいれ ちよぼ入【名】歌舞伎狂言に、太夫の語るべき、淨瑠璃の地(ヂ)の文を書入ること。

ちよぼがたり ちよぼ語【名】芝居にて、ちよぼⅡを語ること、又その人。ちよぼ。

ちよ-ぼく 樗木【名】Ⅰ用に立たぬ惡木。Ⅱ**ちよれき**(樗櫟)Ⅱに同じ。

ちよ-ぼく 楮墨【名】紙と墨と。

ちよぼくさ【貌】ちよこちよこ。**ちよばくさ**參照。〔俚語〕卷花五大力「ちよぼくさやっても、一向きかぬかなてこ親爺」Ⅱに同じ。

ちよぼぐち ちよぼ口【名】**つぼぐち**(壺口)に同じ。

ちよぼぐ-しよ 貯木所【名】農商務省山林局の管理の下に、官材の貯藏・販賣の事を掌りたる役所。所長・屬(共に判任)の職員あり。明治十九年設置せられたり。

ちよぼぐち ちよぼ口【名】口をすぼめて小さくなすこと。又、小さくすぼみたる口。井筒業平河内通「白髪齒拔のちよぼ口して、はいやり笑顏も舌たるく」

ちよぼく-おやう 貯木場・貯木塲【名】木材の集散地にて、木材を貯藏する處。多くは池を掘りて、その中に浮べ貯ふ。

ちよぼくれ【名】小さき木魚二箇を叩きながら一種の節にて、阿呆陀羅經又は何何づくしなどいへる猥雜なる文句を口早に語る乞食。ちよんがれ。「黙。

ちよぼ-ちよぼ【名】目標などに打つ二つの

ちよぼ-ちよぼ【貌】『ちよんぼりを見よ』Ⅰ點をまばらに打つさま。〔俚語〕Ⅱ處處に小さく、又は少しづつあるさま。ちよんぼり。ちよんぼり。ぽちぽち。

ちよぼちよぼぐち ちよぼちよぼ口【名】**ちよぼぐち**(ちよぼ口)に同じ。柏狩劍本地「ほんにつべこべと好い加減でやみやらぬと、はしやいだちよぼちよぼ口抓って」

ちよぼゆか ちよぼ床【名】芝居にて、ちよぼを語る場所、即ち舞臺の上手の高き所。常には簾を掛く。

ちよ-ま 紵麻【名】**まを**(麻苧)に同じ。

おとよ-まい 女妹【名】Ⅰ『爾雅に「夫之妹爲二女妹一」とあり』夫(ヲツト)の妹。Ⅱいもうと。女弟。

おとよまく-しき 除幕式【名】銅像・記念碑などを建設し終へたる後、その四方に蔽ひたる幕を撤する儀式。幕は、一方の綱を引けば、全部直ちに取外さるるやう仕掛け、その銅像等に對して、最近親なる者(殊に女性)綱を引くを普通とす。

ちよみ-ぐさ 千代見草【名】〔植〕Ⅰきく(菊)の異稱。〔古語〕Ⅱまつ(松)の異稱。〔古語〕

ちよ-むしろ 千代筵【名】陸前國仙臺附近より製出する莚。

ちよん 點【名】Ⅰ物のしるしに打つ點。ちよぼ。Ⅱさてん(讀點)に同じ。

ちよん【貌】Ⅰしばし。いささか。〔俚語〕「ちよんの間に」Ⅱ滯なく容易に物を切るさま。拍子木の音。

ちよんの間【句】Ⅰしばしのひま。一寸の間。〔俚語〕船頭深話「これちよんの間の一切あそび」Ⅱ僅の隙を見て行ふ色事。ちよい。〔俚語〕

ちよんの間遊(アソビ)【句】**ちよん**の間Ⅱの遊興。

ちよんがあ 總角【名】『總角の朝鮮音Cf. yongtak の訛』朝鮮にて、丁年未滿にて、未だ結髪せぬ男子。

ちよん-かけ【名】こうながけ(手斧掛)に同じ。

ちよん-がり【名】次條Ⅱを云ふ。〔越後國新潟の方言〕

ちよん-がれ【名】Ⅰ**ちよばくれ**に同じ。Ⅱ祭文節より出でたる一種のうたひもの。今の浪花節に似たり。素人狂言紋切形「宮城野信夫敵討のちよんがれなんざあ、村中でわしに續くものはござりやしねへ」Ⅲ**なにはぶし**(浪花節)を云ふ。〔關西の語〕

ちよんがれぶし ちよんがれ節【名】ちよんがれの唄ふ唄の節。〔關西の語〕

ちよん-き-な【名】『ちよっと(一寸)來れの意』狐拳の一種。「ちよんきな、ちよんきな、ちよん、ちよん、きな、きな、ちよんが菜の葉で、ちよちよんがよい」といふ拍子ことばを唱へつつ行ふもの。**ちよんぬげ**參照。

ちよん-ぎる ちよん切る【動四他】ちよっと切る。すこしばかり切る。〔俚語〕

ちよんこ【名】**ちやんこ**に同じ。〔俚語〕

ちよんこ-ちよん【貌】媚びへつらふさま。

ちよん-ちよん 丁丁【貌】Ⅰ拍子木を續け打つ音。〔俚語〕Ⅱ『芝居の幕切に、拍子木を續けて打つよりいふ』物事の終をあらはす語。

ちよん-ちよん-まく 丁丁幕【名】Ⅰ芝居にて、拍子木をちよんちよんと打ちて幕にすること。〔俚語〕Ⅱ物事の終局。〔俚語〕

ちよんの【名】**てをの**(手斧)の訛。**こちよんの**(小手斧)參照。〔幾内の語〕

ちよんぴり【貌】次條に同じ。〔俚語〕

ちよんぴり【貌】少しばかり。わづかばかり。ちよっぴり。ちよっぽり。ちよんぴり。

ちよんまげ 丁髷【名】『ちよんは小さき意』男の髪の結ひ方の一。野艮醬(マゲ)の、もとどりを前に向けて小さくまげたるもの。

(げまんよち)

ちよんまげ-あたま 丁髷頭【名】ちよんまげを結ひたる頭。

ちよ-めい 著名【名】名高きこと。有名。

ちよ-めい 著明【名】あきらかなること。いちじるしきこと。昭著。

おとよ-めい 除名【名】Ⅰ名簿より、その內に記せる姓名を除き去ること。Ⅱ古、官吏の罪を犯せるものある時、その名を官吏の名籍より除きしこと。Ⅲ圜體より、その人を斥け去ること。

おとよ-めん 除免【名】Ⅰ**めんよ**(免除)に同じ。Ⅱ古、有位の人に科したる免所居官。免官。除名の總稱。

おとよ-もく 除目【名】『五雜俎に「一日看二除目一、三年損二道心一、除目、今之推升朝報品也」、品字箋に「拜レ官曰レ除、除書曰二除目一、又、江家次第に「除目、此二字出二於唐書一、或曰二勳目一、或除書、其義一也。除任之義、除二舊官一而就二新官一故也」とあり』**ちもく**(除目)に同じ。

ちよもぐさ 千代若草【名】『ちよわかぐさ（千代若草）を見よ』**わかな**（若菜）を云ふ。〔女の語〕

ちよもん-しふ 著聞集【名】〔書〕**こんちよもんしふ**（古今著聞集）の略。

ちよ-や 除夜【名】『**ぢよじつ**（除日）を見よ』除日の夜。大晦日の夜。除夕。

ちよやく 除役【名】課役を免除すること。〔言〕歳除。

ちよやぐ【名】馬の牝。めうま。〔岩代國の方言〕

ちよゆう 猪勇【名】むやみに突進する勇氣。むかふみず。猪突。猶武。猪突。猶勇。

ちよよう-くんもう-づゑ 女用訓蒙圖彙【名】〔書〕女子禁（ケッ）方の要件、即ち女、諸禮式・紋畫・模様畫・手藝・産後の療治・衞生等に亙る十八項を圖解説明せるもの。五卷。著者詳かならず。元祿元年刊行。

ちよよう-ぶん 女用文【名】女子用の文章。女の用ふる書翰文。

ちよら 樗良【名】〔人〕**みうらちよら**（三浦樗良）を見よ。

ちよら【名】**ちやうろく**（丈六）〔三〕の訛。膝栗毛「どなたも平座（ヂョ）かいて居なさらんか。今の内味（ヂン）能らせんと、後に工合が悪（ッ）なるさかひ」〔「の異稱。

ちよ-ら 女蘿【名】〔植〕**ひかげのかづら**（石松）

ちよ-らう 女郎【名】〔一〕『木蘭辭に「同行十二年、不知木蘭是女郎」、又白居易の李夢女の詩に「色爲二天下艷一、心乃女中郎」とあり。郎は男子の稱』**ちよぢやうふ**（女丈夫）に同じ。〔二〕『前項の白居易の詩等の義より出づとも、女童（メワラ）の約なる「めらう」の宛字を音讀せるに出づともいふ』あそびめ。ぢょうろ。遊女。娼妓。

女郎に誠あれば、晦日（ミソカ）に月が出る【句】女郎には誠意なき譬。

女郎の腐ったやう【句】「女の腐ったやう」を一層強めていふ語。〔諺語〕

女郎の千枚起請（キシャウ）【句】信用しがたきことの譬。

女郎の虚泣（ウソナ）【句】女郎が客の同情を得んが爲に、いつはり泣くこと。

女郎の誠【句】「卵の四角と女郎の誠」を見よ。

ちよらう-あがり 女郎上【名】もと遊女なりし女の、堅氣の人間となりしこと、又その女。しゃばいあがり。

ちよらう-かひ 女郎買【名】女郎をあひかたにして遊ぶこと。けいせいかひ。

女郎買の尻切草履（シリキレザウリ）【句】次條に同じ。〔諺語〕

女郎買の糠味噌汁（ヌカミソ）【句】女郎買のためには、金錢を浪費する人の、家にありては、すべてに極めて吝嗇なること。女郎買の尻切草履。〔諺語〕

ちよらう-ぐも 女郎蜘蛛絡新婦【名】〔動〕眞正蜘蛛類に屬する節足動物。身痩せて、脚長く、雄は體形小にして、雌の三分の一に過ぎず。雌は腹部膨大にして、胸部は黒色を帶び、中央に黄色の條あり。脚は黒色にして、黄色の輪環を現はす。主に森林中に網を張りて棲息す。

ちよらう-ぐるひ 女郎狂【名】女郎買に耽りて、夢中になること。一代男「女郎狂の太鼓を持ちに來たが、頭（マヘ）が痛い、打てとあれば、一人は頭（カシラ）、一人は足、一人は御腰をひねる」

ちよらう-しゆう 女郎衆【名】女郎たち。

ちよらう-だたき 女郎敲【名】昔、男達の亂暴なるもの等が、遊里にて、女郎などをいぢめて亂暴せしこと、又その者。

ちよらう-たらし 女郎誑【名】遊客が相手の女郎をたらすこと。一代男「花川といへる女に起請を書かせ、指しぼらせて、名書の下に染めさせけるにと申せば、油斷もなき所に、めいよの女郎たらしと、舟ばりたたきて大わらひ」〔「居る町。

ちよらう-まち 女郎町【名】遊女屋の並びて、嫖客に遊興せしむるを業とする家。かしざしき。けいせいや。こどもや。遊女屋。小供屋。妓樓。妓館。娼家。

ちよらう-よもぎ 女郎艾【名】〔植〕**ははこぐさ**（鼠麹草）に同じ。

ちよらかす【動四他】〔一〕じゃらかすを云ふ。〔京都の方言〕〔二〕小供をあやすを云ふ。〔遠江國の方言〕

ちよりう 女流【名】をんなの仲間。をんな。なかま。〔の一。

ちより-がしら 地より頭【名】太鼓の打方

ちより-ちより【貌】じよりじよりに同じ。

ちよりつ 佇立・竚立【名】『立の字の音、正しくはりふ』たたずむこと。

ちよりふ 佇立・竚立【名】前條を見よ。

ちよるね 女類【名】をんなたち。

ちよれい 猪苓・豬苓【名】〔植〕『黒き塊を成し、猪尿に似たるよりいふ』〔一〕猪苓蕈の類の菌核體。外皮は黒色又は帶赤黒色、内部は白色を呈す。質輕し。古來漢方にて、利尿及び防腐の藥用に供す。かしはくぬぎ。〔二〕〔植〕**ちよれいたけ**（豬苓蕈）に同じ。

ちよれい 女禮【名】女子の起居動作につきての法式。女の作法。女禮。

ちよれい-しき 女禮式【名】前條に同じ。

ちよれい-たけ 猪苓蕈・豬苓蕈【名】〔植〕擔子菌類に屬する菌。槭樹（アヂサイ）・山毛欅（ブナ）・楢などの根に寄生し、落葉の推積せる地中に、蓁蕘（イモヂ）の根の如き塊狀を成す。その菌核體は猪苓と稱し、古來、藥用に供せらる。我が國中部及び東北地方に產す。

ちよれい-まひたけ 猪苓舞蕈・豬苓舞蕈【名】〔植〕前條を云ふ。〔羽前國の方言〕

ちよれき 樗櫟・樗櫪【名】『莊子の逍遙遊篇に「吾有二大樹一、人謂二之樗一、其大本擁腫不レ中二繩墨一、其小枝卷曲不レ中二規矩一、立之塗、匠者不レ顧、今子之言大而無レ用、衆所二同去一也」とあり』〔一〕役に立たぬ惡木。樗材。散木。〔二〕役に立たぬ人。不才の人。樗材。樗才。樗散。

樗櫟の材【句】前條〔一〕に同じ。

ちよろ 著羅・猪驢・長羅【名】**ちよろけん**（著羅絹）〔二〕の略。〔二〕挺立の早船。

ちよろ【名】江戸時代に、船方役人の用ひし丸ぐけの帶を、いつのまにやらちよろとはづして」

ちよろ 女郎【名】**ちよらう**（女郎）〔二〕の訛。

ちよろ-あがり 女郎上【名】**ちよらうあがり**（女郎上）の訛。〔買〕の訛。

ちよろ-かひ 女郎買【名】**ちよらうかひ**（女郎買）の訛。

（一）んけろよち

ちよろ-がや 女郎萱【名】〔植〕**あぶらすげ**（油薄）に同じ。

ちよろぎ 草石蠶【名】〔植〕『地下莖の形、蠶に似たるよりいふ』唇形（クチビル）科に屬する多年生の草。莖・葉共に毛刺を有し、下部の葉は心臟形にして、上部の葉は長卵形、鋸齒を有す。花冠は唇形にして、淡紅紫色を呈す。塊莖は球形をなし、食用に供す。

ちよろぎだまし【名】〔植〕〔一〕**いぬごま**（犬胡麻）に同じ。〔二〕**にがくさ**（苦草）に同じ。

ちよろ-ぐも 女郎蜘蛛【名】〔動〕**ちよらうぐも**（女郎蜘蛛）の訛。

ちよろ-けん 著羅絹・猪驢絹・長羅絹・銷服【名】〔一〕德川時代に、京都地方にて、正月五六人一組となり、異樣の風をなして、太鼓・びんざさら等にてはやし、ちよろよろよ、ちよろよ、一文のちよろよ」など唱へつつ町々を歩きし乞食。〔二〕次條の略。

ちよろけん-じま 著羅絹縞・猪驢絹縞【名】『Chaul の絹の義ならんといふ』質は甲斐絹に似、もくめのある一種の絹織物。もと和蘭（オランダ）・廣東（カントン）より舶來せるもの。ちよろけん。〔語〕

ちよろける【動下一自】**ちよけるに同じ。〔俚語〕**

ちよろし【形一】〔一〕小さきものの速きさまにいふ語。〔二〕のろしてぬるしつたなし。

ちよろ-ちよろ【貌】『**ちよろ**を重ねたる語』〔一〕小さき物のすばやく動くさま。〔俚語〕〔二〕水の狹き所を少しづつ流れゆくさま。しよろしよろ。〔俚語〕

ちよろちよろ-あるき ちよろちよろ歩【名】**ちよこちよこあるき**（ちよこちよこ歩）に同じ。

ちよろちよろ-がは ちよろちよろ川【名】少しの水のちよろちよろと流るる川。しよろしよろがは。ぞろぞろがは。

ちよろちよろ-び ちよろちよろ火【名】ちよろちよろともゆる火。俳諧新選(蕪石)「朝霧や舟に飯焚くちよろちよろ火」

ちよろちよろ-みづ ちよろちよろ水【名】ちよろちよろと流るる水。しよろしよろみづ。水量少なく、緩かに流るる水。〔俚語〕

ちよろちよろ-わっぱ【名】 ちよろちよろ歩きする腕白の小供。

ちよろづ 千萬【名】限りなく多き数。せんまん。萬葉「千萬の軍なりともことあげずとりて來ぬべきをのことぞ思ふ」

ちよろっか【貌】 思慮の無きさま。輕率なるさま。粗忽なるさま。〔俚語〕

ちよろっかもの ちよろっか者【名】ちよろっかなる人。〔俚語〕

ちよろまかす【動四他】 一 他人の目を掠めて、物を盗む。ちやかす。〔俚語〕 置土產「紙一枚ちよろまかすといふことなく」 二 言譯(ワケ)をなして、ごまかす。〔俚語〕 傾城色三味線「隨分口先をもつてちよろまかし」

ちよろんご 緒論【名】しよろん(緒論)の誤讀。

ちよろんご 女論語【名】〔書〕立身學作學禮早起事父母事舅姑事夫訓男女營家待客和柔守節等、女子の戒となるべき事項を記したるもの。女孝經と共に一時世に行はれき。一卷。支那唐の宋若(ソウジャク)の女若昭の著。

ちよろ-や 女郎屋【名】ちよろや(女郎屋)の訛。

ちよろり【副】 『ちよろちよろを見よ』目立たぬほどにすばやきさま。ちよろ。 雛鰮天皇甘露圖「我買はう、人買はうとて、七兩二朱まで直上りしたを、彼の和郎がつひちよろり三兩二分に買取り」

ちよ-わう 儲王【名】まうけのきみ。皇太子の女(ムスメ)。

おより-わう 女王【名】一 女性の王。正統記「もろこしへも使を遣されけるにや、倭國の女王遣」使來朝すと、後漢書に見えたり」 二 皇族の姫君の、親王宣下のなきもの。ないしんわう(內親王)〔一〕參照。 三 現制にて、皇孫以下の女性。ないしんわう(內親王)〔二〕參照。

おより-わうろく 女王祿【名】『女王祿と書きて「わうろく」と訓(ヨ)む例なり』わうろく(女王祿)を見よ。

ちよわか-ぐさ 千代若草【名】わかな(若菜)の異稱。〔古語〕

ちよをね 儲位【名】一 皇太子の御位。 二 皇太子。儲君。

ちよをね 儲闈【名】『闈は宮中の門の義』とうぐう(東宮)に同じ。「蔵」に同じ。

おより 女蔵【名】〔植〕のうぜんかつら(紫葳)に同じ。

ちより【貌】 ちりり(俗語「ちらと見そめし大振袖よ」

ちーらい 地籟【名】地上のすべての響。(天籟・人籟に對して)

ちーらい 地雷【名】『地上の雷聲の義』浪などのはげしき音を形容していふ語。永代藏「大道轟き、地雷のごとし」

ぢーらい 地雷【名】ぢらいくわ(地雷火)の略。(空雷・水雷に對して)

ぢーらい 持來【名】持ち來ること。もたらすこと。徒然「入宋の沙門道眼上人、一切經を持來して、六波羅のあたり、やけ野といふ所に安置して」

ぢーらいくわ 地雷火【名】地下に火藥を埋め置き、敵のその邊に襲ひ來るや、電流その他の方法によりて、直ちに破裂するやうに裝置せるもの。ぢらい。

ぢらいーりうだん 地雷榴彈【名】彈丸の一。鍛鋼を以て造り、其の外殼を薄くして、可成多量の炸藥(サクヤク)を充塡し、其の命中の際の破壞力を強大ならしむ。大容積榴彈。

ぢらいーれんぱう 地雷連砲【名】支那にて用ふる連發銃。

ちらう 血勞【名】肺癆にして、血を吐くに「至れるもの。

ぢーらう 地牢【名】つちらう(土牢)に同じ。

ぢらうざゑもんびな 治郎左衛門雛【名】ぢろざゑもんびな(治郎左衛門雛)を見よ。

ちらかす 散らかす【動四他】ちらかるやうにす。ちらす。〔俚語〕

ちらかる 散らかる【動四自】ちらばる。ちらく【動自】ちる(散)の連體形の延。〔古語〕 萬葉「梅の花ちらくはいづくしかすがにこの木の山に雪はふりつつ」

ちらーくら【貌】 目さきにちらつくさま。ちらちら。〔俚語〕

ちらし 散【名】一 ちらすこと。 二 ちらしがき(散書)の略。

ちらし-がき 散書【名】歌又は文などを、紙上に次第を趁うて記さず、とびちらして書くこと。色紙(シキシ)に書く歌、又は女子の書狀などに用ひられたり。ちらし。

ちらし-がた 散形【名】ちらしもやう(散模樣)に同じ。一代男「萌黃の薄衣(キヌ)に紅(クレナ)の唐房(フサ)を附け、尾長島のちらし形」

ちらし-がみ 散髮【名】女の、髮を結はずに亂してゐること、又その髮。さばきがみ。

ちらし-ぐすり 散藥【名】いうだやく(誘導藥)の俗稱。

ちらし-ごもく 散五目【名】ごもくずし(五目鮨)に同じ。

ちらし-ずし 散鮨【名】前條に同じ。(おし鮨・にぎり鮨に對して)

ちらし-だいこ 散太鼓・散太皷【名】芝居などにて、その日の興行の既に終りたることを觀客に知らすために打つ太鼓。(人寄(ヨセ)太鼓に對して) 生玉心中「風に嵐の芝居はて、散太鼓の聞ゆれば」

ちらし-ふくさ 散袱紗【名】舞踊などに用ふる、傘に下げて飾とする布帛。

ちらし-ぶみ 散文【名】散書(ガキ)にせる書狀。 毛吹草「風の手もいろはの後やちらし書」

ちらし-まき 撒播【名】〔農〕さつぱ(撒播)に同じ。

ちらし-もの 散物【名】金粉(キンプン)を砂子(スナゴ)の如く散して燒附けたる金物。貞丈雜記「凡そ諸の調度に、打ちたる金物に散し物と云ふ事あり。古へに見えたり。桃花藥葉の車箱扇車等に散し物とは、メツキをさしたる金物を云ふなりとあり。又、古書に、金物を云うて、塗物とあるも、散し物に同じ」

ちらし-もん 散紋【名】紋所を散すこと。一代男「盃・烟鍋・吸物椀まで、罌粟(ケシ)のちらし紋」

ちらし-もやう 散模樣【名】とびとびに、又は一つおきなどに置きたる模樣。ちらし。亂彩。

ちらし-よね 散米【名】さんまい(散米)に同じ。

ちらす 散す【動四他】一 ちらしむ。ばらばらにす。みだす。萬葉「妹が見てのちも鳴かなむほととぎす花橘を土にちらしつ」 二 分つ。くばる。 三 ひろくいひふらす。評判をす。〔古語〕 狹衣「この人の、つゆばかりももらしたる事をば、心よりほかにちらすべきならねど」 四 盃中の酒をこぼす。

ちらす 散す【接尾】動詞に添へて、その動作の秩序無き意を示す語。「食ひちらす」「讀みちらす」

ちらす-つゑ 散す杖【句】つゑ(杖)の條下を見よ。

ちら-ちら【貌】 『ちらを重ねたる語』一 少しづつ散りひるがへるさま。〔俚語〕「雪がちらちらと降る」 二 光又は姿の少しづつ度度目に映るさま。ちろちろ。ちらくら。〔俚語〕「來てはちらちら迷はせる」 三 蟐の仄(ホノ)かに度度耳に入るさま。〔俚語〕

ちら-つく【動四自】 ちらちらとす。ひらめく。 天の網島 灘(ナダ)の透間さし覗けば、内にちらつく人影は、小春ぢやないか」

ちらばす 散す【動四他】ちらばるやうにす。ちらかす。〔俚語〕

ちら-ばら 散ばら【貌】散り亂るるさま。まばら。ちらほら。〔俚語〕

ちらばる 散ばる【動四自】ちらばらになる。ちらかる。散亂す。〔俚語〕

ちらふ 散らふ【動四自】ちる(散る)の延。〔古語〕 萬葉「み心をよしぬの國の花ちらふあきつの野べに」

ちーらふ 地臘【名】道家にて、五月五日に

行ふ祭。(天臘に對して)

ちらふ 地蠟【名】〔鑛〕『英 Ozocerite』炭素と水素との化合せる天然産の石蠟。非結晶の塊をなし、石炭・石油等と伴ふ。其の純粋なるものは、白色なれども、普通は褐色を呈す。質、軟滑にして、咬むれば、指頭にて潰すを得。精製して、主に蠟燭・電氣絶緣用等に用ふ。天然石蠟。「ぼふ」に同じ。

ちらぼふ 散らぼふ【動四自】**ちりぼふ**(散りぼふ)

ちらほら 【貌】ここかしこに少しづつあるさま。ちらばら。ぽつぽつ。ちらりほらり。〔俚語〕「花がちらほら咲く」「下を見よ。

ちらまく 散らまく【句】**ちる**(散る)の條

ちらん 治亂【名】世の治まると、亂るると。治平と戰亂と。理亂。

ちらめく 【動四自】ちらつきて見ゆ。

ちらり 【貌】一瞬間にわづかに目に觸れるさま。ちら。ちろ。り 二瞥のわづかに耳に入るさま。

ちらりちらり 【貌】**ちうちら**の、ややゆるやかなるさま。「ま。

ちらりほらり 【貌】**ちらほら**の、緩かなるさま。

ちり 散【名】一散ること。萬葉 世の中は常なきものか春ばなのちりのまがひに死ぬべき思へば」 二〔建〕兩材の相接する所の平ならずして、何れか一方が他方よりはみ出でたること、又その部分。 三こまかき散財。

ちり 塵【名】刀身の棟と樋(ひ)との間。

ちり 【名】『散りの義』一物のすたれて、散りたる小さき物。土砂の飛び散りたるもの。小さきごみ。ほこり。 二世の中のいとはしき事がら。けがれ。にごり。 拾遺「まらぬは櫻ばかりを色にいでてちりのまよひにくるる春かな」 三きはめて僅かなる物事の譬。ちり一すぢ。 源氏「げすなどの、ちりばかりも聞きたらんに、いといみじからん」 四値打なき物の譬。 五のこりもの。おながれ。 六さわぎ。みだれ。爭亂。戰亂。「塵治まる」參照。 七先人の爲したるわざ。遺業。「塵に繼ぐ」參照。 八京都・大阪方面より製出する一種の日本紙。 九船の直艫(まとも)の後端に、裝飾のために取附くる板。

塵附く【句】非難せらる。難附く。〔古語〕落窪「…とて笑ふに、塵もつかじと思ふ心に、いと苦しとおぼゆ」

塵積りて、山となる 【句】「塵も積れば山となる」に同じ。〔諺語〕

塵に繼ぐ 【句】『後漢書の荀淑等贊に「二方承レ則、八慈繼レ塵」とあり』古き事を學ぶ。遺業を繼ぐ。 新六「かず知らず誰れも書きおく名のみして塵につぐべき言の葉もなし」

塵に同(ず)ず 【句】**わくわうとうぢん**(和光同塵)を見よ』うき世の人と隔なくまじはる。 沙石集「權者の光を和げ、塵に同ずるもあるらん」

塵に交(まじ)る 【句】「塵に同ず」に同じ。長明集「山となるためしを見せよ君が代に塵にまじはる神ならば神」

塵の境(ちりのさかひ) 【句】**ぢんきやう**(塵境)に同じ。〔古語〕 續古今「あしびきの山をうきよのへだてにてちりのさかひにあとはたえにき」

塵の住處(すみか) 【句】うき世の住みか。ちりのよ。塵寰。 風俗文選「ちりのすみかをかけ出て、山寺にかきこもれるよし、傳へ聞きはべりて」

塵の末 【句】「塵の身」を一層強めていふ語。末輩。〔古語〕 續古今「むすびおくちぎりとならばのりの花ちりのすゑをも數にもらすな」

塵の外(ちりのそと) 【句】**ぢんぐわい**(塵外)に同じ。〔古語〕 風雅「身こそあらめ心を塵の外になしてうき世の色にそまじとぞ思ふ」

塵の身 【句】數にもあらぬ、塵の如き身。古今「ちりの身につもれる事を」

塵の世 【句】このよ。うきよ。濁世。

塵の世に交る 【句】「塵に交る」に同じ。 謡曲「松風」「いく久し神松の落葉ばかりは、塵の世にまじはる誓、たのもしや」

塵一筋(ちりひとすぢ) 【句】極めて僅かなる物事の譬。藥ひとすぢ。ちりっぱ一本。ちりっぱひとつ。

塵も積れば、山となる 【句】『說苑に「土積成レ山、則豫樟生焉」、又「荀子の勸學篇に「積レ土成レ山風雨興焉」とある等に本づけるなるべし』いささかなる物事も、積り重なれば、多大なるに至る。滴(ちり)積んで淵となる。積土山を成す。〔諺語〕

塵を出づ 【句】塵の世をのがる。世を棄つ。 新古今「秋風の露のやどりに君をおきて塵をいでぬることぞ悲しき」 增鏡「頭おろし、又髮おほしぬ。もとより塵を出づるにはあらず」

塵治まる 【句】世、治平になる。

塵を絶つ 【句】『莊子の田子方篇に「夫子奔逸絶レ塵、而回瞠二若乎後一矣」とあり』俗人に超越す。俗界に遠ざかる。

塵を望む 【句】『晉書の石崇傳に「潘岳與二石崇一諂事賈充一、滯降二車路左一望レ塵而拜」とあり。車輪のために、塵の起るによりて、遙かにその人の來るを知る義』一貴客の來臨を待つ。 二貴人にへつらふ。

塵を拜す 【句】『晉書の潘岳贊に「拜レ塵趨レ貴」とあり』前條に同じ。「後塵(こうぢん)を拜す」參照。

塵を捻(ね)る 【句】「壘の塵を捻る」に同じ。 紫の一本「三谷の遊女も爪をくはへ、塵をひねる」

塵をほ立てる 【句】平靜なる物を、好んで動す。平地に波瀾をおこす。

塵を結ぶ 【句】いささかの物を贈りてしるしとなす。 莊言(葉かづき)「いや、女の作法で、塵をむすんでなりとも、しるしを取らねばなりませぬ」

塵を弄ぶ 【句】『白居易の觀二兒戲一と題する詩に「撫レ塵復鬪草、盡日樂嬉嬉」とあり』幼兒の土・砂などを弄ぶこと。つちいぢりをなす。

風の前の塵 【句】「風前の塵」に同じ。

胸中三斗の塵 【句】『王炎の夜半聞レ雨詩に「抖擻胸中三度レ塵、强欲二戒吟一無二好語一」とあり』胸の中にわだかまれる俗念。

五百の塵 【句】〔佛〕**ごひやくちんでんごふ**(五百塵點劫)に同じ。 著聞「僧、東方五百の塵をいふ句を詠ずとて、五百の字を誤りて、八十の塵と詠じたりけるを」

三斗の塵 【句】『唐書の權德輿傳に「擢二萬年令一、賞罰明、見レ惡輒取、時語曰、寧食二三斗塵一、無レ逢二權懷恩一」とあり』多くの塵。

ちり 地理【名】一地面の條理。山川・海陸の狀態。 正統記「天文にかたどり、地の理のに法りて」 二地球の形・海陸の廣さ・山川の高低・深淺・人種の區別・國都の位置・人口の多寡・物産の品類等を述ぶること。

ちり 地利【名】一地勢によりて生ずる利便。 二土地の産物より得る利益。 三地子。地代。

ちり 智利(英 Chili)【名】〔地〕**ちれ**に同じ。

ちり 【名】鍋の底に昆布を敷き、豆腐と共に魚肉を煮て、醉醬油をつけて食ふもの。〔關西の語〕

ちり-あかる 散別る【動下二自】ちりわかる。ちりぢりになる。〔古語〕源氏「さまざまにきほひちりあかれしうへしもの人人」

ちり-あくた 塵芥【名】一ちりと、あくたと。ごみくづ。 二取るに足らぬ物の譬。ちりひぢ。

ちり-あな 塵穴【名】庭中に設けて、塵芥を掃入れ捨つる穴。はきだめ。

ちりう 遲留【名】**ちたい**(遲滯)に同じ。平家「醫山王に俾り奉りて、行程に遲留せしめば、朝廷緩怠の臣として、長く武略の瑕瑾の誇を遺さんことを」

ちり-うけ 塵承【名】**ちりとり**(塵取)一に同じ。

ちり-うだ 塵宇田【名】『宇田は大和國宇陀郡の意。その地より諸方に送り出しなどするよりいふか』**ちりくず**(塵屑)に同じ。

ちり-うち 塵打【名】**ちりおとし**(塵落)一に同じ。

ちり-おくる 散後る【動下二自】時におくれて、未だ散らずにあり。ちるにおくる。

ちり-おとし 塵落【名】一**ぶるひ**に同じ。 二船艙(ふなぐち)の中通りに、格子に切透かしたるもの。〔船大工の語〕 三城郭にて、塵を捨つる爲めに設けたるところ。

ちり-かかる 散掛る【動四自】一散りて、その上に降りかかる。 二將に散らんとす。又、散りはじむ。ちりそむ。ちりかく。

ちり-かく 散掛く【動下二自】前條㊁に同じ。

ちり-がく 地理學【名】地理に關する一切の事項を攻究する學科。自然地理學(地文學)・人文地理學・數理地理學(天文地理學)の三大區別あり。

ちりがく-しゃ 地理學者【名】地理學に通達せる人。

ちりかけ-こさく 散掛小作【名】地主の所有地外に住み、數地主の田圃を掛持ち引受けて耕作する小作。

ちり-がた 散方【名】散るころほひ。ちる時分。〔古語〕古今「をれる櫻のちりがたになれるを見て」

ちりかひかすむ 散交霞む【動四自】散りかふためにかすむ。〔古語〕金槐「櫻ばなちりかひかすむ春の夜のおぼろ月夜の加茂の川風」

ちりかひくもる 散交曇る【動四自】散りかふためにくもる。〔古語〕古今「さくら花ちりかひくもれおいらくの來んといふなる道まがふがに」

ちり-かふ 散交ふ【動四自】あなたこなたに散りみだる。ここかしこ入亂れて散る。續拾遺「夕さればおぼつかなしや山櫻散りかふ花のゆくへ見えねば」

ちり-がまし 塵がまし【形一】塵かかりやすし。ちりになりやすし。〔古語〕源氏「ちりがましき御帳の內も」

ちり-がみ 塵紙【名】楮の粗皮にて、製する紙。面に塵滓あり。鼻紙などに用ふ。持統天皇歌「命一つは露塵紙、來代の手本紙」

ちり-から 智力【名】〔佛〕㊀正智(シャウチ)と神通力(ジンツウリキ)と。㊁正智(シャウチ)の作用。

ちり-きよく 地理局【名】明治十年地理寮を改稱せしもの。初は地籍・山林・臺地・計算・文書の五課たりしが、同十九年地籍・地誌・觀測の三課とせられ、地籍の調査・地誌の編纂・曆書調査の事を掌りしが、同二十三年地誌編纂・地圖調製の事は帝國大學に委ぬることとなれり。

ちり-くず 塵國栖【名】〔國栖は地名〕大和國吉野より出だす一種の厚紙。あかしま。ちりうだ。

ちり-くづ 散屑【名】ここかしこに散りたる屑。

ちり-くらし 【名】なみ(波)の異稱なりといふ。〔古語〕

ちり-け 塵氣・身柱・天柱【名】㊀灸穴の一。項の下方兩肩の中央にあり。ぼんのくぼ。㊁身柱にすうる灸。浦島年代記「此年まで炬燵の味も存ぜぬ祖父め、火の嫁な證據、背にちりけの跡もおりない」

ちりけ-もと 身柱元【名】ぼんのくぼの邊。えりくびの部分。きのふはけふの物語「ちりけもとを一つ叩きみれば、りうごの如くなる餅、三間あまり先へ飛んでてる」

ちり-こむ 散込む【動四自】花など風に散りて飛入る。

ちり-ざうり 塵草履【名】わらざうり(藁草履)を云ふ。〔陸前國仙臺の方言〕

ちり-し 地理司【名】明治二年民部省に置かれたる一司。地籍・測地等の事務を掌りしもの。正(カミ)・權正(ゴンノカミ)・佑(ジョウ)・權佑(ゴンノジョウ)・令史・使部の職員あり。同四年民部省廢せらるるに及びて、大藏省の所管となり、同五年廢止せられたり。

ちり-しく 散布く【動四自】布きならべたるが如く一面に散落つ。

ちり-しっくい 散漆喰【名】壁を塗る際、中塗を施したる後、柱際等隙間の生ぜる所に塗る漆喰。其の上に上塗をなす。

ちり-しょ 地理書【名】地理を記せる書。

ちり-しょくぶつがく 地理植物學【名】〔植〕しょくぶつちりがく(植物地理學)に同じ。

ちり-すく 散透く【動四自】散りて透く。散りてまばらになる。源氏「櫻の散りすきたる枝に附けたまへり」

ちり-すぐ 散過ぐ【動上二自】ちりゆく(散行く)に同じ。〔古語〕萬葉「見むといはばいなといはめや梅の花散りすぐるまで君が來ませば」

ちり-すてば 塵捨場【名】ごみすてば(芥捨場)に同じ。

ちり-すゑ 塵居【名】御厨子(ズシ)などの、足の末の部分。

ちり-せうせき 智利硝石【名】〔化〕ちれせうせき(智利硝石)に同じ。

ちり-そむ 散初む【動下二自】散りはじむ。玉葉「散りそむる花の初雪ふりぬれば踏みわけまうき志賀の山ごえ」

ちり-たり 【貌】笛の曲譜の聲。ちりやたらり。後拾「笛の音の春おもしろくきこゆるは花ちりたりと吹けばなりけり」

ちり-ち 塵地【名】なしじ(梨地)に同じ。貞丈隨筆「塵地、ちりぢと訓むなり。今は梨地といふ。金の粉を散らしたるが塵のつもりたるに似たるなり。平(ヒラ)塵地といふは、金の粉を厚くしげく散らして、透間なきなり。平字は、平等の意なり。俗にひら一面といふに同じ。薄(ウス)塵地といふは、金の粉を甚だ少く薄く散らして、はらはらとすきまを多く見ゆるをいふ。これは、凶事の時の太刀の緒などに用ふるなり」

ちり-ちり 【名】細長く切りたる紙片を、左右の拇指及び食指の先にて交互に折り疊みたるもの。女兒など手慰につくる。

ちり-ちり 【貌】㊀物のちぢるるさま。〔俚語〕㊁怖れてちぢみあがるさま。〔俚語〕㊂毛などの燒けて、速に卷きちぢむさま。㊃千鳥の鳴く聲をあらはす語。

ちり-ちり 散散【貌】物の散亂するさま。ばらばらわかれわかれ。源氏「心あわただしき雨風に、みなちりぢりにきほひかへり」

ぢり-ぢり 【貌】㊀少しづつ進みゆくさま。〔俚語〕㊁日光の强烈に照りつくるさま。〔同じ。〕㊂怒を强ひてこらふるさま。

ちりぢり-ぐさ 【名】〔植〕つめくさ(漆姑草)に同じ。

ちりぢり-ばらばら 【貌】物の細かく分れて、散らばるさま。多くの人の別れ別れになるさま。

ぢ-りつ 持律【名】〔佛〕戒律を保持して犯さぬこと。十誦「淨行・持律の人」太平記「藤房…十戒持律の法體になりたまひけり」

ちり-づか 塵塚【名】塵を捨てて積みおく處。ごみすてば。はきだめ。ごみため。徒然「多くて見苦しからぬは…塵塚の塵」

ちり-つか 塵塚に鶴【句】「掃溜(ハキダメ)に鶴」に同じ。

ちり-っぱ 塵端・塵葉【名】㊀ちり(塵)を强めていふ語。〔俚語〕㊁極めて些細なるものに譬へていふ。

ちりは一本 【句】「塵一筋(スヂ)」に同じ。

ちり-つばき 散椿【名】散りたる椿の花。猿蓑「羽紅「笄も櫛も昔やちりつばき」

ちり-っぱな 散花【名】ちりばな(散花)の音便。〔俚語〕

ちり-つぼ 塵壺【名】大內裏・清涼殿の石灰壇の一隅に設けたる凹所。塵などを掃入るる所にて、時には、この中に火を焚きし事あり。

ちり-つもる 散積る【動四自】散りて次第につもる。

ちり-てうづ 塵手水【名】㊀手を清むる水なき時、塵をひねりて、手水の代りとすること。㊁相撲(スマヒ)にて、土俵に上りたる雙方の力士が取組む前に、少しく土俵の砂塵を捻(ネヂ)り、拍手して雙手を開き、掌を對手に示す式。もと互に兇器を持たざることを證するに出でたるもの。

ちり-とり 塵取【名】㊀塵芥などを取集めて棄つる具。ごみとり。ちりうけ。塵斗。㊁城の壕の塵を取るために、壕端に設けたる階段。㊂次條の略。太平記「小清水の合戰に痢手を負ひたりける間、馬には乘り得ずして、塵取に舁かれて」

ちりとり-こし 取塵輿【名】屋形なくして、高欄のみを取附け、粗末に造りたる腰輿。貴人には用ひず。ちりとり。

ちり-なみ 散波【名】あめ(雨)の異名なりといふ。〔古語〕〔を見よ。〕

ちり-の-かみ 地理正【名】ちりし(地理司)を見よ。

ちり-の-こる 散殘る【動四自】未だ散らずにのこる。散りはてずして殘る。炭俵〔字珊「散殘る蹴鞠(シュウ)の恋や二三本」

ちり-の-じょう 地理佑【名】ちりし(地理司)を見よ。

ちり-ば 【名】ちり。ちりっぱ。〔豐後國の方言〕

ちり-ばかり 塵許【副】ちりほど。甚だすこしばかり。つゆばかり。落葉「髻(モトヾリ)はちりばかりにて、額はげ入りてつやつやと見ゆれば」源氏「ただ塵ばかりこの花びらにと聞ゆるを」

ちり-はたき 塵拂【名】はたき(拂)に同じ。

ちり-ばな 散花【名】散りたる花。落花。ちりっぱな。夫木「苔の上に庭のちりばないとゞ積りぬる春の雪かな」

くかへり嵐につけてふりかはるらん」

ちりはひ 塵灰【名】ちりと、灰の如き土ぼこりと。ちりほこり。

ちりばむ 塵ばむ【動四自】塵に染まる。ほこりだらけになる。枕「硯、きたなげにちりばみ」

ちりばむ 鏤む【動下二他】彫りて、金銀・珠玉などを嵌む。ほりこむ。ほりつく。

ちりばめ 鏤【名】ちりばむること、又ちりばめたる物。〔古語〕

ちりはらひ 塵掃【名】はたき(拂)に同じ。

ちりひぢ 塵泥【名】一塵と泥と。ちりあくた。〔古語〕古今「高き山も、麓のちりひぢより成りて」二ちりあくた(塵芥)二に同じ。栄華「かかるきこえあらで、兵衛が身は、何のちりひぢにかならん」

塵泥の國【句】〔地〕我が國の異稱。〔古語〕

ちりひぢの 塵泥の【枕】ちりひぢは捨てて顧みぬものなるより、「數にもあらず」にかけていふ。萬葉「ちりひぢの數にもあらぬわれゆゑに思ひわぶらむ妹がかなしき」

ちりふ 知立【名】三河國碧海(カキ)郡にある町。東海道五十三次の一。昔は池鯉鮒と書けり。

ちりふ-じんじゃ 知立神社【名】三河國知立町字知立(チリフ)にある縣社。祭神は鵜葺草葺不合(ウガヤフキアヘズ)尊・玉依毘賣(タマヨリビメ)尊・彦火火出見(ヒコホホデミ)尊・神倭伊波禮毘古(カムヤマトイハレビコ)尊。

ちりふ-ぜき 塵防【名】城の濠の内の塵芥のために埋まらぬやう、又出入する人衆の濠に落ちぬやうにとて、その濠の端に、岸の際より一尺離して、高さ七八寸幅一尺餘に築きたる小さき土手。所所に水道(ミヅミチ)を附く。

ちりふ-みやうじん 知立明神【名】**ちりふじんじゃ**(知立神社)の舊稱。「ぢんあい。

ちり-ほこり 塵埃【名】ちりと、ほこりと。

ちり-ぼたん 散牡丹【名】散りたる牡丹の花。俳諧新選(天和)「ちり牡丹元の容に並べ見ん」

ちり-ぼふ 散りほふ【動四自】散りみだる。散亂す。ちりぢりになる。ちらぼふ。離散す。〔古語〕枕「几帳のもとにちりぼひたる」

ちり-まがふ 散紛ふ【動四自】散りて入亂る。ちりみだる。大鏡「時雨とは千種の花ぞ散りまがふなに古里に袖ぬらすらむ」

ちり-まさる 散增る【動四自】ますます散る。いよいよ散る。後撰「秋くれば思ふ心ぞ亂れつつまづ紅葉とちりまさりけり」

ちり-まじる 散交る【動四自】散りてまじる。源氏「花どもいろいろに散りまじり」

ちりまへ 散前【名】散らんとする頃。五人女「天王寺の櫻の散前、藤の棚のさかりに」

ちり-まみれ 塵塗【名】塵にまみるること、又そのまみれたる物。

ちり-みだる 散亂る【動下二自】ちりぢりばらばらになる。散亂す。

ちーりん 治痲【名】痲病をなほすこと。

ちりん【貌】鈴などのさわやかに鳴る音。

ぢーりん 地輪【名】〔佛〕一こんりん(金輪)に同じ。二五輪の塔の最下部にある方石。

ちりん-ざい 治痲劑【名】痲病をなほす藥。

ちりん-ちりん【貌】鈴などの續きてさわやかに鳴る音の形容。

ちり-めん 縮緬【名】一種の絹布。經(タテ)は、縒(ヨリ)なき平の絲を用ひ、緯(ヨコ)は極めて強き縒を施し、且つ右縒・左縒の二種とし、普通の平織に製したる上、溫湯中に入れて糊拔をなし、縮みて皺(ホリ)のあらはるるやうにせるもの。普通の縮緬以外、鶉縮緬・烏帽子縮緬・段縮緬・御召(オメシ)縮緬・紋縮緬・金紗縮緬などの種類あり。〔縮緬・縐紗〕二〔植〕**ちりめんだ**(縮緬羊齒)の略。

ちりめん-あらめ 縮緬荒布【名】〔植〕**かぢめ**(搗布)を云ふ。〔遠江國・駿河國の方言〕

ちりめん-いりこ 縮緬海參【名】水產品の一。琉球より產出する海參。

ちりめん-がし 縮緬樫【名】〔植〕いまめがしの變種。葉の狹小にしてちぢれたるもの。ちりめんいまめ。びはばがし。

ちりめん-かへで 縮緬楓【名】〔植〕**ちりめんもみぢ**(縮緬楓)に同じ。

ちりめん-かぼちや 縮緬南瓜【名】〔植〕南瓜の一種。實の形扁圓にして、疣瘤多く、品質好なるより、廣く栽培せらる。きるきかぼちや。

ちりめん-がみ 縮緬紙【名】加工紙の一種。縮緬の如く縮ませたるもの。今は多くナプキンとして輸出す。**ちりめん紙**(縮緬紙)參照。

ちりめん-ごろ 縮緬呉絽【名】メリンスの「一種。

ちりめん-ざこ 縮緬雜魚【名】〔動〕いさざ(鮫)に同じ。

ちりめん-じそ 縮緬紫蘇【名】〔植〕紫蘇の一種。葉の兩面紫にして、ちぢれたるもの。花紫蘇。

ちりめん-しだ 縮緬羊齒【名】〔植〕べにしだの變種。二回羽狀複葉にて、長さ一尺を過ぎず。その小羽片は、細くしてややちぢれたり。我が國各地の山間に自生す。

ちりめん-しば 縮緬芝【名】〔植〕高麗芝(コウライ)の變種。葉の纖小なるもの。暖地に產し、庭園に栽植せらる。

ちりめん-じやこ 縮緬雜魚【名】〔動〕**ちりめんざこ**(縮緬雜魚)に同じ。

ちりめん-じわ 縮緬皺【名】細かなるしわ。

ちりめん-ぢさ 縮緬萵苣【名】〔植〕萵苣の變種。全葉ちぢれて相包合し、やや球狀をなすもの。ちりめんぢしや。「に同じ。

ちりめん-ぢしや 縮緬萵苣【名】〔植〕前條**ちりめんな**(花芥)に同じ。二すかしたごばう(風花菜)に同じ。

ちりめん-なご 縮緬なご【名】〔動〕いさざ(鮫)に同じ。

ちりめん-ひば 縮緬檜葉【名】〔植〕一扁柏(ヒバ)の一變種。枝は十字形をなし、上方に向ひて立ち、葉は纖小にして、斑入(フイ)なるもあり。庭園に栽植せらる。かなあしひば。二さはら(花柏)に同じ。

ちりめん-ひむろ 縮緬ひむろ【名】〔植〕花柏(ハイビ)の變種。ひむろに似て、葉の細密なるもの。

ちりめん-ぼし 縮緬乾【名】しらすぼし(白子乾)に同じ。「(鶉豆)に同じ。

ちりめん-まめ 縮緬豆【名】〔植〕うづらまめ(鶉豆)に同じ。

ちりめん-もみぢ 縮緬楓【名】〔植〕楓の變種。通常濃木狀を成し、高さ一丈に達するもの少なし。葉は七・九又は十一裂し、全體やや羽狀を呈す。觀賞用として栽培す。ちりめんかへで。たむけやま。やまとにしき。べにのなみ。やぶもみぢ。

ちりめん-わせ 縮緬早生【名】〔植〕南瓜(カボチャ)の一種。實の形小にして扁圓。色は綠褐を帶びて、瘤あり。早熟なれど、產多からず。小南瓜(コカボチャ)。

ちりめん-あや 縮緬綾【名】錦綾などを印刷せる紙を、壓搾器にて壓し縮め、縮緬の如き小皺を生ぜしめたるもの。天保頃より製出す。

ちり-もみぢ 散紅葉【名】一散りたるもみぢの葉。俳諧新選(文江)「手にさはる夕日つめたし散紅葉」二紋所の一。下の圖を見よ。

(二ちりもみぢ)

ちり-やうち 致良知【名】「良知を致す」を見よ。

ちり-やく 智略【名】ちぼう(智謀)に同じ。

ちり-やく 治略【名】世を治むる方略。

ちり-やく 治曆【名】後冷泉天皇の御代の年號(紀元一七二五年—一七二八年)。

ちり-やたらり【貌】**ちりたり**に同じ。

ちり-やなぎ 散柳【名】散りたる柳の葉。芭蕉「ちり柳あるじも我も鐙を聞く」

ちり-やま 塵山【名】塵の積りて成れる山。

ちり-ゆく 散行く【動四自】散りて去る。ちりすぐ。萬葉「春さらばかざしにせむとわがもひし櫻の花はちりゆけるかも」

ちり-よ 智慮【名】一ちゑと、おもんばかりと。二智慧ぶかき考。裁智。「じ。

ちり-よう 螭龍【名】あまりよう(雨龍)に同じ。

ちり-よく 知力・智力【名】一才智と勇力と。二智慧のはたらき。大鏡「日本の大臣の智力の程こそ目出たけれ」

ちり-よく 地力【名】土地の生產力。

地力漸減【句】〔經〕次條に同じ。「じ。

地力遞減【句】〔經〕「牧種遞減」に同じ。

ちりよし-きぬ 散好絹【名】小繭絲を經絲(タテ)とし、良質の玉絲を緯絲(ヨコ)として織りたる、輕き平織。裏地用となす。

ちり-り【唧】 ちりちりに同じ。
ちり-り【唧】 ちりぢりに同じ。
ちりりん【唧】 ちりんちりんに同じ。
ちりりん 地理寮【名】明治七年内務省に置かれ、地方郡村の境界・山林官有地等の事を掌りし役所。**ちりきょく**(地理局)参照。
ちりれんげ 散蓮華【名】『形蓮の花片に似たよりいふ』■飲物を掬ふに用ふる陶器の匙。■細長くしやくみたる容貌を嘲りていふ語。〔俚語〕
ちり-をがは 塵小川【名】厚紙の一種。番茶の袋などに用ひたり。
ちる 散る【動四自】■おち飛ぶ。散亂す。■わかれわかれになる。ばらばらになる。源氏「見し人人、何事思ふらんと見えて、うちちりたるに」■世に廣く聞ゆ。世間へ知れわたる。〔古語〕源氏「心よりほかにちりもせば」■しみわたる。にじみひろがる。「墨ちる」■心まとまらず。「氣が散る」■酒、盃よりこぼる。
ちらまく 【句】『まくを見よ』散らんことが。散るべきことの。〔古語〕萬葉「梅の花散らまく惜しみわが園の竹の林に鶯の鳴く」
ちる時は散るが花 【句】人は死す可き時に死するが肝要なり。〔諺語〕
ちる波 【句】**なみ**(波)の條下を見よ。
ちるは 櫻、薫るは梅【句】櫻は潔く散り、梅は清く薫りたるによりてめでたし。
ちるゐ 地類【名】■『易經の上經に「牝馬地類、行レ地无レ疆」とあり』地上にある萬物。■〔法〕有租地の類別。第一類地・第二類地の二種とす。**ちもく**(地目)参照。
地類變換【句】〔法〕第一類地を第二類地に變換すること。
ちるね 地礫【名】〔地〕『獨 Horst』附近の地の斷層をなして陷沒せるにかかはらず、その部分の地盤の孤立殘存して、高く殘れるもの。まま高く長き山脈を造る。
ちれ 《Chile》【名】〔地〕南亞米利加洲の西南部にありて、太平洋に面せる共和國。第十六世紀以來、西班牙領となりしが、西紀一八二六年獨立を認めらる。首府をサンチヤゴ(Santiago)といふ。智利(チリ)。「じ。
ちれう 治寮【名】〔佛〕**れうしゅ**(寮主)に同じ。
ちれう 治療【名】**れうぢ**(療治)に同じ。
ちれう 知了【名】さとること。通曉。がてん。
ちれう-けっせい 治療血精〔醫〕『獨 Heilserum』血精療法にて、體内に注射するに用ふる血精。免疫したる動物の血精を採取して製す。免疫血精。
ちれう-しょ 治療所【名】醫師などが公衆のために應じて、治療をなす所。「品。
ちれう-ひん 治療品【名】治療に用ふる物
ちれき 地歴【名】地理と歴史と。(學校の課目につきていふ)「に同じ。
ぢれきせい 地瀝青【名】〔鑛〕**あすふあると**
ちれせうせき 智利硝石【名】**せうさんなとりうむ**(硝酸那篤徳謨)に同じ。
ぢれったい 【形】**じれったい**に同じ。
ぢれったんちずむ 《英 Dilettantism》【名】道樂的に藝術を弄ぶこと。
ぢれったんと 《英 Dilettant》【名】道樂的に藝術を愛好する人。藝術上の好事(ズキ)家。
ぢれんま 《希 Dilemma》【名】■古希臘の詭辯學派の者が用ひて、敵をして、何れの途に出づるも、均しく敗を取らしめし論法。例へば、「彼、もし知りてこれを爲したるならば不忠、もし又知らずして爲したるならば、不明なり(大前提)。然るに、彼はこれを知りて爲したるか知らずして爲したるかの孰れかに處らざるべからず(小前提)。故に、彼は不忠なるか、又は不明なるかなり(斷定)」の類。雙刺體論法。二重體論式。兩刀論法。■進退きはまること。例へば、地位に心を寄すれば、財産を失ひ、財産を失はざらんとすれば、地位は得られぬ類。進退兩難。「ヂレンマに陷る」
おれる 【動下一自】**じれる**に同じ。
ちろ 地爐【名】地上又は床(ユカ)に切りたる爐。ゐろり。ろ。地火爐。
お-ろう 痔瘻・痔漏【名】〔醫〕『獨 Mastdarmfister』肛門部附近にて、肛門内に通ずるか、又は肛門内にまで達せざる隧道を生ずる病。其の原因は梅毒性・結核性等より起る。あなぢ。はすぢ。
ちろく 致祿【名】**ちし**(致仕)に同じ。
ぢろざえもんびな 治郎左衛門雛【名】德川秀忠の頃、京都の人雛屋治郎左衛門の始めて造り出だせる一種の雛。面は極めて圓く、室町雛に似たり。元祿以後のは親王雛と稱し、男雛は黒袍束帶、女雛は五衣にして衣冠、總て式正に調製せり。
ちろ-ちろ 【唧】■**ちらちら**に同じ。〔俚語〕■**よろよろ**に同じ。〔俚語〕
ちろちろめ ちろちろ目【名】醉ひて、物の姿のちらつきて見ゆる目。醉眼。**とろとろめ**(とろとろ目)参照。御伽名代紙衣「たわいの無いちろちろ目しての詮議」
ちろ-つく 【動四自】**ちらつく**に同じ。
ちろ-ぼふ 【動四自】**ちりぼふ**に同じ。〔古語〕宇治「かやうのところには、くひものちろぼふものぞかし」「論」の略。
ちろん 智論【名】〔書〕**だいちどろん**(大智度論)の略。
ぢろん 持論【名】その人の平生より主張しつつある論。「る人。
ぢろん-し 地論師【名】〔佛〕地論宗を立つる人。
ぢろん-しゅう 地論宗【名】〔佛〕支那佛敎の宗門の一。天親菩薩の十地論を立敎の本とするもの。開祖は後漢の光統(クワウ)律師慧光にして、隋唐の時代に榮えしが、唐初、華嚴宗興るに及びて、これに屬せり。十地論は華嚴經の十地品の一品を釋せしものにて、完全なる一部の經にあらず。十地論宗。
ちろ-めく 【動四自】**ちらめく**に同じ。
ちろり 銚釐・地爐裏【名】『煖まること急なる意とも、地爐裏酒鎗の略言にて、もとは地爐の熱灰の中に埋めて煖めしならんともいふ』酒を煖むるに用ふる金屬(銀・錫・銅・眞鍮)製の器。筒形にて、下の方やゝすぼみ、注口(ソヽギ)及び提梁(ヘウ)又は把手あり。

(りろち)

ちろり 【名】指物(サヽ)[一]の一。ぶらぶら。
ちろり 【唧】**ちらり**に同じ。〔俚語〕
ちわ 痴話・癡話【名】男女相戯れて話すこと。情話。
おわう 地黄【名】■〔植〕玄參(ハタヾ)科に屬する多年生の草。高さ六七寸に達し、葉は鋸齒を有する長楕圓形にて、初夏、黄白色に紫を帶びたる唇形花を開く。支那より渡來し、根は藥用に供す。さほひめ。■前記の根莖を乾して、藥用とするもの。長さ四五寸、太さ人の手指ほどに及び、皮部は赤黄色を呈し、乾燥すれば黒變す。我が國にては、大和國より産するものを良品としたり。味甘く、微かに苦し。補血の劾ありと稱し、その製劑に地黄丸・地黄煎・六味丸などありたり。

(うわぢ)

おわう-がゆ 地黄粥【名】地黄[二]を刻みて入れたる粥。正月これを食すれば、邪氣を除くといふ。「したる丸藥。
おわう-ぐわん 地黄丸【名】地黄[二]にて製
おわう-せん 地黄煎【名】地黄[二]を飴に和して製したる藥。凝煎。**ちわう**(地黄)[二]参照。「じ。
おわうせん-あめ 地黄煎飴【名】前條に同じ。
お-わかしゅ 地若衆【名】若衆[三]のしらうとなるもの。**おいろ**(地色)・**おをんな**(地女)参照。若風俗「分(ブン)の若衆やさし。心底覺束なき初會より、その女を客の物になしてしまひたまふは、地若衆の情深きにまされり」
ちわく 道別く【動四自】通路を開く。〔古語〕記「天(アメ)の八重(ヤヘ)たな雲を押分けていつのちわきにちわきて」「こと。
ちわ-ぐるひ 痴話狂【名】男女相戯れ狂ふ
ちわ-げんくわ 痴話喧嘩【名】男女の痴情よりおこる爭。こひいさかひ。
痴話喧嘩、犬も食はぬ【句】**ふうふげんくわ**(夫婦喧嘩)の條下を見よ。
ちわ-ごと 痴話言【名】**ちわ**(痴話)に同じ。女殺油地獄「客はこれ見よ顔自慢、ややともすれば、痴話ごとの夫にまかせた身の上も」

大倉書店

特約販賣所

丸善株式會社	東京市日本橋區	
六合館	同	
青野書店	同	
至誠堂	同	
柳原文盛堂	同	
文林堂	同	
東京支店	同	
益善堂	同	
丸善支店	同	
二松閣	同	
有斐堂	同	
三省堂	同	
至誠館	同	本郷區
有朋館	同	
北隆館	同	
東海堂	同	京橋區
春祥堂	同	
中川文林堂	同	
岸田本店	同	
福島書店	同	芝區
有隣堂支店	同	
吉見義次	同	
谷島屋書店	同	
川瀨書店	同	
星野松次郎	同	
若林書店	同	
東枝書館	同	
寶文館	同	
松田書店	同	
川勝鴻寶堂	同	
山本文華堂	同	
大阪寶文館	同	
盛文館書店	同	
三宅書店	同	
長谷川書店	同	
丸善支店	同	
寶文館	同	

神戶市元町通	
兵庫縣龍野町	
岡山市西大寺町	
山口縣山口町	
廣島市鹽屋町	
下關市東南部町	
高松市丸龜町	
松山市港町	
高知市種崎町	
久留米市米屋町	
同	
福岡市東中洲町	
同上西町	
福岡市中島町	
佐賀市吳服町	
同白山町	
同元町	
大分縣大分市	
熊本市新二丁目	
宮崎縣宮崎町	
鹿兒島市中町	
同	
同東千石町	
長岡市築町	
同東濱町	
長岡市表四ノ町	
同表三ノ町	
新潟市古町通	
同	
新潟縣直江津町	
前橋市曲輪町	
千葉縣千葉市	
千葉市市場	
水戶市泉町	
茨城縣土浦町	
宇都宮市馬場町	
長野市大門町	
甲府市柳町	

川瀨日進堂	
竹內伊八郎	
武內敎育書房	
白銀日新堂	
積善館	
日新堂支店	
宮脇書店	
向井書店	
富士越書店	
菊竹書店	
田中幸次郎	
積文館書店	
丸善支店	
菊竹六萬書店	
大坪川書店	
牧井平治郎	
甲斐次郎	
平治書店	
長崎次郎	
松井修進堂	
吉田書店	
久永書店	
谷村書店	
森屋書店	
好文堂	
目黑書店	
覺張書店	
萬松堂	
北光社	
柿村書店	
煥乎堂	
煥乎堂支店	
多田屋支店	
松田屋支店	
川又書店	
寺田分店	
西澤書店	
柳正堂	

松本市大名町	
同	
仙臺市大町	
同	
同國分町	
盛岡市肴町	
盛岡市材木町	
弘前市土手町	
青森市米町	
山形市七日町	
同	
山形縣新庄町	
秋田市大町	
秋田市茶町菊の町	
秋田縣大館町	
同增田町	
福井市佐佳枝中町	
同佐佳枝上町	
金澤市片町	
富山市東四十物町	
高岡市守山町	
鳥取縣米子町	
鳥取市片原町	
松江市京店町	
栃木縣足利市	
德島市西新町	
和歌山市新通	
沖繩縣那覇區	
札幌區南一條	
同	
函館區末廣町	
小樽區花園町	
大連市大山通	
哈爾賓市スクオスナヤ街	
臺灣坊石街	
樺太コルサコフ	
布哇ホノルル	
桑港	

鶴林堂	
明倫堂書店	
金港堂華	
鈴木英華堂	
丸善支店	
佐藤庄兵衛	
玉山堂	
今泉東山支店	
今泉本店	
五十嵐書店	
遠藤商書店	
大泉書店	
石川書店	
成見書店	
藤島書店	
東海林本店	
品川書店	
中村六三郎	
宇都宮書店	
中田書店	
學海堂	
今井兼文館	
尙文館	
有田傳助	
青木大盛堂	
黑崎精二	
宮井宗兵衛	
小澤博愛堂	
富貴新維文舍	
魁文堂	
魁文堂	
千葉堂書店	
新高堂書店	
大阪屋號	
齋藤支店	
村上超倫	
中央書店	

中型裝本